ウォルテニア戦記【改訂版】

ホー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウォルテニア戦記【改訂版】

【Ｎコード】
Ｎ１８９８Ｉ

【作者名】
ホー

【あらすじ】
青年が召喚された異世界は乱世だった。
絶対王政の世界。
選民意識に凝り固まった特権階級と世俗にまみれた宗教。
青年は自分の正義を胸に行動を起こす。

※この度『フェザー文庫』（発行：林檎プロモーション）で書籍化します。
発売日が１１月１０日に変更されました。

よろしくお願いいたします。

ウォルテニア戦記　用語集

大地（アース）世界：
御子柴亮真が召喚された異世界。
群雄割拠の戦国時代であり、覇権を求めて大規模な戦乱が巻き起こっている。
東方、西方、南方、北方、中央、の５大陸と、無数の島々に因って構成されている。

裏大地（リアース）世界：
地球の事。
大地（アース）世界に住む人間が便宜上、自分達の世界の裏にあるもう一つの世界と言う意味で付けた名前。
実際に表裏の関係で有るわけではない。

異世界人：
地球より召喚された人間達の総称。
年間２００人ほどが、戦争の駒として大地（アース）世界へと拉致される。
大地（アース）世界では、他の生物を殺害することで、自らの力を強化することが出来る。
地球人はその吸収率が優れているため、盛んに召喚されているらしい。

西方大陸：
大地（アース）世界の西方に存在する大陸。
大きさはオーストラリア程。
東部、西部、南部、北部、中部、の５地方に別れている。

＞ｉ１５８１５―２１５０＜

オルトメア帝国：
西方大陸中央部に存在する帝国。
覇権主義を掲げ、西方大陸統一に乗り出す。

ローゼリア王国：
西方大陸東部地方に覇を唱える3国の一つ。
豊かな水量を誇るテーベ河のお陰で非常に豊かな穀倉地帯を持つ。
西をザルーダ王国に、東をミスト王国に挟まれており、戦乱が絶えない。
ホドラム将軍とゲルハルト公爵に実権を奪われていた。

ザルーダ王国：
西にオルトメア帝国と隣接する山岳国家。
峻険な山々に囲まれた天然の要害と、豊富に産出される鉄鉱石のお陰で、なんとか帝国の侵略を食い止めている状態。
東に隣接するローゼリア王国から輸入される食糧に大きく依存している。

ミスト王国：
西にローゼリア王国と隣接する貿易国家。
中央大陸とも交易が盛んで、西方大陸最大の貿易都市であるフルザードを支配下に持つ。

エルネスグーラ王国：
西方大陸北部を支配する王国。
覇権主義を掲げ、中部への侵入を悲願としている。
オルトメア帝国とは犬猿の仲。

キルタンティア皇国：

西方大陸西部を支配する皇国。
オルトメア帝国とは現在冷戦状態。
南部地方への侵攻を画策している。

南部諸王国：
西方大陸南部に群生する小国の総称。
西方大陸最大の激戦地帯で紛争が絶えない。
作品中では、タルージャ王国とブリタニア王国が登場している。

法術：
大地（アース）世界に存在する技術の総称。
体内をめぐる生気（プラーナ）を利用して、様々な効果を発揮する。

武法術：
体内の生気（プラーナ）を使用して肉体の強化を行う技術。
呪文の詠唱が必要ない為、白兵戦では大きな威力を発揮する。

文法術：
体内の生気（プラーナ）を他者に捧げて力を一時的に借り受ける技術。
呪文の詠唱が必要で、助力を願う存在に対しての知識も必要とされる。

付与法術：
物に特殊な文様を刻むことで、特定の効果を付与できる技術。
物を硬くしたりすることが出来る。

ウォルテニア半島：
ローゼリア王国の最北端に存在する半島。
強力な怪物（モンスター）や亜人種が徘徊する土地であるため、書類上はローゼリア王国の領土だが、長年放置されてきた未開の地。

ルピスの策略で、亮真の領土とされた。

第1章主要登場人物紹介

第1章主要登場人物

名前：御子柴亮真（みこしばりょうま）
性別：男性
年齢：１６
出身地：東京都杉並区
本作品の主人公。
１９０ｃｍに近い長身で体重は１００Ｋｇを超える巨体。
地球で高校生をしていた時の性格は温厚で人当たりは良かったのだが、弱肉強食の世界である大地（アース）へ召喚された事によって普段は押し隠していた本性がむき出しになってきている。
仲間や家族には優しいが、一度敵にすると冷酷な牙をむき出す。
祖父に仕込まれた古武術を駆使して、危機を切り抜ける。
趣味は読書とゲーム。
再びもとの世界に戻るために帝国からの脱出を試みる。

名前：ローラ・マルフィスト
性別：女性
年齢：十代半ば
帝国の追手から逃げていた亮真に盗賊団に襲撃されていたところを助けられた双子の姉。
危機を助けてくれた亮魔に対して恩義を感じ。彼に付き従うことに。
元は中央大陸の騎士の家系だったが、国が滅びた際に部下に裏切られ奴隷に身を落とす。
法術の使い手で小麦色の肌に銀の髪を持つ美少女。

名前：サーラ・マルフィスト
性別：女性
年齢：十代半ば
亮真に忠誠を誓う元奴隷の少女。
法術を使うローラの双子の妹で金色の髪を持つ美少女。
髪の色以外では見分けが着かないほどそっくり。

名前：セリア・フォン・ウォークランド
性別：女性
年齢：２０代半ば
オルトメア帝国の次席宮廷法術師。
赤毛で胸の大きな女性だが、かなり冷徹な性格。
亮真をこの世界に召喚したガイエス・フォン・ウォークランドの孫娘。
敬愛する祖父を殺して逃げた亮真を追いかける追手の一人。

名前：シャルディナ・アイゼンハイト
性別：女性
年齢：２０代前半
オルトメア帝国の第一皇女。
金髪青眼でかなり背が高い美女。
皇帝の側近の一人で夢魔騎士団（サキュバスナイツ）の団長。
非常に切れ者で、亮真の逃走経路を予測して追跡する。

名前：斉藤英明（さいとうひであき）
性別：男性
年齢：不明
夢魔騎士団（サキュバスナイツ）の副団長。
亮真と同じく日本より召喚された異世界人。
１７０ｃｍ程の身長で見た目はどこにでも居る中年サラリーマン

と言った風体。
弱肉強食の大地（アース）に召喚されて１０年程で副団長にまで駆け上がっただけあって、かなり抜け目の無い人物。

第1章第1話

5月8日【早朝】その1：

「早く打ち込んでこんか！」

閑静な住宅地の早朝に似合わない怒声が響いた。

怒声の主は、白髪を後ろで纏めた老人。

身長は１７０ｃｍ半ば程か。胸は厚く剣道着の間から見える腹筋は見事なまでに6分割されている。二の腕は太く筋肉質で、其の右手には白刃の2尺8寸近い刀が握られていた。

顔に刻まれた皺と白髪が無ければ誰も老人とは思わないであろう程に見事なまでの肉体だ。

その老人の前には、一人の青年が同じように刀を手に持ち対峙している。

「爺さん。刃引きしてない刀を打ち込んだら死ぬだろうが！　別に爺さんが死ぬのはかまわないけど、警察の厄介にはなりたくないなぁ」

憎まれ口を叩いた青年の身長は１８０ｃｍを明らかに超えていた。ひょっとしたら１９０に届くかもしれない。

其の身長と、岩のごとき筋肉の鎧を考えれば体重は１００Ｋｇを軽く超えていた。

これで悪鬼のような面構えなら彼に近寄る人間はまず居ないだろう。だが幸いなことに育ちが良いのだろうか、温厚さと人の良さがにじみ出る其の顔は見る者を安心させる何かを纏っている。

「ふん。貴様にワシが殺せるのか？」

老人が鼻で笑う。

尤も侮蔑は言葉だけで、青年の力を信じているのだろう。老人の眼は慈愛に満ちていた。

「さあね？　俺もそれなりに稽古しているし、そろそろ俺の剣を受け損ねて死ぬこともありえるんじゃねえか？」

「ほぉ？　貴様の剣がワシを超えるというのか？　よかろう！　其の時は毎朝の稽古は免除の上、ワシの遺産を貴様にくれてやるわ」

青年の言葉を老人は鼻で笑うと刀を正眼に構える。

「爺さんが死んだら朝稽古の免除も糞もないだろよ？」

ニヤつきながらも青年は同じように3尺近い刀を正眼に構えた。

「だが遺産が入るのは悪くないな！」

二人の目が虚空を睨み付ける。相手を視界に入れながらどこを見ているか焦点が定まらない状態。

剣術の勝負において、防御＝受け太刀はありえない。防御を考えるのは剣道の試合の中だけだ。実戦では如何に相手より早く、的確に急所を掻き切るかが勝負の分かれ目だ。先手必殺の心構えこそ、剣術の極意と言える。

だからこそ、視線から狙っている場所を悟られないためには焦点を定めない必要があるのだ。

「ふぉぉぉ！」

「かぁぁぁ！」

二人の口から呼吸が漏れた。

ジャリン！

鉄の擦れる音が響き、二人の人影が交差した瞬間、赤い火花が散った。

2メートルは離れていた両者の位置が一瞬で入れ替わり、二人は刀を再び正眼の構えへと戻す。

「この糞ガキが！　中段から本気で喉を突きおったな！？」

老人が青年へと詰め寄る。

殺せたら遺産をやると言った事など、既に忘却の彼方へと飛び去ったらしい。

老人の目は、青年の繰り出した刀が纏った殺気を見抜いていた。

「刀を交えたら親でも殺せって教えた師匠が居るんでね……つうか、刀が擦れたってことは爺も喉狙ったんだろうが！」

老人の逆切れの所為か、青年の口調がかなり刺々しくなったのは致し方ないだろう。

何しろ青年の技は全て老人が幼少より叩き込んだ物。

刀を抜くときは相手を切り殺すときのみと言う、実戦的な心構えを叩き込んできたのは老人自身であった。

それなのに、老人の教えを忠実に実行した青年に対して怒るというのだから、その理不尽さに青年が怒りを感じるのも当然と言える。

だがそんな当然の指摘も、血が頭に上った老人にとってはただの

戯言に過ぎない。

「当たり前じゃ！　ワシの技は一技必殺よ！　刃を交える時は殺す覚悟した時だけじゃ！」

「だからよぉ。使えないだろうが！　そんな危ないもん。この日本のどこで使うんだよ？　その技。大体、稽古の時に弟子にそんな技かけてどうすんだ？」

青年の至極当然な意見も耳に入らないのか、老人の額に青筋が浮かぶ。

「あ～うるさい！　お前は黙って稽古すればええんじゃ！」

叫びと同時に老人の刀が青年へと振り下ろされる。
それは万が一にも青年が受け損なえば、彼の頭部を確実に断ち割るだけの力が込められた斬撃。

「だから！　稽古なのに命のやり取りしてどうすんだってんだよ！」

ガツッ！

両者の刀が撃ち合わさる鈍い音が閑静な住宅街に響いた。５００坪を越える敷地のいまどき珍しい竹林の中で行われている稽古である。周りの住宅に迷惑を掛ける事は無いが、早朝から元気な二人であった。

ギギギギ……

両者の鎬を削る音が竹林に響く。

老人と青年。勝敗は徐々に若い青年へと傾いてきた。
如何に鍛えようと純粋な力勝負では老人に勝ち目は無い。いや、今まで拮抗するほどの力を老人が持っていることのほうが驚きと言える。
少しずつ青年の力に押し込まれ、老人の首筋へ刃が近づいて行く。

シュ！

力での勝負が不利と判断したのだろう。
老人は両手で握り締めていた柄から左手を離すと、青年の瞳に指を差し込もうとした。さすがにこの不意打ちで青年は体を引く。

「糞ったれが！　稽古で汚いまねすんじゃねえよ！　いい歳こいて！」

そろそろ青年の我慢も限界に近いのだろう。老人に対する口調が汚くなってきた。

「フン。実戦を想定しない稽古に意味など無いわ！　汚いも糞もあるか！」

老人にとっての実戦とは余程汚いものなのだろう。
剣術の稽古中に素手の攻撃をしてもまったく悪びれる様子が無い。尤も其の不意打ちを回避することが出来る青年もまた、普通とは言えないのかもしれない。

彼らの稽古は昔からこのような実戦形式だったのだろう。老人は後ろへ飛び下がると刀を納め近くの竹に立てかけた。
そして全身の力を抜き、自然体で立つ。

「素手でこい！　其の馬鹿力が何の役にも立たないことを教えてやろう！」

「いいぜ？　相手してやるよ！　だが刀で勝てない俺に格闘戦を仕掛けて勝てるのかね？」

青年の口に嘲笑が浮かぶ。だが老人は何も言わず顎で刀を納めろと合図をした。

青年は言われるまま刀を納め木に立て掛けると、老人の方を向く。左手の拳を顎の近くに沿え、右手は正中線を隠すように下へ下げる。左足に重心をかけ、右足は内側につま先を向ける。蹴りも拳も使用できる構えでありながら、人体の急所を隠す攻防一体の構え。

ぐぅぅぅぅ。

突然、青年の腹が豪快に鳴った。

朝5時に起き出し、稽古を始めて既に1時間が過ぎようとしている。空腹で腹が鳴るのも当然だ。だが彼の祖父は孫が空腹だからと稽古を中断してくれるほど甘くない。

（クソ！　腹減ったなぁ……爺め、いい加減終わりにしねぇかな？）

だが青年の祈りもむなしく老人の構えに隙は無い。やる気満々のようだ。もし青年が緊張を解けば其の瞬間に襲い掛かってくることが目に見えていた。

「いいかげんにしなさ～～～い！　せっかく作った朝ご飯冷めるでしょうが！」

その時、幸薄い青年にようやく救いの天使が舞い降りた。

「まったく。二人とも朝から何じゃれついてるのよ？」

青年の視線の先には、黒髪を後ろでポニーテールにしたエプロン姿の少女がいた。

背は１７５ｃｍにやや足りない位だろうか。意思の強そうな黒い瞳が魅力的な少女。

桐生飛鳥。それが彼女の名前だった。

「じゃれる？　この爺とか？　やめてくれよ……」

「じゃあ？　何をやってたのよ？」

「殺し合い？？」

ゴツ！

「痛っ……」

パシッ！

「何を馬鹿な事言ってるのよ！」

少女はそう言うと手にしたオタマを振り上げて威嚇した。

どこから取り出してきたのか？青年の頭に一撃を加えるたのは、今、彼女が握り上げているオタマであろう。

それはまさに電光石火の早業と言えた。

青年の身体能力は非常に優れているはずのなのに、彼の頭へ一撃を加えたのだから。

その証拠に、お玉で殴られ蹲りかけた瞬間に繰り出された老人の拳を、彼は手のひらで受け止めている。

（本当に汚いよな……この爺……俺の隙をまだ狙ってやがった）

ところが少女の攻撃だけは避けられない。尤もそれはまだマシといえる。

昔の漫画で同じような物がある。主人公が他の女へ手を出すたびにハンマーで殴られると言う漫画が。

その作品もまた、普段は銃弾すらも避けられる主人公がヒロインのハンマーだけは避けられないと言う不思議な現象が書かれていた。それに比べればまだましと言えるだろう。如何に青年の肉体が頑強であろうとも、ハンマーの直撃を頭に喰らえば死ぬだろうから……

「ふぉふぉふぉ。飛鳥ちゃんよ。夫婦漫才楽しいか？」

青年がオタマで殴られる事になった元凶が、したり顔で飛鳥に話しかける。

既に稽古時に纏っている気迫や威圧感はかけらも残っては居ない。どこにでも居る好々爺な爺さんである。

（だから嫌いなんだよ……この爺。）

正直に言って、青年は自分の祖父でありながら、このギャップにはついて行けなかった。

「お爺ちゃん！何言ってるのよ！私には彼氏いるし。大体、亮真じゃねぇ？」

飛鳥が意味ありげな視線を彼へ向ける。

彼は大きくため息をつくと、心の中で呟いた。

（冗談じゃない。俺だってゴメンだ）

尤も其の心を言葉として出す勇気は無い。従兄妹の性格を、彼はイヤと言うほど理解している。

「そういうが飛鳥ちゃんよ。こうやって毎朝食事の準備をしてくれ

るではないか。ただの幼馴染ならせんだろ？」

老人がしつこく飛鳥に絡む。

「タダじゃないから来てるんだよ？　正確にはお小遣い２万円アップのために！」

飛鳥のことだから、善意だけで毎朝の朝飯を作ってくれるとは思って居なかったが、どうやら叔母と交渉をしているらしい。

（さすが飛鳥……我が従兄妹ながらしっかりした女だ……）

「う～む。我が血族は金の亡者じゃな……」

老人の呆れの篭った呟きを聞き、青年の脳裏にあることが過ぎる。

（そういや、叔母も株取引で財をなした人だったな……）

まさに納得と言った感じである。

桐生飛鳥は容姿端麗で頭脳明晰。親しみやすく、美人にありがちな気取ったところも無い。

料理は美味いし掃除洗濯から繕い物まで家事に関してはまさに完璧、金の管理には厳しいが、それも金銭感覚があると考えるならばマイナス要素にはならない。

万人は彼女のような女性を理想と言うのだが、青年にとっては冗談にしか聞こえない。たとえ血の繋がりが無くても正直に言って無理だった。子供の頃を知りすぎると、相手を恋愛対象とは見れなくなると言うのは本当のことらしい。

「あ～～～！」

突然飛鳥は右手に嵌めた腕時計に目をやると大声を上げた。

「私は弓道部の朝練あるからもう行くね。良いわね、亮真！　食器はきちんと洗っておくこと！」

そう言い残すと、素早くエプロンを脱いで母屋へと走って行く。

「フォフォフォ……慌しいことじゃな」

老人がしたり顔でそんなことを言った。

「爺がからかわなければ、時間喰うこともなかったんじゃねぇの？」

「お前が年寄りを敬わないからじゃ」

どうやら老人の辞書に反省の二文字は無いらしい。

彼の正論にも堪える様子が無い。

（全く！　時々絞め殺したくなるぜ……）

本当に困ったものである。

「は～～～……」

青年は大きくため息をついた。

「何じゃ？」

彼はその問いを無視して母屋へ歩き出した。

爺の相手をすると飛鳥じゃないが時間が無くなってしまう。

彼も高校へ行く身支度をしなくてはならないのだから。

そんな朝のお約束が執り行われた関係で、当然彼が食卓ついた時

には用意された朝食がすっかり冷え切っていた……

彼の名前は御子柴亮真。
見てのとおり幸の薄い１６歳である。
彼は毎朝、祖父よりに稽古の名前を借りた虐待を受けてる。
彼が物心ついた頃からの日課なので、ざっと１２～３年は続けていることになる。

両親は彼が子供の頃に死んだらしい。らしいと言うのは死因を、祖父が彼にはっきりと言わないからだ。
病死なのか事故死なのかもわからなければ、墓すら無い。
本当は何処かに有るのかも知れないが彼は墓参りをしたことが無いので知らない。
案外何処かで生きているのかも知れないが、正直に言って今ここにいない親に彼は興味が無かった。
生きてるにしろ死んでるにしろ、彼を養ってくれないなら意味がないと考えているからだ。だから当然興味も無い。
そんな訳で彼は祖父と二人、この杉並区の閑静な住宅街に暮らしてるのだ。

彼の顔は並ってところだ。
人に因ってその評価は変わる。
男らしい顔つきと言えば良く聞こえるし、濃い顔立ちと言えば悪くなる。まぁ日本人らしい顔つきだろうか。
体型ははっきりいえば太い。しかし脂肪太りでは無い。徹底的に鍛え上げ絞り込まれた鋼の筋肉。
丸太の様な太い腕と足をしていて、今流行りの細マッチョとは対照的と言える。
高校での彼のあだ名は”眠れるクマ”。温厚さと人の良さがにじ

み出る顔&熊のような体型からつけられた渾名だ。
彼のコンプレックスは老け顔。それが彼の最大の悩みだった。何しろ１６歳の彼をつかまえて、周囲の人間達は２５～３０に見えると言う。ショックのあまりに寝込んでしまいそうな評価だろう。
彼の顔が老けている事で受けられる数少ない利点は、秋葉原でエロゲーをすんなり買える事と酒を好きに飲めることぐらいだろうか。
祖父もその辺に関しては彼に対してうるさく注意する事は無い。逆に晩酌を付き合ってやれば喜ぶくらいだ。

そんな彼であるから、当然のごとく彼女なんか居るはずも無い。家では祖父に稽古という名の虐待をされ、高校では苛められないにしろ格別何か楽しいことがあるわけでもない。
まぁクラスメイト達とはそれなりに話すが、格別に親しい人間は居ない。
幸の薄い高校生。
それが御子柴亮真という人間だった。
それでも何時か可愛い彼女を見つけ結婚！などと言う平凡な夢を見ていた彼は、この日の昼休みに地獄へ突き落とされることになる。

第1章第2話

5月9日昼休み～異世界召喚一日目：其の1

「ふぅ……やっと飯か」

午前中の授業が終わり亮真は大きく息を吐き出すと、彼はかばんの中から弁当を取り出した。
飛鳥が朝に作って置いていった弁当だ。
彼の高校は12時から13時までの1時間が昼休みとなっている。
彼は弁当箱とペットボトルのお茶を持つと、教室の扉を開けた。

「亮真君……また屋上で食べるの？　偶には私達と一緒にどう？」

机を合わせて昼飯を食べる準備をしているクラスメイトが、亮真に声を掛けて来る。
髪の長い目の大きな、中々に可愛い女の子だ。
彼はその声を聞き、教室の入り口で止まった。
彼の顔に一瞬躊躇するような表情が生まれたが、直ぐに彼女の方へ向き直ると笑顔で言い返す。

「ああ。悪い、また今度な！」

亮真は別にクラスメイトと食事をしたくない訳ではない。
彼が昼食をクラスメイトと一緒に食べない理由、それは単純に弁当を人に見せたくないのだ。
なにしろ飛鳥の作る弁当は可愛すぎて彼のイメージに合わない。
少なくとも彼はそう思っていた。

世の中にはキャラ弁という物がある。
さまざまなキャラクターを弁当の具材で表現するという物で、世のお母さん達はこれの出来栄えに心血を注ぐらしいのだが、飛鳥もまたこれの達人だった。
彼女のバリエーションは広く、ピカチューに始まり実に様々なキャラを弁当の具材で表現するのだが、正直に言って亮真は、自分の弁当でキャラ弁を作ることを、止めて欲しくて仕方が無かった。
高校生にもなって弁当にピカチューの顔が書いてあるなんて……
女の子に受けは良いだろうが、男の面子は丸潰れだ。
ところが製作者である飛鳥は、そんな亮真の男心をまったく考慮なんかしない。

中学校までは給食だったので、特に問題はなかったのだ。
ところが高校に入ってから弁当に持参となった。
両親がおらず、祖父も亮真の為に弁当を作ってやろうという様な人間ではない為、購買部でパンを買って済ませるのが習慣だった彼に、飛鳥が弁当を作ってやると言い出したのは４月の後半頃の話である。
せっかくの好意と有難く受け、昼休みに弁当を広げた時の彼の驚愕。

（今でも寒気がする……）
未だに亮真はこの時の事を思い出すと、体が震えるくらいである。
周りに見られないよう必死で食べたおかげで彼のメンツは何とか守られたが、帰宅後に飛鳥へ抗議の電話をしたところ、次の日の弁当は日の丸弁当（白米の真ん中に梅干１個）にされる事になった。
（朝飯も酷かった……コーンフレークと牛乳のみって……）
結局として、亮真は内心の不満を押し隠し、飛鳥に謝罪をする羽目になった。こうして彼の弁当は俗に言うキャラ弁となってしまっ

たと言う訳だ。

「今度今度って、いつもジャン！　もぅ……良いわ。でも次は絶対に付き合ってもらうからね！」

彼女はそう言い頬を膨らませた。中々愛らしい表情だ。

だが、亮真が右手を挙げて拝むと、彼女は笑いながら椅子に座った。

別にそこまで固執している訳でもないらしい。まぁ一般的な高校生の社交辞令と言ったところか。

「悪い悪い。あぁ今度は付き合うからさ！」

天気の良い日はいつも屋上で食事をし、予鈴のチャイムが鳴るまで昼寝するのが亮真の日課だ。

「ほんじゃぁ後でな」

亮真はクラスメイトに声を掛け、教室を後にした。

それは、亮真が屋上へ続く階段を上って居る時に突然起こった。

そう、彼の地獄はここから始まることになる。

フッ！

「あ？」

亮真の足元から床の感触が消えた。

突然、彼の体が垂直に落下し始める。

彼が階段を踏み外したと言う訳じゃない。確かに踏んでいたはずの階段の板が突然消失し、そのまま下に落ちたのだ。
彼は左手を前に突き出しと、階段の縁に手を掛け体勢を立て直そうとしたが、板の消失はほぼ階段全体に及び、彼の手は何も掴む事が出来なかった。
上を見上げれば、校舎の蛍光灯の光が少しずつ細くなっていく。
そして遂に光は消えた。
漆黒の闇の中を、彼はただ落ち続ける。

「あれ？」

亮真は突然異変に気が付いた。
いつの間にか彼の体が、落下ではなく浮上している事に。

「やべ～。夢か幻覚か。俺どうかしたのかな？」

亮真は一人呟く。
それはそうだろう。
落下は物理的に言ってありえない事では無い。可能性は低いが、校舎倒壊とかで床が抜ける事もあり得るからだ。
だが浮遊は絶対にありえない。人は空を自力だけでは飛べないのだから。例えどれほど体を鍛えたとしても。

亮真は上を見上げた。
いつの間にか光が彼の頭上から降り注いでくる事に気が付いたのだ。
体が浮遊する光が太く強くなる。
そして、亮真の体は遂に光の中へと飛び出した。

「何処だ？　ここは……学校にこんな場所があるはず……無いよな？」

亮真にとってここは校舎の中か、少なくとも高校の敷地内のはずだった。

だから目の前に広がる神殿のような空間を前にしても、それが学校の中の施設の一つだと思った。

だが彼のその認識は、目の前の人物を見た瞬間に崩れ去る。

亮真の目の前には五人の男が居た。

一人はゴテゴテと金糸銀糸で刺繍された真っ白なローブに身を包んだ老人。

だがこれはさほど問題じゃない。

問題なのは、残りの四人の格好である。

彼らの身長と体格は亮真とさほど変わらない。かなり鍛えられて居るのだろう。

二の腕の太さや太腿の発達具合を見れば、彼らが素人では無い事が一目瞭然だ。

全身を金属を繋ぎ合わせた甲冑で覆い、古代ギリシャで使われたコリュス式（頭に鶏冠がついた兜でT字型の鼻あてがついている）の兜を被り、手には斧槍（ハルバード）を持ち持っていた。

鎧兜が本物であるかどうかは判らない。しかし、祖父との稽古で真剣を扱ってきた亮真の眼は、彼らの持つ斧槍（ハルバード）が紛れもない人殺しの道具である事を見抜いた。

となれば、彼らが腰に帯びている剣もまた本物であると推察できる。

鎧だけなら、亮真は彼らの格好を仮装衣装だと思っただろう。

金を掛ければ日本でも購入が出来ないわけではない。買うやつは居ないだろうし、買って着込むやつはもっと居ないだろうが、少な

くとも現実にそれを着込む人間が居ると言う事実は、現実に起こる事実として、理解できる範囲ではあった。

だが亮真はここを異世界とは思わなくても、自分が生きてきた日常とはかけ離れた場所だと言う事だけは強く認識しない訳には行かなかった。

彼に向けられた斧槍（ハルバード）の全てが研ぎ澄まされた真剣だったからだ。

冗談で本物の斧槍（ハルバード）なんてものをそろえるとは思えない。

第一、日本でこんな物を向けられる状況など想像ができない。

仮に強盗や通り魔だったとしても、わざわざ斧槍（ハルバード）なんてものを用意する奇特な人間など居るはずもないのだ。ナイフや包丁が精々だろう。

そして彼らから亮真へ向けられる殺気は本物だった。

祖父から叩きつけられるのと同じ種類の気配。肌をピリピリと刺すような感触。

（オイオイ、マジかよ……いや……こいつはマジだ……こいつらの眼……）

亮真の心の中で、何かが切り替わる。日常から非日常へと。

彼の平凡な日々が壊れた瞬間であった。

「ほぉ？　今回の召喚は当たりだったようじゃな？」

ローブの老人が亮真へ視線を向けながら、隣に立つ男へ声を掛けた。

話しかけられた男の被っている兜に飾りが赤い房飾りが付いていた。

一人だけやや豪華なところを見ると、彼らの隊長格なのだろう。

「いえガイエス様。その判断はまだ早いと思われます。確かに大した体格ですが、見掛け倒しということも考えられますから……なにせ、今までの１００人以上召喚しモノになった人間は１０数名足らずですので……」

二人の視線が亮真を射抜く。まるで商店に並ぶ品物を値踏みするような目だ。

「ふむ。それもそうか……まあ良い。使えるかどうかは育ててみなければ判らんしな」

そういうと老人が顎で亮真を指し示す。

３人の兵士は斧槍（ハルバード）を突きつけながら亮真にゆっくりと歩み寄ってくる。

連中の目的が何なのか、それは亮真には判らない事である。

何しろ、さっきまで学校に居たはずなのだ。それが突然、刃物を突き付けられているこの状況。

理解出来るはずもなかった。しかし、彼にとって碌な事にならない事だけはハッキリしていた。

他人へ刃物を向ける時、それは悪意が有る証拠。

彼は素早く四方を見回すが、逃げ道になるような窓などはどこにも無い。唯一の脱出路は老人の後ろにある鉄製の扉だけだ。

亮真は、生きるために選択しなければならなかった。

彼の脳裏に祖父の教えが浮かぶ。

（自分の身を守る為……か）

碌でもない何かを受け入れるか、ここの連中を殺して逃げるかを。

そして状況が判らない以上、それを説明させるには誰かを問い詰めなければならない。となれば選択肢はただ一つ。

一番弱いであろうローブの老人のみを生かして、残りの四人を殺すのだ。

（こっちは素手、それに対して相手は長柄の武器に鎧を着込んでいるか……真っ向から飛び掛かるのは不利だな……虚を突いて確実に殺さないとこっちが危ない……）

勿論、それは許されざる決断だ。

現代人として、それは決してしてはいけない選択。

だが亮真に迷いは無かった。彼は自らが生き残る道を選んだのだ。

例えそれが、血塗られた修羅の道であろうとも。

彼の頭脳が、現状から最も生存の確率が高い答えを導き出す。

彼は心の中の殺意を消した。そして手に持っていた弁当箱を床に落とすと、満面の笑みを歩み寄ってくる兵士達へと向ける。

兵士達は自分達へ向けられた亮真の笑みに、一瞬戸惑ってしまう。

彼らも、まさか召還された人間が自分達へ笑いかけるとは思いもしなかったのだろう。

それはそうだろう。誘拐された人間が、誘拐犯に笑いかけるような物なのだから。

兵士達は戸惑い、歩みを止めてしまう。そしてそれは、亮真の狙い通りの行動だった。

次の瞬間、亮真は背を屈めながら3人の中で一番左端に立っていた男に走り寄るとその男の左目に人差し指を根元まで突っ込んだ。

彼の指が、眼球と眼窩の間にある隙間に深々と突き刺さる。

「ぎゃぁぁぁぁ！」

兵士の口から獣のような絶叫が迸った。

眼は人体の急所の中でも特に危険で即効性のある急所の一つだ。

小さな埃が一粒入っただけでも激痛を感じさせるこの急所を、亮

真は容赦なく抉った。
亮真はそのまま指を抜かずに眼窩に引っかけ、一気に腕を下へと押し下げる。

兵士達の不運は鎧などを着込んでいたことだ。
いくら亮真でも、鎧の上から素手で殴って四人を殺すことなど出来ない。
となれば、どこか隙間から急所を狙う必要があるという訳だ。そして尤も手っ取り早く効果が高いのが眼である。

指を眼に突っ込まれたままの兵士は、獣の如き叫びを上げて倒れこむ。亮真の目の前に、兜と鎧の間から彼の頚椎が曝け出された。
流れるような動作。無防備な男の首へ、亮真は手加減の無い肘を落とす。１００ｋｇを超える亮真の全体重を掛けて。

グシャ

水気を含んだ何かが叩き潰されるたような、鈍い音が広間に響いた。
亮真の体重を完全に掛けられた肘が、兵士の首の骨を砕いた音だ。
床に叩きつけられた兵士の口から血の泡を吹き出し、彼は床に横たわった。

亮真は横たわる兵士の腰より剣を抜くと残りの三人へと向かっていった。

「オラ！」

ブォ

亮真は走りながら手にした剣を、目の前に立ち竦む兵士の顔を目がけて力一杯投げつける。
兵士の顔に驚きの色が浮かんだ。まさか唯一の武器を投げつけるとは思わなかったのだろう。
慌てて彼は亮真に向けていた斧槍（ハルバード）を縦ると、柄の部分で飛んできた剣を弾く。
だがそれは亮真の狙い通りの行動だった。
兵士は剣を避けようと体をのけぞらせるた結果、彼は鎧と兜に守られて居た喉を曝（さら）け出してしまう。

どれほど全身を鎧で固めようと、どこかに必ずスキが出来る。そして隙が無いなら作れば良いだけの事。
亮真はがら空きになった男の喉に、右の貫手を叩き込んだ。

グシュリ

亮真の手に男の気道が潰された感触が伝わる。
即死はしないが、気道を潰された男に待つのは窒息死しかない。
亮真は素早く兵士から貫手を抜くと、身構える。残りは老人を入れて3人。

「死ね！」

突然、亮真の背後より斧槍（ハルバード）が突き出される。
亮真は喉を潰され倒れこんだ男の肩を掴むとそのままその体を飛び越える。男の体を盾にしたのだ。

ガシュ

鈍い金属のぶつかるような音が響く。力一杯突き出された斧槍（ハルバード）の

刃が、喉を潰され倒れ込んだ兵士の鎧を突き破り、体に刺さった音だ。

（馬鹿が）

亮真は男の後ろより転がり出ると、そのまま必死で斧槍（ハルバード）を抜こうと必死でもがく兵士の無防備な喉へ再び貫手を叩き込んだ。

人間の体という物は意外と丈夫で、あまり深く胴体部分を刺すと刃は抜けなくなることがある。

筋肉の収縮は一般人が思っているよりも強靭なのだ。しかも、今回は鎧の上から突き通しているため、なおさら刃を抜けなかったのだ。

（残り2人）

亮真の視線が立ちつくす2人を睨みつける。

残っているのは、他の連中とは違う飾りの付いた兜を被った隊長らしき兵士と、ローブを着込んだ老人の二人だけ。

隊長は手に持っていた斧槍を床に投げ捨てると、腰の剣を抜いた。

亮真の攻撃を見て、小回りの利く剣の方が有利と判断したらしい。

４人目は今までのやつらとは出来が違うようだ。やはり兵士達の隊長格なのだろう。

彼は最低限の状況判断が出来ていた。隊長は剣の刃先を下に向け、剣が身体に隠れるように右脇に構える。

（陰構え……剣の長さを見せないつもりか……一撃でこっちを斬るつもりだな）

亮真は隊長の構えを見て、彼の狙いを正確に把握した。

この構えから放てる斬撃は2種類だけ。

右から左へ薙ぐ胴斬りと、右足から左肩に切り上げる2つだけだ。

それ以外の斬撃を繰り出すには、いったん剣を構え直す必要が生じる。

それは、致命的な遅れとなる。

目の前の敵をどうしたものかと考え込む亮真の耳に、突然老人の呟きが飛び込んで来た。

「雷の神よ！　嵐の神よ！」

後ろを振り向くと、いつの間にかローブの老人がこちらに手をかざして何やら呟いている。

（まずい！）

亮真はこの時まで法術という物を知らなかった。

だが彼の生存本能が叫ぶ。

（避けろ！）

亮真は、とっさの決断で剣を構える隊長へと走り寄る。

一か八かの賭け。

亮真の胴を狙って隊長が放った右の脇構えからの斬撃を、彼は其のまま隊長の左側へすり抜けるように体を回して避ける。

隊長の体の後ろへ回り込むように。

ドガッ

亮真はがら空きになった隊長の無防備な背に蹴りを入れた。

そして、そのままその場に伏せる。

「我が求めに応じ我が敵を砕け！　双神乱舞（ボルトストーム）！」

亮真が地面へ倒れこむのと同時に、老人の手より放たれた暴風が彼へと襲い掛かった。

第1章第3話

異世界一日目その２：

「くたばりおったか！」

老人は必殺の呪文を放ち、肩で息をする。
荒れた息とは裏腹に老人の顔には必勝の笑みが浮かんでいる。
自らの使用できる法術の中でも、特に殺傷能力に優れて詠唱の短い術を選んで放ったのだ。
あれを喰らって生き残れるものなど居ない。そう断言できるほどの法術だ。
だから老人は気を緩めてしまった。亮真が本当に死んだかを確かめず。
それが致命的なミスとなる。

地面に伏せていた亮真は、老人の気の緩みを察して飛び起きた。
１００Ｋｇを超える巨体とは思えないほどの身のこなし。彼と老人との間合いが瞬く間に詰められる。
老人はそれに気がつくと、法術の詠唱を開始したが間に合わない。

「な！　馬鹿な！　全能なる……」

ドグン

老人の右わき腹から低くこもった音が響く。

「グホォ」

容赦なく打ち込まれた亮真の拳が、老人の右の肺から強制的に空気を叩き出し、詠唱を中止させる。
タネを明かせば簡単なことだ。
兵士の背を蹴り飛ばした後、亮真は床に伏せた。
ただ、それだけの事。
もし、老人の放った術が炎だったら、亮真の肉体はその高熱で直撃をしなくても、大ダメージを負っただろう。
もし、老人の放った術が大地から石の槍を無数に突き立たせる術だったら、亮真はその身を貫かれたに違いない。
だが、老人の放った術は雷電と暴風の術だった。
どちらも老人にとって殺傷能力の高い一撃必殺の術だ。
しかし、雷電は金属の鎧を来た男を前面に蹴り飛ばした結果、避雷針の代わりになり避けることが出来たし、暴風も床に伏せることで亮真の頭上を通り過ぎたのである。
人間は確信したときに最も油断をする。
自らの法術が絶対に当たるという過信。そして当たれば、必ず相手を殺せるという過信。
この二つの過信が、亮真へ勝利をもたらした。

「な～爺さん。ここ何処よ?」

肋骨の何本かが砕けたのだろう。右のわき腹を両手で押さえながら蹲る老人に近寄り、亮真は穏やかな声で問いかけた。

「ぐうううう……」

「な～?」

ベキ

嫌な音が神殿に響く。枯れ枝をへし折ったような乾いた音。
亮真の右の蹴りが老人の左の肘を砕いた音だ。
続けて、躊躇(ちゅうちょ)無く繰り出された亮真のつま先が、老人の左の脇腹へ突き刺さる。

「な～爺さん。質問に答えてくれよ？　あんたらはさっき「死ね！」だの「くたばりおったか！」なんて叫んでいたんだから、言葉が判らないことないだろ？」

亮真の顔には邪気の無い笑みが浮かぶ。
だが、其の笑みこそが老人にとって、最も恐ろしい表情だった。

「ぐうううう……」

だが老人は言葉を発することが出来なかった。老人はひたすら痛みに耐え蹲るのみだった。
亮真の蹴りを喰らい、肋骨を数本砕かれた所為だ。

「な～爺さん。俺はあんまり好きじゃないんだぜ？　こういうことはさ！」

亮真は蹲る老人の左耳を掴むと、其のまま上にねじり上げた。
老人の体重が左耳にかかり千切れ始めたのか、少しずつ血が滴ってきた。

「や。やめろ。手を離せ！」

「あ～ん。離せだ？　テメェ人に物を頼む人間の態度じゃね～な。まったく。いい歳こいて口の聞き方もわからねえ様だな」

相変わらず薄ら笑いを浮かべてはいたが、その目は糸の如く細まり、その眼光は氷の如く冷え切っていた。
先ほど、クラスメイトに見せたごく普通の高校生と同じ人物とはとても思えないほどに、彼の表情は変わっている。
眼は鋭く、顔は能面のように無表情である。
それは普段押さえつけられていた彼の本性なのかもしれない。
獣の本性。老人は、その亮真の本性を知る事になった最初の犠牲者となった。

ゴグン

老人の右わき腹から再び鈍い音が響いた。

「ギャ～～～～！」

老人の口から獣のごとき悲鳴が放たれる。
容赦の無い左拳が、身長１６０ｃｍ体重６０ｋｇ前後の老人の体を２ｍ程も吹き飛ばした。
右手で掴んでいた老人の左耳を放さずに殴ったため、亮真の右手には老人の耳が残っていた。

「な～爺さん。素直になろうぜ？幾つか質問を答えてくれれば済むんだからよ」

うつ伏せに倒れる老人へ、ゆったりとした歩調で亮真が歩み寄る。

「や……やめ……ゴフゥ……てくれ。話す、何でも……話す……」

砕けた肋骨が肺を傷つけたのだろう喋る度に老人の口から血の泡

が飛ぶ。
千切れた耳から滴った血の所為で彼の顔は真っ赤に染まった。
さすがにこれ以上の苦痛には耐え切れなかったのだろう。老人は痛みに耐えながら、必死で言葉を繰り出した。

「ふ～。良かった良かった。それじゃ質問その1な。ここ何処？」

「ここは……オルトメア……帝国の……王宮じゃ。」

「オルトメア帝国？」

老人の言葉を聞いて、亮真の顔に疑問の色が浮かんだ。
社会科が好きな亮真は地理も得意である。
彼は地球上のほとんど全ての国名を言う事が出来た。だが老人の言うオルトメア帝国なる国名に聞き覚えは無い。

「そう……じゃ。西方……大……陸中央……部の覇者じゃ。」

そういうと、老人は再び血の混じった泡を吹いた。
亮真の顔色の変化には気が付かなかったようだ。

「じゃぁ、次の質問な。なんで俺はここに居る？」

「……ワ……ワシが……召喚したからじゃ……」

「ふぅん。まぁそうだろうな」

亮真は老人の言葉に気のない返事を返した。
しかし、表面に出ない心の奥底で、彼がどう思っているのか、それは誰も判らなかった。彼の心の中を窺(うかが)い知る術は無いのだが。

「さて3つ目の質問だ。コイツが一番大事だからちゃんと答えてくれよ？　あんたの今後に大きく関係するからな！」

そう言うと、亮真は老人の顔を覗き込み尋ねた。

「俺は元の世界に帰れるんだろうな？」

声色は穏やかだ。言葉は荒っぽいが他人を威圧するような感じは無い。まるで親しい知人に話しかけるような気安い態度。だがそれが余計に恐ろしい。

老人の心臓の鼓動が破裂寸前まで脈動する。今、老人が一番聞かれたくない質問だ。

老人は、必死でこの場をやり過ごすための嘘を考える。

（戻れると言うべきか？いや、戻れるなどと言えば間違い無く、コイツは早く戻せというだろう。なら、なんと言う？準備に時間がかかるというべきか……？）

オルトメアの頭脳と謡われたオルトメア帝国主席宮廷法術師であるガイエス・フォン・ウォークランドが、このような下賤の者に殺されるわけには行かないのだ。

老人の双肩には、帝国の未来が掛かっているのだから。

（やはり、このまま時間を稼ぐしかない……異変を察すれば、警備の兵士達が飛び込んでくるだろう）

骨折の苦痛と戦いながら必死で頭を働かせるガイエスは、ふと自分の首に亮真の指が添えられていることに気がついた。

「な～爺さん。嘘はいけないぜ？　嘘は」

亮真はガイエスの髪の毛を掴み、顔を覗き込んで言った。

「な……嘘な……ど……」

「考えてたろ？」

ガイエスの心中をズバリと言い当て、亮真は続けて言った。

「あんたの血さ。あんた。嘘を俺に見破られかもって恐怖したろ？その所為で脈が速くなったのさ」

実のところ、亮真の言葉はタダのハッタリだった。

彼は確かに脈の速さを測りはしたが、それが嘘をつくなのか、骨折のためなのか、単純に亮真に対して抱いた恐怖心なのかを判別は出来ない。

だが亮真には確信があった。それは3つ目の質問を行った後のガイエスの顔に浮かんだ恐怖だ。

つまり亮真に殺されかねない程に悪い内容だという事。それを老人が口にしないと言う事は、この場を切り抜けるための嘘を考えていると見るべきだ。

「き……貴……様そんな能力……が」

「さ～はっきり言いな。俺は帰れるのか？帰れないのか？」

散々悩んだ挙句、ガイエスは遂に口を開いた。

其の表情には諦めの色が浮かんでいる。

「無理……だ。少なく……てもワシでは……」

「ふむ。まぁ爺さんの態度を見れば予想はついてたけどな。なら帰る技術は有るのか？」

亮真の顔には相変わらず怒りが浮かんでいなかった。絶望的な老人の言葉を聞いても、彼の口調は穏やかといってよい。

（なんだ……？　こやつなぜ怒らない？　なぜ動揺しないのだ？）

ガイエスの心の中で、恐怖が一段と大きくなる。

彼が過去に召喚した、１００人以上の異世界人の中には居なかったタイプだ。

今まで召喚した異世界人の殆どはパニックを起こし喚き散らすだけだ。当然、何も出来ずに兵士達に拘束され、ガイエスが服従の呪印を施す。

召喚した異世界人の中には、危険を察知したのか、ガイエス達へ殴りかかる者も居た。だが、武装した兵士達の相手ではない。

兵士達に取り押さえられ、結局、ガイエスの前にひれ伏すことになった。

だが目の前に立つ青年は違った。

たった一人で召喚直後の異世界人が、４人もの兵士を殺せるなどありえるはずも無かったのに。

「ワ……シの知る限……りではどの国にも……無いはずじゃ」

様々な疑問がわきあがる中、ガイエスは問いに答える。

「召喚できるが帰還は出来ないってことか。なんでだ？」

「そ……それは」

いよいよガイエスの脈動は早くなる。

（不味い……どういえばいい？　どういえばワシは生き延びられる？）

ガイエスには、亮真の問いをどのように答えれば自分が生き残れるのか判らなかった。
今までの亮真の行動を見ていれば、敵に微塵も容赦をしない、酷薄無情な男である事がガイエスは十分に理解出来ていた。
そして今の問いに対して真実を答えたならば、この冷酷な男が自分を生かしておくはずが無い事も。

答えるのを躊躇するガイエスを見て亮真の口に笑みが浮かぶ。

「ふむ。よほど答え難いらしいな……良いだろう。なら俺が答えてやるよ」

亮真の言葉を聞き、ガイエスの表情が恐怖と驚きで強張る。
彼の心臓が張り裂けんばかりに脈打った。
（まさか……いや、判るはずない。異世界に来た直後の人間などに……）
だが、ガイエスの願いは叶えられなかった。亮真の口から放たれた言葉は、彼を地獄へと誘う。

「異世界人を送り返す技術が無いって事は、おそらく最初から召喚した者を生かして帰す気が無いからだろ？　死体を帰す意味が無いから帰還の技術を研究していない。だからどの国にも帰る術が無い。そういうことだろ？　どうだ！　違うか？」

第1章第4話

異世界一日目その3：

「き、貴様……」

亮真の言葉を聞き、ガイエスは覚悟を決めた。
ガイエスが言いたくなかった事。其の全てを、亮真が知ってしまったからだ、
（もうどうにもならん。ここまで知られてしまったら……ワシが何をどう言おうと、コヤツがワシを生かしておくはずがない）

召喚直後に関わらず、我々に対して先制攻撃を行う状況判断の早さ。素手で四人もの兵士を殺害できる戦闘能力。情報を引き出すために躊躇無く拷問を加えられる冷酷さ。其の上でガイエスの漏らした情報から、的確に考察する知恵。
（この男を使役出来たならば……我がオルトメア帝国は、西方大陸の覇者となることも可能だっただろう……）
そんな思いが、ガイエスの心を過ぎる。だが、目の前の男は、完全に帝国と敵対してしまった。
帝国が彼を呼び出した目的を理解してしまったのだから。
そして、自分達が異世界人をどのように思っているのかを。
（ワシはここで死ぬのか……いや！　ここで死ぬわけにはいかん。王とワシの夢をこんな所で潰される訳にはいかんのだ！幸い、傷は法術で塞げる。機会を窺うのだ……それしか活路はあるまい）
帰還の手順が無い以上、この冷酷な男が自分を生かしておくとは到底思えない。ガイエスは十分其のこと理解していた。
（コヤツは今、ワシが怪我をしていると油断しているはずだ……なら、コヤツがワシを殺そうとする一瞬に賭ける！）

ガイエスは一瞬の勝機に全てを掛ける為、亮真の気配を探った。
亮真の警戒が緩む一瞬を。

「図星か……参ったな」

亮真は天を仰いで嘆息した。
嘘をついていない事は、老人の顔色を見れば疑いようが無い。
好きでもない拷問をして情報を引き出したのは、嘘をつかれないためだ。だが、出た結果は最悪だった。
しかし、まだ足りない。直ぐに帰れないのなら尚の事、この老人には色々と聞き出さなくてはならないのだから。
例えどんな手を使ってでも。自分自身が生き延びる為に。

「あんたら何で俺を召喚したんだ？　生かして帰す気が無いってことは、奴隷か何かにでもして死ぬまでこき使う気か？」

亮真の問いに対してガイエスは返答に詰まった。

（まただ、また要点を的確に聞いてくる）
ガイエスは亮真の顔を見上げた。
（ダメだ！　この男にはすでに答えが出てる。私がどんな嘘をついても見破るだろう……この男が私に質問をする理由は確認の為だ）
亮真の揺らぎのない瞳を見た時、ガイエスは悟った。
彼は亮真を騙すことを諦めて、真実を口にする。

「お主ら異世界人を使って……戦争に勝つためだ」

それは、最も悪意に満ちた身勝手な理由。
地球から召喚された人間は、ただひたすらに戦場へと狩り出される。

だが、ガイエスの言葉を聞いても、亮真の表情は変わらない。ただ、タンタンと事実を確認していくのみだ。

「戦争にねぇ……もうちょいと詳しく説明してくれよ。俺の知る限り、俺の世界では、あそこの鎧の奴らみたいに、剣だの槍だの使って戦うのにな慣れている奴なんていないはすだぜ？　それに爺さんみたいに手から雷を出すことが出来るヤツもな。それとも異世界ってのは複数あって、そういう力を持った奴を召喚するのが目的なのか？」

「イヤ。ほかにも異世界はあるが人間が居る異世界はおぬしの世界だけじゃ」

「ふ～ん。俺の世界の人間呼んだって戦争なんか出来ないだろうに。何が目的なんだ？」

この質問に答えるのは危険だった。だが、ガイエスは生きることを諦めはしない。

彼は帝国を支える柱の一人なのだから。

「それはおぬしら異世界人が、この世界最高の戦士になる可能性があるからじゃ」

ガイエスの言葉を聞き、亮真の顔に疑問符が浮かぶ。

「最高の戦士……ねぇ？　訓練もしてないやつらが最高の戦士になれるのかね？」

亮真の疑問は尤もだった。彼と同じく、召喚した人間に武術の心得があるとは限らないのだから。

「ひょっとして召喚される人間には、一定の力を持つ者に限るとかって条件でもつけてるのか？」

もし、そうで有るならば説明がついた。しかし、亮真の問いにガイエスは首を横に振る。

「どのような者が召喚されるかは完全に運任せじゃ」

だが、それが本当ならば大多数の人間は、戦う術を知らない人間と言うことになる。

戦国時代ではないのだ。武術は既に文化になってしまっている。現代社会で、武術を戦う為の道具として修練している人間など、ほんの一握りでしかないのだ。

大多数の人間は、動物を殺す事だって忌避する。果たしてそんな人間達を召喚することに意味があるというのか？

「なら、異世界からド素人を召喚しても何らかの利益があるってことだな？」

亮真の言葉にガイエスが頷く。

「この世界では他の生物を殺す毎に其の力の一部が己の物になる。そして異世界人はこの世界の人間よりも力の吸収率が良いのじゃ」

亮真はガイエスの言葉を理解しようと勤めた。

「なんだそりゃ？　てことは俺がさっき殺した４人の力が俺に宿ってるってことか？」

「其のとおりじゃ」

亮真は自分の体を見回した。しかし、別に普段と大差は無い。腕が太くなることも、足が長くなることもない。外見上は何も以前と違ってはいなかった。

「実感がないんだがな？」

「人間を殺したところで、吸収される力はたいしたことが無いからじゃ」

「さっぱりわからねぇな？」

人を殺して力を吸収する。そんな現象を、亮真は聞いたことがないのだから、彼が理解できないのも当然だ。

「具体的に言うならば、１万人を殺して初めて人一人分の力を己の物に出来るといったぐらいじゃ」

亮真は呆れた。

何を言い出すかといえば１万人を殺せと来た。人一人分の力を己の物にする為だけにだ。

「効率が悪くねぇか？　正直そんなに大勢を犠牲にしてまでする価値あるのかよ？」

亮真があきれるのも無理はない。一万人を殺す労力を考えれば、全く割の合わない話なのだ。

「対象が人間ならばじゃ。例えばドラゴンを殺したのな１匹でおそ

らく１０人分ぐらいは力を得られるはずじゃ」

ガイエスは必死で話を続けた。

（もう少し！　もう少し時間を稼げば、きっと兵士達がやって来る。何時までも戻らぬワシを不審に思いってやって来るはずだ！）

其の思いが、彼の最後の希望だった。

「ふ～ん。まぁ、その力を吸収するって話はわかったけどよ。結局なんで異世界からわざわざ召喚するんだ？」

「一つは吸収率が高いからじゃ」

「あん？」

ガイエスの言葉に、亮真は再び疑問の言葉を浴びせた。

「つまり、異世界人とこの世界の人間が同じ種類同じ数を殺したと仮定した時に、明確な力の差が出るからじゃ」

ガイエスの言葉を聞いた亮真の眼が細まる。

「なるほどな。召喚した後の成長率の差を重視したってことか……訓練経験が無い人間でも、最終的にはこの世界の人間より強くなる。それなら異世界人を育てるほうが良いってことか……」

突如、亮真のつぶやきが途切れた。そして、針の如き鋭い視線がガイエスに突き刺さった。

「そう言えば爺さんよ……あんたの傷は治ったみたいだな？」

ガイエスの背筋に冷たいものが走った。
ガイエスは亮真に殴られた後、腹を抱えて蹲ったときからずっと治癒術を使用していた。
それを見破られたからだ。

「な！」

驚きの声を上げるガイエスに、亮真は冷たい笑みを浮かべた。

「そりゃあ気が付くだろうよ。肺にダメージを与える様にアバラを砕いたんだぜ？　話すにも血が絡んでゴホゴホやっていた爺さんが、いきなり流暢に喋ってるんだ。となれば自分で治療したってことだろうよ……腹を抱えて蹲っていた間にな」

「き……貴様！　初めから気が付いていたのか？」

亮真はガイエスの問いに肩を竦める事で答えた。

「なぜだ……なぜ？」

「なぜ黙ってたかって？　あんたが治療の時間が欲しくて色々と喋るだろうと思ったからさ。それにあんた俺が隙を見せないか探っていたな？」

「き……貴様……其処まで判っていたのか！」

「そんなに驚くこと無いだろ？　ホントに俺の隙を狙うんなら、ずっと重傷の演技を続けるべきだったな……まぁ、いいさ。とりあえずアンタの話は判った。アンタの言葉がどこまで本当かは知らない

けど、とりあえず直ぐに帰る事は出来ないのは確定みたいだな……」

亮真の口に皮肉な笑みが浮かべガイエスへと近づく。
ガイエスは無意識に後ろへと後ずさった。亮真への恐怖が、彼の体を無意識に動かしたのだ。

「ああ。余計なことはしないほうがいいぞ？　とりあえずいろいろと教えてくれたからな。苦しまないように殺してやるからさ。代償としてな……どうだ？　悪くないだろう？」

亮真の言葉を聞きガイエスは最後の賭けに出た。
勝機は今しかなかった。例え其れが、どれほど0に近い勝機であっても。

「風の……グハ」

ガイエスの喉に突き刺さる手刀が、彼の詠唱を妨害する。

「言ったろ？」

再びその場に蹲るガイエスへ、冷ややかな視線を向けながら亮真は言い放つ。
亮真の下段蹴りが蹲るガイエスの後頭部へと吸い込まれた。

グシャ

水気を含む果物を踏み潰すような音が響く。

「余計な事をすると苦しむって」

この亮真の呟きが、ガイエス・フォン・ウォークランドのこの世で聞いた最後の言葉だった。

第1章第5話

異世界召喚1日目【脱出】：その1

「マジで胸糞悪いヤツだぜ……」

亮真は足元に横たわるガイエスの死体を蹴り上げた。
容赦の無い蹴りが、ガイエスの死体を3m近くも吹き飛ばす。

ガイエスが生きていた時には表に見せなかった怒気が、はっきりと亮真の顔に浮かんでいた。それは鬼の如き形相であった。

怒りは判断を曇らせる。戦いの最中で冷静さを無くすなど、敵に自分を殺してくださいと頼むような物だ。だが、人である以上、怒りを感じないわけが無い。特に今回のような相手には。
だから、亮真はそれをグッと心の奥底に秘めて押し殺した。相手の息の根を止める其の時まで。

ガイエス達は亮真が召喚されるずっと以前から異世界人の召喚をやってきたのだろう。
その結果は想像に余りある……。
どれだけの人がこの世界に召喚され、絶望に身を焦がしながら死んでいったのだろう。
其の人達にも、夢や希望があっただろうに。
そう思うと亮真の心には、深い悲しみと老人に対しての怒りが湧き上がるのだった。
敵には容赦が無くとも彼は人間だった。人の痛みや苦しみが判る……普通の。

ガンガンガン

「な……んだ？」

突然、この部屋の鉄の扉が外側より叩かれた。

「いかがいたしました？　ガイエス様？」

再び扉が強く叩かれる。

扉越しに、慌てたような男の叫びが聞こえてきた。

「先ほど衛兵より室内から大きな音がしたとの連絡があり、参上いたしました。召喚の儀の最中とは存じておりますが、なにとぞお顔をお見せくださいませ！」

「チィ……」

扉の向こうから聞こえてきた言葉に、亮真は大きく舌打ちをした。

どうやら扉の前には、さっき殺したような兵士達が、中の異変に気が付いて押し寄せてきたらしい。

この状況で打てる策は何か？

必死で亮真は考える。

何か。何か手段が無いか？

だが、どれほど考えても答えは出ない。

この部屋には窓が無い。唯一の出入り口。扉の向こうには兵士達が集まっていて、とても脱出など出来ない。

だが、このまま何もしないで居るわけにも行かない。

亮真は、ガイエスと四人の兵士を殺しているのだ。

とても交渉の余地など無い。
イヤ、仮に交渉の余地が有ったとしても亮真は選ばない。
人としての尊厳が、それを許しはしない。
こんなやつらに屈するなど。

武器を確保しようと兵士の死体にある剣を外す為、うつ伏せになっていた死体を仰向けにした時、彼の脳裏に一つの策が閃いた！
それはかなり分の悪い賭けだった。
数秒の思考の後、亮真が出した結論は。

「賭けてみるか……」

ガンガンガンガン

再び強く扉が叩かれる。
鉄製の扉で同じく鉄の閂が掛かっているとはいえ、本気でこじ開ける気なら数分と持たずにぶち破ってくるだろう。
何しろこの世界には老人のように手から稲妻を出す人間が居るのだから。
彼に残された時間は少ない。

亮真は5つの死体の懐を探ることから始めた。
何しろここは異世界だ。金も持たずに此の城から逃げ出したところで、結末は強盗でもするか盗みでもするかしかない。
働く事を選ぶとしても、こんな異世界で高校生に就ける仕事があるかなんて判るわけがない。
こういう時にライトノベルの主人公には、衣食住の面倒を見てくれる優しい協力者が現れるが、そんな幸運を期待するほど、彼は愚かではなかった。
とりあえず金貨と銀貨と銅貨が入った革の袋を5つ死体の懐から

探り出す。此の金が亮真の希望だ。
少なくとも、此の金が消えるまでに何か仕事に就く事が出来なければ、強盗でもしなければ生きていけなくなる。
貨幣価値がまったく判らない為、どの程度の生活費になるのかが不安ではあったが、今の段階ではどうしようもない。

ガンガンガンガン

「ガイエス様！　ガイエス様！」

再び扉が叩かれた。段々と扉を叩く音と、呼びかける声が強く大きくなる。
外の連中も異変が起きたことを確信したようだ。
亮真に躊躇している時間は残されていなかった。

彼は着ていた学生服を脱ぎ、革のベルトを外すとそれを胸の辺りに締めた。
傍からみれば滑稽な格好だがどうしようもない。
きっちりと締めたベルトに、貨幣の入った袋をしっかりと結わえ付ける。
次に、亮真は死体の中から背格好の似ている死体の鎧と衣服を剥いだ。死体に彼の学生服を着せ、死体の顔を松明で焼く。
勿論、顔が判らないようにだ。そして、自分は剥いだ衣類と鎧を身に着ける。

「ふ～。何とか着れたか」

安堵の言葉が亮真の口から洩れた。
何しろ今まで鎧など来た事が無い為、ずいぶんな時間が掛かったが何とかなった。

此の鎧が一枚板を打ち出した鎧ではなく、各パーツを一つずつ体に固定していく形式だったのも幸いしたようだ。

ガンガンガンガン

鎧を着るのに必死で、亮真の頭の中から扉の外の様子が意識から消えていたが、いよいよ此の部屋へ強行突入をしてきそうな雰囲気だ。

亮真は兵士の死体に歩み寄ると其の首の頸動脈を斬り血を床に流した。そして、其の血溜りの中に其の身を横たえて待った。

扉が破られるのを。

「かなり分の悪い賭けだが、強行突破よりはマシか……」

―――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――

亮真が床に横たわった丁度その頃。

扉の前には大勢の兵士で犇（ひしめ）いていた。

「ロルフ近衛騎士団長。ただいま次席宮廷法術師のセリア・フォン・ウォークランド様がおいでになられました！」

兵士の報告に続いて、赤毛の女が現れる。

「どういうことですか！？　お爺様は？」

開口一番、彼女はロルフと呼ばれた男へきつい口調で問いただした。

整った顔立ちをしているが、其の眼の強さが人を恐れさせる。有

能だが、人に好かれるタイプでは無い様だ。

「落ち着かれよ。セリア殿」

ロルフの隻眼が光る。

「落ち着けるわけないでしょ！」

よほど急いで移動したのだろう。

普段は一部の隙も無く整えられた自慢の赤毛は大きく乱れ、そのたわわに実った豊かな胸が大きく弾む。

「落ち着かれよ！」

今度はロルフの怒声が響く。

近衛騎士として多くの戦場を経験したこの男は、かつて戦場にて飛来した矢を皇帝の前に立ち身をもって防いだ事から、【皇帝の盾】と謡われた歴戦の猛者だ。

セリアが産まれる何十年も前から血みどろの戦場を生き抜いてきた彼の言葉は、素質に恵まれた若き次席宮廷法術師の心の動揺を取り払う。

ロルフの怒声に打ちのめされ、ようやく落ち着いたセリアは大きく深呼吸を行う。

「申し訳ございません。ロルフ様。お見苦しいところをお見せいたしました」

そう言うとセリアは素直に頭を下げた。

彼女も自分が動揺していることに気がついたのだろう。髪を撫で付け気持ちを落ち着けようとする。

「いや。それがしの方こそご無礼いたした。肉親であるセリア殿が動揺されるのも致し方なきこと」

一つしかない右目の眼光が幾分和らいだ。
その目は厳しくも娘を見守る父親のようである。

「して、ロルフ様。現状は？」

セリアの口調は完全に落ち着きを取り戻していた。
そこにあるのは、冷静さと冷徹さを兼ね備えた【吹雪の女王】と謳われし天才の顔だ。

「現在判っている事は多くありません」

「かまいません。わかる範囲でお教えください」

「ガイエス様が召喚の儀式を行うために、兵士４人を連れて部屋に入られたのが３時間程前の事……」

ロルフの言葉にセリアの表情が曇った。

「３時間ですか……召喚儀式の準備に２時間、詠唱に３０分を要します。ということは残りの３０分はいったい……」

セリアの心に嫌な予感が広がる。

「はい。衛兵達の話では３０分程前に大きな振動を部屋の方から感じたとの事で、報告が私のところに来ましてセリカ殿に連絡を入れて某（それがし）はこちら向かったのです」

「そうでしたか」

「扉の前でこの者達が待機しておりまして状況を確認したところ、召喚の儀式中にこの部屋に入ることも物音を立てることも禁止されているので、指示を待っていたとの事でした……そうだな？　お前達！」

そう言うとロルフは後ろの控えている2名の兵士に振り向いた。

「そう……あなた達の判断に問題ないわ」

セリアの視線が立ちつくす兵士へと向けられ頷いた。

「は！」

セリアの言葉を聞き兵士の顔に安堵の笑みが浮かぶ。

彼らは、自分に与えられた職務に対して最善を尽くしたと自負している。

だがそれを理解してくれない貴族は多い。最悪、「なぜ突入しなかったのだ」と責められる可能性だって存在した。

それが無い事を理解できたのだから、彼らの表情が緩むのも当然だった。

「ただ、時間が掛かりすぎているのは確かなので、私の一存で扉を叩いてみたのですが……」

ロルフが再び状況説明を始めた。

「反応が無いと？」

「はい」

セリアは考え込みながら自分の意見を言った。

「召喚の儀式の準備と呪文の詠唱には2時間～3時間かかります。お爺様は過去１００以上この儀式を実施されているはずです」

「そのとおりです。過去１２１名を召喚されており、事故及び召喚の失敗は０です」

ロルフが頷く。

「しかし何も問題が起きていないと仮定するなら、兵士が感じたという振動の説明が付きません。召喚の儀式に振動が起こる要素はありませんから」

「事故……ということでしょうか？」

セリアの分析を聞いて、ロルフの顔が曇る。

今まで無かったからと言って、今回も無いと考えるほど彼はボケていなかった。

そして法術の事故は非常に重大な影響を及ぼす事を知っていた。

最悪、国が傾くほどの。だが、ロルフの懸念をセリアは首を振って否定する。

「いえ。おそらくですが攻撃法術を使用されたのではないかと」

彼女の言葉にロルフの隻眼が光を強める。

ガイエスが攻撃法術を使用したという事は、何者かと戦ったとい

う事だ。

「攻撃法術ですか……しかし其れでしたらなぜガイエス様は部屋からお出にならないのか？」

ロルフが事故の可能性を捨て切れないのは此処だ。

オルトメア帝国の宮廷法術師であるガイエスの法術を喰らって、生き残れる人間は大陸中どこを探しても居ない。

勿論、戦いに絶対という事は無いと理解していても、ロルフにはガイエスが何者かに殺されるなど想像が出来なかった。

「もしくは出れないのか」

「まさか。ガイエス様ほどの方が……」

セリアの言葉を聞きロルフは顔色を変えた。

意図的に其の可能性を無視してきたロルフに、セリアの言葉が突き刺さる。

「最悪の事態も考えられるかと……」

セリアの顔は硬く強張っている。それは肉親の死を意識した人間の表情だった。

「申し訳ない！」

突然ロルフはセリアに頭を垂れた。

「な！　何をなされるのですか。ロルフ様」

セリアは慌てた。

「セリア殿。某（それがし）の判断ミスでござる」

もし、サッサと部屋へ突入していたら、ガイエスを助けられたかも知れない。

そんな思いが、ロルフの心に過ぎる。だがセリアは頭を横に振った。

「いいえ。ロルフ様。召喚の儀式の最中はいかなる者でも妨げてはならないのは国法となっております。ロルフ様が勝手な判断で部屋に飛び込まれては、其れこそ大惨事を引き起こす可能性がありました。例え、どのような結果にしろロルフ様が私を待ってくださったのは適切なご判断だと存じます……ですが事故の可能性は無いでしょう。もしそうなら既に何らかの影響が外に漏れ出すはずですから」

実際に、二次災害の可能性から召還の儀式中は何者も出入りが禁じられている。

召還とはそれだけ注意深く行わなければならないのだ。

「セリア殿……」

ロルフはセリアの肩が細かく震えているのを見た。

ただ一人の肉親を思う情を必死で堪えている。

「今のはあくまで最悪の場合です。とにかく中に入って確かめねば！」

「扉は鋼鉄製の上、中から閂が掛かっております。ただいま攻城用の破壊槌を準備させているところです。もう少々お時間を下され」

だが、セリアはロルフの言葉に従う積りはなかった。

「いいえロルフ様。時間が有りません。私が破ります」

ロルフは慌てた。

「そ。それは」

「火炎を司りし精霊よ！　汝の加護を受けし我が求めに応じよ！」

「セリア殿！　いかん。全員下がれ～～～～～！」

静止を無視して、セリアが詠唱を始めたのを見たロルフの叫びが響く。

「我が指し示しし敵を砕け！　火精爆裂（フレイムボム）！」

セリアの掌に球状の火炎が渦巻き、彼女の両腕が鋼鉄の扉へと突き出された。

第1章第6話

異世界召喚1日目【脱出】その2：

ドッガガガ！

鋼鉄の扉から爆発音が響いた。
もっとも扉はびくともしていない。だが次の瞬間、扉は轟音を発して砕け散る。
破れたのではなく砕けたのだ。

「さあ！　皆さん突入してください」

セリアの声が響く。
触れれば皮膚が張り付いてしまうほどの超低温に冷やされた扉を超えて、兵士達が部屋の中へと飛び込んで行った。

「さすがですな。熱膨張の差を利用して扉を砕くとは」

ロルフの声にセリアは軽く頷いた。
最初セリアが火炎系の法術を使用したのを見て、ロルフは扉を高熱によって溶かす事に因って破る気だと思った。
だからこそ、其の後の問題点を指摘しようとセリアを止めたのである。
だが、セリアはロルフが懸念している問題点を理解していた。
鋼鉄の扉を溶かす程の熱量を浴びせれば、周りの空気は灼熱地獄の如くになる。
法術を使えるセリアやロルフなら問題ないが、一般の兵士には致

命的だ。
空気が冷えるまで部屋に入ることが出来なくなる。
だからセリアは扉を高熱で熱した後、氷雪系の法術を使用することで急速に熱せられた扉を冷やした。　熱膨張を利用したのだ。

「さあ。我々も中へ」

入り口付近で停止した兵士をかき分け、中に入った二人の前には惨劇が広がっていた。
血液特有の、サビた鉄の様な匂が彼らの鼻に匂ってくる。

「これは……」

「なんてことなの……」

二人は絶句した。
心のどこかでは予想していながらも、目の前にある光景が信じられなかったのだ。

「お……お爺様は？」

辺りを見回したセリアの眼に、床に倒れ付すガイエスが飛び込んでくる。
特徴的なローブ。見間違えるはずがなかった。

「イヤ～～～お爺さま！」

セリアの膝が砕け、床へ倒れこんだ。
ロルフが慌てて抱え込むが、セリアは其の手を振り解きガイエス

へと走り寄る。
無我夢中でセリアはガイエスの体を抱え興した。
セリアの手に抱えられたガイエスを見て、ロルフは顔を顰める。
幾多の戦場にでたロルフですらこれほど容赦なく、執拗に攻撃を受けた死体を見ることは稀だったのである。
後頭部を砕かれ床に顔を埋めている所を見れば、ガイエスは後ろから襲われたか蹲ったところを攻撃されたかのどちらかなのが判る。
また、仰向けに寝かせたガイエスの死体が喉を破られていることを考えれば、犯人は気道を塞がれ蹲ったガイエスの後頭部へ止めを刺したことが予想された。

「いったい誰がこのような惨い事を……」

ロルフの口から、嘆きの言葉が漏れた。
幾多の戦場で殺し合いをしてきたロルフにとって、本来なら死体を見たところで何も感じはしない。
ただ、弱者が死んだと思うだけだ。
だが、ガイエスは違う。
ロルフと共に長年戦ってきた戦友なのだ。
友人の死を目の前にして、平常心を保てる筈もなかった。

「決まっています！　召喚された異世界人よ！」

セリアの口から憎しみのこもった叫びが迸る。
彼女の目には祖父を殺された怒りの炎が暗く宿っていた。
彼女の目に宿る炎を見たとき、ロルフは揺れ動く自らの心を必死で抑える。
指揮官である二人が冷静さを失うわけにはいかないのだ。
（無理もあるまい……親子以上に親密だったからな……）

セリアの両親は彼女が幼子の時に死んでいる。隣国との戦で戦死したのだ。
その後、彼女を引き取り育てたのが祖父であるガイエスである。
彼は、セリアの法術の師匠であると同時にたった一人の肉親なのだ。だから、セリアが取りみだしたのは当然と言えた。

しかし、彼女の叫びにロルフは疑念を抱いた。

「しかしセリア殿。異世界人は確かに育てれば強力な駒ですが、召喚したてではまったくの弱者ですぞ？あちらの世界ではこちらと違い戦争も無く、武器の携帯も禁止と聞いておりますし」

「でも！」

「確かに、現状疑わしいのは召喚された異世界人である事に間違いはありませんが、その他の可能性が無い訳では有りません」

セリアの抗弁をやさしく嗜める。
今は彼女に落ち着いて貰うより他に選択肢がなかった。
セリアの激情に引きずられて、犯人を取り逃がす事だけは避けねばならないのだから。

「まず我々がすべきは正しく現状を把握し、何が起こったのかを正確に知る事です」

ロルフに諭され、次第にセリアの顔が引き締まっていく。
彼女とて次席宮廷法術師に若くして任ぜられる程の英才。
ロルフの言葉を聞いているうちに、自らの役割と責任を思い出して心を静めていく。

「申し訳ございません。ロルフ様のおっしゃるとおりでございます」

頭を下げるセリアを押しとどめ、ロルフは兵達へ矢継ぎ早に命令をくだす。

「直ちに倒れている兵士の生死を確認しろ！　それとそこに倒れている変な服装の男が確実に死んでいるかを確かめろ！　後の者はこの部屋の捜索だ。どこかから抜け出せる穴か何かが無いかを確認しろ！　後は……何かあるかの？　セリア殿？」

ロルフの問いかけにセリアは頭を振った。

冷静さを取り戻しかけているとはいえ、肉親の死はまだ彼女の心に影響を及ぼしている。

未だ彼女の脳は其の怜悧な鋭さを取り戻してはいなかった。

「ロルフ様！　セリア様！」

「生きてます。こいつ生きてます！」

しばらくして、倒れ伏す兵士達の生死を確認していた兵士がロルフとセリアを呼んだ。

「「なに！？」本当なの？」

ロルフとセリアが駆け寄るとそこには血の海に横たわる兵士が居た。

「ロ……ロルフ様……」

途切れ途切れに口から漏れる声は、確かにこの死体と思われた兵士からの物だ。

「なんだ？　いかがしたのだ？」

「何が？　何があったのです？」

唯一の生き証人だ。

ロルフもセリアも声を荒げて聞いた。

「……ルフ様……が化け物を……」

兵士の言葉を聞き、二人の顔色が変わった。

この部屋で何が起こったのかを知る、唯一の生き証人なのだから。

「なに？！　化け物だと」

兵士の言葉に気になる単語を聞き付け、ロルフの顔色が変わる。

セリアも祖父が召還術で事故を起こし、予定外の異生物を召還したのかと慌てた。

「どういうことなのです！　しっかりなさい」

「ガ……ガイ……が」

必死で問いかける二人だが、兵士の口から途切れ途切れに漏れる言葉は不明瞭で、ハッキリとした意味を持たない。

辛うじて何か化け物が居た事だけは伝わったが、状況は相変わらず判らなかった。

「い……いかん。誰か！　誰かこの者を医者の下に！」

「はっきりなさい！　お爺様がお爺様がいかがしたのです！？　其の化け物とは何のことです？」

必死で問い詰めようとするセリアを制止し、ロルフは運ばれて来た担架に兵士を乗せると医務室へ急行するように命じた。

「なぜです？！　なぜ止めたのです！？」

鬼を形相をして食って掛かるセリアをロルフははっきりと嗜めた。ここではっきりと言わなければ、肉親を失い取り乱すこの少女を止めることが出来ないと判断したのだ。

やはり経験の差なのだろうか。

能力はあってもセリアはいまだ感情のコントロールに難があるようだ。

せっかく落ち着きを取り戻したというのに、兵士の「化け物」の言葉を聞いて再び心を乱してしまった。

尤も、尊敬する祖父が召還術の失敗をした結果死んだかも知れないとなれば、致し方ないのかもしれないが。

「ですが、あのまま問い詰めたらあの者は死んだかもしれません」

食って掛かるセリアへ、ロルフは出来るだけ感情を抑えて冷徹に事実だけを告げる。

ロルフの言葉は正論である。今、無理に尋問すれば、あの血だらけの兵士は死んでいただろうから。

だが、セリアの心にはそれが届かない。

兵士一人の命より、祖父の情報を聞き出す方が先決だと本気で思いこんでいる。

「其れはそうですが。今はあの者の命より何が起こったのかを確認するべきでは無いのですか？」

だからセリアはロルフの諫めに必死で抗う。

自らも、ロルフの言葉が正しいと理解していながらも、彼女の心がその判断を退けてしまう。

だが、ロルフは根気よく状況を整理してセリアの心を落ち着けていく。

「確かにそれは重要ではありますが、全てを知るのはあの男だけの様です。あの者の怪我をそのままにして、尋問したところで有意義な情報が取れたとも思えません。下手に問い詰めて情報を聞き出す前に死んでしまったらそれこそ意味がありますまい。ここは多少時間がかかっても、あの者の回復を待って確認した方が後々良いでしょう？」

ロルフにそこまで言われればセリアとしては無理も言えない。

ロルフの言葉は正しいのだ。

彼女が納得できないのは、肉親が犠牲になった遺族としての感情の部分。

「ふぅ……判りました。ロルフ様の判断が正しいと存じます。取り乱してしまい申し訳ありませんでした」

大きくため息をついたセリアの心が冷静さを取り戻していく。

ロルフに食って掛かっ分だけ、彼女の心の負担が減った成果だろう。

如何に天才とはいえ、年齢から来る経験の差はどうしようもないのだ。

「しかし、あの者が言った化け物とはいったい……」

「まぁ、それはあの兵士の怪我が治ってからゆっくりと聞き出せばよい。今は出来るところから手を付けましょうぞ」

セリアの言葉にロルフは落ち着いて答えると、召喚の間の捜索を再開するように兵士達へと命じる。

だが、結果的にロルフの判断は裏目に出る事になる。

「た！大変です！ロルフ様～～～！！医務室が！医務室が！」

「「！！」」

一人の兵士が召喚の間へと駆け込んできた。

其の切羽詰まった声は、明確に緊急事態である事を告げている。

「落ち着け！　いかがしたのだ？！」

ロルフの怒声が部屋中に響き渡る。

怒声を受け兵士はロルフの剣幕に押され、息を切らせながら必死で報告を始めた。

「はは！　ただいま医務室より原因不明の出火が有りました……火の回りが早く、薬品庫の方にも火が」

「なんだと！　火はどうなった！　誰か消火へ向かっているのか？！」

ロルフは兵士の報告を途中で遮り絶句した。
薬品庫には燃焼を促進させるような可燃物が幾つか保管されている。
それに、ついさっき怪我人を医務室へ送ったばかりなのだ。それも唯一人の生き証人を。

「い……いえ。直ちに宮廷法術師達に連絡が行った為、現在は消火されております」

兵士の報告を聞きロルフは幾分落ち着きを取り戻した。
少なくとも宮殿の炎上と言う最悪の事態が防げたことに安堵したのだ。

ロルフはセリアへ尋ねた。
心の中に、ある疑念が湧きあがってきた為に。

「セリア殿。どう思う？」

「不自然ですね……」

「やはり……セリア殿もそう思うか……」

「えぇ……あまりにもいろいろな事が重なりすぎています」

ロルフは考えこんだ。
彼の中である答えが浮かんできてはいた。
だが、それは彼の常識ではありえない事なのだ。

「一つだけ現状を説明できる仮説がある。だが……」

「ありえないとお考えですか？」

セリアはロルフの考えを正確に察する事が出来た。
そして何を理由に言い出せないのかも。

「わからん……」

ロルフは再び首を振った。
憶測は憶測でしかない。そして、ロルフが欲しいのは憶測では無い。絶対な確証だった。

「ご報告いたします！」

二人の会話は探索を終了させた兵士達の報告により遮られた。

「うむ、報告しろ！」

「兵士の死亡を確認いたしました」

「それで？　死因は？」

セリアの問いかけに兵士達が顔を見合す。
報告しにくいようだ。

「どうしたの！　はっきりなさい！死因は？」

セリアの剣幕におされ、一人の兵士が代表して前へ出た。

「お……おそらく素手によるものではないかと……」

「なに！　素手だと？　なぜ判る？」

ロルフは声を荒らげて聞き返す。

「喉を潰されたと思われる死体が2体有るのですが、そこにはっきりと指の痕が……」

別の兵士が続けて言った。

「私が確認した死体の死因は後ろから首に打撃が加えられた事による頚骨の粉砕です。ただ鎧と兜に一切傷が無く、武器を使用して殺された形跡がありません」

別の一人が言った。

「それと気になる点が……」

「なんだ!?　ハッキリせんか！」

普段は温厚と言って良いロルフも、苛立ちを隠せなかった。

だがそれも無理もない。

「は！　異世界人と思しき顔の焼けた死体ですが……其の……ズボンのベルトが……」

ロルフの怒声に晒され、兵士は脅えながらも必死で報告を続ける。

「なんです！　はっきりしなさい！」

セリアの苛立ちに、兵士はたじろぎながらも必死で報告した。

「は！　ズボンにベルトが無いのです。其の状態ですと死体からズボンが落ちてしまいます。とても戦闘を行えるとは……」

それを聞きセリアとロルフ、二人の顔色がサッと変わる。

「しまった！　ロルフ殿！」

そう言い残すと、セリアは風の様に部屋を駆け出す。

「お前達は城内の警戒に当たれ！」

ロルフは兵士達にそう命じるとセリアを追った。

様々な事柄が組み合わさり、彼らの脳が１つの結論を導き出す。

「勘が当たったようだな」

先行するセリアにロルフが後ろから声をかける。

「ええ。とりあえず医務室で確認すればはっきりするでしょう……」

「しかし、そうなると戦う術を持った異世界人ということになるが……」

「ええ。それも武装した兵士を４人にお爺様ほどの法術師を纏めて殺せるほどの……」

「初期でそれほどの能力か……」

ロルフの背に寒気が走った。
それほどの力を持った異世界人がこの宮殿の中をうろついているのだ。
（必ず捕まえて見せる！）
そう決意すると彼は全身に力を漲らせる。
術式で肉体強化を行っている二人は３０秒ほどで医務室の前まで駆け抜けた。

「報告どおり鎮火しているようだな……」
流水系の法術を使ったのだろう、医務室とそれに併設された薬品庫の周りは水浸しだった。
二人の到着に気づき一人の青年が歩み寄って来る。
「セリア殿、ロルフ様。いかがなさったのですか？」
「オルランド。火は？」
セリアの問いにオルランドは鎮火された医務室に視線を向けて言った。
「問題有りません。火の回りが速くて医務室は丸焼けですが、他の部屋に飛び火する前に何とか消えてくれました。ただ……」
オルランドは口を濁した。
「オルランド！　急いでいるの！　”ただ”なんなの？……先程、

召還の間から医務室にけが人が運び込まれているの！　そいつは？」

「医務室から死体が3体出てきたんだが、どうも火で死んだ訳じゃ無い様なんだ。それに、死体の数が一人足りない……そのけが人の事は知らないけど……」

セリアの息を呑む音が聞こえた。

彼女達の予想が的中した事を悟ったからだ。

「なぜ足りないと判ったのかね？」

ロルフの質問にオルランドは答えた。

「はい。医師の一人がちょうど休憩に入ろうと医務室を出たところで、兵士2名が担架に怪我人を乗せて来たそうなのですが」

ロルフとセリアは顔を見合わせ頷きあった。

（（思ったとおりだ））

「「それで！？」」

ロルフとセリアの声が重なる。

「怪我人はかなりの重症の様で直ぐにベットに寝かせたらしい。ところが鎮火したので医務室を確認したところ床に3人の死体しかない。ベットはもぬけの殻だった……」

其処でセリアはオルランドの言葉を遮った。

既に必要な情報は得たのだ。後は行動あるのみだ。

「オルランド！　直ぐに法術師隊を編成して！　ロルフ様は近衛隊を編成してください！　私は陛下に兵の使用を許可していただきます！　合流は中庭で」

セリアはオルランドの言葉を遮り、指示を飛ばす。

「心得た！」

「ま……待ってくれセリア殿。僕にはさっぱり……」

状況がつかめないオルランドは、セリアの剣幕におびえながら訪ねる。

「善いからオルランド殿、セリア殿の指示に従うのじゃ！」

「オルランドお願い！　時間が無いの。逃がしちゃう！」

セリアの必死の叫びにオルランドの表情が変わった。

普段は頼りなくとも、彼は第3席の宮廷法術師。

戦にも参加した事があるからこういった状況では胆が据わるのだ。

セリアの声から緊急事態だと察した彼は、心のスイッチを平常から戦場へと切り替える。

「兵力は？」

低く冷たい声だ。

さっきまで動揺していた人間とは思えないほどに。

「出せるだけ出して！　相手はかなり危険なやつよ。緊急事態として法術の使用を認めるわ！」

セリアは宮殿内での使用を禁止されている転移の法術の使用許可を出した。
それは第一級の非常事態である証。

「判った。”光を司りし最高神メネオースよ。汝との契約に従い。我に転移の加護を”転移（テレポート）”」

其の事を理解したオルランドは素早く呪文を詠唱する。
彼は瞬時に法術師隊の宿舎へと転移した。

「さすが第3席の法術師じゃの～。あれほどの短い詠唱で転移が出来るとは」

「当然です。お爺様の弟子ですもの。あれぐらいは出来て貰わなくては話になりませんわ」

そしてセリアはロルフに向かって手を向けた。

「ロルフ様、時間が惜しいです！　私のほうでロルフ様を近衛隊の宿舎へ転送します。兵の編成はよろしくお願いします」

「判った。陛下よりの許可は頼むぞ！」

「はい！　行きます。”光を司りし最高神メネオースよ其の力を示せ！　この者をかの地へと誘え！転移（テレポート）”」

ロルフの姿が消えたのを確認し、セリアは再び詠唱を開始した。
姿の見えぬ殺人者の影を追う為に。

「”光を司りし最高神メネオースよ。汝との契約に従い。我に転移の加護を””転移（テレポート）”」

第1章第7話

異世界召喚1日目【脱出】：その3

セリアの胸に斧槍（ハルバード）が突きつけられた。

「何者だ！　宮殿内では転移（テレポート）を使用するとは！」

殺気の篭った怒声がセリアの体へ叩きつけられた。

「緊急よ！　陛下へ取次ぎなさい！」

セリアは衛兵の誰何を無視して皇帝への謁見を求める。

突然転移してきた曲者が次席宮廷法術師であることに気づき、皇帝の間の扉を守る左右の衛兵は慌てて斧槍（ハルバード）を立てた。

「セリア様でしたか。失礼いたしました！　しかしなにゆえ転移など……法はご存じのはずでしょう？」

衛兵は訝しげな顔をして尋ねた。

それも当然である。

転移の法術を使えば、皇帝の寝室にすら忍び込める。そう軽々しく破られるような法では無い。最悪の場合極刑までもあり得るのだから。

衛兵が事情を聞きたがったのは当然と言える。だが、セリアは衛兵の問いを黙殺した。

今はそんな事に構って時間を浪費する訳にはいかないのだ。

「黙りなさい！　緊急といったはずです。一秒でも時間が惜しいの

！　取り次がないなら扉をブチ破るわよ！」

「お……お待ちくださいセリア様。直ぐに御取次致しますので！」

セリアの剣幕に圧倒され、衛兵の一人が急いで皇帝へと取り次ぐ。

１０秒も掛かっただろうか。

セリアの前の扉が静かに開かれた。

「どういうことだ！　セリア・フォン・ウォークランド！　あまりにも不敬であろう！」

皇帝の前に跪くセリアへ鉄血宰相ドルネストの怒声が響く。

（チィ。宰相が居るとは……）

セリアは心の中で盛大な舌打ちをした。

急ぐセリアにとって余り喜ばしくない展開だ。

宰相のドルネストは皇帝の忠義篤い忠臣だが融通が利かない。

特に法令を遵守することはまさに鉄のごとしと言われる男なのだ。

だが。セリアの無礼を取りなすものが居た。

玉座に座る皇帝其の人だ。

「やめよ、ドルネスト。セリアがこれほどまでに火急の謁見を請うのだ。何か起こったに相違あるまい？」

「しかし陛下……」

ドルネストがそれでは示しがつかないと、皇帝へ食い下がった。

「くどい！」

皇帝の目が細まり鋭い眼光がドルネストを貫く。
如何に宰相と言えども、皇帝の言葉には逆らえない。
まして、現皇帝は唯のお飾りでは無い。
西方大陸中央部を力で切り取ったまさに覇王なのだから。

オルトメア帝国初代皇帝ライオネル・アイゼンハイトは、もともと西方大陸中央部の山岳地帯に存在した旧オルトメア王国の第３王子として産まれる。
当時、旧オルトメアは貴族の専横と王家の内乱により疲弊し滅亡の淵にあった。
そんな国の現状に憂いを感じ、ライオネルは祖国復興を志す。
彼は兄弟達のと継承権戦争に勝ち抜き、門閥貴族を粛清する事で王家の力を増した。
その過程でライオネル自身、幾度も戦場で剣を振るってきた。
そして、今から４０年前に隣国テーネ王国へ侵攻制圧したのを皮切りに、国名をオルトメア帝国へと改称。
以来、西方大陸中央部の覇権争いに身を晒して来たのである。
血みどろの戦場を知る皇帝は、５８歳になる今でも全身の筋肉が研ぎ澄まされ、並みの武将を圧倒している。

「失礼いたしました。陛下」

ドルネストは皇帝へ頭を下げる。

「よい。ところでセリア。何用だ？」

「は！　陛下。恐れいりますが兵の使用を許可していただきたいのです」

あまりに突然の話で、皇帝と宰相は絶句した。

「何を言い出すか！　貴様。次席宮廷法術師の分際で軍事に口を出すつもりか！　ガイエス殿は一体何と言ったのだ！」

宰相が怒りを露わにするのも当然だった。

セリアには権限が無いのだから。

だがドルネストの怒声とは反対の言葉が皇帝の口から出る。

「良かろう」

「へ。陛下！　何を仰せです」

「良いと言ったのだ。ドルネストよ」

狼狽するドルネストとは裏腹に、皇帝は至極落ち着いた口調で言った。

「だがセリアよ。理由を聞こうか。なぜ宮廷法術師のお前が兵を欲しがる？　ドルネストも気にしておるが、ガイエスは此の事を知って居るのか？」

高弟の言葉を聞き、セリアは沸き立つ悲しみと苛立ちを必死で抑えた。

「お爺様は。いえ。ガイエス・フォン・ウォークランドは殺害されました」

セリアの言葉は皇帝と宰相に途轍も無い衝撃を与えた。

何しろガイエスはオルトメア帝国最高の法術師であり、ドルネストと並んでオルトメアの内政、外交、軍事すべてを担って来たか

らである。

「バ。馬鹿な。ガイエス殿が……」

「ありえぬ。ありえぬぞ！　セリア！」

二人の口から否定の言葉が漏れる。

「いいえ陛下。宰相様。事実でございます……ガイエス・フォン・ウォークランドは異世界人に殺害されました」

「な……何じゃと？」

「馬鹿な、セリア殿……何を言われる」

皇帝と宰相から否定の言葉が漏れる。
セリアは苛立ちを必死で押さえ状況の説明をした。
ここで適当な説明をすればするほど時間が掛かるからだ。

「事実です……陛下。私がこの眼で確認いたしました」

静寂が皇帝の間を支配した。
１０数秒の沈黙を破ったのは皇帝だった。

「なぜだ？」

低く重い声。
皇帝は激情を必死で抑えて居た。
玉座の肘つきを握る手に力が入る。

「確たることは判りません。証拠も証人も居ないのです。ですが、状況から犯人と思しき者は判っております」

「何者だ？」

「ガイエス様は本日召喚の儀を執り行われていました。殺害現場が召喚の間である事、護衛の衛兵が全て殺害されている事を考えると、犯人は召喚された異世界人ではないかと」

「ま……まさか。信じられん……」

ずっと口を閉ざしていたドルネストから思わず言葉が漏れた。

「また其の者が、城の兵士に成りすまして居る事も判っております。現在、近衛騎士団長のロルフ様、宮廷法術師第３席のオルランドに兵の編成を託しています。陛下の許可をいただき次第追跡に出たいのです」

そこまでセリアの話を聞いた皇帝の反応は早かった。

「許可する！　命令書の発行に時間が掛かるゆえ、我が帯剣を我が命の証とせよ！」

そういうと皇帝は腰の剣を外すとセリアへ投げ与えた。

「セリアよ。ガイエスは我が腹心にして、４０年来の友であり師よ。我が国の柱でもあった」

「はい」

「そのガイエスが殺害された。これは我がオルトメア帝国に対しての反逆である！　必ずや犯人を見つけ出し拘束せよ！　無理なら殺してもかまわぬ！」

セリアは頭を深く垂れ敬意と謝意を表すと、転移し姿を消した。

皇帝は深くため息をつくと、玉座の後ろに掛けられたカーテンへ言葉を掛けた。

「シャルディナ。話は聞いておったな？」

「はい。陛下」

カーテンの影より現れたのは２０台前半、金髪の女だ。

背は高いが均整の取れたプロポーションを持ち、何より其の青い目が印象的な女だった。

どこと無く皇帝に似ている。

「ただいま影達からの情報を確認いたしました。ガイエス殿の死亡は間違いないようです。また同時刻に医務室より出火があり、その際に兵士の一人が行方不明となっています。セリア殿はこの消えた兵士が異世界人だと思っているようですね」

「そうか……シャルディナよ。どう思う？」

「犯人に関しての推測は正しいと存じます。少なくとも近隣諸国による暗殺はありえません。ただ……」

皇帝は射抜くような視線をシャルディナに向けた。

「タダ？　なんだ」

「恐れながら、犯人捕縛の可能性は限りなく低いと言わざるえないかと」

「なんと！　シャルディナ様はセリア殿では無理とおっしゃられるのか！？」

ドルネストが驚きの声を上げる。

「ドルネスト殿。セリア殿の所為では有りません。おそらく誰がやっても同じでしょう」

「何故です！？」

「召喚された異世界人の顔も形も性別も何もかもが判らないのにどうやって探すのです？」

「なんだと？」

皇帝が驚きの声を上げる。

セリアが犯人の顔を把握していない状況を考えていなかったのだ。

「どういうことだ？」

「ガイエス殿以下召喚の間に居た兵士は全て殺されています。負傷を装い医務室へ行った際には兜で顔を確認していないそうです。医務室へ運んだ兵士と医者は殺害されています。結果として誰も顔が判らないのです」

「なんということだ……ではセリアはどうやって犯人を見つけるのだ？」

「賭けです。陛下。異世界人が兵士の格好をしていれば良し。また城下で着替えたにしろ、慌しく城門を抜ければ兵士達に見咎められます。もし無理でも、何かしらの情報は得られる可能性はございます」

「なるほど。なら可能性はあるのだな？」

「はい。しかし……」

皇帝は苛立ちを隠せなかった。

「良い！　そこまで判っておるのならシャルディナ！　そなたも影を率いて探索に向かえ！」

「へ、陛下？　宜しいのですか？　シャルディナ皇女様を身辺から御放しになって」

ドルネストの声に緊張が走る。

皇帝の身を守る最後の砦で有るシャルディナを、その身辺から離すことなど過去一度として無かったからだ。

「くどい！　オルトメア帝国第一皇女にして夢魔騎士団団長（サキュバスナイツ）シャルディナ・アイゼンハイトよ！　セリアと連携し犯人探索に従事せよ！」

「かしこまりました。陛下。微力ながら全力を尽くします」

シャルディナは頭を垂れると皇帝の間から立ち去った。
オルトメア帝国が完全に亮真を敵とみなした瞬間だった。

ついに皇帝の間には皇帝と宰相のみになった。

「ドルネストよ。大事になったな」

「はい。陛下。近隣諸国にこの事が漏れる前に何とかせねばなりますまい」

「うむ。ようやく中央部を制圧し、いよいよ東部攻略という矢先にこれか」

「はい。無念でございます」

皇帝は頭を振った。

「いたし方あるまい。ドルネストよ。急ぎ主席宮廷法術師を任命するぞ。大臣達を収集せい」

「かしこまりました。やはりセリア殿を？」

ドルネストの声に不安が混じる。

「若いがいたし方あるまい」

「かしこまりました」

ドルネストが退出し皇帝は一人玉座に深々と腰を落とした。

「ガイエスの馬鹿め。ようやく我が覇業が見えかけてきたというのに……」

真紅の絨毯に水滴が落ちる。

其れは長い戦乱を共に生き抜いてきた友に対する、皇帝の精一杯の情であった。

第1章第8話

異世界召喚1日目【脱出】：その4

時間は少し遡る。

召喚の間から連れ出された怪我人とは亮真のことだ。
彼は賭けに勝ったのだ。
当然ながら、ある程度の勝算は持っていた。
床一面に飛び散る血で彩られた部屋と、5つの死体。
扉を破って入ってきた人間達に、冷静な判断など下せないであろうという亮真の判断は正しかった。
事実、突入してきた兵士達は血塗られた部屋の凄惨（せいさん）さに動揺したのだ。

亮真の最大の懸念は、兜を脱がせて顔を見られることだった。
もし顔を見らたら、兵士達に不振を抱かれたに違いない。
何しろ彼の顔を見知った人間など誰も居ないのだから。
また、その場は逃げられたとしても、顔を知られれば逃亡するには著しく不利だ。
だが、突入してきた女と男がお互いの名前を呼んでくれたのは天の助けと言えた。
ロルフは自分の名前を呼んだというその事実によって警戒心を薄め、亮真を医務室に連れて行くように指示したのだから。
ロルフは自分の名前を呼んだ段階で味方と判断したのだ。それが亮真の知略だとは夢にも思わずに。

「ぐ……ごほ……ごほ」

亮真は担架の上で咳き込んで見せた。

「おい！　しっかりしろ！　直ぐに医者に見せてやるぞ！」

「ああ！　もう少しの辛抱だ！　良いか！　意識を保つんだ！　気を失ったりするなよ？　死ぬぞ！」

担架を運ぶ兵士達は、口々に亮真を励ます。

彼らは純粋に、担架に横たわる兵士を仲間だと思い込んでいた。

亮真も必死で苦痛を訴えた。

彼は別に役者を志した事など無かったが、人間必死になると大抵の事は出来るらしい。

まさに、ハリウッド男優並みの演技力を発揮して、怪我人の振りをする。

「よし！　ついたぞ！」

そういうと兵士の一人が木の扉を叩いた。

「先生！　急患だ開けてくれ！」

数秒後、扉が内側へと勢い良く開かれる。

一人の若い男が医務室の扉のノブを掴んだまま大声で叫んだ。

「親父さん。急患だってよ！」

「聞こえてるわ！　はよ中へ運べや！」

だが男は怪我人の治療を手伝う気が無いのか、そのまま医務室から出て行った。

「ほんじゃあ親父さん！　俺は休憩行ってくるぜ？　昼飯も食えなかったからな」

扉を出て行く若い医者の背に怒声が飛ぶ。

「おい！　お前。怪我人をベットに寝かせるのぐらい手伝っていけや！」

だが若い男は聞こえない振りをして足早に去って行った。

「まったくしょうがね～な！　あの野郎！」

そういうと親父と呼ばれた中年の医者は、薬品や包帯の準備を終え兵士達の方を向く。

長年、医者として経験を積んで来たのだろう。話しながらも、手早く治療の準備を終えていたのだ。

「それで？　患者の容態は？」

「は！　かなり危険な状態と思われます。」

「お～お～。血まみれだな？　何があったんだ？」

そう言いながら医者は亮真へと近づく。無警戒で……

其の瞬間！

ザシュ

医者の首から勢い良く赤い液体が迸った。
演技を止めた亮真の剣が、医者に首に襲い掛かったのだ。
再び血が亮真の鎧を赤く染め上げた。

亮真は一気にベットから跳ね起きると、呆然と立ち尽くす近くの兵士へと襲い掛かる。
今まで怪我人だと思っていた兵士達は、亮真の攻撃を避けることが出来なかった。
何が起こったのかまるで理解していない兵士の喉を剣が切り裂いた。

流石に、もう一人は呆然と立ち尽くしては居なかった。彼は外へ逃げようと医務室の扉へ向かって走る。
下手に戦わず仲間を連れてくることを選択したらしい。
亮真は咄嗟に腰の鞘を外し、兵士の足へと投げつける。
別に、兵士を攻撃するためではない。足に絡んで一瞬でも彼の逃亡を邪魔出来ればそれで良かったのだ。

ドシャ

運良く鞘は兵士の膝裏に当たり、彼はバランスを崩すと前かがみに床へと倒れ込む。
亮真は直ぐに駆け寄ると、鎧と兜の間に手を突っ込んだ。そして兵士の喉を後ろから腕で締め上げる。
兵士はのしかかってくる亮真を必死で撥ね付けようとした。だが、亮真の太い右腕が、万力の如く喉を締め上げると途端に動きが止まる。

抵抗が無意味な事を理解したのだ。

「ぎ……ぎざま……」

兵士に選択の余地など無い。

「悪いね～～。ちとお聞きしたい事があるんだよねぇ」

「ば……ばんだ……」

喉を締め上げられているせいで、兵士の言葉はかなり不明瞭だった。だが、意味が取れないほどでもない。

亮真はなるべく穏やかに兵士へと問いかける。

声を荒らげるより、穏やかに話す方が相手を威圧する事を亮真は理解していた。

「いやね。此の城から出たいんだけど、どうやって出たら良いのかな？」

極自然な口調。街中で道を訪ねるのと全く変わらない。

だが、それ故に兵士は恐怖を感じる。

彼は精一杯の抵抗を試みた。

「ぎざま……ごごがらにげばれるとでぼ……」

そういうと兵士は自分の喉を掴んでいる手を必死で叩く。

「あ～悪い悪い。下手に大声出されると不味いんで悪いがこのまま喋ってくれや」

亮真は兵士の言葉を理解したが、逆に腕の力を強めた。
力が緩んだ瞬間に助けを呼ぼうとした兵士の狙いは一瞬で崩される。亮真に油断など無かった。

「ところであまり時間が無いんでね。早いところ教えてくれないかな？」

そういうと亮真は更に右腕へ力を込める。
兵士の顔が真っ赤に染まる。

「ぐぐ……ぐ」

「言う気あるか？」

亮真の問いに兵士は必死で首を縦に振る。このまま締め上げられれば、彼は間違いなく窒息死していた。
死への恐怖が兵士の心をへし折る。

「ごのままみぎのづうろをすすみ、ながにわをどおればじろのもんにでる……」

「出て右の通路を進み、中庭を通るんだな？」

亮真の言葉に兵士が頷くのを確認すると、亮真は腕に力を入れて喉をさらに締め付けた。
頚椎をへし折るくらいに……

「ぐ……ぐぐ」

バキッ

何かが砕ける鈍い音が、亮真の腕の中から響いた。
必死で亮真の体を押しのけようと、最後の抵抗をしていた兵士の体から力が抜けていく。

「悪いな」

亮真は締め上げていた腕を喉から外すと、眼下に横たわる兵士の死体を見つめて呟く。
それは、亮真の身を仲間だと信じ、必死で心配してくれた敵兵に向けて送れる唯一の言葉だった。

亮真は再び逃げるための準備に取り掛かる。
殺した3人の懐をあさり、金貨の入った袋を取り出すと鎧の腰につけた。さらに、沸いていた湯に包帯を浸すと、亮真の兜と鎧に飛び散った血を拭い去る。
血がこびり付いたままでは、あまりに人目を引きすぎからだ。
血を全て拭い去ると、亮真はベットにカーテン、薬品棚に保管されていた布と、医務室の中にある有りとあらゆる物に火を付けた。
燃焼しやすいものを選んで火をつけた所為で、火は瞬く間に医務室全体へと燃え広がる。
亮真は黒煙が立ち込めだした医務室を出ると、大きく息を吸い込んだ。

「火事だ〜〜〜火事だぞ〜〜〜〜！」

亮真の声が王宮内に響き渡たる。

オルランドは中庭からちょうど医務室の方へと歩いてきたところで其の叫びを聞いた。

「何!?　火事だと?!」

オルランドの顔から血の気が引いた。
王宮内で火事が起こるなど、一大事もいいところだ。
王族が暮らし、行政の中心でもある王宮が燃えれば、オルトメア帝国そのものに大きな傷を受けてしまう。
彼が顔色を変え他のも当然だった。

「火事だぁ!　医務室から火が出たぞ〜〜〜!」

「火事?　火事は何処だ?」

「医務室から火が出たぞ!　直ぐに水を持って来い!」

「いや!　宮廷法術師を呼べ!一気に消火させるんだ!」

「馬鹿な!　先ずは陛下と王族方を避難させなければ!」

兵、メイド、執事、多くの人間が必死で消火作業に携わる声が響く。
誰もが、声を張り上げ右往左往している。
貴重品を運ぼうとするもの。指示を仰ぐために上司を探すもの。
消火しようとバケツを手に走る者。まさに混乱の坩堝(るつぼ)と言ってよい。
そして、それとは対照的に貴族達は自らの兵を伴い、医務室の方から中庭へと必死な形相で逃げ出して来ていた。

オルランドは中庭の花壇に足を踏み入れ、一気に医務室へと駆け出す。

丹精に手を入れられた花々を踏み潰すのは罪悪感を覚えるが、今はそんな瑣末な事を気にしている時ではなかった。

自分が向かえば、直ぐにでも火を消し止める事が出来るからだ。

だがそれゆえに、貴族の兵にまぎれていた亮真に彼は気がつかなかった。近衛兵の鎧を着た亮真が貴族達に混じって、外へ出ようとしていた事に。

（このまま、こいつらに紛れて進めば抜け出せそうだな……）

亮真にしてみればうれしい誤算だ。自然と笑みが浮かんでしまう。

火をつけ、混乱のドサクサに城門を突破する事を考えていたのだが、貴族達が我先に城門へと殺到したのは予想外だった。

亮真の目に、城門から外へ逃げ出す貴族達の姿が映る。

「ふ～。とりあえず何とかなったか……」

貴族達の流れに紛れ込む事で、亮真は兵士達に見咎められず、城を抜け出す事に成功した。

亮真は、たった今抜け出す事に成功した白亜の城を睨み付ける。

其の威容に歯向かうかのように……

第1章第9話

異世界召喚1日目【逃亡】：その1

貴族達の流れに混じる事で、亮真は城門を通り抜けることに成功した。今、彼の前に中世ヨーロッパ風の町並みが広がる。

「おお！」

おもわず感嘆の声が漏れるほど、其の町並みは整然と整理されていた。

城門から左右に５００メートル程まで立派な門構えの家々が立ち並ぶ。城から逃げ出した貴族達が其の中へ消えていくところを見ると、この地区に立ち並ぶのは貴族の屋敷なのだろう。

城門から大通りをまっすぐ５００メートルほど行くと城門が見えた。どうやらその向こう側が平民区域のようだ。

屋根の大きさが格段に小さくなっているのが見て取れる。

亮真はまず平民区域に紛れ込む事にした。身を隠すには人ごみの中が一番だからだ。

近衛兵の鎧を着ている所為か、時折どこかの貴族やメイド、鎧姿の兵士とすれ違ったが、誰も亮真を見咎める者は居なかった。

１０分ほど歩くと城門までたどり着いた。

城門は開け放たれており、跳ね橋も降ろしてあった。どうやら、有事の場合にのみ、門を閉じるようだ。

亮真は城門の左右に佇む守衛に軽く会釈をして通り抜ける。

城門を出た途端、貴族地区には無かった活気と熱気が亮真の肌を

叩く。
其処には多くの人々が行き交い、様々な露天や店が立ち並ぶ。
道は先ほど居た貴族地区のように石畳(いしだたみ)ではなく、道は土がむき出しのままで、建物も乱雑に立ち並んでいる。
人々の服装はぱっと見た限り、ローブやマントを羽織った人々。鎧を着ている者。シャツとズボンだけの者。エプロンをつけたおばさん。と服装も性別も様々だ。

「意外と人が多い……それに……武装している奴が混じってるな……」

そう呟くと、亮真の眼が一点を見つめる。人ごみの中に武装した人間が混ざっている事に気がついたのだ。
彼らは明らかに国の兵士には見えない。中にはどう見ても犯罪者だろ！というほど凶悪な面構えをした者も居る。
髪の毛の色や肌の色も黒、白、黄色と様々だ。髪の毛が青や緑なんて人間まで居た。
髪の色や肌の色で周りから浮いてしまう事も考えられただけに、亮真はホッと胸を撫で下ろす。
これだけ外見に統一性がなければ、亮真の髪や眼の色が問題になる事は、まずないと思われたのだ。

「さてと。とりあえず服だな……」

亮真がそう呟いた後に、彼の腹が空腹だと抗議の声を上げた。
なにしろ、昼飯を食べに屋上へ向かう途中でこの世界へ召喚された為、彼はまだ昼飯を食べていない。
だが幾ら空腹であろうと、先に服を調達しなければならない。近衛兵の鎧兜のままでは、目立ちすぎる。
不満の声を上げる腹をさすりながら、亮真は辺り看板へ眼を走ら

る。
大通りを歩きながら、周囲を見回す亮真の目にドレスの絵が描かれた看板が飛び込んできた。

メグ・レスターは其の日、不思議な客の応対をした。
午後1時を少し過ぎた頃だっただろう。彼女が勤める洋服店に其の客は入ってきた。

「いらっしゃいませ！」

いつもどおりの接客をしようと、評判の元気のよい声で出迎えたメグの前に、近衛兵の鎧兜を着けた男が立っていた。
もちろん、鎧兜を着たまま買い物に来るお客は普通に居る。
だが、近衛兵の鎧を着たままで来る客は初めてだ。
冒険者や傭兵と違い、国の兵士が買い物をする際にはたいてい私服に着替えてくるからだ。
（買い物以外の用事で来たのかしら？）
メグが思ったのも当然である。だが、陳列された洋服を眺めているのを見る限りでは、お客にしか見えない。

「何をお探しですか？　よろしければ商品のご説明をいたしますが？」

男を不振に思いながらも、メグは勇気を出して声を掛ける。すると、ごく普通に返事が返ってきた。

「普段着として使える物を上下一式、下着とフード付きのマント、あと革のベルトが欲しいんだけど」

（ずいぶん丁寧なしゃべり方をする人ね？　この人近衛兵の鎧を着てるけど？）

男の口調にメグは違和感を感じた。

普段、この店に来る客の殆どは威張り腐った横柄な奴ばかりだ。

特に、貴族や兵士は其の傾向が強い。

だが、亮真にしてみればごく普通に受け答えをしたに過ぎない。

流石に、平民に対する兵士達の態度までは予測できる筈もなかった。

「色にお好みはございますか？」

「黒でお願いします。」

「かしこまりました。ご用意いたします。少々お待ちくださいませ」

別段、普通の客と違うところも無い。

普通に欲しい商品を告げ、好みの色を言う。

礼儀正しいところが、少し変わっていると言えば変わっていたが、メグは気にしすぎた自分が可笑しかった。

（洗濯でもして鎧以外に着る服が無かったのかも？　あ！　いけないサイズを聞くの忘れちゃった……まぁ良いか。大きめのサイズを幾つか揃えて持っていけば）

そんな事を思いながら、要望の品を3つのサイズ毎に揃えて戻る。

「お待たせいたしました。こちらでいかがでしょうか？」

「それでいいです。包んでください」

（あれ？　この人サイズを言わないけど？）

着る物を購入するときに試着をしないで買う奴はそうは居ない。

ましてやサイズの確認もしていないのだから、メグが首を傾げるの

も当然だった。

「あのぉ……サイズはどうされますか？」

メグは幾分控えめに尋ねた。

「あ～。サイズね……一番大きいサイズのでお願いします」

如何にもさっさと買ってしまいたいと言う投げやりな態度だ。かなり怪しい態度である。だが、客が買うというのだからと、メグは不審を振り払った。

「かしこまりました。１０００バーツになります。ただいまお包みますので少々おまちくださいませ」

そう言って頭を下げ、メグがカウンターへ向かおうと後ろを向いた時、男が声を掛ける。

「あ～ちょっとまって。急いでるんで金を預けるから、一緒に会計してきてくれないかな？」

そういうと、購入するという服の上に貨幣の入った袋を置く。

「足りなかったら言ってくれる？」

（どっかの貴族のお坊ちゃんなのかしら？　でも近衛兵の鎧を着ているし？？？）

大抵こんな鷹揚（おうよう）な買い方をするのは貴族と決まっている。

（どう見ても貴族とは思えないのよねぇ？　でもま～いいっか！　お金は払ってくれるみたいだし！）

メグは考える事を止めた。
金払いの良い客は例え怪しくても良い客だ。そんな思いが彼女の心に浮かぶ。

「かしこまりました。少々おまちください」

再び頭を下げ、メグはカウンターの方へ向かった。

「ふ～」

洋服店を出ると亮真は、人目も憚(はばか)らず大きく息を吐き出す。彼には、買い物でこれほど緊張した覚えが無かった。
メグに「お会計１０００バーツです！」と言われて、貨幣を何枚出せば判らず、とっさに袋ごと渡して切り抜けた時には心臓が破裂しそうだった。だが、とりあえず目的の物は揃えられた。

「後は時間との勝負か」

そう呟くと、亮真は再び大通りを城外へ向かって歩き出した。

「おばちゃ～～ん。本日のお勧めっての１つ～」

大通りの裏側、薄暗い路地に其の店はあった。
店の名前は海鳴り亭。一見さんお断りのような、いかにも地元に密着した感じの店だ。
だが、汚い外見とは裏腹に中は綺麗に掃除されており、客層も男あり女あり子供ありとかなりアットホームな店のようだ。
時間は、午後3時を少し過ぎた辺りだろう。

亮真はようやく昼飯にありつく事が出来た。
彼はさっきメグの店で買った黒のシャツとズボンに着替えている。

（なんとか間に合ったか……）

亮真は城外から戻ってきた時に城門のところですれ違った軍隊と、其れを率いていた人間達のことを思い出した。

亮真は一度鎧を着た状態で城外へ出た。自分が城の外に逃げ出したと思わせるためだ。

本来なら、わざわざ戻ってくる事無く、どこか遠くへ逃げるのが正解だろう。だが、地理も判らず装備も無い状況で、一体どうすると言うのだ。

最低限の情報を取得した上で、どこに向かえば良いのか、其処はどれくらいの距離でどの様に向かえば良いのかぐらいは確認しなければ、其れこそ死にに行くようなものだ。

それに、亮真は馬に乗れない。現代人の殆どが乗馬の経験を持たないように、亮真も馬に乗った経験など無い。

街中で馬車を見かけたから、当然、追手には騎兵が含まれてくるだろう。

徒歩と騎馬。いずれ追いつかれるのは目に見えていた。

だから、亮真は一度鎧のまま城外に出たのである。

帝国の連中は亮真の顔を知らない。

唯一の手がかりは近衛兵の鎧兜だけだ。だからこそ、城外に近衛兵の格好をした者が出て行ったと知れば其れを追うはずだ。

懸念は追手の準備が早く終わり、亮真が城を出る前に捕まる事だったのだが、天は亮真に味方したようだ。

城外の人目に付かない木陰で鎧兜を脱ぎ捨て、買ったシャツに着替える。鎧兜は土の中に埋め、城内に戻ろうとしたところで追っ手とすれ違ったと言う訳だ。

「はいよ！　お待たせ！」

威勢の良い声と共に、テーブルの上に牛肉のから揚げに甘酢を掛けた物、白身魚のフライ、サラダ、パンと結構なボリュームのランチセットが並べられた。

早速、パンと千切り、から揚げを頬張りながら、再び亮真は先ほどすれ違った追手を思い出す。

（かなりの切れ者がいるな。まさか追跡メンバーを騎馬だけで構成してくるとは思わなかったぜ……）

亮真が城門をくぐり食事をするための店を探そうとした時、彼らは城の方からやってきた。

先頭には４人の男女が居た。２人は既に見知った顔だ。

（ロルフとセリアだったな……）

歴戦の武人としての風格が漂うロルフ。

冷徹な知性を感じさせる法術師セリア。

そして、気の弱そうな名前のわからない青年。

だが、此の３人は侮れないが怖いという程でもない。

（問題はあいつだ……）

金髪碧眼の女。

亮真の見立てでは、女でありながらロルフとほぼ互角の武力を持っている。

自分も武術を修行してきた為、他人の力量を見抜く眼は培っていた。

（しかも、あの目……あれは単純に武人ってだけじゃない……あれは……）

あの冷静さと知性にあふれた目。セリアと似た空気を纏っている

が、彼女には一つ決定的に違うところがある。
経験に裏打ちされた自信。
セリアが未熟な軍師なら、彼女は間違いなく円熟した将軍だ。
幾多の修羅場を潜り抜けてきた目。それもロルフのように直接戦場で戦ってきた経験だけではなく、もっと深い戦略レベルの修羅場を。

白身魚のフライを頬張りながら亮真は今後について考える。
（ここから逃げるのがかなり難しくなってきたな……）

これが亮真とシャルディナ、後に西方大陸の覇権をかけて戦う二人の最初の接点だった。

第1章第10話

異世界召喚1日目【逃亡】：その2

「はいよ！」

海鳴り亭の女将が亮真のテーブルに大ジョッキを2つ置いた。

並々と注がれた泡立つ琥珀色の液体が、テーブルの上に染みを作る。

「？……頼んでないけど？」

亮真はジョッキと女将を交互に見た。

「店の奢りだよ！　飲んでおくれ！」

そういうと女将はテーブルの椅子に腰掛ける。

「あんた見かけない顔だけど、旅の人かい？」

人懐っこい丸顔で亮真へ気さくに話しかけてきた。

「暇なんですか？」

亮真はどっかりと腰を落ち着けた女将に聞いた。

「まわり見てみな？　客はあんただけさ」

女将の言葉に従って回りを見れば、いつの間にか客は亮真だけだ

った。
　亮真が店に入った時には、まだ数人の客が居たのだが、どうやら帰ったらしい。
「時間も時間さ。ちなみにうちは3時でランチを終えるんだけどね。あんたが2時58分に来たから店を閉められないのさ」
　そう言うと女将は、自分の前においたジョッキを勢い良く呷(あお)る。
「厨房の連中は先に休憩に入らせたけど、後片付けが残ってるからね。とはいえ、あんたが食べ終わるまであたしも一人で突っ立ってもしょうがないからね。ま～おばちゃんの話相手をしておくれ。こいつは其の手間賃だ」
　そう言って、女将はジョッキを亮真の前に押し出した。
「そうですか。すみません。お手間を取らせて」
「気にしない気にしない。それで?あんた旅の人かい?」
　女将の口調は気さくで人当たりが良い。話好きなのが見て取れる。
（せっかくだ。いろいろ教えてもらうとするか）
　亮真は考えてあった身の上話をする事にした。彼に必要なのは情報だったから。
「ええ。そうなんですよ。ここは初めてで……」
「へ～帝都オルトメアは初めてなのかい。一人かい?」
「いえ。父と一緒だったんですが……先日、父が病で亡くなりまし

て……」

そう言うと亮真は顔を伏せた。

女将は不味い事を聞いたと思ったのだろう。慌てて言った。

「あ～。そりゃ悪い事聞いたね……」

亮真は伏せていた顔を上げて微笑んだ。

「いえ。病気じゃ仕方が無いですよ」

「そうかい……病気だったのかい……ならあんた、今後どうするんだい？故郷に帰るのかい？」

「帝都で暮らそうかと思っています。ずっと父と一緒に旅から旅の暮らしをしてきましたから、この辺で腰を落ち着けたいと思っているんです」

（さ～ここからが本題だ。不審に思われないよう注意しながら話さないとな）

亮真は自らの求める情報を聞き出す切っ掛けをジッと待った。ここであせれば、女将に不審がられると理解していたから。

女将はすっかり亮真の話を信じた。もともと人が良く、他人を疑わない上に、亮真の話は如何（いか）にもありえそうな話だったからだ。

「そうかい。それであんた今後は何して暮らして行く気だい？」

（きた！）

亮真は待ちに待った話題が来た事に喜んだ。

何しろ、生活していくには働かなくてはならない。だが異世界人の亮真にとって、この世界で就ける職業が判らなかったのだ。
しかも一般常識に近い情報な為、下手な聞き方をすれば不審がられる。
相手に顔を晒しているので、下手をすると帝国に亮真の顔がバレる恐れがあったのだ。

「それが……正直に言って、今まで父の仕事を手伝った事がある程度で特に何が出来るって訳でも……せいぜい剣を人並みに使えるって程度で……」

「そうかい。ま～あんたの歳じゃ～職人や商人になるのは難しいだろうね～」

亮真の顔を見ながら女将が一人頷く。

「商人も駄目ですか？」

「駄目じゃないけど厳しいと思うよ？どっちも子供の頃から仕込む必要がある仕事だからね～」

「そうですか……まいったなぁ」

亮真は残念がる振りをする。

「あんた。剣が使えるって言ったよね？　なら無難に傭兵か冒険者かね～～」

「やっぱりそうですか……ただ、あれってどうやれば成れるんですかね？」

「なんだい？　知らないのかい？？」

「ええ。あんまり詳しくは……もしご存知だったら教えていただけますか？」

亮真の丁寧な口調は相手の警戒心をほぐし、助けてやろう教えてやろうという気持ちにさせる。

もっとも礼儀さえ守れば、誰が聞いても女将は丁寧に教えてくれただろうけど。

「詳しいって程でもないけどね。うちには冒険者や傭兵も酒を飲みに来るんでそれなりにはわかるよ？」

「是非お願いします」

そう言うと亮真は頭を下げた。

「と！言っても大した事じゃ無いのさ。ギルドに行って固体情報を登録すれば終わりだよ」

「あれ？　身元調査とか何とかが必要だって聴いた気がしたんですけど……？」

亮真が気になっていたのは此処だ。

異世界人である亮真にはこの世界の戸籍も身元保証人もいない。

もしこの辺が必要なら正直打つ手は無い。

強盗街道一直線だ。

だが、女将さんの返事はあっさりした物だった。

「冒険者になるのに身元保証人は必要ないよ。必要になるのは職人や商人、あとは軍人になる時かねぇ。身一つでギルドに行けば向こうで登録手続きをしてくれるはずだよ」

亮真に満面の笑みが浮かぶ。

とりあえずは就職出来そうだ。

「本当ですか！　いや～女将さんに聞いて良かったな。俺が前に聞いた時には身元保証が必要だとかって聞いた覚えがあって！　勘違いだったんですね」

亮真はそういって大ジョッキのエール酒を勢い良く呷った。

「きっと商人か何かに成る時の話と勘違いしたんだねぇ。ちなみにギルドは店を出て左の路地を大通りに向かって行けば直ぐに見つかるよ」

「ありがとうございます！　女将さん。これから早速行ってみます」

「そうかい？　なら報告がてら晩御飯を食べにおいで」

「はい！　それじゃ～お会計を」

「あいよ！　Ａランチ１人前２５バーツだよ」

そこで亮真は固まってしまった。別に金がない訳じゃない。問題なのは別のこと……

（しまった。貨幣価値が判らん……）

さっき服を買った時には、袋ごと預けるという機転でなんとか切

り抜けたが、話の流れ上、此処で其の技は使えない。
仕方が無いので、亮真は一番価値が高いと思われる金貨を1枚取り出してテーブルに置いた。

「ちょ……ちょいとあんた。こんな店で1万バーツなんて出されてもおつりが無いよ……」

テーブルに置かれた金貨を見て、女将が呆れ顔に言った。

「１００バーツ銀貨でならおつりが出せるけど無いかい？」

（やった。貨幣価値がわかったぞ）
金貨１枚＝１万バーツ
銀貨１枚＝１００バーツ
（てことは銅貨１枚＝１バーツか？）

「あっと……ごめんなさい。ちょっと待ってくださいね」

慌てる振りをして、別の袋を懐から取り出した。

「こっちにあったかなぁ……お！　ありそうだ。銅貨２５枚ですよね？」

「そうだよ。２５バーツだよ」

「あ！　あったあった……すみません。細かい貨幣はこっちに分けてたんでした」

そう言いつくろいながら、テーブルの上に銅貨２５枚を置く。

「はい丁度だね！　毎度あり」

前掛けのポケットに銅貨を突っ込むと、女将さんは亮真に聞いた。

「あんた、カードは持っていないのかい？　うちでも使えるから次回はカードを使いなよ」

（カード？　クレジットカードのことか？）

知らないとは言えず、亮真は女将の話に合わせた。

「いや～実はなくしちゃって困ってるんですよね……現金でいくらか持ってるんで当座は困らないんですけど……」

「おや。そうなのかい。ま～登録者にしか使用できないから預金は安心だけど不便だねぇ。再発行してもらったらどうだい？　ギルドの並びに銀行があるよ？」

（やっぱり銀行か。つうか銀行があるのか？　この世界に……）

亮真はせっかくなので女将に聞いてみた。

「再発行って身元証明要らないんでしたっけ？」

「要らないよ。作る時と同じで銀行で申請して、固体情報の照会さえすれば直ぐにくれるよ」

「わぁ。そうだったんですか！　其れはしらなかったな～。ありがとうございます！」

そう言って亮真は女将さんへ頭を下げた。

「気にしない気にしない！　また食べにおいで」

女将に見送られ、亮真は店を出ると大通りへ向かって歩き出した。

（まずは銀行だ！）

海鳴り亭の女将さんに聞いたとおり路地を曲がり大通りに出ると、左手に貨幣の積み重なった看板と、甲冑を着た兵士の絵が描かれた看板が目に入った。

（判りやすい看板だな……絵とは）

そう思いながら、亮真は銀行の中へは入っていった。

７つも貨幣の詰まった袋を持ち歩くのは、正直なところ結構重い。特に追手が居る状況では、少しでも身軽になりたい。

そんな訳で、亮真は冒険者ギルドに向かう前に銀行へと向かったのだった。

「いらっしゃいませ。本日はどの様なご用件でしょうか？」

銀行の入り口をくぐり、ロビーへと入った亮真に中年の男が声を掛けてきた。

まるで日本の銀行のような応対だ。

上下黒のスーツにレースの付いたブラウス。首には赤いループタイを結んでいる。

（スーツ？　なんでスーツなんか着てるんだ？）

亮真にはどうもこの世界が良く判らなかった。

中世ヨーロッパ風なのかと思えば、やけに現代風なところもある。

スーツやカードなどはまさにそうだ。

（まったく違うところと、ヤケに似てるところと……えらい対象的だな……）

「あの？……お客様？」

男は亮真の視線を感じて、ややうろたえながら聞いてきた。

「あぁすみません。こういうところ初めてで……口座の開設をお願いしたいんですけど」

男は大きく頷き、亮真を先導した。

「こちらの受付になります。お客様」

「ありがとうございます」

「口座開設のお客様です。後は、お願いしますね」

そう受付の女性へ言い残し、て男はその場を離れた。

「いらっしゃいませ。口座開設でございますね？」

赤いリボンに紺のジャケット。制服に身を包んだ女性がカウンターのに座って居た。

極普通の受付嬢だ。

本来ならば驚きに値しない……此処が異世界でさえ無ければ。

「はい。初めてなので良くわかりませんが、よろしくお願いします」

亮真の良いところは判らない事を素直に聞けるところだ。

下手に知ったかぶりをするより、ずっと安全なのだ。

「かしこまりました。恐れ入りますがお名前のご記入をお願いいた

します」

そう言うと彼女は、羊皮紙とペンを差し出した。
（なんで羊皮紙なんだ？）
亮真は湧き上がる疑問を押し殺して、ペンと羊皮紙を受け取る。

お名前＝御子柴　亮真
ご年齢＝１６

記入欄は名前と年齢だけ、後は住所欄も何も無い。
特に意識せず自分の名前と年齢を記入し、受付の女性に戻した後、亮真はあることに気が付いた。
（あれ？　文字って……日本語だったよな？　文字は共通なのか？）
だが、受付の女性はまったく気にせず作業を行う。
少なくとも、日本語は通じるらしい。

「お名前は御子柴亮真様。年齢は１……６歳。記入に間違いはございませんか？」

受付嬢の視線が亮真の顔に刺さる。彼女には亮真が１６歳には見えなかったのだろう。
彼女は不審そうに亮真の顔を見えげた。

「ええ。見えませんか？」

大抵、自分の年齢を相手に言えば驚かれることが判っているので腹も立たない。
（どうせ俺は老け顔さ……）

「それとも１６歳だと口座が作れなかったりします？」

亮真の問いに彼女が首を振る。

「いいえ。年齢は何も問題ございません。その……お客様があまりにも落ち着きの有る方なので、年齢を見てビックリしてしまって。大変失礼いたしました。」

「ああ。良いんですよ。慣れてますから。なら口座の開設をお願いします」

「かしこまりました。カードを作成いたしますので少々お待ちくださ い」

そう言うと彼女は、名刺程の大きさの紙になにやら記入を始めた。その後、その紙を透明な板では挟む。

（ラミネート加工か？？）

どうにも文化水準が高いんだか低いんだか判らない世界だ。

「おまたせいたしました。ではこちらの球に手を置いてください」

カードをガラス球の台座に開いた投入口に入れ、亮真の方へ押しやった。

「こうですか？」

亮真がガラス球に手を置くと球が瞬き出す。

「はい。結構です。これでこのカードには御子柴様の固体情報が登録されました。今後カードを紛失された際には最寄の銀行に御出でくだされば再度お作りいたします」

そういうと、彼女はカードを亮真に差し出した。

「もう。終わりですか？」

「はい。口座の開設は以上になります。他に何か御用はございますか？」

「じゃぁ。この口座に預金をしたいのですが」

「ご入金ですね。ありがとうございます。ではこちらにお預けになる貨幣と口座カードを入れてください」

そういうと、彼女はカウンターの上につり銭皿を置いた。
亮真は貨幣の入った袋から金貨１０枚銀貨２０枚銅貨５０枚を抜き出し、残りを全て皿に置く。

「はい、ただいま金額を確認いたします。少々お待ちください」

そういうと彼女は袋から全ての貨幣を出し、１０枚ずつ重ねだす。
（金額の確認は手作用なのかよ……）
カードが存在するくせに、自動で金額を確認するような機械は存在しないらしい。
亮真の嘆きを余所に彼女は貨幣の山を作り続けた。

ざっと２０分は待たされただろう。
３回の金額確認の後に彼女は言った。

「大変お待たせいたしました。金貨２３枚銀貨５８枚銅貨７３１枚ですので合計で２３６５３１バーツのお預けになります。金額に間

違いはございませんでしょうか？」

（海鳴り亭で食べたランチが２５バーツだろ？　とりあえず結構な額だな）

しばらくは食事代にも宿代にも困らなくて済みそうだ。

「ええ。お願いします」

「かしこまりました。それでは２３６５３１バーツ。確かにお預かりいたします」

そういって彼女はカードをつり銭皿の上に置き、亮真に頭を下げたのだった。

当座の生活費は有るが、働かなくては生きていけない事に変わりは無い。

亮真は銀行を出て隣のギルドへと入っていった。

扉の向こうにはいくつかのカウンターがあり、受付嬢が座っている。

亮真は空いているカウンターの一つに腰掛けた。

「いらっしゃいませ。本日のご用件は？」

受付嬢が対応する。

「冒険者の登録と、仕事の紹介をお願いしたいのですが」

「かしこまりました。恐れ入りますが、銀行に口座はお持ちでしょうか？」

「これで良いですか？」

亮真はさっき作ったばかりのカードを出す。

「はい。結構です。最近では報酬の支払いをカードで行う事になりまして、新規で登録される方には事前に口座の作成をしていただく事になってるんです」

「へ～。そうなんですか。特に何用意しなくて良いって聞いてたから危なかったな」

「ええ。結構お持ちにならない方もいらっしゃいますね。其の時は作成した後に来て頂いております」

そう言いながら彼女はカードをガラス球の台に開いた投入口に入れた。

「はい。では登録は終了です。御子柴さん」

「え？」

「銀行のカード情報とギルドの登録情報は共有する事が出来るんですよ。そのため銀行のカードをお持ちになってくれれば、それにギルド用の情報を読み込ませるだけで済むんです」

そう言いながら彼女は、なにやらが紙の束を取り出して調べ始めた。

「ええっと、一緒に依頼も受けられるんですよね？」

「はい」

亮真は頷く。

「ギルドのシステムってご存知ですか？」

亮真は首を振った。

「じゃ～ご説明しますね。判らない所があったら質問してください」

そう言うと彼女は一枚の紙を亮真の前に出した。

「ギルドに登録いただいて直ぐの初期状態はＬＶ１です。ギルドランクはシングルＩ、最下級になります。ランクはカードの表面に記載されます。冒険者としての身分証も兼ねるので大切にしてくださいね」

彼女は紙の一番下に書かれたシングルＩ（アイ）の欄を指差した。

「簡単に言うとＬＶは戦闘経験を、ギルドランクはギルドで依頼（クエスト）を受けてどれだけ成功させたかを判りやすくしたものです。ちなみに戦闘経験というのは、どれだけ他の生物の力を取り込んだかによります。力の吸収に関してはご存知ですか？」

「ええ。他の生物を殺したときに其の力の一部が自分の物になるってことですよね？」

「そのとおりです。単純計算でＬＶ１ですと人間の持つ平均的な力を持っており、ＬＶ１０なら其の１０倍の力を持っていることに成

ります。冒険をする上ではあまり関係が無いのですが、傭兵を主な仕事にする場合は、この値で基本報酬が上下します。」

「なるほど～。ＬＶ１０なら１０人分の給料がもらえるって事かな？」

「ま～基本的にはそういうことです。次にギルドランクですが、これは依頼（クエスト）を受けて成功させる毎に依頼ごとに決められた達成値（クリアポイント）を貯めることでランクアップしていきます。よりランクが高ければそれだけ報酬の良い依頼（クエスト）に就けます。請け負える仕事は自分のランクと同じかそれ以下です」

亮真は紙に書かれた注意事項に目を引かれた。

「この注意事項というのは？」

「はい。依頼（クエスト）は一度に何個請け負ってもかまわないのですが、依頼（クエスト）には期日があります。この期日を超えた場合は賠償金が発生し、達成値（クリアポイント）が下がる事になります」

「ランクが下がる事もあるってことかな？」

「そのとおりです。ランクは達成値（クリアポイント）を１００溜める毎に上がります。御子柴さんの場合ですとダブルＩ（アイ）→トリプルＩ（アイ）→シングルＨ（エイチ）という順番で上がります。もし達成値（クリアポイント）を１００貯めてダブルに成った後で依頼（クエスト）を失敗し１００を切る場合はシングルＩに落ちるという事です。ただし……」

彼女の指が今度は免責事項欄を指差す。

「依頼（クエスト）の達成条件や内容に差異や不備がある場合、請け負った者が例え其の依頼（クエスト）を達成できなくても賠償金は発生しません。物によっては依頼者へ賠償請求をする事も出来ます。そういった場合はギルドにご連絡いただければ対処しますので」

（派遣の仕事みたいだな……）

「とりあえず以上で簡単な説明は終了です。何か疑問な点は有りますか？」

「いえ」

亮真は首を振った。

「では、御子柴さんの初仕事をお選びしますね～」

彼女は再び引き出しから書類の束を取り出し、亮真の前に出した。紙の一番上にはシングルⅠ（アイ）ランクと記載されていて、その下には無数の仕事が登録されていた。

「えと。御子柴さんはどういう依頼（クエスト）をやって行きたいですか？　冒険者？　傭兵？」

「正直どっちでも……」

（ほんとに面接かなんかを受けるみたいだな……）

亮真は高校受験の時に受けた推薦の面接を思い出した。

自分の将来設計を訪ねられるという点では同じ事なのかもしれない。

「う～ん。戦闘技術に自信があるなら傭兵系の仕事がいいかなぁ」

そう言うと彼女は、幾つかの欄に赤丸をつけた。

「いま丸を付けたのが戦闘がメインな仕事ですね～。野犬討伐（ワイルドドック）とか野蜂討伐（ワイルドビー）ですね。期間は特に無くて、終了報告時までに討伐した数×銅貨3枚ですね。達成値（クリアポイント）は討伐数×1になってます」

亮真は考えていた事を聞いた。

別の町へ行く様な仕事だ。たとえば誰かを目的地まで護衛するとか、物を運ぶとかの。

「他の町に行くような仕事って有りますか？」

「配達系ですかね～。護衛系はI（アイ）ランクだと無いんですよ～～」

彼女は残念そうに首を横に振る。

「護衛系は依頼人の命に直接係るので、一定水準の能力を持つと認定された人間しか受けられないんですよ。ランクでいえばcランク以上ですね」

「じゃ～其の配達系って奴で、出来れば国外に出るのなんて有りますか？」

「う～ん……I（アイ）ランクで長距離の配達は無理ですねぇ。せいぜい隣町への配達ぐらいしか受けれません」

ゲームと違って、さまざまな制限が有るようだ。

亮真の目に彼女の後ろの壁に貼り付けられた地図が見えた。

「ちなみに、其の隣町で探せば其の先へ行く依頼とかありますかね？」

「タブン、あると思いますよ？　配達系なら」

「あの、申し訳ないんですけど地図ってお借りできますか？」

受付嬢は怪訝な顔をしたが、引き出しから折り畳んだ地図を出し、カウンターの上に広げてくれた。

「え～～と。オルトメアってどの辺りでしょ？」

「此処が帝都オルトメアですね」

彼女の指が地図に中央部と南部の境界辺りにある大きな点を指し示す。太く黒い文字で帝都オルトメアと記載されている。

しかもよく見れば、太く赤い線が中央部と西部の一部を囲っている。

おそらくこの赤い太線がオルトメア帝国の領土をあらわしているのだろう。かなり広い。

（ガルイーク。メルフェレン。ギルダス。オイート……向かうとしたらこの四つの中から……だな）

亮真の眼が、４つの町へと吸いつけられた。どれも、帝都の近郊に存在する町だ。

「メルフェレンへ行く配達の仕事ってありますか？」

亮真の問いに、受付嬢が書類の束に目を走らせた。

「ちょっと待ってくださいね……え～と。これはランクが足りないし……こっちは請負人が決まってるのか……う～ん……あ！　ありますね！　手紙の配達です。報酬は銅貨３０枚。達成値（クリアポイント）は５になります」

新人で有る亮真が請け負える仕事は余りないのだろう。まして、届け先の町を指定したのだ。そう都合よく仕事が舞い込んでいるとは限らないし、既に、請け負う人間が決まっている場合も考えられた。

だが、亮真は運が良かったのだろう。

書類の束を隅々まで探した受付嬢は、渾身の笑みを浮かべて亮真へ視線を向けた。

「それをお願いします」

亮真は直ぐにその依頼（クエスト）を受ける。

こういった場合、ものをいうのは決断力。迷っている暇などなかった。

「はい。ではこれを受けると」

彼女はガラス球の置かれた台につながれたガラス板になにやら書き込む。するとガラス球が瞬いた。

「はい。終了です。達成期限は３日以内です。メルフェレンのギルドに手紙を届けていただいた段階で終了となります。他に何か依頼（クエスト）を受けますか？」

「じゃぁ、さっきの討伐系の依頼で受けられるのをを全てお願いします」

「はい。では野犬討伐（ワイルドドック）と野蜂討伐（ワイルドビー）、それに野兎の討伐（ワイルドラビット）ですね。こちらは期限がありませんので、ある程度のところでギルドに報告してくださいね」

「判りました」

「あ～そうだ。言い遅れましたが依頼（クエスト）の報告は特定の指定が無い場合、どこのギルドで行っていただいても結構です。では、がんばってくださいね」

受付嬢は満面の笑みを浮かべて亮真を励ますと、頭を下げた。

「はい。ありがとうございました」

軽く頭を下げて亮真はギルドを後にする。

亮真が依頼（クエスト）を受けたのには理由がある。

彼は帝国から追われる身だ。少しでも早く国外へ出たい。

だが問題がある。

追っ手が掛かっている事を考えると、町の移動にも危険が付きまとう。だからこそ何か理由が欲しかったのだ。

街道を歩く理由が。

其の点、手紙の配達という仕事は絶好の隠れ蓑だ。

そして東に位置するメルフェレンへ向かう依頼（クエスト）を選んだのにも理由がある。

ギルドで見た地図によれば、帝都は領土の南東に寄った部分にあった。つまり北と西は帝都から国境までかなりの日数が掛かる事になる。

帝都から一番近いのは南の国境だが、追っ手の指揮官がキレ者だった場合、予測される危険性がある。

色々考え合わせ、東の国境を目指すのが一番安全だと判断したわけだ。

もちろんこの判断が正しいかどうかは、行って見なければ判らないのだが……

第1章第11話

異世界召喚1日目【逃亡】：その3

ギルドを後にした亮真は、約束どおり海鳴り亭へ足を向けた。
女将さんへ、登録が無事に済んだ事を報告する為だ。

「あ～あんたかい。登録は出来たのかい？」

カウンターに案内された亮真の前に水の入ったグラスを置くと、女将は嬉しそうに尋ねた。

時間は午後5時過ぎ。
夕食時にはまだ時間が早い所為か、店にはまだ客が殆ど入っていない。

「ええ。女将さんに聞いて良かったですよ」

そう亮真が言うと女将さんに笑顔が浮かんだ。

「そうかい！　それは良かったねぇ。あたしが教えた甲斐が有るってもんだ。……ところで夕食はどうする？　ランチを食べてから、そんなに時間経ってないけど？」

女将さんは、壁に掛けられた時計に視線を向けて問いかける。

銀行での口座開設も、ギルドでの登録作業も、さほど時間が掛からずに終了してしまった。
人並み外れた体格を誇る亮真も、さすがにランチを食べてから1

時間ちょっとでは、夕飯を食べられるはずも無い。

「う～ん。さすがにちょっと……」

亮真は言葉を濁して自分の腹をさする。

彼の腹の中では、まだ、魚のフライが我が物顔で占領している。

「ま～そうだろうねぇ」

うんうんと頷きながら、女将さんはふと亮真の服装に目を向けた。

亮真の格好に何か疑問があるらしい。

「ところであんた。荷物なんかは宿に置いてるのかい？」

「え？　いえ特には……」

「え？　あんた其の格好で冒険者やる気かい？　荷物とかどうするんだい？　それに武器もないじゃないか？」

大抵の冒険者は、着の身着のままで、居る事が多い。

比較的高価な装備品は、宿屋に置いて置くより、身につけていたほうが安全であるし、不測の事態にも対応が出来る。

だから、女将さんが不審の目を向けたのは当然だった。

ここで亮真自分の格好へと眼を向けた。

シャツとズボンにマントを羽織った格好。きわめて一般的な服装と言える。ただし、街中の住人ならばだが。

（そうか……素手でやるつもりだったけど失敗したな……それに荷物か……隣町まで半日ってところだから、夜営の準備も要らないと思ってたんだけど……確かに準備しておいた方がいいか……）

「あぁ。武器は後で見に行こうと思ってたんですよね。荷物の方はもともと大して無かったし、ギルドで聞いたら初心者が請け負える依頼（クエスト）って町の近くばかりらしいんでまだいいかと思ってたんですけど……」

女将は呆れながらもどこか納得した顔をした。

「まぁ新人だしそう思うのも無理ないけどね～」

「マズイですか？」

亮真の言葉に女将はため息混じりに話してくれた。

「冒険者の仕事は危険なものなんだよ？冒険者や傭兵の死亡理由で一番多いのは何だと思う？」

「なんです？」

「油断して格下の相手に殺されるのさ……確かにIランクの依頼（クエスト）は難しいものではないさ。女子供でも物によっちゃ可能だよ？でもね、冒険は何があるか判らないんだ。最悪に備えて出来る準備はしておかなくちゃいけないのさ……死にたくないのならね」

亮真は考え込んだ。

（俺はまだ日本に居るつもりだったんだな……そうだ！確かに俺は此の世界を知らない。追っ手もいるし何があるか判らないのに……女将さんの言う事はもっともだな……）

「すみません。女将さん。まだ心構えが足りなかったようです」

亮真は女将へ深く頭を下げた。

「よしとくれ。良いんだよ！……うちの店は昼は此の界隈の住人相手の定食屋だけど夜は傭兵や冒険者も相手にする酒場にもなるのさ。其の所為で多くの冒険者を見てきたよ……そんな中にはあたしに冒険へ行って来ると言って出て行って、帰ってこなかったりする子が居るのさ。理由を聞くと近場だと思って毒消しをもって行かなかったとか、魔法薬（ポーション）の補充を忘れてたとかそんな理由でね……やりきれなくてね～～～」

そういうと女将さんはエプロンで浮かんだ涙を拭う。

今まで彼女は多くの冒険者を見てきたのだ。

その経験から善意で言ってくれた忠告で有ることは、彼女の表情を見れば一目瞭然だ。

亮真は忠告を聞きいろいろと準備をする事に決めた。

（俺は何も判っちゃいない。なら忠告には従うべきだ……ここは地球とは違うのだから）

「じゃ～まだ時間もあるので先に準備してから夕食（ディナー）を食べに戻って来ますよ」

亮真の言葉を聴いて女将の表情が明るくなった。

「そうかい？……うん！その方が良いよ！……アンタ店の場所は判るのかい？魔法道具屋は大通りのギルドの先だよ。其処で魔法薬（ポーション）を買えば良い……武器鍛冶屋はこの店をでで右に曲がってそのまま進むとあるよ。そこの親父に海鳴り亭の女将に聞いてきたって言えば親身になってくれるさ」

まるで母親の様に親身になってくれる女将の言葉に見送られながら、
亮真は店を出た。
自らの命を託す武器を求めに。

「おいオメエ何が欲しいんだ？」

海鳴り亭の女将より紹介された武器鍛冶屋は直ぐに見つかった。
外見は薄汚れていたが、店構えはかなり大きい。
店の裏のほうには大きな煙突が立っていて、其処から黒煙が噴出していた。

亮真が店内に入り陳列された槍や剣を眺めていると、カウンターに座った髭面のオヤジが亮真に声を掛けてきた。

「えぇと。なにか手頃な武器を……」

亮真の言葉に悪意は無い。
純粋にこの店に有る武器の中から、自分が扱えそうな武器を買いたいという意味で手頃な武器という言葉を使っただけだ。
だが亮真の言葉を聴いた瞬間、親父の顔色が変わった。

「俺が作った武器にも、俺が目利きして仕入れた武器にも手頃なんて武器はねぇ～～～～！帰りやがれぇ！」

親父の怒声が店内に響く。
ものすごい剣幕に亮真は圧倒されながらも必死で言った。

「す……すみません。海鳴り亭で聞いて来て……」

そう亮真が言うと親父の表情が幾分和らいだ。

「なんだおめぇ。海鳴り亭の女将さんの紹介かい」

「は。はい！」

「ならお前は初心者だな？いや……だが其の面で新米なのか？」

親父が疑いの目を向けた。
まぁ亮真の体格は見事なものだし、顔もフケ顔だ。
新人と言われても、すぐには信じられなかったのだろう。
だが亮真は慌てることなく親父の言葉を肯定した。
年齢に関して疑われるのは何時もの事だ。

「えぇ。今日ギルドで登録してきたばかりです」

亮真がハッキリと言い切った事で信用したのか、親父は腕組みしながら大きく頷く。
彼の腕には火傷の痕が無数に付いていた。
武器の製造時に出る火花で負ったのだ。
それは、彼が熟練した職人で有ることを示していた。

「そうかい。まぁならしょ～がね～。だがな新米！他の店はイザ知らず俺の店で手頃だの適当だのって言葉は使って欲しくねぇな！」

亮真は近くに飾ってある一本の短剣を手にして聞いた。

「ひょっとして鍛造（たんぞう）式で武器を作成する人は少ないんですか？」

親父の顔色が変わった。

「お前！判るのか！？」

「ええ。それなりには」

短剣には何度も何度も鋼を叩き折り曲げ不純物を取り出して作られた鍛造（たんぞう）式で作られた刃物だけに現れる光沢と刃筋が見えていた。

「そうかい！いやぁ嬉しいぜぇ～。近頃は大量生産で作れる鋳造（ちゅうぞう）式を採用する鍛冶屋ばかりでな。買う冒険者共もそれでいいと思っていやがる！鋳型に鉄を流し込むだけの鋳造（ちゅうぞう）式じゃ～本当に良い武器はできねえのにな！」

亮真はこの親父さんの職人の誇りを見た。

だからこそ、手頃な武器が欲しいといった亮真を怒鳴りつけたのだ。

（なるほどね。女将が薦めるわけだ。確かに腕も悪くない。だけど）

亮真は親父の腕を認めたが、逆に有る問題に直面していた。

「それで？おまえさん何が欲しい？剣か？槍か？」

そうなのだ、ここには剣と槍、それに斧が置いてあるが、刀が無い。

（まいったな。やっぱり刀が無い……まぁなんとなく西洋っぽい雰囲気だったから期待はしてなかったけどな……）

それでも亮真は親父に尋ねてみた。

「片刃で反りがある剣ってありますか？」

親父は考え込む。

「片刃で反りねぇ～～……ひょっとしてお前さん、刀の事を言ってるかい？」

「あるんですか？！」

亮真はかなり驚いた。

町は西洋風の造りの上、兵士達が持っていた武器も両刃の剣だの斧（ハル）槍（バード）だの西洋風の武器だったからだ。

「いや。悪いが俺の店には無いな」

親父は続けた。

「俺も知識としては知ってるんだがね。東方大陸で使われる武器さ。だが扱いにはかなり特殊な訓練が必要であまり他の大陸に輸出されないんだ」

「そうですか……」

「もしあるとしたら東部の港町フルザードの市場（バザール）ぐらいだろうな」

「港町フルザード？」

「西方大陸一の貿易都市さ。あそこなら中央大陸経由で東方の品も手に入るからな」

亮真は正直困った。

（刀が無いとなると剣か？でも剣だと使い難いんだよな。それならいっそ槍にするか？いや……槍だと郊外ならいいけど街中だと厳し

いしな。斧？斧ねぇ？別に斧が悪い訳じゃないけど……）
慣れない武器を使うと言うのは、自分の命を危険に晒す事に他ならない。

「お前さん。普通の武器じゃ～ダメみたいだな……良し！なら俺のコレクションを見せてやる！其の中で使えそうなのがあるなら持って行けや！」

「え？」

「いや。俺が目利きして良いと思ったものや、冒険者が持ち込んでくる物の中には、作品としてはスゴイが扱いが難しくて普通の客に売れない物や、扱い方が判らない物もあるんだ。そういった武器を俺はコレクションとして集めているのさ！刀なんて知ってるんだ。コレクションの中にお前さんが使える物も有るかもしれん。有るならお前さんに譲ってやるよ！」

そういうと親父は亮真をカウンターの奥にある地下への階段へ誘った。

階段を下りた先には鋼鉄の扉が待っていた。
親父は懐から鍵を取り出し錠を外すと扉を開いて言った。

「さぁ入りな。お前さんの希望に沿う物が有るかどうかは判らねぇがな」

初対面の段階では新米だった呼び方が、いつの間にかお前さんへと変わっていた。
（どうやらある程度は認めて貰えたみたいだな……）

鍛造製と鋳造製の差が判る事を親父に言った辺りからか。
職人って奴は自分の仕事を認めてくれる客には愛想が良くなるらしい。

親父さんに促され入った部屋はかなり広い。
30畳以上あろうかという部屋の中には、いくつもの棚が並んでいた。

「右側の棚が剣で順番に槍、斧、弓、となってるんだわ。本当の名品でな。売る相手を選ぶ武器なのさ。それも相当な腕の持ち主をな」

そういうと親父さんは亮真を一番左の棚へと連れて行った。

「お前さんに見せたいのはこいつらさ」

そう言われ亮真は棚に置かれた品々に目を向けた。

まず目に入ってきたのは木製のトンファー、続いて三節根、ヌンチャク、サイ、さらには我媚刺と特殊な武具が並んでいた。
戦輪や特殊警棒なんて物まである。
（なんだこりゃ……なんでこんな特殊な物が……）

「どうだい？」

親父さんの問いに俺は首を振った。

「特殊過ぎですね……」

「やっぱりか……使い方も判らないか？」

亮真は首を振った。

「使うだけなら使えますけどね……尤も練習した事は無いんですが」

そういうと亮真はトンファーを手に持った。

フォン

トンファーが鋭く回転し風を切り裂く。

「おいおい。それでダメなのかい？」

親父が興味津津といった表情で亮真に尋ねた。

亮真はトンファーを元に戻して言った。

「ダメですね。基本的な使い方は判りますけど応用が利かないし何より1対複数の戦闘に向かないですからね。実戦じゃ使え無いんですよ」

亮真の答えを聞き親父は訝しそうに尋ねた。

「お前さん……タダの新人じゃないね？あんたのような客は初めてだよ。最初はタダの素人だと思ったのにさ。ところが言う事なす事普通じゃない……」

「イヤだな親父さん。俺はタダの初心者ですよ。俺の父に連れられてあちこち回ったおかげで他の人より知識が多いってだけでね」

亮真は苦笑いして答えた。

「そうかねぇ？……まぁいいさ。で？どうする？」

納得はしていないようだが、親父は亮真にどの武器を選ぶのかと催促した。

「う～ん……」

生返事をしながら亮真は奥へと進んでいく。

（使えないわけじゃないけどなぁ。あまり特殊な物を使って目立つのも考え物だし……）

武器にはそれぞれ利点が有る。

だがその利点を活かす為には修練が必要だ。

それに、独特の形状を持つ武器は人目を引く。

追手が居る亮真としてはあまり目立ちたくないと考えていた。

「お！」

端の方まで来た亮真は、ある品に目を留めた。

両端に分銅と錘の付いた鎖だ。

長さは８０ｃｍほどか。鎖が細く服の中に隠しておける。

「そいつかい。異世界人が持ってきた鎖って話の物だが、そんな鎖でなにするのかね～～？」

親父が亮真の手にした鎖に視線を向けながら答えた。

「異世界人？！」

「ああ。この列の棚に置いてあるのはみんな異世界人が持って来たり作ったと言われる武器なのさ。」

なぜこんなに東西の文化が混ざっているのか不思議で仕方が無かっ

たが、親父の話で亮真はようやく納得がいった。
大昔からさまざまな人種をランダムに召喚した所為だ。
（そうか！。文化が高かったり低かったりするのもそれでか！）
つまり召喚された人間が持っている知識の中から、この世界でも使える知識だけを使っているのだ。
銀行のカードがいい例だ。
おそらく召喚された現代人の誰かが、銀行の管理ネットワークこの世界で応用した成果だろう。
パソコンも無いこの世界で何を応用して、実現したかは知らないが。
逆に一部で羊皮紙を使っているのは、紙を作る技術を持った人が少ないか、手作業での製作で数が作れないため紙が高級なのではないだろうか？。
つまりこの世界の文化は一部では現代人並に高い水準であり、逆に其の知識を持ってなかったり、持っていても応用できない物は中世のままなのだ。
考え込んだ亮真に親父は話しかけた。

「どうしちまったんだよ？」

親父が亮真の顔を怪訝そうに覗き込む。

「あ！いや……ちょっと考え事を……」

自分の考えを隠すように亮真は鎖を手に取った。
（悪くないな……万力鎖は爺から習ってるし。隠し武器としてなら悪くない。だが……）
この世界ではあまり武器を隠す事に意味が無い。
何しろ剣や槍を携帯して大通りを歩けるのだから。
亮真は悩んだ末に、投擲武器として戦輪（チャクラム）を選んだ。

直径５ｃｍほどの円形の輪で淵が刃になっている。
ＣＤの周りが刃になっていると思うのがイメージしやすいだろう。
コイツを選んだ理由は３つ。
１：円形で投げやすい。
２：投擲の型に居合いの動作を応用できる。
３：全面が刃のため、通常の投げナイフなどと比べ殺傷能力が高い。
４：そして暗器としても十分に使用できる。

亮真はこれを２０枚抱えて言った。

「親父さん。コイツと剣を一本ください」

親父さんはちょっと驚いた顔をした。

「剣は気に入らなかったんじゃないのかい？」

「いや。とりあえず明日は依頼（クエスト）に行きたいんで」

「そうかい。まぁ急ぐんならしょうがね～な。片手で使えるのを見繕ってやるよ」

「よろしくお願いします」

亮真は頭を下げた。

第1章第12話

異世界召喚2日目【逃亡】：その4

東から上る朝日の光に、亮真は眼を細めた。
彼は剣を背負い、戦輪（チャクラム）を入れた革袋を左右の腰にぶらさげ、街道を東へ進む。

「しかし危ないところだったぜ……」

昨日、武器を買った後の話だ。
亮真は魔法道具屋（アイテムショップ）で魔法薬（ポーション）＆解毒剤（アンチドーテ）を5個ずつ、簡易テント、西方大陸の地図とそれらを入れるためのリュックを買った。
防具をどうしようかと考えはしたが、試着した既製品ではサイズが合いにくくどうにも動き図らい。
今の亮真には時間が無いので後日、時間があるときに買う事とした。
とりあえず装備が整い、海鳴り亭で晩飯を食べている時、亮真は其の事に気がついた。

「あ！」

酒場と化した海鳴り亭に亮真の声が響く。
酒場にいた客の視線が一斉に亮真へと向けられた。

「お。女将さん……」

「なんだい？　どうしたんだい？」

亮真の声に驚き、女将はそばにやって来た。

彼女は内心、食事の中に虫でも入っていたかと心配して駆け寄ってきたのだが、亮真の様子を見た限り、そういうことで声を上げたわけではないらしい。

女将が恐る恐る訪ねると、亮真はか細い声で繰り返し呟いた。

「手紙。手紙を……」

「依頼（クエスト）の手紙を無くしたのかい！？」

亮真の呟きを聞き、女将の顔色が変わった。

これが事実ならとんでもない失敗だ。間違いなく違約金を支払う事になる。

いや、金はまだいい。多少でも実績があれば別だが、全く実績のない新人が一番初めの依頼（クエスト）でミスを犯したとなれば、次の依頼（クエスト）を請け負うことが難しくなる。

だが、亮真の答えを聞き、女将の顔に笑みが浮かんだ

「い。いや……手紙を受け取ってない……」

「ははは～～ん。あんた、さては受け渡しカウンターに行ってないね？」

「受け渡しカウンター？」

聞き耳を立てていた店の客も状況が理解できたのだろう。彼らもニヤニヤと笑みを浮かべて亮真を見ている。

「おい。新人だぜ。」

「あ～。俺も初めての時はあんなふうだったな～～」

「ギルドもお役所仕事だからな～～」

あちらこちらから聞こえてくるささやき声が亮真の耳にも届いた。

「あはははは」

女将が我慢できずに大きな声で笑う。すると周りの傭兵達も一緒に笑い出した。

「？」

亮真は自分が何故笑われているか理解できなかった。

「いや～悪い悪い。そうだね～初心者の半分ぐらいはあんたみたいな目に合うんだよね」

憮然とした表情で黙り込んでいる亮真に気がつき、女将はエプロンで口元を隠しながら誤った。しかし、その顔にはまだ笑みが浮かんでいる。

「どういうことなんです？」

亮真の問いに周りから言葉が飛ぶ。

「新人の試練にかんぱ～～い！」

「お役所仕事の犠牲者に栄光あれ！」

「新人！　へこたれずにがんばれよ～～」

どうにも状況が判らない。亮真は女将へ疑問の視線を向けた。

「？」

女将は首を振りながら、肩を竦めて答える。

「あんた。ギルドで登録した後、何か貰わなかったかい？」

「ギルドでですか？　登録カードと後は……あっ！」

女将の言葉を聞いて、亮真の脳裏に有る物が浮かぶ。

（そうだ！　登録完了して帰ろうとした時に冊子を貰ったんだった！）

登録をした後に受付の女性から受け渡されたものだ。

亮真はそれを受け取ったまま背負い袋の中へ放り込んで、今まで忘れていたのだ。、

「それの３ページ目を読んでみたかい？」

女将に言われ、亮真は慌てて冊子を開く。

――――――――――――――――――――――――――――――

各依頼（クエスト）の達成手順；

【依頼（クエスト）：配達系に関して】

配達系の依頼（クエスト）を請け負った場合、配達対象物は、ギルド内にある受け渡しカウンターにて受け取る事。
依頼（クエスト）終了条件は、対象の町のギルド受け渡しカウンターへ依頼物を届けるまでとする。

【依頼（クエスト）：討伐系に関して】
討伐系の《クエスト》を請け負った場合、対象を討伐する度にライセンスカードに自動で記録される。
なお、終了はギルド受け渡しカウンターへカードを提出した時点とする。
特に指定が無い場合、どの町のギルドで報告してもかまわない事とする。

注意；
討伐対象の生息範囲を指定されている場合、かならずギルド随行員を伴い、生息範囲内での討伐である事を証明する必要がある。
この場合はカードに寄る自動記録は使用出来ないので注意する事。

【依頼（クエスト）：調達系に関して】
調達系の《クエスト》を請け負った場合、対象調達物を、ギルド受け渡しカウンターへ届けた時点で終了とする。
特に指定が無い場合、どの町のギルドで報告してもかまわない事とする。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――

「こいつは……」

亮真が冊子の題（タイトル）を見ると【ギルド初心者案内】と書かれている。

初めて依頼（クエスト）を受けた人間が必要とする、基本的な情報が載っている資料だ。

「ギルドの受付カウンターで依頼（クエスト）を受けただろう？」

女将の問いかけに亮真は素直に頷く。

「受付カウンターは本当に受付だけをするのさ。だから配達系とかの依頼（クエスト）を受けると、依頼（クエスト）を受けた後に受け渡しカウンターへ行って依頼対象の物を受け取らないといけないって訳さ」

言われてみれば納得だが、亮真はやや釈然としなかった。

別に言い訳をするつもりはないが、依頼（クエスト）時に窓口でそのまま依頼対象を受け渡すほうが効率的に思える。

まぁ、手引き書を貰っておきながら、読まずに放置していた亮真の言葉では説得力に欠けてしまうのだが……

尤も、そういう人間はかなり多いようだ。

女将も今まで多くの新人が同じように読まないで困った事になったのを、その目で見てきたのだろう。

「不満みたいだねぇ？　まぁ、システム的にややこしいのでギルドとしても冊子を渡してるんだけど、大抵の新人はそこまで見ないのさ。何しろ初登録＆初仕事だ。緊張しちまって冊子のことなんか忘れちまう。新人の最初の試練ってやつかねぇ？」

女将は亮真の不満を理解しているのだろう。笑みを浮かべながら、丁寧に説明してくれた。

「ギルドってまだ開いてますかね？」

時間は夜の２０時３０を過ぎた辺りだ。
酒場等の極限られた店を除いて、殆どは既に店じまいをしている時間帯と言える。

「ふふふ。ギルドは３６５日２４時間開いてるよ。ちなみにその辺の事も冊子に書いてあるから後で読んでおきなよ？」

それを聞き、亮真はディナーの焼き肉を急いで口に詰め込んだ。
そして、カウンターに夕食代(ディナー)を置き、店の入り口で女将さんへ頭を下げる。
向かうのは当然、ギルド受付カウンターだ。

「はい！　こちらが依頼品になります。よろしくお願いしますね。御子柴さん」

メガネを掛けた女性が油紙に包まれた手紙を亮真に渡す。

「蝋で封印がされてます。これが剥がれてしまうと、中を見る見ないに関わらず違約金が発生しますから注意してくださいね」

ギルド入り口に掲げられた案内板を見て、地下1階の受け渡しカウンターへ向かった亮真がカードを提出すると、受付の女性はあっさりと依頼品を渡してきた。
初めから手引き書を見ればこれ程簡単に事は済んだのだ。

其の後は大通りに面した宿屋(ホテル)へ泊まり、明け方に帝都オルトメアを出発したと言う訳だ。

「ふぁ～～～～」

亮真の口からあくびが出る。

早朝の所為かメルフェレンへ続く街道には亮真の他は誰も居ない。

昨日ギルドで依頼品を受け取り、大通りにある宿屋（ホテル）に泊まった亮真は、女将さんに言われたとおり【ギルド初心者案内】にざっと目を通し、いろいろと購入した経費を考えていたら寝るのが遅くなったのだ。

――

――

――

――

シャツ・ズボン・マント・革ベルト＝１０００バーツ（銀貨１０枚）

海鳴り亭の昼飯（ランチ）＝２５バーツ（銅貨２５枚）

海鳴り亭の夜飯（ディナー）＝４０バーツ（銅貨４０枚）

剣＝５００バーツ（銀貨５枚）

戦輪（チャクラム）×２０個＝２０００バーツ（銀貨２０枚）

魔法薬（ポーション）×５個＝１０００バーツ（銀貨１０枚）

解毒剤（アンチドーテ）×５個＝１０００バーツ（銀貨１０枚）

簡易テント＝５００バーツ（銀貨５枚）

西方大陸の地図＝１００バーツ（銀貨１枚）

リュック＝１００バーツ（銀貨１枚）

宿屋（ホテル）代　※朝食付き＝１００バーツ（銀貨１枚）

――

――

――

――

――――――――――――――――――――――――――――――――――以上が、召喚されて１日目に使った金額だ。

銀貨６３枚と銅貨６５枚でしめて６３６５バーツとなる。

これを見て判るのは、食事代が安い事だ。

逆に、消耗品である魔法薬（ポーション）や解毒剤（アンチドーテ）はかなり高い。

瓶に書かれた説明を見ると、怪我に関してはかなり効果が高いみたいだけど。
早々簡単に使える物ではないらしい。
（ゲームだと一番安いアイテムの一つなのになぁ……）
尤もゲームと違いこの世界で死んだらコンテニューは無い。
それを思えば、この薬を無理にケチる事など出来るはずも無かった。
装備への投資分を抜いて考えると大体1日２００バーツ（銀貨2枚）を稼げれば、食事をして宿屋（ホテル）にも泊まれるようだ。

（しかし、街道を少し外れるだけでそんなに出るのかね？怪物（モンスター）が……）
昨日読んだ【ギルド初心者案内】には、依頼（クエスト）の受け方、報告の仕方だけではなく、初期の冒険者が受けるであろう野犬討伐（ワイルドドック）や野蜂（ワイルドビー）討伐と言った討伐系の対象怪物（モンスター）の生息地に関しての記載もあった。
それによると、基本的には街道を外れれば外れるほど怪物（モンスター）は強くなるらしい。
今回受けた野犬（ワイルドドック）などは、街道から5分も外れれば集団で居るとのことだ。
亮真は街道を外れ森の方へ進んでいった。

亮真が寄り道をしたのには理由がある。
下手に急ぐと怪しまれると考えたのだ。
もちろん、世の中には多くの人が居て、其の中には急いで街道を歩く人も居る。
急ぐ＝帝国に見つかる。では無いにしろ、通常の冒険者の様に討伐系の仕事を行いながら町の移動を行うほうが、安全と考えたわけだ。

街道から5分ほどのところに森がある。
森に入りさほど進まぬうちに、ブーンという羽音が聞こえてきた。
視線のやると、１０メートルほど先の木の周りに5匹ほどの虫が飛

んでいる。
虫と言っても、犬並みの大きさだが。

（あれか？）

体型は普通の蜂のようだ。
だがサイズが確実に普通の蜂の１００倍はあろうかと言う大きさだ。
どうやらあれが野蜂（ワイルドビー）らしい。
【ギルド初心者案内】によれば、体が大きいため、さほど素早くは無いらしい。
ただ、猛毒を持っており、一度に5回以上刺されると死亡するという事だ。

（やってみるか……）

亮真は腰の袋から戦輪（チャクラム）を取り出し居合いの様に腰を低くし、右足を前に出した格好で、左側へ腰を捻る。
弓の様に引き絞られ力を貯めた体から戦輪（チャクラム）が投げ出された。
フォン
戦輪が空気を切り裂いて野蜂（ワイルドビー）に向かって飛ぶ。
ザシュ
そして
カッ
２つの音が続けざまに響く。
だが亮真はそれを無視し、2枚目、3枚目、4枚目、5枚目と続けざまに戦輪（チャクラム）を投げた。
飛んでいた野蜂（ワイルドビー）は全て地面に落ちている。
胴体の部分がちぎれた物、頭部が砕けている物、羽に穴が開き飛べないもの。
当たった箇所はそれぞれ違うが、とりあえず5枚とも当たったよう

だ。
亮真は剣を抜いて、野蜂（ワイルドビー）へ近づく。
どれも瀕死のようである。
一番元気な羽の破れた野蜂（ワイルドビー）から順番に頭部へ剣を突き刺し止めを刺す。
（ええっとそれで…っと）
【ギルド初心者案内】を取り出し、ページを折っておいた部分を読み直す。

――【材料の調達に関して】
怪物（モンスター）の討伐を行った後は、倒した怪物（モンスター）を解体し、材料の確保を行うようにしてください。
怪物（モンスター）の体は、部分によって薬、食料、法術の触媒など様々な使い道が存在します。
これらの品（アイテム）は【依頼（クエスト）：調達系】を受けるか、魔法道具屋（マジックアイテムショップ）へ売ることで換金する事が出来ます。
本書では、初期の怪物（モンスター）を対象にどのような部分が売れるかを説明します。
――
（え〜〜〜と？羽の部分と毒針が売れるのか……）
とりあえず、野蜂（ワイルドビー）の尻の部分を切り裂いて毒針を取り出した。

（うへ……５ｃｍはあるな……）
次に羽を毟ろうとして、亮真は３匹の羽に穴が開いていたり切れているのに気がついた。

（ヤバイ。確か……）

【ギルド初心者案内】を慌てて確認するとそこには。

―――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――
注意事項：
売り物であるので、各部位で損傷の激しい場合はお引取りできない場合が有ります。
ご注意ください。
―――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――

売ることを考えれば、当然と言える条件だ。
だが命の掛かった実践の中で損傷の度合いまではなかなか気が回らない。
下手に欲を出して死に掛けたのでは目も当てられないのだ。
（ゲームなら売れるアイテムを拾うだけなんだがな……）
亮真は損傷の酷い羽を諦めて、比較的傷の無い羽を毟った。
（頭を使わないと、せっかく倒しても損をするということか……まぁ本当にヤバイ時には金をあきらめるしか無いか……）
狩りの難しさを実感した亮真だった。

第1章第13話

異世界召喚2日目【逃亡】その5：

野蜂（ワイルドビー）の解体を終え、亮真はさらに森の奥へと進む。

宿屋（ホテル）で昼食（ランチ）用に弁当を作って貰っている為、探索に掛ける時間は十分ある。

（とにかく、戦闘に慣れないとな）

今、自分が持っている武器が使い慣れた愛刀なら。

ついそう思ってしまう。

戦輪（チャクラム）は手裏剣術の応用で何とでもなる。

だが剣は残念ながら使い難くて仕方が無い。

引き斬る＝刀に対して力で押し切る＝剣は根本的な使い方が異なるため使い難いのだ。

だがとにかく此の装備で国境を越えなくてはどうしようもないのだ。

おそらく帝国の追手は亮真を追い越して遥か彼方を探しているに違いない。

馬の機動力を考えれば当然と言えた。

問題は亮真が選んだ東部方面に追手を差し向けたかと言う事だが、亮真は向けていると予想していた。

（俺なら、顔がわからない人間を見つけ出すのに、探索の人数をケチる事は無い。そして俺なら先ず国境の警備を厚くして、不審者を一切国外に出ないようにする。後は国境から帝都へ向かって網を絞り込んでいけば良い。）

森を進みながら亮真の思案は続く。

（ただ今回は、帝都内で俺を拘束できなかった段階でほぼ俺の勝ちは動かない。顔が判らないっていうのはそれだけ有利だ。後は国境をどう越えるかだな……）

急に亮真の目の前が開けた。
森の木々が切れ、其の部分だけぽっかりと広場になっている。
グルルルルウ……
突然亮真に警告の吼え声が響く。
そこには体長１ｍほどの犬が居た。
その数１３。
おそらく家族だろう。
其の中には明らかに子供も居る。

（コイツが野犬（ワイルドドック）か……）

まだ向こうは警戒しているものの攻撃まではしてこない。
おそらく子供が居るため、むやみに襲い掛かってくるのを躊躇っているのだろう。

（チャンスだな。）

亮真はすばやく戦輪（チャクラム）を取り出すと、子供を庇う親に狙いをつけた。
フォン
戦輪（チャクラム）が空気を切り裂く。
野犬（ワイルドドック）が避ければ野犬（ワイルドドック）の子供に当たる。
避けなければ野犬（ワイルドドック）に当たる。
次々と亮真は戦輪（チャクラム）を投げた。
ザシュ

肉を切り裂く音。

キュイ～～～ン

苦痛の叫び。

亮真はすばやく剣を抜き野犬（ワイルドドック）へ走り寄る。

亮真へ突っ込んできた野犬（ワイルドドック）は全部で８体。

５体は体を戦輪（チャクラム）で切り裂かれ蹲っている。

先頭を切って走ってきた１匹が亮真から２ｍ程のところから飛び掛ってきた。

（所詮畜生か……）

亮真は大きく開かれた口に剣を突っ込む。

飛び掛ると言うのは決してよい戦法ではない。

なぜなら翼が無い為、空中では身動きが取れなくなるからだ。

奇襲なら話は変わってくるが、今回のように正面からの戦闘では飛び掛るのは下策だ。

もっとも野犬（ワイルドドック）達にそんな知性は無い。

本能のままに亮真へと飛び掛ってくる。

７体目、８体目、９体目。

次々と飛び掛ってくる野犬（ワイルドドック）を脇にすり避けて、すれ違いざまに胴を薙ぐ。

機械的に処理して行くうちに亮真に油断が生まれた。

１匹が飛び掛らず、そのまま駆け寄ると右足へ牙を剥いた。

ドグン

咄嗟に亮真の右足が大きく蹴り出され野犬（ワイルドドック）の喉元に突き刺さる。

喉を蹴り潰され蹲る野犬（うずくまワイルドドック）の頭に剣を突き刺し止めを刺した。

（ふ～。危ねぇ。つい油断したぜ……）

残り3体。

野犬の子供（ワイルドドック）だ。

さすがに怪物（モンスター）に分類されるだけあって、子供といえども獰猛だ。

亮真に対して威嚇のうなり声を上げる。

ざっと距離にして5m程か。

亮真は剣を体の左側に構える。左下から右上への斬り上げを狙った脇構えだ。

両者が睨み合い、次第に間の空気が重くなる。

亮真対3匹殺気が爆発しそうになった瞬間。

亮真は纏っていた殺気を一気に消した。

今にも襲い掛からんとした3匹は殺気をいなされ躊躇した。

そこで亮真が一気に間合いを詰める。

左下からの右上への斬り上げ、1匹目の首を斬り飛ばす。

頭上に掲げられた剣は再び同じ軌道を描いて2匹目の胴を切断した。

3匹目はついに後ろを向いて逃げ出す。

亮真は剣を地面に突き刺すと、戦輪（チャクラム）を取り出し投げた。

（ふ～13匹か……）

戦闘そのものは3～4分といったところか。

全て1太刀でケリが付いた為さほど時間も掛からなかったのだ。

（戦輪（チャクラム）悪くないな……ただ回収しにくいな……）

柄が無く輪の外円が全て刃の為、威力は大きいのだが戦輪（チャクラム）全体が肉の中に埋まってしまうのだ。

投げた6枚の戦輪（チャクラム）は全て血をぬぐって回収した。

（ええっと……）

【ギルド初心者案内】によると野犬（ワイルドドック）で価値があるのは上顎に生えた2本の犬歯と毛皮らしい。

亮真はなれない手つきながらも剣を使って毛皮の剥ぎ取りに取り掛かった。

第1章第14話

異世界召喚2日目【追跡者達】：

「みなの者、昨夜はご苦労だった！只今より新たな方針を伝える！」

ロルフの怒声が正午の強い日差しの中、城門前の広場に響いた。

「シャルディナ様、セリア殿、オルランド殿、そしてこのワシを部隊長とし、それぞれ3～40名ずつを付け各南と東の国境へ向けて探索を開始する！　編成は事前に通知したとおりである。なお、皆も知ってのとおり犯人と思われる異世界人はガイエス様を殺害している。各自、十分に注意するように。では、各自速やかに移動を開始しろ！」

兵達が編成されていくのと見ながらロルフは昨夜の事を思い出していた。

亮真と城門ですれ違った帝国の追手達。

セリア、ロルフ、オルランド、シャルディナの4人は、午後から夜半までを探索と追跡に当てた。

だが、城門を出た近衛兵は忽然と其の姿を消し、其の行方は様として掴めなかった。

「一体どうなっているの？！」

セリアの怒鳴り声が帝都オルトメアの城門に響き渡る。

四方に放った近衛兵達は、何の収穫も無いまま集合場所である城

門前に戻ってきたのだ。
何も掴め無かった彼らは一様にうなだれている。
結局判って居るのは、近衛兵の鎧を着た者が午後2時頃に出たという事だけ。
セリア達が兵を編成して城門にやってくるわずか20分ほど前の話だ。
それから夜半まで10時間にも及ぶ探索はまったくの無駄となった。

「落ち着きなさい。セリア殿」

「シャルディナ様……」

セリアの声のトーンが落ちる。

「今日はとりあえず此処までにしましょう……みんな疲れているし」

シャルディナの目が周囲を見回す。
露骨に疲れをアピールしている兵士は居ないが、疲労が蓄積しているのが見て散れる。

「しかし……このままでは……」

セリアは抗弁したがシャルディナは引かない。

「いくら帝都の周りとはいえ夜は危険だわ。一度対策を練り直して明日仕切り直しましょう」

「うむ。シャルディナ様の言うとおりだな。此処は一度仕切りなおした方が良かろう。いかがかな？セリア殿」

ロルフの言葉にセリアとしても言うべき言葉が無い。
ただ感情の部分で、肉親を殺した犯人を野放しにしていると言う現実を受け止められないのだ。

「オルランド殿、セリア殿を館へお送りしてくれ。ガイエス様がお亡くなりになりセリア様も大変な一日だったからな」

「いいえ。一人で帰れます！」

ロルフの気遣いをセリアは拒んだ。
だが周りの眼には其れが虚勢であることが手に取るように判った。

「無理をしない方がいいわ？セリア殿。オルランド殿、セリア殿をお願い」

「は！さぁセリア殿」

シャルディナの言葉にオルランドは素早く反応しセリアを抱きかかえようとする。

「オルランド！離しなさい。私は一人で帰れます」

だが、オルランドの手を撥ね付けた拍子にセリアはバランスを崩して倒れこんだ。
無理も無い。
１０時間以上休憩も無く必死で探索を行ったのだから。
結局セリアはオルランドに抱えられて館へと帰った。

「シャルディナ様。いかがいたしますか？」

「どうするも何も、もう無理でしょうね……」

ロルフの問いかけにシャルディナは肩をすくめるとあっさり言い放った。

「やはり無理ですか……」

「勝負は例の近衛兵が城門を出てからの１０分だったのよ」

「しかし……これでも編成にはかなりの無理を」

シャルディナの言葉を聞き、兵を集める指揮を執ったロルフの顔に苦渋の色が浮かんだ。

彼は最善を尽くしたと自負している、だが結果として捕縛出来なかったのであればその努力は意味が無いのだ。

「判っているわ。別にあなたを責めたんじゃないの。ロルフ殿」

シャルディナは視線を森へと移す。

「もともと帝都周辺で彼を捕縛する可能性は低かったのよ。何しろ相手の顔も年齢も不明なのよ?。それでも近衛兵の格好のままでうろついてくれていれば確保の可能性も有ったけども……」

「もう近衛兵の格好はしていないと?」

「おそらくは……ね」

ロルフの言葉にシャルディナは頷いた。

（私ならサッサと服を着替えるわ……追手が掛かっているんだもの……）

「では……どうされますか？これから」

「国境は封鎖させたけどね、後は……」

シャルディナは首を振った。

「明日から国境へ向けて探索をしながら進むしかないわね。」

「しかし。どの国境へ向かったのか……」

ロルフの懸念は尤もだ。

確かにオルトメア帝国は西方大陸でも5本の指に入る大国だ。

ただし、内陸部の侵略国家なため、四方を敵対国家に塞がれている。

今回、追跡隊の人数がいくら急いで編成したとはいえ１５０名ほどと言うのは、周辺諸国への防備で国境付近へ兵を貼り付けているからであり、帝都の近衛騎士団、親衛騎士団を大動員出来ないのは戦端が開かれた時の備えの為だ。

対象者の顔も年齢もわからず、人海戦術も選択できない今、武人であるロルフに対策など建てられるはずも無い。

「とりあえず2択までは絞れるわね」

シャルディナの言葉にロルフは意外そうな視線を向ける。

「2択ですか？ならシャルディナ様は南か東だと？」

ロルフの脳裏に帝都から国境までの距離がおぼろげに浮かぶ。

2択と言う以上帝都から尤も近い南方と次に近い東方を思い浮かべるのは当然のことだ。

「ええ。でもおそらく東ね……」

「理由をお聞きして宜しいですか？」

シャルディナは微笑みを浮かべて応えた。

「正直に言えば勘ね。ただしまず外れないと思うわ」

シャルディナはロルフに向き直って言った。

「この城を脱出し、我々の追跡を振り切るほどの奴だもの。無闇に逃げたりしないわ」

「ならシャルディナ様は異世界人が地理を知っていると……？」

ロルフの表情はそんなことは有り得ないと語っていた。

「おそらくね……」

「ですが、それなら最短の南を選択するのでは？私なら東は選びませんが？」

少なくともロルフが逃走するなら最短ルートを選択する。

一刻も早く国外脱出を果たさなければ命が危ない状況なのだ。

態々遠い道を選ぶ必要など無い。

ロルフはそう考えていた。

「そう。逃げるだけなら南ね。ただし私達にもそれは予測される」

「予測される事を前提にして東を選択すると？まさか……幾らなんでもそれは」

シャルディナの顔に憂いが浮かぶ。

「ロルフ。私も杞憂であって欲しい。でもね此処まで裏を掛かれたのよ？相手を見くびれば最悪国外に逃亡されかねない」

ロルフは考えこみながら言った。

「確かに……しかし南の可能性も捨て切れません……」

彼は現実的な判断をした。

其れが彼の優れたところであると同時に欠点とも言える。

「貴方の言いたいことは判っているわ。東に向かったと言うのはあくまでも私の勘よ……だから南はセリア殿、ロルフ殿、オルランド殿の3人に任せ私は東へ向かおうと思うの」

「確かにそれは悪くないと思います……しかしそれならば2名2名で分かれるべきでわ？」

彼の提案は尤もなことだ。

普通なら間違いなく隊を半分にするところだろう。

しかしロルフの提案にシャルディナは首を振った。

「いいえ、東はあくまでも私の勘よ。それにセリアを抑えるのにオルランドだけでは怖いのよ……まぁ私には優秀な副団長も居るし。

大丈夫だから」

ロルフは普段”吹雪の女王”とまで呼ばれる程に冷静で冷酷なセリアが逆上し、怒鳴るのと思い出した。

（確かに……殿下のご指摘どおり今の不安定なセリア殿を抑えるのにオルランド殿だけでは危ないか……まぁアヤツが居れば殿下に危険は有るまい）

シャルディナの言葉を聞いてロルフは瞬時に計算した。

彼の脳裏には、シャルディナの言う優秀な副団長の姿がハッキリと浮かんでいた。

「判りました。それではそのように部隊を編成します」

「頼むわね。ロルフ殿」

ロルフは頭を下げると、疲れた体に鞭打ち徹夜で部隊の再編成に携わった。

たった一人の異世界人を捕らえる為に。

「ロルフ様！兵の移動終了致しました！直ちに出発できま。」

副官の一人が報告に来た。

「シャルディナ様。行きますか？」

ロルフの言葉にシャルディナは剣を城門の彼方へ向けることで返事をした。

「進軍！」

ロルフの怒声と共に１５０名の騎馬隊は走り出す。
影さえ見えない異世界人を追って。

先頭を走るシャルディナに副団長の斉藤が並走してきた。

「皇女殿下。ご命令通りにアデルフォの関所を閉鎖致しました」

「そう。御苦労さま。早かったわね」

昨日の午後に出した命令だ。
馬を乗り継いで行ったにしてもかなりの速さだ。
シャルディナは斉藤の報告に満足げな表情を浮かべた。

「アデルフォの町で捕らえるおつもりなのですか？」

斉藤は年のころ３０半ば位か。
髪を七三分けにしたエリートサラリーマンのような風体だ。
眼鏡を掛けビジネススーツを着せてオフィス街を歩かせれば直ぐに溶け込める。
理知的な空気を纏うこの男の問いにシャルディナはいたずらっ子のような笑みを浮かべて問い返した。

「あら？私そんなこと言ったかしら？」

「いいえ。ですからお尋ねしているのです。皇女殿下」

彼女の期待に沿った回答ではなかったのか、シャルディナは幾分不機嫌な顔つきで問い返した。

「ならお聞きしますわ。私の優秀な参謀さん。アデルフォの町で異世界人を捕らえられると思う？」

「いいえ。まず無理でしょう」

斉藤はあっさりと言い放った。

今度の答えはシャルディナのお気に召したらしい。

幾分笑いを含みながら問い返した。

「あら？どうしてかしら？」

「顔が判らない人間をどのように探すのです？それとも何か其の男を特定出来る情報があるのですか？」

これが今回の任務の一番の問題点だった。

判っているのは異世界人の男で背が高く体格が良いという頭が良く容赦のない性格。

そんなところだ。

はっきり言えばそんな人間は帝都に腐るほど居る。

いや帝都だけでなく西方大陸中に。

昨夜の追跡では相手が近衛兵の鎧を着ているということを前提に探し回ったのだが、城門を出た後の足取りはまったく掴めなかった。

「そうね……フフフ。顔もわからない相手じゃ探しようが無いものね」

シャルディナの笑みに斉藤の目が細まる。

「ならどうするのですか？」

「大丈夫よ。私達が相手の顔を知らないのだもの。相手に教えてもらうしかないでしょ？犯人だって」

シャルディナの言葉を聞き斉藤の目に鋭い光が宿る。
彼の脳に主君の考えていることが伝わった証拠だ。

「成る程。アデルフォの関所を閉鎖させたのはその為ですか……」

「そう。尤も使える人数が限られているからあまり期待は出来ないけれどもね……」

「アデルフォの守備隊を動かすというのはいかがですか？」

斉藤の提案にシャルディナは首を振った。

「其れは無理よ。国境の守備隊を動かせばザルーダに攻め込まれるだけだもの。貴族連中に応援を頼むわけにもいかないしね」

「そうですなぁ……貴族共にばれればこれ幸いと謀反を起こしかねませんな」

シャルディナは帝国貴族や近隣諸国に今回の事件が漏れた場合を想像し苦笑いを浮かべた。

「いずれ公表するにしても今は不味いわ。だから手段を選ばなくちゃいけないの……不利だけれどもね」

シャルディナの言葉に斉藤は無言で頷いた。

第1章第15話

異世界召喚2日目【覚悟】‥

夜の闇に包まれた街メルフェレン。
亮真は狩りを終えようやく最初の目的地メルフェレンへとたどり着いた。
既に時間は夜の7時を過ぎた頃。
通常なら帝都～メルフェレン間は徒歩で3時間ほど。
距離にしておよそ１１Ｋｍと言った所だ。
だが途中で亮真は狩りを行っていたため、到着が此の時刻になった。

「ふぅ。やっと着いたぜ」

やはり知人が居ないのは寂しいものだ。
ついつい独り言を言ってしまう。
わずか一日とはいえ、自分が生まれ育った世界からまったく別の世界に連れてこられれば如何に亮真とはいえ寂しさを感じる。
此処から国境まではおよそ１００Ｋｍ程だろうか。
騎馬ならば４時間程で駆け抜けられるが、徒歩で平均時速３～４ｋｍなら１日１０時間歩くとして３～４日、遅ければ７～８日程掛かる距離だ。

亮真のリュックには、狩りで得た材料が詰まっていた。

（とりあえずギルドで報告だな）

亮真は空腹に耐えつつ、重くなったリュックを背にギルドへの道を歩むのだった。

「これをおねがいします」

「かしこまりました。確認するので少々お待ちください。……大丈夫ですね。封印は剥がれてないです」

亮真が差し出したカードと依頼品の手紙を受け取った受付嬢は、手紙の裏表と蝋の封印を確認した。

「はい。問題有りません。では達成値（クリアポイント）５を追加しますね。討伐系の依頼（クエスト）の方はどうされますか？一旦清算されますか？」

「ええ。お願いします」

亮真は頷いた。

「かしこまりました。ええっと……野犬（ワイルドドッグ）討伐数５４、野蜂（ワイルドビー）討伐数９１、野兎（ワイルドラビット）討伐数２２。……お疲れ様でした。結構な数を狩られたんですね」

「ええ。おかげで昨日買った武器の切れ味が血脂で鈍ってしまって……研ぎに出したいんですよね。」

亮真の何気ない言葉を聞き受付嬢の顔に驚きが広がる。

（此の人。剣で此の数を狩ったの？それも一日で？てっきり殲滅系を使う法術士だと思ったのに……シングルＩ（アイ）ランクの冒険者なんてＬＶじゃないわ……）

カードに記載されている依頼（クエスト）「の依頼請負日は全て昨日の日付だ。

亮真は彼女の視線に気づかず続けた。

「此の町で研ぎを頼める鍛冶屋なんてありませんかね？」

「ええっと……ギルドを出て大通りを左にまっすぐ向かうとありますよ」

「そうですか。後で行ってみます。ところで、清算おわりました？」

亮真の問いに彼女は自分の仕事を思い出した。

「あ！ごめんなさい。野犬（ワイルドドック）の討伐数５４×３で１６２バーツ。野蜂（ワイルドビー）の討伐数９１×３で２７３バーツ。野兎（ワイルドラビット）の討伐数２２×３で６６バーツ。合計で５０１バーツ。達成値はそれぞれ討伐数とイコールなので達成値（クリアポイント）は１６７ポイントです。おめでとうございます。御子柴さん。ダブルＩ（アイ）ランクへ昇格ですね」

（昨日登録して、もう次のランクに上がるのか……）

亮真は正直あまり嬉しくなかった。

別段苦労もしていないのだから当然の感想と言えた。

「あまり嬉しくなさそうですね？」

感情が表情に出ていたのだろう。

受付嬢の質問に亮真は正直に答えた。

「そんな事も無いんですが、あまり苦労しなかったので。正直……」

「そうですねぇ。その辺は2パターンに別れますね。登録前にある程度の訓練をされた方とだと、Gランクぐらいまでは1週間ほどで上がっちゃいますからね」

「そうなんですか？」

「ええ。逆にまったくの素人の方がなる場合はダブルI（アイ）ランクに上がれるかどうかが一つの山場ですよね」

「ふ～ん。そうなんですか……」

亮真は気づかなかったが、初心者が一番引っかかるのは1対集団の場合だ。

森に居る怪物（モンスター）の多くは集団で生活している。

狩りをする場合、当然集団を相手にしなければならなくなる。

そこでギルドでは隊（パーティー）の結成を推奨するのだが、必ずしも全ての人間が隊（パーティー）を組めるとは限らない。

実力が離れすぎていたり、考えが合わなかったり、目的に沿わなかったりと様々な理由で一人で依頼（クエスト）に出るものも多いのだ。

そして、隊（パーティー）に入りにくい一番の人間が初心者と言う事になる。

特に何も訓練を受けていない初心者は嫌われる。

命のやり取りをする中で、弱者が居ると言う事は経験者の命まで危険に晒すからだ。

そんな訳でギルドに登録した直後の初心者の多くは、同じ初心者同士で隊（パーティー）を組めると言う幸運に恵まれた者以外は、一人で依頼（クエスト）を行わなくてはならなくなる。

ここで問題となるのが先ほど言った”森に居る怪物（モンスター）の多くは集団で生活している”ということだ。

1対1の場合なら素人でも問題なく倒せる怪物（モンスター）も集団となれば話は

別だ。
前後左右あらゆる方向を警戒しながら戦わなくてはならない。
そのため殆どの初心者は、ハグレと呼ばれる一匹で行動する怪物（モンスター）を探して戦う事になる。
但しこのハグレに遭遇する確立は非常に低い。
丸一日森を這いずり回って2～3回遭遇すれば幸運と言えた。
結果、受付嬢の言った2パターンに分かれるわけだ。
1対1でしか戦う実力の無い者は必死で森を探索し、1対多で戦えるものは亮真のように1～2日でランクアップを果たす事になる。
ちなみに配達系の仕事のみでランクアップする事も出来るが、これは推奨されない。
なぜなら実戦における力を身に付けること無くランクアップすれば、待っているのは死のみだからだ。

「ところで御子柴さん？こんなに討伐されたってことは相当に皮とか牙とか貯まったんじゃないですか？」

「ええ。解体するのに手間取りましたけどね。これから魔法道具屋（マジックアイテムショップ）へ持ち込むつもりなんですけど」

「なら調達系の依頼（クエスト）を先にやってしまいませんか？」

「調達系ですか……？」

彼女の意外な言葉に亮真は首をかしげた。

「はい。魔法道具屋（マジックアイテムショップ）へ持ち込むより金額は減りますけど、先にランクアップを果たしたほうが後々得なんですよ？」

「ほう！そうなんですか？」

彼女の言葉に亮真は興味を持つ。
自分の利益には敏感な男だ。

「はい。依頼（クエスト）は自分のランクと同じかそれ以下を受けられる事はご存知ですよね？」

ギルドへ登録したときに聞いた話だ。

「ええ？それが？」

「実は、自分のランクより下の依頼を受ける場合は、達成値（クリアポイント）が０になる代わりに報酬が２倍になるんですよ」

これは新情報だ。【ギルド初心者案内】にも記載は無かった。

「え！？」

「なので実力のある方はどんどんランクアップして、自分のランクより下の討伐系依頼（クエスト）を数多くこなす方がお金になるんですよ」

「なるほど！」

（ならランクアップも悪くない。せっかくだし上げてしまうか。）

「判りました。受付カウンターは１階でしたよね？」

「ええ。階段上がって正面です」

亮真は軽く頭を下げ、足早に階段を上っていった。

「はい。調達系依頼を受けられるのですね？」

「ええ。野犬野蜂野兎の討伐で取得できる材料を納める依頼を全部お願いします」

受付のカウンターに居た青年は、慣れた手つきで次々と依頼の説明をする。

「ええっと。それぞれ収めていただく材料1個当たり、野犬の牙が2バーツ、皮が5バーツ、野蜂の毒針が2バーツ、羽が5バーツ、野兎の耳が1バーツ、皮が5バーツですね。達成値は納品1つに対して1ポイント。期限は特にありません。引渡しカウンターで品物を渡してくだされば終了です」

「それでお願いします」

「かしこまりました。よろしくお願いします」

受付カウンターを後にした亮真は再び地下の受け渡しカウンターへと向かった。

「依頼受けられました？」

「ええ。とりあえず全部受けてきました」

亮真がそういうと受付嬢は困った顔をした。

「え？全部受けてきたんですか？」

「え？不味かったですか？」

「いえ。でも御子柴さんがお持ちの材料を全部納品するとシングルHヘランクアップされても達成値が余りますよ？」

そこで亮真は気がついた。

シングルHヘランクアップしてしまえば達成値は0になってしまう。

達成値が得られないのならギルドに納品するより魔法道具屋へ売った方がお金になるのだ。

（まぁいいか……腹は減るし時間も時間だしな……鍛冶屋に剣を研ぎに出してからメシ食べて宿屋を探せば22時近くになる）

ギルドの壁に掛かった時計は夜の20時を過ぎた辺りを指していた。

「今回は良いです。全部こちらで納品します」

依頼の破棄も可能だが、破棄すると達成値が下がるのでややこしい事になる。

うまく数を調整して納品すれば無駄なく達成値を稼げたが空腹には勝てなかった。

「判りました。ではこちらに納品物を置いてください。」

亮真は背負ってきたリュックの中身をカウンターの上に広げたのであった。

「ふざけるな！」

ギルド1階の受付カウンターに男の怒声が響く。

「こっちは命がけで依頼(クエスト)を果たしたんだ！それなのに金が払えないってのはどういうことだ！」

亮真は調達系依頼(クエストを)終わらせランクをシングルH(エイチ)に上げた。

食事へ行こうと亮真が1階へ上がって来たところに其の男は居た。

髪を肩より下で束ね、鉄の鎧を纏った大男が怒鳴り散らしている。

相手をしているのは、先ほど亮真の依頼処理を行った青年と、中年の男性だ。

「ですから！先ほどから申し上げているとおり、討伐対象が違う以上報酬はお支払いできませんし、依頼期間を過ぎているので違約金のお支払いをお願いします！」

ひ弱に見えた青年が毅然とした態度で大男に言い放つ。

「何をぬかしやがる！こちとら必死で探索してようやく見つけたんだぞ！？」

「ゴラエスさん、だから私は言ったじゃないですか！きちんと確認しないと不味いですよって！」

中年の男が言い出した。

「なにおぅ！テメエは監視員だろうが！」

青年は首を振りつつ言った。

「ゴラエスさん。あなたは傭兵としては非常に高い評価を得ておられます。しかし冒険者としての力量はいまいちのようですね。今回あなたは依頼(クエスト)【紅月団】の討伐を受けられました。しかし探索に手間取り十分な調査をしないまま、たまたま見かけた盗賊を討伐された」

青年は中年の男に目をやった。

「ギルツさんも注意された様に、きちんと調査をするべきでしたね。今回ゴラエスさんが違う盗賊を討伐されたのは間違いありません。つい先ほど【紅月団】により近隣の村が襲われ若い娘さんが数人攫われたとの情報が入ってきています」

青年の視線がゴラエスを貫く。

「もちろん此の被害の原因がゴラエスさん！全てあなたの所為だとは言いません。でもきちんとあなたが対応していればひょっとしたら今回の被害は防げたかもしてません！その辺を考慮の上でまだギルドの対応にご不満ですか？」

まさしく寸鉄(すんてつ)人を刺すだ。

あれほど息巻いていたゴラエスがだんだんと肩を落としていく。

さほど頭が悪いわけではないらしい。

少なくとも、自分の非を悟る知性と度量はあるようだ。

「う…すまねぇ……判った……違約金も払う」

ここで青年の顔も弛んだ。

「すみません。ゴラエスさん。少し言葉が過ぎました。あやまりま

す」

青年はゴラエスに頭を下げる。

「悪いのはこっちだ。すまねぇ……ランクが低めだったんで受けたが、やっぱり傭兵に冒険者の真似は無理か……違約金は口座から引き落としてくれ」

ゴラエスはそういい残すと、肩を落としてギルドを去っていく。

（依頼（クエスト）ってのは他人の人生が掛かるのか……）

たまたま目の前で起こったこの事件は亮真の心に強い衝撃を与えた。

亮真は自分の甘さを痛感した。

どこかで依頼（クエスト）を現実離れしたゲームの中の出来事だと思っては居なかったか？

だからさっきのように依頼（クエスト）を破棄すれば良いなどと軽く思ったのではないだろうか？

亮真の視線に気がついたのか、青年はこちらに近寄ってきた。

「御子柴さん。どうされました？」

「あぁ、いえ、調達系の依頼（クエスト）を終えたので今日は宿で休んで、明日改めて依頼（クエスト）を探しに来るつもりでした」

さっきまでの厳しい表情とは打って変わってにこやかに話しかけてくる青年にやや気押されながら亮真は言葉を返した。

「なるほど。それでさっきの場面に出くわしたと。びっくりされましたか？」

「ええ……そのとおりです」

「意外と多いんですよ。ああいうこと。」

青年の顔が曇る。

「依頼（クエスト）の未達成ですか？」

「ええ。本人の特性や経験を自分で把握できないと今回のゴラエスさんのようになりますね。あの人も優秀な傭兵なのですよ。だから戦闘技術に関しては何の問題も無いのです。しかし調査や探索に対しての意識が無かった。それこそ他の冒険者と隊（パーティー）を組むという選択も有ったんですけどね」

「なるほど。自分で出来ないなら出来る人間を仲間にしろということですか？」

亮真の返事を聞いて青年の表情が緩む。

「フフフ。あなたは素直だし賢い。今後も頑張ってくださいよ？」

「はい。ありがとうございます」

青年は亮真へ微笑みかけるとその場を離れようとしたが、何かを思い出したかのように足を止めて振り返った。

「ああっ！そうだ。先ほど話しに出た【紅月団】ですがメルフェレンからアルー間の街道や村々を縄張りにしています。もしそちらの方面に行くなら注意してくださいね」

去っていく青年の背を見ながら亮真は考え込んでしまった。
（アルー方面に盗賊が出るだと……）
アルー方面。それは帝都から東部方面国境までの街道沿いの町の一つであり、亮真が次の目的地としている町の名だった。

「ダメだなこりゃぁ！買いなおしたほうが安いぜ？アンチャンよ」
教えられた鍛冶屋で研ぎを依頼しようと剣を渡した亮真に、鍛冶屋の親父は言い放った。

「ぜんぜんダメですか？」

「ああ。あんた一体どういう使い方をしたんだい？刃は完全に丸まっちまって、これじゃタダの棒だぞ？」

（まいったな……まさか1日で使い潰すなんて……）
亮真は確かに普通の人間よりは刃物の扱いには慣れている。
だが日常ではそう何度も刃物で肉を切る経験など持つわけも無い。

「ええっと……狩りで使ったんですが……」

「こんなに血脂で曇ってしかも刃がこんなに丸まって。あんた一体何日手入れをしてないんだよ？」

「今日一日なんです。昨日買った新品なんです……それ。」

亮真の言葉に鍛冶屋の親父は目をむく。

「バカいえ。こんな状態になるなんて。１０や２０斬っただけじゃこんなにはならんぞ？それこそ１００は超えなきゃ……」

だが鍛冶屋の親父は亮真の顔を見て悟った。

「冗談じゃ……ないようだな。」

「ええ。」

「悪いがウチじゃぁ此の剣より良い物なんてないぜ？ウチは鋳造（ちゅうぞう）専門でな」

それは亮真が店に入ったときに既に判っていた事だ。

「まぁ剣は良いです。手頃なの１本ください。それよりこれは研いでもらえますか？」

そういうと亮真は脂で曇った戦輪（チャクラム）１０枚を差し出した。

「？？何だコリャ？これも刃物かよ？」

「縁が刃になっています。」

初めて見たのだろう。親方は興味深そうに戦輪（チャクラム）を手に取る。

「まぁこれはそれほど酷く無いな……何時までに仕上げればいいんだい？」

「出来れば明日の朝頃までに」

「そうだなぁ、１つ1時間掛かるとして明日の１０時で良ければ引き受けてやるよ。」

（１０時か。まぁ少し宿屋でゆっくりして、ここに寄った後ギルドに行くか……）

「判りました。それでお願いします。お幾らですか？」

「そうだなぁ……剣も買ってくれるっていうし、４００バーツでどうだ？」

今日一日で２０００バーツ近くを調達系の依頼（クエスト）と討伐系の依頼（クエスト）の達成で稼いだ亮真にとってさほど問題になる金額でも無い。

（帝都の鍛冶屋で買った剣より安いのは鋳造式の剣だからか……）

「判りました。明日１０時にお伺いします」

そういうと、半金を支払い亮真は鍛冶屋を後にした。

（とりあえずはメシだな……）

空腹を抱えて亮真はメルフェレンの町へ消えて行った。

第1章第16話

異世界召喚3日目【救出】その1‥

亮真が異世界へ召喚され3日目を迎えた。
時刻は正午ごろ。
亮真はアルーへ向かう街道を歩いていた。
この日亮真は少し遅めの起床し朝食を取った後、鍛冶屋へと向かい研ぎに出した武器を受け取った。
（盗賊団か。出会わなければいいがな……）

アルーへ向かう前に依頼（クエスト）を受けにギルドへ出向いたときの事を亮真は思い出していた。

「さぁ！腕に覚えのある人は是非此の依頼（クエスト）を受けてくれ！」

昨日受付の青年にギルツさんと呼ばれていた中年がギルド前に立てた掲示板の前で大声を張り上げる。
人ごみを掻き分け亮真は掲示板に張り出された紙を見た。

―――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――
――――――――――――――――　告

メルフェレン～アルー間に出没する盗賊団【紅月団】の討伐隊（とうばつパーティー）を編成する。
条件‥
盗賊団【紅月団】の殲滅。
必ず全員を殺害または捕獲する事が絶対条件。

報酬：
報酬は盗賊団員1名に対して5万バーツ。
確認されている団員は8名。
ただしそれ以外でも盗賊団員を認めれば1名に対して5万バーツの報酬を払う事とする。
盗賊団が所持している財宝および所持金に関しては、討伐隊(とうばつパーティー)の副収入とし良い事とする。
達成値(クリアポイント)は討伐隊(とうばつパーティー)全員へ５０Ｐポイントを依頼達成報告時に加算するものとする。

期間；
討伐隊(とうばつパーティー)編成から半月以内とする。

募集要項；
シングルＦ(エフ)ランク以上の者で以下の能力を保有している事。
戦士、法術士（どの系統でも可）どちらでも可とする。
傭兵経験を持つ者（十分な戦闘経験が有るならば冒険者でも可）
募集人数：６名
探索および調査能力を持つ者（十分な探索経験が有るならば冒険者、傭兵共に可）
募集人数：４名
※戦闘能力を持つ者は優先して採用。
承認者：メルフェレン　ギルド支部長　アクレス・レキーネ

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――

張り紙を見た亮真の耳に周りの男達の話し声が聞こえてきた。

「おい！一人倒せば5万だとよ！８人で４０万！それにお宝も討伐したヤツの物ってか！」

「うひゃぁ。ギルドもえらい奮発したな？」

「仕方がねぇよ。ゴラエスが失敗したらしいからな……ギルドとしても面子（メンツ）が有るんだろうぜ」

「なに！？”岩砕き”のゴラエスがか？」

「ああ。何でも別の盗賊団を始末して来たらしい」

「は！調査もしないで討伐に行ったのか！馬鹿だねぇ……まぁアイツならそんなもんか！強いのは強いがオツムの方は空っぽだからな」

「おいおい。ゴラエスに聞かれたらお前の首なんざぁ引きちぎられるぞ？」

「おおっと……口が滑ったぜ……」

周りの男達も傭兵や冒険者のようだ。

（ゴラエスさんも大変だな。そぉ悪い人でもなかったみたいだけど……）

男達の心無い批評を聞きながら亮真はギルドの中へ入っていった。

「大変申し訳ないのですがメルフェレン～アルー間の配達系依頼（はいたつけいクエスト）は全て停止とさせて頂いています。緊急の配達などもあるのですがこちらはEランク以上の方のみとなっていまして御子柴さんへはご紹介出来ないんです」

受付カウンターに居た女性は亮真にそう告げて頭を下げた。

「例の盗賊団ですか？」

「えぇ。ギルドとしては今回の失敗で大きく威信を損ないましたから……領主様や警備隊の方からもねじ込まれまして……あ！ごめんなさい。今のは忘れてください」

「いえいえ、それは良いんですが。それじゃぁ何か俺でも受けられる依頼ってありますか？」

「そうですね～。Iランクの討伐系依頼（とうばつけいクエスト）3種とHランクの討伐系依頼（とうばつけいクエスト）ですかねぇ。現状だと」

「Iランクの依頼（クエスト）って上のランクの人が受けると達成値（クリアポイント）は0だけど報酬は2倍なんですよね？」

「ええ。そのとおりです」

「あと、期限に関してなんですけど？」

「Bランク以下の討伐系依頼（とうばつけいクエスト）は原則期限はありませんよ」

「ああ？そうなんですか？」

「ええ。だからBランク以下の討伐系の依頼に関しては受けておいたほうがいいですよ？」

「ならシングルHで受けられる討伐系依頼全部受けます」

「判りました。ではこちらをご覧ください」

そういうと彼女は一冊の本を差し出した。

「これは？」

「Hランクで受ける事の出来る討伐系依頼の一覧と討伐対象名、報酬額、生息地を表にした物です。Hランクで受けられる依頼は２０存在しています。全てを口頭で説明するのは大変なのでHランク以上の討伐系依頼をはじめて受ける際に一覧をお渡しするんです。よく読んでおいてください」

「はぁ……判りました」

それほど厚みが無いのが唯一の救いだ。

（ランクが１個上がっただけでそんなに変わるのか……）

「では依頼の方はカードに登録したので手続きは以上です。お疲れ様でした」

受付嬢はそういうと頭を下げる。

亮真は渡されたカードと本を手にギルドを後にしたのだった。

メルフェレンを後にして２時間ほど過ぎた頃だろうか。

街道は鬱蒼と茂った森の中を貫いていた。
馬車が3台以上すれ違えるほどの道幅あるため歩くには問題ないが、森に目を向けると大木が生い茂りってる。
その所為で日の光が遮断され昼間と言うのにやけに薄暗かった。
しかも例の盗賊団の所為だろう。
街道なのに誰も歩いていない。
今街道を歩いているのは御子柴亮真タダ一人だ。

（おいおい……嫌な予感がするんだけど……）

薄暗い森に挟まれた街道。
兵を伏せるには絶好の場所だ。
当然、盗賊団が襲ってくるのにもちょうどいい場所でもある。

（まぁ大丈夫だと思うんだけどな……）

亮真がアルー行きを決行したのは、帝国からの追っ手を意識したからだ。
少しでも早く国境を越えてしまいたい。
だがそんな彼の思惑は、女の絹を裂く悲鳴の所為で崩れ去った。

「きゃぁぁあ！」

「うるせい！静かにしねえか！」

「イヤ！離して！」

「おとなしくしやがれ！」

丁度道が右へ大きく曲がる地点だ。
亮真の死角になっていて状況が見えない。
亮真は声のする方へ駆け出した。
亮真は街道の曲がり角にそびえる大木に駆け寄ると、木陰からそっと覗き見た。

そこに居たのは襲撃を受けた馬車と複数の男達、それに少女が2人。

「ククク。今日も大漁だなぁ。オイ。最近ツキがめぐってきたんじゃねぇか？」

「まったくだ。昨日の村も意外と溜め込んでいたしな」

「女も田舎の村の割には悪くなかったな。尤も俺らには回ってこなかったが……」

「そりゃぁしょうがねえさ。売り払うのに犯したのと手付けてないのだと値段がぜんぜんちがわぁ」

「年増ばかり相手にするのも飽きたぜ。やっぱこいつらみてえに若いのじゃねえとな」

一人が仲間が捕まえている少女達を指した。

「ハハハ。違えねえや！」

「おい！商品に手を出すんじゃねぇぞ？頭領（かしら）に殺されるぜ？」

金髪の少女を捕まえている男が仲間に言った。

「だがよぉ。これほどの上物だぜ?」

銀髪の少女を捕まえている男が言い返す。

「そうだぜ?それによ。ノルマはこの馬車の荷で十分じゃねえか?」

馬車の中身を漁っていた男が出てきて言った。

あちこちから賛同の声が上がる。

彼女達ほどの美女を前に押さえが効かなくなってきているのだ。

「私達に手を出したら舌を噛みます!」

男達の話を聞かされ遂に我慢できなくなったのか、銀髪の少女は毅然と叫んだ。

だが男達の笑みは消えない。

「ハッ!俺達はお前ら奴隷が其の首輪で自殺できない事も、反抗できない事も知ってるんだよ!」

少女達の顔が真っ青に引きつる。

まさか盗賊たちが其の事を知っているとは思わなかったのだろう。

男の言うとおり首輪に付与された力が彼女達の行動を阻む。

自殺する事も反抗することも、彼女達奴隷には許されない事だった。

「でもまぁ念のためだ。オイ、2人に布でも噛ませておけ」

「止めて。放して!」

2人は必死で男達の手を振りほどこうとするが、純粋な腕力で敵うはずも無い。

「オイ！あんまり聞き分けが無いと、向こうの女がどうなるか判らないぞ？」

「！」

抵抗した銀髪の少女が、もう一人少女に剣が突きつけられているのを見て観念したのか、おとなしくなった。

「しかし、お前らのご主人様も薄情だよなぁ？俺らに襲われて自分だけ護衛とトンズラだもんな」

銀髪の少女に脅しをかけた男が彼女達をあざ笑う。

「ゲイツよ。そりゃぁしょうがねえんじゃないか？俺ら【紅月団】に狙われて命があるだけましよ」

「ちげえねえ！」

ゲイツと呼ばれた男が高らかな笑い声を上げた。

「オイ！これ見ろよ。５００万バーツはくだらねえぞ！」

幌の下か持ち出した品を物色していた男が叫んだ。

「うおぉぉ。信じられねえ。本当に５００万はあるぞ……」

「これ全部金貨かよ……」

雑貨類や衣装、宝飾品と言った物が詰まった箱の他に、貨幣（コイン）の詰ま

った箱が一つ。
中は殆ど金貨ばかりだ。
男達の顔が厭らしく歪んでいく。

「なあ、こんなに稼いだんだったら、この女共は好きにして良いんじゃねえか？」

「おう。俺もそう思うぜ……金貨に宝石類。こんなにあるんだ。先におこぼれを貰ったってかまわないだろうよ。」

「だが頭領（かしら）にばれたら……」

心配そうな表情を浮かべる男にゲイツは歪んだ笑みを浮かべて言い放った。

「なぁに。犯した後で2人とも始末すればいいじゃねえか？どうせ獲物に女奴隷が居たかどうかなんて俺ら以外には判らねえんだぜ？」

ゲイツの言葉を聞き男達の顔にも厭らしい笑いが浮かんだ。

（1・2・5……7人か……）

大木より１０Ｍ程先に男達は居た。
男達の服装は街中でみた傭兵や冒険者と大差ない。
鎧を着、武器を持っている。
だが其の顔に浮かんでいるのは残虐な捕食者の顔だ。
他者を犯し、傷つけ、奪い、殺す。
自分達が強者であるとゆう驕りと自信。
彼らの顔にはそれらが陰のようにこびりついていた。

（醜い面をしてやがる……）

亮真は１６年の人生の中で、これほど欲望に歪みきった醜い顔を見たことが無かった。

（どうする？助けるか？……でも。ここで面倒に関わるのは不味い……）

亮真は躊躇した。

（ここで彼女達を助けても何も面倒は起きないかもしれない。だが。起きるかも知れない……。助けるなら７人全員を確実に始末しなければ……１人でも逃がせば援軍を連れて仕返しに来るだろう。できるか？この距離で彼女達を盾に取られれば俺に打つ手は無い。）

助けるべき理由。
助けるべきではない理由。
自分の保身。
自分の正義。
帝国の追手。
いくつもの要素が脳裏を駆け巡る。
そんな亮真の耳にゲイツの下卑た言葉が届いた。

亮真の顔に怒気と殺意が浮かぶ。
（俺は何を悩んでいるんだ。こんな連中を生かしておいていいのか？）
正直な気持ちだ。
（俺がここでコイツらを見逃して仮に元の世界に帰れたとしてそれで良いのか？俺はそれで納得できるか？）

この訳の判らない異世界へ無理やり召喚され、元の世界に帰る為にはどんな手段だって取るつもりだった。
この国の民全ての命と引き換えで帰れるのなら、引き換えても良いとさえ思っている。
だがそれでも目の前の女の子が犯され殺されるのを黙ってみている程、割り切れては居なかった。
（俺の両手は血に染まっている。別にそれが悪いとは思わない。無理やりこの世界に引きずり込み、死ぬまで戦わせようとした連中の命など俺にとってゴミみたいなもんだ。元の世界に戻ってこのことで批判されたって俺は堂々と言える。「必要だから殺したんだ！」と、だが彼女達を見殺しにして同じ事が言えるか？……無理だ！他人がどうのじゃなく俺自身が俺を許せねえ）

目的のためには冷徹で冷酷になれる亮真も、基本的には善良な人間と言う事だ。
世間一般の常識や正義感を持ち合わせて普通の人間。
唯一違うとすれば、それは覚悟だけだ。
相手を殺してでも其の正義を貫こうと言う覚悟だけが、普通とは違うかも知れない。
亮真は戦輪（チャクラム）を袋から掴み出すと、奇襲を掛ける為に最適なポジションへと森の中を駆ける。
もし奇襲に失敗すれば人数上圧倒的に不利だ。
それに今回は顔を隠してない。
もし一人でも逃がせば援軍を引き連れて仕返しに来るのは目に見えている。

（成功の確率を上げるにはしょうがねえか……悪いな）
亮真は心の中で危機迫る彼女達へ謝罪した。

第1章第17話（前書き）

今後ともよろしくお願いします。

第1章第17話

異世界召喚3日目【救出】その2：

亮真は南側の森の中に居た。
少女達と男達の姿が全て視界に入る位置だ。
距離にして10M程だろうか。
木の枝と葉に遮られ街道の男達からは亮真の姿が見えない。

（あいつら……こんな街道のど真ん中で犯すつもりかよ。）
亮真は始めどこか場所を移すのではないかと考えていた。
だが連中は街道の真ん中でヤル気らしい。
馬車を襲ってからかなり時間が経っているのも関わらずまるで気にしていない。
いくら人気の無い森の中の街道とはいえ異常と言って良いほどの自信だ。

（獣共（ケダモノ）が……）
亮真は彼らに嫌悪感を持つのと同時にある種の違和感を覚えていた。
だがそれらを全て振りほどき、亮真はタダ静かに待つ。
猛る怒りと殺意を抑えながら。
其の時を。

「よぉし。決まりだ！この事はここだけの秘密だ。頭領（かしら）にバレればここに居る全員が殺されるんだからな！」

ゲイツの言葉に男達は一斉に頷いた。

「よし。ならこの金髪から犯そうぜ！」

金髪の少女を抱え込んだ男が言った。

「俺はこっちの銀髪だ！」

男達は好き勝手な事を言い出した。

「おい？ゲイツどうするよ？」

「あぁん？好きにすればいいじゃねえか？まぁ俺はこの銀髪の初物をいただければそれでいい」

「あ！ゲイツ。何テメエ勝手なことを言ってやがる！そいつの初物は俺のモノだぞ！」

よほど餓えているのか、醜い言い争いを行いながらもようやく順番を決めたらしい。

「おい！最後のヤツ。オメエらは見張りだ。まぁギルドの討伐部隊は編成中らしいし、まだ帝国軍も動いてねえから心配は無いが、またカモが来ないとも限らねえ。しっかり見張るんだぜ！2番手はしっかり女共の手を押さえつけてろ！」

ゲイツの指示に男達が従った。

（アイツが集団のボスか。）

いよいよだ。

戦輪（チャクラム）を掴んだ腕に力が入る。

「よし！」

男達は一物を取り出すためにつけていた直垂（ひたたれ）とズボンを膝まで下ろす。

（いまだ！死ね！）

押さえ込まれた少女達に男達の体が覆いかぶさった瞬間、亮真の手から戦輪（チャクラム）が風を切り裂いてゲイツと呼ばれる男を目掛けて飛んでいく。

「ぐはっ……」

亮真の手から放たれた戦輪（チャクラム）がゲイツの無防備な後頭部へと吸い込まれ、ゲイツが少女の体に倒れこむ。

それを視界に納めながら亮真は2枚目3枚目を次々に放ち、森の中から飛び出した。

狙いは少女達を押さえつけている男達だ。

「ぐぇぇぇ1」

「ぎゃぁぁぁ！」

2枚目の戦輪（チャクラム）は喉へ3枚目の戦輪（チャクラム）は男の眉間へと吸い込まれていく。

しかし4枚目の戦輪（チャクラム）は男が咄嗟に伏せた所為で頭上を飛び越えていってしまった。

（あと4人）

亮真が少女達が犯されそうになるまで動かなかったのには理由がある。

それは武装の解除だ。
男が女性を犯そうとしたとき、ズボンを下ろす。
今回のように直垂(ひたたれ)をつけていればそれと一緒に、腰の剣も外さなくてはならない。
今回どうしても勝たなければならない亮真は、少女達の心の傷を考えなくは無かったが、結局犯される寸前まで待ったのだ。
しかし其の成果は十分に出た。
初撃で集団の頭であるゲイツを倒された男達は連携を失った。
少女達を犯そうとした2名は直垂(ひたたれ)を外しズボンを膝まで下ろしていた。
咄嗟に戦闘体制を整えるなど不可能だ。
見張りとの距離がかなりある以上、亮真が最初に戦うべきは少女達を抑える役をしている男達1人だ。

「なんだ?どうしたんだ?」

街道を見張っていた男達が異変に気が付き駆け戻ってくる。

「てめぇら何処を見張ってやがる!襲撃だぁ!」

欲と恐怖で濁った目をした盗賊の一人が叫ぶ。

「何だテメエは!」

「ふざけやがって。【紅月団】をなめてるのか!」

怒声を上げながら駆け寄ってくる男達を無視して、亮真は少女達の方へと駆け寄った。

「テメエ!死にやがれ!」

戦輪（チャクラム）を避けた男が、少女を押さえつけるのを止めて剣を抜く。
大きく上段へ振りかぶると渾身の力を込めて振り下ろした。
脇に構えられた亮真の剣が振り下ろされた剣の軌道に重なる。

ギギィン

鉄のこすれる音が響き火花が散った。
振り下ろされた剣。
振り上げられた剣。
勝ったのは振り上げられた剣だ。
男が狙ったのは亮真の頭だが、亮真が狙ったのは男の剣その物だ。
剣が手から弾き飛ばされる事こそ防いだが、男の右手は大きく後方へ弾かれた。

グシュ。

水気を含んだスイカを叩ききるような鈍い音が響く。
亮真の剣は男の頭を叩き割った。

（後3人！）

だがさすがに奇襲の効果も薄れてきた。
見張りに行っていた3人はしっかりと武装し、こちらの隙を伺っている。

（突っ込んでこねえか……糞！）

戦況はこう着状態に陥った。
3人の盗賊たちは武力だけなら亮真の敵ではない。

だが、巧みな連携を見せて亮真に隙を見せない。
亮真もまた剣を鞘に納め、腰貯めに相手の動きを待つ。
両者の間でにらみ合いが続く。

（このままじゃ不味いな……しょうがねえ勝負だ！）

突然亮真が構えを解き、殺意を消す。
右手は剣を握ったままごく自然に脱力していた。
そして亮真はゆっくりと盗賊たちのほうへ歩み始めた。
今まで怒気と殺気が痛いほどに迸（ほとばし）って居たのとは裏腹に、其の顔には何の感情も浮かんで居らず、まるで人形のように生気を感じられない。

「と……止まれ！」

「何のつもりだ?!」

これは盗賊たちの虚を突いた。
体から力がぬけ、どう見ても隙だらけだ。
タダの一撃で殺す事が出来る。
そう思わせるほど亮真は無防備に見える。
1歩2歩……
少しずつ自分達へ近づく亮真の姿に盗賊の1人が耐え切れなくなった。

「ふ……！ふざけやがって！死にやがれ！」

大きく振りかぶった剣を亮真の頭上に落とす。
フッ
亮真の体が右側へ流れる。

ザシュ。
鮮血が盗賊の首から飛び散った。

「テ……テメエなにをやりやがった?!」

人1人を切り殺し、鮮血が顔に飛び散りながらもまったく表情の変わらない亮真に盗賊たちは恐怖を感じ始めた。
3人で連携していれば手を出す事は難しい。
だが焦りと恐怖に縛られた盗賊に生き残る術はもはや無かった。
大きく振りかぶられた剣。

ザシュ

グシャ

盗賊のがら空きの胴を薙ぎ切った亮真は返す刀で最後の盗賊を袈裟掛けに切リ捨てる。

最後の1人を斬り亮真は血振(ちぶ)りを行って剣を鞘に戻した。

「ふぅぅぅぅ」

辺りを見回す亮真の口から深いため息が漏れた。

(とりあえず何とかなったな……)

盗賊たちの死体の数を確認しながら亮真は思った。

「あ……あの?」

亮真の背後から声が掛かる。
亮真が振り返ると銀髪の少女達が駆け寄ってきた。

「あ！お顔が。」

そういうと銀髪の少女が自分が着ている服の袖で、亮真の顔の返り血を拭ってくれる。

「申し遅れました。私は姉のローラと申します」

「私は妹のサーラと申します」

銀髪の少女に続き金髪の少女が名前を告げた。

「あぁ。大丈夫だった？」

「はい。お助けいただきありがとうございました」

そういうと彼女達は深々と頭を下げた。

「いや。俺のほうこそ怖い目にあわせて悪かったね。もっと早く助けてあげられれば良かったのだけれども……」

「いえ、此の身を汚される事が無いだけ良かったです」

「妹の言うとおりです。どれだけ感謝しても足りません……本当にありがとうございます」

サーラの答えにローラが頷くと再び姉妹は深々と頭を下げた。

「そう言って貰えると俺も助かるよ……！」

亮真は改めて少女達を見て其のあまりの美しさに心を奪われた。
小麦色の肌に彫りの深い顔。
見事に引き締まった肢体に、女性を意識させる大きな胸。
アラブの踊り子を思わせる服を身にまとっているが、やけに首輪と手枷足枷が目立つ。
（こりゃあ。確かに盗賊共が血迷うのは無理もないか……）

だが亮真は彼女達に違和感を感じていた。
（どういうことだ？この子達盗賊より強いぞ？）

彼女達の筋肉のつき方、身のこなし、目配り。
どれをとっても武芸の心得があるようにしか見えない。
どうみても盗賊たちに犯されるような少女達には見えないのだ。

「あのう……？なにか？」

亮真の視線を感じたのか、ローラが尋ねてきた。

「ああ。いやごめん。ちょっと考え事を。ところで姓はなんていうのかな？」

「……奴隷に姓などございません……」

ローラの返事に亮真の顔が歪む。

首輪などをしているのでひょっとしたらとは思っていたが、この世界では奴隷が存在しているようだ。

「あぁぁ。ごめん……・・・」

「いえ。お気になさらないでください」

そう言いながらも彼女達の顔には陰が浮かぶ。
3人の間に微妙な空気が流れた。

（まいったな……余計な事を聞いちまった……）

頭では判っている。
何か言わなくてはいけないことを。
だが、実際にこんな場面に遭遇する事など早々無い。
いくら考えても帰ってドツボにはまるような言葉しか浮かんでこなかった。
結局この空気を変えたのはサーラの一言だった。

「あのぅ。失礼ですがお名前をお伺いしてもよろしいですか？」

いろいろ考え事をしてつい名乗りが遅れた。

「ああっと。悪い。俺の名前は御子柴、御子柴亮真って言うんだ。」

「御子柴様……御子柴様。改めて御礼を言わせてください。このたびはありがとうございました。」

そういうと2人は改めて深々と頭を下げた。

「いや。それはいいんだけどこれからどうする？良ければアルーの町まで送るけど？」

だが2人の返答は亮真を驚かせるものだった。

「いえ……申し訳ございません。私達はだんな様のご命令が無ければここを動けないのです。」

あまりにも予想外な発言を聞き亮真の思考が停止する。
2人を見るがとても冗談を言っているようには見えない。
亮真は恐る恐る2人に尋ねてみた。

「……それ本気か?」

「はい!」

2人はそろって首を縦に振る。

「其の旦那様っていうのは何処よ?」

襲撃を受けて死んだ中に居るのかと思いあたりを見回したが、死体の衣服から判断するとどうも居るようには思えない。

「襲撃の際に護衛とともにお逃げになりました。」

サーラの言葉に亮真は愕然とした。
まさか逃げた主の命令を待つ気でいるとは。

「もう一度聞くよ?旦那様ってのは君達を置いて逃げたんだよね?」

「はい。」

「君達はそれでも此処に残るの?」

「はい。旦那様のご命令が無ければ動けません。」

（おいおい……本気で言ってるのかよ。）

正直に言ってかなりめんどくさい展開といえる。
亮真にしてみれば早いところ町に送っておさらばしたい。
帝国の追っ手の件もある。
だが彼女達が動かないと言う以上、町まで連れて行くのは不可能だ。

（まぁしゃあないか。とりあえず夜営の準備と食料だけ置いていくか・・・）

２人の意思が変わらない事を知った亮真は、２人に指示して夜営の準備を始めた。
もちろん此処に２人を置いていくのは心苦しいが、何時までもかまっているわけにも行かない。

（まぁ出来る範囲で助けてやろう。）

ローラ達には夜営の準備を指示し、亮真は盗賊と護衛と思しき死体を運ぶ事にした。
だがこれが思わぬ事態を起こす。

２体目の死体を、街道から３０Ｍ程入った森の中に横たえていた亮真の耳に叫び声が響く。

（サーラの声！）

必死で夜営地へと駆け戻る。

木々の隙間から鎧を血に染めた盗賊の一人が、サーラを小脇に抱え馬上で叫ぶのが見える。

「てめえら！タダで済むと思うなよ！面は覚えてるんだ。何処までも追いかけて必ず殺してやるぞ！」

（クソ！。確かに殺したはずなのに！）

だがいくら亮真が考えても現実は変わらない。

腹を切り裂いて殺したはずの盗賊がサーラを抱えて馬で逃げようとしているのは間違いない。

亮真は腰の袋から戦輪（チャクラム）を取り出し盗賊へ向かって走り出した。

（まだだ。まだ遠い。）

あせる気持ちとは裏腹に、木の枝に邪魔をされ思うように走れない。

戦輪（チャクラム）は威力の高い武器だが１つ欠点がが有る。

弓ほどの飛距離は出ないのだ。

弓は有効射程１２０Ｍを超えるのに対し、戦輪は有効射程はせいぜい１０Ｍが良い所だ。

コンパクトで連射が効く戦輪だが飛距離は決して良くない。

亮真が街道に出たときには、盗賊は馬を駆り既に２０Ｍ以上離れてしまっていた。

「くそ！」

辺りを見回すが、馬はあの一頭だけだ。

尤も仮に有ったにしても亮真は馬に乗れなかったが。

「御子柴様！」

サーラを庇おうとして殴られたのか、ローラの口が切れて血が滲んでいる。

「大丈夫だ。俺が必ず何とかしてやる！」

安心させ陽とした亮真の言葉にローラが首を振る。

「いえ。お願いがあります！」

「お願い？」

「はい。申し訳ないのですが御子柴様の左手の薬指に傷をつけて頂けませんか？」

状況を理解しているとはとても思えないローラの言葉に亮真は疑問を覚えた。

「？？？」

だが彼女の表情は真剣そのものだった。

「お願いします。時間が無いんです。」

あまりの迫力に亮真は言われるまま剣で左の薬指を少し切った。

「これでいいの？」

「はい！」

ローラは亮真の剣を借りると同じように左手の薬指を少し切ると、亮真の前に膝を付いた。

「偉大なる契約の神ハーヴァよ。我が宣誓を聞きたまえ。」

（こいつは・・・祈り？）

「わが身、我が心、我が魂の全てを我が主に奉げん。」

亮真の戸惑いをよそに言葉は続く。

「全ては我が主の御心のままに！」

「御子柴様。左手をお出しください。」

ローラの言葉に導かれるように亮真は左手を差し出した。

「我れらが血の交わりを持って盟約となす。」

ローラの宣言と共に2人の指は重なり合い血が交じり合う。

鋭い光がローラの首から迸る。

突然アリアの首輪が音も無く砕け散り手足の枷が外れる。

「よし。いける！さあ、早く！」

ローラは全身の筋肉に力を入れた。

ふくよかな女性らしい肉体に下で絞り込まれた鋼の如き筋肉が盛り

上がるのが感じられる。

「ご主人様。力を使う事をお許しください。」

そうローラは言い放った。
訳の判らない無い亮真は其の迫力に押され頷いてしまう。
それを見たローラは呪文を唱え始めた。

「風の精霊シルフよ。我が求めに応じよ。汝が如き風の速さを我らに！風速加護（ウィンドプロテクション）！」

ローラの叫びと共に緑の光が2人の体を包み込む。

「ご主人様。さあサーラを取り戻しましょう！」

第1章第18話（前書き）

書けるときに書かないとまた何時仕事が忙しくなるか判らないので。
まだしばらくは不定期に更新することになります。

第1章第18話

異世界召喚3日目【救出】その3‥

「取り戻すだって?馬に今から追いつける訳が……」

サーらの言葉を聞き、亮真の視線がはるか彼方を見る。
盗賊の駆る馬は既に150Mは先を駆けていた。

「まだ大丈夫です。」

ローラはそう言うと再び詠唱を開始した。

「風の精霊シルフよ。我が求めに応じ。かの者を切り裂け。疾風斬(ウインドスラッシュ)撃!」

呪文を唱え終わったローラが右手を横に振りぬくと、其の軌跡に風の刃が生まれ盗賊の方へと飛んでいく。

フォン

風斬り音が盗賊耳に響く。

「な・・クソ!。なんで法術が使えるんだ!あのやろうも法術士だったのか?!」

亮真の顔を頭に浮かばせながら必死で馬を駆る。
だが盗賊がいくら悪態をつこうと現実は変わらない。

2発目3発目・・ローラの腕が振られるたびに腕の軌跡に沿って風の刃が生まれ盗賊へ向けて放たれる。

「ち・・畜生!」

次々と放たれる風の刃が遂に馬の後ろ足を薙いだ。
右後ろ足を突然断ち切られた馬は、その場に崩れ落ちる。

「さあ。参りましょう。」

馬を足止めすることに成功したローラは亮真の手を引く。

「おっ。オイ。」

ローラに手を繋がれたまま駆け出した亮真は直ぐに異変に気がついた。
亮真の体もまた羽が生えたかの様に駆け出した。
まさしく１０秒程で盗賊の倒れこんだ場所まで駆けつける。

亮真は今駆け抜けた距離を見返して愕然とする。

（こいつは……あの爺が使っていたのと同じ力なのか?さっき彼女が使った風。あれは間違えなく同じ力だった。なら今のこれはいったい……）

「風の法術の力ですわ。ご存知ありませんか?」

亮真の顔に戸惑いが浮かんでいるのを察してローラに不信感が広がる。

（この人は一体・・・あれほどの武芸の腕を持っているのに法術の知識が無いの？……いいえ、そんなことはありえないわ。でも……）

この世界での強者と法術は密接な関係を持つ。
仮に法術が使えないとしても知識としては誰もが持っていて当たり前のものだった。

亮真は返答に詰まっていた。

（知らないとは言えない。だが余計な事を言えばボロがでる。どうする！？）

沈黙がその場を支配した。

「姉さま。」

サーラが声を掛けてきたことで、２人の間に横たわった微妙な空気が一変した。

「怪我はない？サーラ？」

「ええ！きちんと受身を取ったから大丈夫。」

（受身……確かに可能かも知れないが、あれだけ疾走していた馬から放り出されて無傷で居られるとは……）

この姉妹は亮真の想像通りかなりの使い手らしい。

「そう。ところでサーラ。盗賊は？」

「馬の体に足を潰されて動けないみたい。どうしたらいい？姉様」

「ご主人様に決めていただきましょう。」

二人の視線が亮真に注がれる。

「俺か？」

（まぁ悩む必要は無いんだよな。）

亮真にとって盗賊など生かしておく利点が無い。

「俺が決めていいなら決めちゃうぜ？」

2人が頷くのを見ると亮真は剣を抜いて馬の方へと近づいていく。

「ブルブブブル」

「クソ！足がぁ！どけこのバカ馬が！」

馬の嘶きと共に、盗賊の悪態と馬に蹴りを入れる音が聞こえてくる。

「て・てめえ・・」

亮真が近づいてきた事に気がついた盗賊の顔が引きつった。

「おい！来るな来るんじゃねえ！俺に近づくな！」

だが亮真の足は止まらない。

亮真の手に剣が握られているのを見て盗賊の顔が恐怖に歪む。

「な……なあ？勘弁してくれよ。金か？金ならやるよ！それとも女か？そっちもやる！」

だが亮真は無言で歩みを進めるだけだ。

「て！てめ！下手に出れば付け上がりやがって！俺ら【紅月団】は団員３０名だぞ！？」

亮真は盗賊の前でゆっくりと剣を振り上げた。

「ま。待て！俺らはただの盗賊じゃねえ！ザルーダの私掠部隊だ！俺らに手を出せばザルーダ王国が黙ってねえぞ！」

散々盗賊のわめきを聞いた後、無言だった亮真の口が開いた。

「バカか？お前？」

「なに？」

今まで無言だった亮真の言葉に盗賊は思わず聞き返してしまった。

「お前を殺せば誰がお前達を殺したかなんで判らないじゃないか？死んでからそのザルーダ王国とかに知らせるのか？」

亮真の当然の疑問に盗賊の顔が呆けた。

「死人は何も出来ないさ。それにどっちにしろお前達を生かしておく気は無いよ。」

亮真の言葉の意味がわかったのか盗賊の顔色が変わる。

「や……やめろ。止めてくれ。俺には娘が！」

悪党の態度というものは小説も現実も大差が無い。
弱いものには噛み付き、強いものには哀れみをこう。
ライトノベルの主人公なら躊躇するかもしれないが、残念ながら亮真はそんなに甘くなかった。

「子供が居ようとどうしようと関係ないね。」

顔色ひとつ変えずに言い放つ。

「やめ……やめろぉぉぉぉ！」

男の顔が恐怖で引きつる。

ザシュ

盗賊の頭上に無慈悲な鉄槌が振り下ろされた。

「よろしいのですか？あっさり始末してしまって。」

「？なにか問題あったか？」

剣を鞘に納めた亮真にローラが声を掛けた。
どうやらこの姉妹で一番交渉事に慣れているのはローラらしい。

「いえ。ですがいろいろと聞くべき事が有ったのではないかと？」

「いや。正直に言ってあまり興味ないな。それにアイツの言葉が本当かどうかの判断材料も無いしね。」

「判断材料ですか？」

ローラの顔に訝しげな表情がよぎる。

亮真は内心人を信じやすい子だなと思いながらそれを口にすることは無かった。

実際亮真の考え方は人間不信に近いものがある。

「あんな盗賊の言葉を信じるほどお人よしじゃないだけさ。まぁ真実を喋っていたとしても関係ないけどね。……ところで妹さん、無事に取り戻せて良かったよ。」

「ありがとうございます。ご主人様。」

そういうと姉妹は深々と頭を垂れた。

亮真は謝意を受け入れながらも先ほどから気になっていた疑問を口にした。

「いや。それはいいけどさ。其のご主人様って何？さっきから気になってたんだけど。」

「先ほど私達と血盟を結んでくださったではありませんか？私達の主人になられたのですからご主人様とお呼びするのは当然ですわ。」

亮真の顔に疑問譜が浮かぶ。

少し考えた後に亮真の脳裏に浮かんだのは先ほどローラの求めで斬った指の血だ。

「血盟ってさっきのヤツ？薬指を切って血を混ぜた。」

「はい。」

するとローラの後ろに居たサーラが前に出てきた。

「ご主人様。私とも血盟を交わして頂けませんか？」

「そうね。ご主人様、サーラとも血盟を結んではいただけませんか？。」

（なんだこりゃ・・・どうなってるんだ？）

次々と話が勝手に進んでしまい、亮真は1人置いていかれたような格好だ。

亮真は思わず天を仰いでしまった。

「悪いんだけど勘弁してくれよ。というかローラも俺に仕えてくれなくていいよ。」

亮真の言葉がよほど予想外だったのか、姉妹の顔に悲しみが浮かぶ。

「そ……そんな。私達がお嫌いですか？」

サーラの目に涙が浮かびローラの表情が曇る。

「いや。そうじゃなくて。」

「そうじゃなくて？」

姉妹が亮真を上目遣いで見上げてきた。
絶世の美女といってよい二人の視線は亮真の心を掻き乱す。
乱れる心を抑え亮真は受諾の言葉を飲み込み尋ねた。

「君達、旦那様を待つんじゃないの？ここで」

「血盟を結んだ以上、アイツの命令を聞く必要はありません。」

ローラがあっさりと言い放った。

「ただサーラは今もアイツの拘束呪で縛られているので、此処から動く事が出来ません。ですからサーラとも血盟を結んで頂きたいのです。」

「？てことは町に向えるの？」

「「はい！血盟を結んで頂ければ。」」

二人の首が盾に振られる。

（しょうがないか。出来ればこの子達を此処においては行きたくないしな。）

追っ手から逃れる身でありながら、色々と厄介ごとに巻き込まれる自分が恨めしくて仕方が無かった。
しかし、助けられる手段があるのに見殺しにも出来ない。
亮真は大きなため息を一つついて言った。

「判った。とりあえず其の血盟ってのを結ぶよ。其の後は馬車の荷

物を整理して金目の物を持ってアルーの町へ向かおう。今から向かえば２０時頃にはつくはずだし。ただし街に着いたらどういう事なのかきちんと説明してもらうよ？」

「かしこまりました」

安堵の笑みを浮かべた姉妹の声が森に響いた。

亮真はサーラとの血盟の後、馬車まで戻り盗賊達が並べていた品物を点検した。

「おいおい。ずいぶん高そうな物ばかりあるな？」

金貨の詰まった箱の他に、サファイヤやルビーと言った宝石を散りばめた髪飾りや腕輪などが多数見つかった。

「奴隷を売るときに着飾らせるんです。そうすると見栄えが良くなって高値で売れるんです。」

「ふぅん・・・」

襲撃された馬車の大きさを考えれば１０人前後は奴隷が居たようだ。

「この金貨は私達の仲間を売り払った代金なんです。」

ローラ達姉妹と同じぐらい美しいのならば、其の代金としてこれほど多量の金を運んでいたことも頷けた。

姉妹の目には売られた仲間を思い出したのか涙が浮かんでいた。

ガサ・・・ガサ・・・パキ・・・

話を遮るかの様に森の奥から木々を踏み分ける音が聞こえる。

「ローラ。サーラ！」

亮真の声に姉妹が用意していた剣を抜いた。
もちろん盗賊の死体から剥ぎ取った剣だ。
即席にしてはかなり効率のよい陣形だ。

（怪物（モンスター）か？それとも盗賊の残りか？）

亮真の予想を裏切り聞こえてきたのは人間の声だった。

「旦那ぁ！此処ですぜ！」

森の木々を掻き分けて男が街道へ出てきた。
男は辺りを見回し、亮真と姉妹の存在に気がついた。

「おお！荷物は？商品はどうなっておる？！」

男の後に続いて鎧姿の男が3人現れた。
声は其の後ろから発せられた。

「どうやら盗賊共は逃げたようですぜ？荷物の方はダメなんじゃ無いですかね？……商品は大丈夫みたいですぜ？此処に居ます。」

「なに！？ローラ達め。生きておったか！どうだ？盗賊共に汚された様子は無いか？傷物にされていれば値が下がってしまう！」

「其の心配は無いみたいですが、ちょいと厄介な事になっているかもしてませんぜ？」

男の視線が亮真達３人に向けられている。

「なに！？どういうことだ？」

「旦那ぁ。とりあえず安全なようですし、いい加減こっちに来て下さいよ。」

「本当に安全なんだろうな？」

そう言いつつ草木を踏みしめる音が聞こえてくる。

（人か？これ）

亮真が思うのも無理なかった。

現れたのは身長１７０程、体重２００Ｋｇを軽く超えていそうな豚だった。

力士に見られるアンコ型といわれるような、筋肉の上に脂肪を纏った体型ではなく、日ごろの運動不足と暴飲暴食でひたすら脂肪のみが蓄積されたような体だ。

上半身裸で袖の無いベストを直接つけ、頭にはターバンを巻きズボンは白いアラビアンパンツとアラビアンナイトに出てくる商人のようだ。

（コイツが奴隷商人か。これならローラ達を置いて逃げたのも納得だな……）

亮真は目の前に現れた豚を見てある意味納得した。
おそらく奇襲を受けて直ぐに、なりふり構わず自分とその周りの護衛だけ連れて逃げたのだろう。
そうでなければこの肥満体で盗賊達の刃から逃げられるとは到底思えない。

「おお！2人共無事であったか。盗賊たちに汚され殺されたか、連れて行かれたかと思ったぞ！」

そう言うと姉妹達に歩み寄ってきた。

「来るな！」

サーラの剣が奴隷商人に向けられる。

「近寄れば刺します！」

だが奴隷商人にも護衛の男達にも嘲りの笑みが浮かぶ。

「旦那ぁ。お嬢様がえらい強気ですぜ？」

「まったく。奴隷としての分際をわきまえぬな。しつけが甘かったかな？」

「なぁお嬢さんよ。忘れちまってるかも知れないが、こちらに居る旦那がお前達の所有者だ。お前達はこの方の持ち物。持ち物の分際で主に剣をむけるたぁどういうつもりだ？」

「黙りなさい！もはや私達はお前達の所有物ではありません！」

「ガァハハハ。貴様ら勘違いしておるな？お前達はワシの物よ。大事に5年も掛けて磨き上げた大切な商品よ。」

「貴方は私達を捨てて逃げたではないですか！」

「当然じゃ？商品に固執してワシが死んでは意味が無い。だが捨てた商品がこうして元の場所に落ちて居るんじゃ。再び拾って何が悪い？」

まったく悪びれる様子の無い奴隷商人と護衛に、亮真は怒りより嫌悪感を感じていた。

「まぁまぁ。旦那ぁ。此処は俺達に任せてくださいよ。」

「そうですぜ。いくらあいつらが強くても主の居ない状態じゃ使えやしません。」

どうやら連中はローラ達姉妹が力を使えるようになったとは考えていないようだ。
5対3。
奴隷商人を倒せば、後は何とかなる。

「あそこの若造がなにやら吹き込んだんで調子に乗ってるんでしょうよ。」

そういうと連中の視線が亮真へと向けられた。

「なるほどな、貴様が余計な事を言ったのか。白馬の王子様って訳だ。まぁいい。盗賊の襲撃でこっちもだいぶ損害を出したしな。奴

隷は1人でも多いほうが良い。オイ！お前らあの若造も生け捕りにしろ。なかなか良い体格をしておる。労働奴隷としてなら売れそ…
…グフ。」

奴隷商人の首にいつの間にか銀色に輝く輪が突き刺さっていた。
無言のままに亮真の手から放たれた戦輪（チャクラム）が、奴隷商人の喉を切り裂いて其の言葉を途絶えさせる。
周りの護衛達に動揺が走る。

（バカが。しゃべり過ぎだ。）

相手に明確な敵意を見せていながら喋り続けるなど亮真から見れば愚かとしか言い様がない。

（わざわざ攻撃される隙を作るようなものだろうに……）

亮真の心の片隅に死んだ豚に対しての嘲りが広がる。
だが今は戦闘中だ。
亮真は侮蔑の心を押し殺し今やらねば成らないことを行う。

「今だ！」

亮真の声に反応して横の2人が前に飛び出す。
ローラとサーラが亮真の脇をすり抜けると、動揺し臨戦態勢を取っていない護衛たちに襲い掛かった。

（思ったとおりだな。）

亮真の想像したとおりの結果が目の前に広がる。

姉妹の剣にはそれぞれ特徴があった。
ローラの剣は力の剣。
高速で振るわれる剣が振りかぶった相手の剣と激突した瞬間、相手の剣を根元から折れ飛ばし、そのままの速度で男の頭部へと吸い込まれる。
サーラの剣は技の剣。
突きかかってくる相手の剣を巻き込んでそのまま相手の喉を貫く。

「な、なんだテメエら……なんで力が！」

一瞬の隙を突いた攻撃を受け瞬く間に護衛達は姉妹の剣に切り捨てられる。
一番初めに街道へ出てきた男だけが亮真の前に残っていた。

「フンッ！」

姉妹の目が冷酷な光を放ち生き残った護衛を貫く。

「ま、まてよ……オイ。」

ようやく自分の置かれている状況が理解出来たのだろう。
男の顔に焦りが浮かんだ。

「待てよ、なんで？なんで力が使える？……主の無い貴様らには使えるはずがないんだぞ！？」

護衛の言葉に姉妹が嘲りを含んだ笑みを浮かべた。
尤も全く油断していない。
全身に気が満ち、護衛が攻撃をしてくれれば即座に反応出来る様に態勢が整っている。

「こちらの方が私達の主ですわ！」

姉妹が亮真に視線を注ぐ。

「馬鹿な。奴隷が勝手に主など……血盟を結べるはずが……」

「私達は幼い頃から血盟の結び方を知っていたわ。私達のお父様から伝えられていたのよ。」

サーラの言葉に護衛の顔色が変わる。

「なに！ならなぜ今まで！？」

「あなたに説明する必要など無いわ。」

ローラの言葉を聴きながら亮真はゆっくりと男に近づいていった。

「クッ。クソ！覚えてやがれ！」

男は最後の賭けに出た。

形勢不利と見て逃げ出したのだ。

（判断は悪くない……だが失敗したな。）

逃げ出した男の背を見ながら亮真は心の中で呟いた。

男は森へ飛び込まず街道を走り出した。

森の中には怪物（モンスター）が居る。

それを恐れてのことだろうが其の判断が男の命を消し去った。

亮真は戦輪（チャクラム）を取り出し男の後頭部へと投げつける。

フォン

グシュ

戦輪（チャクラム）の風を斬る音に続いて、骨を切り裂く鈍い音が続いた。

「さてと。色々と聞きたい事が有るんだけどとりあえずアルーの町まで行こう。話は其の後だな。」

亮真は戦輪（チャクラム）を回収して2人へと言った。

「「かしこまりました。」」

亮真へ頭を下げると、2人は金目の物を整理しに散らばる。

（ちょっとした人助けのつもりがめんどくさい事になりそうだな……）

亮真を主と慕う2人の後ろ姿を見ながら亮真は嘆息した。

第1章第19話（前書き）

いよいよ国境突破です。
今度は無事に書き終えたいな・・・
今後ともよろしくお願いします。

第1章第19話

異世界召喚3～4日目【休息と今後】：

奴隷商人達を始末し其の死体を森の中に放置しした後、亮真達は金貨と宝石類をまとめて背負うとアルーの町へと街道を急いだ。
幸いな事に怪物（モンスター）や盗賊達の襲撃はなく、無事にアルーの町へ着いたのが22時頃。
町の食堂は既に閉まり、亮真達は町で唯一の宿屋に宿泊（チェックイン）したのだった。

「じゃあ、食べながら話すか。立ってないで座れば？」

亮真達3人の前には、宿屋の主人に無理を言って暖め直させたシチューとパンが用意されていた。
椅子を勧められた姉妹の顔に戸惑いの表情が浮かぶ。

「？どしたの？冷めるぞ？」

「奴隷がご主人様と同じ食卓で食べるわけには参りません。私達は後で食べさせて頂きます。」

「はぁ？」

ローラの言葉を聞き、亮真は思わず聞き返してしまった。

「奴隷が主と共に食事をする訳には参りません。」

「いや……有り得ないって……目の前にシチューがあるのに。大体冷めるぞ？」

「奴隷が暖かい食事をいただける事などありません。」

（この子達って一体……奴隷ってそんなに主人主人て言う物なのか？つうか俺が主人なのか。やっぱり……あ、いや！待てよ？）

「確認する。主人に従うんだな？」

「「はい。ご主人様にお使えする事が奴隷の役目でございます。」」

亮真の言葉に姉妹が声をそろえて答えた。

「主人って俺だな？」

「はい。血盟を結んでくださった貴方様が私達の主です。」

ローラの言葉にサーらが頷くことで答える。

「なら主人として命令する。一緒に座って食事にしよう。」

「「え？」」

予想外の言葉だったのか姉妹は互いに顔を見合わせた。

「メシはやっぱり1人で食べても美味くないしさ。今後に関しての話もしたいから、ほら！座って座って！」

2人はしばらく其の言葉に考え込んだ。

「……かしこまりました。失礼いたします。ほら、主人様のご命令です。早く席に着きなさい。」

意を決したローラが席に着きサーラを促した。

「よし！じゃぁ食べながら話そう。」

「「かしこまりました」」

亮真としては同じ食事なら楽しく食べたいと思うのが当然だったが、姉妹にとってはかなり居心地が良くないらしい。
一匙二匙のシチューを口に入れるとスプーンを置いて押し黙ってしまった。

（どうもぎこちないな……まあ話を聞いた限りでは奴隷ってのはかなり待遇が悪いらしいしな。いきなり直せって言うのも無理か。）

仕方なく亮真は血盟に関しての質問をすることにした。
食事時の話題としてはあまりふさわしくないことを自分でも自覚していたがいつまでも放っておける問題でもない。

「なら状況確認からだな。繰り返すけど俺が君達の主人になってるんだね？今」

「はい。先ほど結んだ血盟によって主従関係が結ばれております。」

「それだ！其の血盟ってなんなの？」

パンを頬張りながら亮真は尋ねた。

「血盟には2つの意味が有ります。1つは騎士階級が主君に忠誠を誓う儀式を指す場合。この場合は形式だけの儀式で拘束力は有りません。そしてもう一つが、戦奴隷≪いくさどれい≫が主に対して行う場合です。」

亮真は手に持っていたパンを食べることを止めた。

「戦奴隷(いくさどれい)？」

「はい。奴隷には労働奴隷や性奴隷の他に戦奴隷(いくさどれい)と呼ばれる特殊な奴隷がいます。読んで字の如く戦いに使われる奴隷なのですが、戦う力が有るということは当然、主人に対して反乱を起こせるということにもなります。そこで主人の許可を取らなければ一切の戦闘が出来ないように封印を施されているのです。」

亮真の顔に嫌悪感が浮かぶ。

彼は他人が個人の意思を侵害するという事が気に入らないのだ。

今回の話も結局奴隷を使役する人間の都合を押し付けているにすぎない。

奴隷の反乱を恐れると言う事は即ち反乱されるような扱いをすると言うことだからだ。

「なるほどね。じゃあ次の質問だ。何で君たちはそれを結べた？」

今のローラの説明ならば、奴隷に主人と血盟を結ぶ方法を教わるはずがない。

亮真がこれを聞いたのには訳がある。

限りなく低いが、帝国の罠の可能性を考えたのだ。

わざと亮真に2人を助けさせて信頼させ、油断させる事を狙っているのではないかと。

「そ……それは……」

よほど言いにくい事なのかサーラは口を挟んだが、ローラの目配せを見て押し黙る。

「いいのよサーラ。ご不審になるのも当然だもの。判りました。ご説明いたします。ただし申し訳ないのですがこの話はご主人さまの胸の中にだけ納めて頂きたいのです。」

その真剣で、決意と覚悟の浮かんだ眼差しに気押されながらも亮真は大きく頷いた。
亮真にしても他人の秘密を吹聴するという趣味は無い。

「私達の姓はマルフィストと申しまして、元は中央大陸西沿岸にあるクィーフト王国に使える上級騎士の家系でございます。」

(騎士の家系？ってことは貴族か？確かに美人だし気品はある。だがなんで貴族の姫さんが奴隷何ぞに……)

ローラの話は亮真の予想を超える話だった。

「てことは君たちの本当の名前はローラ・マルフィストっていうのかな？」

「はい。マルフィスト家は古くから武人の家系としてクィーフト王家に仕えておりました。今から5年前の話でございます。長年貿易相手として付き合いのあった隣国シャドーラ王国との関税に関して

の問題から戦となりクィーフト王国は破滅したのです。父の領地は王国の沖合に浮かぶ島でしたが、其処にも戦火の火の粉が降って参りました。」

当時の事を思い出したのか、姉妹の目に涙が浮かぶ。

「父は必死で領民と王国の為に戦いました。しかし宰相らの寝返りにより国王が暗殺された後は一気に形勢が傾いてしまい、父は領地の放棄を決定しました。」

「なら君たちはその時に逃げたのかな？」

亮真の言葉に姉妹が頷く。

「はい。数名の兵を護衛に付けて他国に落ち延びる予定でした。」

結局亮真以外はテーブルのシチューに手を着けなかった。
亮真ですら予想外に重い話を聞き食べるのを止めている。

「なんで護衛を付けた騎士のお嬢様が奴隷になんてなったのさ？」

「全ては私達の甘さが原因でございます。」

ローラの顔に苦渋の色が浮かぶ。

「私達は人の心の弱さを見抜けませんでした。あの日、領地の島より商船に偽装した船で隣国の海岸に渡った夜の事でございます。護衛達は私達を縛り上げると奴隷商人のアゾスへと私達を売り払ったのです。護衛はみな長年私たちによく使えてくれた信頼できるものたちばかりだったのですが……」

信じていた護衛達に裏切られ奴隷として売り飛ばされる。
悲劇と言って良いだろう。
まあ弱り目に祟り目という言葉のある通り、一つ悪くなれば全部が裏目に出てしまう事は良くあることだ。

「その奴隷商人のアゾスってのが昼に会った奴だな？」

「はい。私達は読み書きも出来ますし、武術も法術も基礎は習っておりましたので、戦奴隷としての教育を受けることになったのです。」

「なるほどね。それで血盟を結べた理由っていうのは？」

「父より血盟の儀式の行い方は聞いておりました。いずれ必要になると言われて。」

「そう言うことか……」

「はい。ただ奴隷の血盟は奴隷同士では出来ません。どうしても平民以上の方と結ばなくてはならなかったのですが。」

ローラの言葉に亮真は頷いた。
これは当然だろう。
奴隷同士で血盟を結べるならば、拘束の意味が無くなる。

「信頼出来る人間を探していたということか……なら俺を信頼したってことなのかい？」

「もちろんでございます。ご主人様はただお一人で、私達を守る為

に闘ってくださいました。私達がお仕えするのに相応しき方だと思います。」

「私も同じ考えです。」

ローラの言葉にサーラの声が続く。

「ふぅぅ……」

2人から事情を聴き終え、亮真の口から大きなため息が漏れた。

（まいったな。）

亮真の正直な思いだ。

2人の視線が亮真に集まる。

「話は判った。でもそれなら俺が君たちを自由にするよ。幸い奴隷商人がため込んだ金もある。姉妹で人生をやり直せば良いじゃない？」

「それは出来ません！」

ローラの言葉にははっきりとした意思が含まれていた。

「奴隷の身になったとはいえ私達は誇り高きマルフィストの血を受け継ぎ者。私達の純潔と生命を命がけで助けて頂いたのです。我等の命が尽きるまでお仕えさせてください。」

姉妹の目に覚悟の光が浮かぶ。

「いや。あのさ、恩を着せるために助けた訳じゃないし。そこまでしなくても良いんだぜ？」

もちろん恩に感じないで良いとは言わない。
やはりお礼の言葉くらいは欲しいものだが、これはやり過ぎだ。

「いいえ！お仕えさせていただきます！」

ローラの言葉にサーラが頷く。

「まいったなぁ……俺にも都合ってものが……」

言葉を濁す亮真にサーラが口を開いた。

「それはご主人が異世界人だという事と関係していますか？」

亮真の顔には相変わらず笑みが浮かんでいた。

「何の話だい？」

だがほんの微かな変化だったが姉妹には亮真の動揺が瞬時に伝わった。

「ご心配なく。他言する気はございません。ただ事情をお話しいただきたいと思います。」

少しの間沈黙が場を支配する。

「何故だ？」

亮真は口を開いた。

「亮真様にお仕えするには、状況をきちんと理解しておかなくてはなりません。だからぜひ事情をお話しいただきたいのです。」

再びの沈黙。

（どうする？口封じも考えられるが……いや、馬鹿な。そんな事をするくらいなら見捨てた方がましだったじゃないか。俺は彼女達を助けると決めた時に覚悟したはずだ……なら。）

様々な思考が亮真の脳裏を駆け巡る。

「判った。」

「「では！？」」

亮真の言葉に姉妹はテーブルに身を乗り出したが、亮真はそれを手で押しとどめた。

「二人の気持ちは判ったが、少なくとも俺は奴隷なんていらない。だから俺の事情を聞いてそれでも俺についてくるというのなら血盟を結んだ奴隷としてではなく、自由な意思を持つ人間として来てほしい。」

奴隷として強制的に着いてくるのではなく、一人の意思をもった人間として着いて来てほしい。

これが亮真に今出来る最大限の譲歩だった。

亮真の言葉に姉妹は互いに顔を見合わせ頷きあうと、ローラが高らかに宣言した。

「かしこまりました。それがご主人様の意思ならば！」

結局2人の決心は変わらなかった。

あの日亮真は自分が異世界により召喚された事。
召喚直後に兵士と召喚した術者と殺害して逃げ出した事。
現在帝国より追手がかかっている事。
顔が判られていない点が利点ではあるが、今後どうなるか判らない事。
自分と一緒に居る危険性などを細かく説明したが姉妹の決意は変わらなかった。
それどころか、「顔が知られていないならば、私達と居る方が尚更逃亡中だと判り難いのではないでしょうか？向こうは亮真様がこの世界で共を見つけているとは想像していないはずです。」などと献策してくるほどだ。
2人の決意と献策された利点、そしていずれ時期をみて奴隷の身分より開放すると言う条件の元、共に行く事を決めたのだった。

「本当に着いてくる気かい？俺はいずれこの世界から消えるんだぜ？」

亮真にしてみれば、いつまでもこの世界に居る気はないのだ。
例え誰も地球への帰還方法を知らなくても、自分で0から手段を作れば良い。
それだけの覚悟をしていた。
だがローラは微笑みながら言った。

「それならばご主人様が基の世界へお戻りになるその日までお仕え

させてください。」

するとサーラが口を開いた。

「お姉様。私達も亮真様の世界へ一緒にお連れ頂けば良いんじゃない？」

「あら。そうね。いい考えだわ！それならずっとお仕え出来るわね。」

サーラの言葉に亮真は愕然とした。

（おいおい……彼女達つれて戻るだって？爺に殺されるぞ、いや飛鳥にだって。）

亮真の葛藤をよそに姉妹の顔に笑顔が浮かぶ。

（まぁ先の事はしょうがない。まずは国境を抜ける事が先決だしな。）

次の日、亮真達３人はアルーの町で装備をそろえた。

姉妹は共に曲刀（シミター）を２本使うのが一番慣れたスタイルらしいが、あいにくアルーの町では扱っていなかった。

防具もやはりサイズが合ず（胸が大きいのに腰回りが細い為）武器屋で亮真の切れなくなった剣の代わりとあわせ、剣を３本と投擲用の投げナイフを３０本ほど購入して終わりとなった。

予想以上だったのは奴隷商人のアゾスの遺産だ。

銀行へ持ち込んだ金貨は予想通り５００万バーツを超えていたのだが、宝石商へ持ち込んだ宝石に驚きの値がついた。

「全部まとめてで３０００万バーツでいかがでしょう？」

「「「えっ！？」」」

宝石店の中に３人の声が響く。

「お値段にご不満ですか？私どもとしては正直これが精一杯でして・・・」

３人の声は値段の高額さに対しての驚きの声だったが、宝石商はそんなもんかよ！と言われたように思ったのか下手に出てきた。

「あ！いやいや・・・良いんですけど。」

指輪や首飾りなどかなりの数が入っていることは知っていたがまさかそんなに高値がつくとは予想していなかったのだ。

だが亮真の返事を聞いたトタンに商人の顔に笑みが浮かぶ。

（あぁん？コイツ・・・ひょっとして足元見てるのか？）

亮真達を素人と思い宝石商が値段を不当に低く出した可能性は有る。

だが実際に亮真達には宝石の鑑定など出来はしない。

追っ手が存在しているのに、多量の貴金属を持ち運ぶのも問題だ。

此処で金に換えてしまうしか選択肢は無い。

「さようですか！ではすべて引き取らせて頂きます。ただささすがにこの金額ですと現金では少々……恐れ入りますが口座振り込みでよろしいでしょうか？」

「あぁ……えっと」

亮真は思わず姉妹を見た。
口座を持っているのが亮真一人であるため当然亮真の口座を使うしかないのだが、自分一人の口座に振り込まれることに後ろめたさを感じたためだ。
だが姉妹が頷くのを見て亮真は自分のカードを差し出した。

「じゃあこれで。」

「ギルド登録の前に、銀行だな。」

「そうなのですか？」

サーラが聞き返してくる。
2人には冒険者に関しての知識はあまりないようだ。

「ああ。依頼（クエスト）の報酬も銀行振り込みで行われるので、口座がないと登録も出来ないんだよ。」

「そうなのですか。」

姉妹の顔に尊敬と驚きの表情が浮かぶ。

（この方は本当にスゴイわ。この世界に召喚されて数日しか経っていらっしゃらないのに、私達ですら知らないことをご存知だなんて。）

ローラが関心しているうちに亮真の足が止まった。

「さあ。此処だ。」

亮真達は大通りに面した銀行の玄関をくぐった。

３０分後。

口座開設の後３人はギルドへと向かい、姉妹の登録を果たした。

「さて。今後に関してだけど。」

３人は有る情報をギルドで聞き再び宿屋の一室に戻った。

国境の封鎖である。

ギルドで姉妹を登録しそのままアデルフォの町へ向かうつもりだったが、３人は予定の変更を余儀なくされた。

「はい。このままアデルフォへ向かうのは下策でしょう。」

ローラの言葉にサーラが頷く。

「私もそう思います。タダの封鎖なら町の守備隊へ大目にお金を払えば通れるのですが。」

「シャルディナ皇女か・・・」

亮真の言葉に２人が頷く。

「はい。皇女直々の命令での封鎖となるとまずお金では解決出来ないでしょう。」

大抵のことは金で解決できるが、さすがに皇女が直々に指揮をしている町で賄賂に目がくらんで目こぼしするヤツは居ないだろう。

「となると・・・進むか・・・引くか・・・」

3人の前のテーブルには道具屋で買った帝国領内の地図が有る。
民間用の為、街道と町の場所それにおおよその距離しか書かれていない物だが。

「引くとすれば向かう先は南ですかね・・・・」

南の国境に向かうにはアルーから南西に怪物（モンスター）の蠢く森を突っ切るか、一度帝都まで戻りそこから南下するしかない。
どちらを選択してもおよそ１０日程の行程だろうか。
森を突っ切れば距離的には短縮されるが怪物（モンスター）と遭遇することにより結局日数は変わらなくなる。

「いや・・南に行く気はない。帝国も一番注意するのは南だろうからね。」

帝都から尤も近い国境は南である。
追っ手は逃亡者である亮真が最短距離を選択するであろうと予測しているだろう。

「そうなると北か西ですが・・・」

ローラの顔にお勧めできないとはっきり書いている。
地図を見れば一目瞭然だ。
どちらも遠すぎるのだ。
地図上の直線距離にしておよそ３００ｋｍ以上

一日２０Ｋｍを歩くとして実に半月以上掛かる計算となる。
それ程移動に時間を掛けるなら、ほとぼりが冷めるまで帝国領内に留まる方がずっと安全だ。
だが時間を掛ければ帝国は其の豊富な兵力を動かして亮真を見つけ出すかもしれない。
将来を見通すならさっさと他国に逃れるほうが良いのは自明の理だ。
その辺は姉妹も十分に理解している。

「結局このまま東の国境を抜けるしかないか・・・」

亮真の言葉に姉妹が頷く。

「そこでですが私に案があります。」

サーラに視線が集まる。

「街道を避ける案？」

ローラの言葉にサーラが頷く。

「東の国境を抜けるしか方法が無いが、アデルフォは通れない。そこで街道を使わず森を抜けて直接ザルーダ王国へ抜けるのは如何でしょう？。」

サーラの指が地図上のアルーから街道を北に逸れ、森林地帯を抜けてザルーダ王国へと辿り着く。

（悪くない。だが・・・）

決して劣っているわけでも何か明らかな欠点があるわけではない。

だが。

（俺が東に逃げることを予測して国境を封鎖したヤツが気がつかないだろうか？）

この世界の街道には結界が張られよほどの上級怪物（モンスター）でなければ超えられない。

街道を使えば安全に移動することが出来る。

これはギルドの初心者ガイドに書かれていることだ。

ただし必ずしも街道を通らなければ行き来が出来ないかといえばそうではない。

腕に自信が有り、安全で快適な宿屋での一泊を諦めて森の中で一夜を過ごす覚悟が有るならば森を抜けるという方法も存在する。

今までの対応の早さから見てシャルディナ皇女はかなりのキレ者だろう。

そういった人間が森を抜けるという選択肢を見逃すとは思えない。

だが道すがら聞いたところ追っ手はさほど多くない。

広大な森の全てをカバーしていることは無いだろう。

そういった意味ではサーラの提案はとても良い。

だが発見されれば間違えなく拘束される。

連中は亮真の顔を知らない。

其れは逆に大柄な人間全てを疑って掛かるということだ。

つまりローラ達を連れているからといって見逃される可能性は低いというわけだ。

（ローラ達を連れているからといって見逃される可能性は無いだろう……なら一緒に行く意味は無い……いや、まてよ……）

連中が2人を知ることは無い。

俺と連れ立って歩かなければ拘束されることは無いだろう。

そこまで考えた亮真の中で何かが閃いた。

「サーラ、ローラ。森を抜けることにする。ただし……」

亮真の顔に酷薄な笑みが浮かび姉妹達の顔に驚きが広がる。

（さてどちらが狙われているのか教えてやるぜ。皇女様よ）

狩られる者と狩る者が入れ替わった瞬間であった。

第１章第２０話（前書き）

ようやく前作に追いつきました。
後は亮真に国境を越えてもらうだけ・・・・

第1章第20話

異世界召喚6日目【拘束】‥

ザッザッザッ

草木を踏み分ける音が盛りに響く。
亮真がアルーの町から北上し森に入って1日半が過ぎようとしていた。
彼の周りにローラ達姉妹の姿は無い。
アルーの町で野営の準備を済ませると、亮真はただ一人森の中に分け入った。

森は闇が支配していた。
森は星の瞬きすら木々で遮られ火の光が無ければまったく何も見ることが出来ない。

「とりあえず何事もなしか……」

大木の根元で火に当たりながら亮真は呟いた。
たかが2日程一緒に居ただけの姉妹の顔がやけに懐かしく思える。
異世界にいきなり放り出されれば少しばかり感傷に浸ったとしても誰も責めはしないだろう。
町で購入した干し肉を口で噛み千切りながら周囲を窺う。
たった一日半ながら亮真は街道を逸れて移動することの恐ろしさを十分に思い知らされた。
勿論亮真の手に余るほどの強敵は居ない。
街道を逸れたとはいえ、それ程大回りをしているわけではないからだ。

だがその数には圧倒される。
１匹倒せば倒した怪物（モンスター）の血に誘われて別の怪物（モンスター）が来るという悪循環に陥りやすいのだ。
先日野犬（ワイルドドック）らを狩った時には意識しなかったが、疲れたら戦いを切り上げて安全地帯である街道に出られるのと、神経の休まる暇もないくらい連続で襲い掛かってくる怪物（モンスター）を狩るのではおのずと違いが出たのだった。

（来たか？）

火に当たり体を休める亮真の肌が微かな空気の流れを感じた。
暗闇の中から視線を感じる。
怪物（モンスター）の物ではない。
もっと陰に篭った粘つくような視線だ。
同じように森を通り抜ける冒険者達の視線とも違う。
もし火に当たりたいのならそのまま声を掛けてくるはずだ。
こんな視線を相手に悟られれば盗賊と誤解されて先制攻撃を受けかねない。
それに盗賊とも違う。
欲に脂ぎった感じを受けない。
値踏みをしているのは間違いないが金銭関係の値踏みではない。
亮真は剣の柄に手を掛けた。
たとえ誰であろうと攻撃してくるならば斬るつもりだ。
其のとき暗闇から男の声が響いた。

「驚かしたようですね。申し訳ありません。」

亮真の手に力が入る。

「まあまあ。そう警戒なさらずに。少々お時間を頂きたいのですが構いませんかね？」

瘤に障る言い方だ。
言葉は丁寧だが有無を言わせぬ圧力がある。

「良いだろう。」

ガサ・・・ガサ・・・

亮真の言葉の後直ぐに木々を掻き分ける音が響く。
火を挟んで真向かいに立つ男の顔を見て、亮真の顔にわずかな動揺が浮かんだ。
七三分けに整えられた髪。
細長い卵形の顔。
身長は１７０程か。
オフィス街に行けば腐るほどいそうな日本のサラリーマンといった風体の男だ。
もっとも鎧を着け剣を佩いている日本のサラリーマンは居ないが。

「おや？どうかされましたか？」

男が亮真の動揺を機敏に察して尋ねてくる。

「いや・・盗賊には見えないなと思ってね・・・」

亮真の言葉に男が笑みを浮かべる。

「いやいや。恐れ入りますね。此処に座っても？」

亮真の返事を聞かずにさっさと真向かいへ座る。

「許可した覚えがないんだけどね？」

亮真の言葉を聞いても男は悪びれない。
それどころか勝手に話し出す始末だ。

「まあまあ。2～3質問をさせて頂くだけですから。」

何を言っても無駄だと諦め亮真は先を促した。

「あなたは冒険者のようですが何でこんな森の中に居るんですかね？お仕事中ですか？」

男の問いに亮真は正直に答えた。

「アルーの町で国境が封鎖されたと聞いてさ。しかも何時解かれるかも不明って話なんで。森を抜けることにしたのさ。まあ腕にはそれなりに自信が有るし野営の準備もしているのでね。」

「ほう・・・そうですか。しかしあまり関心出来ませんねぇ？いくら自信があるとは言ってもお一人で森を突っ切るなど。よほどお急ぎの御用でもお持ちですか？例えば誰かに追われているとか？」

男の目が細まる。

「いや。ただ町で封鎖が解かれるのを待つより、少しでも経験を積む方がいいと思ってね。」

「成る程成る程。」

此処で亮真は逆に男へ尋ねた。

「それでそんなことを聞きたがるあんたは何者だい？」

「おお。申し遅れました。私は斉藤英明と申します。オルトメア帝国夢魔騎士団（キュバスナイツ）の副団長を務めております。」

（やっぱり追っ手だったか・・・だけど斉藤？外見を見れば日本人に見える。だけど……）

亮真は内心の疑問を押し隠し演技を続ける。
相手の出方が判らな今はただの冒険者を装ったほうが得策だ。

「其の副団長さんが何だってこんな森の中に居るんです？」

「いえね。実はある男を追っておりまして。この森に通って国外に逃亡すると思われるのですよ。」

「へえ？ある男ね。なにやったんです？」

亮真の問いに斉藤はいかにも残念という表情をして答えた。

「いやあ。申し訳ない。極秘なんですよね……」

これは亮真の予想通りの反応だ。亮真とてここで斎藤が正直に理由を話す訳が無いことを知っていた。
だがここで斎藤に尋ねなければ逆に不振がられる事も判っていたのだ。

「あぁ失礼。ところで、私に用って結局何なんです?まさか私を疑ってるのですか?」

すると斉藤はとんでもないと言った表情を作って言った。

「いやいや。相手の男の顔が判らないんですよ。」

「え?顔が判らないのに追いかけてるんですか?」

(ふう。やはり判ってなかったか……ま、当然だな。顔を見たやつは全員殺しておいたんだから。)

亮真は内心自分の判断を誇りに思った。

「まあ実際かなり大変でしてね……上役からは早く捕まえろと催促されていまして……まあそこであなたにお願いしたいことがあるのですよ。」

斎藤は丁寧に切り出した。

「お願いですか?」

「ええ。少しばかりお時間を頂いて確認したいのですよ。何。形式的なものです。身元の確認が出来れば直ぐに出発していただけますから。まあ探している相手のの顔が判らない以上しょうがないのですよ……体格の良い男性で森を通ろうと言う方達全員にご協力いただいているんですよね。申し訳ないのですが。」

口では申し訳ないと言い笑みを浮かべてはいるが、斉藤の目は笑っていない。

「もし……協力できないと言ったら？」

亮真の言葉に斉藤は右手を軽く上げた。

「其の時はしょうがないですね。無理にでもご協力いただきます。」

ヒュ・・・カッ

森の中から矢が亮真の直ぐ脇に打ち込まれる。

「成る程ね。こうなる訳だ。」

地面に突き立つ矢に視線を向けながら亮真が言った。

「ええ。ご理解いただけたところで改めてお願いします。どうか私と一緒に来ていただけませんか？」

慇懃無礼とはこの事だ。

ノーと言えば森から矢が飛んでくるのに断れるヤツなど居るわけがない。

「しょうがないでしょうね……お付き合いしますよ。」

しぶしぶといった表情で亮真は答えた。

「いやあ。ご理解いただけて良かった良かった。では我々の野営地までご足労頂きますね。なぁに直ぐそこですよ。」

そういうと斉藤は手枷を取り出した。

「それは？」

亮真の問いに斉藤が悪びれずに言う。

「念の為に拘束させていただきます。なぁに形式ですよ。形式。上司にお会いいただいた後は外しますから。それまで我慢してくださいな。」

有無を言わせぬとはこの事だ。

亮真は両手を差し出す他無かった。

「殿下。拘束しました。」

斉藤の言葉にシャルディナは命令書を書く手を止めて目を向けた。

「拘束した？誰を？……異世界人を？」

「ええ。間違えなく異世界人。正確には地球の日本人ですね。」

亮真を連れて野営地へと戻った斉藤は、亮真をテントに残し見張りを割り振った後にシャルディナへ面会した。

「……なぜそいつが異世界人だと判ったの？顔も判らないのに。」

訝しげな表情で尋ねるシャルディナに斎藤が答える。

「私と同じ国の出身だからですよ。それにこっちの世界に来て間もない。匂いで判ります。」

斉藤の回答にシャルディナの顔が綻んだ。

「そう……貴方が言うのなら間違えないでしょうね。それで？どうするの？」

「陛下のご命令は拘束か殺すかだったと聞いていますが。」

斉藤の言葉にシャルディナが頷く。

「ええ。捕まえられなければ殺せと命令されているわ。」

「ということは捕まえた以上は帝都へ護送する必要が有りますな……」

斉藤の言葉にシャルディナが問いかけた。

「あら？何か問題でも？」

斎藤の表情が曇ったことを敏感に感じたからだ。

「ええ……私は護送せず此処で確実に始末したほうが良いと思います。」

幾分ためらいながらも斉藤ははっきりと言った。

皇帝の命令を無視するように進言したのだ。

其の重圧は想像を絶する。

斉藤の進言を聞きシャルディナの顔に戸惑いが浮かぶ。

彼女が夢魔騎士団（サキュバスナイツ）の団長を就任してから5年。

その間、影から彼女を支えてきたのは斉藤だったからだ。

其の進言は適切で誤ったことなど無い。
その斉藤が言うのだ。
無下には出来ないが、皇帝の命令を無視することもまた彼女には出来なかった。

「理由を聞かせて……」

シャルディナの問いに斉藤の口が重々しく開いた。

「理由ですか……理由は私の勘です。」

今度はシャルディナの顔が曇る。
いくら信頼する副官の進言であっても勘で皇帝の命令を無視することは出来ない。

「勘ね……いくらなんでもそれじゃ無理よ。」

「申し訳ありません。ですが……そのう……実際にあいつと話したときにヤツは危険だと感じました。笑顔を浮かべて私を話していましたが腹の中では何を考えているのやら。それに何の抵抗もせずに拘束されたことも引っかかります。形式だけだといって手枷をさせた時にも過剰な抵抗はしませんでした。まるで本当に確認すれば自分が解放されると確信しているかのように……」

斉藤の話を聞きシャルディナの心がざわめく。

（確かに気になるわね……特に無抵抗だったというのが……ガイエスを殺した事といい逃げるために宮殿に火を付けた事といいかなり容赦の無い男のはず。逃げられないとしてもおとなしく捕まるとは思えない。）

「ねえ。本当にそいつが問題の異世界人で間違えないの？」

「異世界人であることは確実です。問題はガイエス様を殺したヤツかどうかですが、状況から判断してまず間違えは無いです。偶然まったく関係ない異世界人が召喚されてこの森を通るなど在り得ません。」

斉藤の言葉にシャルディナも頷く。

証拠はないが状況を考えればまず間違いないというところだろう。

「なら方法は一つね……」

「というと？」

シャルディナは椅子から立ち上がるとテントの入り口へと歩みだした。

「案内なさい。実際に話してみるしかないでしょう？こうなったら。」

第1章第21話

異世界召喚6～7日目【奇襲】その1：

亮真に宛がわれたテントへ2人の客人が来た。

「いやぁお待たせして申し訳ない。上司が直接お会いしたいと言うのでお連れしたんだ。」

斉藤の後ろからシャルディナが前に出る。

「成る程。団長さんのお出ましか。」

亮真の言葉を聞き2人の顔に驚きが走る。

「あら？なぜ私が団長だと思うのかしら？別に団長さんじゃなくても上司になれると思うけど？」

「へぇ？まあ確信がある訳じゃないけれどもね。アデルフォの町を封鎖したのがシャルディナ皇女様だって聞いてね。其のシャルディナ皇女様が指揮するのが夢魔騎士団（サキュバスナイツ）と聞けば誰にでも予測はつくさ。」

「成る程。確かに普通で考えれば判る事かも知れませんな……」

斉藤の言葉にシャルディナも表向きは納得したが、其の心にはシコリが残る。

確かに落ち着いて考えれば、導き出せる答えかもしれない。

しかし拘束された状況でそこまでの判断が出来るだろうか？

（成る程……斉藤が口を濁すわけね、確かにいやな感じがする……）

斉藤の視線がシャルディナに向けられる。

（どう思いますか？）

斉藤の視線がそう訴えかけていた。

シャルディナは判ったと軽く頷くと亮真へ話しかけた。

「今回はわざわざお時間を割いてくださってありがとうございます。帝国を代表してお礼を申し上ますわ。」

皇室の人間が一般人にかける言葉としては信じられないほど丁寧な話し方だ。

「いえいえ。別に気にしてもらうほどの事ではないですよ。確かに街道を使わずに森を通るなんて怪しいですしね。」

亮真の回答を聞き2人の顔に笑みが浮かぶ。

「思ったとおりでしたね。殿下。」

「ええ。確定ね。」

2人は頷きあった。

「ようやく見つけたわ！異世界人さん。」

「何の話です？それ？」

だがシャルディナの言葉を聞いても亮真は平然と答えた。

「無駄だ。この世界で王室の人間からあれほど丁寧な話し方をされて、そのまま受け答えの出来る平民など居やしないよ。」

斉藤の言葉を聞きようやく亮真の顔に変化が浮かんだ。

当然といえば当然である。

この王を頂点とする君主制の世界において王や貴族は神にも等しい。

もし亮真がこの世界の人間のふりをするならここは黙って地に頭を擦り付けるべきだったのだ。

「ふ～ん……成る程。それは失敗したな。」

これ以上言い逃れは出来ないと判断したのかあっさりと認めた。

「さあこれでお互いに相手が誰であるかは理解できたわけだ。」

斉藤の言葉にシャルディナは頷くと亮真へ語りかける。

「初めましてと言うべきでしょうね。貴方の言ったとおり私はオルトメア帝国第一皇女シャルディナ・アイゼンハイトよ。貴方の名前は？異世界人さん」

「俺か？御子柴。御子柴亮真だ。」

シャルディナの言葉に亮真は平然と答えた。

「成る程。思ったとおり日本人でしたか。」

「そういうアンタも日本人みたいだな？斉藤さんよ」

斉藤が大きく頷く。

「ええ。立場も貴方と同じですよ。１０年ほど前にこの世界に召喚されましてね。」

「へえ？１０年で副団長まで上り詰めたのかい？」

斉藤の顔に苦笑いが浮かぶ。

「まあ運が良かったのでしょうね。異世界人というメリットも大きかったですしね。」

「それは力の吸収率のことを言っているのかい？」

亮真の問いに斉藤が目を見開いた。

「ほう、そんなことまで知っているのですか。驚きましたね……」

「なあに。ちょいと俺を召喚した爺を締め上げてね。いろいろと聞いたのさ。」

亮真の口に酷薄な笑みが浮かぶ。

「そうですか。やはり……遺体の損傷が酷かったとは聞いていましたが、ガイエスを拷問しましたね？」

シャルディナの口調に怒りが混ざる。

「ガイエス？ガイエスって言うのが俺を召喚した爺の名前ならそうだ。俺が口を割らせた。」

亮真はあっさりと拷問の事実を認めた。
隠したところで意味がないからだ。

「残念ですが貴方には死んでいただくことになります。我が帝国に弓引くものを生かしては置けません。」

シャルディナの言葉に亮真が戸惑いの表情を浮かべた。

「残念？何を残念がるのさ？」

「私は貴方という人間を買っています。異世界という特殊な環境に突然放り出され、右も左も判らない方が帝都を抜けこうやって国境近くまで逃れてくる。これを見ただけでも非凡な力をお持ちだと判ります。貴方ほどの力と知恵をお持ちの方を我が国に迎えられれば、西方大陸統一も一段と楽になったでしょうに。」

亮真はシャルディナの言葉を聞き嘲笑った。

「冗談は止めてくれ。俺があんた達に仕える？馬鹿言ってるんじゃねえよ。」

「馬鹿？」

「ああ。物語の主人公じゃあるまいし何で俺がお前達に使われなきゃならねえ？」

「あら？召喚された者が召喚した人間に従うのは当たり前でしょう？」

「まあ。この世界の人間ならそう言うだろうよ。」

亮真の言葉にシャルディナが眉をひそめた。

「どういうこと？」

「別に。あんた達に話したところで意味がないさ。ただ一つだけ言っておくぜ。俺が従うのは俺自身だ。他の誰でもねえ。俺が自分で思い考え決定する。ただそれだけだ。」

「そう、それが貴方の意思……でもね異世界人さん。この世界は貴方の自由意志を認めるほど甘くないわよ？貴方は確かに自分の意思を通したかもしれない。ガイエスも殺せた。でも結局はどう？貴方は今此処に拘束されている。」

シャルディナの顔に嘲笑が浮かぶ。

どれだけ亮真が自分の誇りを言おうとそんなもの負け犬の遠吠えにしかならない。

彼女の前に手枷を嵌められているのだから。

「貴方の誇りは立派なものよ。でもそれが何になるの？この世界はね。貴方の世界のように甘くない。力無き者は奪われ虐げられる世界。貴方の意思？そんな物にしがみついた結果がこれよ。おとなしく帝国に従えば斉藤みたいに取り立ててやったかもしれないのに。」

「ヘッ。犬みたいにあんた達に尻尾を振る気はないよ。」

「そう。馬鹿な男ね。この状況でそんなことを言うなんて。命乞いをすれば助けてあげたのに。」

斎藤はシャルディナと亮真の言葉を聞きながら言い知れぬ不安を感じ始めていた。

（そうだ……何故この状況でこんなことを言う?這い蹲り命乞いをするのが普通ではないか。）

シャルディナの言葉を聞き、斎藤の脳裏にいやな予感がよぎる。
勿論斉藤にはシャルディナの言葉が嘘だとわかっている。
たとえどれほど哀れみをこめて命乞いをしようと亮真の運命は決まっている。
死あるのみだ。
ガイエスを殺し帝国の威信に泥を塗った男に他の選択肢などある筈もない。
それなのに亮真はまったく平然としている。

（死を覚悟しているのか?）

だが斎藤の目に映る亮真の顔には死を覚悟した悲壮感など漂っては居なかった。

（なら何故だ?この状況からコイツは生き残ることが出来るというのか?。）

シャルディナが今回引き連れている兵は３０名。
森を広範囲で探索するために其のうち２６名を２人１組で派遣している。

シャルディナの居る野営地を守るのはわずかに４名。
亮真を発見し斉藤と相方の兵が戻ってきているので合計６名。
たった一人の異世界人を拘束しておくなど何の問題もない。
しかも夜が明ければ散っていた兵士達も戻ってくるはずだ。
状況は圧倒的に有利のはずだ。
しかし斉藤の心から不安がぬぐえない。
自分達にとって圧倒的に有利であるはずなのに。
其の瞬間、斉藤の脳裏にある想像が浮かんだ。

（まてよ……この状況はコイツが望んだことではないだろうか？）

突拍子の無い想像。
なんの確証も無いただの想像。
だが斉藤はこれこそが真実だと確信した。

（そうかそれなら理解できる。だが何のためだ？この状況がいったいこの男にとってどんな利点にとなるのだ？……いや。利点などどうでも良い。今やるべきはこの男を此処で殺してしまうのだ。この男が何を狙おうとこの状況で出来ることなど高が知れている。）

斉藤の目に殺意が宿る。

「斉藤……？」

自分の副官の雰囲気が変わった事にシャルディナは気がついた。

「殿下。申し訳ございません。この男は此処で殺すべきです。」

今まで黙って考え込んでいた副官の言葉にシャルディナは驚きを隠せなかった。

「な……そんなことは許されません！この男は帝都へ護送しなければ！」

「いいえ殿下。この男は危険です。生かしておけば何をするか……」

「陛下の命に逆らうというのですか！」

シャルディナの言葉にも斎藤は首を振る。

「申し訳ありません。お咎めは後で如何様にも・・・」

そう言うと斉藤は剣を抜き亮真へ歩み寄る。

「待ちなさい斉藤！」

シャルディナの静止を無視して斉藤が剣を振りかぶる。

「何か言い残すことはあるか？同郷の誼（よしみ）だ。聞くだけは聞いてやる。」

「別に無いな。」

亮真は白刃の光を受けてもまったく動じず薄笑いを浮かべて言い放った。

「そうか。いい度胸だな。」

「そんなことは無いさ。……死ぬのはお前達だからな！」

亮真の大声が闇夜を切り裂き森へ吸い込まれる。

「突然何を……！」

天幕を振るわせるほどの亮真の声に驚きを隠せないシャルディナ。

「なにを……はっ！殿下！」

斉藤の勘が危険を告げた。

そして彼がシャルディナへ覆いかぶさるのと同時に野営地を烈風が吹き荒れる。

第1章第22話【奇襲】其の2

異世界召喚7日目

野営地を襲った烈風は天幕を切り裂き支柱をなぎ倒す。
それはまるで巨大な刃が一刀両断に輪切りにするように陣内の天幕を切り裂く。
数秒後、風が止み斉藤は体を起こした。

「殿下！　殿下！」

「私は平気よ……何が起こったの？」

斉藤の言葉に斎藤の体の下に庇われたシャルディナが立ち上がり辺りを見回す。

「殿下御無事で……！　しまった。それよりヤツは！」

だが斉藤はシャルディナの言葉を無視し亮真の方へ視線を向けた。
そこには見慣れない少女が居た。

「ご無事ですか？　ご主人様」

そう言うと少女は亮真の手枷に剣を突き立てこじ開ける。

「ああ。タイミングもばっちりだ。助かったぜサーラ。ローラは無事か？」

「姉は外の兵士達を始末しているころでしょう。ご主人様のおっしゃるとおり造作も無くかたずけることができそうですわ」

「あら。もう始末はつけましたわ。ご主人様」

斉藤の後ろから別の声がする。

「殿下！」

斉藤の声にシャルディナが反応し斉藤の背後を守る。
丁度背中合わせになる格好だ。

「怪我はないか？　ローラ」

「はい。風の法術を叩き込むだけで事は済みましたから。この方達、怪物（モンスター）は警戒しても法術による攻撃は想定して居なかったようですね」

ローラの言葉に斉藤が怒鳴った。

「馬鹿な……法術だと！」

これは斉藤もシャルディナにも完全に想定外の話だ。
そもそも異世界人に仲間が居ること自体がおかしいのだ。
其の上法術を使える者など。
そもそもこの世界で法術を使える者は少ない。
王国に仕えている者なら騎士階級以上。
傭兵や冒険者なら一流と呼ばれる者達のみだ。
なぜならこの希少性こそがこの世界の支配構造の根幹に位置するものなのだから。
法術が使える。ただそれだけで使えない人間5人分の戦力にはな

る。
亮真に殺されたガイエスなどは、一軍に匹敵する。
勿論、破壊力のある法術が使えるからといって必ず勝てるとは限らないのは、亮真がガイエスを殺したことにより既に証明されているが。
どちらにしろ異世界に召喚されて間もない人間に法術が使えるはずが無いし、使える人間と知り合うこともありえないはずだったのだ。

「貴様達はいったい……」

シャルディナの問いにローラが剣を構えながら答えた。

「私達はご主人様に仕える者。主の敵は私達の敵」

（この子出来る！　それに……）

ローラの構えを見てシャルディナの勘が警報を発する。
彼女ほどの使い手は自分の部下達の中でも数えるほどしか居ない。
だが実力ならまだシャルディナの方が確実に上だ。
しかしローラの瞳に浮かぶのは決死の覚悟。
シャルディナを相打ちとなってでも殺そうという決意だ。
そして斉藤もまた同じ決意をサーラから感じていた。

（どういうことだ……何故これほどの使い手がコイツに加担するのだ。この世界に来てたかだか6～7日だぞ？）

シャルディナ達にとって亮真を捕まえることは重要な命令である。
だが、其れはあくまでもシャルディナ達が生き残った上での話しだ。

斉藤とシャルディナのどちらかが死ぬか、あるいは重傷を負ってまで果たす任務ではないのだ。
斉藤にしろシャルディナにしろ、帝国では非常に重要な地位に居る。
国の存亡を掛けた戦場でならいざ知らず。
こんな異世界人の一人を始末するために命を掛けるわけにはいかないのだ。

「斉藤……此処は引くわ」

様々な損得計算が行われた末の結論だろうか。
亮真達へ聞こえないようにシャルディナが斉藤へ呟いた。

「はい。これほど予想外の展開になってしまえば一度引くしかありませんね……ただ素直に引かせてくれるか」

「ええ……でも此処で死ぬわけにはいかない。ガイエスも死んでさらに私たちまで死ぬようなことになれば帝国の戦力が落ちすぎる……もし、そうなったら」

「周辺諸国も占領地もただではすみませんな……」

周辺諸国を力で侵略してきた代償。
帝国の戦力が低下すれば、押さえつけられてきた占領下の民や貴族が反旗を翻すのは目に見えている。
いくつのも思案が斉藤とシャルディナ。2人の脳裏を駆け巡る。

「引きたいなら引いてくれてかまわないぜ?」

亮真の言葉が膠着した状況を揺り動かす。
いち早く返答したのは斉藤だった。

「馬鹿な……こちらが引く必要など無い！　そこの女2人共々帝都に護送してくれるわ！」

「へえ？　命がけで俺達を捕まえるってのかい？」

亮真の顔に嘲笑が浮かぶ。

「あんたらに命をかける度胸が無いことは、目を見れば判かるんだよ」

目は口ほどに物を言う。
視線やしぐさ、眼光からは其の人間の心の中が透けて見えるものだ。
斉藤がサーラの目から決死の覚悟を感じ取ったのと同じように、亮真が斉藤の目から読み取ったとておかしくはない。

「ならどうだと言うの？　貴方の目的は私達を殺すことでしょ？」

「まあな。本来ならそれが一番良いんだけれども。この状況じゃあ……な」

亮真が肩を竦める。

（やっぱり……こいつ私達を殺すつもりで捕まったのね。道理でおとなしく連れてこられた訳だわ……）

シャルディナの背に冷たい物が流れる。

先ほどから感じていたいやな予感の正体。
其れは狩る者を狙う狩られる者の殺意だったのだ。

（確かに有効な手段だわ。私達は向こうが逃げるだけだと思い込み、私達に牙を向くなどとは夢想だにしなかった）

その結果がこれだ。
率いてきた兵の殆どは森の中に散らばっており、野営地の警備についていたものは先ほどの法術で全滅だ。
もし斉藤の機転がなければ、シャルディナも奇襲で死んでいたかもしれない。

（でもこの状況……3対2なら向こうが有利のはず。この子達を捨石にすれば私達を殺すことは不可能では無いのに？）

「成る程な……殺したくないと言う事か」

斉藤の言葉を聞きシャルディナが目を見張る。
この状況で亮真が殺したくない人間。
斉藤とシャルディナが対象だとは考えられない以上、残るのは2人しかいない。

「そういうことさ。2人とも俺の為に命を張る気だ」

亮真の視線がサーラとローラへ注がれる。

「いくら俺が生き残る可能性が高いとはいえ、2人を犠牲にしてまであんたらを殺すわけにはいかないだろうよ」

（なるほど、それならばこの女達を盾に取れば。いや、この状況下

では其れは無理だ。それに自分の命を犠牲にしてまでこの男が女を優先するとは思えん……）

「殿下。此処は致し方ないかと……」

斉藤の進言はシャルディナの考えと一致した。
いくら考えてもこれ以上の手段は無い。

「良いでしょう……此処は引かせていただきます。斉藤、剣を納めなさい」

シャルディナの言葉を受けて亮真がローラ達に言った。

「ローラ、サーラ引け！」

亮真の言葉を聞き2人が剣を収め、亮真の傍らに寄り添う。
シャルディナ達が攻撃を仕掛けてきたら直ぐにでも亮真の盾となるつもりらしい。

「そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。オルトメア帝国第一皇女の名においてこの場は引きます」

シャルディナの言葉は真実の気持ちだったが姉妹の態度は変わらない。

「悪いな」

亮真のほうが姉妹の態度を気にしたらしい。
シャルディナへ謝罪してきた。

「まあ良いでしょう。この場は引くとして、今後貴方への追求が止むことは有りませんが其れは判っていますか？」

これは当然だろう。

シャルディナ達が亮真の捕獲を諦めて引くのは単にこの場の状況が不利だからというだけのことだ。

極端な話、この場に数十名の兵士が居ればシャルディナ達が引くといった選択は有り得なかった。

「そりゃそうだろうな。そっちから見れば俺は犯罪者だろうから」

亮真は悪びれずに言い放った。

「だが俺はあんた達に捕まるつもりはないぜ？　あの爺を殺したこともあんた達を殺そうとした事も悪いと思ってないからな。だから追いかけるのはかまわないが命賭けるつもりで来な」

亮真の言葉を聞き斉藤は我慢できずに尋ねた。

「君は日本で犯罪を犯したことがありますか？」

斉藤は知りたかった。

地球から召喚された直後の人間がこれほどこの世界の法則になじめるものだろうかと。

この弱肉強食の世界は強さこそが全て。

人権などという甘い思想はどこにも無い。

踏みにじられたくなければ強くなるしかない。

斉藤がこれらを悟ったのはガイエスに召喚され、やりたくも無い戦争に放り込まれ来る日も来る日もドロと血にまみれながら殺し合いをしたを何年も過ごした後だ。

それほどこの世界と斉藤の地球での生活とはかけ離れていた。
だからこそ、この世界に召喚されて1週間ほどしか経っていない亮真の考え方を知り愕然としたのだ。

「はぁ？　なんだそりゃ。そりゃ立ちションくらいはしたことはあるけどな」

「いえ。そうではなくもっと重大な。そう……人殺しとか」

「無茶苦茶言うな……このおっさん。俺は至って普通の高校生だよ。まあ多少は古武術の嗜みがあるくらいでな。前科なんてとんでもない！」

「なら何故です？　何故人を殺して平然としていられるのです？恐ろしいとは思わないのですか？」

斉藤の言葉に亮真はやや考え込みながら答えた。

「俺は逆に聞きたいんだけどよ。自分の身を犠牲にしてまで俺の権利を自分の都合で侵害しようとするヤツの心配をしなきゃいけないものなのか？」

斉藤の驚いた顔を尻目に亮真は言葉を続けた。

「俺はそうは思わねえ。侵害するのが向こうの勝手なら自分の身を守るのは俺の勝手さ。人を殴って殴り返されないを思うほど馬鹿じゃない。殴り返されると思うからこそ俺は他人を殴らない。相手に殴り返される覚悟を持つとき意外にはね」

そう言い放つと亮真はローラ達に視線を向けた。

「さてと……俺の人生哲学なんか話してる場合じゃないないな……ローラ」

亮真はローラに顎で天幕の入り口を指した。

「これ以上話していると兵士達が野営地に戻ってくるかもしれないしな。俺はさっさと国境を越えさせてもらうぜ？」

ローラが天幕の入り口でシャルディナ達を牽制する。

シャルディナ達の言葉を完全に信用しきっていないのだ。

「良いでしょう。お行きなさい。でもこれだけは忘れないことね。帝国は貴方を逃がしはしない。人相がばれた以上帝国領内には二度と踏み入れないと思うことね」

此処で一息つきシャルディナの目に鋭い光が宿る。

「そしてせいぜい逃げ回りなさい。いずれ西方大陸は我が帝国によって統一される。そうなれば貴方の生きられる場所など何処にも在りはしないのだから」

サーラを伴い天幕を出ようとする亮真へシャルディナが言葉の刃を投げつける。

「そうかい……なら、それまでに元の世界に返ることにするよ」

亮真達は振り返らずに森の中へと消えていった。

第1章最終話（前書き）

インフルエンザにかかってしまい死んでました……
更新遅れてすみません。

第1章最終話

異世界召喚１０日目【その後のシャルディナ】：

「いったいどういうおつもりなのですか！」

謁見の間に怒声が響く。
声の主は鉄血宰相の異名を取るドルネストだ。
謁見の間の主であるはずの皇帝は、玉座の肘掛に肘を乗せながらシャルディナ達の話に耳を傾けている。

「報告は以上です。後は如何様にでも。」

皇帝の前にはシャルディナと斉藤を始め、セリア、ロルフ、オルランドといった追跡隊を指揮した面々が跪く。
シャルディナの脳裏にあの後の数日間が蘇る。

亮真達を逃がした後、シャルディナは夜明けを待って森に散っていた兵を纏め森を進んだ。
亮真達に追いつくかもしれないという一縷の望みに賭けたのだった。
見逃すと言ったのはあくまでも兵が居ないあの場限りのこと。
兵を集めてしまえば状況は変わる。
だが結局シャルディナは亮真達を見つけることは出来なかった。

「やはり無理ね・・・・」

シャルディナの呟きに斉藤が応じる。

「いたし方ありません・・・兵を纏めるのに手間取りましたから・・」

亮真達とて十分予想していたのだろう。
普通の人間ならあの場の見逃すを勝手に解釈し、少なくとも国境を越えるまで追ってはこないだろうなどと判断しかねない。
そういった甘い判断をしないところが亮真の最大の強さなのかも知れない。

「帝都へ戻るわ。」

シャルディナの言葉に斉藤の顔が曇る。
亮真の捕縛に失敗した今、何時までもこんな森の中をうろついたところでしょうがない。
国境の警戒も早々に解かなくては経済に影響が出てしまう。
南方を探索中のセリア達の事もある。
そういった状況を十分に把握してはいたものの、斉藤が素直に賛同出来ないのはシャルディナの処遇に不安を感じるからだ。
やはり亮真達を捕まえそこなったのは大きな失点である。
奴を補足出来ないならまだしも、一度は捕らえながら逃げられるというのは最悪だった。
しかも、騎士団員に死傷者が出ている。
いくら亮真に仲間が居たという予想外の事態があったにしろ無視できることではなかった。

「ドルネストの顔が真っ赤になるわね。」

斉藤の脳裏に皇帝の間でシャルディナ達を怒鳴りつけるドルネストの姿がはっきりと浮かんだ。
鉄血の異名をとる彼は、鉄のごとき意志の強さと血を流す覚悟を持

った政治家である。
皇族であるシャルディナに対してであろうと其の態度を変えることは無い。

「セリア様の方も問題かと・・・」

今回の任務に最も熱心なのは身内を殺されているセリアだ。
其のセリアになんといって話をするのか。

「まあ・・・何とか成るでしょ。セリアも馬鹿じゃないわ。状況をきちんと説明すればそれ以上文句を言うはずないと思う。」

（普段のセリア様なら其のとおりだろうが・・・・）

身内を殺された時に普段の冷静さを保てるのだろうかと斉藤は危惧したのだった。
其の顔色を読んだのだろうか。
シャルディナは肩をすくめて言った。

「まあ其の辺は私の方で何とかするわ。どちらにしろ帝都に帰還するしか選択肢はないしね。」

シャルディナの前にはセリア、ロルフ、オルランドの三人が座っている。

「そうですか・・・」

セリアの言葉には普段の覇気が無い。
帝都帰還の決定後、南方へ出ていた3人を呼び戻したシャルディナ

は皇帝に謁見する前に状況の共有を図るため、帝都の南方に位置する町オイートにて合流することにした。
シャルディナ達の現在地から考えると帝都を通り越して向かうことになるが、致し方ないという判断だ。
此処はオイート郊外の合流地点。
設営された天幕の中でシャルディナの話が終わったところだ。

「成る程・・・致し方ありませんな・・・」
ロルフの顔にも苦渋が浮かぶ。
其の顔には自分がシャルディナと共に行くべきだったという後悔が浮かんでいる。
オルランドの方も同様だ。

「しかし・・・何故召喚されて間もないその・・・御子柴亮真?ですか。そやつに加担する者が居たのでしょうか?しかもそれほどの手練が・・・?」

ロルフの疑問にシャルディナは首を横に振った。
其れは帰還の道すがらシャルディナと斉藤が最も重視した疑問だった。

「其れは斉藤とも話し合ったんだけれどもね・・・正直判らないわ。」

首を横に振るシャルディナへオルランドが控えめに尋ねてきた。

「あのう・・・陛下へはどのようにご報告なされるおつもりですか?」

これはシャルディナ以外の全ての人間が気になるところだった。

皇帝の命令は絶対である。
それを果たせなかった以上、最悪死刑まで考えられるのだ。

「有ったままの事を報告するわ。」

シャルディナの言葉に斉藤もうなずく。
オイートへ向かう道すがらで既に2人の間で意見の合意が取れていたからだ。

「よろしいのですか？」

ロルフの顔に本当にそれでよいのか？という疑問の色が浮かぶ。
ありのままに報告すれば、今回の責任は全て斉藤とシャルディナに被される。
皇族の一人とはいえただでは済まないかもしれないのだ。

「しょうがないわ。事実は事実だもの。」

肩をすくめシャルディナは答えた。
覚悟は既に出来ているのだから。

「いくら皇女殿下とはいえこのような報告を！」

「ドルネスト・・・少し黙れ。」

シャルディナを責め立てるドルネストの怒声を皇帝の声が遮る。
斉藤は脳裏に浮かんだ光景を振り払い、意識を皇帝の言葉へと向けた。

「ワシは今回のシャルディナの対応を非難するつもりは無い。」

重々しい声が玉座から響く。
ドルネストの顔に驚きが広がる。

「しかし・・陛下！」

「ワシの話を聞け・・ドルネスト！」

玉座の肘掛に肘を突き皇帝は言った。

「確かにワシの命令をシャルディナは果たせなかった。其れは事実だ。しかし予想外の手練が着いていたのだ。どうしようもあるまい？」

皇帝の言葉にドルネストは返答に詰まった。
確かに其れは事実だ。
いや、異世界人を一度でも捕縛出来ただけでも奇跡に近い。
相手は名前も顔も判らなかったのだから。
其れはドルネストにも判っている。

「しかし・・・それでも異世界人を逃すなど！」

「判っている。しかしだ。シャルディナと斉藤どちらも我が帝国には重要な戦力だ。いくらガイエスを殺したにくい男とはいえ、そやつを殺すために帝国を戦力低下の危険に晒すわけにはいくまい？」

どれほど低い確率であろうと、帝国の誇る夢魔騎士団（サキュバスナイツ）の団長と副団長を一度に失う危険を冒すわけにはいかないのだ。
ガイエスが死に帝国の戦力が低下している今、新たに主力ともいえ

る人間を失うのは帝国の覇権を脅かすことでしかない。
もろもろを考え合わせれば、シャルディナの判断は実に的を得たものだったのだ。

「しかしだ・・」

皇帝の視線がシャルディナへ注がれる。

「如何に致し方なかったとはいえ、余の命令が果たせなかったのは事実。よってそなた達にはガイエスの後を継ぎ、東部諸国攻略の任を命ずる。」

ザッ

シャルディナ達４人が一斉にその場で頭を下げた。
皇帝が罰を与える代わりに、新たに勲功を立てる場を与え其の功績で今回の失敗を相殺しようとしているのがわかったからだ。

「必ずやご期待にこたえて見せます。」

第2章主要登場人物紹介（前書き）

今更ですが第2章の登場人物紹介です。

本当に主要なキャラしか記載してません。

もしあのキャラも紹介に入れてと言う要望がありましたらご連絡ください。

第2章主要登場人物紹介

第1章主要登場人物

名前：御子柴亮真（みこしばりょうま）
性別：男性
年齢：１６
出身地：東京都杉並区
本作品の主人公。
１９０ｃｍに近い長身で体重は１００Ｋｇオーバーの巨漢。
コンプレックスは２０代半ば～３０歳などと呼ばれる老け顔。
地球で高校生活を送っていた時は温厚で人当たりのよい性格という周囲の評価を受けていたが、弱肉強食の世界である大地（アース）へ召喚された事によって、今まで押し隠していた冷酷な本性がむき出しになってきている。
祖父から習い覚えた古武術はかなりの腕前。

名前：ローラ＆サーラ・マルフィスト
性別：女性
年齢：十代半ば
帝国の追手から逃げていた亮真に、盗賊団に襲撃されていたところを助けられ忠誠を誓う事になった双子の姉妹。
血盟と呼ばれる儀式を行ったことで、亮真に対して絶対的な忠誠を誓っている。
騎士階級の出身で法術を使うことが出来る。

名前：リオネ
性別：女性

年齢：３０代半ば
出身地：不明
紅髪金目の美女の姉御肌な女性。
傭兵団【紅獅子】の頭。
とある依頼（クエスト）を亮真と受けたことにより知り合う。
亮真を「坊や」と呼ぶが実のところ其の頭脳を高く買っている。

名前：ボルツ
性別：男性
年齢：５０代半
出身地：不明
傭兵団【紅獅子】の補佐役。
戦で左腕を失った歴戦の勇士。
亮真の事を尊敬し「若」と呼ぶようになる。

名前：ルピス・ローゼリアヌス
性別：女性
年齢：２０代前半
出身地：ローゼリア王国
銀髪金目の美女。
ローゼリア王国の近衛騎士団騎士団長。
父である国王の後を継いで女王になろうとしているが……。

名前：メルティナ・レクター
性別：女性
年齢：２０代後半
出身地：ローゼリア王国
黒髪黒目の美女。
ローゼリア王国の近衛騎士団副団長。
ルピス王女への忠誠は篤いがイマイチ思慮が足りない。

名前：ミハイル・バナーシュ
性別：男性
年齢：３０代後半
出身地：ローゼリア王国
ルピス王女への忠誠篤き騎士。
ローゼリア王国の親衛騎士団副団長。
亮真いわく脳筋。

名前：ラディーネ・ローゼリアヌス
性別：女性
年齢：１０代半ば
出身地：不明
銀髪の少女。
ローゼリア王ファルスト2世の血を引くとされ娘。
ゲルハルト公爵の後ろ盾を得てローゼリア王国新女王の座を狙う。

名前：ホドラム・アーレベルク
性別：男性
年齢：５０代半ば
出身地：ローゼリア王国
名門騎士の家系を誇るローゼリア王国の将軍。
ルピス王女を擁立し、貴族派と戦うが……
騎士派の頭首。

名前：フリオ・ゲルハルト公爵
性別：男性
年齢：５０代後半
出身地：ローゼリア王国
ローゼリア王国の公爵。

ラディーネ王女を擁立し、ローゼリア王国に内乱を起こした張本人。
貴族派の頭首。

名前：スドウ
性別：男性
年齢：４０代前半
出身地：不明
ラディーネ王女の擁立をゲルハルト公爵に吹き込んだ男。
どこかの国に使えているようだが……

第2章第1話（前書き）

皆様お久しぶりでございます。
新年明けて半月が早くも過ぎてしまいました。
更新を待ち望んでくださった方がいるかどうか不安ではございますが、今後の展開が決まりましたのでまた更新させていただきます。

拙い作品ではありますがどうぞよろしくお願いいたします。

第2章第1話

異世界召喚６３日目【召喚されし者の絶望】その１：

西方大陸北部。
黄砂の吹き荒れるドーシュ砂漠を3人の旅人が進んでいた。
彼らの纏うマントは其の過酷な旅を象徴するかのように薄汚れ擦り切れていた。
彼らの足取りは重い。
「この砂丘の先にミレイシュのオアシスがあるはずです。」
「そこに居るんだな?そいつが・・・」
亮真の目がサーラの指差した砂丘の先へと向けられる。
其の瞳は絶望とほんのわずかな希望の混じった悲しい目をしていた。

「結論から言いましょう。お気の毒ですが貴方が元の世界へ帰る事は不可能です。」
薄暗い部屋の中は黄ばんだ羊皮紙や書籍が所狭しと山積みとなっているこの部屋の主は、椅子に腰掛けながらそう言い放った。。
このかび臭く薄暗い部屋の主は麻の上下を着込んだ女性だった。
年のころは３０半ばから４０代前半といったところか。
容姿はどこにでも居る普通の女性だ。
取り立てて美しいわけでも醜いわけでもない。
黒髪に黒い目。
あまり特徴のある容姿とはいえない。
服装にしてもそうだ。
どこにでも居る平凡な女性。
だが彼女の真価は見かけではない。
其の脳裏に刻まれた西方大陸で１~２を争うといわれる法術の知識

にこそ彼女の真価である。
それゆえに亮真は彼女を訪ねてきたのだ。
ミレイシュの隠者といわれるこの女性。
アナマリアを。

「それは今現在技術が無いって事だろう?」
亮真の目にまたかという嘲りが浮かんだ。
其れはシャルディナ達の追撃を逃れてから今までの2ヶ月間の間に訪ね歩いた法術師達が口を揃えて言った言葉だ。
だが彼女の口から放たれた言葉は亮真を打ちのめした。
「いえ。技術が無いから帰れないのではありません。技術を作れないから帰れないのです。」
「なんだと!」
亮真の口から怒声が飛び出す。
其れはサーラ達姉妹がこの2月の間共に旅をしてきた中で一度も目にした事が無いほどの怒りだった。
この2月の間、亮真達3人はギルドの仕事をしながら、地球へ帰る方法を見つけるために高名な術者を訪ね歩いた。
勿論、帝国領内に住む者を除いてではあったが。
そして其の全ての者達から同じ答えを貰っていた。
すなわち帰る方法などないと。
だがこうも言われていた。
技術を開発していないのだと。
だから亮真は彼らに尋ねたのだ、貴方は其の方法を開発できるのか?と。
そして彼らは一様に言った。
自分達では無理だと。
そして幾人かの開発が出来そうな術者の名前を挙げた。
其の中の一人がアナマリアだったのだ。

「落ち着きなさい。興奮しても結論は変わりません。」
亮真の怒声を聞いてもアナマリアの表情はまったく変わらない。
元はどこかの国の文官を務めていたらしいが、国政に関して大臣と対立した所為で職を辞したといわれるのも頷ける。
「悪かった。・・・大丈夫。落ち着いた。・・・何故帰れないのか理由を説明してもらえるか？」
胸の奥から吹き荒れる憎悪と怒りを必死で押さえ込み、亮真はやっとそれだけを口にした。
「理由ははっきりしています。・・・・其の理由を説明する前に確認したいのですが、貴方は法術というものをどのように理解していますか？」
「法術についての理解・・・・か。」
亮真の脳裏にサーラ達から受けた法術に関しての知識が浮かぶ。

法術とは生命体の持つ生気（プラーナ）を使う技術のことだ。
そしてどのように使うかにより３つの系統に分かれる。
１つは自らの体に宿る生気（プラーナ）を自らの体に作用させる武法術。
詠唱を必要としないこの技術は接近戦では圧倒的な力となる。
そしてもう一つの系統が文法術。
これは神や魔、精霊といった人外の存在に生気（プラーナ）を捧げる事で、力の一部を一時的に借り受けるといったものだ。
詠唱が必要な為、接近戦には向かない。
ただし人外の力を借りるため、火を放ち風を操るといった人間には出来ない現象を起こすことができた。
そして最後が付与法術。
これは剣や槍といった生気（プラーナ）を持たない物質に生気（プラーナ）を纏わせることで強度を上げたりする技術である。

亮真の説明にアナマリアの表情がほころぶ。
「そう。基本は判っているようね・・・では質問するけど。異世界

から人を召喚する技術はどの系統に属するか判る？」
アナマリアの質問に亮真はいらだちを込めて答えた。
「文法術だ！」
その答えを聞きアナマリアは大きく頷く。
「その通り。そして異世界へ問題となるのは何に生気（プラーナ）を捧げるかってことなのよ。」
「・・・それはどういう意味だ？。俺はこの世界に居る。俺がここに呼ばれたのはこの世界の法術の所為だ！俺をこの世界に召喚した時に頼んだ神へ祈れば済む話じゃないか！」
亮真の指摘はもっともだ。
だがアナマリアの表情は変わらない。
「この世界からは出れます。確かに。」
「なら！」
勢い込む亮真をアナマリアの口から出た言葉が絶望の底へとたたき落とす。
「しかし永遠に時空の狭間を漂う事になりますが。」

第2章第1話（後書き）

前作ウォルテニア戦記の削除に関してなのですが、サイトのマニュアルには安易に削除はしないでくださいとの記載があるため、このまま残すことにいたしました。
拙い作品でお恥ずかしい限りなのですが・・・・
なので今後も題名はウォルテニア戦記【改訂版】となります。
どうぞよろしくお願いいたします。

第2章第2話（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。
今回は亮真が召喚された異世界の名前が出てまいります。
ちょっと名前の付け方がややこしい事になっていますがその辺の理由は本編を読んでいただければと思います。

第2章第2話

異世界召喚６３日目【召喚されし者の絶望】その２：

「何だと……？」

亮真の問いにアナマリアは眉ひとつ動かさずに言ってのけた。

「永遠に時空の狭間を漂うと言ったのよ……つまり貴方は死ぬ事になる」

「ふざけるな！」

この異世界に召喚されてからずっと亮真の中で押し込められていた何かがはじけ飛んだ。

ダン！

亮真の拳が木製の机にめり込み無数の亀裂が机の幕板部分に走る。

かなり高価そうな机だが今の亮真にとっては関係ない。

「亮真様！」

「お手が！」

亮真の後に黙って控えていたローラ達姉妹が悲鳴を上げた。

手加減をせずに机へ叩きつけられた亮真の拳から血が滴る。

「亮真様！お手を」

「うるせえぇぇ！邪魔だ！」

治療の為に駆け寄る姉妹を振り払い、血の滴りを無視して亮真はアナマリアを睨みつける。

「もう一度言ってみろ」

その瞳には暗く冷たい憎悪が宿り、その声には明確な殺意が含まれていた。

「脅されても結論は変わらないわ。あなたは元の世界。つまり裏大地（リアース）へ帰る事は出来ないわ」

「裏大地（リアース）だと？」

「そう。あなたが元居た世界。それを私たちは裏大地（リアース）と呼ぶの。私たちが住む世界、大地（アース）の裏側ってことね」

アナマリアの説明に亮真の心が冷静さを取り戻していく。

どれほど激昂しようと結論は変わらないのだ。

なら今は話を聞く事が最優先だ。

（だが……この世界が大地（アース）？……俺が住んでいたのが裏大地（リアース）か……まぁ当然か。この世界の人間がつけた名前だもんな……）

これは現実世界でもよくある話だ。

どの国にも太陽は平等にその光を与えるのに日の本の国などとつけたり、地球は丸いのに世界の真ん中という意味で中華と国の名前を付けるのと同じ。

名前を付けるときに裏表を表すなら、自分の住む世界を表とするのは人間の心理として当然だ。

アナマリアは話を続ける。

「尤も物理的に裏表があるわけじゃない。人間が住む異世界が貴方達と私達の住む2つしか見つからなかったから便宜的につけられただけの話」

「どっちが表でも良い！俺が帰れないっていう理由を言え！」

アナマリアは肩をすくめて言った。

「簡単な話よ。裏大地（リアース）から大地（アース）に人間を召喚するには、大地（アース）に存在する神へ生気（プラーナ）を捧げて召喚を許可してもらわなければいけないの。それは大地（アース）には結界が張られていて、外からの侵入を阻んでいるからなのだけれども、その結界は裏大地（リアース）側にも張られているのよ」

「ちょっとまて？結界が張られているのは良いとしてだ。現実に俺はこの世界に召喚されたんだろ？俺をこの世界に入れた神へ祈れば済む話じゃないのかよ？」

「いいえ。結界内へ入れるかどうかはそれぞれの世界に存在する神が許可するかどうかなの。つまり大地（アース）から出た後に裏大地（リアース）へ入るためには、裏大地（リアース）の結界を張っている神へ許可をもらわなければならないって訳」

亮真の頭がアナマリアの言葉をわかりやすく変換していく。

（出るのは自由？でも入るのは許可制……これってオートロックのホテルで部屋から閉め出されるって状況と同じじゃないか？）

ホテルなどでよくあるオートロックシステム。

中からは簡単に開くが扉が閉まると自動で鍵が掛かり、外からは入るには鍵が必要というあれだ。

二つの世界をホテルの部屋に、時空の狭間をホテルの通路に置き換

えるとイメージがしやすいかもしれない。

「つまり大地（アース）の結界を超えるだけなら可能だけど、裏大地（リアース）側の結界を超える事が出来ない。結果時空の狭間？に漂って死ぬことになるってことか……」

「そういうことですね。」

「だがそれなら裏大地（リアース）の結界を張っている神の名前が分かれば！？」

亮真はそうアナマリアへ反論しつつも返される答えを頭の片隅で予想していた。

一体いつから大地（アース）の人間が地球人を召喚していたかはわからないが、１０年や２０年なんて年月ではない事だけは確実だ。

つまり万単位の人間がこの大地（アース）へと無理やり召喚されたということだ。

そのうちの何人かは亮真と同じように逃げ出し元の世界に戻ろうとしたのではないか？

少なくとも、亮真が地球へ戻ろうとする地球人の第１号ではない事だけは確実だろう。

ドサッ！

アナマリアはヒビの入った机の上に色あせた書籍を放り出した。

「これは今まであなたがた異世界人が元の世界に戻ろうとした記録です。」

広辞苑に匹敵するほどの分厚さを誇る書籍を開きアナマリアは続けた。

「送還術式を組むことはそれほど難しくありません。召喚術式を少しアレンジするだけで出来ますから。ですが祈りを捧げる神の名が分からなければどうしようもないのです。」

アナマリアが書籍のあるページを開き、亮真へ突き出した。

「ここに貴方がたの世界の神の名が記されています。つまりここにのっている神の名を組んだ術式はすでに使用され効果がない事が確認されているという事です。」

「つまり……俺がここに記載の無い神の名前を知っていない限り……」

「元の世界に帰還する事は不可能だという事です」

非情な宣告が亮真の胸に突き刺さった。

「月読、スサノウ、天照……エホバ、ヤハゥエ……」

亮真はミレイシュの宿屋に戻ると、サーラ達姉妹を締め出しアナマリアより借り受けた書籍を必死で調べていた。

アナマリアの家から戻る亮真の顔には悲壮感が漂い、サーラ達姉妹は言葉をかける事すら出来なかった。

亮真が籠る部屋の前の通路には、サーラ達姉妹が立っていた。

二人の視線は亮真の部屋のドアに注がれている。

「もう5時間よ……」

サーラの言葉にローラが頷く。
時間は既に深夜に差し掛かっている。

「亮真様……」

姉妹には亮真の気持ちが痛いほど良くわかっていた。
自分達が亮真の立場ならどうだろうかと想像するだけで震えが来る。
だが姉妹達に亮真を救うことは出来ない。
彼女達に出来る事はただ部屋の前で亮真の身を案じるのみだった。

第2章第3話（前書き）

更新遅くなりました。
今後ともよろしくお願いします。

第2章第3話

異世界召喚６４日目【召喚されし者の絶望】その３：

窓から朝日が差し込んで来る。
ローラ達姉妹は顔を見合わせると、覚悟を決めたように亮真の部屋の扉を叩いた。

トントン

彼女達が手にしているのは、宿屋の主人に頼んで調理してもらった朝食を乗せた盆だ。

結局昨夜から夜が明ける今まで、亮真はただの一度も部屋から出ることはなかった。
夕食の誘いも夜食の差し入れも無視し、ただひたすらにアナマリアから借り受けた書籍をめくる微かな音がドア越しに聞こえて来る。
姉妹の顔にも徹夜明けの疲労が色濃く浮かぶ。
それはひたすら憑かれたように書籍を調べる亮真を心配してのことだ。

トントン

今度は少し強めに叩く。
調べ物の邪魔をする事は姉妹の本意ではなかったが、昨夜から夕食も夜食も食べず飲み物すら取っていない亮真を放っておく事は出来なかった。

「亮真様……？」

恐る恐るドア越しに声をかける。
やはり返事は無く、ページをめくる音だけが微かに聞こえる。
そしてついにその音も途絶えた。

「サーラ……」

「ええ……やるしかないわね姉様」

姉妹は顔を見合わせると、手にしたお盆を床に置き木製の扉へ向いた。

ドガッ！

武法術で身体強化された足が扉を吹き飛ばした。

「「亮真様！」」

部屋の中は闇に支配されていた。
窓からは木漏れ日が差し込んでいるにも関わらず、暗く冷たい。
そしてそれは部屋の奥に座る一人の男から発せられる何かが原因だった。

「亮真様……？」

サーラは恐る恐る問いかけた。

ドアを蹴破り侵入した姉妹に亮真は視線を向けず、ただ机の上を凝視するのみだった。
何度も何度もめくり続けたのだろうか、書籍のページは一部擦り切

れており、汗が紙に染みつい皺がよっていた。
机の上と床には無数の紙が散乱しており、紙に記載されている名前にはすべて横線が入っていた。
（これは……ご自分が知っている神の名前を書き出して、それが書籍に記載されているかどうかを調べたのね……）
サーラがざっと見渡しただけでも数十枚の紙が散乱している。

「姉様……」

ローラが床に落ちていた2枚の紙をサーラへと差しだした。
紙には裏表にびっしりと名前が書かれており、その全てに横線が入っている。
そして良く見るとそれは全く同じ名前が書かれていた。
並び方も同じだ。

「これって……」

サーラのつぶやきにローラが頷く。

亮真は自分の知りうる限りの神の名を書き連ねると、書籍の中に記載があるかを調べ、ある者には横線を入れて消していった。
そして、すべてを消し終えた後再び間違えが無いか、記載漏れがないか、見落としが無いかと、再び同じ作業を行ったのだ。
そう何度も何度も何度……有りもしない希望を探して。

「……無い……」

亮真の口から微かに言葉がこぼれる。

「亮真様？」

「俺は……帰れ無い……」

今度は姉妹の耳にはっきりと聞こえた。

「帰れない……帰れない……帰れない……」

亮真の口から漏れる言葉がだんだんと強く大きくなる。
それに伴い、部屋の中の闇は暗く深くなっていく。

「姉様！」

「ええ！」

姉妹は部屋に飛び込んでから強い違和感を感じていた。
二人が亮真に持っていたイメージは、強く冷静で冷酷です少し優しいそんな人間だった。
だが今目の前に居る亮真は、はかなく脆く不安定。
それでいて禍々しく恐ろしい、そんなイメージを持たせる。
二人はとっさに亮真の頭を胸に抱えこんだ。
まるで赤子をあやす様に。
涙に濡れる幼子を安心させるように。

「大丈夫です。亮真様。私たちが居ます。ずっとお傍に……ですから……」

どれほど時間がたったのだろうか。
いつの間にか部屋の中を覆っていた暗く重い空気は消えていた。
姉妹の胸の間から穏やかな寝息が洩れる。

「姉様。ベットに運んだ方がいいよね？」

ローラが亮真へ視線を向けて言った。

「そうね……ローラ、そっちを抱えて」

１００Ｋｇを超す巨体を抱えて、二人はなんとか亮真をベットへ寝かせる。

「これからどうする？」

ローラの視線が破壊されたドアへと向けられる。

「徹夜でお疲れだからきっと夕方まで目覚めないと思う。ドアの方は宿屋の主人に話をして少し大目にお金を払えばいいわ」

ローラは躊躇う様に言った。

「亮真様怖かったね……」

「ええ、でもそんな事は関係ないわ……私たちは亮真様にこの身をお助けいただいたの。だから私たちは亮真様の物。ただ亮真様の為に尽くせばいいだけ」

「うん、そうだね。姉様」

姉妹はそう言って頷きあうと、ベットで眠り続ける主人へと視線を向けた。

（ここはどこだ？）
亮真の意識は深い闇の中に居た。
暗く冷たく、心まで凍りつきそうな闇の中に。
（俺は……そうだ！。宿屋の部屋で調べ物をしていたはずだ）
少しずつ亮真の意識がはっきりといしてくる。

「ここはお前の心の中よ」

感情の無い無機質な声が聞こえる。
（心の中？俺の意識の中ってことか。？）

「そうだ」

（俺は言葉を出していないぞ？）

「心の中だからな。言葉など意味が無い」

（お前は言葉を発しているぞ？）

「いや、お前が自分でそう思っているだけだ」

（お前はなんだ？）

「俺か？俺はお前の最も身近に居る、最もお前を理解している存在だ」

（なんだそれは？）

「今はまだいい……それはいずれお前自身が答えを見つけ出す」

そう言うと声が亮真に問いかけてきた。

「お前は何を望む？」

亮真は少し考え、もっとも強い願いを言葉にした。

（俺は……帰りたい。飛鳥に、爺さんに、クラスのみんなにもう一度会いたい。元の生活に戻りたい）

「だがそれは叶わない。お前はそれを自分で確認したではないか」

声は無情にも亮真の願いを切り捨てる。

（俺は帰れないのか？もうあの生活に戻れないのか？）

「戻れない。可能性自体は０ではないが。恐ろしいほどの犠牲を覚悟するか、運にすがる以外に方法は無いだろうよ。お前も判っているようにな。後はその犠牲を覚悟して行うのか、諦めるのかだ」

（なんだ？何の事だ？お前は何を言っている）

亮真の問いを声の主は冷徹な声で切り捨てる。

「お前は全てを認識し理解ている……お前は、ただその答えを認めたくないだけだ」

（俺は……俺は）

「お前が憤怒を解き放つなら、この世界を滅ぼすことだって可能だ。無理やりこの世界に呼び出され戦わされる。これは誰の所為だ？」

（それは……あの爺と帝国の奴らの所為だ）

「違う。これはこの世界の成り立ち自体が問題なのだ。この世界はお前達地球出身者の犠牲を前提に成り立っている歪んだ世界だ」

亮真の答えを声は否定した。

（歪んだ世界……？）

「そうだこの世界は奪う事を前提にして成立している世界だ！壊せ。殺せ。犯せ。奪われたものを奪い返せ。お前にはその権利がある！」

（権利が……あるのか？）

亮真が声に頷きかけた時、声が世界に響いた。

「大丈夫です。亮真様。私たちが居ます。ずっとお傍に……」

それは暖かく柔らかで、安らぎに満ちた言葉だった。

それを聞いた時、亮真は意識を失い闇の世界から消えた。

「ふむ。我を解放せずに戻ったか……まあそれも良い。いずれ嫌でも選択する。我を従えるか我に飲み込まれるを……どちらであろうとそれはお前自身が決める事……我はお前自身なのだから」

亮真のいなくなった闇の中に無機質な声のみが響く。

第2章第4話

異世界召喚６４日目夕方【召喚されし者の絶望】その４：：

「う……うぅん」

亮真がベットの上で目覚めたのは、日も既に落ち辺りを夜の帳が支配し始めた頃だった。

「うん……あぁ？」

亮真の口から大きなアクビが漏れた。
彼の眼にまず最初に目飛び込んできたのは、破壊された部屋のドアだった。
ドア板がぶち破られ、大きな穴から廊下の照明の光が部屋に差し込んでくる。
次に気になったのは自分の位置だ。
なぜかベットに寝ている。

プ～ン……

食欲を誘う美味しそうな香り。
ドア板に開いた穴からシチューの匂いが漂ってくる。
階下の食堂で食事が出されているようだ。
ドアに開いた穴といい、自分がベットに寝ている事といい、色々と気になる点は多かったが空腹には勝てない。
彼は身支度をすると階下へと降りて行った。

「お！起きたのかい」

宿屋の主人が亮真に声を掛ける。
階段を下りた先にある受付に店主が顔を上げた。
どうやら帳簿の整理でもしていたようだ。

「あ、どうも。おはようございます」

宿屋にチェックインした時に顔を合わした以外、ろくに挨拶すらしていない亮真に対して店主は話しかけた。

「部屋の修理代はお連れの女の子からもらった分で足りるから。気にしなくていいよ」

気さくに話しかけてくる店主の言葉に亮真は怪訝な顔で答えた。

「ああ。そうかあんた意識が無かったんだったな。なら詳細はあの子たちに聞くといい。あの子たちがあんたの為に壊したんだからな」

「はぁ……」

亮真は、状況がつかめず、主人の言葉に曖昧な返事をした。

「まあ、なんにしろ弁償はしてもらってるからあんたは気にしなくていい。今夜寝る時は新しい部屋に移りなよ？荷物は運んであるからな」

どうやら部屋を移る事になりそうだ。
まあ、亮真にとってもドアの壊れたプライバシーの無い部屋に寝るのはごめんだ。

「判りました」

「ああ、そうだ！あんた昨夜から何も食べてないんだろ？……家内がシチューを作ったから部屋に持っていきな」

そういうと、調理場に居る奥さんへ声をかけた。

「あいよ！そんな怒鳴らなくても準備できてるさ！」

調理場から奥さんがすぐにお盆を掲げてやってきた。
どうやら亮真と店主が話す声を聞いて既に準備していたようだ。

「はいよ！」

威勢の良い声と同時にお盆が亮真の前に突き出される。
良く煮込まれたシチューの香りが食欲をそそる。
パンも焼きたてだ。
だが亮真は戸惑いを感じた。
お盆には3人分の食事が乗っていたからだ。
やけに大きな皿に注がれたシチューはまず亮真の分だろう。
なら後の二つの皿は？

ドガッ

突然亮真の右足の脛が蹴られる。

「あんた。それはお嬢さん達の分だよ！」

１９０ｃｍ近くの身長に１００ｋｇを超える巨体だ。

女性に脛を蹴られた程度でどうなる体でもないが、いきなり蹴られた事に驚く亮真へおかみさんは言い放った。

「あんた！どれだけあの子達に心配をかけたと思ってるんだい。ええ？でかい図体して」

よほど亮真の表情が気に入らなかったらしい。

「あんたが何を調べてたのか知らないけどね。血相変えて帰ってきたと思ったら、夕食も夜食も食べずに部屋に籠りきってさ……あんたが食べないのはそりゃあんたの勝手だよ！でもねあんたが食べないのに自分たちが食べるわけにはいかないってあの子たちも食事をしなかったんだよ？」

「え？あいつら食べて無いんですか？」

亮真の顔色が変わった。

「はぁ。これだから男ってのは……良いかい！あの子達もそろそろ目覚める頃合いだ！部屋に持って行って一緒に食べな！」

大きなため息をつくと呆れたように首を振りながら調理場の方へと戻っていく。

「まぁ、あんたは一人じゃないってことさ。何を悩んでるか知らないが、思いつめすぎると他の大切な者を失うことになるぞ」

亮真の肩を叩き店主も帳簿整理の仕事に戻った。

（俺は……）

亭主夫婦の言葉が亮真の頭の中でぐるぐると回る。
ただひたすらに地球へ帰るそれだけを目的に旅をしてきた亮真が、
サーラ達姉妹に支えられて来た事を強く意識させられた瞬間だった。

（俺は周りを見ていなかったのか……）
亮真にとってこの世界は苦痛でしかなかった。
無理やり召喚された亮真がこの世界を好きになれるはずがない。
というより、正直に言って亮真はこの世界を憎んでいた。
当然この世界に生きる人間達も。
だが憎んでいたはずのこの世界の人間達にいつの間にか亮真は支えられていた。
思い起こせば帝都で会った食堂のおばちゃんにしろ、ギルドで会った受付嬢にも。
彼らはなにも知らない亮真に教えてくれたのだ。
様々な事を。
それは人と人との繋がり。
結局人は一人では生きられないのだ。
どれほどこの世界を憎もうと、それは変える事の出来ない真実。

コンコンコン。

「はぃ。どうぞ……」

亮真は姉妹達の部屋に入った。

この日、姉妹と共に取った食事は、亮真がこの世界に来て最も美味だと感じる食事となった。

第2章第5話

異世界召喚８３日目【強制依頼】その１：

ミレイシュの町を後にした3人は、東部地方の港町フルザードへとやってきていた。

アナマリアより借りた書籍により、元の世界【地球】へ戻る事の出来る可能性が限りなく0に近い事を知った亮真は、帰還の手段を追い求めることを止め、この世界で生きていくことを考え始めた。
その心境の変化の要因にはサーラ達姉妹の献身的な愛情も大きく影響していた。
だが、この世界で生きるといっても何か目的があるわけではない。
それこそ勇者として召喚でもされたのならまだ楽なのだろうが。
そこで亮真はギルドの依頼（クエスト）を受け金を稼ぎながら旅をする事にした。
自分がこの世界で生きる意味を探す旅に。

「これからどうします？」
フルザードの町のギルド前で3人は話し込んでいた。
3人はミレイシュの町から街道を通らず森を突っ切って南下してきた。
その所為で相当な量の素材が溜まってきている。
なるべく嵩張らない物で高額な物のみを厳選して取得したのだがその量は軽く４０ｋｇを超える。
戦闘を行いながら運ぶ量としてはかなりきつい量だ。
ミレイシュを離れてから２０日。
3人の使っている剣も既にただの鉄の棒となっていたため、一旦フルザードの町で装備の新調と物資の処分を行うことにしたのだ。

「姉様はこのままギルドの方へ行って。依頼（クエスト）の達成報告と次にどの依頼（クエスト）を受けるのがよさそうか下調べを。私たちは荷物を整理して、消耗品の買い足しと溜まった素材を処分しに魔法道具屋（マジックアイテムショップ）に向かいますわ。」

ミレイシュを後にしてから討伐した怪物（モンスター）の換金可能な素材がかなりの量になっていた。

ローラ一人では無理だろうし、姉妹二人でも厳しいものがある。

どうしても亮真が運ぶしか方法は無い。

（まあ。妥当だな。）

「そうだな。・・・ローラ。よさそうな依頼があるか確認だけして魔法道具屋（マジックアイテムショップ）前に来てくれ。昼食をとった後に装備を新調してから受ける依頼（クエスト）を決めようか。」

ミレイシュの町を離れる際に3人は隊登録（パーティー）を行っていた。

依頼（クエスト）の報告や受注を一人で行え手間が省けるためだ。

「判りました。では後で。」

軽く頭を下げるとローラはギルドの建物の中へ消えた。

「さて。さっさと換金してくるか。」

そういうと亮真は山積みの角や皮を抱えて歩きだした。

「はい。トリプルGランク。ローラ・マルフィスト様ですね。確かに依頼（クエスト）の達成完了を確認しました。お疲れ様でした。」

受付嬢はローラへ登録カードと報酬の入った袋を差し出しながら言った。

20日かけて討伐した怪物（モンスター）はかなりの数だ。

尤も討伐した対象が全て自分より低いランクの怪物（モンスター）のみなので達成値（クリアポイント）に変化はない。

（そろそろFランクになるべきじゃないのかしら？）

ローラはそう思わなくもないのだが、亮真はあまりランクを上げる

ことに興味が無いらしい。
実力的に亮真はDやCにも十分値するとローラは思うのだが。
そんな事を思いながら受付を離れようとしたローラへ声をかけた男が居た。
「ほう。かなりの数を討伐されたようですな。」
受付嬢の後ろにある机で書類の束と格闘していた男が、席から立ち上がりローラの方へと歩いてくる。
年のころ30代の半ばといったあたりだろうか。
丁寧に金髪を後になでつけた品の良い感じのする男だ。
仕立ての良い服を着ているところを見てもギルド内でそれなりの地位に居るのだろう。
「ローラ・マルフィストさんですな。隊員（パーティーメンバー）は御子柴亮真さん、サーラ・マルフィストさんのお二人で間違えありませんか？」
男は穏やかな口調でローラへ話掛ける。
「そうですけど・・あなたは？」
「申し遅れました。私はウォルス・ハイネケル。この町のギルドマスターをしております。」

この男と出会った事が亮真に新たな道を開く切っ掛けとなる。

「強制依頼だって？」
フォークに突き刺された肉にかぶりつきながら亮真はローラへと尋ねた。

時間は午後13時を過ぎたあたりか。
昼食時を少し過ぎた時間帯の為か、亮真達が入った食堂にも空席が目立つ。
怪物（モンスター）達を解体して調達した素材を魔法道具屋（マジックアイテムショップ）へと卸し、店の前でサーラと合流した。

そして深刻そうな顔つきのサーラの話を聞くために入ったのが、魔(マジ)法道具屋(ックアイテムショップ)の斜め向かいで営業するこの食堂だ。

「はい。どうやらそういう事のようです。」

亮真の言葉にローラは頷いた。

「強制依頼ねえ・・・ギルドマスターや一部の上級管理職が特定の傭兵や冒険者を指名して強制的に依頼(クエスト)を受諾させるシステムだったな。だが？」

亮真は首を振りながら続けた。

「あれは高位の傭兵や冒険者だけのはずだ。少なくとも、貰った手引書ではそうなってた。」

「でも変じゃない？私達はトリプルGランクなのに指名されるなんて？　と、いうかトリプルGって下級ランクですよね？」

亮真の言葉を聞きサーラが首をひねる。

「その辺の事情も含めて説明するので１４時頃にギルドの方へ出向くようにとの事でした。」

ローラ自身もあまり乗り気ではないようだ。

とりあえず伝言を頼まれたから言っただけという感じがにじみ出ている。

そして乗り気でないのはサーラも同様だ。

強制依頼ということは誰も受け手が居らず、しかも緊急を要する依頼ということだ。

緊急でないなら請け負う人間が現れるまで放置でも問題はない。

そして誰も受けたがらない程、面倒で危険が大きいということだ。

まずろくな事にはならないだろう。

そこまで考えが及んだ亮真は、ローラへと尋ねた。

「それ、無視する方が良いよな。」

「出来ればそうしたいのですが・・・ギルド登録の抹消を仄(ほの)めかされまして・・・」

「脅してきたわけか。」

「そこまで露骨な言い方ではありませんでしたが言いたい事は同じです。」
ローラの言葉を聞き亮真は宙を見上げた。
頭の中で利害の算盤が弾かれる。
（脅してきた事は気に入らねえ。それにそこまでの権限をギルドマスターといえど簡単に行使出来るだろうか？確かに権利はあるが一方的に抹消は出来ないはずだ。）
心情的には最悪と言っていい。
上から物事を押しつけてくる人間は亮真の一番嫌いなタイプといってよい。
だがその一方で利害という点では別の答えが出ている。
（だが万一という可能性がある。この世界で身分保障の無い俺が現状持てる身分はこいつだけだ。金だけはアゾスから奪った金が手つかずに残っているし、狩りで稼いだ金もだいぶ溜まってきている。金を使えば身分は買えるだろう・・・いや、権力者の知人もいないのに金で身分が買えるわけもない。いずれギルドを抜けるにしろまだ冒険者の身分は利用価値がある。多少の理不尽さは目をつぶってでもギルドに残るべき・・・か・・）
結局は現実の利益を取るか、自分の心情を取るかだ。
ローラ達姉妹は亮真の決定に従うだろう。

様々な思考の後、亮真はついに言った。
「行くだけ行くか・・・話を聞いてあまりにも割が合わないようならまた考えることにする。」
亮真の言葉に姉妹は頷いた。

第2章第6話（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。
今後もよろしくお願い致します。

第2章第6話

異世界召喚９０日目【強制依頼】その２：

フォン・・

後方より放たれた矢が亮真の左の耳たぶを掠めて御者台に突き刺さる。

「亮真様！」

「うるさい！お前は黙って馬の制御をしてろ！サーラ！」

亮真は耳たぶから滴る血を見て叫び声を上げるサーラを怒鳴りつけ、疾走する箱馬車の制御に専念させた。

馬に乗ることも馬車を操作することも経験したことが無い亮真にとって、御者台に座るサーラの手綱さばきがこの襲撃から生き残る唯一の希望だ。

たとえ自分の身を心配してくれたことから出た言葉であろうと、今の亮真にとっては意味が無い。

馬車には全身ハリネズミのように矢が突き刺さっている。

本来なら板製の天蓋が着いている客席部分に居るべきだろうが、今はそうもいかない。

後方から次々と射掛けられる矢の軌道が山形なため、車体を通り越して天蓋の無い御者台に降り注いでくるからだ。

馬の制御が出来ない亮真は、サーラが手綱に集中できるように車体の窓に掛かっていた厚いカーテンを剥ぎ取りそれを振り回すことで、御者台を矢から守っていた。

「クソッタレが！まだ追ってきやがる！」

「亮真様。やはりこれは……」

サーラの言葉に亮真が忌々しそうに履き捨てた。

「ウォルスの野郎……舐めた事しやがって。いや今はそんなことを言っている場合じゃないな。……サーラ！ローラ達がそろそろ伏せているはずだ。いいな！合図を見逃すなよ！」

「はい！」

亮真は矢を必死でたたき落としながら7日前の野営地での事を思い返した。

――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――
――――――

異世界召喚８３日目夜

此処は東部地方の港町フルザードから北西に向かった森の中。

強制依頼の名の下に亮真達３人へ持ち込まれたのは、東部地方３王国の１つローゼリア王国へ向かう商隊の警護だった。

ローゼリア王国は鉄の国と言われるザルーダ王国と港町フルザードを含む海洋貿易王国ミスト王国との間に存在する国だ。

国土の大部分が平野であり、農耕牧畜が主な産業の国ローゼリア王国。

報酬に色を付けると言う事と亮真達以外に傭兵を付けると言う話であったため、この引き受けることになったのだが、初めからこの依頼は怪しい事ばかりだった。

商隊の警護として集められたはずの亮真達にあてがわれたのは立派な天蓋付きの馬車であった。
とても傭兵や冒険者が乗る様なものではない。
次におかしかったのは商隊と言いながら他の荷馬車が空荷であることだ。
複数台ある荷馬車のうち幾つかが空だというのなら分からなくは無いが、全てが空荷となれば怪しまざるおえない。
港町フルザードから出発することを考えれば、交易の為の商品などいくらでも用意できるはずだ。
商売の効率を考えれば荷を空にして交易に出るはずがないのだ。
さらに言えば商人達に関してもかなり怪しい。
かなり絞り込まれた体つきをしているのだ。
しかも手にタコが出来ている。
商隊長へあいさつに行った際に交わした握手でその事に気がついた亮真は、首を捻らざるおえなかった。

今この商隊の護衛を請け負った傭兵の主だった者はたき火を囲んで車座に成りながら話し合いをしていた。

「あたいも気になってはいたのさ……少なくとも、私は今までこんな商隊を見たことが無いよ。」

亮真の今までこんな商隊を見たことが有るかという問いに傭兵団【紅獅子】の頭であるリオネが答える。
女性ながら１８０を超える堂々とした体格に小麦色の肌。
豹の様に引き締まった筋肉を持ちながら、胸は大きく張り出し女性であることを大いに主張している。
肩のあたりで切りそろえられた赤髪が金の瞳に良く調和していた。
年の頃は３０半ばといったあたりか。
女としての成熟した色香を放つ魅力的な女性だ。

「あっしらも傭兵稼業は長いんですが初めてですね。」

彼はリオネが率いる傭兵団の補佐役で名をボルツという。
５０代半ばの男で、左腕が無い。
戦に参加した際に失ったらしいが、初対面の亮真に軽く話すあたりを考えると、本人はあまり気にしていないようだ。
リオネより長い傭兵稼業を営んできたボルツも初めてというからには、やはりこの商隊は何かあると言って良いだろう。

「あんた……どう思う？」

リオネが亮真へ尋ねてきた。

「俺は正直この依頼を請け負った事を後悔していますよ……」

亮真の言葉にリオネとボルツ二人が頷く。

「報酬が良いから請け負ったけどこりゃぁ失敗だったかな……」

「ですがアネさん。ギルドを通して請け負ってる依頼だ。そうそう気にしなくても良いんじゃないですかい？」

リオネの言葉を聞き亮真が名前を知らない傭兵が言った。

「バカだね。あんた。良くそんな程度の危機管理で今まで傭兵稼業をやってこれたもんだ。」

「な！いくらアネさんでもそんな言い方はねえだろう！」

激昂する男をしり目にリオネは首を振りボルツは口を歪めた。

「あんた。ランクはＢかもしてないけどね。判断力はそこの坊やにも負けてるよ。」

リオネの言葉にその場に居た傭兵達の視線が亮真へと向けられる。

「そもそも皆をここに集めたのはあたしだけども、それを言い出したのはその坊やさ。」

「へ！こんな若造に指図される様じゃ【紅獅子】のリオネもたかが知れてるな！おい！」

亮真はこの場に居る中でもっとも年若い。

実年齢１６歳であり、老け顔のおかげで２０台半ばに見られるとしても、周りはみな３０以上４０半ばがほとんどだ。

リオネにメンツをつぶされた傭兵が仕返しとばかりに大口を叩くのも当然と言える。

「あぁん？アンタ誰に向かって口を利いてるつもりだい……？」

穏やかな声だ。だがそれが亮真には嵐の前の静けさに聞こえた。

そしてそれは回りの傭兵達も同じように感じたに違いない。

大口を叩いた傭兵の尻馬に乗って囃したてていた声がぴたりと止んだ。

「まああんた達の気持は判った。今のところはっきりした事が分かっているわけじゃないし、今日のところは解散という事にしよう。」

ボルツの言葉にその場の空気が緩む。

リオネもこれ以上揉めるつもりはないようだ。

「まいったね。こりゃ……」

リオネの言葉にボルツと亮真がそろって頷いた。

「頭の悪い奴らばかり揃った様ですな……」

「だが愚痴を言ってもしょうがないだろボルツ。最悪に備えておかなければどうしようもないんだから。」

そういうとリオネは亮真に視線を向けた。

「坊や。どうする?」

「まぁ今のところはどうしようもないですね。ただ怪しいってだけで依頼を破棄するわけにもいかないでしょう。」

「そうだろうねぇ。しかし……今回の依頼に裏が有るとしたらそれは何だと思う?」

リオネの言葉に亮真は深くため息をついて答えた。

「俺らを餌にして何かをおびき寄せるってところかな……裏が有ると仮定して事実を読み解けば。」

第2章第7話

異世界召喚９０日目【強制依頼】その３：

亮真には判っていた。
この依頼が不自然な事を。
だが彼に出来たのは、リオネという後ろ盾を作る事だけ。
傭兵達との会合からすでに7日が過ぎたが、道中一度も問題が起きる事は無かった。
怪物（モンスター）や盗賊といった望まれぬ客人の来訪も無い。
本来なら何事も起きないのならそれに越したことは無い。
亮真とリオネ達以外の傭兵との間には会合いらい若干の衝突はあったが、そんなことは些末なことに過ぎなかった。
彼は判っていたのだ。
何も起こらない事こそが嵐を予感させるのだと。

そして、フルザードの街を出立して7日目。
ついに亮真の予想は的中する。

ヒュ

矢が風を切り裂く。
ローゼリア王国国境付近の森林地帯でそれは起こった。
突然街道を挟む左右の森の中より矢が射掛けられたのだ。

「「「なんだ！」」」

「「奇襲だ！」」

次々に声を上げる傭兵を一人の商人が叱り飛ばした。

「皆落ち着け！。隊列を崩すな。」

馬車の周りで警戒していた傭兵達の口から、次々と警告が発せられる。

商隊の馬車は全部で１０台。

御者は商隊の商人たちである。

傭兵達はその周りを固める様に馬に乗り警護していた。

そんな中の奇襲である。

いくら傭兵といえども不意を突かれれば動揺するのは当然と言える。

そんな中、落ち着いて周りを指揮する商人を亮真はジッと見つめた。

「落ち着け！。矢から身を隠せ！板でもマントでも何でもいい。翳して少しでも矢を防げ！」

的確と言える指揮だろう。

飛び交う矢の雨の中で出来るのは、少しでも其の災いを逃れる事だけだ。

「亮真様！」

「ああ。遂にきたな。」

周囲の傭兵達とは対照的に、亮真の言葉に動揺の色は見られなかった。

亮真の中ではこの商隊を襲撃してくる人間がいる事は想定済みだったのだ。

ただ問題も有った。

それは誰が、何時、何のために襲撃してくるかだ。

「いいか。サーラ。ここからが勝負だぞ？」

「はい。判っております。……姉様達の方は……」

サーラの言葉に亮真は頷いた。

「大丈夫だ。リオネさんに付けてもらった傭兵は信用出来る。……後はこっちがどれだけ旨く連中を引き連れて向かうかだが……やっぱり予想どうりか！」

亮真の手に握られた槍が向かってくる矢を弾き飛ばす。

彼の乗る馬車に射掛けられる矢の数が明らかに周りに比べて多い。

僅かな間に亮真の乗る馬車がハリネズミの様になったのが証拠だ。

つまり襲撃者の狙いが確定したという事になる。

御者台に乗る自分たちと、馬車を曳く馬を狙う矢の雨を亮真とサーラは必死で防いだ。

（怪しいとは思っていたが、予想どうりか。狙いは俺達だな……問題は誰の差し金かってことだ……）

最有力な候補はやはりオルトメア帝国の策略と言ったところか。

国境でシャルディナ皇女の追跡を振り切ってからかれこれ3月近くになる。

そろそろなんらかのアクションが有っても不思議ではない。

だが亮真はここで考える事を放棄した。

（バカだな……俺は。今の状況では生き残る事が最優先だ。犯人探しは後でじっくりやればいい。）

ようやく矢の雨は止んだ。
時間にすれば1分ほどであっただろうか。
その間に雨に打たれて死んだ傭兵は7人。
此処に居る警護の傭兵は30名なのでおよそ4分の1が最初の奇襲で殺された計算になる。
だが馬車に繋がれた馬の殆どが息絶えていた。
唯一無事と言えるのは亮真が乗った馬車の馬くらいだろう。

亮真は素早く辺りに視線を配る。
亮真達が乗る馬車はちょうど商隊の中間あたりに位置していた。
つまり前のも後ろにも逃げにくい位置なのだ。

「サーラ！行けそうか！？」

亮真の問いにサーラは手綱を握り締め前方の街道をにらみつける。

「無理です！馬車が街道を塞いでいます！」

奇襲を受けたせいで隊列が乱れたのだろうか。
十分に道幅が有る街道を前の荷馬車が塞いでしまっている。
まるで亮真達を逃がさないように業と置いたかのような絶妙な位置取りだ。
亮真はその言葉を聞き後ろの隊列を確認し舌打ちをした。
まったく同じように街道を塞がれていたからだ。

「坊や！」

リオネが傭兵を率いて亮真の元にやってくる。
事前にある程度の予測をしていたため彼女の部下に死亡者はいない。
皆軽傷で済んでいる。
死亡したのはみんな亮真の予測を本気にしなかった者たちばかりだ。
ここで突然後方から鬨の声が上がる。

「来たな……」

矢で足止めし後方より別働隊が襲いかかる。
悪くない策だ。

「坊や！」

リオネの顔に苛立ちが浮かぶ。

「リオネさん。計画どおりに。」

亮真の言葉にリオネは軽く頷くと横に立つ副官に向かって言い放った。

「判った。すぐに前方の馬車を吹き飛ばして退路を確保しな！」

怒声を上げる傭兵とは裏腹にリオネは冷静に近くに居る傭兵へ破壊の指示を出す。

「アネさん……正気ですかい？商人達を見捨てるおつもりで？」

食い下がる傭兵にリオネは冷たい目を向けて言い放った。

「ごちゃごちゃうるさいよ！気に入らないならここで死にな！」

「あ……アネさん……」

「あんた達に納得しろとは言わないよ！でも生き延びたかったら従いな！」

リオネの剣幕に傭兵達は押し黙った。
プロとしての職業倫理と生物の生存本能との鬩ぎ合いだ。

「アネさん！馬車に商人がまだ乗ってやがる！どうする？」

また別の傭兵がリオネの元にやってきた。
馬車に商人が残っている事に気が付き馬車を吹き飛ばす事を躊躇しているらしい。
亮真の予想では商人達は奇襲と共に戦場を離脱するはずだった。
（どういうことだ？グルじゃないってことか？・・・・・・・いや。逆にグルだからこそ逃げてないのか・・・・・・）
リオネがどうする？と視線で問いかけてくる。
亮真に取れる結論は一つだけだ。
亮真は軽く頷いた。

「構わないからそのまま一緒に吹き飛ばしな！」

「りょ……了解！」

リオネの言葉に指示を仰ぎに来た傭兵は幾分恐怖を含んだ顔で答え、元の場所に戻る。

数瞬後。

ドゴォォォォ！

亮真達の前方で街道を塞いでいた一台の馬車が爆炎に包まれ見事に馬車を街道の片隅へと吹き飛ばす。

「アネさん開いた！」

「良いかい！生き延びたかったら後ろを振り返らずに走るよ！！！」

傭兵達に激を飛ばすとリオナは亮真へと向き直る。

「此処まではアンタの予想どおりだね。えぇ？坊や」

「可能性を考えただけですよ。ところでこの後の手順は大丈夫でしょうね？」

亮真の目が冷たく光る。

「あ……あぁ。アタイは大丈夫だよ。後はあんたの大事なお人形とウチのボルツの奴が旨く準備してるかどうかさ。」

亮真の目に気押されながらもリオネは言った。

「なら結構です。ローラには十分に策を説明しています。頭の良いヤツですからミスをすることは無いでしょう。後は……我々の足次第ですね。」

「判ってる。あんたも十分注意するんだよ。」

「えぇ。リオネさんもご無事で。」

リオネは馬に一蹴り入れると、前方へ馬を走らせた。

「亮真様！きます！」

いつの間にか後方の馬車から聞こえていた剣戟の音が途絶えていた。
後方に居た傭兵達はみな襲撃者に始末されたのだろう。

「行くぞ！」

亮真の言葉にサーラは頷くと馬に鞭を当て走り出した。

疾走する亮真の視界には無人の街道だけが映る。
先行したリオネ達は馬を限界まで走らせて目的地まで掛ければ良いが、亮真達はそうはいかない。
2頭立てとはいえ、重い客車部分を引くため馬車の速度はどうしても遅くなる。
勿論、客車部分を捨ててしまい馬に乗って逃げると言う手段も有るには有るが、亮真はそれを選択しなかった。
何故ならそれでは逆に襲撃者達を振り切ってしまう可能性が有る。
襲撃者を突かず離れず適度な距離を維持したまま目標地点に誘導することが、亮真の目的なのだから。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

風が亮真の顔を強く叩く。

相手の矢からサーラを守りきるのはなかなかに難しい。
すでに幾本もの矢が亮真の守りをすり抜けて御者台に突き刺さり、
サーラの体から赤い筋が幾本も服に染み出していた。
亮真も先ほど耳たぶをかすめた矢のおかげで激しく出血し、首を周
り胸元を赤く染め上げている。

「まだか！？」

降り注ぐ矢を振り払いながら問いかける亮真の声に焦りの色が滲む。

「もうそろそろ……あ！あれです！見えました。」

まっ直ぐにどこまでも伸びる街道の真ん中で何かが翻る。
サーラの視界の中に、黒地に赤い獅子が踊る旗が飛び込んできた。
距離にして５００Ｍ程と言ったところか。

「よし！何とかなったな。……いいか！ここからが正念場だぞ？」

「判っています。」

そういうとサーラは手綱を緩め少しずつ馬車の速度を落としていく。
後ろの砂塵の中から亮真の視界に数人の馬に乗った男達が浮かび上
がってきた。

「よぉし……良いぞ。もう少し速度を落とせ。……向こうも少し速
度を落としてきたな……よしよし。」

馬に乗る男達が弓を引く姿がはっきりと目に映る。

「やれぇぇぇぇぇぇ！」

亮真達が乗った馬車が街道に突き立つ槍の横を通り過ぎたとき、亮真の手が槍を掴み高々と掲げられた。

グシャァァァ！

馬車の後方で水気を帯びた何かが貫かれる音が響く。
それと共に後方から響いていた馬蹄の音がピタリと止んだ。

亮真は馬車を降り後方の石柱群へと歩き出した。
当然サーラも其の後ろにつき従う。

「うまく行ったようですね。」

サーラの言葉に亮真は軽く頷くことで答えた。
尤も亮真は成功したと現時点で確信していたわけではない。
油断こそ尤も恐るべき不幸なのだから。

亮真の歩みと共に森の中からリオネ&ボルツといった傭兵達が湧き出してきた。
その数およそ１０数名。
彼らは十分に警戒しながら街道の真ん中に突き出た石の柱の群れへと歩む。

「法術の効果範囲を逃れたヤツが居ないか確認しな！」

リオネの指揮の下、一斉に傭兵達が２人１組で散開する。

「ああ……何人か逃げているのがいやすね。血の跡が森につづいてらぁ。」

石柱に体を貫かれた追手達がうめき声に混じって傭兵達の報告が聞こえる。
亮真の頷きを確認したボルツが軽く右手を払いのける様に合図すると、それを見た傭兵達の内数人が森の中へ消えていく。

「若。これからどうするんですかい？」

ボルツの呼びかけに亮真は驚いた表情を浮かべた。

「なんです？若って？」

「いぁあ。ま！敬意の表れってやつですよ。」

どうやら今回の策略の結果を見てボルツの中の心象が大きく向上したのだろう。
亮真は苦笑いを浮かべたが何も言わなかった。

「それで坊や。これからどうするんだい？」

傭兵達の指揮を終えたリオネが亮真に問いかける。
こちらは呼び方を変える気が無いらしい。
もっとも亮真にしてみればどうでも良い話だが。

「まぁとりあえずは情報を集めてからですね。生き残っている方がかなり居るようですから何とかなるでしょう。」

亮真の顔に酷薄な表情が浮かんだ。
それは歴戦の猛者と言えるボルツ&リオネの二人ですら背筋を凍らせる笑みであった。

サーラとローラは亮真の顔を見て神に祈った。
彼女達には予想出来たのだ、この愚かな襲撃者達の末路がどれだけ悲惨なものになるかを。

第2章第8話（前書き）

ようやく時間が取れるようになりました。
書けるうちに書かないと……
つたない作品ですが今後ともよろしくお願いします。

第2章第8話

異世界召喚９０日目【強制依頼】その３：

ミハイル・バナーシュは縄で拘束されたままその場へ引き出された。
其処には３０半ばの大柄な赤毛の女と、左腕を無くした初老の男、２０代半ばくらいの大柄な男に其の男の後ろに影のように付き従う少女が二人。
ミハイルの心にざわめきが生まれる。
なぜなら今回の暗殺の標的は他ならぬ目の前の少女だからだ。

彼らが亮真達の罠に嵌まってからおよそ3時間程が経過しただろうか。
石柱に貫かれた襲撃者達の内、息が有ったものはミハイルを含めてほんの数人しか居なかった。
彼らはみな最低限の止血だけをされると、猿轡をかまされ縄で拘束されると馬車に放り込まれた。
それから何処かへ馬車は移動し、生き残った襲撃者達を一人ずつ何処かへ連れ出したのだ。
そして遂に襲撃の指揮者であるミハイルの番となった。

「あなたが今回の襲撃を指揮したミハイル・バナーシュさんですね？」

ミハイルは目の前に座る大柄の男の問いにただ頷くしか出来なかった。
男の声は威圧的ではないし、何より口調は礼儀正しく穏やかだ。
尤も彼らを襲った側の人間であるミハイルにとってみれば、礼儀正

しく穏やかな口調などかえって不気味でしかない。
顔を真っ赤にし怒声を上げて尋問される方が、捕まった側の人間にしてはまだマシなのだ。

「おおよその話はあなたの部下達から聞いています。まぁ、お互いに不孝なめぐり合わせというやつでしたかね。」

男の言葉にやや違和感を覚えながらミハイルはただ黙っていた。
騎士団の習得科目の中には、敵に捕らえられた際に身の処し方と言う物がある。
相手に情報を与えないというのは戦の鉄則だからだ。

「あぁ。別にそう警戒しなくても結構ですよ。今のところあなたをどうこうしようとは思っていませんから。」

男の言葉がミハイルには悪魔の囁きに聞こえた。

「なぜ殺さない？」

「殺す必要が今のところ無いからですよ。」

男は肩を竦めると簡単に言い放った。
それはつまり、必要なら殺すという事の裏返しと言う事だ。

「そんなのはお互いさまでしょう？」

男の言葉にミハイルは反論の余地を見いだせなかった。
ミハイル自身は決して殺人を好むわけではない、いやどちらかと言えば殺しなどしたくは無いというのが本音だ。
しかしローゼリア王国の近衛騎士隊長として、国の為王女の為に必

要で有るならば其の手を血に染める事を厭うつもりはない。
今度の暗殺もまた彼の騎士としての誇りにおいては決して誉められる事ではなかったが、貴族派の野望を止める為には致し方ないと納得させたのだ。
ミハイルの心を読むように男は言った。

「まぁ。貴方がどう思っているかは知りませんが、我々は決してあなた方の敵では有りませんよ。」

男の言葉にミハイルの顔に戸惑いが浮かんだ。

「……どういうことだ？貴様は貴族派の人間ではないのか？」

「そう。そこですよ。問題はね。まぁとりあえずこれから幾つか確認をさせてもらいます。ミハイルさん。貴方の疑問はそのあとでお答えしますよ。」

そういうと男はミハイルの後ろに回り込むと首筋に指を添えた。

「……なんの真似だ？」

「なあに、ちょっとしたおまじないです。害は無いので気楽に答えてくださいな。」

男はミハイルの返答を待たずに金髪の少女に目配せをした。
少女は合図をみて頷くとミハイルの前に進みでた。

「では幾つか質問をさせていただきます。あなた方がローゼリア王国の近衛騎士であるというのは本当ですか？」

「……」

「貴方が商隊を襲撃した理由はローゼリア王国の王位継承争いに関わっていますか？」

「……」

「貴方は王女を守るために今回の奇襲を企てたのですか？」

「……」

「貴方は騎士派に属し、貴族派と争っていますか？」

「……」

「ローゼリア王国の国王が急死し後継者として第一王女が継承するはずが、貴族派からストップがかかりましたか？」

「……」

「貴族派は王の遺言状があるとして、庶子の王女を擁立しましたか？」

「……」

次々を少女の口から繰り出される問いをミハイルは必死で黙殺した。どれ一つをとっても決してミハイルの口から肯定も否定も出来るはずがない。

「これは……どうしますか？」

少女が男に問いかける。

「余程答えにくいらしいな。まあ無理も無いか。」

だが男の顔はさほど深刻な問題とは思っていないと書かれていた。

「ローラ。前へ。」

男の言葉に誘われ銀髪の少女がミハイルの前に立つ。

ミハイルへ金髪の少女が最後の質問を行う。

ミハイルの心臓はこの問いを聞き猛烈な高鳴りを覚えた。

「最後の質問です。貴方が殺そうとしたのは彼女ですか？」

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

サーラの問いを聞いた時、亮真の指先はミハイルの鼓動の高鳴りを伝えた。

「ドンピシャだな。」

亮真の表情が歪む。

そしてそれはこの場にいた全員の顔と共通したものだった。

真実とは必ずしも口から伝えられるとは限らない。

ミハイルの様に頑なな沈黙は時に雄弁な口よりも真実を表してしまう。

彼が必死で表情を消そうとすればするほどに、周りの人間にはミハ

イルの心の内が手に取るようにつかめるのだ。
亮真の言葉を聞くまでも無く、リオネ達にはミハイルの心が見えていた。

「なるほどね……ウォルスのクソ野郎……アタイ達を嵌めたってわけだね。」

リオネの口から怨嗟の言葉が漏れる。
亮真の予測のおかげで自分の傭兵団から犠牲者は出ていないが、負傷者はそれなりの数が居た。
ミハイル率いる奇襲部隊の矢の雨による負傷だ。
亮真の予測をもとに有る程度の準備をしたうえでの損害である、もし亮真が予測をしなかったら、もしリオネが亮真の予測を本気にしなかったら可能性の話だが死傷者はこの数倍、下手をすれば全滅の可能性まで考えられる。
ギルドを通しての依頼である。
ましてや亮真達がこの依頼を受けた経緯を聞けばギルドマスターが絡んでいるのは明白であった。
当然今までギルドに対して抱いた信頼は失われ、その信頼の深さに対して同じだけの憎しみが掻き立てられる。

「まぁこれでウォルスの奴に嵌められた事はハッキリしたわけだ。」

亮真の言葉にその場にしたミハイル以外の全員が頷く。

「さて……問題は今後だな。どうしたものだか……」

「他のギルドに報告するってのはどうですかね？」

亮真の独白を聞いてボルツが言い出した。

「いや、アタイはそれはまずいと思う。ウォルスに騙された事は間違えないがそれを証明出来ない。下手に他のギルドマスターに泣きついて証拠を出せと言われたら私たちはどうしようも無くなってしまう。」

ボルツの言葉にリオネが反論すると、亮真達も一斉に頷いた。
ボルツ自身もあまり現実的な方法とは思っていなかったのか、其の意見に執着する様子は見せなかった。

「まぁ方法は考えてあるんだ。ただ……なかなか難しいものが有るけどね。」

「貴様達はなにを言っているんだ！」

亮真達の言葉を聞き、ミハイルの頭は混乱を極めた。
目の前の銀髪の少女を殺すことが出来れば全てが解決するはずだった。
少なくとも、騎士派に所属しているものにとってそれは共通の認識だった。

国王崩御の知らせの後、早急に王位の継承をと急いでいた第一王女ルピスに其の報告がもたらされたのは今から3月程前の事だった。
それは騎士派の面々には寝耳に水な出来事と言えた。
隣国ミスト王国で突然前ローゼリア王ファルスト2世の血を受け継ぐ者だという娘が現れたのだ。
庶子自体は決して珍しいものではない。
支配階級で有ればある程、其の血は重くなる。
血によって支配の正当性を証明するのであるから有る意味当然と言

える。
それ故に一族の血を絶やさぬ為に子を多く作る。
妻を持ち妾を作る。
時には戯れで平民の娘を犯す時も有るだろう。
そういった結果、庶子は生まれる。
だからそれ自体は問題ではない。
問題なのは王が死んで王位が空白で有る今この時に名乗りを上げたという事。
しかも王位継承者として。

其の報告が王都にもたらされた時、だれもがそんなバカなと取り合わなかった。
だが直ぐに消えると思われたこの噂は何故か瞬く間に王国中を駆け巡った。
そして噂は次第に真実となる。
そして騎士派の人間達にそれが真実だと認識させられる出来事が起こる。
貴族派の党首であるゲルハルト公が王国全土にこの庶子の擁立を宣言したのだ。
前国王の遺言状を掲げて。

騎士派の誰もがねつ造を疑った。
だが王国は真っ二つに割れた。
貴族派の掲げる遺言状の真贋が別れてしまった。
元々ルピス王女は近衛騎士団の団長を兼務している関係で非常に騎士派と密接な関係を持っている。
それに対して、あまり内政に関しては関わりを持ってこなかった所為で王国の内政をつかさどる貴族派とはあまり接点が無い。
其処に貴族派の党首であるゲルハルト公が庶子の擁立を宣言したため、騎士派２：貴族派３：中立派５のローゼリア国内の勢力バラン

スはそのまま王女派２：庶子派３：傍観派５の対立構造へと移行してしまったのだ。

元々軍人の集まりで有る騎士派は戦力という意味では非常に強力ではあったが、政治にはまったく不向きで有り、中立派の抱き込みには苦戦を強いられていた。
逆に戦力と言う点では騎士派に及ばないものの、政治力と言う点では騎士派を遥かに超える貴族派は国内の中立派の抱き込みに尽力し、中立派から貴族派へ移る者は後を絶たないのが現状である。

そんな劣勢の騎士派に朗報が入る。
ミスト王国より庶子がローゼリア国内に入るという情報である。
ゲルハルト公爵領に入り次第挙兵の計画らしいのだ。
これを知った騎士派は貴族派の浅慮を嘲笑った。
大切な神輿である庶子をローゼリア国への移動中に殺害してしまえば全ては元の鞘に収まる。
庶子さえ殺してしまえば中立派は再び傍観へと鞍替えするに違いない。
そんな希望的観測を基に今回の暗殺は決行されたのだ。

「何？って言われてもねぇ。」

ミハイル以外の全ての人間が頷いた。

「まぁハッキリ言えばあなた方は嵌められたんですよ。貴族派にね。」

亮真の言葉にミハイルの脳がフリーズを起こす。
元々武力はあってもあまり賢いとは言えない男だ。

「バ……バカな……いや騙されんぞ！」

「バカなって言われてもね。」

亮真はミハイルの言葉を聞き肩をすくめる。

「まぁ落ち着いてくださいよ。とりあえずご説明はしますから。」

そう言うと亮真はローラをミハイルの前に立たせる。

「まぁまずはっきりと言います。彼女は貴方達が探している庶子ではありません。」

「嘘だ！」

ミハイルの叫びが天幕を震わせた。

「そもそも貴方がたがローラを其の庶子だと考えた理由はこの銀髪でしょ？」

「そうだ！歳の頃は１０代半ばで銀髪の女だ！」

ミハイルは声を張り上げる。

自分の心に浮かんだ疑念を振り払うかの様に。

「まぁ確かにローラは銀髪で十代半ばですがね。……ですが逆に聞きましょう。それは貴方達が探す庶子を確定する身体要素ですか？」

亮真の問いにミハイルは考え込んだ。

（銀髪はかなり珍しいはずだ。それに年恰好まで近いとなれば……）

「そうだ！それで十分だ！」

ミハイルの答えを聞き亮真は呆れた。

「……貴方達は余程愚かなんですね。…銀髪で十代半ばの女の子など腐るほど大陸には居るでしょうに。」

「愚か者は貴様だ！我々が探しているのはただ銀髪で十代半ばなだけではない！フルザードからローゼリアへこの時期に入る娘だけだ！そんな条件を満たす者などそう居るわけがない！」

ミハイルの顔にしてやったりの笑みが浮かぶ。

（そうだ。偶然にこのような場所でこの時期に銀髪の少女が偶々通りかかる事など有るわけがない。こいつが何を企んでいるかは知らんが私は騙されないぞ！）

「確かに偶然通りかかる確率は物凄く低いでしょう。ですが必然で通る事は有るんじゃないですか？」

自らの正しさを確信するミハイルに亮真は憐みの混じった視線を向けた。

「どういうことだ？」

「つまり無関係な我々をフルザードから適当な依頼でローゼリア王国へ向かわせその情報を騎士派に洩らす。当然騎士派はそれに関心が向くでしょうからその間に本物の庶子を国内へと移動させる。ど

うです?それほど難しい話じゃないと思いますけど?」

ミハイルの勝ち誇った顔が氷付いた。

「バ……バカな……」

「そもそも騎士派の皆さんが貴族派の情報を手に入れたって所から変なんですよ。」

亮真の言葉にその場の全員が視線を向ける。

「その庶子は貴族派にとって代えのきかない切り札のはずです。それを国内に移動させようって言うならそれこそ貴族派の総力を持って綿密に計画される事でしょう。何より情報が洩れる事に尤も注意するはずです。それが騎士派に洩れた。」

此処で亮真は周囲を見渡した。

自分の話を理解しているかを確認するためだ。

「ワザと洩らしわけだね?坊や」

リオネの言葉に亮真は頷く。

「まぁ普通に考えればそうでしょう。そして貴族派はどうやったのかウォルスを抱き込んで傭兵を探させた。銀髪で十代半ばの傭兵をね。」

「それが私達と言うわけですね。」

サーラの言葉にローラが疑問を投げかけた。

「ですがウォルスはギルドマスターです。そんな危ない橋を渡るでしょうか？」

確かにギルドは公平中立が大原則だ。
傭兵荷も顧客にも同じように接し同じように信頼を得なければギルドなど運営出来るはずもない。
そういう観点で見れば今回のウォルスの行動は著しく不適切と言える。
商隊の護衛と言う名目で人を集めながらそれを囮≪おとり≫に使ったのだから。
となればウォルスが何も知らない可能性もあるのではないか？
ローラはその事を口にしたのだ。

「可能性は低いだろうね。なぜなら俺達は強制依頼でこの仕事を請け負ったからな。」

亮真は続けて言った。

「リオネさんにも聞いてみたがやはり強制依頼の対象は高位の、具体的にはシングルB以上の人間にだけそれも緊急性が高い依頼（クエスト）にのみ発令されるらしい。」

姉妹の視線を受けリオネが頷く。

「つまり俺達がこの仕事を強制的に受けさせられる根拠は無いってことだ。となれば……銀髪で十代半ばの傭兵を探した結果トリプルGのローラしかない無かった。そこで経験が浅い事を考慮にいれて強制依頼なんてハッタリを利かせて俺たちに依頼を受けさせる。後は騎士派の奇襲で死ねば良し。万一生き残ったとしても商隊の商人

に化けた貴族派の兵士が護衛対象だと思って油断する俺達をかたずける。そして真相は闇の中って訳だ。」

亮真の言葉を聞き其の場に居る殆どの人間に合点がいった。
商隊の荷馬車が空だったのは襲撃される事が前提だったからだ。
商人達の手にタコが有ったのも体格が良かったのも兵士なら説明がつく。
亮真達にだけ天蓋付きの馬車を支給したのはそこに庶子が乗っていると思わせるため。
騎士派の奇襲を受けた際に、進路を塞ぐように隊列を乱したのは亮真達を騎士派に殺させるためだ。
今まで不自然だった要素が解き明かされ一つの結論が導き出された。

「……なんという事だ……それではあいつは我々を騙したと言うのか……いや……しかしこれでは……」

亮真の推理を聞きミハイルの口から後悔と悲嘆が漏れる。
彼の言うあいつとは恐らく騎士派に貴族派の情報をもたらした人間だろう。
此処で亮真は悲嘆にくれるミハイルへ一つの提案を行う。

「まぁ此処で嘆いても自体は変わりませんよ。」

ミハイルが顔を見上げて亮真を見た。
其の視線には疑問が浮かんでいる。

「まぁ貴方達が貴族派に嵌められて窮地なのと同じで、私達も困った状況に置かれていましてね。」

これは当然だろう。

今回の依頼はあくまでも商隊の警護である。
例えこれが偽りであったとしてもギルドの記録上ではそうなっているのだ。
すると一つ大きな問題が出てくる。
生き残るためとはいえ亮真達は商隊の荷馬車を攻撃している。
また商人を見捨てて襲撃から逃げ出している。
表面上だけ見れば亮真達は護衛の任務を放り出し、護衛対象の商人を見殺しにして逃げ出した卑劣な臆病者と言う事になってしまう。
さらに悪く考えれば、騎士派の襲撃を単なる盗賊の襲撃とウォルスが工作をすれば、亮真達傭兵が金に転んで裏切った事にすらされかねないのだ。
そして今の亮真達にはそれを阻む手段が無い。
なぜなら全てが状況証拠にすぎないからだ。
例えミハイルを証人にしようとしたところで彼が正直に話してくれるはずもない。
騎士派の汚点でしかないからだ。
しかも真実の決定はギルドマスターであるウォルスの胸の内で決まるのである。
自分達を嵌めた人間に自分達は陥れられたのだと主張したところで意味が無い事は判り切っていた。

今の状況が判り切っているのだろう。
亮真の言葉にリオネ達は表情を変えなかった。
だからこそ亮真の判断に委ねたのだ。
亮真の知恵に一縷の望みを託して。

「だからどうです？ミハイルさん。我々と手を組みませんか？」

亮真の口から出た一言はこの後、騎士派と貴族派双方の運命を大きく変えることになる。

第2章第9話

異世界召喚９６日目【謁見】その１：

「あれがローゼリア王国の王都ピレウスだ。」

ミハイルの言葉を聞き、亮真は閉じていた目を見開き前方へ視線を向ける。

「へぇ。あれが王都か……かなりでかいな。」

「当然だ。西方大陸東部でも強国と名高いローゼリアの首都だぞ！そもそも我がローゼリア王国は、」

ミハイルの優越感に彩られた説明を苦笑しながら聞きつつ亮真は目の前に見え始めた城塞都市を観察した。

「とりあえず無事に着いて良かった。貴族派の襲撃も予想されたからな……」

ミハイルはようやく安心したのかそんな言葉を口にすると、それを聞いた亮真は微笑を浮かべながら言った。

「確かに可能性はあったけどな。恐らく偽装が俺達にばれて反撃されたから、連中も用心して追撃しなかったんだろうよ」

「その程度で諦めるものか……？」

亮真の回答が不満だったのか、ミハイルの口調が固くなる。

ミハイルと亮真の付き合いはまだほんの6日程の間でしかなかったが、亮真はミハイルの武断的な性格をほぼ把握していた。
彼は逃げるや諦めると言う事にかなり嫌悪感を表す。
また困難や失敗にたいし、一度引いて仕切りなおすという事を極端に嫌う。
どちらかと言うと勝つまで勝負を止めない性格のようだ。

「まぁ指揮を取っている者の考え方次第だけどな。策がうまくいかなかったから安全を重視して全てを諦めて仕切りなおす方を選択したんだろうよ。」

「武人はそういった時こそ己の力で困難を克服し目的を達成させるのではないのか？」

ミハイルの言葉には、そうであるべきだという強い信念が込められていた。
だが亮真はそういったミハイルの誇りや信念と言う物に対してあまり評価をしていなかった。

「皆が皆ミハイルさんのように騎士の誇りに執着していないんだろうよ。」

亮真の呆れたような口調を聞きミハイルの顔が赤く染まる。

「騎士の誇りを愚弄するか！？」

「騎士の誇りに目をつぶって暗殺を企てた人間の言う言葉じゃないな。」

ミハイルの顔が固まった。

彼が尤も聞きたくない言葉を言われたからだ。

「ぐぅぬぬぬぬ……そ……それは。仕方なく……」

ようやくそれだけの言葉を口から洩らすと、ミハイルは逃げる様に後ろの怪我人達の方へと移って行くとローラの手から傷薬を受け取った。

どれだけ言葉を並べたところで暗殺という手段を取ったことに変わりが無い事を自覚しながら。

それが判っていながら尚悩み揺れるミハイルの心。

ミハイルは自らの誇りと目の前にある国家の危機との間を彷徨っていた。

「ふん。やっちまった事を悔やんだって仕方ないだろうに？ましてや決して間違った方法だとは思わないしな。」

「間違っては居ないんですか？亮真様。」

何時までも悔やみ続けるミハイルの背を見ながら洩らした亮真の言葉を聞き、亮真の隣で手綱を握っているサーラが尋ねた。

「あ？あぁ……暗殺という手段を選択する事自体は間違っちゃいないよ。俺も場合によっては同じ手段を取るかも知れないからな。」

暗殺は決して褒められた事ではないだろう。

しかしたった一人の人間を殺すことで多くの人間の犠牲を回避できるのなら、内乱を抑える事が出来るのなら、選択肢のの中から除外するべきではないと亮真は考えていた。

「結局のところ暗殺だろうとなんだろうと手段の一つにすぎないっ

てことさ。ようは目的が果たせればいい。」

今回を例に挙げれば、騎士派は貴族派の擁立する庶子の王女を女王にしたくないというのが目標だ。
そのために対象の王女を暗殺するというのは効率の観点から考えれば貴族派と表だって戦争を行うよりずっと被害は少ないはずだ。
ただしそれは綿密で正確な情報の取得が大前提となる。
亮真が騎士派の愚かだと思うのはその点だ。
今回の様に騎士派の人間がもたらしたと言うだけで正誤も確かめずに暗殺計画を練るなどただの馬鹿としか言いようがない。
目的を果たせない暗殺は相手に決起の口実を与えてしまうからだ。

「まぁミハイルさんを見た限りだと騎士派の人間は脳筋ばかりみたいだしな……」

「脳筋ってなんですか？」

説明の最後に亮真の呟いた脳筋という言葉に、サーラは不思議そうな顔をした。

「あぁ。脳みそまで筋肉ってことさ。ようは考え無しって事。」

「あぁ。なるほどぉ。それで脳筋ですかぁ」

6日程一緒に行動しただけのサーラだったが、思い当たる言動は多々あった。
確かにミハイルの生き残った部下を見ても直情的というか考えなしというか、あまり賢そうではない。

あの日、亮真の提案はミハイルの心の激しく揺さぶった。

それも当然だろう。
今まで敵視していた人間から突然連携の話が出れば誰だって驚く。
ましてやミハイルは亮真の策の所為で部下を多数殺されている。
今回の暗殺の為にミハイルが率いて来たのは５０名。
その内、今馬車の荷台で息をしている者は僅かに５名。
ミハイルを含めても６名しか生き残っていない事になる。
当然彼らの憎しみは強い。
それでもミハイルは亮真の提案を呑んだ。
いやの呑まざるを得なかったと言うべきだろうか。
亮真の提案を蹴ったところでミハイルのとれる選択肢は無い。
庶子の暗殺には失敗し、多くの部下を失っているのだ。
兵力の補充という観点だけで見ても、亮真達傭兵と手を組むのは騎士派にとってプラスで有った。
だがミハイル自身は納得しても、部下の方はそう簡単に理解などしなかった。
縄を解かれた彼らは、止血の為に巻かれた包帯に血がにじむのを無視して亮真達へ臨戦態勢をとったのだ。
結局ミハイルの言葉を受け入れた彼らだが、その瞳には憎悪の炎がちらついている。
それは彼らの包帯を変えるために荷台に乗ったサーラへ向ける視線を見ても明らかだった。

「まぁボルツさんの岩竹昇破陣（ロックバンブー）はかなり強力だったからな……」

怪我人の看護をするミハイルの後ろ姿を見ながら亮真は呟いた。

「えぇ。流石に歴戦の傭兵ですよね。あれだけ大きな範囲で法術を掛けられるなんて」

「最初に聞いた時はどうなるものかと思ったけどな」

「旨く行って良かったですよね」

「あぁ。何しろ敵を全滅させては不味いけど数は大幅に減らしたいなんて無茶な要望だったからな……実際ボルツさんは良くやってくれたよ。」

状況を把握する為には亮真はどうしても生きている人間が必要だった。

つまりただ襲ってきた敵を殺せば良いという物ではなかったのだ。

当然選択できる手段は限られてくる。

「おっ！お呼びですかい？若。」

自分の名が出た事に気がついたボルツが馬車に馬を寄せて来た。

「いや。ボルツさんがあの時上手くやってくれたおかげで何とかなりそうだって話さ。」

亮真の言葉を聞きボルツの顔に笑みが浮かんだ。

「若にそう言って頂ければこんなにうれしい事はねぇ！ですがね、今回うちらが生き残れたのはは全部若のおかげですぜ？あっしの法術なんかはまぁたかがしれてまさぁ。」

そう言い捨てるとボルツは顔を緩めながら馬車から離れていく。

よほど照れくさかったのだろう。

自分が呼ばれたわけではない事を確認するとサッサと元の場所に戻ってしまった。

「ですがこれからどうするんですか？」
突然横からローラが声をかけて来た。
「なんだ？突然。怪我人の手当はいいのか？」
「はい。ミハイルさんがやってくれてますし。私がするより……」
亮真の言葉にサーラの顔が曇る。
怪我の治療の為に尤も生き残りたちを接する機会が多いサーラの風当たりは相当の様だ。
今のサーラの言葉を要約すれば「敵である自分が治療をするよりミハイルにして貰う方が良いようです。」と言う事になる。
「まぁいいさ。それより【紅獅子】の連中はどうだ？」
「ええ。みなさん怪我の方は大したこと無かったですし、ほぼ完治といって大丈夫ですね。それより亮真様の怪我の方が重いくらいですよ？」
まぁ重いと言っても矢の雨によるかすり傷が多いので出血が激しく見えるだけだ。
実際全ての傷に瘡蓋が出来ており後は時間の経過と共に傷跡が消えるのを待つだけである。
亮真はサーラの言葉を聞き笑みを浮かべながら言った。
「なら良い。……最悪、一戦やらなければいけないかもしれないからな。」
亮真の言葉に姉妹の顔が緊張で引き締まる。

「謁見がうまくいかないかもしれないと？」

ローラの言葉に亮真は頷いた。

「まぁ可能性としては有るな。」

実際のところ今回の提案は亮真にとっても賭けなのである。
騎士派にしろ貴族派にしろ亮真にとっては、本来ならどちらが国の実権を取ろうが関係ないのだ。
だが意図せず政争に巻き込まれたしまった以上はどちらかに加担せざるをえない。
もしどちらかに加担しなかった場合どうなるか？
全ての責任を亮真達に押し付けたウォルスによりギルドから刺客が送られてくる可能性が有る。
それもかなり高い確率で。
しかもそれに対抗する手段が亮真達にはない。
善悪を判断する人間が他ならぬギルドマスターのウォルスだからだ。
では、他の街のギルドマスターに談判するのはどうか？
実はこれもかなり危ういのだ。
一回の傭兵である亮真やリオネ達と自分の同僚であるギルドマスターのウォルス、どちらがより信用されるか。
ましてや、他の街のギルドマスターにとってこの件はあまり関わりあいたくない事案である事は目に見えていた。
後ろ盾のない状況で亮真達が談判に及んでも、自分達の任務失敗を取り繕っていると邪推されかねないのだ。
つまり亮真達が生き残るためには、有力な後ろ盾を持ったうえでウォルス以外のギルドマスターと直談判をするしか道が無い。
自分達の主張を公平に判断してもらうためには。
そして今の亮真達に有力な後ろ盾が持てるとすればそれは騎士派し

かない。
傍観派にしろ他国の有力者にしろ、亮真達を助けるメリットは無い。
そして唯一騎士派だけが戦後において亮真達の後ろ盾になり得る可能性が有るのだ。
亮真達が貴族派との政争において助力をするという見返りの代わりに。

尤もこれは全て亮真達の都合で有る。
騎士派にとって亮真達の後ろ盾にならなければならない理由は無い。
それどころか、自分達の仲間を殺傷されているのだ。
直情的な人間であれば、亮真達の言い分など聞かずに首を刎ねかねない。
だからこそ賭けなのだ。
騎士派の主導部に冷静な判断が出来る人間がいると言う賭け。
そしてその人物に、亮真達の利用価値を認めさせると言う賭け。

ようやく馬車は城門の前へとたどり着いた。

「さぁてと……後は俺の弁舌しだいだな。」

城門の下から見える城の屋根に視線を向けながら亮真は呟いた。
これより亮真がこの世界に来て3度目の生死を掛けた勝負が始まる。
其の目には強い意志の力が宿っていた。

第2章第10話

異世界召喚９６日目【謁見】その２：

「ローゼリア王国第一王女ルピス殿下の御成りである！みな頭を下げよ！」

赤い絨毯が敷き詰められた謁見の間に一人の女が入って来ると、王女の入室を告げた。
亮真はミハイルが其の場で片膝を付き頭を垂れるのを見てそれを真似することにした。
何しろ王族などと言う物がほぼ廃れた世界から来た人間である。
王族に対しての敬意の表し方など判るはずもない。
ただミハイルの真似をするだけで精いっぱいであった。
尤もリオネもまた亮真と同じように戸惑っていたので、この世界の一般的な常識と言うわけではないらしい。
逆に先日まで奴隷であったとはいえ、さすが元上流騎士の生まれであるマルフィスト姉妹は、昔取った杵柄なのか其の動作は流れる様に見事であった。

（ローラ達に習っておけばよかったかな……）

優雅に礼をするローラ達を後ろ目に見ながら亮真は王女の入室をじっと待った。
謁見の間なのであろう。
ミハイルの案内で通された其の部屋はかなりの奥行きが有り、奥には金で彩られた玉座が有る。
玉座から入り口までは赤い絨毯が敷き詰められ、左右には完全武装の兵士が立ち並ぶ。

其の数２０名。
僅か４人しかいない亮真達にとってはかなり危険な状況である。

（まぁ。その辺は仕方が無いか。会ってくれるだけでもまだマシな方だな……本当は密室で密談出来れば一番良かったんだけどな……）

入城した亮真達はミハイルの指示で数時間、与えられた城の一室に軟禁された。
当然と言えば当然だろう。
どこの馬の骨とも判らない人間なのだから。
そしてどのような報告をしたのか判らないが、軟禁されていた一室にやってきたミハイルはそのまま亮真達を謁見の間へと連れ出したのだった。

ミハイルの報告の仕方次第では王女との謁見など無く首を刎ねられていたかも知れない事を考えれば、かなり幸先は良いと言えるだろう。
少なくとも、亮真の弁舌を奮うチャンスは貰えたのだから。

頭を下げている内に玉座の奥から扉が開かれる音が耳に入ってきた。
続いて数人の足音が謁見の間に響く。
ルピス女王と其の側近達の入室する音であろう。
亮真達はただルピス女王の言葉を頭を下げた格好のままで待った。

「面（おもて）を上げなさい。」

凛とした女の声が謁見の間に響く。
恭しく頭を上げた亮真の目に全身を純白の鎧で身を固めた銀髪の女が映った。

「ミハイル親衛騎士団副団長。」

ルピス王女の第一声はミハイルへと向けられた。
其の顔は威厳と冷静さを兼ね備えた支配するものを顔であった。

（副団長？こいつ……それなりに高位の人間だったのか……道理であっさり王女と謁見がかなったはずだ。……だがこいつは直情的過ぎる……余程人が居ないのか？それとも血縁などが影響された結果か？）

亮真はミハイルが思ったよりも騎士派の首脳陣に近い身分だった事を神に感謝せざるを得なかった。
ミハイルが直情的な性格で有る事を知っている為、ミハイルを軽く見ていた亮真にとってはかなり意外な僥倖ではあった。

「報告はメルティナから受けています。貴方が使命を果たせなかった事は非常に残念としか言えません。今回の失敗で多数の騎士が命を落としました。……みな王国の秩序の為に命を散らしたのです。なのに貴方は指揮者でありながら生き残り私の前に居ます。……私は王女として貴方に今回の失態を死を持って償ってもらわなければなりません。」

ルピス王女の弾劾とも言える言葉に謁見の間が凍り付いた。
しかし此処でルピス王女の顔に笑みが浮かぶ。

「ですが、貴方は非常に優秀な騎士であり、王家への忠義の篤い。祖国存亡の危機である今、貴方を失うのは大きな損失と言えます。そこで私はミハイル貴方の今までの功績と、今回の任務そのものが貴族派の罠であった事を考慮し貴方の刑の執行を貴族派との政争が終了する其の日まで伸ばすこととします。そして貴方の罪は今後の

貴族派との戦で上げるであろう勲功と相殺する事とします。」

どよめきが謁見の間を支配する。

余程以外な裁定だったのか？ミハイル自身も茫然とした感じがする。

「王女殿下？宜しいのですか？」

最初に入ってきた女がルピス王女へ疑問を投げかけた。

「構いません。国難のこの時期に有能な人間を処罰することほどつまらない事はありません。それに私は刑の執行を伸ばしましたが、無罪にするとは言っていません。」

ルピス女王の言葉を聞き、謁見の間に広がったどよめきがだんだんと静まって行く。

ミハイルは其の場で深く頭を下げるとルピス王女の温情に最大級の感謝を示した。

「必ずや王女殿下のご期待にこたえて御覧に入れます！」

（なるほどね……実利を重んじたってわけだ。ただでさえ劣勢な自分達の派閥をわざわざ弱体化させる必要もないわな……それに刑を伸ばしただけで無罪にはしてない。今後ミハイルが自らの命に値する功績が挙げられなければ終わりってことだ。……うん。悪くない。甘いだけじゃなくてきちんと周りの感情まで考えて処遇を決めてる。）

もし単純にミハイルの助命をすれば、今回彼の指揮のもと奇襲をし亮真の策によって死んだ者の遺族は納得しないだろう。

だからと言って首脳部全体が騙された作戦の失敗を現場指揮官一人

に押し付けるのも問題である。
となれば、後日の功績と相殺という折衷案は非常に政治的なバランスに長けた選択と言えるだろう。

（悪くない……いや、予想以上に俺は運が良い……これなら俺の提案の有効性と利点を理解してくれる……だが……問題もある……）

亮真はルピス王女がミハイルの助命を宣言した時の周りの反応を見た。
すると有る事に気がつかされる。
謁見の間に居る幾人かの顔に悔しさが浮かんだのだ。
特にルピス王女の一段下の段に立つ年配の男は明らかにミハイルが助命された事を悔しんでした。
勿論露骨な表情をしたわけではない。
ほんの一瞬本音が顔に浮かんだ感じだ。

（こいつは、単純に騎士派、貴族派、傍観派と割り切れないかもしれないな……）

ミハイルが有能であるかどうかはさておき、彼が死んで喜ぶ人間が同じ派閥の中に居ると言うのだ。
普通に考えれば同僚や仲間の死を望む人間は居ない。
もし同僚や仲間の死を望むとすればそれは……

（騎士派の全てがルピス王女に忠誠を誓っている訳じゃないってことか？……いや、確かにそれなら説明が着く。……だがそれならば、なおさら俺がルピス王女に取り入る隙が有るってことだ。）

亮真は自分に都合が良い材料が増えた事でこみ上げる笑いを必死で我慢した。

この場で下手に笑みなど浮かべればそれだけで致命傷になりかねない。

（待て……落ち着け……まだ俺は死地を抜けたわけじゃない。勝負はこれからだ。……王女とそしてあの女……下手に疑われれば即、殺されかねないんだ。）

亮真の視線がルピス王女に疑問を投げかけた女へと注がれる。
黒髪の大柄な女である。
また腰に差した二本の剣はかなり使い込まれているように見える。
それにルピス王女からかなりの信頼を受けているのだろう。
ルピス王女の顔には疑問を投げかけられた事による不満が浮かんでいなかった。

「ではミハイルの処遇に関しては以上です。では改めて本題に移りましょう。」

そういうとルピス王女の視線が亮真達４人へと移された。

「なるほど。確かに銀髪の１０代半ばの少女ですね……貴方がローゼリア王ファルスト２世の庶子ではないと言うのは本当ですか？」

ルピス王女はまず最大の懸案事項を尋ねて来た。

「はい。私の名はローラ。ローラ・マルフィストと申します。此処に居るサーラ・マルフィストの姉でございます。」

ローラの言葉にサーラが頷く事で答える。

「なるほど……確かに良く似ていますね。髪の色以外は瓜二つだわ……」

視線が姉妹に集中する。

確かに彼女達は双子で在り、髪の毛の色以外は顔も体型もそっくりである。

「殿下……庶子に姉妹がいると言う連絡は入っていません。」

黒髪の女がそっとルピス王女へ耳打ちをする。

「マルフィストという家名も聞き覚えが有るわ……たしか中央大陸の騎士じゃなかったかしら？」

「はい。確かかなり高名な騎士の家系のはずです……肌の色や顔立ちも確かに中央大陸系ですし……」

二人の視線がローラ達姉妹へと突き刺さる。

数瞬の間、両者の視線が句中で絡み合った。

「なるほど……確かに連絡を受けた庶子とは違うようね……」

ルピス王女は何処か諦めたようにそう呟いた。

それも当然であろう。

もしローラがローゼリア王ファルスト2世の庶子であるならば、彼女を殺すだけで内乱の芽が摘み取れたのだから。

「そうなると私達としては貴方達に私の騎士と戦ったことを責めるわけにはいかないわね……」

ルピス王女はそう困ったように呟いた。

「恐れ入ります。殿下の寛大な御言葉を頂き感謝の念に堪えません。」

亮真はそう言うと恭しく頭を下げた。

実際のところ、亮真達は巻き込まれただけの被害者であるのだからもっと強気に出る事も出来た。

だが今後の関係を考えるのであれば、必要以上に相手へ高圧的な態度に出るのは考えものである。

亮真の殊勝な態度を見てルピス王女の顔に笑みが浮かぶ。

「そう硬くなる事はありません。私達の所為で迷惑をかけたのですから……何か望みはありますか？」

ルピス王女の言葉に亮真は考え込むふりをした。

既に亮真の答えは決まっていたからだ。

「望みと言うわけではありませんが……是非とも一つ御力をお貸しいただきたい事が御座います。」

亮真はさも申し訳ないという口調で切り出した。

「それはミハイルへ貴方が話した提案の事ですか？」

「はい。その通りでございます。」

亮真の言葉にルピス王女は困ったという表情を浮かべる。

彼女の立場で考えるならば此処はこれ以上亮真達にかかわらない方が良いのだ。

出来れば小額の金を渡してさっさと放逐してしまいたい。
友人や同僚を今回の作戦で亡くしている人間にとって、亮真達は文字通り仇なのだから。

「……すぐには判断の出来ない問題ですね……理由はおわかりですね？」

ルピスの視線が亮真へ突き刺さる。
つまりルピス王女としては手を組んでも構わないが、手を組んだ事によって部下に不満がたまり貴族派との決戦前に騎士派が壊滅と言う危険性が判っているのか？と言う問いだ。

「勿論理解しております。しかし率直に申し上げれば、現状維持をした場合、まず王女様が勝つ見込みは無いでしょう。」

「「「無礼者め！下賤なものが増長しおって！」」」

複数の人間から怒声が飛んだ。
尤も王女や其の傍らに佇む黒髪の女の表情に変わりは無い。
声を荒げたのは、玉座の一段下に居る男たちだ。

「陛下！このような無礼な者など即刻処刑するべきです！」

先ほどミハイルの助命に対して顔を歪めた恰幅の良い男が王女へ進言する。

「お待ちください。将軍。王女殿下のご意思をお聞きするのが先では？」

「何を言う！メルティナ！貴様このような侮辱を受けて黙っている

のか！騎士の誇りはどうした？！」

（なるほど……彼女がメルティナか……王女の側近と言ったところだな……）

亮真は少しでも情報を得るためにメルティナと将軍と呼ばれた男との言いあいに耳を傾けた。

「お待ちください！この者は別段我らを侮辱などしてはおりません！。あくまでもこの者を個人的な予測を述べただけに過ぎません！」

「何をバカな！この者はハッキリと我らに負けると言い放ったのだぞ？これが侮辱でなくてなんだ！？」

論理的にはメルティナが言っている事は正しいのだが、人情としては納得できないのだ。

特にこう言った場では感情が先走り論理的な判断など付かなくなる。

今の将軍が良い例だろう。

不毛とも言える言い合いに終止符を打ったのは、亮真の言葉を聞きひたすら考え込んでいたルピス王女だった。

「おやめなさい。客人の前ですよ！」

此処でいう客人が亮真達を指している事は間違えない。

下賤と蔑む者の前で仲間同士が言い合いをする。

其の滑稽さを認識したのかメルティナと将軍は黙った頭を下げた。

「見苦しいところを見せましたね。……私としては少しでも兵の犠牲を減らしたうえで、貴族派との戦に勝ちたいのです。……貴方にそれが出来ますか？」

王女はようやく亮真の欲した言葉を口にした。

「勿論です。殿下のご期待に必ずや答えて見せましょう。」

そういうと亮真は王女に向かって深々と頭を下げたのだった。

第２章第１０話（後書き）

ようやく亮真のなり上がり第一歩が踏み出せました。
今後は騎士派、貴族派の政争の中で少しずつ力を蓄えていく予定です。

今後ともよろしくお願いします。

※題名のウォルテニアに関してですが、第２章の最後で出てくる予定です。
　それがどういう名前なのかに関しては第２章最終話までおまちください。

第2章第11話（前書き）

頑張って書きました。
時間のあるうちに書かないと……
感想は全て読ませて頂いています。
なかなか時間が取れないため返信はしておりませんがご了承ください。
今後ともよろしくお願い致します。

第2章第11話

異世界召喚９６日目【謁見】その３：

亮真はただ一人、城の一室へと通された。
あの謁見の後に一騒動有りはしたが、王女の決定が覆る事は無かった。
亮真の頭に、謁見の間を退出する時の将軍の憎しみに満ちた目が浮かぶ。

（ふぅ……新参者だししょうがないだろうな。）

本当のところ悔やむ点はいくらでもある。
本来ならばもっと波風の立たない様な形で王女派に合流したかったのだ。
だがそんな事を言ったところで時間が巻き戻りはしない。

（王女に興味を持たれただけでも上出来か……）

実際、亮真達はいまだ正式な王女派の一員と言うわけではなかった。
それも当然だろう。
まだ何の実績も無いのだから。
そして実績はこれから作るのである。

そういまだ亮真の勝負は終わってなどいない。
いやこれからが本番とも言える。

「お待たせしました。」

そういうとメルティナを伴いルピス王女が入室してきた。

「いえ無理な願いをかなえて頂き感謝に堪えません。殿下。」

そういうと亮真は座っていた椅子を立ち上がり深々と頭を下げる。
具体的に今後どうするかを煮詰める為には、大人数がいる謁見の間では不都合であった。
これは亮真にしろ王女にしろ同じであったため、両者は場所を城の一室へと移した。
亮真しか呼ばれなかったのは、警護上の理由である。

「まぁそう硬くならなくても大丈夫ですわ。楽になさってください。」

「はい。それでは失礼致します。」

ルピス王女とメルティナが腰を下ろしたのを確認して亮真も椅子へ座りなおした。

「それでは話を始めましょうか。」

ルピス王女の視線を確認してメルティナが話し始める。

「貴方も判っているとは思うけど、兵力そのものは欲しい。」

これは亮真達を王女派に入れる事に関して構わないと言ったに等しい。
此処メルティナは言葉を区切ると探る様な眼付を亮真へ向ける。

「ただし……」

「今回俺達の所為で死んだ人間の友人や同僚、家族の不満を無視できない？」

亮真の言葉にメルティナが頷く。

「まぁ当然でしょうね……それで？そちらの条件は？」

「利益を。」

亮真の問いにメルティナは短く答えた。

尤もこの返事の中には様々な思惑が隠されているのだが。

「なるほど……単純な戦力としてだけではない利用価値を示せていうわけですね。」

「単純に戦力と言うだけならば他の傭兵を雇っても同じだからな。」

「なら殿下は大変御買い得な買い物をなされると思いますよ？」

亮真の言葉にメルティナは怪訝な表情を浮かべた。

「なぜだ？」

「俺が殿下に勝利をもたらすからですよ。」

ルピス王女がクスッと笑い声を上げた。

「すごい自信ね。貴方。」

「恐れ入ります。」

「でも言葉だけじゃ信じられないわね。」

「勿論です。」

「ではそれを証明してくださる？」

ルピス王女の口調はおどけているが、目は野獣のごとき殺気を孕んでいた。

「勿論……と言いたいところですが、その前に幾つか確認させてもらえますか？」

「どういうつもりだ？貴様？殿下を騙したのか？」

メルティナが腰の剣に手をやる。

下手な言い訳をすれば即座に切りかかってくるつもりのようだ。

「いあいあ……現状を正確に把握しなければ対抗手段なんて設けられないでしょ？と言うより……さっきの謁見の間で何点か気になった事が有りましてね。ミハイルさんから聞いていた状況とは違うようなので。是非王女派の方から直接説明して頂ければとね。」

亮真の言葉を聞きメルティナはルピス王女へ伺いの視線を向ける。

「まず貴方の気になった点と言うのをお聞きしましょうか？」

ルピス王女は平静を保ちながら亮真へ言った。

「そうですね。まずミハイルさんからは騎士派はイコール王女派と聞いていましたが、単純にそうではないですよね？」

亮真の指摘で二人の顔に動揺が走る。

ルピス王女は平静を装いながら亮真へ訪ねた。

「なぜそう思われるの？」

「気になったのはミハイルさんが助命された時に王女の一段下に居た人たちが浮かべた苦々しげな表情ですよ。まぁ一瞬でしたけどね。浮かべたの。そして確認したのはたった今です。王女の顔を見て確信しました。」

「そう……貴方はそれでどう考えているの？」

「王女殿下の支持母体が騎士派なのは間違いないでしょうね。ただし全ての騎士派が王女殿下の支持をしているわけじゃない。恐らくメルティナさんと言い争っていた将軍ですか？あの人を中心にした派閥が別にあるのでしょう？いや……逆かな、騎士派はあの将軍を中心とした派閥であり王女殿下はあくまでも神輿に過ぎないってところではありませんか？」

長い沈黙が部屋を覆い尽くした。

亮真の言葉を聞いた二人の胸の内はどれほど激しく蠢いたのか。

それは彼女達の無表情さが全てを表していた。

（ドンピシャって所か……となると……こっちも対応を変えないといけないだろうな……いや、まずは王女の目的を聞かない事にはどうしようもないか……）

「貴方はそれを今日の謁見で知ったの？」

「えぇ。」

長い沈黙の後、ルピス王女は絞り出すようにようやく言葉を発した。

「そう……確かに貴方は御買い得かもしれないわね……」

「殿下……」

メルティナの言葉に悔恨と悲しみが滲む。

「良いのよ……此処まで見透かされていては取り繕ったところで意味はないでしょ？」

そういうとルピス王女は亮真に視線を向けた。

「貴方の言うとおり……私は神輿でしかないわ。実権は全てホドラム将軍が握っているわ。」

「なるほど、謁見の間でメルティナさんとやりあった人ですね？」

「えぇ。」

「なるほど……とりあえず現状の説明をお願いできますか？勢力図が分からなければ対策も立てられませんからね。」

亮真の言葉にルピス王女はやや考え込んでから切り出した。

「ええ。そうね……まずは騎士派とは何かから説明しましょうか。」

ルピス王女の説明はところどころメルティナによって補足されながら３０分にも及んだ。

「成る程、確かに致命的ですな。仮に騎士派が今度の政争に勝ったとしても王女殿下に与えられる未来は最悪となるでしょうね。」

全てを聞き終えた亮真の口からそんな言葉が出た。
実権をホドラム将軍が握っている以上、貴族派の政争が終わればルピス王女は文字通り傀儡となってしまう。
いやホドラム将軍が反逆の汚名を気にしない人物であれば、貴族派の排除の後に自ら王の座に座ることすら考えられる。
つまり王女が生き残る為には、二つの条件をクリアしなければならない。
一つは貴族派との政争に勝つ事。
もう一つは騎士派が貴族派に勝つまでに自分達の派閥（王女派）の勢力を拡大し、ホドラム将軍の専横に対して対抗できるだけの力を付ける事。
どちらか一つの達成であっても相当に困難なはずである。
それはメルティナもルピス王女も十二分に理解しているのだろう。

（確かに順調にいきすぎると思ったけど、こういう事か。王女に忠誠を誓うのが騎士派の3分の1だけとはな……）

彼女達王女派は追い詰められたネズミに等しかったのだ。
そしてだからこそ彼女達は藁にもすがる気持ちで、突然降ってわいた亮真の言葉に興味を示したのだ。
自分達が生き残るために。

「私は殿下をこの国の主にしたいのだ！名実共に！貴様にそれが出来るか！？」

「メルティナ……ありがとう……」

メルティナの言葉にルピス王女は感謝の言葉を述べた。

「そうですね……まず条件を確認しますが、王女殿下がローゼリア王国の王になられる事。そして騎士派の傀儡から抜けだす事。この2点で間違いないですか？」

亮真の言葉に二人は大きく頷いた。

「ならば、何とかなりますね。王権を確立した後にそれを維持できるかどうかは殿下の力量次第ですが、取らせるだけなら可能です。」

「「本当（か？）ですか？」」

「えぇ。」

亮真の言葉に二人は嬉しさと懐疑の混じった視線を向けた。

「どうやるのだ？」

「中立派の切り崩しです。」

亮真の言葉に二人の顔が失望で曇った。

「フッ……貴様のような男を信じた我らが愚かだった。」

メルティナは馬鹿にしたような口調で呟いた。

「おや？御気に召しませんでしたか？」

「当たり前だ！そんな事はとっくに私が主導して行ったのだ！」

「ほう？メルティナさんがですか？」

亮真の顔に笑みが浮かぶ。

「そうだ！傍観派を王女派に鞍替えさせれば良い事など誰だって考え付く！」

「そして誰にも相手にされなかったというわけですか。」

「キ……貴様！」

嘲られたと思ったのだろうかメルティナは腰の剣を抜き放った。

「侮るか！」

（成る程……ちょっと挑発しただけでこれか……）

謁見の間で将軍と言い争ったところからかなり短気な性格ではないかと予想していたが案の定だ。

（王女への忠誠心と言う点では問題ないんだろうけどな……もう少し思慮深い策士タイプが欲しいところだな。）

メルティナの白刃を目の前にしてそんな事を亮真は考えていた。

「おやめなさい！」

「しかし殿下！」

「メルティナ！落ち着きなさい！」

ルピス王女の叱責に渋々と言った様子でメルティナは剣を鞘へと戻す。

「ですがメルティナが怒るのは尤もです。それとも貴方には傍観派の切り崩しが出来るとでも言うのですか？」

ルピス王女の言葉には棘が含まれている。

主として度量は見せたものの、決して亮真の言葉を鵜呑みにしているわけではないし、不快にも思っているのだ。

亮真はルピス王女の視線に苦笑いを浮かべながら言った。

「まぁ８割がた出来ますね。ですがその前に一つメルティナさんへ頼みが有るんですが構いませんか？」

亮真の言葉にメルティナは王女と顔を見合わせた後に頷いたのだった。

「遅かったですね！首尾はいかがでしたか？」

日はすでに落ち夜の帳が辺りを支配している。

既に夕食の時間は過ぎ去り、城のほとんどの人間はベットの中へと潜り込んでいる時間だった。

「あぁ。というか二人ともまだ起きてたのか？」

王女達との打ち合わせを終え、亮真はあてがわれた自室の扉を開けると、既に眠っていると思われたローラ達が目の前に立っていたのだった。

「勿論です。主の帰宅を待たずに寝るはずが御座いません！」

ローラの言葉にサーラが深く頷く。

「別に起きてたのはあんた達だけじゃないだろう？」

「なんだリオネさんも居たのか。」

「何だじゃないよ！まったく。こっちは交渉がどうなるかハラハラしてしょうが無かったって言うのにさ！」

部屋の中央にあるテーブルの前に腰かけたリオネがぼやいた。

「ハラハラして待ってた様には見えませんがね？」

テーブルの上に散乱するワインの空き瓶を見る限りではとても亮真を心配していたようには思えない。

「姉さんは若を信じて待ってたんですよ。」

「ボルツ！余計なことは言わなくていいよ！」

そういうとリオネは笑みを消して亮真へ尋ねる。

「それで?首尾はどうなんだい?アンタの思惑どおりにいったのかい?」

一瞬で素面に戻ったところをみると、それなりに自制して呑んだようである。

「えぇ。その辺の話は明日にしようと思ったんですけどね。リオネさんがいるなら丁度いい。ローラ、サーラ。二人ともこっちに来て座ってくれ。」

「あの…御食事は?」

「あぁそんなのは良いよ。なぁに一食抜いたところで困りはしないしな。」

「「かしこまりました。」」

何か亮真の為に夕食を準備していたのだろうか、奥の部屋に向かった姉妹を椅子に座らせ亮真は王女との会見を説明した。

「なんだって!?そんなに劣勢なのかい?王女派は!」

亮真の説明を聞いたリオネがまず大きな叫び声を上げた。
ボルツや姉妹達の表情も憂いが浮かんでいる。

「まぁその辺はしょうが無いさ」

「ですが騎士派の内部で将軍派と女王派で派閥争いとは……」

「まぁお偉いさんなんてそんなものかもしれないけどね。」

ローラの言葉にリオネは何処か達観したような言葉を返した。
この辺は人生経験の差なのかもしれない。

「しかしそんな状態であっしらを助けてくれるんですかい？」

「まぁこのままじゃ無理だろうね。少なくとも、貴族派を排除した後で将軍派に潰されないだけの力が王女になければ終わりだ。」

謁見の間で見たホドラム将軍の口ぶりや亮真達を見る目つきを思い起こせば、貴族派との戦いの後王女との約束を盾に助力を求めたところで鼻で笑われて無視されるのがオチだろう。
下手をすれば邪魔者は死ねとばかりに兵を向けてきかねない。

「ならどうあっても王女派に力を付けてもらうしかないわけですな……」

ボルツの言葉に明るさが無いのは、現状を傭兵の冷徹な分析で図った時に勝算が薄いせいだ。

「だが悪い事だけじゃない。少なくとも、王女派が力を付ければ俺達の後ろ盾になってくれる事は間違えない。」

勝算が薄い劣勢の時だからこそ、その時に交わされた約定は強い拘束力を発揮する。

「でも本当に傍観派を切り崩せるのかい？」

「あぁ。さっきメルティナに実際どういった交渉をしたのか実演してもらったからね。俺が行けば間違えなく釣れるよ。」

リオネの疑問に答えた亮真の顔を其の場に居た全員が不思議そうに見つめた。

彼らにはどうしてメルティナの交渉を見た亮真が成功を確認したのかが判らなかったからだ。

「まぁそれは実際に交渉を成功させた後に話すとしてだ、とりあえずリオネさん達は王女直属の指揮系統に入れるようにした。開戦までは城の警護や訓練が主な任務なんだけど。」

此処で亮真は言葉を切ってリオネを見た。

「？なんだい？なんかあるのかい？」

「いや。リオネさん、紅獅子の人数って何人だい？」

「今戦闘に使えるのはあっしらを含めて２２人ですかね。前回の奇襲で矢を肩にくらった奴がいましてそいつの怪我が治れば２３人ですか。」

横からボルツが口を挟んだ。

「ちょっと人数的に少ないんだよね……リオネさんギルドを通さないで後７～８０人くらい集められないかな？」

「そりゃ……幾つか懇意の傭兵団があるから出来なくはないけど……金はあるのかい？」

亮真の言葉が以外だったのだろう、リオネは珍しく歯切れの悪い返事をした。

「どれくらい掛かる？」

「そうだねぇ……あたし等と同じくらいの力量の奴らを集めるとなると……金貨３００枚はほしいところだねぇ。」

「判った。明日ローラに金を降ろさせるから集めてくれる？」

「あ……あぁ。金さえあるなら大丈夫だよ。」

あっさりと大金を出す亮真にやや気押されながらリオネは返事をした。

「とりあえず明日からが勝負だ！これからの俺達の行動が全てを決める事となる！」

亮真の言葉にその場に居た全員が強く頷いた。
彼らは理解していたのだ、彼らが生き残るために負けられない戦で有る事を。

第2章第12話

異世界召喚１０３日目【揺れ動く者たち】その１：

「御忙しいところに突然御邪魔をいたしまして申し訳ございません。ベルグストン伯爵様の寛大な御心に深く感謝いたします。私は王女殿下の使者を仰せつかりました御子柴亮真と申します。お見知りおき下さいませ。」

亮真はそういうと深々と目の前に座る男へ頭を下げた。
此処はローゼリア王国の王都ピレウスから馬車で2日程離れたところにある傍観派の所領である。
陽は今まさに中天に差しかかったころであるので、ごく一般的な常識で考えれば昼食の時間帯で有ろう。
貴族を訪問する時間としてはあまり適切ではない時間帯だった。

「いや、王女殿下よりの使者となれば粗略にも出来まい。ましてや殿下の側近であるメルティナ殿もご一緒となれば当然の事よ。」

そういうとベルグストン伯爵は鷹揚に笑い亮真達へ椅子を勧めた。

「して？どういったご用件かな？」

勿論この問いは本心ではない。
この政情が不安定な時に傍観派であるベルグストン伯爵に王女派から使者が来たのだ。
少しでも目端が利く者なら察せ無いはずが無いのだ。

「そうですね、ではまず使命を果たす事にしましょう。」

亮真の言葉にベルグストン伯爵はやや眉を顰めた。
実のところベルグストン伯爵へ1月程まえにメルティナが既に王女派への助力を願い出ていた。
勿論その際の伯爵の返事はノーだったわけだが、今回再び王女派から使者が来たため同じ話の蒸し返しだと伯爵は内心呆れていたのだった。

「ほう？使命ですか？」

（どういう事だ？……そもそもこの男は一体何者なのだ？騎士派にも貴族派にもこんな男は居なかったはずだが？）

てっきりメルティナが話の主導を取るのだとばかり思っていた伯爵は戸惑った。
それがまったく顔を見た事も無い男が話始めたのだ。
戸惑うなと言う方が無理である。

「はい。王女殿下は非常に悲しんでおられます。」

「ほう？何に対してです？」

ベルグストン伯爵の顔に変化は無い。

「ローゼリア王国の中でも名門に数えられるベルグストン伯爵家の行く末に関してです。」

亮真の言葉を聞いたベルグストン伯爵は喉まで出かかった罵声を呑みこむのに苦労した。
どうせ以前メルティナが勧誘に来た時と同じように、貴族派と騎士

派の派閥争いに関して嘆いているとい御決まりの口上だと思って聞いていたからだ。
それが突然ベルグストン伯爵家の行く末の話になる。
それも王女の嘆きという前置きから考えれば、ベルグストン伯爵家にとっては悪い話と言う事だろう。
助力を願いに来た人間だと思い対応した伯爵が罵声を上げたくなるのも無理は無い。
王女派は他人の心配が出来ない弱者なのだから。
それでもベルグストン伯爵は何事も無いかのような笑顔を浮かべて切り返してきた。

「ほう？わが家の行く末ですか。それはそれは王女殿下におかれましては様々な心労をお持ちであるのに我が家の様な弱小貴族の行く末までご心配頂けるとは光栄の極みに存じます。殿下にはこのベルグストン伯爵その御心に深く感謝したとお伝え願えますでしょうか？」

ほぼ満点といってよい回答である。
貴族としての矜持を保ちつつ表面的には王女への感謝を表しながら、裏には王女に対しての嘲りが含まれているのだ。
我が家の心配など出来る立場なのか？と。

（ふん。まずは事前の情報どうりか。）

亮真はベルグストン伯爵の言葉を聞いて有る意味安心した。
王女に今必要なのは知恵袋と言える人間だと亮真は考えていた。
別に軍事に限る必要はない、政治、経済、外交、文化、その全てにおいて王女は欠けているのだから。
勿論それは王女だけの責任ではないのかもしれない。
だが現実にルピス王女の周りには武人ばかりが目につくのだ。

側近と言われているメルティナですら、個人的な武力や王女への忠誠心と言った面はさて置いて、知略や政治感覚と言った面ではまったくもってあてにはならないのだから。
それはある意味騎士と言う職業病なのかもしれない。
騎士に求められるのは武術の腕と王家への忠誠である。
勿論それはそれで重要なのだが、そういったものを重視するあまり思慮深さや腹芸、或いは損得勘定と言った物を見下す傾向にある。
それはそれで悪くは無い。
騎士には名誉や誇りが必要なのだから。
だが組織と言う観点からみれば、歪で不完全としか言えないだろう。

だからこそ亮真は王女派に引き入れる第一番目の人間としてベルグストン伯爵を選んだのだ。
すぐれた政治力を持ちながら慇懃無礼で傲慢な態度を嫌われ、ゲルハルト公からも亡きローゼリア王ファルスト2世からも疎まれたこの男を。

「ご謙遜を。ベルグストン伯爵家は広大な領土をお持ちの上、人口も多いと聞き及んでおります。兵力としては１０００程ですか？とてもとても弱小貴族とは言えませんよ。」

「ほぅご使者殿は我が家を買い被っておられるようだ。それとも貴族派との争いで正常な判断が出来なくなっておられるのかな？　ハハハハハ」

「いえいえ。私の判断は正しいはずですよ？その証拠にゲルハルト公もベルグストン伯爵家に熱い視線を向けておいでとお聞きしていますから。それとも既に貴族派に属されてしまいましたか？」

「なっ！……困りますな。その様な根も葉もない御話をされては。」

一瞬浮かんだ驚きを巧みに隠しベルグストン伯爵は鷹揚に笑って見せた。

「おぉそうですか、いや！それなら王女殿下も安心なされるでしょう。何しろ王女殿下はベルグストン伯爵が何も得られず飼い殺しになる事を憂いておいででしたから。」

「何！どういう事だ！」

亮真の言葉を聞きベルグストン伯爵の顔色が変わる。

「おや？どうなさいました？根も葉もない話ではなかったのですか？」

亮真の言葉を聞きベルグストン伯爵は深く椅子に座りなおすと大きく息を吐いて言った。

「フゥ……もういい腹の探り合いをしても仕方が無い……そっちは私が貴族派に属した事を知っているのだろう？」

何処か諦めたような声をベルグストン伯爵は出した。

「えぇ。」

亮真の方はまるで判っていたとばかりの軽い口調だがメルティナ驚きを必死で隠さなければならないほどの衝撃を受けていた。

（馬鹿な！どういう事だ！？ベルグストン伯爵が貴族派に既に取り込まれていた？……一体いつからだ？……いやそれよりこの男は一

体何時からそれが判っていたのだ?!……いや駄目だ……今は私の任務を忠実に行う事だけだ。私が余計な事をしてこの男の足を引っ張るわけにはいかない!)

亮真は彼女にまったく何も説明をしていないからだ。
動揺するのは無理もないと言える。
メルティナにあてがわれたのは、新参者である亮真が王女派の人間であることを証明する事。
ただそれだけである。

彼女の動揺をよそに亮真達の会見は続く。

「どこから漏れたかは知らぬがこの決断は変わらんぞ?」

ベルグストン伯爵は何処か探るような目つきで亮真を見た。

「えぇ別にかまいませんよ。」

「何だと?!」

「損をするのはベルグストン伯爵、貴方だけですから。」

亮真の言葉を聞きベルグストン伯爵は深く考え込んだ。

「どういう事だ?……貴様は何を言っている?。私が損をするだと?」

長い沈黙の後ベルグストン伯爵はようやくそれだけを言うと亮真へ説明を促した。

「おや？お分かりではなかった……そうですか、では御気の毒なので説明させて頂きますかね。」

亮真の口から出た説明はメルティナとベルグストン伯爵、両方へ強い衝撃を与えた。

「ベルグストン伯爵は貴族派からどういった条件で勧誘されました？」

亮真の言葉にベルグストン伯爵は渋々と言った表情で答える。

「貴族派が擁立するラディーネ王女が即位した暁には領地を加増の上、財務大臣の地位を約束された。」

「ほう、それはすごい好条件ですね。」

「そうだ！王女派にこれだけの条件が出せるか！」

ベルグストン伯爵の言葉に亮真は嘲りを必死で隠さなければならなかった。

「まぁ出せる出せないは別にして、貴方はその報酬を得るために何を頼まれました？」

「……」

ベルグストン伯爵は口を閉じた。

自分が損をするという話に乗ったせいで、自分が貴族派に属した事はバレてしまったが、易々と貴族派の動向を王女派に言うわけには

いかなかったのだ。

「他の傍観派への勧誘とベルグストン伯爵家の兵を動かさない事。どうです？そんなところでしょう？」

「何！」

ベルグストン伯爵の口から驚きの言葉が漏れる。

「まぁ他にベルグストン伯爵へお願いするような仕事が有りませんからね。貴族派には。」

「どういう事だ？」

「まぁそれはいいとして、その程度の働きに対する報酬としては破格だと思いませんか？」

ベルグストン伯爵は亮真の言葉に考え込んだ。

確かに破格と言ってよい条件である。

傍観派に働きかけるのも、自分の兵を動かさない事もまったくと言っていいほどベルグストン伯爵には損が無い。

「最初から守る気が無い約束だからですよ。」

亮真の言葉にベルグストン伯爵は顔色を変えた。

「バ……バカな……そんなはずは……」

「そもそも実現が不可能なんですよ。貴方が財務大臣の要職に就くのも領地の加増もね。なぜなら所属する派閥が貴族派なんですから。

」

そもそも貴族とは何であろうか。

王国から領地を下賜され一定の自治を認められた人間の総称である。

逆に騎士とは王家直属の兵士であり、貴族に準じる身分とは言え領地は無い。

騎士は軍事力の要であり着く職も全て軍の役職である。

一部貴族でも騎士でも付ける特殊な役職が有るにはあるが、基本的に貴族は内政を騎士は軍事を司どってきたのである。

さて此処で問題である。

軍事を司る騎士派を倒したからと言って、貴族が司る内政で重要な職が空くだろうか？

答えはノーである。

貴族派が騎士派を倒した後に空く役職は全て軍事に関する物だけだろう。

そして仮に財務大臣の席が開いたとしてもそれがベルグストン伯爵に回ってくる可能性は０である。

なぜなら貴族派に以前から属している人間がその席を埋めるからだ。

圧倒的に劣勢な勢力が有る人物の助力によって勝利したならば、異例の抜擢と言う事はあり得る。

だが今回の様に貴族派は既に騎士派よりも優勢なのだ。

勝ち馬に後から乗った所で、以前から所属している人間を追い越せるはずが無い。

そして領地の加増もまた少し考えればあり得ない事が分かる。

なぜなら騎士派を倒しても支配地を元々騎士は持っていないからだ。

となれば王家の直轄地を削るしかなくなる。

だが果たしてそんな事をゲルハルト公がするだろうか？

王家を弱体化させ自分がいずれは王権を奪うと言うのであれば可能性としては有るかもしれない。

だが貴族派が勝てばその党首であるゲルハルト公は文字どおり女王

を操る最高権力者となる。
いずれ王権を自分で奪うと言う野望が有ったにしろ、わざわざ王家の直轄地を後からやってきた傍観派の貴族などに分けるだろうか？
与えるにしても大した仕事もしていない途中から派閥に参加した貴族などに分けるだろうか？
まずあり得ないと断言できる。
与えるなら長年自分の下に居た人間に与えるだろう。
またそうでなければ派閥自体が吹っ飛びかねない。

亮真の説明を聞きベルグストン伯爵の顔は真っ青になった。

「私が愚かだと言う事か……」

伯爵の口からそんな自嘲の言葉が漏れる。

「納得していただけたようで良かった。」

実際横で聞いていたメルティナにも判り易く納得せざる得ない説明だった。

（こいつは……）

メルティナは亮真に対してその力が味方である事の安堵よりも恐怖を強く感じていた。

（こいつはどこまで読み切っているのだろう？……ただの傭兵だぞ？それが僅か1週間でここまで……）

「私はどうすればいい？」

ベルグストン伯爵は力なく亮真へ聞いた。

「そうですねぇ。このまま貴族派に居たところで行く末は見えてますし、騎士派に入ってもあのホドラム将軍につぶされるのが落ちでしょうしねぇ？」

何処か含みのある言葉である。

ベルグストン伯爵は少し考えてから切り出した。

「王女殿下に助力したとして……その……」

言葉を濁してはいるが、様はどんな待遇をしてくれるかという事だ。

「そうですねぇ……勿論財務大臣の椅子などは無理ですが……」

亮真の言葉を聞きベルグストン伯爵の顔が曇る。

だが次の言葉を聞き彼の顔に生気が戻った。

「この戦いで王女殿下が勝てば勿論貴族派は一掃とまではいかなくても大幅に削減されるでしょうね……となれば当然、いくつもの職が空く事になるわけですから、そうなればねぇ？」

つまり王女が勝ち貴族派が占める多数の職が空く事になった時に、その席に座るのは王女に助力した貴族である。

それも今王女の支持母体が騎士派である事を考えれば、今から王女派に乗っても十分高い地位を望む事が出来る。

しかも対象が貴族であるため所領の没収が期待でき、当然ベルグストン伯爵にも加増が来ると言うわけだ。

亮真の言葉から其処までの未来を描く事が出来たベルグストン伯爵

の脳裏に王女派への加担が選択肢として加わる。

（悪くない……このまま貴族派に加担して飼い殺しになるよりずっと良い……だがこれはあくまでも王女派が勝てばだ…勝てなければ今の話はまったく意味が無くなる……）

「御子柴殿……申し訳ないが少し考える時間がほしい。」

「結構ですよ。ただどれくらい必要ですか？こちらとしてもあまり時間が無いものですから。」

亮真としても今此処でベルグストン伯爵が王女派への助力を決断するなどとは考えていない。
ベルグストン伯爵にとってみれば一生を左右する大きな賭けになるのだから。
しかし亮真はベルグストン伯爵だけに時間を取られるわけにはいかない。
他の傍観派を切り崩さなければならないのだから。

「今夜一晩時間を頂きたい……返事は明日と言う事で、今日は我が屋敷に御泊り頂けないだろうか？」

「良いでしょう。賢明なご決断をお待ちします。」

ベルグストン伯爵が差し出した右手を亮真は握り締めるとそう答えたのだった。

第2章第13話

異世界召喚１０３日目【揺れ動く者たち】その２：

「私はどうすればよいのだろう……」

返答の期日を明日まで伸ばしたベルグストン伯爵は、自分の執務室にこもりただひたすらに自問自答を繰り返していた。

「あの男……あいつの言う事は尤もだ……貴族派からの勧誘を受けた時になぜ気がつかなかったのだ……」

悔やまれるのはそこで有る。
もしベルグストン伯爵が傍観派のままであれば正直に言ってどちらが勝とうと関係なかったのだ。
だが甘い言葉に騙され貴族派に加担してしまった以上彼に取れる選択肢は２つしかない。
このまま貴族派に付くか騎士派に付くかのどちらかだ。
今更傍観派に戻れば今度は貴族派、騎士派の両方から狙われる事になる。
そしてもう一つの問題は、今回の話を持って来た人間が王女派だと言う事だ。
ベルグストン伯爵は王宮の勢力図に関して十分な知識が有る。
そういった知識が無い貴族が領地を保つことなど不可能と言ってよい。
だから今の騎士派は王女の支持母体でありながらその実権はホドラム将軍が握っているという事を、伯爵は十分に理解していた。

「あの男はメルティナ殿と一緒に来た……と言う事はあの男は王女

殿下に直接繋がっていると見て良い。となれば……今回の勧誘は騎士派ではなく王女派へと言う事だろう。」

王女の決断如何では、貴族派との戦の後に王女派対騎士派と言う新たな戦いが始まる可能性が有るのだ。
劣勢な勢力の中にあるさらに小さな派閥からの勧誘である、躊躇して当然と言える。

「もし加担するなら全てを投げ打つ覚悟がいる……」

ベルグストン伯爵家と言う家名も、長年積み上げてきた富も、それなりに治めて来た領地すらも投げ打つ覚悟が必要になるのだ。

「問題は王女殿下が勝てるのかどうかだ……」

全ての問題はそこに行きつくのだ。
王女派に加担して勝てるのか勝てないのか。
ベルグストン伯爵は決して王家への忠誠が薄いわけではなかったが、自分の家や家族を投げ打ってまでささげる忠誠心を持ってはいなかった。
だからこそ1月前にメルティナが勧誘しに来た時には、内心侮蔑していたし、その後に訪れた貴族派の勧誘にも乗ったのだった。

「あの時点では王女派が勝てる要素など何処にもなかったのだ……」

メルティナの勧誘方法は単純である。
ただひたすらにルピス王女の正当性と王家への忠誠を訴えたのだ。
勿論それらは重要な物ではあるが、傍観派の心を動かす要素には成りえなかった。
なぜか？

もし王家への忠誠や王女の正当性を重視する人間であれば、傍観派などに成るはずが無い。
メルティナが勧誘する前に王女へ忠誠を誓っているはずなのだ。
ベルグストン伯爵が聞きたかったのは王女に助力した際に王女は伯爵の忠義にどのような物で報いてくれるのかなのだ。
王女に加担するのは良い。
だが兵を動かすには武具兵糧に金がかかる。
兵が手柄を上げれば恩賞だって出さなければならない。
決して「御苦労！」の一言で済むわけではないのだ。
それがメルティナには判らない。
ただただ壊れたレコーダーの様に王女への忠義を訴えるだけ。
これではどんな貴族で有ろうと説得することなど出来るはずもない。
だからこそベルグストン伯爵は王女を見限った。
側近と言われるメルティナですらこれである。
王女のそばには人材がいないと判断せざる得なかったのだ。
そして貴族派からの勧誘に際しこれ幸いと乗ったのは当然と言える。
誰だって勝てる勝負には乗るものである。
それが権力や領地の加増という目に見える利権を示されればなおさらと言える。
だが此処で伯爵は大きく悩む事になる。
今日やってきた王女派の使者、御子柴亮真の所為で。

「アノ者がだれかは判らん……だが……切れる。切れすぎるほどに……」

御子柴亮真。
知恵者がいないと思われた王女派に突如として現れた切れ者。
昼間一回会っただけだが、あの男の状況判断能力は信頼できると言ってよい。
人当たりも良いし外交ではかなりの力を発揮するはずである。

そうなると王女派の今後も変わってくる可能性が有る。
貴族派は自分以外の傍観派にも同じような報酬をちらつかせて助力を募っているはずである。
だがあの男の話を聞いた後にまだ貴族派を信じる馬鹿がいるとは思えない。
となれば大きく王女派に取り込まれる可能性は大と言える。
同じように騎士派の中からホドラム将軍に不満を持つものを王女派に鞍替えさせる事も不可能ではないだろう。
そう、あの男の力が有れば王女が実権を持つ事も可能かもしれない。
だからこそ伯爵は悩むのである。

「アぁ……私はどうすれば……」

コンコン

「旦那様？夕食の準備が出来ました。御客様も既に食堂の方で御待ちになっております。」

決断の付かないベルグストン伯爵を正気に戻したのは、屋敷のメイドの声だった。
窓を見れば外はすっかり闇に覆われている。
亮真達との会見が終わったのは午後1時ごろのはずなので、ベルグストン伯爵は5～6時間も執務室で悩み続けた事になる。

「あ……あぁ……今行く。」

それだけメイドに言うと、ベルグストン伯爵は軽く身なりを整え食堂へと向かった。

「貴方？心配ごとですか？」

夕食を食べ終えて再び執務室へ閉じこもった夫を心配してベルグストン伯爵夫人が部屋へ入ってきた。

「何だお前か……どうもしないよ。どうした？こんな夜分に？」

伯爵は疲れを隠すようにそう言うと夫人をソファーへ座らせた。

「夕食の時の様子がおかしかったものですから……何か心配ごとですか？」

夕食に出された鳥の丸焼きはベルグストン家の料理人の得意料理であったが、伯爵はほとんど手を付ける事は無かった。
とても食事を楽しむような気分ではなかったからだ。

「いや……なんでもない。お前が心配するようなことは何も無いよ。」

「いいえ！そんなはずはありません。連れ添って２０年ですもの…貴方の様子がおかしい事に気がつかないはずが無いじゃありませんか！」

夫人は夫の身を心から案じていた。
俗にいう政略結婚だったのだが、夫人は今年４３才になる夫を深く敬愛していたし、夫もまた夫人を深く愛していたのだ。

「今日いらした御客様の所為ですか？」

今朝まで何でもなかった伯爵が昼過ぎから急に執務室へ閉じこもっ

たのだ。
原因が彼らにあると思うのは当然である。
伯爵の顔を見て夫人は切り出した。

「もしかして……王宮の関係ですか？」

貴族の奥方といえど貴族同士の勢力争いと無縁ではいられない。
いやある意味、女同志の方がそういった物には敏感である。
ましてや王国の存亡にすら関わる様な話である。

伯爵の態度を見て夫人は確信した。

「貴方……夫婦ではありませんか……貴方の御力にはなれないかもしれませんが、少しでも其の苦労を分かち合えるのなら私に御話くださいませんか？」

夫人の言葉を聞き伯爵は心の内をぶちまけた。
誰かに胸の内を聞いてほしかったのだろう。
それほどまでに伯爵は思い悩んでいたのだ。

「私は政治に関して詳しくありません……ですが王女殿下が危機の今、貴方が殿下へ助力するならば勝利した際には決して貴方を粗略には扱わないと思います。」

伯爵の胸の内を聞いた夫人は躊躇いながらもハッキリと言った。

「それは判っている。だが問題なのはそこではない。私が助力したとして果たして王女殿下が勝てるかどうかなのだ！」

夫人に言われるまでもない。

劣勢の王女側には人材だっていないだろう。
だから勝てば重用される。
だが勝てればだ。

「貴方……貴方が王女殿下を勝たせて差し上げれば良いではありませんか？」

夫人の言葉に伯爵は凍りついた。

「貴方は才能豊かな方です。私は貴方に嫁いでから一度たりとも貴方の才を疑った事など有りません……私は貴方がこのローゼリア王国を担う御方だと信じております。だからこそ私は貴方が迷う姿は見たくありません！かつての様に自信を取り戻してください！１２年前の貴方ならこの様な時に迷いなどしなかった！そう。かつての貴方なら……」

「かつての……私……」

ベルグストン伯爵の脳裏にかつての自信にあふれた自らの姿が浮かぶ。
１２年前、当時３０代前半のベルグストン伯爵は国内でも有数の有力者だった。
それが崩れたのは、夫人の父親であり伯爵の後ろ盾であったローゼリア王国宰相エルネスト侯爵がゲルハルト公との政争に敗れた時からだ。
エルネスト侯爵は領地没収の上、家名断絶。
殆どの血族はその際に王国内から追放処分となっている。
エルネスト侯爵の血筋で王国内に残っているのは、他家へ嫁いだベルグストン伯爵夫人とその妹のみである。
その結果ベルグストン伯爵は中央の政治から弾き出された。

彼の才能の有無は問題ではない。
彼がかつての政敵の娘を娶っている、ただそれだけの理由でベルグストン伯爵はゲルハルト公から睨まれてしまったのだ。
それから１２年、伯爵はただ領地を守るために必死だった。
傍観派に属したのも目立たず嵐が通り過ぎるのを待つためである。
守りの心、それは少しずつそして確実にベルグストン伯爵の牙を鈍く錆つかせていった。

「かつての私なら悩まなかった……か。」

悩まなかっただろう。
自らの能力に絶対の自信を持っていたから。

（１２年前の自分が今の立場ならどうしただろう？メルティナの勧誘など待っていただろうか？いや……否だ！私自らが王女派に率先して属し殿下の力になっただろう。殿下が勝てるか判らない？馬鹿な！判らないなら俺の力で勝たせるのだとなぜ思わない！）

夫人の言葉は、１２年間ただ守りのみを考えていた男の心の錆を落とした。
そして若き日の野望と自信に燃えた心が戻ってくる。

「私が王女殿下に与すれば有るのは栄光か無かの二つしか無い。当然お前も運命を共にする事になる……構わないのか？」

「構いません。例え断頭台の露と消えようと私は貴方に付いていきます！」

夫人の決意を聞きベルグストン伯爵の心は決まった。

そして一度決断した伯爵が迷う事は無い。
勝つか負けるかを判断するのではなく、自分の力によって王女を王にすると決めたのだから。

「私はすぐにエルナンの元へ行く。外出の準備を手伝ってくれ。」

「今からですか？」

夫人は怪訝な顔をした。
既に２０時を過ぎた時間である。
外出するにしてもあまりにも遅すぎる。

「そうだ。御子柴殿には返答を明日まで延ばしてもらっている。だが明日ただ単に助力すると言うだけではつまらないではないか。」

エルナン・ゼレーフ伯爵。
ベルグストン伯爵領と境を接する傍観派の貴族に一人だ。
そしてベルグストン伯爵夫人の妹を妻に迎えた人物でもある。
当然ベルグストン伯爵と同じように、ゲルハルト公から睨まれている。

（私が貴族派から王女派に寝返ったところで功績となるのは御子柴殿のみ……だがエルナンを王女派に引き込めばそれは私の功績となる。それにエルナンとは義兄弟……唯一信頼出来る人間だと言って良い。）

王女派に加担すると決断したベルグストン伯爵の頭脳は往年のキレを取り戻した。
ベルグストン伯爵がただ王女派に寝返っても評価されるのは寝返らせた亮真だけだ。

決して寝返ったベルグストン伯爵を評価するものはいないだろう。
だが、自分の寝返りと同時に他の貴族を一緒に連れて行けばどうか？
それはベルグストン伯爵の功績となる。
だから伯爵は寝返った後の王女派での立場を確保するためにも、決して失敗するわけにはいかないのだ。

「お前は明日出来るだけ御子柴殿を引きとめてくれ。良いな！私が戻るまで決して帰らせるなよ！」

「はい。御気を付けて行ってらっしゃいませ。」

夫人は往年の輝きを取り戻した夫を嬉しそうに見つめた後、深く頭を下げたのだった。

第2章第14話

異世界召喚119日目【揺れ動く者たち】その3：

「一体どうなっておるのだ！」

ゲルハルト公は苛立ちを隠せなかった。
絶対的に有利なはずの自分達へ、此処数日の間に続けて不快な報告がもたらされたからだ。

「そ……それが……」

「それがなんだ!?ハッキリ言わんか！」

実際のところゲルハルト公の側近である彼にも事の詳細はまったく掴めていなかった。
彼らにもたらされたのは、助力を約束した傍観派が此処数日の間に複数がルピス王女側へ寝返ったと言う事実だけだ。
寝返ったのはそれなりの領地を持つ貴族ばかりである。
どれもかなりの好条件で貴族派に引き込んだ者ばかりである。
しかも自分が求めた条件は兵を動かさない事とラディーネ王女への支持、これだけである。
引きこんだ貴族達のリスクは限りなく少なく、それでいてメリットは大きくしたのだ。
不遇の日々を送っていた傍観派の貴族は雪崩をうって貴族派に属した。
勿論ゲルハルト公に寝返った者達との約束を守る気などサラサラない。
そもそも正確に計算した場合、約束した領地の加増分だけで王国の

半分近くが費やされる計算になる。
少し考えればそんなことはあり得ないと気がついて当然の話なのだ。

「判っているのは2点だけでございます。助力を約束した貴族が次々と王女派へ忠誠を誓っている事。そして……」

此処で側近は言葉を切った。
次の言葉を言えば主が怒り狂う事が判っていたからだ。
だが同時に黙っていても同じ結果になる事は長年の経験でイヤと言うほどに理解させられていた。
側近は主の雷が落ちる事を覚悟して己の職務を遂行した。

「寝返った貴族の中に非常に強硬な姿勢を我々に見せて居る人間がいます……」

「どういう意味だ？強硬な姿勢？……領地の防衛でも固めたか？」

何処か馬鹿にしたようにゲルハルト公は尋ねた。

「それが……領地の兵をまとめて王都に入城した模様です……」

「何だと！」

ゲルハルト公は驚きを隠せなかった。
これは決して見過ごせない話だ。
貴族派から王女派に寝返ったとしてもゲルハルト公はさほど困りはしない。
だが貴族が領地の兵を王都に入れるとなるとこれはまったく状況が変わってくる。
派閥から寝返る。

大きな戦力ダウンになると思われがちだが実のところはそうでもない。
なぜならこの時期に寝返る様な人間は自分が損をすることを極端に嫌う。
派閥からの餌は貰う癖に派閥へまったく貢献しない人間。
例えば今回の話で言うなら、王女派の旗は掲げても兵や軍資金の提供を行わないなどの非協力的な態度を取る事がほとんどなのだ。
少なくても今まではそうである。
そしてそれが分かっていたからこそゲルハルト公は傍観派の貴族を勧誘する際に過度な協力を求めなかった。
求めても仕方が無い事が分かっていたからだ。
だからこそゲルハルト公は危機感を感じる。
領地に籠り、形だけの協力を王女派に見せるだけだと判断した事が見事に外れたからだ。

「それはどういうことだ……本心で王女派に属したということなのか？いやそもそもそれは一体誰だ？」

「ベルグストン伯爵、ゼレーフ伯爵を筆頭に其の周辺の小貴族達が入城いたしたようでございます。」

「ぬぅぅぅ……ベルグストン伯爵め！どこまでもワシに逆らう気か……いや待て？王女派？騎士派ではなく王女派に属したのか？」

ゲルハルト公は予想外の知らせに狼狽したせいか、見落としていた点に気がついた。

「はい、私も気になって何度も確認したのですが、騎士派ではございません……間違いなく王女派に属しています……」

一見すると同じことのように思えるが実のところはまったく違う。
騎士派は間違いなく王女の支持母体である。
だが騎士派が王女を支持する理由は、彼女が王女だからでも、ここ数年にわたり近衛騎士団の団長を勤めたからでもない。
騎士派の長であるホドラム将軍がルピス王女を擁立したからなのだ。
純粋にルピス王女へ忠誠を誓っているものなど、末端の下級騎士を除けば近衛騎士団の副団長であるメルティナ他数えるほどしか居ないのだ。
部隊を纏める中級以上の騎士の殆どはホドラム将軍の派閥に取り込まれており、それはそのまま発言力へと転化される。
ルピス王女は騎士派のお飾りでしかない。
だが数人といえども貴族がラピス王女の支持に回るとどうなるか。

貴族はその所領の規模に応じて兵力を持つ。
ベルグストン伯爵などの中級貴族は大体１０００程の兵力を持っている。
今報告にあったベルグストン・ゼレーフ両伯爵に近隣の貴族が王女派に助力するとなると、戦力として王女は４０００近い兵力がプラスされる事になる。
もちろん貴族派の筆頭であるゲルハルト公は現在およそ４万の兵力を持つ。
これに自分の領地から更になりふり構わずに農民を徴兵した上で、傭兵を雇い入れればおよそ6万を超える兵数になるはずである。
現在ホドラム将軍が握る兵力はおよそ1万5千強。
王女派の増兵分とホドラム将軍の兵を合わせても2万弱。
まだゲルハルト公が有利な情勢ではあるのだが、気になるのは寝返った貴族が王女派に属したと言う事だ。

ゲルハルト公は側近を退室させると、椅子に深く腰を落ち着け思案

にふけった。

（ルピス王女……まさかホドラムから実権を取り戻す気か？）

ゲルハルト公にその事が浮かんだ。

ベルグストン・ゼレーフ両伯爵の行動を見るとそうとしか分析のしようが無い。

そしてその考えを己で否定する。

（いや……無理だ。ルピス王女にそのような事が出来るはずが無い……）

ゲルハルト公はルピス王女の能力を疑問視していた。

今ルピス王女は２２歳。

近衛騎士団の団長を５年ほど務めているので決して無能と言うわけではない。

しかし軍事に限ればという但し書きが付く。

それも当然だろう。

彼女はいまだ国政に参加した事が無いからだ。

彼女の資質がどうであれ、経験をした事が無い物をすんなりと行えるはずが無いのだ。

これで知恵者の側近でも居ればまた話が変わるのだが、王女の側近として名が挙げられるのは近衛騎士団の副団長であるメルティナだけ。

しかも武力はともかくあまり知恵の働く人間ではない事はゲルハルト自身も良く理解している。

つまり王女独自の力ではローゼリア王国を維持する事自体が不可能と言ってよい。

（ルピス王女がせめて軍事か政治どちらかだけでも掌握できていれ

ばまた違っただろうがな……まあだからこそホドラムもルピス王女を擁立したのだ。自らの権力を強化する為に。）

自分と同種の人間であるホドラムの考えなど手に取るようにゲルハルト公には理解出来た。

（ホドラムが王女を見捨てるのは遅くても3年以内……その後は殺されるか幽閉されるか、さもなければホドラムの妻にでもさせられるか。どちらにしろ碌な事にはならんだろうな。）

ゲルハルト公自身はあまり王位に関心は無かった。
どちらかと言えば名より実を取る性格だからだ。
それに比べてホドラム将軍は名も実も取る性格である。
今は実だけで我慢していても、いずれ名を欲しがる事が眼に見えていた。
国王と言う名を。

（まぁワシが勝った場合は死んで頂くしかないからルピス王女にとっては同じ事か……）

すでにラディーネ王女と言う新たな神輿を持つゲルハルトにとってラピス王女は邪魔者以外の何者でもなかった。
王位を継ぐべき人間が二人もいれば再び戦の火種となるのは目に見えている。
といっても実際のところゲルハルト公は自らが擁立するラディーネ王女の真贋に関してはかなり疑問を持っていた。
確かに亡き王を同じ銀髪を持っているし、顔立ちもまったく似ていないわけではない。
王の遺言状も持参してきている為、偽物だと決めつけるわけにもいかない。

だがゲルハルト公自身が政争に勝ち残った策士である為、現在の状況に何処か作為的な物を感じてはいるのだ。
王が死に、その世継ぎが玉座に付く前に前王の子供が見つかる。
タイミングが良すぎると言ってよいだろう。
それでもラディーネ王女を擁立したのは、ホドラム将軍に対抗する為にはどうしても王家の血を引く神輿が必要だったからだ。
もし神輿を担がないままにラピス王女を擁立する騎士派と戦になれば、反逆者の汚名を着せられてしまう。
そうなれば子飼いである貴族派の中からも裏切る者が出かねない。
ゲルハルト自身は愚かな事だと思っているが、大義名分とは戦においてどうしても必要な物なのだ。
例えそれが嘘の大義でも。

（まぁ良い。例え偽の王女でもワシが認めれば本物になる……それに偽者なら後で処分する際に楽だしな。）

此処まで考えたゲルハルトの顔に笑みが浮かぶ。
共に王女と言う大義名分を掲げている以上、問題となるのは純粋な戦力差のみである。
そして今のところはもともと貴族派の方が数の上では有利であったし、傍観派の取り込みを順調である。
多少王女派に削られたところで貴族派の有利は動かない。

（問題はなぜ急に王女派が動き出したかだな……あの副団長の知恵とも思えぬし。だれか補佐役が付いたか？）

有利な状況に変化が無いので無視しても構わないのだが、急な王女派の暗躍はゲルハルトにとっても決して好ましい行動ではない。

「誰か！」

ようやく思案がまとまったゲルハルトは隣室に控える側近を呼んだ。

「お呼びでございますか？」

「うむ。王女派の動向が気になる。」

「間者を放ちますか？」

「うむ。金は幾らかかってもよい。最高のウデを持つ者を雇え。」

側近は若干驚きの表情を浮かべた。
自らの主人が決して気前の良い人間では無いと理解していたからだ。

「そして王女の側近に切れ者が居ないか調査させろ……もし居たら直ちに殺せ！」

今まで数多くの政争に勝つことでのし上がってきたゲルハルト公は決して甘い判断はしなかった。
彼は障害を未然に取り除くことで権力を手中に収めたのだから。

「かしこまりました。」

側近の男は恭しく頭を下げると部屋を出ていく。

「例え誰であろうと邪魔する者は殺すだけよ！」

ゲルハルト公はどんな手でも使う覚悟だった。
この国の支配者となる為に。

第２章第１４話（後書き）

つたない本作品をご覧いただきありがとうございます。
頂いた感想は何時も読ませて頂いておりますが、何分仕事が忙しくなかなか御返事を書くことが出来ない状況です。
誠に申し訳ありませんが、ご勘弁頂きたいと思います。
その代わりと言っては何ですが、出来るだけ本作品の更新を頑張りますのでよろしくお願い致します。

第２章第１５話（前書き）

予定外に長くなったので途中で切りました。
中途半端に感じられたらごめんなさい。
続きはなるべく早くＵＰします。

第2章第15話

異世界召喚１３０日目【揺れ動く者たち】その４：

「貴方達の今後の忠勤に期待します。」

謁見の間にルピス王女の声が響くと、彼女の前に立ち並んだ5人の貴族は一斉に頭を下げた。

「上手く行っていますね。」

寝返った貴族とルピス王女との対面が終わり、城の一室に集まった亮真とベルグストン・ゼレーフ両伯爵は笑みを浮かべながら頷きあった。

「御子柴殿の指示の賜物かと。」

貴族であるベルグストン伯爵が亮真へ丁寧に頭を下げた。
伯爵達が王女派に属してから1月が過ぎようとしている。
その間に亮真とベルグストン・ゼレーフ両伯爵との間には、お互いを信じあう絆の様なものが出来始めていた。

「いえ、伯爵方のご尽力のたまものですよ。私は所詮よそ者ですから。」

これは謙遜では無い。
どれほど正論を吐こうと利で釣ろうとも、身分の壁を打ち破るのは容易ではないのだ。

ベルグストン伯爵が亮真の話を聞き、味方に付いてくれたのは僥倖と言ってよい。
それが分かっているからこそ、亮真は傍観派の切り崩しをベルグストン・ゼレーフ両伯爵に一任していた。
メルティナなどは「寝返った者を重用するのか！」などと言って反対したが、亮真の説得により渋々引きさがった。
結果としてベルグストン・ゼレーフ両伯爵は期待以上の働きを見せる。
此処半月ほどの間に王都周辺の傍観派貴族を軒並み王女派へ寝返らせる事に成功していた。
勿論伯爵達の実力が大きく影響しているのだが、亮真の利と状況判断による説明は勧誘の成功に大きな影響を与えていた。
だからこそベルグストン・ゼレーフ両伯爵は爵位を持たない亮真へ決して横柄な態度を取らない。
また亮真も決して自分の手柄などと増長せずに立場をわきまえていた。

「実際のところ、今後も王女殿下へ忠誠を誓う貴族は増えますぞ。」

「えぇ。ゼレーフ伯爵の言うとおりです。貴族派に対して恨みを抱いている傍観派は幾らでも居ますからな！」

長年中央の政治から疎外されてきた傍観派貴族の恨みは強い。
戦後、貴族派が一掃された後に政治を託されるのが自分達だと判っている事もあって、王都にやってくる貴族は通常では考えられないほどの献身さをもって王女に忠誠を誓っていた。

「まぁ増えるのは良いんですがね……」

笑みを浮かべる伯爵達を見ながら亮真は苦笑した。

本当のところは決して楽観出来る状況ではなかったからだ。

「御子柴殿は何かご心配ごとでも？」

ゼレーフ伯爵は亮真の顔色を窺いながら尋ねて来た。

「いえ……このまま貴族派と決戦と言うのは不味いのが分かっているんですが……どう対応した物かと悩んでまして。」

亮真の言葉にベルグストン伯爵はやや考え込んだ後に言った。

「ほぅ……御子柴殿がお悩みなのは貴族派との決戦ですか？それとも決戦後ですか？」

（フン・・・流石にそれくらいの知恵はあるか・・・・・・尤も共まで理解したうえでの発言なんだか・・・・・・）

「ベルグストン伯爵、それはやはり貴族派との決戦ではないのか？」

ベルグストン・ゼレーフ両伯爵は共に政治家としては一流だが、軍略家としての才能はベルグストン伯爵の方が優勢の様である。単純に目の前の問題しか見えないゼレーフ伯爵を窘める様にベルグストン伯爵は自らの考えを口にした。

「いやそれはあり得ない。もともと兵数では大きく劣るものの騎士派を擁する王女派は戦力と言う点では互角に近いものを持っていた……今は傍観派の貴族を吸収している為、貴族派と戦うだけなら兵数でも戦力と言う観点でもかなり有利なはずだ……となればやはり……」

自らの質問に自分で回答へとたどり着いたベルグストン伯爵は視線で亮真へ尋ねる。
だがこれだけでは回答として不完全なのだ。
亮真はその先の答えを聞きたかった。
だがベルグストン伯爵の顔を見て諦めた。
理由が判らないと顔に書いて有るから。
亮真は諦めて何が問題なのかを二人に説明するため口を開いた。

「えぇ、おっしゃるとおり。私が悩んでいるのは貴族派との決戦の後の事です……まぁ決戦前に解決出来ればそれに越したことは無いんですがね……」

戦とは事前の準備が全てで有る。
事前にどれだけ備えが出来るかによって勝敗のほぼ全てが決すると言ってよい。
亮真はそれを理解していた。
これは何も亮真だけの話ではない。
２０世紀の日本人なら読もうと思えば古今東西あらゆる軍学書を見る事が出来る。
ビジネスマンが孫子の兵法を学んで営業に生かすと言う事だって普通に有るのだ。
戦争に使う使わないは別にして、現代日本人の知識は古の大政治家に匹敵するほどだ。
それに比べこの大地（アース）は戦国乱世である。
知識よりも武力を重視される環境は文化や知識の発達を大きく阻害している。
そもそも国々の身分制度の壁が高く、支配階級と被支配階級では知識において天地の差が有ると考えてよい。
首都から離れた農村に住む農民などは自分の名前を書くことすら出

来ない事さえ珍しくないのだ。
そして寝返った貴族達が率いてくる兵士の殆んどはこの農民達である。
彼らは軍事的な訓練を受けていない。
ベルグストン伯爵が率いて来た兵は確かに１０００だが所詮はずぶの素人集団でしかない。
もちろんその集団を率いるのはベルグストン伯爵家から扶持を貰う事で使えている人間である。
彼らは軍事訓練を受けていたり、過去に傭兵としての経験を持つ者であったりと素人では無い。
だが率いる兵がただの素人である以上その戦力に過度の期待は禁物である。
勿論最初の敵である貴族派の構成は同じである。
自分の領地から引き連れた素人の集まり。

だが騎士派は違う。
全員が下級であれど法術を使う生粋の戦士達である。
彼らは国王から給金を貰い王国に雇われている。
入団には審査があり決して誰もが入れるわけではない。
本来で有れば王族を守る最後の切り札と言える存在なのである。
それがホドラム将軍によって専横されている。
尤も信頼出来るはずの兵力が敵に回っているのである。

亮真がベルグストン・ゼレーフ両伯爵へ自分の代わりに傍観派の切り崩しを委託したのは対騎士派との戦いに向けての準備をしたかったからだ。
そして騎士派に関しての情報を集めれば集めるほど問題が大きく深刻になっていくのである。
兵数という点で言えば挽回は十分に可能だ。
専門職である為人数は限られている。

だから傭兵の雇用がどの戦場でも行われるのだ。
ただし傭兵はあくまでも応急処置でしかない。
能力にもばらつきが有り何より忠誠心と言う意味では騎士よりもはるかに劣る。
また優秀な傭兵は雇用に大金が掛かる。
平均して騎士の年収の5倍程は払わなければならない。
その代わりに常時雇用する騎士と違い必要が無くなればすぐにクビに出来る為、決して雇用者が損をするわけではないのだが。
騎士を正規雇用、傭兵を非正規雇用と置き換えて考えれば理解しやすいだろう。

そういう点を踏まえた上で亮真が悩んでいる問題、それはホドラム将軍を配した後の王国の態勢維持についてだ。
貴族派との戦の後に騎士派と王女派で決戦を行う。
これ自体はルピス王女以下王女派に属する者の共通認識だ。
貴族派を倒してしまえばルピス王女は国政を司る事が出来る。
これにより傍観派の貴族は否応なくルピス王女への忠誠を誓う事になる。
国内の貴族全てを支配すれば如何に騎士派の戦力が大きくとも負ける事は無い。
兵数だけでいうなら10倍近くの差が王女派と騎士派の間に出来るはずなのだから。
では何が問題なのか。
それはルピス王女の勝利によって騎士派を排除した後に、ルピス王女が何をもって自らを守る戦力とするかに有る。

乱世である。
国内にも国外にもローゼリア王国を食い物にしようと牙を研いでいる人間は腐るほどいた。
騎士派を排除した後に、それに代わる兵が居なければ飢えた狼達は

躊躇い無く牙を向いてくる。
だが騎士はプロの戦士である。
農民から必要な数を選抜したところで直ぐに変わりが務まるはずもない。
しかし傭兵を雇えば高くつく。
しかも忠誠と言う点では信頼が出来ない。
騎士派を排除しなければ王女派は傀儡のまま何れは潰されるだろうし、騎士派を排除しても騎士に代わる戦力が無ければ国力の低下を見た近隣諸国の侵略に会うという出口の無い迷路に迷い込んでしまったような状態なのだ。

「成る程……流石に先見の明がおありだ。」

「まったくですな。」

亮真の説明を聞き感嘆の声を上げたベルグストン伯爵にゼレーフ伯爵は頷いた。
しかししきりと感心する二人を見て亮真の心はさらに冷たくなる。

（こんなことが判らないのか……こいつら……切れ者だと言われるこの二人ですら考え付かないとなればルピス王女やメルティナに思い浮かばないのも当然か。）

亮真の心が冷めていくのは致し方ないだろう。
彼らは一般人ではない。
これから国を背負うと自負する人間が先の事を見る目を持たないとなれば不安になって当然だ。
それに実のところ亮真個人としてはこの問題はあまり重要ではないのだ。

亮真の目的はルピス王女後ろ盾を得て自分達の主張をギルドに通すと言う事だけだ。
ローゼリア王国に住まないのならこの国が騎士派を排除後にどうなろうと知った事ではないのだ。
極端な話、亮真は騎士派を全滅させるだけなら手段は幾らでも講じられた。
この世界の騎士は策略や奇襲と言った物をひどく嫌悪する。
法術という要素が有るせいなのか、集団戦という物をあまり考えず自らの武力で戦えばよいと言った考え方なのだ。
それはルピス王女に願い出てメルティナ達王女に忠誠を誓う騎士達の考えや戦術眼を確かめたから間違いない。
正義と忠誠と誇り。
この3つが有ればどんな戦でも勝てると言うのが彼らの主張である。
実際彼らの教科書だと言う戦術書を見せてもらったが内容は酷いものであった。
礼儀作法から始まり、本の内容のほとんどが戦闘には関係のない作法などに偏っているのだ。
実際補給の概念も無ければ陣形の概念もない。
決して全ての人間が無いわけではないだろうが、あまりにも知識の平均が低すぎる。
そしてそれほどまでに直情的な人間を罠にはめる事など亮真にとっては造作もない事だった。

それでも騎士ならばまだ良い。
彼らの価値は武勇なのだから。
だが貴族は違う。
武勇も大事だが先を見通す眼も重要である。
ましてや自分達が勝った後にどう国を治めるのかを考えれば、騎士派の排除後に代替え戦力の必要となるで有ろうことなど見越して当然だ。

勿論全ての人間が必ず気付ける訳ではないし気が付かないからと言って一概に無能だとは言えない。
だがそれでも組織の上位に居る人間の全てが考え付かないとなれば、それはやはり呆れてしまってもしかたがないのではないだろうか？

（いっその事、騎士派排除後の事は一切無視して殺るか？）

心の奥底から湧き上がってくる短絡的な思考の甘い誘惑を亮真は必死で振り払った。

（いや……いくらなんでもそれは不味い……さすがに不義理すぎる。）

そんなことをすればローゼリア王国は間違いなく滅ぶことになる。
亮真は利己的で合理的な人間ではあったが、その一方で恩讐や義理と言った物を非常に大事にする人間であった。
一時的とはいえ手を組むことになった人間を見殺しにすることは彼には出来なかった。

「どうされました？」

ゼレーフ伯爵は亮真の顔を心配そうに覗き込んだ。
余程亮真の顔色が変わったのだろうか。

「ふむ……御子柴殿は騎士派に勝つ事自体は問題無いとお考えなのですな……つまりホドラム将軍の排除をした後に近隣の狼どもの牙からローゼリア王国を守る手段に悩んでおられると……」

ベルグストン伯爵は念を押すように言うと亮真を見つめる。

「えぇ。それが問題なんですよね……」

「それならばメルティナ殿を筆頭にして残った騎士派を統率させれば良いのではないでしょうか？」

「おぉ！流石はベルグストン伯爵。素晴らしい案ですな！」

彼の案はホドラム将軍を排除した後に王女へ忠誠の篤いメルティナに騎士派を束ねさせればどうか？という事だ。
確かにこの案ならばホドラム将軍とその取り巻きのみの排除で済む為、大きな戦力低下は起きない。
だが亮真は首を横に振った。
彼は事前にその事も考えたうえで無理だと判断したからだ。

「それは無理だ。メルティナの人間性を考慮すれば無謀に近い。」

メルティナは確かに勇猛であり正義感も強く王女への忠誠心も非常に篤い。
能力的には確かに適任と言える。
だがの長所が逆に大きな問題となるのだ。
そもそも派閥争い自体をメルティナは嫌っている。
彼女は王国や王女への忠誠が非常に篤い。
そして問題は自分の価値観が絶対でありそれは他人も同じでなければならないと考えているところにある。
具体的にいえば彼女は全ての人間が王家に無条件の忠誠を誓って当然と考えているのだ。
勿論それは間違いではない。
ローゼリア王国に仕えている以上は当然の事ともいえる。
だが人間はそう簡単には割り切れない。
欲も有る。

保身もある。
考え方の相違も有る。
様々な理由が存在するのだ。
勿論自分達が絶対の強者なら他人の意思を其処まで考慮する必要はない。
力で押しつぶせる。
だが、現在ルピス王女が直面している状況はそんな強硬策がまかり通るような甘いものではない。
単純な力関係だけでいえばルピス王女が一番の弱者なのだ。
ルピス王女へ忠誠を誓うように騎士派を導ける人間が必要なのだ。
それには他人の不満を理解し、それに対処する必要が有る。
とてもメルティナの様な直情的な人間には無理な話である。

「「……」」

亮真の説明を聞いた両伯爵は押し黙ったままだった。
彼らは先を見る眼を持っていは居なかったが、目の前に出せれた問題の重要性を理解するだけの知恵は持ちあわせていた。
だからこそ二人は余計に何も言えなかった。
彼らの脳裏にはメルティナの傲慢な態度への不満から暴発する騎士派の行く末がありありと浮かんだのだ。

「成る程……確かに不適格な人事ですな……ですがそうなると如何したら良いのでしょう？騎士派の中から王女派に寝返る者を探しますか？」

「いや……なるべくならそれはしたくない……第二のホドラム将軍を生み出してしまう可能性が有るからな。」

ベルグストン伯爵の言葉に亮真は首を横に振った。

今の状況で騎士派から寝返ると言う人間は利益によって転ぶ人間と言う事だ。
確かにそういう人間であっても普段なら問題ないのだが、今回はホドラム将軍を排除した後に騎士派を纏めて貰わなくてはならない。
必然的に権限は強大になる。
だからこそルピス王女への忠誠は篤い者を選ばなければならないのだ。
第二のホドラム将軍を生まない為にも。

「そうだ！一人うってつけの人間がおりますぞ！」

「え？！」

沈黙を守り思案していたゼレーフ伯爵の言葉に亮真は耳を疑った。

「本当かね？ゼレーフ伯爵！」

ベルグストン伯爵も驚きの表情を見せる。

「えぇ。彼女なら実績も人間性も問題有りません！私が自信を持って保障致します！」

「彼女？女性かね？」

「おや？お判りになりませんか？ベルグストン伯爵！彼女ですよ。ローゼリアの白き軍神と謳われた。あの方です！」

【ローゼリアの白き軍神】この言葉を聞きベルグストン伯爵の顔に驚きが走る。

「一体どういう方なんですか？」

亮真の疑問にベルグストン伯爵は動揺を隠せないまま答えた。

第2章第16話

異世界召喚137日目【揺れ動く者たち】その5：

（成る程な……確かにこの人ならこちらの希望どおりに動いてくれるだろう……だが？なんだ？引退している人間にしては……何処かオカシイ……）

王都ピレウスの城で亮真が彼女を見た第一印象はそれだった。
ゼレーフ伯爵が【ローゼリアの白き軍神】と言った彼女の名前はエレナ・シュタイナー。
今から10年前に騎士を引退した老女だった。
老女と言っても歳は50代後半か60半ばの間と言ったところか。
若いころはさぞ美しかったであろう金髪も、いまではところどころに白いものが混じっている。
一見どこにでもいそうな町のオバサンといった外見をしているが、部屋に入って来た時の歩き方を見た限りでは、引退後もそれなりの修練を積んでいたらしい。

「ホ！本日は…ヨ…ようこそおいで下さりました！」

余程興奮しているのだろう、メルティナの挨拶はとても見られたものではなかった。
そしてそれは無理にこの場に同席することを希望したミハイルにも言える。
亮真の邪魔をしない事を条件に二人の同席を許可したが、長年憧れた人間を前に顔は赤く染まり、肩に無駄な力が入っているのがはっきりと判る。
まるで初恋に身を焦がす少女の様だ。

（まぁこんなに緊張してれば余計な事も言う暇は無いか……）

尤も彼女達が緊張するのも無理はない。
何しろ【ローゼリアの白き軍神】ことエレナ・シュタイナーはローゼリア王国が誇る生きた伝説なのだから。

一週間前、ゼレーフ伯爵から彼女の事を聞いた亮真は、エレナ・シュタイナーに関して調べる事にした。
尤も大した労力は必要なかった。
何しろ彼女を知らないローゼリア国民は存在しなかったから。
それこそ町で遊ぶ子供達に聞いても彼女を知らないものは居なかったらしい。
それほどまでに彼女はローゼリア国民から絶大な信頼を寄せられていた。
何しろ彼女の武勇伝は数多い。
そんな数ある武勇伝の中でも一際目立つのがノティスの戦いである。
ザルーダ王国とオルトメア帝国との国境に存在するノティス平原。
ザルーダ王国へ侵攻するためにこの平原に兵を集めたオルトメア帝国に対して逆侵攻作戦を展開し、帝国の野望を阻んだ将こそが、援軍としてザルーダ王国へ派遣されていた彼女だった。
文字通り救国の英雄である。

「フフフ……そんなに緊張することはないわ。お茶でも飲んで落ち着きなさいな。」

「は！はい！失礼しました！」

せっかく向こうが気を使ってくれているのに、メルティナはガチガ

チに固まってしまった。

「まぁ彼女は放って置くとして、エレナ様。わざわざおいでくださりありがとうございます。」

亮真の言葉にエレナは軽く頭を下げる事で返した。

「御手紙を頂いた時には驚きましたけどねぇ。何しろ私が騎士を引退して既に１０年ですから。」

「ご無理を聞いて頂き感謝に堪えません。」

「まぁルピス王女直筆の御手紙を頂いたからには参上しないわけにもいきませんけどね。」

そういうと彼女は優雅にカップを口元へ運んだ。

「そう言って頂ければ王女殿下に無理を言って手紙を書いて頂いた甲斐があります。」

エレナの顔に怪訝な表情が浮かぶ。

一国の王女に手紙を書かせたというのだからその疑問も当然かもしれない。

「そういえばまだ貴方のお名前をお聞きして無かったわ。」

エレナの心に亮真への興味がわいたようだ。

「御子柴亮真と言います。」

エレナの顔に驚きが走る。

「あら……貴方が……あまり策士って感じはしないわね。」

確かに亮真の体格と筋肉を見ればどう見ても肉体派だ。
少なくても頭で勝負するタイプには見えない。

「私の事を御存じなのですか？」

「あら？当然でしょう？引退したとはいえ私はこの国を愛していますから。大抵の事なら知っていますよ。騎士を引退してから１０年も経つのに私を忘れないでくれる人も居ますからね。彼らが私に土産話をしてくれるのですよ。」

エレナの顔を見て亮真は彼女がいまだに騎士派の人間と連絡を取り合っている事を確信した。

（成る程……こいつはいまだに騎士派に繋がっているな……渡りに船ってやつか……）

今でこそ騎士派は王女に対して絶対の忠誠を誓っているわけではないのだが、これは王家に対して野心を持つホドラム将軍が筆頭だからである。
もともと騎士は王国と王族に忠誠を誓う物で有り、貴族に対しての対抗手段だったのだ。
職の為、生きる為にホドラム将軍に従っては居ても、内心不満を持っている騎士は意外と多いのかも知れない。
彼女がそう言った騎士の不満の受け皿になっているのだろう。

「そうですか。【ローゼリアの白き軍神】に名前を覚えていただけ

るとは光栄ですね。」

亮真の言葉にエレナはやや顔を歪めた。

「あら……古い事を御存じなのね。もうずいぶん昔の事だわ。私がそう呼ばれたのわ。」

「あまりこの呼び名が御好きでは無いようですね。エレナ様。」

「昔の事ですからねぇ……ところで私が呼び出された理由をお聞きして無かったわね。」

あまり触れられたくない話題なの彼女は話題を変えた。

「単刀直入に申しましょう。ルピス王女に助力して頂きたい。」

エレナの表情が固まる。

これ程端的に理由を切りだすとは思ってもみなかったに違いない。

「あら……まぁ……本当に単刀直入ね……」

そしてしばらく考え込むと笑みを浮かべて言った。

「でもまぁ判りやすくて良いわね。私は好きよ、そういうの。」

何処か亮真を値踏みするような口調と視線である。

「それはありがとうございます。してご返答は？」

「あら？幾ら私の様なお婆さんでも女でもよ？女性をそう急かすも

のでは有りませんよ。」

「おぉこれは失礼しました。確かに性急な御誘いはマナーに反しますね……とはいえ我々には時間があまり有りませんしね。」

亮真はエレナの言葉を受け流す。

「それに王女殿下にもお会いしてからでないと御返事のしようが無いと思うのですけど？」

「おや？エレナ様は王女殿下にお会いになりたいのですか？……正直に言って無駄な時間は我々には無いんですがね？」

「「「なっ！」」」

亮真の言葉にエレナ、メルティナ、ミハイルの口から同時に驚きの声が漏れた。

「きっ！貴様！」

激昂して椅子から立ち上がりかけたメルティナへ亮真の冷たい視線が突き刺さる。

それは彼の眼を見た人間にとって何よりもハッキリと判るサインだった。

黙らなければ殺す！と言う。

威圧されるかのように浮きかけたメルティナの腰は再び椅子へ押し戻された。

「失礼しました……どうも彼女はこういう交渉事に慣れていないようで……」

メルティナが座った事を確認した亮真はエレナへ頭を下げた。

「驚いたわ……大した気迫ね……歴戦の勇者でも貴方程の気迫を持つ者は少ないわよ……」

「恐れ入ります。何しろこっちは命が掛かっていますからね。」

亮真の言葉を聞き息を整えたエレナは話を元に戻す為に質問を投げかける。

「それで？なんで私がルピス殿下に会う事が無駄なのかしら？」

「殿下に会う事で助力頂けるくらいなら、とっくの昔にエレナ様ご自身が自発的に城へ出向かれていたはずですから。」

１０年も前に引退した人間である。
それを再び現役に戻そうと言うのだ。
並みの条件では無理に決まっている。
そして彼女には金も名声も意味が無い。
将軍位まで上り詰めた彼女は金に不自由はしないし、救国の英雄以上の名誉など有りはしない。
王家への忠誠心と言う点でも駄目だろう。
もしそれで説得できるのなら、彼女ほどの人間だ。
既にルピス王女かラディーネ王女へ仕えているだろう。
それをしないと言う事は、どちらに正当性が有るかの判断が出来ないと言う事だ。
ゲルハルト公の擁立するラディーネ王女を偽物と断じ切れない以上、亡き主君の遺児である可能性が有るのだ。
王家に忠誠心が篤い為にかえって動けないと考えるべきだろう。

エレナの立場に立って考えれば彼女が今の状況でルピス王女に加担するはずが無いのだ。
つまり会うだけ無駄と言う事になる。

「そう……其処までわかっていてなぜ私を呼び出したのかしら？」

「どうしても助力して頂かなくてはいけないので。」

亮真の言葉にエレナの顔が曇る。

「あら？それは無理矢理に言う事を聞かせると言う事かしら？」

利でも駄目、道理でも駄目ならば残るのは実力行使しな無い。
エレナの顔に侮蔑の表情が浮かぶ。

「買い被りすぎたかしら？ルピス王女に切れ者が付いたと聞いて期待していたのに。」

「いえいえ。そんな失礼なことはしませんよ。」

「どういう事？」

エレナの疑問に亮真は笑いながら答えた。

「金でも名誉でも動かない。でも貴方は殿下からの手紙でやってきた。と言う事は交渉の余地が有ると言う事でしょ？……おそらく何か希望が御有りのはずだ。金でも名誉でもましてや忠義からでもない。貴方個人的なね。」

亮真の言葉は部屋の空気を支配した。

誰もが驚きで言葉も出ない。

「そぅ……成程ね。確かに貴方は切れ者だわ。」

ようやくエレナの口から言葉が漏れた。
そして彼女の言葉によって亮真の推測が正しかった事が判る。

「なら教えてくれるかしら?私は何を望んでいるかを……その答えによっては……良いわ、ルピス王女へ力を貸してあげる。」

「判りました……正直に言って私には貴方の望みに関して予想が付いてます。」

亮真の言葉にメルティナとミハイルは驚きの表情を浮かべたがエレナはさもありなんと言った顔つきをしている。

「当然でしょうね……それくらいの事が予想出来ないのなら見込みが無いわ。」

「といっても確証が無いので勝負は出来ません。」

「ふ~ん……慎重なのか腰抜けなのか判断に迷うところね……」

エレナの視線が亮真へ突き刺さる。
彼の心に僅かでも怯えや躊躇が混じっていれば決して彼女は亮真を認めないだろう。
亮真はエレナの視線をまっすぐに受け止めた。
自らの価値を証明する為に。

「まぁ知恵で勝負するならそれくらいの慎重さは必要か……いいわ。

考える時間を少し上げる。そのうえで答えを聞かせて頂戴。」

エレナは亮真の瞳に映る意思を見た。
そして賭けてみる気になった。
自らの命を。

（この子は……この子こそ私が待ち望んだ最後の欠片？……１０年待ち望んでようやく現れた最後の……）

彼女が騎士を引退して１０年が過ぎた。
だが彼女自身は騎士を止めたつもりはない。
あくまでも止めさせられたのだ。
あの男。
ホドラムによって。
【ローゼリアの白き軍神】？
エレナの口元が嘲笑で歪む。
そう確かにそう彼女は呼ばれていた。
ローゼリア王国は勿論近隣諸国にもその名は広まった。
誰もが彼女を称賛した。
だが彼女は判らなかった。
自分のすぐ後ろに自分を狙う刃が忍び寄っていた事を。
自らの名声が高まれば高まるほど、その名声を妬む者が居る事を。

（この子に私の願いが見通せるなら……それほどの思慮が知恵が有るなら……私は……私は望みが果たせる！）

エレナの瞳に期待と不安が浮かぶ。
自らの望みが果たせるかもしれないと言う期待と、再び時節を待たなければならないのではないかと言う不安が。

亮真にはエレナの心の内が読めた。
彼女が自分の対して期待をしている事を。
そしてその期待にこたえられるかどうかに全てが掛かっている事を。
亮真は事前に調べた彼女に関しての知識と実際に彼女に会った事によって得た情報をすり合わせて仮説を組み上げていく。

（彼女の望みは騎士派への復讐だろう……ただどこまでだ？ホドラム個人への復讐か？それとも騎士そのものへの復讐か？あるいは他の誰かか？）

騎士を引退して１０年。
いまだに騎士に対して影響力を持つと言う点と、修練を欠かしていない点を考えると復讐の機会を待っていると言うのが一番しっくりとくる理由だ。
もし騎士を自分の意思で引退したのなら日々の修練をする必要は無い。
それに【ローゼリアの白き軍神】という異名を言った時の彼女の表情。
自分の異名に関しては嫌悪感を持つ割に今でも騎士と交流が有るのなら騎士自体を憎んでいる可能性は低いと言える。

（まぁ単純に日々の日課だって理由も考えられるけどな……）

勿論幾らでも彼女が此処に居る理由は考えられる。
だが彼女だけではかなえられない望みが有るからこそ交渉になるのだ。
必然的にその要求の難易度は高くなる。

（う～ん……今のところはそこまでか……なら後は勝負するしかな

いか……）

亮真は覚悟を決めた。
仮説は所詮仮説である。
いくら考えても確証など得られるはずもない。
ならば自分が事前に彼女を調べた事によって得た知識と実際に会った印象から導き出された答えを信じるしかない。

「復讐ですか……？」

亮真の言葉を聞きエレナの顔に驚きと喜びが浮かぶ。

「なんでそう思うの？」

「実際にお会いした時に感じました。貴方は引退していないと。だから修練を怠っていないし騎士派の情報にも詳しい。だが実際には１０年前に騎士を引退されている……となれば貴方は自分の意思で引退していないと言う事になる。そして貴方が引退した後にホドラム将軍がその座に付いた。……実際にホドラム将軍に会いましたから特権意識に凝り固まった人間だとすぐに判りました。……そして失礼ですがエレナさん……あなたは元農民だ。貴族でも騎士の家系でも無い……となればあの将軍の性格を考えると何か裏工作でもしたと考えるのが普通でしょう。」

「そう……其処まで判っているのね……」

エレナは押し隠していた憎しみを漏らす。

「……私の望みはホドラムの首よ……アイツは……夫と娘の敵なの……」

エレナの言葉を聞き亮真は自分の仮説が正しかった事を理解した。
そして彼女の中に渦巻く憎悪の炎を……

第2章第17話

異世界召喚137日目【揺れ動く者たち】その6：

10年前、エレナ・シュタイナーはローゼリア王国の将軍であった。
平民から騎士、そして将軍へ。
類まれな能力と実績が彼女を軍の最高位へと押し上げた。
ローゼリア王国の民は誰しも彼女を慕った。
だが彼女を妬む者が居た。
光あれば影が存在するように。

その者の名はホドラム・アーレベルク。
彼は恵まれた体格を持っていた。
騎士に必要な武術の才も有った。
代々上級騎士を排出してきた名門と呼ばれる家柄もあった。
ほぼ騎士として完璧であった彼が唯一持たなかった物。
それは自制心である。
なまじ人よりも優れている為、彼は満足すると言う事を知らなかった。
騎士としてほぼ頂点と言ってよい騎士団長の地位に居ながら彼は更に上を目指した。
ローゼリア王国軍の最高位は将軍である。
ローゼリア王国に存在する6騎士団の内、王直轄の近衛、親衛騎士団以外の4騎士団を統括する者。
王より任命されると言う形式をとってはいるが、この職は代々前任の将軍が引退時に後任を指名することで決まる。
彼は先代の将軍が引退する時に自分を指名するよう同僚に働きかけていた。
だが後任に選ばれたのはエレナだった。

彼女の人当たりの良さと【ローゼリアの白き軍神】という名声。
先代がエレナを指名したのも当然と言える。
だがホドラムは諦めなかった。
彼の選民意識が農民出身のエレナを許せなかったのだ。
ホドラムはエレナを引きずり下ろす為に様々な裏工作を施した。
暗殺から汚職の捏造まで考えられるあらゆることをだ。
だが彼女はその全てを切り抜けた。
騎士団に居る友人達も彼女を助けた。
そして業を煮やしたホドラムの牙はエレナの家族へと伸びた。

その日、彼女は小領主の反乱鎮圧で2月程空けた我が家にようやく帰り付いた。
だが玄関の扉を開けても誰も出迎えに来ない。
農民出身とはいえ彼女は将軍である。
そこそこの屋敷を構えていたし、使用人もそれなりに居る。
なにより自分が帰宅した時には必ず飛び出してくる10歳になる愛娘の姿もない。
不審に思いながらもエレナは家族が集まる居間の方へと進んだ。
そして扉を開けるとそこは……。

「私が見つけたのは夫の首だったわ……」

扉を開けたエレナの眼に飛び込んできたのは、平民出の夫の首だった。
彼は苦悶の表情を浮かべてテーブルの上に鎮座していた。
エレナの脳は現実を受け止められなかったらしい。
彼女の記憶が残っているのはそれから数日後に同僚の家のベットに寝ているところからだ。

将軍は決して楽な仕事ではない。

遠征から帰っても家でゆっくりと出来るのは帰還したその日だけ。
次の日からは報告書の作成といった事務処理が山のようにある。
だから次の日に何時までも顔を出さないエレナを不審に思い、騎士団の同僚がエレナの家を訪ねてくれたのが良かった。
彼が発見した時エレナは居間で夫の首を抱いて座り込んでいたらしい。
正気を失ったエレナを自分の家へ連れて行き彼はエレナの屋敷へ戻った。

「手紙がね……あったの。娘は預かったって言う……条件は騎士を引退する事……」

悔しさで身が斬られるほどなのだろう。
彼女の言葉の一言一言には恐ろしいまでも気迫が感じられた。

「私はね……農民から努力して将軍にまでなったの……騎士は決して楽な仕事じゃないわ。基本男の仕事だしね……」

男女差別というより適正の問題かもしれない。
筋力と言う点では女性は男性に1歩も2歩も後れをとる。
当然エレナは男社会の手痛い洗礼を受ける事になる。
だが彼女は女性らしさを最大限に使う事で男性以上の力を示した。
個人ではなく集団としての力。
騎士は戦場で戦う時、必ず1対1で戦う事を美徳とする。
一人を複数で囲む事に嫌悪を示す。
騎士の誇りと言えば聞こえはいいが、効率が悪いのは事実だ。
だからエレナは騎士の連携を提案した。
初めは誇りを既存概念から反対した騎士達も、エレナの人柄と戦場での効果を眼のあたりにする事により少しずつ理解を示し始めた。
それは彼女の努力による成果だ。

「それを捨てる事の意味が貴方に判る？」

亮真は首を横に振った。

想像は出来る。

だがそれを真に理解出来るのは同じ立場に立った事の有る人間のみだ。

「それでも私は娘の為なら惜しくは無かったの……娘が無事に帰ってくるなら……」

４０歳に手が届いたころに授かった娘だ。

騎士としての職務の所為で、３０歳を過ぎてから結婚したエレナは自分の子供を持つ事を諦めていた。

現代日本と違い医療技術などたかが知れているこの世界では高齢出産などまず出来ない。

だから妊娠を知った時のエレナの喜びは格別だった。

諦めていた女の喜びを知ることが出来たのだから。

「だから私は友人達の言葉を無視して騎士を引退した……甘い判断だったとは思うけど他に選択の余地は無かったの……」

「戻ってこなかったのですね……」

亮真の言葉にエレナは頷いた。

「この件自体を私は無理に隠ぺいして貰ったわ。下手に犯人を刺激したくなくて……でも1月が過ぎ2月が過ぎ……1年待っても娘は戻ってこなかったわ……その間にホドラムが将軍の座に就いた。」

事件自体を被害者が隠ぺいしたのであれば、この話が一般に広がっていないのも当然である。
此処で亮真はエレナへ疑問を投げかけた。

「どういう事です？将軍の位は前任者の指名で受け継がれるのでしょ？」

「確かにそう……でも前任者が後任を指名しないで死ぬ事も有るから……そういった場合は騎士団長の投票で決めるの……」

エレナは娘を心配するあまり塞ぎがちになったらしい。
そんな状況で後任人事など考えられるはずもない。

「娘の帰りを待って5年が過ぎたわ……私は内心諦めていたの……夫の敵を討ちたくても相手も判らない。連れ去られた娘の行方を捜したくても手がかりもない……生きる事自体が苦痛で仕方なかったわ。」

当然だろう。
子供は親にとって宝に等しい。
いや自分の命と言っても過言ではないのだ。

「ご存知かしら？5年前に国内で暗躍していた奴隷商人が斬首刑に処せられたのを」

エレナはメルティナに話を振った。

「え！……は、ハイ！……」

奴隷商人自体は違法ではない。

だがそれはあくまでも戦の過程で捕虜になった敵国の人間や、罪人とその家族といった条件が付く。
少なくとも町の住民を攫って奴隷とするなどどこの国だろうと許されはしない。
領主の考え方にもよるが、表立って奴隷狩りを推奨する貴族も居ない。
そんな事をすれば領民はその土地から直ぐに逃げ出してしまう。
だがいつの時代にも馬鹿な人間と言う物は居る。
節度を守って商売をすれば見逃してもらえるものを、大っぴらにやる。
5年前に斬首となった商人もそんな馬鹿な奴の一人だ。

「そいつはね、金になるならどんな人間でも売り買いしたの。それこそ王都の住人から何から手当たり次第にね。」

有力貴族の血縁者を攫ったことがその商人の命取りになった。
それも王族とも関係の有る者を。
王国の関係者に金をばらまいていると言う自信がその大胆な行動の源だったらしいが、自分と付き合いの有る貴族以上に力を持つ者を怒らせれば行く末は見えている。

「そいつを捕縛したのは騎士団だったの。それなりに大きな私兵団を持っている奴でね……警備隊では手が出せなかったというわけ。」

「それで娘さんの行方が判ったというわけですか？」

「そう……何しろ色々と噂の多い奴でね、騎士団の方で拷問に掛けたの。」

亮真の問いに答えるエレナの口調は静かだがその内容は陰惨なもの

だった。

「そしてそいつが拷問の末に吐いたのが私の家族の暗殺だったというわけ……」

実際には暗殺者を集める仲介の様な仕事だったらしいがエレナにとっては同じ事だ。

「拷問を担当した騎士が私の元部下だったおかげで私は直接そいつに会う事が出来た。」

簡単に言うが相当に危ない橋を渡っている。

将軍のままでいるならともかく、引退して既に当時で5年である。

元とはいえ一般人でしかないエレナと犯罪者を会わせるなど……

「成る程……そこで聞いたわけですか。ホドラム将軍が黒幕だったと……」

「えぇ。」

短い答えだがそれが全てを語っていた。

「なぜ今まで待ったのですか？」

「簡単よ……その話は所詮表に出せない話だったの……出したところ握り潰されてこっちに暗殺者が送り込まれるだけ。私が引退して5年でホドラムの権勢は大きく成り過ぎていた。奴隷商人の証言だけでは彼を失脚させる事が出来ないほどに……」

沈黙が部屋を支配した。

誰もがこれ程深い因縁だとは思いもしなかった。
ミハイルもメルティナもあまりの話に何を言えば良いのか判らなかった。

「そうでしたか……」

亮真の口も重くなる。
有る程度の予想はしていたがこの恨みは深すぎる。

（まいったな……こりゃメルティナに騎士派を任せるより不味いか？）

「大丈夫よ。貴方が心配しているような事はしないわ……私が欲しいのホドラムとその家族。ただそれだけなの。」

エレナは亮真の顔色から彼の懸念を理解した。
だからこそ自分の望みを正直に口にしたのだ。

（成る程……こっちの懸念は理解できてるのか……確かに彼女の能力も人間性も悪くない……後はこっちが腹をくくるだけか……）

エレナは亮真達が求める人材で有ることに変わりは無い。
彼女の能力は既に実証されているのだから。
あとはホドラムとその家族を彼女の復讐から守るか守らないかでしかない。
法に則れば復讐は悪である。
だがそんなことは彼女も十分に理解している。
だからこそ彼女は待ったのだ。
自分が復讐を行える好機を。
エレナは自らの売値を提示した。

後は亮真がそれを払うかどうか。

（選択肢は無いか……まぁホドラムの家族が気の毒と言えば気の毒だが諦めてもらうしかないな。）

亮真は自分の正義感に蓋をした。
現状では他に選択肢が無いのだから仕方が無い。
それに所詮は敵とその家族である。
しかも有る意味自業自得と言える。
彼の家族が巻き込まれるのが気の毒だとは思うが。

（俺は良いとしてだ……問題はルピス王女か……）

亮真自身は見て見に振りをするととして問題は王女である。
彼女に会って既に1月以上が経っている。
おおよその人柄を把握するには十分な時間と言えよう。

（良くも悪くも理想を追い求め過ぎる……そんな人間に報酬としてホドラムへの復讐を認めさせられるか？……無理だな……だがどうする？……ここで断れば彼女は間違いなく貴族派へ向かうだろうし……）

彼女の行動原理は復讐である。
勿論ローゼリア王家への忠誠は有るだろうが、それは今のところ関係無い。
もし彼女へ亮真達より先に貴族派が声を掛け、彼女の言い値を貴族派が払うと言えば彼女は躊躇することなく貴族派へ加担しただろう。

（仕方が無い……俺が被るか……）

亮真は此処で腹を括った。
王女の裁断を仰がずにエレナの復讐を認める事にしたのだ。

「良いでしょう……そちらの要求を呑みます。」

「「な！」」

メルティナとミハイルの口から驚きと非難の声が漏れるが亮真は黙殺した。
交渉事には波が有る。
此処で王女の裁断を仰ぐので時間をくれなどと言えばエレナの熱が冷めてしまう。
今此処で決断するしか無いのだ。

「良いの？王女殿下に話をしないで？」

エレナは探るように亮真を見た。

「えぇ。今回の話に関しては全て私に一任して頂いていますからね……確かに越権行為と言われかねませんが……そこは私が何とかします。ご安心ください。」

亮真の言葉を聞きエレナはジッと亮真の眼を見つめる。
一片の嘘でも有れば許さないと。
どれほど見つめあっただろうか。
エレナの表情が緩む。

「良いでしょう、貴方を信じますわ。御子柴殿。」

信頼の証かエレナは遥かに年若い亮真へ敬意を表して呼んだ。

「ありがとうございます。エレナ様」

「それで？私は何をすればいいの？騎士派の切り崩しでいいのかしら？」

エレナの問いに亮真は考え込んだ。

「実際どれくらいの人間がホドラム将軍に不満を持っているんですかね？」

「そうねぇ……大体全体の3分の2は不満を持っているわね……」

「3分の2！」

エレナの言葉に亮真の口から驚きが漏れた。

過半数以上が不満を持っているのにホドラムが派閥の長で居られるはずが無い。

「それはあり得ないでしょう？」

亮真の疑問にエレナは笑みを浮かべて言った。

「そう、確かに普通なら無理ね……でも彼はそれを成し遂げたのよ。騎士同士の相互監視によってね。」

「相互監視ですか？」

「密告を奨励したと言えば判りやすいかしら？」

地球でもこの制度を導入している国は幾つかある。
ソ連崩壊前の共産主義圏はほとんどがこの制度を導入しているし、北朝鮮などは２０１０年現在でも未だに政権維持の大事なシステムとなっている。
システムを簡単に説明すればそれは裏切りの奨励である。
同僚や家族がふとした時に洩らした不満を上司に報告するのだ。
そして組織の中で昇進したり報奨金を貰ったりする。
このシステムは人間不信に陥りやすい。
それも当然である。
人間誰でも不満はある。
だがそれを誰かに聞かれ密告されれば自分が殺されかねないのだ。
同僚にも友人にも心は開けなくなる。

「成る程……なら確かに切り崩しやすいでしょうね。」

このシステムの弱点は強固な割にたった一人の人間が勇気を出しただけで崩壊する可能性がある脆弱さだ。
強固なのに脆弱と言うのも変な話だが事実である。
問題はその勇気ある人間が出にくいと言う事だ。
誰だって不満を持ってはいるがそれを他人に話せないのだ。
話すには命をかける覚悟が居る。
だからこのシステムは強固である。
だがたった一人の人間が不満を他人に言えばどうだろう。
勿論話す人間を選ぶ必要は有るが高い確率で不満を共有できるだろう。
そしてそれはお互いが話をするうちに高ぶり遂には関から溢れ出す。
そうなればもう誰も彼らを止められない。
押さえつけられていた不満は荒れ狂いながら噴き出す事になる。
そして今回はその口火を切り人間が目の前に居る。
ローゼリア王国の英雄が焚き付けるのだ。

さぞ盛大な不満の炎が燃え上がる事だろう。

あまりお頭の宜しくないメルティナやミハイルは何の事だか判らないようだが、亮真の脳裏にはハッキリとしたイメージが浮かんだ。

「良いでしょう。その辺はお任せします。ただ……状況の報告だけはしっかりと行ってください。」

「えぇその辺は信頼して下さって構わないわ。老いても私は元将軍ですからね。」

「一つお聞きしていいですか？」

「あら？改まって何かしら？」

会談を終え部屋を出て行こうとするエレナの背中に亮真は問いかけた。

不謹慎だと判っていてもどうしても問わずには居られなかったのだ。

「娘さんは……」

亮真の問いにエレナはしばらく答えなかった。

余程言いたくない話だったのだろう。

亮真は自分の浅はかさを悔やんだ。

「あ！わすれ「娘はね……攫われた後、散々に犯されたせいで気がふれたらしくて……売り物にならないからと……殺されたわ……その奴隷商人にね……」……すみません。」

ある程度の予想が付いたこととはいえ被害者の親から聞く言葉は重い。
答えなくていいと言う前に彼女に言われてしまった。

（俺は馬鹿だ……聞かなくていい事を聞いてしまった……）

「良いの……気にしないで……でもね……だからこそ私は引けないの……絶対に！」

部屋を出ていく彼女の後ろ姿からは万人の上に立つ者だけが放つ何かと同時に、一人の母親が持つ純粋な怒りの炎が浮かんでいた。

第2章第18話

異世界召喚165日目【開戦】その1：

「まいったな……予定が狂っちまったぜ……」

亮真は城の自室に籠ると宙を見つめながら頭を掻いた。
この部屋にはメイド服の下に鎖帷子(くさりかたびら)を着こんだサーラとローラの二人しか居ない。
しかし姉妹が亮真へ話しかける事はない。
主の思案に邪魔が入らないよう気を配るのが今の彼女達の職務だからだ。
実際に亮真の言葉は返事を期待して言った言葉では無い。
ただ深く考え込んだ時につい洩らした独り言に過ぎない。
姉妹はそれを5カ月近くを共に過ごした事により理解していた。

「姉様……亮真様、すごく考え込まれてるけど……晩餐会の開始時間が過ぎてるの判ってないよね？」

「えぇ……でも今は邪魔をしては駄目よ……何れ考えが纏まったら私達にお声をかけてくださるから……その時にお断りの連絡を入れたことを報告すればいいわ。」

既に姉妹の間では晩餐会の欠席は確定事項だった。

「うん……判った……私ちょっと行って断ってくるね。」

「えぇ。お願い……私は亮真様のお側から離れたくないし……王女殿下にはよろしくお伝えして。」

「うん……この前見たいに暗殺者が来たら大変だもんね……」

「えぇ……亮真様のことだから大丈夫だとは思うけれど……あぁそれと厨房を借りて夕食の準備をしておいて。きっとお腹を空かされるはずだから。」

「うん……判った。」

そういうとサーラは静かに部屋から抜け出していく。

外は既に漆黒の闇に支配されていた。
新月の為月の光すらない今夜は暗殺者にとって絶好の機会と言える。
勿論城の警備は万全と言ってよいが人間のやる事だどうしても不備は残る。
それに彼らが第一に考えるのはルピス王女の安否に他ならない。
幾ら王女に助力している人間であっても、後回しにされるのは当然と言えた。
実際のところ亮真は先日暗殺者に襲われたばかりだ。
飛来した矢に気が付いた亮真が咄嗟に身を屈めた為、矢が彼に傷を負わせることは無かったがその矢には猛毒が塗られており掠っただけで死ぬことになっただろう。
暗殺者の行方もつかめていない今、再度の襲撃に警戒するのは当然と言えた。
ローラもサーラも共に亮真の盾になる覚悟は出来ていた。
とはいえ亮真が姉妹の命を犠牲にして助かったところで喜ばない事は十分に理解しているので、事前に出来うる限りの準備をしている。
メイド服の下に着込んだ鎖帷子（くさりかたびら）も対策の一つだ。

「ふぅ……腹が減ったな……」

サーラが王女達に断りの言葉を伝えに行ってから既に2時間近くが過ぎていた。

「今何時頃だ？」

「22時05分でございます。」

すかさずローラが答えた。

「あぁそうか……っ！おい今日は晩餐会があった「私がお断りしておきました。」そうか……悪い助かった。」

本来なら今日の夕食はルピス王女と共に食する予定だった。
しかし午前中にもたらされた報告が状況を一変させた。
当然亮真はそれの対策に頭を捻らなければならなくなったのだ。

「何か伝言は？」

「対策に頭を悩ましているのでしょうと言われ欠席に関しては気にしないようにとのお言葉でした。ただ明日の午前に会議を開くのでそこで方針を示せる様に準備しておいてほしいとのことです。」

王女主催の晩餐会を欠席するという有る意味王女の顔に泥を塗るに等しい行為を行った亮真に対してルピス王女は驚くほど好意的だった。
勿論それはこの日の午前中にもたらされた報告の内容が如何に重要だったかを物語っている。
亮真はローラの言葉を聞いて胸をなでおろす。

「判った……ふぅ明日までか……」

グゥウゥ

亮真の腹が不満の声を上げた。

時折お茶を口にする程度で昼食以来何も食べていないのだから致し方ない。

「腹が減ったな。何かあるかい？」

「はい。サーラが厨房を借りて準備して有りますので。」

「そうか……なら二人も一緒に食べよう。どうせ食べてないんだろ？」

亮真は彼女達が自分より先に食事をすることが無いことを理解しているのでそういうと、ローラは嬉しそうに頷いた。

「直ぐにご用意いたします。」

「さてと。時間も無いし食べながらで良いから聞いてくれ。」

亮真の言葉に姉妹は視線を亮真へ向け頷いた。

彼女達はメイドであり護衛であると同時に亮真にとって大切な相談相手になっていた。

自分の考えを説明することで亮真自身の理解が深まると同時に、ルピス王女などへ説明する時のリハーサルにもなる。

特に重要なのは単語の意味や言い回しの確認である。

元上級騎士の家系に産まれた姉妹の受けた教育水準はこの大地（アース）では最高といってよいほど高いものだ。
亮真から見ればせいぜい小学校高学年レベルといったところだが乱世であるこの世界では博識といってよい知識量を誇る。
なにしろ人口の9割以上を占める平民の殆どが自分の名前すらかけないレベルなのだ。
数学に関しても同じである。
商人が足し算引き算を使う程度。
庶民レベルでは数字すら見たことが無い人間もざらにいた。
そういう世界であるから亮真が策に関して話をしても回りに伝わらないことがある。
概念そのものが無い言葉を話されても話された人間は意味を理解できない。
だから亮真は姉妹に一度説明をするのである。
そうすれば姉妹がわからない言葉や判りにくい言葉を認識することが出来る。
後は其の言葉を言い回しを変えたりより噛み砕いて説明してやればよくなる。

「二人ともホドラム将軍が貴族派と合流したことは知っているな？」

亮真の言葉を受け姉妹は頷いた。

本来なら限られた人間にのみ知らされるべき情報だが、こういった情報は得てして漏れやすい。
今日の午前中にもたらされたこの凶報は夕刻には城に勤めている者なら誰もが聞いた公然の秘密となっていた。
亮真としては簡単に国の機密が漏れるこの状況を苦々しく思っているが、個々の危機管理意識が薄いため対策のうちようが無い。

御子柴亮真は所詮異世界から召喚された余所者。
一朝一夕で国の有り方を変える事など出来るはずもない。
今目の前にある問題の中で最優先な物から対処するしかないのだ。
とはいえ漏れたのはホドラム将軍が貴族派に合流したようだと言う結果のみ。
其の過程に関しての情報は錯綜していた。

「そうか。なら……まずは経緯から説明するか。」

亮真は口に含んだワインで肉を胃へ追い落とすと話し出した。

国内治安の回復という名目で、自らが団長を勤める白剣騎士団を率い王都ピレウスをホドラム将軍が発ったのは今から4日ほど前の事だった。
亮真自信はこの事を知らされてはいなかった。
後から聞いた話ではホドラム将軍がルピス王女に直談判に及んだらしい。
事実貴族派がラディーネ王女を擁立して以来ローゼリア王国の治安は悪化し続けている。
治安を維持するためには王国に権力が無ければならないが、其の権力を維持するためには戦力がいる。
力なき正義はただ踏み躙られるだけだ。
それでも王都ピレウスやそれなりに大きな地方都市では、戦略上貴族派王女派のどちらかが兵を駐屯させているため極端な治安悪化は見られなかったが、逆にそういった戦略上の価値が無い村や辺境の都市からは騎士や兵の姿が消え、急速な治安悪化が報告されていた。
勿論これは致し方ないことではある。
ルピス王女にしろゲルハルト公にしろ無限の兵力を持っているわけではないのだから。

亮真自身も気にしてはいたが打つ手が無い状況だった。
そしてホドラム将軍はこれを利用したのである。

「民あっての王国でございます！」

この一言が悩むルピス王女の心を揺さぶった。
ホドラム将軍のこの言葉を亮真やエレナが聞けば決して彼を信じたりはしなかっただろう。
確かに正論である。
だが今まで特権意識に凝り固まっていた野心家が急に民を思いやることなどありえるだろうか？
勿論「無い！」と断言はしない。
可能性は常に０では無いから。
だが限りなく低いことははっきりしている。
亮真やエレナがその場に同席していたなら決してこんな話を信じたりはしなかっただろう。
少なくともホドラム将軍が直接指揮を執るようなことだけは避けたに違いない。
だがルピス王女にはそれが判らなかった。
いや判ってはいたのかもしれない。
だがホドラム将軍の吐いた正論に屈した。
彼女自身もまた民の安寧を望んでいたから。
結果としてホドラム将軍の提案を受け入れてしまった。
そして案の定ルピス王女は騙されることになる。

「というわけだ。」

亮真の話を聞いた姉妹の表情は動かなかった。

リオネ辺りに話をすれば１００も２００も罵倒が飛ぶだろうが彼女達がそれを表に出すことは無い。
亮真と共に過ごす中で怒りを面に出しても何の価値も無いことを彼女達は理解しているからだ。

「そうでしたか……それで亮真様が気にされているのはホドラム将軍が貴族派に合流されたという事実ですか？それとも？」

ローラの目が探るように亮真を見上げた。

「サーラは俺が何を気にしてるか判るか？」

ローラの問いに答えず亮真はサーラへと話を振った。

「亮真様は今回の寝返りが誰か第三者の手による工作ではないかと疑っておられるのですね？」

そう、それこそ亮真が半日近くも悩んだ理由である。

エレナを登用したこと自体は正解だった。
だが彼女は劇薬だった。
効き目がある薬というのは飲みすぎれば毒となる。
そして亮真はエレナという劇薬の取り扱いを間違えた。
彼女は確かにすばらしい働きを見せた。
もともと接触していた自分の仲間と連携して一気に騎士派に食い込んだのである。
彼女が亮真に言った騎士派のホドラムへの不満は本当のことだった。
わずか半月の間に騎士派の半数がエレナへ傾いたのだ。
もともとホドラムへの不満は騎士派の中に渦巻いていた。
エレナが復帰したことにより不満の捌け口を見つけた騎士達はこぞ

ってエレナへと靡いたのだ。
そして日が経つに連れて其の数は増えていった。
最終的にホドラムの手に残ったのは、自らが団長を務める子飼いの騎士団２５００のみである。
自らの派閥を食い荒されホドラムは驚いただろうが其れは亮真も同じだった。
元々亮真達の予定では貴族派の問題を処理した後にホドラムの排除という流れであった。
しかし自らの派閥を食い荒されたホドラムがおとなしく王女を擁立するとは考えにくい。
余計なことをされる前にホドラムを討つ。
其の方針が固まったのはつい１週間前の話である。

「そうだ、あまりにも不自然すぎる……確かにホドラムは追い詰められている。だから援軍が欲しい……それは判る……だがゲルハルト公がそれを受け入れるというのが判らない。それにあのホドラム将軍が自分から政敵に頭を下げるとはどうしても思えない。」

亮真の脳裏には、謁見の間で初めてホドラム将軍と会ったときの彼の目を忘れてはいなかった。
欲と野心に満ちた目だ。
そして亮真を見たあの目。
「下賤な平民め！」彼の目ははっきりとそう言っていた。
尊大で差別的で、自分の敵は容赦しないタイプの人間である。
其の上プライドが恐ろしく高い。
政務を司ってきたゲルハルト公との仲も最悪なことが判っている。
窮地に立ったことを自覚したとしてもまず自分から頭を下げる訳が無いのだ。
だからこそ亮真はホドラム将軍が貴族派に合流することを予測できなかった。

「確かに……ですがゲルハルト公の方から持ちかけたとは考えられませんか？」

「確かにそれ以外は考えにくい。だが問題は誰がそれをゲルハルト公に進言したかだ。」

ホドラム将軍が自ら頭を下げる可能性が薄い以上、今回の話は貴族派から持ちかけられたことが予想出来る。
確かに政略を司ってきた貴族派である。
そういった裏工作は得意なのかもしれないが利害が対立する人間同士での話し合いは妥協点を見つけるのに時間が掛かり感情のシコリも無視できない問題となる。
だがもしそういった問題の調整が貴族派の人間に出来るのなら、ゲルハルト公は態々庶子のラディーネ王女など担ぎ上げる必要はなかったはずだ。
ルピス王女を貴族派側へ取り込めば済むだけなのだから。

「成る程……そうなると……ひょっとして周辺諸国から工作の手が？」

「あぁ……俺が一番心配しているのはそこさ……杞憂ならいいんだけどな。」

ローラの言葉に亮真は頷いた。

過去にエレナが援軍で赴いた西側のザルーダ王国とローゼリア王国とは関税の問題から現在は対立状態へと陥っている。
東側のミスト王国とは仲が悪いわけではないがかといって良いわけでもない。

過去にオルトメア帝国の進攻を協力して阻んではきたが、格別3国間の中が良いわけではない。
いや逆に悪いくらいと言える。
隙あれば牙を剥くくらいに。

「国外の情報が無さ過ぎるんだよな……この国には……」

この国特有なのかこの世界全体がそうなのかは今の亮真には判らないが、情報が無さ過ぎるのである。
今現在他国の情報を取得する手段は1つ。
傭兵や商人と言った国を移動する人間から情報を得る手段のみである。
だがこれは鮮度の悪くなった情報である。
しかもこちらが求めている情報を持ってくるとも限らない。
彼らの仕事は情報を運ぶ事ではないのだから。

亮真のぼやきの理由を姉妹は十分に理解していた。
ここ数カ月のあいだ亮真と行動を共にしたせいで、情報の大切さ、事前の準備の重要性が判っていたからだ。
だが同時に亮真の望みがかなわない事も判っていた。
情報の重要性をこの世界の特権階級はあまり意識していないのだから。
どうしても欲しければ自分で人を雇うしかない。
だが今の状況では時間的余裕が無いのだ。

「亮真様……判らない事を悩んでも致し方ございません。此処は周辺諸国が牙を剥く前にホドラム将軍とゲルハルト公を討ち果たすしかないのではありませんか？」

ローラの言葉に亮真は頷くしかなかった。

自分自身も他に手が無い事が判っていたからだ。

「ゲルハルト公がおよそ６万。これにホドラム将軍の２５００と傭兵が加わるとして約６万５千。こちらは騎士団１万２５００にベルグストン伯爵以下貴族達の兵が約２万。合計で３万２５００ですか。数の上では圧倒的に不利ですね……」

サーラの言葉に亮真は頷いた。

「もともと貴族派のほとんどが伯爵位以上の中級か上級貴族ばかりだから領地が大きく兵の徴兵数も多い。兵数と言う点でいえば貴族派に勝つのは無理に決まっている。」

「ですがそれは既に判っていた事です。それに戦力的には拮抗しています。」

騎士は全員法術を使う事が出来る。
習得度に個人差はあるが全員が身体能力の強化位は出来るのだ。
戦力として非常に大きい。

「まぁな……結局ホドラムが敵に与しただけで状況は前と変らないってことだな。」

「そうですね。ただ見えない敵の事は気にしすぎてもいけませんが無視しても不味いと思います。」

ローラの言葉は現状をきちんと把握していた。
一番怖いのはホドラムとゲルハルトを始末する前に他国の侵略を手引きされる事だ。
確証は無いがその可能性は決して無視できない。

「なら、迅速にケリを付けるのが一番ってことか……」

亮真の眼が宙を睨む。

ただの一戦で勝負を決める為に。

第２章第１８話（後書き）

つたない作品ではありますが今後ともよろしくお願い致します。

第2章第19話

異世界召喚166日目【開戦】その2：

「何？ではお前はイラクリオンへ進軍しろと言うのか！？」

早朝の会議室にメルティナの声が響く。

切迫した事態を打開する会議は、夜明けと共に開始された。

「なぜ急に？確か以前お聞きした時はピレウスへ相手を引き込んでの決戦を想定されていたはずでは？」

ミハイルも疑問を投げかけた。

それも当然だろう。

王都ピレウスとゲルハルト公の本拠地イラクリオンの間にはエレクシュアの森とテーベ河という2つの難所が存在している。

エレクシュアの森は広大な森林地帯で、そのド真ん中を一本の街道が突っ切っていた。

一般の旅人や商隊が往来するには問題無いのだが軍隊が行軍するには道幅が狭すぎるのだ。

勿論通れないわけではないが、隊列が細長くなり進軍速度は低下し、また鬱蒼（うっそう）と茂（しげ）った木々が伏兵を容易にしてしまう。

そしてエレクシュアの森を過ぎるとテーベ河がその姿を現す。

ザルーダ王国との国境に位置するオウル山を源流とするこの河は、ローゼリア王国を南西から北東に貫きローゼリア王国の農業を支えている。

この河のおかげでローゼリア王国は農業の国として生きていける訳だが、兵を動かすという観点から言えばこの河は邪魔者でしかない。

河幅は500m近くありとても橋を架ける事が出来ない。

水深もかなり深く徒歩では渡れない。
となれば当然船となる。
この河の両側には渡河の為の渡し舟が幾つも有った。
だが一般人ならさほど大きな問題とならないテーベ河の渡河も、軍隊規模の渡河となれば話が変わってくる。
まず船といっても何百人もの人間が一度に乗れる大型船等は無い。
一番大きい船でも２０人も乗れば満杯だろう。
物資の輸送も考えなければならない。
替えの槍や馬具。
兵糧に馬。
負傷した際の医薬品。
数え上げればキリがない。
そう言ったものをいちいち船に乗せ換え対岸まで運ばなくてはならないのだ。
かなりの時間がかかる事を予想できる。
しかも兵を一度に輸送する事が出来ない。
そうなると借り受けた船に兵を少人数で乗せて往復する事になる。
これが問題なのである。
各個撃破の的にしかならないからだ。
ちなみに過去ローゼリア王国はイラクリオンを経由してミスト王国と戦争をした事がある。
だがその時と今では状況がまるで違う。
ミスト王国との戦争時では、戦場は両国の国境付近。
イラクリオンまでの安全が保障されている状況だったため、兵を分散して輸送しても何の問題もなかったのである。
だが今回の敵はゲルハルト公。
テーベ河から東は完全にゲルハルト公の勢力下と言ってよい。
とても悠長に渡河出来る状況ではない。
だからこそ亮真はルピス王女にゲルハルト公を王都ピレウスへ引き

込んでの決戦を献策していた。
相手の大軍を自領に引き込んで補給線を断つ。
亮真の狙いは其処に合った。

だから今さら亮真が作戦を翻した事に会議に出た一同は揃って驚きの声を上げたのだ。
驚かなかったのは昨夜の内に話を聞いていたマルフィスト姉妹だけである。

「成程ね……さすが亮真君ね……よく相手方の心理と状況を理解しているわ。」

驚きながらも亮真の狙いを理解したのだろう。
エレナの口からそんな言葉が出た。

「それはどういう事です？」

「今なら相手領土を攻めるのが簡単だって事ですよ。ルピス殿下。」

ルピス王女の疑問に亮真は答えたが、彼女の疑問が晴れる事は無かった。
彼女には何故今攻める事が簡単になるのかが判らなかったからだ。
亮真は会議に出席した全ての人間になるべく丁寧に説明を行った。

「私は初めに王都へ敵を引き入れる事を献策したのは、敵地への侵攻が困難だったためです。」

難所を通過する間に相手方の攻撃を受ける心配があったため、ルピス王女とゲルハルト公のどちらも相手領土への侵攻を見合わせていたわけだが、今はその心配をする必要がない。

少なくてもここ2~3日の間は。
なぜか?
ホドラム将軍がゲルハルト公に合流したためである。

「ホドラム将軍がゲルハルト公と合流した事を私は少しも問題だとは考えていません。むしろ相手方の失策だと考えています。」

もともと権力争いをしていたような人間達である。
しかもどちらも傲慢で鼻持ちならない人間だ。
とても相手と歩み寄りを考える人間ではない。

「そんな彼らが合流したとして、指揮権はどちらが握る事になると思いますか?」

戦をする上で大切なのは指揮権である。
どれほどの大軍を集めようと、大将に確固たる指揮権がなければ勝利は望めない。
それは数々の歴史が証明している事である。

会社に置き換えて考えてみれば理解しやすいかもしれない。
例えば課長と部長の指示が相反した時、自分ならどちらを優先させるだろうか?
普通はより上位である部長命令を優先させる。
なら社長と部長ならどうか?
社長を優先させるだろう。
なら社長が2人居たらどうなるだろう?
共に自分の上司である。
その二人が相反する命令を自分に出したらどうするだろうか?
誰もが戸惑うはずである。
どちらの命令を守るべきなのかの判断が出来ないからだ。

そして今回も同じことが言える。
これがもしゲルハルト公が軍事能力に優れるホドラム将軍に自分の兵の指揮権を委ねられるほど度量の大きい人間であったり、ホドラム将軍が自分の持つ兵力が僅かな事を理解してより大きな兵数を持つゲルハルト公に従うという潔さを持っていたならば亮真も決して彼らが合流した事を楽観しなかっただろう。
彼らの人間性の低さ、度量の狭さ、傲慢さ。
それらをキチンと理解しているからこそ亮真は今なら攻める事が出来ると判断したのだ。

「……そういう事ね……」

亮真の話を聞きルピス王女の顔にようやく理解の火が灯った。
周囲の人間にも亮真の狙いが理解できたらしい。

「だがそれは何時までも続かないのではありませんか？」

ベルグストン伯爵が疑問を投げかける。
確かに彼らは傲慢で度量も狭い。
だがこの国の最高権力者である。
決して愚か者ではない。

「だからこそ2～3日が勝負なんですよ。」

彼らが合流して間もない今だからこそ隙があるのだ。
彼らの間で話し合いが行われ合意に至ればこの隙は無くなってしまう。

「しかし御子柴殿……今から兵を発するとしてどんなに急いでも兵がテーベ河に至るのに7日は掛かる。とても間に合わないのではな

いか？」

ゼレーフ伯爵の指摘は当然である。
どんな好機もつかめなければ意味がない。
だがそんなことは亮真も十分に理解している。

「確かに全軍を動かすのは無理でしょう。ですが少数、具体的には２０００程の騎士と傭兵で編成した騎馬隊なら十分に間に合わせる事が出来ます。」

ゼレーフ伯爵の言う7日は徒歩騎士や民兵を含めた話である。
法術が使える人間だけを馬に乗せて進軍させれば、馬の休息時間を治癒法術を使用することで無視する事が出来る。
また徒歩の人間が居なければ行軍速度が速くなるのは当然と言えた。

「だが……２０００でテーベ河を渡ったとしてそれでどうする？相手の兵数は６万を超えるのだぞ。２０００ではどうしようもないだろう？」

メルティナは渡った後の事を心配した。
確かに２０００の騎馬隊なら3日以内にテーベ河へたどりつくことは可能だろう。
だが河を渡り切ってしまえばそこは相手の勢力下。
ただの自殺行為としか彼女には思えないのだ。

「その辺は考えています。勿論２０００で６万をまともに相手にすることはできません。騎馬隊が出発した後直ぐに王都を発てば全軍がテーベ河に着くのは7日。２０００兵でも数日なら持ちこたえる事が出来ます。」

亮真の言葉にその場に居た人間は誰もが首を捻った。
亮真は自信を持って居るようだが、２０００で３０倍の敵を防ぐのである。
そう易々とは賛同できるはずもない。

「策があるのね？」

ルピス王女の言葉に亮真は深く頷いた。
彼とてまともに戦って防げるとは思っていない。
だが同時にこの機会（チャンス）を逃すべきではないと思ってもいる。
もしここでこの機会（チャンス）を見逃せばゲルハルト公とホドラム将軍の間に協力関係が構築されるかもしれない。
多少無茶でも今は攻める流れなのだ。

室内は静まり返った。
そして部屋の全ての人間の視線がルピス王女へと集まる。
彼女の意志が全てを決定するからだ。

（本当に攻めて勝てるの？いえ……それ以前にまず２０００の兵で６万を超える敵を防げるの？）

ルピス王女は亮真の言葉をただひたすらに考え続ける。
自分の決断がこの国の行く末を決定する事を十分に理解しているからだ。

長い沈黙を破ったのはエレナだった。

「私は彼の策に乗るべきだと思います……このまま手を拱（こまね）いていても事態が良くなる筈がありません。それに彼の言うとおり今は攻め

る流れだと思います。」

「エレナ……判りました。貴方に２０００の兵を預け先発隊の指揮を任せます。本隊が到着するまで必ずや死守するのですよ！」

エレナの言葉を聞きルピス王女はついに決断を下した。

「判りました。お任せください。」

亮真はそういうと深々と頭を下げた。

「全く！坊やはいい度胸をしているよ……わざわざ危ない橋を渡る事は無いだろうに。」

リオネはそういうと笑みを浮かべた。
言葉程に非難している訳ではないようだ。
ルピス王女の決断で出兵が決まり会議が解散した後、亮真、リオネ、ボルツの３人は一室へと集まった。
彼らとここには居ないがマルフィスト姉妹とミハイルが先発隊のメンバーである。

「まぁ攻められるなら攻めたほうが良いですからね。」

「エレナ様もおっしゃってましたが確かに今なら攻められますな。」

亮真の言葉を聞きボルツも頷く。
実践経験豊富な人間にとって亮真の言う流れはよく理解できる。

「ですが若。どうやって２０００の兵で６万の兵を防(ふせ)ぐんです？」

ボルツが控えめに尋ねて来た。
彼は亮真を深く尊敬していたが決して無条件の盲信はしていない。
６万対２０００では普通なら勝負は見えている。
それを可能にする策が有るならば聞かせてほしいのは人情である。

「まぁそれはボルツさん達の腕次第ですね。お二人には幾つか頼みごとをしていますがその成果次第というところです。」

「え！あれですか？……確かにあれはスゴイですが……本当にあれで防ぎきれるんですかい？」

「なぁに坊やの注文通りに訓練はしてあるから大丈夫だよ！」

ボルツは顔色を変えたがリオネの方は涼しい顔をしている。

「新しく雇った人達も大丈夫ですよね？」

「あぁ。みんな最初は面喰ってたけどね。アタイがビシッと仕込んでおいたからね！安心して良いよ。」

亮真の問いにリオネは胸を張った。
亮真の注文はかなりこの世界の傭兵にとって特殊なものだったはずだが、リオネはそれを上手く達成したようだ。

「それなら問題ないと思いますよ、ボルツさん。」

亮真の言葉を聞きボルツの顔にいくらか笑みが戻る。

「それにローラ達に頼んでいた物が揃いましたからね。」

「なんだい？　それ」

「まぁそれを使うのは防衛戦の後の話ですけどね」

亮真の言葉にリオネは辺りを見回すと言った。

「ふぅん……それであの子たちはここに居ないのかい。」

「えぇ。陣へ確実に運んでもらわないと不味いので」

「そうかい。まぁアタイ達は坊やに賭けたんだ。後はアンタが期待外れでない事を祈るだけさ。」

リオネの口調は戯けていたがその目は真剣そのものであった。
それは彼女が少数とはいえ傭兵団の長であり、人の上に立つ人間の責任というものを理解していたからに他ならない。

「まぁ期待外れでない事は保証しますよ。」

亮真は肩を竦めそう答えるしかなかった。
彼は神ならぬ人の身で、絶対に勝てるとは言い切れなかったからだ。

「行くぞ！」

「「「出発！」」」

亮真の声を皮切りに中隊長達が部隊を進軍させる。
亮真が乗る馬の側にはマルフィスト姉妹がぴったりと並走していた。

「亮真様。ご指示通り例の物の手配は終わりました。」

「判った。」

ローラの言葉に亮真は軽く頷いた。

「それともう一つのご指示の方ですが見つけました。」

サーラの言葉を聞き亮真の目が細まる。

「傭兵部隊に混じっていたのか？」

「おっしゃる通りです。新規で雇用した傭兵団の中に紛れていました。」

「そうか……目を離してはいないな？」

「はい。その辺は十分に注意いたしましたから。」

「どこの手の者か判るか？」

亮真の問いにサーラは首を振った。

「そうか……まぁ良い。今は泳がせておけ。いずれ使い道が出来るだろうからな。」

「畏まりました。」

サーラは頷くと傭兵団の方へと馬を進める。

「亮真様。先に始末した方がよろしいのでは？」

「いや。手持ちの札は多い方が良い。下手に処分しても別の奴が来るだけだしな。」

ローラの問いに答えると亮真の目が細く鋭くなる。

まるで消えない敵の姿を見破る鷹の如く。

第２章第２０話

異世界召喚１６９日目【防衛戦】その１：

「良いか！これから傭兵達の指示に従って防御施設を作ってもらう。これの性能が我々の命綱となる！みんなその事を自覚し最善を尽くしてほしい！」

太陽が天空の真ん中で照り、雲ひとつない空はまるで亮真の勝利を約束しているかのように晴れ渡っていた。

「「「うぉぉぉぉぉぉ！」」」

亮真の言葉に答えるように無数の拳が天に突き上げられる。

彼の目の前には王女より預かった２０００の騎士とリオネが率いる傭兵達１００名が立ち並んでいた。

僅か３日で予定通りテーベ河の渡河に成功した亮真率いる先発隊は、テーベ河東の岸辺に防御施設を整えることになった。

これから４日のうちにテーベ河西岸に現れるであろうルピス王女率いる２万の本隊が無事に渡河出来るようにする為だ。

そして本隊到着まで自分達が生き残る為でもある。

「敵がこちらの行動を察知し我々を攻撃しようと向かってきているはずである！時間は限られている！だが向こうの攻撃前に有る程度の堀と柵を作る事が出来れば、如何（いか）に相手の兵数が３０倍で有ろうと精鋭である諸君らなら必ずや勝ち残れるはずである！」

「「「うぉぉぉぉぉぉ！」」」

亮真の言葉に再び雄叫びが上がる。

（ふぅ、とりあえず士気は問題無しだな。後は俺の指示通りにどこまで準備できるかだな。）

亮真の演説が終わり各小隊が持ち場へと散って行くと、彼の前に一人の男が立った。

「御子柴殿。それでは私は騎士５００を率いて偵察に出てきます。」

ミハイルの言葉に亮真は軽く頷いた。

全体の４分の１を偵察に裂くのはかなり痛いが、敵の動向を見過ごして奇襲を受けるよりははるかにましだ。

亮真はそう判断した。

「えぇ、繰り返しますが偵察だけです。敵と遭遇しても応戦せずに撤退してください。」

敵を発見してもらわなければ偵察の意味は無い。

だが、偵察の任務はあくまでも情報収集である。

敵と態々戦う必要はない。

「判っております。騎士としては敵に後ろを見せるのは気に入りませんが……これも作戦の内ですからな。」

ミハイルはいかにも口惜しいと言った表情で答えた。

尤もルピス王女から指揮権を得ている亮真の指示を無視するわけにもいかないので我慢するといった風である。

「敵に見つかっても損害を出したくないからこそ精鋭であるあなた

方にお願いするんです。今回の作戦の成否は貴方達に掛かっていると言っても過言じゃないんですよ？」

本来なら思慮の足りないミハイルには荷が重い役割だが、他に動かせる人間が居ない。
どうあってもミハイルに任せるしかないのだ。

「判っております。では！」

そういうとミハイルは踵を返した。
亮真はただミハイルの後ろ姿を眺めるしかなかった。
他に人材が居ないためどうしようもない人選だったが、亮真はこの判断を後に深く悔むことになる。

「いいか！訓練通りにやればいいんだ！落ち着いてやれ！」

「「「大地を司りし精霊よ。汝の加護を受けし我が求めに応じその姿を変えよ！」」」

ボルツの声に従い傭兵達が一斉に詠唱を開始する。

「「「大地陥没（アースシンキング）」」」

大地に干渉する低級の精霊法術。
詠唱終了と同時に手が大地へ叩きつけられると、詠唱者の前方１Ｍから大地が一斉に沈んでゆく。

「よぉし！良いだろう。１班の詠唱者は１５分の休息後再び穴を掘ってもらう。２班の詠唱者は術の効果範囲から外れた部分の処理を

してくれ！」

「どうだい？作業の進み具合は？」

工事の陣頭指揮をとるボルツに後ろから声をかけた者が居る。
日は西に傾き始めたところか。
ボルツ達が作業を始めまだ3時間ほどしか経ってはいない。
だが既に幅２０M深さ５Mの堀が亮真達の陣の前方にその姿を現し始めていた。
全長５００M程の堀を造る工事にしては異様なほどの早さである。

「あ！若！……そうですね、まぁ予定通りと言ったところですか。」

ボルツは視線を前に向けたままで答える。

「しかし……若は本当にすごいですね。こんな方法を思いつくなんて。」

ボルツの称賛は決して大げさではない。
大地（アース）において法術とは武器でしかなかった。
ただ戦争に勝つ為の道具。
剣や槍と同じ扱いだったのである。

「そう大したものではないさ。」

亮真はボルツの称賛を軽く受け流したが、実際のところ亮真のアイディアはこの世界の軍事と経済の両方にに大きな革命をもたらしたと言えよう。
相手に対しての直接的な攻撃手段としてしか使用されなかった法術を、それ以外の用途、特に建設に応用することで圧倒的な効率性を

実現した。
大地陥没（アースシンキング）という法術は、使用すると直径５Ｍ、深さ５Ｍの落とし穴が作られる。
だが所詮穴である。
使用方法としては敵の足元に発現させることで相手を落とすというのが一般的な使い方だが、術者のほとんどはこの術を実戦で使う事がない。
直径５Ｍと言うとそこそこ効果範囲が大きいように感じられるが、実戦ではほとんど役に立たない。
なぜなら相手はじっと一か所に留まっている訳ではないからだ。
動く相手の行動を見定めてその足元で術を発現させるのは難しい。
しかも深さが５Ｍと浅くは無いが、落ちた人間を確実に殺せるというほどの深さでもない。
土系統に限らずどの系統にも大地陥没（アースシンキング）より狙いやすく殺傷能力の高い法術はいくらでもある。
だが大地陥没（アースシンキング）を落とし穴ではなく堀として使えばどうだろうか？
一瞬で直径５Ｍ、深さ５Ｍの穴が術者の数だけ造られるのだ。

「いえ。若はご自分の価値を理解していらっしゃらない！」

従来の法術を評価する上での価値観である直接戦闘に使う法術としてみた時には、大地陥没（アースシンキング）は使えない術の一つでしかなかった。
だが直接相手を倒す事にこだわらなければ、大地陥没（アースシンキング）は全く別の可能性を秘めていたのだ。
その可能性を見つけ実現させたのが亮真で有る事を考えればボルツの称賛も当然と言えた。

「そうかねぇ？」

亮真は首をひねる。

現代人の亮真にとって、自分の発想が格別凄いとはどうしても思えなかった。

逆にこの程度の事をどうして今まで誰も気がつかないのかという思いの方が強い。

「そうですとも！」

ボルツが力強く頷くのを見て亮真は苦笑いをした。

「まぁ偵察の結果次第だけど、あまり時間は無いと思う。ボルツさん頼んだよ。」

「へい！お任せくだ……おい！そこキチンと距離を測って術を発動させないと意味が無いじゃないか！良いか！大地陥没（アースシンキング）で造った穴が連なるように調整するんだ！適当な事してるとブチ殺すぞ！……すいやせん、若。失礼しやした。」

亮真と話しながらでもキチンと作業現場の状況を監視していたらしい。

流石に歴戦の猛者である。

亮真は頼もしく思いながら話題を変えた。

堀の建設具合と共に亮真が此処に来た目的の一つだったからだ。

「ところでサーラは今どこに居る？」

「サーラ嬢ちゃんですかい？……あ！あそこでさ。若の言われたとおりにぴったりと張り付いてますぜ。」

ボルツの指差す方向で金色の髪が揺れ動いていた。

「とすると隣の黒髪の女が例のヤツか？」

「ヘイ。そのとおりでさ！」

亮真の視線がサーラの横で作業している黒髪の女へ突き刺さった。

「今のところサーラ嬢ちゃんがぴったりと張り付いてますからご安心くだせい！」

「あぁ。もしあれに裏を掻かれれば俺らはかなりヤバイことになるからな。」

「ヘイ。十分判ってまさぁ！」

「もし手に負えない状況になったら下手な欲を出さずに始末してくれ。」

亮真の言葉にボルツはやや驚きの表情を浮かべた。

アイツをうまく利用することも今回の作戦の中に組み込まれていたからだ。

ボルツの顔色を見て亮真は笑いながら言った。

「確かにアイツを利用するつもりで泳がせているけど、それが罠の可能性も有るからな。不味いと思ったらボルツさんの判断で良いんで始末してくれ。」

「判りやした。こっちの方はお任せくだせい！」

ボルツはそういって亮真へ頭を下げると再び作業の指揮に戻る。

「さてと、次はリオネの様子を見なくちゃな……」

そう呟くと亮真はその場から立ち去った。

「だいたい予定に沿って準備出来てるよ！……後はボルツの方の作業が終わり次第だね。」

リオネは素早く亮真の姿を見つけると手を振りながら大声で叫ぶ。
亮真は彼女の声に苦笑いし軽く手を振りながらやってきた。

「柵の準備は万端ってところか。」

「あぁ。材料の木材は森に入ればいくらでも手に入るしね。」

リオネは彼女の後に山と重ねられた柵へ視線を向けた。
既に切り出された木は一定の太さに加工され、縄を使って組み合わされている。
後はボルツの堀造りが終了すれば直ぐに立てるだけとなっていた。

「橋の制作は？」

「それはこれから準備する事になってるよ。今は材料の木を切り出してるところさ。」

森の方から続々と男達が木を担いで陣へと戻ってきている。
亮真の指示を守って法術を使って身体強化をしているのだろう。

普通ならとても一人では持ち運べないような太い木材を軽々と肩に担いで運んでいる。
亮真は頷いた。
「騎兵が渡れる程度の耐久性を保ってくれよ？」
「大丈夫！わかってるよ。うちの傭兵の中から大工の経験が有る奴に指揮をとらせて造る予定さ。何しろ今回の作戦の重要な役割だからね！」
リオネはそういうと片目を瞑って見せた。
「あぁ任せた。」
亮真はリオネのにそういうと自分の天幕へと戻っていった。
彼には他に幾らでも仕事が有るのだから。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

亮真達が必死で防衛拠点の敷設に携わっているころ、ミハイルは陣地からおよそ５Ｋｍ　の高台に居た。
既に彼が陣を出て３時間が過ぎようとしているのにまだ５Ｋｍしか進んでいないというのは遅いと感じるかもしれないがそうではない。
彼の任務が偵察である以上、敵に発見されないよう慎重に移動するのが当然なのだ。
「ふぅ……今のところ敵兵は無しか？」

「は！」

眼下には一面の草原であり、仮にイラクリオンより兵が放たれても、確実のその動向を確認する事が出来た。
ミハイルは敵兵が居ない事を確認すると足元に転がる手ごろな石に腰を据えた。

（この前哨戦で今後の流れが決まる……か。だがあいつのあの顔……俺を侮っているのか？）

ミハイルの脳裏から亮真の憂いに満ちた表情が消えない。
亮真とミハイルが出会ってから既に3月近くが過ぎている。
表面上は亮真と打ち解けてきて居るように見せてはいたが、実際のところミハイルは不満でどうしようもなかった。
暗殺の任務に失敗し自分の部下のほとんどが亮真の策によって殺された事も原因ではあるが、何よりルピス王女の信頼が古参であるはずの自分よりもどこの馬の骨とも判らない流れ者の傭兵である亮真に向けられていると感じているからだ。

（そもそもあいつは騎士を何だと思っているんだ！……騎士は戦う戦士だ！農民の様に大工仕事などさせおって！）

強烈な騎士の誇りを持つミハイルにとって亮真の今回の作戦はとても我慢の出来るものではなかった。
確かに効率は良いだろう。
それはミハイル自身も認めなくはない。
だがだからと言って騎士が法術を使って木を切り堀を掘るなどとても納得できる事ではなかった。
実際のところそういった意識を持つローゼリアの騎士は多い。
殆ど全てと言ってもよい。

それでも彼らが亮真の指示に従ったのはルピス王女より指揮権を託されたという事実と、圧倒的兵力差を覆す良い案を他に思いつかなかったの過ぎない。
ミハイルが偵察任務を志願したのはまだ偵察任務の方が同じ下等な任務で有っても大工仕事よりましだと判断したという理由からだった。

彼の災難は、彼自身が亮真の方針やアイディアの効果を理解し、ルピス王女の信頼が亮真に移ってしまった事を理解するだけの能力を持っている事だろう。
そして彼の強烈な騎士の誇りは彼の心に強い亮真への嫉妬を生み出す。

彼自身のルピス王女への忠誠は疑いようがない。
メルティナに比肩するほどである。
だが現状ルピス王女の役に立っているのは忠誠心の厚い彼ではない。
それでもまだ同じ騎士ならば彼の誇り（プライド）は保たれただろう。
だが現実は違う。
そして彼自身も自分に亮真の真似をする事が出来ない事を理解していた。
だからこそミハイルは妬むのだ。
許せないのだ。
自己に正当性がない事を理解するがゆえに彼の心は闇に落ちる。

「ミハイル様！前方に土煙です。おそらく敵の偵察隊ではないかと！」

思案に耽るミハイルの耳に部下の叫びが響いた。

「何！敵だと！？」

「は！兵数はまだ確認出来ませんがそれ程多くはない模様です！」

「なんだその報告は！キチンと確認せんか！」

ミハイルの怒鳴り声を受け部下は敵の確認へと向かう。

（敵兵は多くない？……まずは敵の数を確認した上で御子柴殿へ……）

ミハイルはこの時はまだ冷静に自分の任務の重要性を意識していた。
敵の偵察と自兵の損耗を最少に保つことである。
特に自兵の損耗に関しては亮真の口から直接しつこいほどに注意を受けていた。
現状では僅か２０００しかいないのである。
敵の数を減らす事より、自兵の損耗を避ける方が重要なのは当然の事だ。
だがそんな意識は再び駆け寄ってきた部下の報告げ吹き飛ぶ事になる。

「ミハイル様！確認いたしました！敵兵およそ１００！」

「１００だと！？間違いないのか！？」

ミハイルの顔に笑みが浮かぶ。

（１００だと……こちらの5分の1ではないか……周囲には他に敵兵の影は見当たらなかった……おそらく敵の偵察部隊だろう……テーベ河を渡河され慌てて偵察隊を送ってきたに違いない……）

「ミハイル様！直ちに本陣へ帰還のご命令を！」

傍らに侍る副官がミハイルへ進言してきた。
確かに彼の言う事は間違ってはいない。
だがそれでは何の功績にもならない。
そんな思いがミハイルの脳裏に浮かぶ。

（相手は所詮偵察隊。こちらは騎士５００。勝負するまでもない。
だがここで少しでも敵兵を減らせば後々我らが有利になる……）

この段階でミハイルの心には自分の功績しかなかった。
彼は戦闘でしか手柄をあげられないのだから。
ミハイルは腰かけた石から素早く立ち上がると大声で叫んだ。
彼の顔には戦場に出る兵士特有の殺気が浮かんでいる。

「いや！総員戦闘準備に掛かれ！あの程度の敵、一撃で粉砕してくれる！」

戦場の空気を受けミハイルの心は高揚した。
そして高揚した心は彼の功名心と混ざり合って彼の判断を狂わせる。
彼は忘れてしまった。
自分の任務とその重要性を。
そして彼の判断は亮真を苦境へと追いやる事になる。

第２章第２０話（後書き）

いつも拙い本作品を読んでくださりありがとうございます。
感想に返事はしておりませんが、いつも読ませていただいております。
本作品を定期的に更新する事で返事とさせてください。
今後ともよろしくお願いいたします。

第2章第21話

異世界召喚169日目【防衛戦】その2：

「良いか！手加減など無用！一気に敵を踏み潰す！ローゼリア騎士の力を今こそ見せるのだ！」

ミハイルの命を受け、高台に500名の騎士が臨戦態勢で整列している。

彼の激励を聞き騎士たちの間に静かな緊張が漲った。

相手の数は100名ほどと兵力では余裕があるものの、亮真の指示を完全に無視することにしたミハイルとしては決して敗れるわけにはいかなかった。

抜け駆けも作戦無視も結果的に勝てば許された。

だが裏返せばそれは負ける事が許されないということだ。

指揮官の命令を無視して負けた人間を庇ってくれるものなど何処の世界にも居(お)りはしない。

ルピス王女ですら助命の沙汰を下すことは出来ないだろう。

（私は……負けぬ！）

ミハイルの脳裏には勝利しかなかった。

だが勝利を渇望する心は時として真実を覆い隠す。

「突撃ぃぃぃぃ！」

「「「うぉぉぉぉぉ！」」」

ミハイルの剣が敵の偵察隊を指すと同時に、５００名の騎士は砂塵を巻き上げながら一気に高台を駆け下りた。

――

「なんだと!?もう一度言え!」

怒号が陣営に響く。

亮真は目の前に横たわる名も知らぬ騎士の報告が信じられなかった。

イヤ信じたくないというのが正解だろうか。

「は……は…い。ミ…ハイル…様…以…下偵…察隊は…全…滅い…たし…まし…た。」

裂傷から血が滴り落ちて、彼の足元に小さな水溜りを造っている。

彼の言葉がところどころ不明瞭なのは、彼が負った傷の幾つかが内臓を傷つけ喉に血が絡まるからだろう。

マルフィスト姉妹によって施され続けている回復術も、彼の死をほんの数分先送りにするだけの効果しかない事は誰の目にも明らかだった。

常人で有れば既に死亡しているであろう重傷を負いながら、この男は強烈な意思の力によってその命の火を保っているのだ。

彼の眼に宿る光がそれを証明している。

「ミハイルは……どうした。死んだのか?」

そんな命を賭して報告をしている人間を怒鳴りつけるという失態を

犯した亮真は、必死で気持ちを落ち着けると出来るだけ平静を保ちながら尋ねた。

既に彼は死んでいるのだ。
後は魂が肉体から離れるのを待つだけの体。
だがそんな彼が燃え尽きる最後の命の火を使って伝えようとしている事が有るのだ。
男なら彼の意思を尊重し、彼の持つ情報を出来るだけ受け取るべきだ。
それが彼への最高の敬意なのだから。

「ミハ…イル…様はケ…イルを追…って敵軍へ…突撃さ…れました。」

「ケイル？」

亮真の初めて聞く名前である。
訝しげに亮真はその名前を繰り返した。

「は…いミ…ハイル…様は初…め冷…静に…指揮をさ…れ…ておりま…した…あ…の裏切…り者…であるケ…イル…イルーニア…が…敵部隊の指…揮官だ…と判明…する…まで…は」

亮真が辺りを見回すと、その場に居た騎士達の顔色が変わっていた。
ケイル・イルーニアという名に心当たりが有るのだろう。
だが今それを彼らから聞いている暇は無い。

「そうか……其の裏切り者を倒すためにミハイルは軍を突進させたんだな？」

亮真の言葉に騎士は精一杯の力を振り絞って頷いた。
亮真の脳裏にその場の情景がはっきりと浮かんできた。

（おそらく其のケイルっての言うのが指揮を取っていると判るまで、ミハイルは冷静だったに違いない…だが何かの拍子に敵の指揮官が裏切り者だったと判った……ミハイルの性格を考えれば抑えきれないのも無理もないか……）

亮真とてミハイルが焦りを感じている事は理解していた。
だから彼に偵察隊を指揮させることに不安を感じていたのだ。
しかし同時に彼の能力を信用していた。
功を焦ったにしろ引き際を知っていると思っていた。
だからこそミハイルが隊を全滅させるまで引かなかった事が信じられなかったのだ。
だが裏切り者を目の前にしたのならばミハイルの理性が吹き飛んだのも理解できる。
騎士は裏切りを一番憎むものだから。

「それで？敵は今どこまで接近している？兵数はどれくらいだ？」

亮真は様々な思いを心の奥に追いやると今一番聞かなければならない質問へと集中する。
今大切なのは敵がこの防衛施設にいつ頃やってくるのか。
そしてそれがどれくらいの兵数なのかを確認することだ。
ただでさえ兵数の劣る亮真達は偵察隊の全滅によりさらに劣勢へと追いやられている。
ここで敵から奇襲を喰らえば堀や柵といった防御施設を準備しているとはいえ、本当に全滅しかねないのだ。

「兵数…はおよそ5…千…後続…の兵…数は不…明…およ…そ1…

5分…程で先…方隊が…ここへ到…着する…か…と…」

亮真の顔色が変わった。

「リオネ！ボルツ！各々兵４００ずつを指揮して北と南の守備に！中央は俺とローラが６００で。サーラ！お前は残りを指揮して例の準備した後に後方で待機！後は誰か偵察隊を出して敵の現在位置を確認！急げ！」

亮真はサッと立ち上がるとリオネ達へ守備の持ち場を割り振る。リオネ達も事前にある程度の人数や持ち場を割り当てられていたので戸惑いは無い。
彼らは頷くと直ぐに天幕を出て行こうとした。

「み…御子…柴…様…」

「なんだ？まだ何かあるのか？」

「も……申しわけ…ございません…貴方様の…ご指示…を無…視して…しまい…ました。」

彼の言葉を聞いた亮真はローラ達へ頷き、彼女達を天幕の外へと出すと自分は彼の横に膝まずいた。
敵の襲来に備えるための時間は惜しい。
だが命を賭して戻ってきた騎士の最後の言葉である。
亮真はただ黙って彼の言葉を聞くしかなかった。

「良い。判っている。」

亮真はただ深く頷いた。

彼はミハイルの指揮に従ったにすぎない。
其の彼を死に際に責めることなど出来るわけがなかった。

亮真は血に濡れた彼の体を抱きかかえた。
そうしなければ聞こえないほど彼の言葉はか細く弱々しくなっていた。

「御子…柴様…ル…ピス殿下を…必…ずや…ローゼリアの王に…」

それだけ言うと彼の体から力が抜けた。
伝えたい思いはまだ多く有っただろうが、彼の命の火は亮真へ謝罪の言葉を伝えるだけで消えかかった。
だからこそ彼は最後の力を振り絞って亮真へ託したのだ。
彼が尤も強く望む願いを。

「馬鹿が……」

名も知れない騎士の願いを聞いた亮真の口から憐みとも嘲笑ともとれる言葉が漏れた。

「御子柴殿！前方１ｋｍ先に敵影！数およそ７０００！」

先ほど受けた報告より２０００も多い。

（チィ。援軍が合流しやがったか！）

亮真は舌打ちを必死で隠した。
劣勢である今、指揮官が動揺を露わにすれば命令を受ける側にもその動揺は広がってしまう。
それでは勝てる戦も勝てなくなる。

「判った！リオネ・ボルツの両名には指示どうりに防衛してくれと伝えろ！中央は俺が指揮する！」

亮真の指示を受け伝令がリオネ達の元へと走り去る。

亮真は頭から骸になった騎士の言葉を追いだす。

（ルピス殿下を国王にか……）

今そんな余計な事を意識すれば自分の命を失いかねない。

戦場に必要なのは生きようとする欲と強固な殺意。

それだけだ。

（まずは生き残らなきゃな……全てはその後だ！）

亮真は槍を掴むと己の持ち場へと駆けだした。

己の未来を掴むために。

「どういうことだ！なぜこんな短時間でこれほど強固な陣地を築ける！」

陽が西の空から消えようとしている。

陽が落ちてからの戦は困難であることを考えれば、攻撃を掛けるにはギリギリの時間帯である。

本来なら偵察隊５００を全滅させた勢いをそのまま本体にぶつけるのが常道である。

何も躊躇する必要はない。

だが夕日に照らされた目の前の陣を見たケイルは突撃命令を下す事

を躊躇った。

（どうなっている？…これではゲルハルト閣下のご命令を遂行出来ないではないか！）

「しかしケイル様。ゲルハルト閣下の御命令を無視するわけにも…」

副官の賢しらな進言がケイルの鼻に付く。

自分が心に思った事を他人に言葉にされると腹が立つものだ。

「判っている！」

ケイルの怒声を受け副官は首を竦ませた。

（馬鹿が！この防御施設を見ても何も思わんのか！）

彼らの目の前には幅２０ｍは在ろうかという空堀が横たわっていた。

先ほど受けた偵察隊の知らせでは、敵陣をぐるりと三日月型に覆っている。

全長は１Ｋｍ程もあるだろうか。

深さもそれなりである。

そう簡単に突破する事は出来そうにない。

（しかし……僅か3～4時間だぞ？一体どういう手品を使ったのだ！）

ケイルの驚きも当然と言えた。

土木機器の無いこの世界では、建設は人力によって行われてきた。

そしてそれらを担うのは農民達である。

つまり人数が必要なのだ。

（近隣から農民を徴発したという話は聞いておらん！……なら王都より人を連れて来たのか？……いや有り得ん。そんな事をすれば行軍速度は遅くなる……ならどうやった？２０００程の兵力のはずだ。全員で作業を行ったとしてもこのスピードは有り得ん……）

堀の淵には木材を組み合わせて造られた柵がずらりと並んでいる。それらの作成時間だって必要なのだ。

とても今日の昼に部隊が到着してから用意したとは思えないほど強固な防備である。

（クッ！ミハイルなど放っておいてサッさと本陣を攻めるべきだったか？）

ケイルの脳裏に先ほど倒したミハイルの顔が浮かんだ。

（糞ったれが！何処までも俺の邪魔をしやがる！）

ケイルは湧き上がる怒りを抑えきれなかった。

逆恨みで有る事は十分に理解していたが、腹立たしいものは腹立たしい。

「ケイル様……いかがされますか？」

副官が再び訪ねた。

ケイルの苛立ちを理解しているのだろう。

その声は恐る恐るといった感じだ。

「突撃しかあるまい！」

「ハッ！」

実際ケイルに取れる選択肢は他にはないのだ。
周辺住民の通報によって相手側の兵数が少ない事を知ったケイル自身が、自らゲルハルト公へ願い出た出陣である。
出陣を許可されるにあたり、主人であるゲルハルト公から敵の壊滅を厳しく命じられていた。
防御施設が完成していて手も足も出ませんでしたでは済まないのである。

（ミハイルの偵察部隊がおよそ５００程。それを全滅させた今なら、敵の数は１４００～１５００。それに対して我らは７０００！およそ5倍弱。負ける要素などありはしない。急ごしらえの堀など何の役にも立たん事を証明してくれる！）

ケイルの心は次第に落ち着いてきた。
いや、落ち着いたフリをした。
予想外に強固な防衛準備をされたとはいえ兵数では圧倒的にケイル側が有利なのである。

（絶対に負けられん！…いや…勝つ！）

ルピス王女の側近でありながらゲルハルト公に寝返ったケイルに退路は存在しない。
彼もまた貴族派の中で生き残る為には、どうしても功績が必要なのだ。
だが彼は知らなかった。
彼の今の心理状態は、先ほど自らが打ち破ったミハイルの心と酷似していた事を。

「ケイル様！準備が整いました！」
副官の言葉を聴きケイルは大きく頷いた。
ケイルは腰の剣を引き抜くと敵陣を指示して叫ぶ。
「突撃いいいい！」
旗手はケイルの指示に従い全軍突撃の旗を高々と掲げる。
「「「うぉぉぉぉぉ！」」」
７０００の兵士達が鬨の声を上げながら空堀へと突っ込んで行く。
彼らは知らない。
彼らの行く手に仕組まれた死の罠の存在を。
ここに今、ローゼリア王国の未来を掛けた戦が幕を開けたのである。

第２章第２２話

異世界召喚１６９日目【防衛戦】その３：

「良いかい！外すんじゃないよ！敵はこっちの５倍だ！目を瞑ってたって当たるんだからね！」

リオネの怒声に曝されながら騎士達は配布された弓に矢を番え強く引き絞った。

「良いかい！まだだよ……まだ！」

リオネの受け持つ南側の門に敵兵は雪崩の如く押し寄せて来た。
彼らは獣のごとく鬨の声を張り上げ、顔は真っ赤に充血し全身からは殺気が迸る。
それは飢えた狼が獲物を前に自制が効かないのと同じような状況だった。
彼らは正規兵ではない。
ゲルハルト公や其の仲間の領地から徴兵された農民兵である。
当然軍事訓練など受けた事は無いし、装備も槍を一本と粗末な皮の鎧を渡されるだけ。
兜や盾を貸し与えられる事は無い。
それほどまでに彼らの命は貴族にとって無価値なのだ。
だがだからこそ彼らは今、猛り狂っていた。
目の前に居る２０００の敵がお宝であると感じて。

この世界の徴兵制度は苛酷である。
彼らは領主の命令一つでその命を危険にさらす。
しかも領主達から彼らへ報酬が支払われる事は一切ない。

それは一種の税と言う扱いだからだろうか。
だがそんな彼らにも救いはある。
敵から略奪した物は自分達の物になるという決まりだ。
敵兵を殺せば其の相手の持つ剣や槍、鎧に幾ばくかの現金。
そう言った物が全て自分の物になるのだ。
侵略戦争となればそれはさらに旨味をもたらす。
女を犯し、家を焼き財産を奪う。
男は労働奴隷として、女は性奴隷として売り払う。
命を代償として大きな利益を得られるかもしれない。
だからこそ、この世界の農民は貴族を憎み嫌だ嫌だと拒絶しながらも戦場へと赴くのだ。
より弱い者を踏みつけ、自らの苦しい生活を少しでも楽にするために。

騎士の装備は高価である。
鎧にしろ剣にしろ馬にしろ。
騎士としての誇りの全てを自らの武具に注ぎ込むのだから当然と言える。
勿論騎士をただの農民が殺すのは非常に難しい。
程度の差はあれど全員が法術を使う騎士の戦闘能力は農民兵の3倍以上。
騎士とは人の形をした猛獣に等しい。
だが1対1では勝機の無い戦いも戦場と言う特殊な環境では大きく変わる。
一人で勝てないなら人数を増やせば良い。
象を喰い殺す蟻の群れのように。

「良いか！敵から奪ったものはすべてお前達の物だ！ゲルハルト公爵様の名において保障してやる！進め進め～～～！」

「「「うぉぉぉぉぉ！」」」

後方から響く檄に呼応して前線が大きく前へと前進してきた。
今彼らの目には亮真達が宝の山に見えているのだろう。
それは自分達の人数が圧倒的に多数であるという自信である。

彼らは何の躊躇もなく空堀へと足を踏み入れた。
自らの数が敵に勝るという慢心が彼らの恐怖心を麻痺させていたから。
彼らの先頭が柵まで後５ｍ余りまで近寄った時それは響いた。

「今だ！第一陣放て～～～～！」

リオネの怒声を受け騎士達は引き絞った矢を放つ。

ヒュヒュヒュヒュ

風切り音が響くと敵の先頭が数人矢に貫かれた。

「「ぎゃぁｌ」」

「糞！矢が！」

矢を受けた農民兵たちの恨みの声が響く。
先頭を進んでいた何人かが矢に射抜かれると、それまで忘れていた恐怖心が彼らの中に蘇る。
そしてそれは彼らの歩みを鈍らせた。

「何をしている！進め進め～！敵兵は僅かなのだぞ！一気に攻め落とせ！金目の物が欲しくは無いのか！さぁ進むのだ！」

後方から敵の指揮官が叫ぶ。
敏感に進軍速度が鈍った事を感じたのだろう。
再び農民達の心に欲という名の鞭を振るう。
農民の生命を考えるのなら、矢を避ける為の盾を支給するべきなのだが、彼らにそんな発想は無い。
彼ら貴族にとって農民兵こそが盾なのだ。
極端な話、農民がどれ程死のうと貴族である彼らは全く気にしない。
農民達の死体を踏みつけ、その上に勝利の旗を立てるのだから。

「第二陣！放て～！」

再びリオネの指揮の下、放たれた矢が農民兵を貫いた。

「くっ！何を怯んで居るか！敵は少数！矢とて無限にあるわけではあるまい！数はこちらが上なのだ！さぁ進め～！一番最初に柵まで辿り着いた者には特別に報奨金を出してやる！さぁ進むのだ！」

敵の指揮官の狙いははっきりとしている。
数の有利を生かして接近しての消耗戦を望んでいるのだ。
彼らは農民兵が５人死んでも騎士１人を殺す事が出来れば帳尻は合う。
逆に亮真達にとっては、ある程度の距離を保ったまま戦えば基本性能が勝る騎士に有利となる。
乱戦に持ち込みたい貴族側、ある程度の距離を保って戦いたい亮真達。
だがやはり数の暴力を防ぐのは難しい。
最初は柵から５ｍ程の所までで射抜いた農民兵達は少しずつ前進を重ねた。
仲間の屍を踏み越え。

時には仲間の死体を矢の盾として。
３m、２m、１m、リオネの指揮の下で射掛けられる矢の雨に耐えながら彼らは前進する。

「着いた！俺が一番乗りだ！」

一人の農民兵がついに柵まで辿り着くと叫ぶ。
珍しくケチな貴族が報奨金を出すと宣言したのだ。
其の金は高い税金にあえぐ自分達の生活を少しは癒してくれるに違いない。
だからこそ此処は盛大にアピールをしなければならない。
自分が一番乗りを果たしたのだと。
だがその代償は大きかった。
そう彼の命だ。

「第三陣前へ！」

リオネの指示で弓隊が後方へ下がると、槍と手にし鋼鉄の鎧兜で身を固めた騎士達が入れ替わりに前へ出る。

「突き出せぇぇ！」

リオネの号令の下柵の隙間から一斉に槍が前へと突き出される。
狙うのは農民兵達の顔面。

一番乗りを果たしたと叫んだ男は左目に槍を突き込まれる。

「ぎゃぁぁっ！」

獣の叫びにも似た声が男の喉から迸った。

「槍引け！」

突き出された槍が一斉に柵の内側へと吸い込まれる。

「突き出せぇぇ！」

再び柵の間から無数の槍が突き出され、愚かな農民兵達の命を刈り取った。

「糞！兄貴！ロイド！…糞！よくも兄貴を！殺してやる！」

「目が！俺の目が！」

「ひぃぃぃぃ！やってられるか！…俺は嫌だ！死にたくねぇ！」

戦場に怒号と嘆きの声が響き渡る。

前へ出ようとする者と槍から逃れるために下がろうとする者。

両者のぶつかり合いは、もともと陣形などと言う高尚な技術を持たない兵達の足を止めさせた。

そして彼らの隙を逃すほどリオネは甘くはない。

長年傭兵として戦場を駆け抜けて来た人間の嗅覚は鋭かった。

「第一陣第二陣！構え！放て～～～！」

彼女は槍隊を後ろへ下げると、再び弓隊を前列に出し乱射を始めた。

「良いかい！撃って撃って撃ちまくるんだ！遠慮なんてするんじゃないよ！矢は腐るほど有るんだ！思いっきり撃ちまくるんだよ！」

リオネの激を受け、騎士達の放つ矢は農民兵へ雨のように降り注ぐ。
「くっ！埒が明かぬか……仕方ない！。伝令！ケイル様へ南側は敵の抵抗が激しく一時撤退の許可をいただきたいと伝えよ！さもなくば増援部隊を回していただきたいと。」

一気に南門を突破しようとした貴族は、一度仕切り直しをする為に後退の命令をケイルへ申請する。
実戦経験の無い彼もさすがにこのまま力押しで攻めても無駄な事を理解したのだろう。

「糞！こちらは敵の5倍だぞ！何故こんなに手間取るのだ！」

バキッ

彼は苛立ちのあまり手にした指揮棒を圧し折った。

――
「撤退だと！？ふざけた事をぬかすな！我らは圧倒的に優勢なのだ！何故撤退しなければならん！」

伝令の言葉を聞きケイルは顔を真っ赤にして怒鳴りつけた。

「し…しかし…南門の抵抗は激しくとてもこのまま攻め落とせるとは…もしこのまま攻めよというご指示でしたらせめて増援を…」

例えどんなに怒鳴られようと伝令は引かなかった。
それが保身なのか忠義心からなのかは別にして彼は職務に忠実であ

った。
だがだからこそ彼の言葉はケイルの心を苛立たせる。

「ふざけるな！」

ドカッ！

「貴様！私にはゲルハルト様の命を遂行する義務が有るのだ！」

ケイルは怒りのあまり伝令の顔に拳を叩きつけると、這い蹲る彼の頭に向かって怒鳴る。
普段の彼なら決してこのような事はしなかった。
冷静な判断力こそ彼の持ち味だったはずなのだから。
だが今は其の持ち味は見る影もない。
先ほど南側だけではなく北側を攻めている部隊からも一時撤退か増援を求める伝令が来たばかりなのだ。
だが中央を攻めているケイル自身も、亮真の守りを突破出来ないでいる。
とても増援部隊など回せるはずもない。
それどころか中央部へ増援を寄こせと命令したいくらいなのだ。

「そちらに送る援軍は無い！与えられた兵力で敵の守備を突破するのだ！……いやそもそも5倍もの兵力を持ってして何故敵陣を突破出来ない？手緩いのではないかと伝えるのだ！」

実際のところケイルの言葉はイチャモンに他ならないのだが伝令は、ケイルの剣幕に伝令は抗弁する言葉を持たなかった。
下手な事を言えば斬り殺されかねない。
そんな狂気をケイルは身に纏いつつあった。

慌てて馬を駆る伝令の背を見ながらケイルは心の中で毒づいた。

（無能な奴らめ！俺の脚を引っ張りやがって！）

見かけだおしと思われた堀も柵も頑強に自分達の侵攻を阻む。
ミハイル以下５００の兵を全滅させられ士気が落ちていると判断したのだがそれもない。
兵数が圧倒的に多いという有利さも今の状況では全く意味がないのだ。

（何故だ！何故これほど強固な守りが出来る……何故切り崩せない！）

ケイルはどうしてもこの戦に負けられない。
戦の指揮能力を買われて王女派から貴族派へ寝返った以上、戦で負けるわけにはいかなかった。
いやそれどころか苦戦してもダメだ。
なぜなら兵数の上では圧倒的に自分達が有利だからだ。
有利なはずの自分が苦戦して勝利すれば貴族派の誰もがケイルを侮る。
ケイルの力を認めているゲルハルト公ですらケイルの実力を疑い出す。
そして一度張られた無能のレッテルは容易には剥がせない。
それは王女派を裏切ったケイルにとって死刑宣告に等しい。

（糞！糞！どいつもこいつも俺を馬鹿にしやがって！）

ケイルは自分が苦戦しているという今の状況を認めたくなかった。
周りが自分の足を引っ張る為にワザと手を抜いているのだと思いたかった。

なまじミハイルが率いる偵察部隊を鮮やかに撃破している為、なおさら自分の能力が相手の指揮官より劣っているのだと認めたく無かった。

「私が前線へ出る！」

ケイルの言葉に副官達は顔色を変えた。

総指揮官であるケイルが前線に出るという事は、今まで後方に温存していた騎士を前線に投入すると言うことである。

今回ケイルが率いている兵の割合は騎士が２０００農民兵が５０００である。

ただしこの騎士は決して軽々しく消耗してよい戦力ではない。

騎士派に対抗するためにゲルハルト公が密かに揃えた切り札なのである。

ゲルハルト公爵はホドラム将軍を嫌ってはいるが騎士の能力を不当に評価した事は無い。

法術を使う事が出来る人間だけで構成された騎士は強力な戦力となる。

それはゲルハルト公自身も法術を使う為よく理解している。

だからこそゲルハルト公は、国王と国境を警備する為に４大公にのみ持つ事が許されている騎士団を隠れて集めたのだ。

老練な傭兵、他国から追放された騎士、罪を犯して称号をはく奪されたローゼリアの騎士。

そう言った者たちを高額の報酬で自らの騎士団に組み入れたのである。

その総数６０００名。

ケイルに与えられたのはその中の２０００である。

彼はその重要性は身に十分に理解していた。

「お待ちください！まだ早いのでは？」

副官達は顔色を変えてケイルを止めた。

当初の予定では農民兵に門を突破させた後に騎士団を突入させて相手を一気に殲滅するつもりだったからだ。

「黙れ！農民などに敵陣を突破させようとした私が甘かったのだ！……なぁに敵は農民を追い払うので消耗しているはず。今なら騎士の突撃を防げるはずもない！」

だがケイルは副官の進言を撥ねつけた。

そして今こそが勝機なのだと訴える。

彼のこの発言はあくまでも彼の願望である。

だが副官達の心に彼のこの言葉が毒の様にしみ込んだ。

彼らもまた自分達が置かれている状況をよく理解していたからだ。

ケイルの補佐が役目である以上、ケイルの任務失敗は副官達の失敗でもあるのだ。

そしてゲルハルト公は無能な人間をそのまま放置するほど甘い人間ではない。

降格や済めばまだ良い。

負け方によっては死罪すらあり得る。

「判りました！ですがそれならば南北両部隊にも全軍突撃の伝令を出しましょう。3か所同時に攻めかかればあの程度の堀も柵も問題にはなりますまい。」

副官の一人がケイルの言葉に追従すると後は誰も反対する人間はいなかった。

「うむ！直ちに伝令を出せ！陽が沈む前に終わらせるのだ！」

陽が沈むまで残り３０分程であろうか。
夜戦の用意をしていない以上、陽が落ちれば後は辺りは闇夜となる。
だが敵陣に雪崩込んでしまえば後は放火することで光源を確保する事が出来る。
そう言った計算の下でケイルは全軍突撃の指示を出した。

貴族派、王女派の戦は初日から双方が引くに引けない総力戦へとその姿を変える。
どちらが勝つか。
この初戦を制した側が大きく有利に傾くのは誰の目にも明らかだった。

第２章第２２話（後書き）

いつもウォルテニア戦【改定版】をご覧下さりありがとうございます。
皆さまのおかげで本作品の総合評価も６０００を超え【小説家になろう】サイト上でも５７位と高い評価をいただいております。
これも拙い作品ながら読んでくださる皆様のおかげだと感謝しております。
今後とも頑張って更新していきますのでどうぞよろしくお願いいたします。

第2章第23話

異世界召喚１６９日目【防衛戦】その４：

「御子柴様！敵陣に動きが！」

中央部の指揮を執る亮真に騎士の一人が注進してきた。

「うん？……兵を引くと言う訳ではなさそうだな……敵の指揮官め……一気にケリをつけるつもりか？」

亮真の目が敵陣の動きを素早く察知する。

「敵本陣の周りが慌ただしくなってきていますね……」

「あぁ、どうやら今日中にケリを付けたいみたいだな……何を焦っているんだか……」

亮真はケイルと言う人間を知らない。

当然ケイルがゲルハルト公に自ら進んで出陣を願い出た事も知らない。

だが彼の用兵から何かに焦りを感じている事だけは判る。

（門の有る南北と中央の3か所は空堀を渡りやすくしているとはいえ、何の準備もしていない部隊が超えられるはずもない。それが判らない程に愚かなのか？……いやそうじゃない。たぶんこっちの防御を甘く見たんだ。数で威圧すればこちらの心が折れると踏んだ。だから強引に攻めて来た……だがなら何故兵を引かない？……幾ら農民の命が軽いからと言って無駄にするとは思えないが……）

幾ら人の命の軽い世界とはいえ、農民が減れば税収にも影響を及ぼす。
確かに大事にはしないだろうが、むやみに消費するとは思えない。
相応の理由がなければ。

（何を焦っている？こちらの増援の到着か？いや……向こうだって行軍に時間がかかることは判っている筈だ……となれば）

「おい！ケイルってのを知っているヤツはいるか！？」

「は！私はよく存じております！」

亮真の声を聞き、そばにいた騎士の一人が手を上げた。

「どんな性格だ？」

「そうですなぁ……非常に利己的で狡猾で腰抜けの卑怯者で……」

亮真の疑問に其の騎士はケイルを吐き捨てるかのごとく罵倒することで答えた。
まぁルピス王女を裏切ったのなら、王女に忠誠を誓う騎士からは蛇蝎のごとく嫌われるだろう。

（どうもこいつ等の言い方は偏った評価をするんだよなぁ……）

この辺も亮真は不満であった。
ケイルを嫌うのはいい。
だが其の能力を正当に評価できなければ戦には勝てない。
好きな人間だから彼は強い。

嫌いなヤツだからアイツは弱い。
個人の好き嫌いと其の人間の能力はまったく無関係である。
だがローゼリアの騎士はその辺の分別が著しく劣っていた。
つまり未成熟な子供（ガキ）なのだ。

利己的というのはおそらくリスクとメリットを量ることが出来るということだ。
狡猾というのは思慮深いということだろう。
臆病者という評価も視点を変えれば慎重な人間ということである。
悪意を持ってみるかどうかで人物の評価はガラリと変わる。

（だが……どういうことだ？それだと完全に別人ということになる……そのケイルってのが指揮を執っているんじゃないのか？）

亮真は騎士の評価と目の前の状況を比較するとどうしてもケイルが指揮しているとは思えなかった。
そう、次の言葉を聞くまでは。

「アイツはプライドが高く傲慢で大口を叩くヤツでした！」

「？プライドが高くて大口を叩く？……ちなみにどんな大口を叩いたか内容を知ってるか？」

「は！あれは今から４年ほど前でしょうか。当時ローゼリア王国で天覧武術大会が開催されまして……」

この騎士の言葉を要約するとこうなる。
４年前の武術大会で当時優勝候補といわれていたミハイルを１分で破って見せると豪語した挙句、逆に第一回戦でぶつかった際にたった一太刀で剣を弾き飛ばされミハイルに負けたらしい。

なんでも酒場でローゼリア王国一の騎士は誰かという話題から出た大言壮語らしいが……

「私もその場に居ましたので間違いありません。」

「ちなみにケイルの腕前ってのは公平に見てどうなんだい？お話にならないほど低いのか？」

問題はその大言壮語を吐くに値するだけの能力を持っていたかどうかである。

勝負事は運不運も影響する不確定なものである。

だからケイルが負けた事が直ぐに彼の能力を証明はしない。

極端な話、ミハイルよりは弱くてもケイルが国内二位の実力の持ち主なら彼の言葉は愚か者の寝言ではなくなる。

亮真の言葉を聞いて騎士は顔を歪ませた。

つまり言いたくないほど良い腕だと言うことである。

（成る程……ケイルは少なくとも馬鹿じゃない……ミハイルに負けた事でこいつらはケイルを侮っているらしいがローゼリア王国一を目指しても恥ずかしくない実力はあるって事だ。）

此処まで考えた亮真は気がついた。

（そうか！自分に自信があるケイルはゲルハルトに調子の良い事を言ったんだ。私に任せてくれれば敵軍など直ぐに蹴散らして見せますとか何とか……それなら理解できる……敵があれだけ焦っている理由が……そうか……ならこちらの策もやり易くなったな。）

亮真はケイルの置かれた状況を正確に把握した。

裏切り者というからには貴族派での立場は相当に脆い筈だ。
自己の立場を強化するために功績を欲して無理をする人間はよく居る。

（ククク……向こうがその気ならこっちも安心して策が使える……）

亮真はケイルの用兵に裏が無いことを確信すると準備した策を使うことを決断した。

「伝令！これから敵は南北と中央の3箇所を同時に攻め寄せるはずだ。予定より早いが第一段目の策を使うとボルツとリオネに伝えろ。サーラには北に移動して合図を待てと言え！」

「はっ！」

亮真の指示を受け騎士はサーラの元へと走り出す。
亮真は回りに居る騎士達を率いて前線を守るローラの下へと向かった。

「いい？もっと速射の速度を上げなさい！敵は無数に居るんだから！」

ローラの守る中央の門もまた大激戦が繰り広げられていた。
敵兵はまさにイナゴの如く門へと押し寄せる。

「不味い！槍隊前へ！……突け！」

矢の雨を防ぎきり再び柵の前へ農民兵がたどり着く。

ローラは何度目かの命令を再び槍隊へと命じた。

「ローラ様！敵の数が多すぎます……このままでは……」

ローラのそばに居た騎士がそんな泣き言を言った。
切れ目の無い敵の突貫は、防衛に携わる騎士達の神経へ多大なストレスを与えていた。
逸れも当然だろう。

「黙りなさい！私達のどこが劣勢です！私達は亮真様の指揮の下で誰一人として失わずに門を守っているではありませんか！」

ローラの指摘どおり、亮真の作戦は今のところ上手くいっている。
堀と柵で相手の進軍を阻むみ、敵の兵力を3箇所の門に集中させることで少ない兵力を効率よく運用する。
そして矢に因る遠距離攻撃を行い安全な柵の内側から敵兵を射殺すことで敵兵力を削る。
騎士の個人技を完全に禁止し、隊としての連携を強化。
各騎士たちが、相互に援護することで死傷率を下げる。
騎士達には不評であったが、ローラは亮真の作戦を高く評価していた。
そしてローラは幼き日の思い出に残る彼女の父親の姿を必死で思い起こしながら彼を叱咤した。

『ローラ覚えておきなさい。上に立つ人間は決して弱みを見せてはいけない。怖くても、逃げ出したくてもそれを表には出さずどれだけ毅然としていられるか。それが上に立つ者の資質だ。』

どれほど亮真の作戦がすばらしかろうと、此処でローラが弱気なところを見せれば戦線は一気に崩壊しかねない。

戦場で最後にモノを言うのは人間の精神力である。
彼が吐いた弱気な言葉をそのままにすれば、其れは毒のように全体に広がり隊の士気を下げてしまう。

「そのとおりだ！敵はもう直ぐ全滅させる！それまで持ちこたえるんだ！」

「亮真様！」

ローラは驚きの声を上げた。
亮真は中央の門を守ってはいたが全体の指示も出さなければならない。
其の為前線には出ずに少し離れた本陣で指揮を執っているはずなのだ。

「敵の本体が動く……おそらく一気にケリを付ける気だな。」

「其れで……やけに敵からの圧力が強まったと思いました。」

ローラは頷いた。

「だと思ってな、俺も前線で指揮を執る……」

亮真の視線が前線に向けられる。
今のところは特に問題はなさそうである。

「大丈夫なのですか？……其の……リオネさん達の方は？」

「あぁ。そっちの伝令は既に出した。後はサーラへの合図を何時出すかだけだ。」

「よろしいのですか？……其の……いま使ってしまって…」

亮真の言葉を聞いたローラが尋ねた。

其の策は敵の本体が出陣したときの足止め用のはずだ。

「あぁ。予定より早いが敵さんが死にたいって言うんだ、仕方ないだろう？……それに殺せるときに殺した方が後々楽だしなぁ……なぁに、手はまだある。大丈夫だよ。」

亮真は酷薄な笑みを浮かべた。

其れは愚かな指揮官と逸れに率いられた哀れな兵達に送る嘲笑だった。

兵数の劣る亮真達は勝つために2つのことを重視しなければならない。

1つ目は自分達の損害を極力減らすこと。

2つ目は自分達の士気を落とさないこと。

堀と柵に守られている今、1つ目の損害を減らすということは十分に達成できている。

だが2つ目の士気を落とさないということに関してはどうか？

正直に言って最低ラインがギリギリ保たれているだけだ。

これは致し方ないといえた。

士気とはどうしても攻撃側のほうが優勢になる。

守るより攻めた方が心理的なストレスは軽いのだ。

それに亮真の指揮している人間は用兵以外はルピス王女から指揮権を委託され騎士である。

流れ者の亮真に対する信頼は決して高くない。

防衛戦で一番重要な指揮官への信頼が低いのだから士気は当然低くなる。

今はまだ損害が出ていないため亮真の指揮に従ってはいるが、どこかの門を破られれば亮真達が敵を押し戻すだけの気力は保てないだろう。
だから亮真は騎士達へ戦果を示さなければならない。
自分の指示の正しさと共に。

「良いか！もう少しだ！もう少しの辛抱だぞ！」

「「「うぉぉぉぉおお！」」」

指揮官の激励に騎士達が答えた。

「何をしている！まだ破れんのか？！」

ケイルが苛立ち紛れに叫んだ。
騎士2千名を前線に出したのだ。
彼は直ぐにでも柵を引き倒し敵陣の中へ切り込んでくれるものと期待していた。
だが、いまだに亮真達の守備を突破することは出来ていない。

彼は空堀内に自らも足を踏み入れた。
自ら死地へと足を踏み入れたのだ。
そしてそれを見逃す亮真ではなかった。

「今だ！サーラへ合図を送れ！」

亮真の指示が彼の後ろで待機していた傭兵へと伝わる。
火矢が天高くへと打ち上げられた。
それはこれから起こる虐殺を告げる狼煙となった。

「お嬢！御子柴様の合図ですぜ！」

サーラの下に付けられた傭兵の一人が南に空に打ち上げられた赤い光跡を指差す。

「こっちの準備はどう？水量は！？」

「大丈夫ですぜ！いつでもいけまさぁ！」

テーベ河の川岸にUの字型に設置された堰が、河の流れを一部阻害している。

流石に豊富な水量を誇るテーベ河。

堰が出来てから僅か3～4時間足らずでは有るが、空堀を満たすには十分な水量が蓄えられていた。

「堀を水で満たすくらいの量は十分でさぁ！」

「いいわ！やって頂戴！」

「「「へい！」」」

サーラの号令の下、傭兵達は一斉に詠唱を開始する。

「「「大地を司りし精霊ノームよ。汝の加護を受けし我が求めに応じその姿を変えよ！」」」

「良い！陥没させるのはテーベ河と空堀の間にある地面２０Ｍだけよ！目測を間違えないで！」

「「「大地陥没（アースシンキング）」」」

傭兵達の手が一斉に大地へと叩きつけられた。

バシャァァアア！

堰き止められたテーベ河の水が出口を見つけ、一気に空堀へと流れ込む。

今まで押さえつけられた鬱憤を晴らすかのように。

其の音に気がついたのは、北側を攻めているある農民兵だった。

周囲は喚声と怒号が響き渡っている。

だが彼の本職は狩人であり目も耳も職業柄かとても鋭かった。

「おい！何か聞こえなかったか？」

彼は戦闘中でありながら隣の同僚に声を掛けた。

彼の脳裏に嫌な予感が過ぎったからだ。

「馬鹿！しゃべってる暇があるか！死ぬぞ！」

話しかけられた人間は同郷の人間である。

其の為か罵声ではあったが彼の言葉に返事をしてくれた。

柵の内側からはボルツが指揮する騎士団が矢が雨のように叩きつけてくる。

そんな状況で話をしようというのだから彼は相当に命知らずである。

「いや！本当に聞こえなかったか！？」

「何を言っているんだ！今はそんなことに気をとられている場合じゃないだろう！」

同郷の男の言葉は正しい。
戦場で目の前にある戦いから目を逸らした人間が生き残れるはずも無い。
だが彼は自分の感じた予感を捨て切れなかった。
彼は視線を北へと向けた。
そして見てしまう。
水の壁が空堀の中を満たしてゆくのを。

「み……水だぁぁぁ！」

彼の口から悲鳴が漏れる。
空堀一杯に満たされた水の壁が自分のほうへと押し寄せてくるのだから其れは当然の叫びだった。
戦場の喧騒がピタリとやんだ。
誰も声を上げる人間は居ない。
その場に居る兵士達の耳にも水の押し寄せる音がはっきりと聞こえる。
其れは彼らにとって最後の審判に吹き鳴らされるという天使のラッパにも似た死の音色だった。

第２章第２４話

異世界召喚１６９日目【暗殺者】その１：

水が満ちた堀の中に無数の死体が浮かんでいた。
陽は既に落ち、辺りは松明の淡い光によって照らし出されている。

「フン、ずいぶん溺れ死んだみたいだな……」

亮真は目の前に浮かぶ水死体に目を向けるとそう呟いた。
その言葉には若干の影が感じられる。
自らの策による結果で、数千にも及ぶ死者を出したのだ。
多少感傷的になったとしても誰も責めはしない。
数ヶ月前までただの高校生だった事を考えれば、狂わない分亮真の精神力は並外れていると言ってよい。

「はい、亮真様の読みどおり泳げる人間は圧倒的に少なかったようです。」

亮真の後につき従うローラが答えた。

亮真はテーベ河の畔（ほとり）に橋頭保を作ることにした時からテーベ河の豊富な水量を上手く利用することを考えていた。
兵数としては圧倒的に不利な状況である為、自然でもなんでも利用出来るものは利用しなければ生き残れなかったのだ。
水は現代の地球人、特に日本人にとってさほど恐ろしいものではない。
極一部の例外を除けば学校の授業で水泳を習う為、泳げないという人間は驚くほどに少ない。

だがそれは地球の話である。
この大地世界（アース）は違う。
漁師、船員、船頭といった水に関する職業に携わらない人間で泳ぎを習得している人間は非常に少ない。
それも当然と言えよう。
子供ですら日々の生活に追われて家の農業に携わらなければ生きていけないのだ。
森の小川で泳ぐ機会等、無いに等しい。
そういう子供が大人になるのである。
大人になれば子供時代に輪をかけて日々の生活に追われる。
事実、亮真が指揮する傭兵団と騎士団のなかで泳ぎが出来る人間は５０名にも満たない。
その事実を知った亮真がこれを利用しない訳がなかった。

しかも敵の農民兵が着ているのは革の鎧である。
革は水を良く含む。
槍は手放せばそれで済むが、身につけている鎧は簡単に脱ぐことなど出来ない。
普通の服を着ていても水にぬれれば肌に張り付き行動を阻害する。
泳ぎの心得の無い農民達が溺れ死ぬのは当然と言えた。

「そうか。どれくらい死んだ？」

「ご指示どおり捕虜は取っていません。全て殺していますので、おおよそですが５０００名は下らないかと。」

敵兵の総数は７０００。
そのうちの５０００である。
溺れ死んだ者、柵の側にいた所為で退却する事が出来ずに打ち取られた者。

水が押し寄せる事にいち早く気が付き対岸へ戻った人間以外は全て死んでいる。
生き残りがまだ残っているとはいえ、もはや戦にはならない。

「北側を攻めていた敵軍は壊滅、中央と南は北側よりは若干の余裕があった為、兵を引けた結果だと考えられます……それと重装備の敵騎士団をかなり削ることが出来ました。これはかなり幸運な結果だと考えられます。」

ローラの報告に亮真は軽く頷いた。
鉄の鎧兜で身を固めた騎士は接近戦では非常に強力な力を持つ。
ケイルが焦って温存していた騎士団を前線に出したことで、空堀の中に侵入してきていたのだ。
そこを水が襲った。
敵指揮官の焦りに助けられた感はあるが亮真は運も実力の内だと考えていた。

「とりあえず数日は時間が稼げるな……見張り部隊を残して休息に入る様に伝令を出してくれ。」

亮真の指示にローラは頷くとその場を離れる。

「さて……後はどうしたもんかな…」

一人になった亮真は呟く。
亮真は綿密な計画と事前の準備を大事にしてはいるが、それに固執する事は無い。
どちらかといえば臨機応変が彼の本質ともいえる。
今回の水を使った策にしろ、本来なら今この場で使う予定ではなかった。

敵本隊が攻撃して来た時に初めて使う予定だったのである。

（まぁ防衛戦は戦果が見えにくいからな、殺せるときに殺しておかないと後が辛くなるのも事実だし。）

事実、圧倒的に劣勢な自分達が敵兵の死体を山と積んだ事により、騎士達の士気は高まっている。

亮真の指揮の的確さを目に見える形で示されたのだから当然である。

それに６万５０００の敵兵を６万に減らしたことも大きい。

（まぁこれであの策が使いやすくなった訳だし良いか……後は敵の本隊がどう動くかだな……このままルピス王女が来るまで動かないでくれれば一番いいんだけど……ま！それはありえないか。ゲルハルト公にしろホドラム将軍にしろこのまま黙って引き下がる訳が無い。）

次に敵が攻めてくる時には、それなりの準備をしてくるはずだ。

そして彼らはルピス王女が率いる本体の到着前に仕掛けてくるはずなのだ。

（今回の生き残りから状況を聞きだすのに１日。聞きだした情報を下に攻める準備をするのに２日。少なくても３日分は時間を稼いだ事になる……今日を含めれば４日。後３日分の時間稼ぎが出来ればこちらの勝ちだ。）

亮真の顔に笑みが浮かぶ。

（敵が準備に時間を使えば使うほど俺が有利になる。逆に敵が焦って突っ込んできてもこっちの準備は出来ているから十分に対処できる。）

亮真の読みが正しいかどうか。
それは全てが終わってみなければわからない。
勝負が終わるまで結果は誰にも判らないのだから。

「貴様…良く私の前に姿を現せたな……その度胸だけは褒めてやる。」

ゲルハルト公の冷たい声がケイルへ叩きつけられる。
時間は既に深夜。
城砦都市イラクリオンに在るゲルハルト公の屋敷の執務室からは未だにランプの明かりが外へと漏れていた。
通常ならゲルハルト公は既に就寝している時間帯である。
だが今日だけは違った。
昼間、意気揚々と出陣したケイル率いる７０００の兵が壊滅して戻ってきたのだ。
とても寝て等いられなかった。

「ハッ！誠に申し訳ございません。」

ケイルは頭を下げた。
それ以外に彼に残された選択肢が無かったとも言える。

「徴兵した農民兵が４０００、騎士団が１０００……ずいぶんと景気よく負けたものだな。」

副官から差し出された書類を見てゲルハルト公が顔を顰める。
人間というものは真に怒りを感じた時程、冷静で理知的になるらしい。

少なくともゲルハルト公はそういう人間の様である。

「ハッ！申し訳ございません。」

ケイルは再び頭を下げた。

「農民兵等はどうでもよいが、貴様に貸し与えた騎士の価値を知らないとは言わさんぞ。」

ゲルハルト公の声に力が加わる。
事実数年ををかけて集めた虎の子の騎士団である。
それを接近戦に持ち込んだのならともかく、敵の策に嵌まって半数を失ったとなればゲルハルト公としても怒りを覚えずにはいられない。
ましてや指揮をしたのは戦の才能を買って騎士派から寝返らせたケイルである。
彼の才能を買った分、その反動で失望も大きい。

「ハッ！……申し訳ございません……」

ケイルはオウムの様にただ謝罪の言葉を吐き頭を下げる。
彼自身もっと気の利いた言葉を言いたいのだろうが、状況がそれを許さない。
下手な言い訳をすればそれだけでゲルハルトから見限られてしまいかねないのだ。
彼にはどのような弁解の余地も残されてはいなかった。

「しかし貴様……良く生き残ったな？」

ゲルハルト公は書類に目を落としながら呟いた。

「馬が私を乗せて泳いだので……」

「ほぅ、ワシはまた恥も外聞もなく兵を見捨てて逃げ帰ってきたのかと思ったぞ。」

ゲルハルトから痛烈な皮肉が飛んだ。
ケイルはゲルハルトの侮辱に必死で耐えた。
それ以外に選択肢などない。
事実ケイルが生き残ったのは運以外の何物でもなかった。
前線に出ようとしていたケイルは空堀の半ば辺りまで進んでいた。
そこに水の壁が押し寄せたのである。
前後左右には騎士達が隙間なくケイルの身辺を固めており身動きはつかない。
鉄の鎧を着こんでいたこともあり、ケイルはその他の騎士達と同様に水におぼれて死ぬはずだったのだ。
その運命を変えたのが彼が乗っていた馬である。
ケイル自身が鎧の外せる部分を捨てたことも大きく影響した。
偶然か幸運か。
彼を乗せた馬は濁流に呑まれながらも必死で泳ぎ、何とか対岸へとたどり着いたのだ。
その背にケイルを乗せて。

「まぁ良い。貴様の処分は後回しにしてやる。」

ゲルハルトの言葉を聞きケイルはホッと胸を撫で下ろした。
ゲルハルトの性格を考えれば死罪に処せられても不思議ではなかった。
いや、死罪にしない方が変である。
ケイルの出した損害はそれほどまでに大きい。

「何を安堵している？殺しはしない。だが許しもしないぞ。」

ゲルハルトの言葉にケイルは凍りついた。

「まぁいい。今日のところは下がっていいぞ。」

ゲルハルトは手を振り退室を促す。

「そ…それでは失礼させていただきます。」

ケイルは頭を下げると素早く執務室から出て行った。
まるで逃げるかのように。

「フン。無能が！」

ケイルが退室した後、ゲルハルトは侮蔑の言葉を吐いた。
言葉自体はとても短いが、そこに込められた悪意は強い。

「宜しいのですか？放っておいて。」

「では貴様はケイルを今処分しろと言うのか？」

副官はゲルハルトの言葉に頷いた。

「馬鹿が。貴様はあの愚か者の命で今回の損害が埋められると思うのか！」

ゲルハルトはケイルを既に見放していた。
彼の処分を見送ったのは彼に情けや再起の機会（チャンス）を与える為ではない。

今回受けた損失の穴を少しでも埋めるために、効果的な死に場所を与える。
ただその為に処分を保留にしたにすぎないのだ。

「農民兵はどうでもよい良い。だが騎士団に損害を出すとは……あの愚か者め！」

戦には絶対という事は無い。
どれほど有利であろうと、負ける時は負ける。
だがそれを理解していてもゲルハルトの心から怒りが消えることは無い。

（時期が悪すぎる……ホドラムが合流した今、アヤツに付け入れられる様な傷は負いたくないというのに……）

ホドラム将軍とどちらが主導権を握るかで交渉中の今、ゲルハルトにとって戦の指揮に疑問を投げかけられるような結果は大きな枷となってしまう。
ホドラム自身は将軍としてこの１０年ローゼリア王国の軍事を司ってきた人間である。
それに対してゲルハルトは内政に携わってきた。
本来であれば、ホドラム将軍に指揮を委ねるのが流れとしては自然である。
自分達の兵の内ほとんどがゲルハルト公以下貴族派の兵士であったにしろ。
そのこと自体はゲルハルト自身も理解している。
だがそれではホドラムに全てを奪われかねない。

（アヤツの野心は判り切っている。下手に指揮権を委ねれば間違いなくワシの首を狙ってくる。アヤツはそういう人間だ……まったく、

アヤツの野心がもう少し小さければワシも安心して指揮権を委ねられるものを…）

ゲルハルトとしてもホドラムの能力は得難い戦力なのである。
だからこそ落ち目となった彼を受け入れたのだ。
だがいざ受け入れて会ってみれば、ホドラムの野心が以前と少しも変わっていないことが見て取れた。
いや、騎士派の党首としてルピス王女を担いでいた時の方がまだ自分の野心を隠そうという努力が感じられた。
今はもうその必要が無いと判断したのか、飢えた狼のごとき欲望が彼の体からほとばしっている。

（スドウの進言も当てにはならんな……やはりあのような者の言葉を信じてホドラムを受け入れたこと自体が間違いだったのだろうか？）

ゲルハルトの脳裏に一人の男の姿が浮かぶ。
ラディーネ王女につき従うその男こそ、ゲルハルトにホドラム将軍の受け入れを提案した人間である。
そしてラディーネ王女とゲルハルトを結びつけた人間でもある。
どこにでもいそうな平凡な顔。
体格は中肉中背。
唯一挙げられる特徴といえば闇の様に真っ黒な髪と瞳であろうか。
常にラディーネ王女の側を離れない為、貴族派の人間でも彼に会ったことがある人間はゲルハルトを含めて数人しかいない。

（いや……スドウの進言どうりホドラムは貴重な戦力だ……今回の戦で失った騎士の事を考えれば其の価値はより大きくなる……問題はあの野心の強さか…）

極端な話、ゲルハルトとしてはホドラムが軍部の実権を握ることに不満は無い。
ローゼリア王国の全てを握るという事が言葉で言うほど簡単でないことを理解しているからだ。
ゲルハルトが求めているのは、既得権益を侵されない事。
ただそれだけである。

（だが残された時間は少ない……このままルピス王女率いる本体が到着してしまえば戦況は一気に相手側へと傾きかねない。）

農民は弱者であるが同時に強かでもある。
ゲルハルトに従っているのは彼が領主であるのと同時に、兵数でルピス王女を圧倒しているからに他ならない。
だがもしゲルハルトが橋頭保を築いた２０００の兵を壊滅できないままルピス王女の本隊が到着すればどうなるか？
農民はゲルハルトの力を疑いだす。
元々正当性という観点で言えばルピス王女の方に分がある以上、力にまで疑いを持たれては一気に離反されかねない。
そういう観点も含めて考えれば、ケイルの敗戦は痛手等という軽い言葉では足りない。

（致命傷になりかねない…か？……いや…まだだ……まだ勝負は決まってなどいない。）

弱気な心を振り払うかのようにゲルハルトは首を振った。

（ケイルの処分は後で考えるとして……敵の指揮官め。相当に切れるな……こいつを消せばまだ勝機はあるか？）

愚か者よと侮蔑していてもケイルはゲルハルトがその才能を見込ん

で寝返らせた逸材である。
それに勝つ程の指揮官を暗殺出来ればゲルハルト側は有利になる。

（以前、一度暗殺に失敗したと連絡が来てそのままだったな……確かその暗殺者はそのまま間諜（スパイ）として敵の傭兵部隊に紛れ込んでいたはず……ならば今回率いられた先陣の傭兵部隊の中にいるはずだ……隙を見て指揮官の暗殺も可能か……）

ゲルハルトは酷薄な笑みを浮かべた。
どうせ暗殺者など使い捨てである。
それに敵は戦勝に浮かれて警備が手薄になることも考えられる。

（やるなら今のうちか……）

「直ちに敵陣に紛れ込んでいる間諜（スパイ）へ指揮官の暗殺を命じるのだ！急げ！」

「ハッ！直ちに！」

副官が直ぐさま執務室から駈け出して行く。

「ククク！目に物見せてくれるわ！」

ゲルハルトの声が執務室に響く。
彼の野望は未だ衰えることは無かった。

第2章第25話

異世界召喚１７０日目【暗殺者】その２：

亮真達が橋頭堡を築いてから2日目の朝が来た。

「予想どうり夜襲は無しか……」

「はい、流石にこの短期間で軍の再編成は無理だったようですね。」

亮真の言葉につき従うローラが答える。

「敵さんは軍の再編成に手間取るとみて間違いないか……」

「おそらく2～3日は確実に費やす事になるかと。」

「なら次の仕込みは今のうちにやっておいた方がいいな……」

亮真の言葉にローラの目が光る。

「例のアレですか？タイミング的には良いと思います。丁度今回の水攻めでかなりの死者を出していますから揺さぶるには丁度良いかと。それにアノ策は効果が出るまで時間がかかりますからルピス王女が準備しては決戦に間に合いませんし。」

「リオネさん達の準備は出来てるのか？」

亮真はもっとも大切な点を聞いた。

「はい、王都に居る段階で人員の選抜もその他の準備も終了しています。」

「分かった。なら朝食の後にみんなを集めて会議と行きますか…グゥ…ちなみに朝食は？」

亮真の腹の虫が空腹で鳴いた。
人間は何時でも何処でも腹を減らす。
例えそれが命を掛けた戦場でも。

「既にご用意出来ております。」

ローラは既に亮真の為に食事の準備を終えていた。
本来なら調理班が居る為、ローラたち姉妹が亮真の食事の準備をする必要はない。
だが彼女達は決して亮真の身の回りの世話を人には任せなかった。
それは王宮に居た時から変わらない不文律である。

「なら温かいうちに食べるとしますか。」

そういうと亮真は自分の天幕へと戻っていく。
こうして戦場2日目の朝が始まる。

「まぁ、アタイをしては別に文句を言う理由はないねぇ。」

「あっしの方も問題有りやせん。事前に準備をしてやすし何時でもやれますぜ。」

朝食を終え、亮真の天幕にはリオネ、ボルツ、マルフィスト姉妹の

４人が集まっている。

「ならあまり大人数でも怪しいので、紅獅子の人間から１０人程選んで今日中に行って貰らいますかね。」

亮真の言葉にリオネとボルツが頷く。

「それとサーラ、例の件は何処まで分かっている？」

亮真の質問にサーラは慎重に答えた。

「彼女の名前はサクヤ、実際に何処と繋がっているかは不明ですが、王都に居た時から定期的にどこかと連絡を取り合っているのは間違いありません。」

「そうか……まぁ今のところは泳がせておいて構わない。」

実際のところ亮真はサクヤの使い道に関して明確な目的を持っているわけではない。

彼女がどういう人間なのか。

間諜（スパイ）なのか暗殺者なのか。

何処の勢力に繋がっているのか。

全て不明なのである。

排除するだけならば簡単に出来るが、下手に排除して別の人間が送り込まれてこないとも限らない。

それくらいなら、怪しいと目星がついてる人間をそのまま残した方が安全なのだ。

「しかし、良くそいつが怪しいと目星がついたもんだねぇ？」

リオネが疑問を挟む。
それも当然だろう。

「なぁに、リオネさんの伝手を使ったお陰だよ。」

「アタイの？」

今回引き連れてきた傭兵は全てリオネの伝手を使ってギルドを通さずに雇った人間が9割以上を占める。
勿論ピレウスの城下町に滞在していた傭兵も居なくはないがその数は1割にも満たない。

「なるほど。だから姐さんに傭兵を募集させたってわけですかい。」

「どういう事だい？」

亮真の言葉を聞いて納得するボルツに、リオネは矛先を変えた。

「監視するにしても、数を減らす事が出来やすからね。」

つまりリオネの知人達で構成された部隊に、まったく面識の無い人間が入ってくれれば当然その人間は浮き上がる。
浮き上がればその人間の行動は目につきやすい。
何時も一人で行動している人間などすぐにピックアップする事が出来るのだ。
後は目星がついた人間に張り付けば良い。
その人間がしっぽを出すまで。

「なるほどねぇ。傭兵部隊に敵の間諜（スパイ）が紛れ込むこむ事を予測してたってわけかい。」

リオネは感心したように呟いた。

「俺も余裕があればやりたいですからね。」

敵の動向を知る為に間諜（スパイ）を使うなどやって当たり前、やられて当たり前である。

色々な状況があるのでやれるやれないは別にして、そういった発想を持たない人間が指揮官として存在する方が怖い。

亮真はそう考えていた。

「なるほどねぇ。」

リオネがひとしきり感心したところで今回の会議は終わりを告げた。

「サーラさん、あの人たちは何処に行くんですか？」

サクヤは柵の近くに横たわる死体を始末する手を止めると、水堀を筏（いかだ）で渡る一団へ視線を向けて言った。

死体の処理は疫病の蔓延を防ぐためにも早急に行わなければならない。

ちなみに水堀の中に浮かんでいた水死体の多くは既にその姿を消していた。

堀の南側の土手を崩してテーベ河に繋げたのだ。

そのおかげで鉄の鎧を着込んだ騎士以外の死体は、川の流れに乗って海へと流されていく。

人道的にはどうかとも思うが、効率の面から考えればとても良い手である。

ちなみにサーラ達が行っている柵の周りに横たわる死体の始末方法

は簡単である。
死体の装備をはぎ取りテーベ河に流すだけなのだから。

「あぁ、あの人たちは近隣の商人よ。商談に来て帰るところ。」

サーラは軽く返事をした。

「商人……ですか？」

「えぇ、何？何か不審なところでもあった？」

サーラにそう言われてしまえばサクヤとしてもそれ以上言う事はない。

「いえ……別に……」

そういうとサクヤは再び視線を足ものとの死体へと向けた。

（どういうことかしら？商人？こんな戦場に？……いやそれよりも私は彼らが来た姿を見ていない……隠れて堀を渡ってきた？……ううん、もしそうなら帰りの姿だって隠すはずだわ……）

サクヤは湧き上がる興奮を抑えきれなかった。
それも当然だろう。
彼女が傭兵部隊にその身を投じて1月が過ぎようとしている。
その間に彼女が手に入れた情報は皆無といってよい。

（もしかして……何か重大な秘密でも！）

そう考えたとしても無理もない。

事実、この時堀を渡った商人たちはある重要な役割を任されているのだが、その事がわかるのはもう少したってからである。
尤もサクヤがその情報を調べ上げる可能性は0に等しい。
なぜならサーラがぴったりと張り付いて居たからだ。

（どうしてこの人は私のそばから離れないんだろう？……もしかして気が付いてる？）

サクヤの脳裏にそんな不安がよぎる。
だがサクヤはその不安を打ち消した。

（そんなはずない。もしバレテいたら私を生かしておくはずがないもの……）

サクヤは御子柴亮真という人間を調べている。
どういう経緯でルピス王女に助力しているのかまではまだ調べきれていないが、彼が容赦の無い人間であることだけは理解していた。
いや、否が応でも理解させられたと言う方が正しいかもしれない。
昨日の水攻めという策によって。

ピカッ

そんな事を考えながら作業を続けていたサクヤの顔に光が一瞬横切った。

ピカッ……ピカピカピカ

（連続して2回、少し間を置いて3回……雇い主がもう一回御子柴亮真を暗殺しろと言うのね……）

潜入前に連絡員との間で取り決めた指令の連絡方法だ。
敵陣に潜入する以上、味方との連絡には細心の注意が必要である。
実際に会うのは勿論。
状況によっては密書が使えないこともある。
だから光の反射による連絡方法を事前に決めておいたのだ。
この方法の利点は敵に内容を悟られない事だろう。
その上、光の反射なら偶然を装うのにも困らない。

サクヤは表情を変えずに作業を続ける。
だがその秘められた心は冷たく研ぎ澄まされていく。
御子柴亮真暗殺という与えられた任務を遂行する為に。

（確実に殺すなら接近戦に持ち込むしかないわ……毒を塗った刀で傷を負わせれば……）

前回、弓による狙撃を試みたが偶然にも亮真がその矢を避けてしまい失敗している。
2度目の暗殺となれば今度はもう失敗は許されない。
尤もそうなれば彼女自身が生き延びるという可能性は限りなく低くなるのだが、彼女は覚悟を決める。

（殺か殺れるかだわ。）

一流と呼ばれる暗殺者といえど命を賭けるには覚悟がいる。
だから彼女は気がつかなかった。
彼女の背中をじっと見つめるサーラの視線に。

2日目の夜が過ぎようとしていた。
月は雲に隠れ、陣屋を照らすのは所々におかれた松明のみである。

フッ

影が天幕と天幕の間を素早く駆け抜ける。
だがそれに気がつく歩哨は誰もいない。
黒い覆面に黒い服、手は黒の手袋に覆われ靴まで黒く染められている。
そんな人間が松明の照らす範囲を的確に避け、風の様に駆け抜けるのだから歩哨が気がつかないのも当然ともいえた。

（ここか……）

影は目を凝らしてとある天幕を凝視する。
日中なら迷うはずもない敵司令官の天幕だが、光の無い闇夜で正確に見分けるのは至難の業だ。
尤も暗殺に携わる人間としては夜目など利いて当たり前の事である。
影が注意深く確認したのはあくまでも用心深いからに他ならない。

影は腰に刷いた刀を抜く。
そして懐よりガラスの小瓶を取り出すと刀身に注意深く垂らし始める。
ドロリと粘着性のある黒みがかった液体が刀身を覆う。
影は小瓶に栓をすると懐に仕舞い、今度は一枚の布を取り出した。
布を刀身の根元に被せると力を入れすぎないように注意しながらゆっくりと刀身に沿って滑らせていく。

（これでよし……後は御子柴亮真をこの手で始末するだけ……）

黒い液体が刀身に適度に覆われている事を確認すると、影はゆっくりと天幕の入口へと移動する。

亮真の天幕には警備兵が居ない。
自信があるのかわずらわしいから置かないのかは分からないが、彼が自分の天幕に警備の兵を置かない事ははっきりとしていた。
これがもしここ数日の間で急に置かなくなったということならば影は罠を心配しただろう。
だが御子柴亮真という人間が虚栄を嫌うと同時に、ある意味無頓着と言えるほど自己の警備に無関心な事を影はここ1月の間の調査で知っていた。

影は入口から素早く中へ視線を走らせる。
亮真が眠っているせいだろう。
天幕の中は完全に真っ暗であり、蝋燭(ろうそく)の灯り一つない。
数人が囲む事が出来る会議用のテーブルが中央に置かれその奥には亮真が普段使う机が置かれている。
入り口に向かって左側には亮真が付ける鎧や剣が立てかけられていた。
逆側には寝台(ベット)が置かれその上に黒い人型(ひとがた)の何かが横たわっていた。
だが闇に閉ざされた天幕内では、その何かの正体までは判別は不可能であった。
影はそれ亮真が横たわる姿と判断し寝台へと静かに歩み寄る。

（今のうちだ！）

影は静かに刀を振り上げた。
周囲にはだれも居ない。
殺すなら今が最大の機会(チャンス)である。
その機会(チャンス)を生かさない暗殺者など存在するはずもない。

フヒュ

振り上げられた刀が鋭く風を切る。
影は自らの任務達成を確信した。
だがその確信は無情にも打ち砕かれる。

ガンッ

肉を斬る音とは似ても似つかない金属音が天幕に響いた。

そして呆気にとられて影が茫然とした一瞬の隙を逃さず後ろから忍び寄り攻撃した人間がいた。

ドガッ

そいつの拳が影の横隔膜を的確に打ち抜く。

「グッ…」

影はのど元まで出かかった呻き声を必死で噛み殺した。
だがその噛み殺すという行為そのものが再び影を無防備な状態にする。
そいつは続けて影の右肩に拳をたたき込んだ。
正確に打ち込まれた拳が右肩の急所を打ち抜く。
影は腕の力を一時的に痺れさせ手にした刀を落とした。

（不味い！罠だ！）

影はようやく自らの陥った状況を理解した。
だが横隔膜を打ち抜かれた後遺症は影の体裁きに影響を及ぼす。

（不味い……身体のキレが戻らない！）

右腕も痺れたままである。
徐々に痺れは取れ始めてはいるが、大きなハンデになっているのは間違いない。
影は抵抗を諦め逃走経路を探して視線を配る。

（天幕の入口はあいつの後ろに一つだけ……でも今の状況じゃ突破は無理。なら……）

下手な抵抗を考えず素早く逃走へと切り替えたのは影が一流の暗殺者である事の証明である。
幸いなことに天幕は所詮布で出来ている。
木と違い布なら手持ちの刃物で切り裂き無理やりに抜け出しことも出来る。

影は素早く身を翻すと、天幕の入口とは正反対の方へと走り出した。

ビビビビビッ

影は机の上を飛び越えると、その勢いのまま天幕へ刃を付きたて一気に身体を押し込んだ。

「こんな夜更けにどうしたのかしら？」

天幕を飛び出した影の頭上からサーラの声が響いた。

「！」

影の覆面で隠された顔に同様の色が浮かぶのをサーラははっきりと

感じた。

「それほど驚くような事かしら？」

影はサーラの言葉を無視して周囲に視線を走らせる。

（何処？何処が一番手薄なの！？）

最後まで諦める事の無い影の姿勢ははまさにプロと言えた。

だがサーラが此処に居る以上、影が逃走出来る可能性は０である。

「無駄よ！」

サーラが手を挙げると闇の中から完全武装の傭兵たちがその姿を現した。

リオネ・ボルツを先頭にその数およそ２０。

如何に一流の暗殺者といえどその包囲網を突破する術などあるはずもない。

「まず身体に仕込んだ武器を捨てなさい！」

サーラの命令に影は一瞬躊躇うと、懐へと手を伸ばす。

傭兵達の間に緊張が走る。

「大丈夫。……良い！ゆっくりと出すのよ！」

傭兵達の動揺を抑えサーラは再び命令した。

（油断は無し……か。強行突破は無理ね……）

影は素早く計算すると懐から小瓶を取り出し足元へ捨てる。

（でも……武装解除を命じるなら少なくとも殺されはしない……ならまだ機会（チャンス）はある。）

影は強かに計算するとサーラの命令に従って、身体に隠した武器を足元に放り出した。

自らが生き残る可能性に賭けて。

第２章第２５話（後書き）

少し頑張って更新しました。
今後ともよろしくお願い致します。

※今まで小説を読もうにユーザ登録をされていた方のみの感想を受け付けておりましたが、この度閲覧して下さった方全てに感想を書き込んで頂けるように設定を変更いたしました。
もしご意見ご感想が御座いましたら遠慮なく書き込んで下さい。

宜しくお願い致します。

※８／１９　誤字修正

第２章第２６話（前書き）

助言してくださった方が居てキャッシュを調べたところ何とか前の物を入手できました。

ご迷惑をおかけし申し訳ありませんでした。

第2章第26話

異世界召喚171日目【暗殺者】その3：

月が雲の間から顔を出し辺りを照らす。

「まずは覆面を外して貰おうか。」

亮真の言葉に影は素直に従い、顔を覆う覆面の結び目へと移動させる。

ハラリッ

黒髪の傭兵、サクヤと呼ばれている女の顔が現れた。

「これでお互いの顔を見て話し合いができる状況になったわけだ。」

「話し合い？尋問の間違いじゃないの？」

亮真の言葉を聞きサクヤは馬鹿にしたように周囲を見渡す。

この天幕の中には、亮真とサクヤのほかに。リオネ・ボルツ・マルフィスト姉妹といった面々が顔を揃えており、天幕の外は10人以上の傭兵達によって警備網が敷かれていた。

確かに話し合いというには物々しい雰囲気ではある。

「その辺は認識の相違ってやつだろう？少なくとも俺は話し合いをするつもりだよ。」

亮真の言葉にサクヤは胸を撫で下ろした。

（とりあえず拷問の可能性は少なくなったわね……問答無用で斬り殺されるかと思ったけどそうでもなさそうだし。）

ひとまず身の危険がない事をサクヤは理解した。
尤も彼女は完全に油断したわけではない。
あくまでも少し緊張の糸を緩めただけだ。
物理的な攻撃に対しての警戒は。

「それで？自分を殺しに来た暗殺者と何を話し合うつもり？」

「そう警戒しなくてもいいんじゃないか？」

亮真は苦笑しながら答える。
サクヤの身体に張りつめていた緊張が緩んだので、少しは友好的になるかと考えたのだが、それほど甘くはなかった。
サクヤの顔には身の安全に関しては信用するが、余計なことは言わないぞ！とはっきりと書いてある。

（さてと……どうしたものかな……）

亮真としてはサクヤから何か情報を引き出すつもりはない。
彼女からもたらされる情報の真偽を確かめる術が無いからだ。
下手に嘘をつかれて騙されるより最初から完全に無視してしまった方がある意味安全という判断である。
だがそうなるとサクヤという人間の利用価値が無くなる。

「別に何か聞きたいわけじゃないんだよね。どうせ喋ってくれないだろうし、それが本当かどうかも判断できないしね。」

亮真の言葉にサクヤは顔色を変えた。
亮真の言葉を鵜呑みにすれば、サクヤを生かしておく必要は無くなる。

（こいつ、一体何が目的なの？）

サクヤの中で生まれた小さな疑問は次第に彼女の心を不安で埋め尽くしていく。
相手の狙いが分からないほど不安になる要素は無い。

「ならなぜ私を生かしておくの？利用価値なんて無いでしょ？」

そう言い放ちながらもサクヤは心の中である理由を導き出していた。
そう、女性としてはあまり的中して貰いたくはないある理由を。

（もしかして私の身体が目当て……？）

彼女がそう思うのも無理はない。
彼女の外見は非常に優れている。
長く艶やかな黒髪。
健康的に焼けた小麦色の肌はきめ細かく張りがある。
暗殺者としての修練の所為か身体は引き締まっているが、胸は適度のその存在を主張している。
つまり十分に男の欲望を掻き立てる美女なのである。
暗殺者として人の世の汚い部分を見続けてきたサクヤも女である。
力で男に無理やり犯されるという恐怖を潜在的に持っていた。
暗殺者として任務に失敗すれば命を失うという覚悟はある。
だが女としてその身をけがされる恐怖は消し去れるものではなかった。
ましてや男を知らない身ならば尚更である。

（いや……それは無い……もしそうなら女を同席させるはずが無い。）

サクヤは素早くリオネ達女性陣に視線を向けて自らの考えを否定した。

だがそうなるとなおさら御子柴亮真という男の狙いが理解出来なくなる。

「まぁ個人的な興味ってのが一番の理由かな。」

亮真はサクヤの心の動きを敏感に感じながら答えた。

「個人的な理由？」

サクヤの顔に疑問の色が浮かぶ。

「これさ。」

亮真はサクヤが持っていた刀を彼女の前に突き出した。

「これがどうしたっていうの？」

サクヤにとって亮真が何を気にしているのかが理解できなかった。

長さは２尺３寸。

およろ７０ｃｍ程の刀である。

確かに西方大陸では見かける事が少ない珍しい武器である。

それは理解できる。

だが自分を暗殺に来た人間を生かす理由としてはあまりに弱い。

「なぜこれを使っている？」

亮真の質問の意図をサクヤは理解できなかった。
暗殺者にとって刀はただの武器である。
人を殺す為の道具。
それ以外の理由など暗殺者であるサクヤには無かった。
亮真はサクヤの顔に浮かぶ戸惑いを見て質問を変えた。

「君は日本人か？」

だがサクヤの顔には亮真の予想した変化は起きなかった。
まるで意味不明な単語を聞いた人間の様な顔だ。

「何それ？どういう意味？」

サクヤの回答は亮真の予想を外した。

（どういう事だ？刀を持っている暗殺者で黒髪に黒い眼、肌だって日に焼けてはいるが黄色人種の物だ……なのに日本人か？という質問に何の反応も起こさない……ただの偶然？……いや、そんな偶然等……）

亮真の中で様々な疑問が浮かぶ。
それまでサーラにサクヤの監視を一任していた為、サクヤの顔を亮真は知らなかった。
遠目で彼女が黒髪の女であることを知ったのは2日前。
実際に彼女の名前がサクヤという事を知ったのは先日のサーラの会議での報告でだ。
亮真は自覚していなかったが、彼女の名前をサーラから聞いたときに感じたのは懐かしさだった。

サクヤ。
漢字に直せば咲夜もしくは咲耶。
当て字なら他にも考えられるが、素直に考えればサクヤという名前は日本人の名前である。
少なくとも純粋な西洋人に付ける名前ではないだろう。

（同じ日本人かも！）

亮真がそう思うのも無理はなかった。
いや、この大地（アース）へ召還されて既に6ヶ月弱にもなる。
異郷の地に同胞が居たとなれば懐かしくて当然であろう。
ちなみにオルトメア帝国の斎藤に関して言うならば亮真は全く親しみを感じていない。
彼と出会ったのは召還直後であり自分の身の安全も危ぶまれた時期である。
まして亮真にとって恨み骨髄の帝国に与して亮真の命を狙ってきたのだから、印象が最悪なのは当然であった。
その点でいえば暗殺者も斎藤と同じく亮真の命を狙ってきたとはいえ、背後関係も不明なら動機も不明。
単純に敵だからと切り捨ててしまうのは人情としては難しい。
無理やり召還されて暗殺者にされた気の毒な人間の可能性だってあるのだから。
しかもサクヤは女性であり美人である。
もし困っているのなら助けてやりたいと思っても不思議ではない。

御子柴亮真は冷酷で冷徹な人間ではあるが、人間である以上優しさや労りといった感情も持ち合わせている。
矛盾しているが人間というのはそういうものだ。
会社ではものすごく面倒見の良い上司が家庭では家庭内暴力を奮う場合もあるし、逆に会社では高圧的で嫌味な人間が家庭では人情味

のある温かい家庭を築く場合だってあるのだ。
その点でいえば亮真はある意味分かりやすい。
彼の行動原理は簡単である。
生き残りたいのだ。
自分が生き残る。
その為に必要であるならば彼は何人でも殺すだろうし、それを後悔することはないだろう。
だが自分の生命がある程度安全であり、目の前に困っている人間がいればどうか？
出来る範囲で力になってやろうとするのは人間として自然な行為だろう。
絶対に助けてやれるとは限らない。
問題が自分の力を遥かに超えている場合だってあるからだ。
だが少なくとも話は聞いてやる。
それが人間である。

そういう要素も含めた上でのサクヤの捕縛である。
極端な話、そんな理由でもなければ御子柴亮真という人間が自分の命を狙った暗殺者を殺さない理由など無いのだ。

だからサクヤが日本人という言葉に反応を示さないのは亮真にとって誤算だった。

「本当に日本人じゃないのか？」

「しらないわ、一体どこの国？西方大陸の国じゃないわね？」

再度問いかける亮真の問いにサクヤははっきりと答えた。

「ならなぜ日本刀を使う？」

亮真は少し考え込みながら尋ねる。
亮真はもう一つの可能性を思い描いていた。
そう、海鳴り亭の女将に紹介された鍛冶屋の親父が言っていたではないか。
東方大陸と呼ばれる地では刀を使うと。

（東方大陸の人間なのか？）

亮真は当然そう思った。
だがサクヤの言葉は再び亮真の予想を覆す。

「日本刀？それは私の一族に伝わる刀という武器よ。」

「一族に伝わる？」

サクヤの回答に亮真は違和感を感じた。

「そうよ。私達の一族は刀を使ってきたの。ずっと昔から。」

「東方大陸出身なら誰でも使うんだろう？」

「東方大陸？私達は西方大陸から出た事は無いわ。」

此処までの情報を整理してみよう。
サクヤという名の女性は、日本人の外見的特徴を満たしている。
また使う武器も日本刀である。
だが日本人、もしくは日本刀という言葉を知らない。
これは現代日本人なら考えられない事である。
となれば、サクヤがこの世界に無理やり召還された地球人である可

能性は皆無と言える。
ではサクヤ東方大陸出身なのだろうか？
身体的な特徴が地球人である日本人と異世界人である東方大陸人に共通するかどうかは不明だが、可能性はある。
そう考えるならサクヤという名前も東方大陸人には付けてもおかしく無いのかもしれない。
しかも以前鍛冶屋の親父から聞いた話では、東方大陸なら刀を使うらしい。
と、すれば刀を武器としている理由は納得がいく。

（全て可能性の話で確証はない。でも……そう考えるなら説明は付く）

そこまで考えて亮真はその可能性を自分で否定した。
彼女は一族の武器と言った。
もし彼女が東方大陸の人間なら、「私の一族に伝わる刀という武器よ。」とは言わない。
少なくともサクヤは刀を一般的な武器とは捉えておらず、それを使うのは自分の一族のみと言う認識だと考えられる。

（一族……一族ねぇ……）

サクヤの言葉を証明する証は何もないが、亮真はサクヤの言葉を疑ってはいなかった。
嘘をつく意味が無いからである。

暗殺者という職業を考えれば依頼人の素生に関して素直に喋るとは考えにくい。
もし話すとすれば9割以上嘘と判断できる。
だが亮真が聞いたのはそういった内容とは無関係な情報である。

勿論敵に教えたくない場合もあるだろうが、もし教えたくないのなら沈黙を守ればいい。
わざわざ嘘をつく必要性が無いのだ。
そう考えれば彼女の言葉は信用できる。

「じゃあサクヤの一族ってのはみんな刀を使うのか？」

亮真は質問を変えた。

「そうよ。」

「本当に東方大陸の出身じゃないんだな？」

亮真の念押しにサクヤは黙って首を縦に振った。

沈黙が天幕を支配した。
マルフィスト姉妹はもともと亮真の邪魔はしないし、リオネやボルツも沈黙を守っている。
言いたい事はあるのだろうが、成り行きを見守るという姿勢である。

「姐さん……若は一体何を知りたいんですかね？」

ボルツが隣に立つリオネにそっと耳打ちをした。

「さ～ね……ただ坊やの策に必要とかそういう話じゃ無いね……」

「やはりそうですかい……」

「何か個人的な理由だね……多分。」

亮真のやり取りを見ていればそんくらいの事はこの天幕の中に居る誰もが理解していた。

「まぁ何にしても今は黙って見てるしかないね。」

リオネの回答にボルツは黙って頷いた。

「一族か……どれくらいの人数が居る？」

長い沈黙を破り再び亮真はサクヤに尋ねた。

（どういうつもり？なぜ一族の事を気にするの？）

サクヤは亮真の問いにどんな裏があるのか必死になって考えた。だがどれほど考えてもこれだという理由が見つからない。

「２００名ぐらいよ……」

サクヤは遂に答えた。

「２００名……」

亮真は言葉を詰まらせた。

２００名。

言葉で言うのは簡単だが、現実的にはかなり多い。

結婚式を思い浮かべてみればいい。

新郎新婦の親戚一同に友人関係を含めても普通の人間はせいぜい１

００名がいいところである。
それが新郎の親戚一同で２００名となれば其の多さもイメージが付くのではないだろうか。
亮真が驚くのも当然と言える。

「２００名ってことは……どこかの村に集まって住んでるのか？」

２００名と言えば小さな村なら総人口にすら匹敵する。
だが亮真の言葉にサクヤは首を振った。

「いいえ。」

「じゃあ、町に分散して住んでる？」

亮真の問いに再びサクヤは首を横に振った。

「いいえ。」

サクヤの言葉に亮真は戸惑う。
集まって住んでるわけでも分散して住んでるわけでもない。
となれば考えられるのは。

「放浪してるのか？」

亮真の問いにサクヤは頷いた。
その時天幕の中に男のしわがれた男の声が響く。

「致し方あるまい。それがわが一族の運命よ……」

第２章第２６話（後書き）

何時もウォルテニア戦記改訂版をご覧下さり有難うございます。

今回より再び頂いた感想に返信を付けさせて頂く事にしました。

仕事が忙しく中々返信をする時間が無かったので、ずっと返信が出来なかったわけですが、仕事も最近は落ち着いてきましたので２６話の投稿を期に再び感想に返信をさせていただきます。

ただ以前に頂いた感想に返信するのもいまさらなような気が致しますので、申し訳ありませんが２６話投降後に頂いた感想よりと言う事にさせて下さい。

身勝手ではありますがご理解の程、宜しくお願い致します。

第2章第27話

異世界召喚１７１日目【暗殺者】その４：：

天幕に響き渡った声が収まると、一人の老人が天幕の入口に降り立つ。
天幕の上に居たのだろうか？
確かに天幕を支える柱の上に乗れば乗れない事は無いだろうが、身軽さは大したものである。

「亮真様……」

サーラとローラが素早く俺の脇を固めると小声でささやいた。

「良い。そのまま待機だ」

亮真も小声でささやき返しリオネ達へも小さく頷いて彼らへ待機を命じる。

（さぁて、暗殺者の一族か……どういう話をするか見ものだな）

奇襲を掛けてくるならともかく、今の状況で暗殺者が一人増えたとしてもあわてる必要はない。
亮真は好奇の目を向ける余裕があった。

サクヤの視線が老人の顔に突き刺さる。
余程予想外の人間が現れたのだろう。
彼女の顔は驚きで引きつっていた。

「お爺様……何故此処に……」

サクヤの口からそんな言葉が漏れた。

白い髪に白い髭。

サクヤと同じように黒い服に黒い靴を身に着けた老人の顔一面には、深い皺と傷が刻み込まれており彼の過酷な人生を色濃く物語っている。

そして彼の左手には少し弧を描くように曲がった杖を持っていた。

「ほぉ……ワシが来ても驚かぬか……状況を理解できぬほどの馬鹿なのかそれとも大物なのか理解に苦しむところじゃなぁ……」

老人はサクヤの問いを無視し周囲にすばやく視線を配るとそう嘯(うそぶ)いた。

「いや、十分に驚いていますよ？　何しろご招待していないお客様のご来場ですからね」

亮真はにこやかな笑みを浮かべて言い返すが、周囲の反応に目をやれば老人の目には彼らが驚いているようには見えなかった。

（大した者だ。この若造……完全にこの場に居る人間を支配しておる）

老人は少なからず驚きを感じた。

トップが泰然としていれば部下も動揺することは無い。

つまり部下を若い御子柴亮真と言う人間が完全にコントロールしているという事だ。

「フン！　まあ良い……ワシが聞きたい事は唯一つよ……貴様そこの娘を殺さない？　自分を殺しに来た暗殺者など生かしておいて何になる？それになぜワシを捕らえようとせん？」

「おや、それを理解されているからご老人はこの天幕に姿を現したのでしょう？」

亮真はニヤつきなら答える。
サクヤを助けるだけならば態々声を掛けて姿を現すなどしない。
老人が姿を現したという事は、亮真に対して敵意を捨てたという証である。

「成る程な……状況判断は出来ていると言うことか……なかなかに冷静だな若造……では改めて聞こう。貴様は日ノ本（ひのもと）の民だな？」

老人は亮真へ問い返した。
その目には一切の嘘を許さないという揺ぎ無い意思の力が込められている。
日ノ本（ひのもと）とは古い言い方で日本を意味する。
つまり日ノ本（ひのもと）の民と言えば日本人の事を指すのだ。
だが現代人はそんな言葉を日常会話の中で使用することは無い。
使うとすれば時代小説の中に書かれるのが関の山といえる。

「えぇその通り。確かに俺は貴方の言う日ノ本（ひのもと）の人間ですよ」

亮真は老人の言葉に頷ずくと心の内で老人の言葉からある答えを導き出す。

（日ノ本（ひのもと）の民か……こんな古風な言い方をするってことは……やっぱりか……）

「ふむ……近頃の日ノ本の民は戦を忘れ腑抜けばかりと聞いていたが……まだ貴様の様な武士がいたとは……驚きよ」

そういうと老人はサクヤの方へと向き直る。

「サクヤよ、立って服を脱げ」

「え？……ここ……でですか？」

老人に言葉にサクヤの顔色が変わる。

暗殺者とはいえ女性。

彼女はその場に立ち上がりはしたが、服を脱ぐ事には躊躇が見られた。

まぁ特殊な嗜好を持った人間でない限り、複数の人間がいる中で裸になる事を躊躇わない人間などいないだろう。

「くどい！」

カチャ

老人の言葉と同時に杖から銀の光が一瞬あふれたかと思うと、再び元の杖へと吸い込まれた。

それを見た亮真の目が鋭く光る。

亮真の目は老人の右手が一瞬の間に杖に仕込まれた刃を抜き放ち、サクヤの着物を下段から斬り上げたのを捉えた。

「ほう……居合ですか。大した腕前ですね。肌に傷を付けず服だけ切断するとは……」

亮真の言葉に呼応するかのようにサクヤが身に付けていた服が左右にゆっくりと離れていく。
老人は亮真の言葉に笑みを浮かべると、サクヤの身体をジロジロと確認しだした。
老人の手がサクヤの肩を触る。

「ふん、思った通りか……正確に急所に一撃を加えておる。しかもこの打撃痕の小ささ……唯の拳では無いな……貫手か？」

亮真は老人の問いに黙って拳を突き出す。

「ふむ……成る程、人差し指の第二関節を突き出すようにして作った拳か……確かに急所を狙うには効果的だな……」

突き出された拳の形を見て老人が呟く。

「えぇ。一本拳と言う握り方です」

亮真の答えに頷くと老人はサクヤの腹部に手を触れる。

「痛っ！」

サクヤの顔が苦痛に歪む。

「ふむ。こちらは拳による打撃か……成る程のう。狙う箇所によって拳の握りを変えるか……ワシらの一族にも似たような技が伝わっておる……これは呼吸を妨害する為の技じゃな？」

「えぇ」

老人の問いに亮真は頷いた。

「サクヤ程度……何時でも殺せたという事か……大した腕じゃなそなた」

そう言うと老人は深くため息をつく。

それがサクヤの実力に対しての嘆きなのか、亮真の技量に対しての感嘆なのかは誰にも判らなかった。

急所を突く。

言葉は簡単だが実戦の場でそれを行うには両者の間に明確な実力の差が無ければ難しい。

目や金的と言った軽く当たっても重大な怪我に繋がる急所と違い、肩や横隔膜への打撃は効果を発揮する為にある程度のパワーと的確な角度というものが必要になる。

ただ当てれば済むというものではないのだ。

そして一流の暗殺者であるサクヤの急所を、不意打ちとはいえ暗闇の中で的確に打ち抜くという事は、御子柴亮真と言う人間の技量を正確に表している。

「不意打ちでしたからね。正面から戦えばどうなるかは判りませんよ」

「バカが。正面から戦う暗殺者が居るか？」

老人の言葉に亮真は苦笑せざるをえなかった。

まさしく老人の言葉は正論だったからだ。

「それもそうですね……おっと、とりあえずサクヤさんがお気の毒なのでこれをどうぞ」

亮真はそういうとベットの上から毛布を手に取りサクヤへと渡す。

「ア……ありがとう　」

「いえいえ、俺にとっても目に毒ですからね　」

亮真の言葉を聞いてサクヤはとっさに胸を手で隠した。
自分の上着が切り裂かれて胸をはだけていた事を思い出したのだ。

「ふん。貴様、女を知らんわけではあるまい？　」

「知る知らないではないですよ。ま！女性に対する最低限の礼儀ってやつですかね」

亮真は老人の言葉に肩を竦めて答える。
亮真は女好きではあるが、少なくとも服を切り裂かれた女性の裸を不躾に見る趣味は無い。
個室で二人っきりと言うのならともかく、周りに人がいる状況では尚更だ。
まぁこの世界ではその配慮が当然なのかどうかは判らなかったが、亮真は命にかかわる場合以外では自分の常識を無理に逸脱しようとは考えていなかった。

「さてと……ではこちらも幾つかお聞きしたい事があるんですが宜しいですかね？」

亮真は話題を変えた。
何時までも老人の質問に答えている訳にはいかない。

まだこの老人が何者で、なぜ姿を現したのかも不明なのだから。

「かまわん……だが貴様は答えの殆どを予想しているだろう？　今さらワシに何を聞く？」

老人は亮真の問いに答えた。

「予想と現実は違いますからね　」

亮真の言葉に老人は考え込んだ。

「成る程……慎重じゃな……まぁ一軍を率いるとなれば当然か……良かろう。答えてやる　」

「ではまず確認ですが、貴方達の一族は昔召還された方の末裔ですね？　」

「そうじゃ、初代達がこの世界に呼ばれたのは今から５００年程前に召還されたと伝わっておる……　」

亮真の問いに老人はあっさりと答える。

「５００年ですか……？　達？一人じゃないってことですか？　」

老人の回答に一部予想外の単語が混じっている事に亮真は気が付いた。

「そうじゃ、わしらの先祖は村ごと召還されたからな　」

「村ごと……ですか？　」

亮真の言葉に老人は頷く。

「そうじゃ……まぁ２０名程の小さな村だったらしいがのう……」

伝え聞くところによれば、彼らの先祖は家で布団を覆って寝ている状態で召還されたらしい。

まぁ時間の流れが大地（アース）と裏大地（リアース）で同じ様であるから、夜間に召還の儀式をされればそういう事もあり得るだろう。

「なら今も村ごと召還されるという事が起こりえるんですか？」

亮真の知る限りではそんな怪奇現象を聞いた覚えがなかった。

情報が世界中に飛び回る現代である。

村ごと人が消えるなんて事が起これば話題に上らないはずが無い。

「いや、それは過去の話よ。今は召還に必要な触媒が稀少で高価になった所為で、よほどの大国でも年に数人を召還するのがやっとのはずじゃ」

（という事は……俺は相当に運が悪いってことか……）

１国で年に数人。

世界にどれほどの国があるか判らないが年間にしても２００～３００人といったところか。

亮真は決して自分が運の良い人間だとは思っていなかったが、老人の言葉を聞いて自らの運の無さを呪わずにはいられなかった。

「成る程……では次に何故今も暗殺者を？」

５００年前に召還された。
その事は良い。
だがそんな昔に召還されたとして何故、今暗殺者などと言う家業をしているのだろう？
そもそも一族単位の暗殺者とは一体どういうことなのだろうか？
亮真はその点を確かめたかった。

「わが一族は乱波（らっぱ）よ」

亮真とサクヤ以外の誰もが老人の言葉をきょとんとした顔で聞いている。
乱波（らっぱ）とは素波（すっぱ）とも草とも呼ばれるある特定の職業の事である。
他にも様々な名前で呼ばれるが尤も有名でなじみ深い名前はこれだろう。
忍者。
そう、サクヤの一族は忍者の一族だったのである。
（成る程ね……先祖が召還されてから５００年も経っているのに一族がこうして残っている訳が判ったぜ……）
確かに忍者が戦乱の大地（アース）に召還されればその技術を使わないなどと言う事はありえない。
彼らは５００年の間を自らの戦闘技術を磨く事で生き抜いてきたのだ。
そして乱波であるという事はサクヤ達は暗殺者と言うだけではない、破壊工作も、情報かく乱もそして要人の警護もできるという事だ。

「そういう事ですか……ちなみに何処の流派ですか？」

「さあな、乱波は乱波。盗み奪い殺す。ただそれだけよ」

確かに流派の名前など意味は無い。

人の世に広める事を考えれば必要だろうが、一族でのみ伝えられていくのなら他人の技術と区別する為の名前など必要が無いのだ。

「ちなみにご先祖様が住んでいた地方の名前って判ります？」

「地名はしらん。ただ大きな湖の近くの山に住んでいたとだけ伝わっておる」

老人は亮真の問いに正直に答えた。
隠す価値など無い情報だからだ。

（湖……琵琶湖か？という事は伊賀か甲賀の出身ってことか……）

まぁ有名な忍者の里である。
可能性としては十分にあり得る。

「そうですか……では最後に……貴方は先程、俺の問いに対して『それがわが一族の運命よ……』と言われた。……どういう意味です？」

亮真の最後の疑問だ。
そしてこの答えは亮真にとっても予想が付かない。
日本の忍者は特定の地域に住居し必要に応じて雇い主を探すか、特定の主に仕えるかのどちらかだ。
戦乱の大地（アース）ならいくらでも彼らの力を欲する権力者は腐るほど居た筈だ。
それが５００年も放浪している。
何か特別な理由が無ければ考えられない状況だ。

「ふむ……それは部外者には言えぬ。一族の掟に触れる故にな」

老人の顔が意味深に歪んだ。

「そうですか、失礼しました」

亮真は老人の答えを聞くと素直に頭を下げた。

「ほぉ……貴様、興味が無いのか？」

あまりに亮真の態度があっさりとしている為か老人が探るように尋ねる。

「俺は他人の秘密を探る趣味は無いんでね。……それに好奇心は猫を殺すともいうしね」

人間として、他人の秘密に興味を持つのは本能ともいえる。
隠されれば隠されるほどに興味を惹かれるのは当然だ。
だが、秘密が秘密として隠されているにはそれなりの理由がある。
他人にとっては大した事が無くとも本人にとっては命より重い秘密というものだってあるのだ。

（余計な事を知って命を狙われたら堪らないからな……）

命の価値が軽いこの世界で余計な危険を冒す必要などない。
亮真はそう考えていた。

「大した自制心だな……善し気に入った！　ワシの名は厳翁（げんおう）、伊賀崎厳翁（いがさきげんおう）じゃ。以後よろしゅうにのう」

「以後？……ですか？」

亮真は厳翁の言葉に戸惑った。
あまりいも突然の話だったからだ。

「？何を言っておる。サクヤを助けたのも自分の仲間にしたかったからであろう？ならその祖父であるワシも一緒に仲間になってやるというとるんじゃ！」

厳翁はしてやったりという顔をした。
今までしかめっ面をしていた分、笑うと好々爺と言った感じになる。

「お爺様……？」

サクヤは恐る恐る尋ねた。

「なんじゃサクヤ不満でもあるのか？……任務に失敗したお主は本来なら死なねばならぬ。じゃがせっかく御子柴殿が助けて下さった命じゃ。この方の為に使ったとて罰はあたるまい？」

厳翁は亮真の事を御子柴殿と呼んだ。
若造・貴様からランクアップしたということは間違いなく亮真に仕える気らしい。

「え……いえ……はい」

サクヤも厳翁の決意の固さを悟り頷かざるを得なかった。

「かまわんじゃろ？御子柴殿」

厳翁の問いに亮真は考え込んでしまった。

確かに日本人ならば助けてやるつもりだった。
サクヤの暗殺者の力量を上手く利用したいと思ったのも確かだ。
だが突然やってきた厳翁（げんおう）の所為で話がとんでもない結末を見せ始める。

（どうなってる？）

亮真にとっては渡りに船ともいえる。
ローラ・サーラ姉妹以外はあくまでも同盟関係にあるにすぎない。
リオネやボルツと言った傭兵団はまだ個人的に信用できるが騎士団に関して言えば何時裏切られても不思議では無い。
彼らが亮真の指揮に従うのはルピス王女が亮真の指揮を認めているからに他ならない。
もしルピス王女が亮真を見限れば、騎士達は途端に亮真の指揮を無視するだろう

だから腕利きが亮真の仲間になる事自体は歓迎するべき事だ。
だが……
（話が急すぎる……俺を殺しに来たやつらだぞ？だが……確かにこいつらの腕は利用価値がある。本当に味方になるなら悪くない……問題はこいつらが何が目的でそんな事を言い出したか……もし本気だったら……）

亮真の視線が厳翁（げんおう）に突き刺さる。
両者の間で火花が散った。

「良いだろう」

亮真は決心した。
使える手駒は欲しいのだ。

（諜報が出来る人間は欲しい……問題はこいつらの持ってくる情報が正しいかどうか……いや……そこは俺の判断力次第だな　）

「ではわが孫娘の咲夜（さくや）共々仕えさせて頂きますぞ。主殿　」

厳翁（げんおう）は咲夜を促して亮真へ頭を下げた。

第2章第27話（後書き）

何時もウォルテニア戦記改訂版をご覧下さりありがとうございます。

今後ともよろしくお願い致します。

第2章第28話

異世界召喚171日目【暗殺者】その5：

「お爺様！何故あのような事を！」

咲夜は抑えていた苛立ちを厳翁（げんおう）へとぶつける。

此処は堀を渡ったところにある森の中。
周囲には咲夜と厳翁（げんおう）の二人だけである。
夜空に浮かぶ月だけが二人のやり取りの目撃者だった。

「何を怒っておる？」

厳翁（げんおう）の冷静な声が余計に咲夜の心を刺激する。

「何をって……あの男の本気で仕える気ですか！」

「不満か？」

咲夜の怒りを厳翁（げんおう）は軽く受け流す。

「不満が無いわけが無いでしょう！　第一、請け負った依頼を放棄した上に暗殺の対象者に仕えるという事を素直に頷けるはずがないでしょう！大体何故お爺様があの場に現れるのです！今回の仕事は私に一任されていたはずです！」

咲夜の口から次々に不満の言葉が飛び出る。
彼女は18歳にして一族の若手の中でも腕利きと評判をとっている。

其の自分が仕事を失敗したうえに捕らわれの身になった。
それだけでも腹立たしいのに、その場に一族の長老の一人である祖父が姿を現す。
一族の長老の一人として現場に出てくる事が無い厳翁(げんおう)がその場に出向いたという事は、咲夜の実力を長老衆は疑いの目で見ていると言う事の他ならない。
自他共に咲夜の実力を認めていると思っていただけに咲夜の心は屈辱で張り裂けそうだった。
その上、祖父は勝手に自分と咲夜を御子柴亮真に仕える事にしてしまった。
怒りを持つなと言う方が無理であろう。
しかし、血の繋がったの祖父とはいえ咲夜と厳翁(げんおう)、二人の間には絶対的な身分の差がある。
何れは祖父の跡を継いで長老衆の一人になるとはいえ、それはまだまだ何十年も先の事、今はタダ腕が立つ下忍の一人に過ぎない。
其の長老に文句を言うのだから余程頭に血が上っていると言える。
（こやつ……まだまだ心の修行が足りぬ……この程度で激昂するとは……まぁ良い……今回は見逃してやるとするかのう……）
怒りの冷めやらぬ咲夜に冷たい視線を向けながら厳翁(げんおう)は心の中で呟いた。
普段なら咲夜のこのような物言いを許す厳翁(げんおう)では無い。
だが彼は今、すこぶる機嫌が良かった。
咲夜を殺す事をしなかったのだから。

「貴様、誰に口を利いている」

その場の空気が殺気に満ちる。
厳翁(げんおう)の目が糸のように細まり咲夜の顔に突き刺さる。

ガタッ……

咲夜の背が氷水を浴びせられたように冷気が走り、膝から崩れる。
（殺される……ハッ！私……は何を……）
自分の言動が如何に身分を弁えぬ言葉だったかを悟り、咲夜の心が一気に冷める。

長老衆は老いぼれの養老院ではない。
確かに彼らは暗殺などの依頼を受ける事は無い。
だがそれは彼らが弱者であるという事の証ではないのだ。
彼らは人生の殆どを汚れ仕事に従事してきた。
そして齢６０を数えるまで生き残ってきた生え抜きの猛者である。
腕利きとはいえ１８歳である咲夜とは命のやり取りをした経験の量は比べるまでもない。

「も……申し訳ありません」

咲夜は謝罪の言葉を絞り出すだけで精一杯になった。
叩き付けられた殺気が咲夜を現実へと引き戻す。

「よい……」

厳翁は足元にひれ伏した孫娘から視線を外した。

「まぁお主の言い分も判らぬではない。だがな、あの男を殺すのは惜しい」

「利用価値があると？……しかしそれでは契約が……」

咲夜は恐る恐る問い返しす。
暗殺者にとって契約は非常に重大だ。

信用の無い物に暗殺の依頼など来るわけが無い。
ましてや、暗殺対象に勝手に仕えるなど許されるはずもない。
一族の死活問題になりかねないのだ。
だが咲夜の抗議を厳翁は鼻で笑った。

「くだらん。契約など意味は無い！　貴様もわが一族が受けてきた屈辱は嫌という程に知っておろうに！お前は本当にあのゲルハルトとかいう貴族が、我らに約束した報酬を払うと本当に思っておるのか？」

厳翁の言葉に咲夜は抗弁の言葉を無くした。
契約前では調子の良い事を並べながら、いざ仕事が終われば報酬の支払を渋るのは当たり前。
悪辣な人間なら兵を出して殺しに掛かる。
咲夜もまた過去に幾度も依頼人から裏切られてきている。
ましてや、ケチと評判高いゲルハルト公爵である。
今回提示してきた金額はかなり高額ではあるが、それがまともに払われるかどうかは別の問題なのだ。

「ですが……それでは我らに依頼してくる人間が今後減るのでは……？」

「構わん、別にこの国で仕事が出来なくなろうとも困りはせん。所詮我らは漂泊の民。別の国で仕事をすれば良いだけよ。ワシらの腕を欲しがる国はどこにでもあるしのぅ。それよりワシはあの男が気に入ったのじゃ……ひょっとするとアヤツ……」

厳翁は其処で言葉を切った。

（……まだ咲夜には言えんな……それに長老衆に報告もせねばなら

んし……しかしあの男……ただのお人好しなら期待外れだが……もしそうでないなら……ワシらの放浪は終るかもしれん……）

厳翁（げんおう）は心の中で呟くと今日の出来事を思い出す。

咲夜が捕らえられた時、厳翁（げんおう）は孫娘の死を覚悟した。

一族の中でも腕利きである咲夜が暗殺に一度は失敗した相手である。

長老衆としても、ただ命令を与えるだけというわけには行かなかった。

だから祖父である厳翁（げんおう）が保険として出張ってきたのだ。

咲夜の実力を確認するのと共にもし彼女が2度目の暗殺に失敗した其の時は、厳翁（げんおう）自らの手で任務を遂行する為に。

だが祖父の色目を抜きにして見ても咲夜の行動は大したものだった。

身軽さ、気配の消し方、覚悟の決め方。

どれもが十分に一流の水準を誇っていた。

だが相手が悪かった。

悪すぎたと言ってよい。

長く修練を積んだ分、厳翁（げんおう）の夜目は咲夜よりも利く。

上に張られた天幕の一部を切り裂いて作った覗（のぞ）き穴から、厳翁（げんおう）は亮真の策の一部始終を見ていたのだ。

（寝台の上に鎧を着せた死体を置いて自らは鎧を着込んで置物のように座っているとはな……）

亮真は天幕の隅に置いてある鎧を着込んで置物のように座っていた。

ただそれだけのことだが、天幕内に明かりが無ければ十分に騙せるのだ。

そして寝台の上に鎧を着せた死体を置いて咲夜が来るのを待つ。

まさか寝ている人間が鎧を着込んでいるなどとは思いもしない咲夜

は、振り下ろした刀が鎧に弾かれ一瞬の隙を作ってしまった。
隙を作った人間の急所を打つなど御子柴亮真にとっては容易い事だっただろう。
厳翁(げんおう)は亮真の策に関心するしかなかった。

「あの……お爺様……？何故あの男に仕えるのです？」

黙りこんで思案に耽(ふけ)る厳翁《厳翁》へ咲夜が声をかけた。
咲夜としてもこの点だけは祖父の怒りを覚悟してでも聞かなくてはならない。

「わが一族の放浪が終るかも知れないからだ」

「え？！」

厳翁(げんおう)の言葉に咲夜は驚きを隠せなかった。
彼らの一族は５００年の長きに渡りこの世界を放浪してきた。
それが終わりを告げるかもしれないという。

「それはどういう事ですか……？」

「お前はまだ知らなくてよい……あくまでも可能性に過ぎぬのだからな……さて、話はもうよいか？貰った期限は2日だからな。もう行かねば間に合わなくなるぞ」

厳翁(げんおう)はそういうと北に向けて森の中を進みだした。
一族が野営しているのはイラクリオンの北２０Ｋｍ程の所にある森の中だ。
亮真から貰った猶予は2日である。
鍛え抜かれた身体能力を優れる二人と言えど、2日の期限内で往復

した上に長老衆への報告をするとなればギリギリの日程である。

「はい」

咲夜は頷くと厳翁（げんおう）の背を負って歩き出す。

――――――――――――――――――――――――――――――――

異世界召喚１７２日目

「一体どういうおつもりだ！そもそも咲夜が使命を果たせぬ時は厳翁（げんおう）殿が変わりに遂行するという手筈だったではないか！それを勝手に中止し暗殺の対象に仕える約束をしてくるとは！一体何をお考えか！」

長老の一人が罵声を張り上げた。

それも当然と言えよう。

祖父の横に座らせられた咲夜としても彼が言う糾弾の正当性は認めざるを得ない。

「そ……それは……」

だが咲夜としても言いたい事はある。

少なくとも彼女は任務の遂行を諦めるつもりは無かったのだ。

長老の一人である祖父に従ってやむなくそうなっただけの事。

咲夜はそう言おうとしたした。

「黙れ。貴様になど聞いてはおらん……だいたい貴様が暗殺を失敗

しなければこのような事は起こらなかったのだぞ！」

別の長老が咲夜の言葉を打ち消した。
粗末な板張りの小屋に怒声が響く。
本来この場に居る事が出来るのは一族の行く末を決める5人の長老のみである。
厳翁（げんおう）の孫娘であっても所詮下忍でしかない咲夜が居て良い場所ではないのだ。
だが当事者である以上、居ないわけにもいかない。
少なくともキチンとした報告をしなければならない。

「まぁまぁ、そう声を荒らげんでも。咲夜にしてみれば、厳翁（げんおう）殿の命令に従っただけ。下忍なら当然の事でしょうよ、それを責めるのは酷というものでしょう」

「ほんに……それに厳翁（げんおう）殿がただ気まぐれでそのような事をしたとは思えん、何か理由があるならそれを聞くのが先では無いかぇ？」

怒声を上げた長老を宥めてくれたのは、お梅とお冴という女の長老である。
厳翁（げんおう）を含めてお梅とお冴、そして竜斎と甚内と言う名の5人が一族を統べる長老衆であった。

不満はあっても同じ長老からの取りなしである。
怒声を上げた竜斎も咲夜を責めた甚内も矛を収めるしかない。

「しかし厳翁（げんおう）殿、竜斎殿の言う事も尤もな事じゃ……納得のいく理由を聞かせてもらわんとのぅ」

お梅はそういうと鋭い視線を厳翁（げんおう）へ向けた。

「それはそうじゃ。ただ単に気まぐれを起こしたわけではないでしょうからのぅ」

お梅に同調してお冴も厳翁の方に顔を向けた。

彼女達はあくまでも中立。

別に厳翁へ加担するつもりは無い様だ。

「あの男は初代様達が求めておいでの男かもしれん……」

厳翁の言葉にその場の空気が凍りつく。

「厳翁殿……それは……」

長老達の顔に驚愕の色が浮かんだ。

「それはまことですか？……厳翁殿」

「それが真なら……我らは……いかん！其の方をすぐにお迎えせねば！」

竜斎の言葉に甚内が頷く。

普段冷静な長老衆が狼狽する様をみて、咲夜は驚きを隠せなかった。

「止めよ！……可能性と言ったはずじゃ」

「「しかし！」」

厳翁の制止に竜斎と甚内は揃って講義の声を上げる。

「くどい！」

厳翁（げんおう）は声を荒らげた。

「まぁ待ちなされ、厳翁（げんおう）殿とて可能性の話をされておるにすぎぬ…時に其の者が初代様方と同じ日ノ本（ひのもと）の民なのは間違いないのかのう？」

「我らと同じく黒髪に黒眼、肌は黄色い。それに咲夜の事を日本人と呼びおった……あの男が日ノ本（ひのもと）の民なのは間違い無い。」

「そうかい、なら血に関しては問題ないようだねぇ……後はその男の資質と心か……」

お梅の問いに答える厳翁（げんおう）の言葉を聞いてお冴は一人頷いた。

「お梅殿、お冴殿、なら直ぐにでも其の方をお迎えして確かめた方が良いのではないか？」

「竜斎殿のいうとおりじゃ！たしか其の方はゲルハルト公爵と戦の最中じゃ！もし何かあれば如何致す？わが一族の宿願を果たす機会が再び遠のくのじゃぞ？」

竜斎と甚内の二人は積極派な人間のようである。

それに対しお梅とお冴の女性陣は慎重派なようだ。

「なぁに、急ぐことは無かろうて。初代様方が望まれる男なら必ずや自らの力で生き残るはずじゃ」

「ほんに……５００年も待ったのじゃ……お迎えするのは其の方の

資質を確かめた後でも良かろうて……」

長老衆5人の内3人までが慎重論を唱える以上、竜斎・甚内の二人にしても異論の余地は無い。

「まずはワシと咲夜の二人であの方に仕えてみる。なぁに、器がはっきりするのにそれほど時間は掛かるまいて。まぁ長くてもゲルハルト公爵との戦が終るまでにははっきりするだろうよ……」

「厳翁殿がそう言われるのならばアタシには異存はないのぉ」

「お梅殿と同じじゃぁ」

厳翁の言葉にお梅とお冴の二人が賛成すればもう決まったようなものだ。

「本当に二人だけでええのか？　それこそ一族の若い者をみんな付けたってええんだぞ？」

「ワシも甚内殿に賛成じゃ。戦場では何が起こるかわからん！　数はおった方がええのと違うか？厳翁殿」

竜斎と甚内は厳翁に遺恨があるわけではない。
純粋に二人と亮真の事を心配して提案をしているのだ。
それを判っているから厳翁も無碍な断り方はしない。

「いや……事の経緯を考えればあの方がワシらを信じる道理が無い。無断で若い衆を連れていけば勘繰られるのが落ちじゃ。それにあくまでもこの話は可能性があると言うだけの事、若い衆に話すのはまだ早いじゃろうて」

元々咲夜が亮真の暗殺に行ったのが事の発端である。
日本人と先祖に日本人を持つ一族であるから、同郷の人間と言えなくもない。
だがそれだけで亮真が厳翁達を無条件で信じるはずもない。
今は様子見をしているというのが亮真の本心だろう。
もし少しでも怪しまれるような行動をとれば亮真は躊躇なく厳翁と咲夜を殺すだろう。

「そうじゃのぅ……疑いを掛けられるような行動は取るべきではないのぅ。それに……確かに厳翁殿に目利きをしてもらうのがスジじゃなぁ」

甚内の言葉に残りの４人が頷いた。
彼らは湧き上がる喜びを必死で押し殺す。
御子柴亮真という人間が探し求めている人間かどうかはまだはっきりとした訳ではないのだから。

第２章第２８話（後書き）

何時のウォルテニア戦記【改訂版】をご覧下さりありがとうございます。

作者の励みにもなりますので感想や評価ポイントなどを下さると大変うれしいです。

今後とも本作品を宜しくお願い致します。

第2章第29話

異世界召喚174日目【決戦】その1：

「亮真様……本当に信用して宜しいのですか？」

「あぁ？……厳翁（げんおう）達のことか？」

そう言いながら亮真は手に握っている刀を抜き放つ。

「どうだ？良い輝きをしてると思わないか？」

亮真はローラの問いには答えずに刀の輝きに見入っていた。

「亮真様！」

「なんだ？そんなに不満か？」

亮真はローラの剣幕に辟易（へきえき）としながらも尋ねるしかなかった。

「はい……彼らは亮真様を暗殺に来た暗殺者ですよ？何時裏切るか……」

「そんなことは判り切ってただろう？最初から泳がせるつもりだったんだし……まぁ予定は狂ったけどな」

「そんな事を言って！本音は其の刀ですか！？」

ローラの目がつり上がり厳翁が亮真へ献上した刀へと突き刺さる。

「ま！無関係じゃないな！確かに」

亮真は悪びれずに認めた。
ごまかしても仕方のない話題だからだ。

「それにあいつらはキチンと期日内で帰ってきただろう？」

亮真にそう言われればローラとしてもこれ以上強くは言えない。
何しろ、首脳陣の中で亮真だけが厳翁達が返ってくる事を信じていたのだから。

一族の人間に状況を報告したいので陣を空けたいと申し出た厳翁と咲夜の願いを、亮真は快く承知した。
ローラ・サーラはもとよりリオネやボルツも激しく抗議したが亮真は耳を貸さなかった。
本当に自分へ仕える気なのかどうかは判らなかったが、少なくとも彼らがこのまま何処かへ逃走する可能性だけは無いと考えていたからだ。
暗殺を諦めたのならむろんのこと、諦めていないのであっても標的である亮真のそばにいた方が都合がよいのは間違い無いからだ。

「それはそうですが……」

亮真の言葉を聞いてもローラの顔は不満の色を浮かべたままだった。
それも致し方ないのかもしれない。
マルフィスト姉妹は亮真と半年近く行動を共にする中で、亮真に対しての忠誠心をより篤くしていた。
それは単純に亮真へ盲従（もうじゅう）するという事には繋がらない。
彼女達は自らの意思で考え、行動する。

亮真の意思は尊重するし亮真の害になるようなことはしないが、姉妹は諫言や忠告を積極的に行うようにしている。
御子柴亮真と言う人間が、強く賢い人間であっても無敵の英雄では無い事を理解していたからだ。
（嫌われてもいい。疎まれたって構わない……亮真様の意識の盲点を指摘してあげる事が私達の役割）
そう、彼女達は自らに課しているのだ。
そして亮真もまた彼女達姉妹の心を理解していた。
だから亮真は彼女達姉妹を信頼しているのだ。

「まぁローラの懸念は理解できるし、それは正しいと思う。ただ純粋な意味で俺が信頼できる手駒はお前達だけだ……それは理解しているな？」

亮真の問いにローラは頷いた。
自らの置かれた状況が決して楽観視出来る状況では無い事をローラもサーラも十分に理解している。

「ですが……信用出来ないというのなら、あの者達とて同じではないでしょうか？」

ルピス王女から預けられた騎士と自分を殺しに来た暗殺者。
ローラの目から見れば、まだルピス王女から預けられた騎士達の方が信用できるように思える。
それは咲夜と厳翁に陣屋の中を案内しているサーラと同じ意見だった。
信用できないのは同じだが、騎士はルピス王女の命令が無ければ亮真を害そうとはしないはずだ。
だが自分達の主である亮真はローラとは全く逆の懸念を抱いているように見える。

厳翁達の方が騎士よりも信用できると言わんばかりなのだ。

「同じだよ、ただローラ……お前は一つ勘違いをしている……まぁそれはいいか。宿題にしておいてやるから判ったら言いに来な」

「宿題……ですか？」

「あぁ、サーラやリオネとかと一緒に考えてみると良い……あ！ボルツはダメな。あれは意味を知ってそうだからな」

亮真は最近ローラ達に考える力を付けさせるためにこんな事を言うようになった。

手駒の数が少ない以上、駒の持つ１つ１つの力を上げていくしかない。

亮真の行動の理由を考えさせることは、考える力を付けるとともに御子柴亮真と言う人間の理解にも繋がる一石二鳥の学習方法なのだ。

そして人生経験の長いボルツは流石に知恵が回る。

現場指揮官として優秀だから引き抜くことは出来ないが、亮真としてはマルフィスト姉妹と同じく傍について意見を貰いたいとすら思っていた。

「判りました……でも本当に其の刀が理由なんじゃないんですか？」

ローラの目が再び亮真の手に注がれる。

「はぁ……そんなに信用ないんかね？俺って……流石にこんな刀一本貰ったからって信用する程単純じゃないぜ？」

亮真はやれやれと首を振る。

だがローラの追撃は止まらない。

天幕の隅に立てかけられた槍を見てローラの嫌味が炸裂する。

「確かあの槍もあの者達からの献上だったはずでは？」

其の槍は今までローラが目にした事の無い形状をしていた。
西方大陸で一般的使われている槍は剣の刀身のようにまっすぐな穂先が付いたものが殆どだ。
また斧槍（ハルバート）と呼ばれる槍の穂先の横に斧の刃を取り付けたような武器もある。
だが刀身の左右共に鉤が付いている十文字槍など見た事が無い。
それに良く見れば柄の部分に何やら鉄製の管が被さっているように見えた。

「アぁ……まぁ確かに其の十文字管槍（じゅうもんじくだやり）も貰ったけどな……でも物を貰ったからって信用したんじゃないぞ？本当だぞ？」

亮真の言い訳がましい言葉にローラはこみ上げる笑いを抑えるのが精いっぱいだった。
念を押して言い訳をすればするほどドつぼに嵌るというやつだ。

「まぁ結構です。亮真様が考えられた末での決断ならば私達に異存はありません」

そういうとローラは亮真へ頭を下げ天幕を後にする。

ローラとしてももう亮真へ言うべき言葉は無い。
最悪亮真が騙されたとしてもローラ達は既に覚悟している。
自らの身を盾にしてでも亮真の身を守る事を。

「怒らせたかな？」

天幕に一人残された亮真は呟いた。

最近気が付いた事だが、ローラやサーラは何処となく従妹の飛鳥に似ている。

亮真に意見を言う時などそっくりだ。

「良いか……貰った物に魅せられてるのは事実だしな……」

実際、厳翁が献上した刀は予想以上に良い物だった。

圧重ねと言わせる通常以上の厚みを持った刀身。

戦場で使うのに適した長さ。

そして物を貰った事以上に嬉しいのが、日常の手入れや使った後の研ぎなおしを厳翁が請け負ってくれた事だ。

亮真自身は日常の手入ならともかく、欠けた刃を埋めるための研ぎ直しの技術は持っていない。

そして研ぎの技術に関してはどうしても専門の技術者が必要なのだ。

実際に刃物を使うと刃は欠けるし、人を斬れば其の油と血で鋭さが落ちる。

刀の柄は滑らないように柄糸と呼ばれる糸が巻かれているのだが、人を斬れば柄糸まで血が垂れる。

其の血が柄糸を腐らせるのだ。

美術品としての価値を求めているのではないので、刃紋の美しさや鍔の細工などはどうでもいいが、切れ味の落ちた刀を持って戦場に行けない。

そうなると、手入が出来ない刀と言うのは武器としては失格と言う事になる。

其の問題を厳翁が解決してくれるのだから、亮真としては感謝する他にない。

「態々条件にしただけの価値はあったか……」

厳翁の願いを聞いたとき、交換条件として亮真が出したのがこの刀の献上である。
咲夜の持っていた刀を見て思いついたことだったが、想像以上に上等な物を献上してくれた。

「ま！だからと言って信じた訳じゃないけどな……」

刀と槍を献上してくれた事自体は感謝している。
亮真が祖父から仕込まれた兵法は刀や槍を使う。
大地世界の槍や剣で応用できなくはないが、やはり手に馴染んだ刀や十文字管槍の方が戦いやすいのだ。
だが、物をくれたからと言って厳翁を信じる程、亮真は甘くは無い。
（まぁ後はゲルハルト公爵との決戦が終るまで、余計な事を興さないように祈るか……問題は例の策がどれくらい効いてるかだな……ケイルを撃退して5日……予想以上にゲルハルト側に動きが見られない……俺の策が効いてのことか、それとも何か裏があるのか……どちらにしろルピス王女の到着まで後2日……決戦はもうすぐか……）

亮真は神を信じない。
だが今は何かに祈りたかった。
これから起こるゲルハルト公爵との戦の勝利を。
この日の夕日がゆっくりと地平線に沈んでいく。

「編成は済んだのか！？」

ゲルハルト公の執務室に彼の怒声が今日も響き渡る。

ケイルが大敗した後、ゲルハルト公は貴族派の全てに動員令を発していた。
もともとイラクリオンに集めていた3万程に加え、自分の領地で出兵の準備をしていた貴族派の面々に檄を飛ばし、集結させようとしたのだ。
厳命した期日は2日。
だが貴族達の集まりは思った以上に悪い。
いや、問題は貴族達だけではなかった。

「いえ。それが予想以上に手間取っておりまして……」

傍に控える副官がゲルハルトの怒りが頭上に降り注ぐ事を覚悟して報告する。

「バカな！何をやっておるのだ！命令を発して既に3日が過ぎるのだぞ？貴族共を脅しても構わん！明日中には兵をまとめてイラクリオンに入れと伝えるのだ！」

「それが……問題は貴族の方々だけではありませんので……」

副官は必死で食い下がった。
中途半端に命令を受けて実行できなければ自分が責任を負わなければならない。
無理な物は無理と主に伝えなければ自分の首が飛びかねないのだ。

「どういう事だ！何が問題なのだ！」

ゲルハルトの言葉に副官は恐る恐る問題を説明する。
それはゲルハルトの予想をはるかに超える深刻な問題だった。

（一体どうなっている！何故農民共が戦を嫌がるのだ！討った敵の装備は取り放題だと約束しているのに！）
副官の状況説明を受けたゲルハルトは彼らを全て追い出し、執務室の椅子に深々と腰掛けていた。
（いや……原因は判っている。あの男の所為だ……）

ゲルハルトの脳裏に御子柴亮真の名前が浮かぶ。
副官から受けた説明はこうだ。

ゲルハルトの総兵力はケイルが5千の損害を出したため6万である。
これはゲルハルトが直接収める領地と自らが盟主である貴族派の全ての農民を徴兵した数となる。
此処で問題となるのは、イラクリオンには6万の兵力を維持するだけの生産能力が無い事だ。
いや、おそらくどの都市でも恒久的に6万の兵力を張り付ける事は出来ない。
まぁオルトメア帝国程に大きな国はまた違ってくるが、少なくともローゼリア国内の都市では無理である。
つまり兵力6万を全てを使う事が出来るのは限られた短期間のみと言う事になる。
そして今、ゲルハルトはわずか2千の兵である亮真を攻める為に総動員令を発した。
これはルピス王女が亮真の作った橋頭保を使って押し寄せてくると考えられる為でもある。
どうせルピス王女と総力戦をやるならば目の前に居る目障りな亮真を先に叩き潰したいと考えるのは自然だ。
だから発令した動員令だがその効果が上がらない。
理由は農民達の間で交わされる噂である。
それはイラクリオンを中心に周辺の農村や貴族派の領地にまで其の

広がりを見せていた。

（ケイルの愚か者が！此処でもワシの邪魔をするのか！）

ゲルハルトは心の中で毒づいた。
もし目の前にケイルが居れば其の手で斬り殺しかねない。
それほどの怒りだ。

亮真の謀った水攻めによって7千名の内5千もの命が消えた。
その事実が誇張されイラクリオンの中を駆け巡る

「おい！知ってるか？ケイル様が負けたんだってよ！」

「あぁ。なんでも敵の4倍近い兵力で負けたって話だろ？」

「らしいな！なんでも指揮した軍の殆どが殺されたらしいぞ？」

「おぉおっかねぇ……」

「なぁ？敵の指揮官の名前ってしってるか？」

「あぁ！なんでも御子柴亮真って言う血の涙もない悪魔らしいぞ！」

「なんだそりゃ！悪魔だって？バカらしい！」

「バカ！そんなこというもんじゃねぇ！なんでもそいつはテーベ河を氾濫させて兵を溺死させたんだって言うぞ！」

「本当かよ？……法術を使ったって……無理だろう？それは？いや人間にそんなことできるのか？」

「だから悪魔だっていうんじゃないか！」

そんな根も葉も無いような噂が無責任に広がっていく。
亮真が聞けば笑ってしまうような噂だが、農民達のとっては笑えない。
なぜなら其の悪魔が自分達の敵なのだから。

「おい……それってやばくないか？」

「あぁ。敵には情け容赦ないって言うしな……」

「捕虜も皆殺しにあったって聞いたぞ？」

事実と嘘が一つの虚像となって亮真のイメージを悪魔に変えていく。
そんな噂が流れる中での動員令である。
余程の命知らずでもない限り、自分から兵に志願する人間はいない。
結果、ゲルハルトのもとに集まったのは総動員の命令を掛けたのにも関わらず3万程であった。

「糞っ！」

ゲルハルトの口から恨みの言葉が飛び出した。
状況はゲルハルトの予想を超えて悪くなっていく。
副官には騎士を農村部に派遣して強制的に兵をかき集めてくるように厳命したのだが、予定の6万と言う数字はとても集まらないだろう。

「5万がいいところか……いや……最悪5万を切りかねないか……」

あまりに無理強いをすれば村を棄てて逃げ出しかねない。
それほどまでに御子柴亮真という名前への恐怖が蔓延していた。
兵の質という点ではルピス王女率いる騎士団には到底敵わない。
どうしても兵数で勝負するしかない。
だが其の肝心の兵が集まらないのだ。

「まさか……これがすべて敵の策ではないだろうな……？」

ゲルハルトの脳裏に不吉な仮定が浮かぶ。
ケイルが負けた事自体は忌々しいが事実だ。
だがなぜこれほどまでに詳細な内容が市民に流布しているのか。
あまりにもゲルハルトにとって不利な状況である。
偶然ならば神を絞殺したくなる。
だがもし必然ならば？
7千の兵を阻むだけではなく、もっと大きな視点で策を施していたとしたら？
単純に敵兵を水で溺死させる事が目的ではなかったとしたら？
そして、今回の噂を流した人間が御子柴亮真だったとしたら？

「いや……あり得ぬ……そんな事は断じて！……それでは、それではまるで千里眼を持つ本物の悪魔では無いか！」

ゲルハルトは必死で脳裏に浮かんだ恐怖を振り払う。
だが、彼の心は確実に御子柴亮真と言う人間への恐怖を持った。
そしてそれが後に御子柴亮真の運命を変える事になる。

第２章第２９話（後書き）

何時もウォルテニア戦記改訂版をご覧下さりありがとうございます。
この話で遂に主人公のメイン武器が出ました。
尤も戦場ではもう１個の武器を使うので刀を使う描写は少ないはずですが……

今後も頑張って更新しますのでよろしくお願い致します。

※作者の励みになりますので、もしよろしかったら評価ポイントや感想、レビューなどをして頂けると嬉しいです。

第2章第30話

異世界召喚175日目【決戦】その2：

「スドウ……頼む知恵を貸してくれ……」

夕日に赤く染まったイラクリオンの城の一室でゲルハルト公爵はフードで顔を覆った男に頭を下げた。

「公爵様、お顔を上げて下さい。私の様な人間に貴方様の様な高貴なお方が頭を下げるなど」

フードの奥から礼儀に沿った返礼がでる。
もっとも男の口調は慇懃無礼ともいえたが。

「頼む！ワシにはお主しか頼れるものがおらんのだ！」

普段のゲルハルトからは考えられないほどの低姿勢である。
だがスドウはフードの奥に隠された顔に嘲笑を浮かべていた。
なぜこれほどまでにゲルハルトが低姿勢なのか、その理由を知っていたからだ。

話はこの日の午前中に戻る。

「では！貴様は軍の全権を渡せと言うのか！ホドラム！」

「勿論です。あなた方が指揮すれば勝てるものも勝てなくなる。それがお分かりになりませんか？ゲルハルト公爵閣下」

「貴様！落ち延びてきた分際で何を偉そうに！」

今後の方針を決めるはずの会議は今やゲルハルトとホドラム、両者の主導権争いの場と化していた。

「しかし、私が指揮をとれば間違いなく勝てるのですぞ？失礼ながらゲルハルト公は指揮ができる人材をお持ちではないようだ。ならば非才ながら私が指揮をとる方がよろしいのでは？」

初めゲルハルトは指揮権の一部をホドラムに与える事で、上手く利用しようと考えていた。

だがホドラムにしてみれば、態々実戦経験の無い人間を頭にする必要はない。

自らが指揮するほうが効率が良いからだ。

会議開始早々にホドラムがゲルハルトの提案を蹴ったことにより、会議は紛糾している。

「何を言われる！ゲルハルト公の配下には歴戦の勇士も多い！ホドラム殿に指揮をお任せする必要などない！」

「ほう？そのような強者が居るとは初耳ですな……何と言ったか？４倍の兵を誇りながら敗れた……そうそうケイルとかいう騎士の名なら耳にした事があるのですが」

ホドラムの顔に侮蔑の色が浮かぶ。

ホドラムに言い返した副官はホドラムの言葉を聞いて返答に詰まってしまった。

事実としてケイル以上の指揮官をゲルハルトが持っていない為だ。

「そっそれは……」

「第一！私はそのような能力もない人間を軍の指揮官に任命したという事実が、ゲルハルト公爵閣下ご自身の能力をも表していると考えているのですがね？」

「な！」

「無礼な！」

ホドラムの傍若無人とも言える発言を聞き、ゲルハルトの副官達は色めきたった。

「ほう？事実を指摘されて怒りを表すとは、器がしれますなぁ？ゲルハルト公爵閣下！」

ホドラムの口調が完全にゲルハルトを馬鹿にしている。
慇懃無礼？
いや完全に無礼としか言いようのない状況だった。

「貴様……何を考えている……？」

ゲルハルトはホドラムに尋ねた。
（何故だ？なぜこれほどまでに強気に出れる？……奴の指揮下には騎士が２０００だぞ？こちらは編成中とはいえ2万は居る……それがなぜ？）
確かに御子柴亮真の所為で状況が芳しくない事は事実だが、ホドラムがこれほどまでに強硬な姿勢を見せる根拠がゲルハルトには理解できなかった。

「私はこの度の戦に勝つ事を望んでいます。ただ勝つために必要な事を主張しているにすぎません」

（そんなことはワシも理解しておる……だがそれが全てでは無かろう！）

公平に見てホドラムの主張は正しい。

指揮能力という観点のみで見ればホドラムに比肩する人材は見当たらない。

だが……

「私はホドラム将軍の意見に賛同いたします！」

ゲルハルトの葛藤は部屋の片隅に居た一人の男によって破られる。

「「「な！」」」

その場に居た全員の視線が其の男へと向けられる。

「聞こえませんでしたか？ならばもう一度言いましょう！私はホドラム将軍へ全ての指揮権を委任するべきだと申し上げたのです！」

会議の場は水を打ったように静まりかえった。

誰もがあまりの事に声一つ立てる事が出来なかった。

「どういうつもりだ……？裏切るのか？ケイル！」

ゲルハルトの声が低く冷たくなる。

よりにも寄ってホドラムに口実を与えたケイルが賛同を示したのだ。

これで怒りを抑えろという方が無理である。

「何をおっしゃいます！閣下！私は己の責務に最善を尽くしているだけで御座います！」

「なん……だと？」

居直りともとれるケイルの言葉にゲルハルトは絶句した。

「そもそも私がゲルハルト様に仕えているのは軍事の才を見込まれての事！私はゲルハルト様がこの戦に勝つために最善を尽くす義務があるのです！」

此処でケイルは言葉を切ると会議室に居る貴族達を見まわした。

「ですから私でも勝てない相手に勝つためには、私以上に経験豊富な指揮官に全権を与え指揮して頂くしか道が無いのです！」

「ケ……ケイル……貴様！」

ゲルハルトはケイルの狙いが読めた。

（こやつ……先手を打ってホドラムに取り入るつもりか！しまった！……コヤツなどこの会議に出席させるべきではなかった！））

ゲルハルトの信用が先の敗戦で失われている事を悟ったケイルが自己保身に走ったのだ。

迂闊と言えば迂闊である。

ゲルハルトは先の敗戦報告をケイルから受けた時に、ケイルを切り捨てる事を決断していた。

だがそれをケイルが自覚しているとは思いもよらなかった。

使えるだけ使ってやろうというゲルハルトの欲がケイルに逆転の機会を与えてしまったのだ。

（糞！なぜケイルを此処に呼んだのだ！）

ゲルハルトの視線が隣に座る副官に突き刺さる。
だがこれはゲルハルトが悪いのである。
彼は副官がケイルの処罰を進言した際に、後ですると処分を保留にしている。
だが此処でケイルの権限を凍結するという命令を出していないのだ。
するとどうなるか。
ケイルの扱いは処罰が前提とはいえ以前と同じ待遇だという事だ。
とすればホドラム将軍との今後の方針に関して相談するという重要な会合の場に、ケイルを出席させない訳にはいかなくなる。

「ほぉ！貴殿がケイル殿か！……いや、噂とはあてにならないものだ！これほど状況判断に優れている方とは思いもしなかった！」

「過分なお褒めを頂き恐悦に存じます」

先程までケイルの事を罵倒していたはずの口が今度は全く逆の言葉を吐く。
ケイルもホドラムが先程まで罵倒していたのを聞いているはずなのに気にする様子もない。

「成る程……ケイル様がそうおっしゃるのならば私も賛同するしかありませんな！」

「な！」

「馬鹿な……！アーデルハイド伯爵！何をおっしゃるのです？」

ゲルハルト側の人間がまた一人賛同を示した。
副官の顔が真っ青に変わっている。
それも当然だろう。

貴族派の第2位。
つまり長年ゲルハルトを支えてきた右腕がホドラムの意見に賛同したのだから。

「申し訳ありませんな。ゲルハルト公。……悪く思わんで下さい。私ども家臣に責任があるのです……このまま座して死を待ちわけにはいかないのです」

如何にも苦渋の選択をしましたと言った口調だが、ゲルハルトは騙されなかった。
長年ローゼリア王国を食い物にしてきたのだ。
家臣？
そんな殊勝な心があるわけがないとゲルハルトは見切っている。
だが、好々爺といった顔でさも申し訳ないという顔をされれば周りの人間はそれに騙されてしまう。
（これは……もう駄目だ……）

敵意と怒りが心を支配する一方で、ゲルハルトの脳は冷徹に現状を把握していた。
貴族派第2位の実力者であるアーデルハイド伯爵がホドラムに賛同してしまえばもうゲルハルトの意見などゴミ屑同然である。
事実関を切ったように貴族派の面々が次々とホドラムの意見に賛意を示す。

「では！私が兵の全てを指揮させていただく！」

ホドラムのこの言葉で会議は終了してしまった。
茫然と椅子に腰かけるゲルハルト公爵唯一人を残して。

「頼む！スドウ！……ワシは其の方しか頼る人間がおらんのだ！……頼む！」

ゲルハルト公爵の嘆願をスドウは冷めた目で見ていた。
自らの嘆願を黙殺するスドウにゲルハルトは必至で縋った。
ケイルかホドラムか？
どちらの策かは判らないが、午前中の会議の結果、ゲルハルト公爵が自らの派閥を乗っ取られた事だけははっきりとしている。
ゲルハルトにしてみればルピス王女の援軍が迫っている事を自覚しているだけに、切羽詰まっているのだ。

（これがローゼリア王国の宰相だった男か……権力闘争に敗れればタダにゴミにしかすぎんな……）
スドウの心にゲルハルトを侮蔑する思いが浮かんだ。
（権力者と言えど、権力の座から落ちればただの人か……まぁその辺は政治家も同じだからな）
だがスドウの任務を達成する為にはゲルハルトを見捨てるわけにはいかない。
少なくとも今は。
（本国からの命令では半年……まぁ最悪こいつさえ生かしておけばまた策を施す余地はあるか……）

「ご安心くださいゲルハルト公。私は貴方様のお力になりますよ」
スドウは彼のローブを握りしめるゲルハルトの手を優しく包んだ。

「おぉ！本当か？本当に助力して下さるのか？！……だが……ワシの置かれた状況は……」

いつもの高圧的な様子は微塵もない。

靴をなめろと命じたら本当に舐めかねない程の卑屈さだ。

「大丈夫です。私に策が御座います」

「何！この状況を打開できるというのか！」

だがゲルハルトの口調は一瞬でもとに戻る。

結局のところ彼が卑屈さを演じたのも、高圧的な態度を取らなかったのも演技に過ぎないという事だ。

だがスドウはゲルハルトの態度を気になどしなかった。

「まぁとはいっても閣下にも相応の負担をして頂くことになりますがね？」

スドウの言葉にゲルハルトの顔が曇る。

「負担か……金か？権力か？……まさかワシの首というのではないだろうな？」

（こいつは……この期に及んでもまだ欲が抜けないのか）

スドウは貴族と言う人種の汚さと欲深さに内心呆れながら首を振った。

「首は大丈夫でしょう。ただし金と権力は諦めて頂くより他にどうしようもありませんな」

「馬鹿な！……それでは意味が無いではないか！」

「いえいえ、そうではありません。諦めると言っても対処出来ない訳ではありません」

スドウの言葉にゲルハルト公爵の顔つきが変わった。

「どういう事だ？」

「現状、ゲルハルト公爵閣下が打てる手は多くありません。ホドラム将軍に兵の指揮権を奪われてしまいましたからね」

「判り切った事は言わんでよい！」

スドウの言葉にゲルハルトは声を荒らげた。
傷口に塩を刷り込まれたような物なのだろう。

「ですがそれはある意味幸運ともいえます」

「何だと？どういう意味だ！？ホドラムに指揮権を奪われ何が幸運だ！」

「正直にいって敵の指揮官は相当なキレ者です。はっきり言ってこちらに勝ち目はないでしょう」

「何だと！貴様！」

スドウのあまりの言葉にゲルハルトは睨み殺してくれるといった視線をスドウへ向ける。

「お聞きください」

スドウの声は変わらない。
だが雰囲気が明らかに変わる。

冷たく鋭く、叩きつけるような殺気。
ゲルハルトに向かって叩きつけられたそれは、彼の心を正常に戻す。

「す……すまぬ……」

ゲルハルトの口から謝罪の言葉が漏れる。

「では説明を続けさせて頂きます。私も半信半疑でしたが、ケイル殿を討ち払った水攻めはかなりの物です。其の後の情報操作も的確と言えます。」

「情報操作？……例の噂のことか？」

「えぇ。間違いなくアレは敵の指揮官の策です」

「やはり……そうか……」

ゲルハルトも理解したようだ。

「それほどまでに綿密な策が練れる人間にホドラム将軍が勝てるとお思いですか？……予想ですが敵にはまだ奥の手があるはずですよ？」

「本当か！？」

「えぇ。私なら少なくとも手を緩めるようなことは致しません」

スドウのフードに隠された顔が笑ったようにゲルハルトは感じた。

「ならばどうする！？ホドラムに忠告でもしてやるのか！？」

誰もが考え付くであろう提案をゲルハルトはした。
落ち着いて考えればそんな事をしてもゲルハルトの立場を良くする事には繋がらないと判るはずなのだが、どうやらそこまで意識が回らなかったらしい。
スドウは横に首を振って否定した。

「それでは意味がありません。それよりもそれを利用するのです」

「利用？どうするのだ？」

「このままホドラムに何も言わずルピス王女の軍に負けてもらいます」

「馬鹿な！それでは何もかもが終ってしまうではないか！」

ラディーネ王女を擁立しているという大義名分があるとはいえ、ルピス王女から見れば今回の戦は反乱でしかない。
ゲルハルトは其の首謀者である。
ルピス王女との戦に負ければ責任を取らされることは間違いない。
だがスドウは再び首を振った。

「それでいいのです。全ての責任をホドラムに押し付けてしまうのです」

「何だと！」

「せっかく主導権を奪われたのです。この状況を最大限に利用しましょう」

スドウの顔に酷薄な笑みが浮かんだようにゲルハルトは感じた。

「だが……そんな事が可能なのか？そもそも責任を押し付けると言ってもワシが軍を起こした事実は変わるまい……」

「えぇ。ですがその責任は上手く軽減する事が出来ます。ルピス王女としても内乱の首謀者として誰かを処刑せねばなりません。通常ならゲルハルト閣下が其の標的になりますが……」

「そうか！今はホドラムが居る！」

「そのとおりです。首謀者として処刑できる人間が2人なら、交渉次第で1名は命を助ける事が出来ます」

「だが……ルピス王女がワシの命を助けてもよいと思うような交渉の札などあるか？」

反乱の首謀者を助命するほどの物などそうは無い。
ホドラムをゲルハルトが捕らえてルピス王女に差し出してもおそらく無理だろう。
だがゲルハルトの苦悩を余所にスドウはあっさりと言い放った。

「あるではありませんか？地下牢に」

「地下牢？……地下牢……地下牢！」

スドウの言葉にゲルハルトはある人間を思い出した。

「だが……あれにそれほどの価値があるのか？」

確かにスドウの言う交渉道具は思い浮かんだ。
だがゲルハルトにはそれが自分の命を助けてくれる程に価値があるとは到底思えない。

「なぁに。ご心配なく。ルピス王女は必ず交渉に応じますよ……必ずね」

フードの奥からスドウの含み笑いが聞こえる。
ゲルハルトは漠然とした不安を抱えながら頷くより他に術が無かった。
彼は今、絶体絶命の危機に瀕しているのだから。

こうして決戦の日は刻一刻と近づいてゆく。
其の結末を知る者はだれも居なかった。

第２章第３０話（後書き）

何時もウォルテニア戦記改訂版をご覧下さりありがとうございます。

この話で第３章への伏線も仕込み終わりいよいよ最終決戦へと話は進みます。

なるべく早く皆様にご覧頂けるように頑張りますので今後も本作品を宜しくお願い致します。

※作者の励みになりますので、もしよろしかったら評価ポイントや感想、レビューなどをして頂けると嬉しいです。

第2章第31話

異世界召喚176日目【決戦】その3：

ついにルピス王女と交わした約束の7日目の太陽が昇る。
亮真達はテーベ河の畔に立ち、対岸で煌めく槍の穂先へと視線を向けた。
視線の先には、エレナ率いる第一陣が、テーベ河を渡りかけている姿が見える。

「何もなかったですね……」

「あぁ。夜襲でもあるかと思ったんだけどな……ゲルハルトがどういうつもりで攻め寄せてこなかったんだか……」

サーラの問いに、亮真は首を傾げながら答えた。
予定では、ケイルの軍勢を撃退後にゲルハルト公爵率いる本隊が攻め寄せてくるはずだったのだ。
だが、敵の本隊はその姿を見せることなく、ルピス王女率いる援軍が到着予定日を迎えたのである。
期限最終日の昨夜は、敵本隊の夜襲の可能性を考え厳戒態勢で警備をしたのに空振りとなってしまった。

「亮真様の流した噂が効果を発揮したのでは？」

「確かにアレは効果的だけど、敵兵を0に出来るわけじゃない。多く見積もっても3割ほど削れれば良い方だろうよ」

サーラの指摘どおり、確かに亮真の流した噂は農民達へ動揺を与

えた。
だが、いくらなんでもゲルハルトが全く農民を徴兵出来なかったという事はあり得ない。
武力で脅す。
金で釣る。
命令した後にこれらの力を行使すれば、嫌々でも農民は徴兵に応じる。
勿論、数は減る事になるだろうが、まったく0で誰も集まりませんでしたという事はあり得ないのだ。
亮真は自分の策略の効果を疑っては居なかったが、同時に過信もしていなかった。

「イラクリオンにまだ動きは無か？」

「はい、偵察部隊が監視しています。もし敵に動きがあればすぐに知らせが来るはずです」

「渡河途中で攻撃を仕掛けてくるつもりなら、そろそろイラクリオンを出なければ間に合わないはずなんだけどな……」

サーラの答えに、亮真は首をかしげた。

「そうなると……敵は平原での決戦を望んでいるのでは？」

「決戦ねぇ……？」

テーベ河の畔に陣を張る亮真達と、ゲルハルト公爵の本拠地であるイラクリオンの間には、森林地帯と平原が挟まれている。
特に平原はかなりの面積を誇り、テーベ河の支流を引き入れて小麦などの生産を行っている穀倉地帯が広がる。

イラクリオンはローザリア王国の中でもかなり裕福な領地である。
しかし、其の裕福な土地も、一度戦場となれば全てが灰と化す。
それなのに現状を分析すれば、ゲルハルト公爵の狙いは決戦という事になる。
攻撃加えるのに絶好の機会である渡河途中を逃すのであれば、ゲルハルトの狙いは他に考えようがないのだ。
平原は大軍を指揮するにはうってつけではあるので一概に愚策とは言えないが、今後ローゼリア王国を運営していくという観点で見れば大きな損害を出してしまう。
亮真としてはかなり違和感を感じる話だ。
（どうにも胡散臭い？　というかチグハグな感じを受けるんだよな……まるで誰かが今回の戦を裏で操っている感じが……）
亮真は状況を整理していくうちに何者かの作為を感じた。
（だが……ゲルハルトを勝たせようって感じじゃない……いや逆に負けさせようとしているように感じる……どういう事だ？）

「亮真様？」

亮真の顔を覗き込むようにサーラは声をかけた。

「あぁ……悪い、ちょっと考え事をな……」

「いえ、お邪魔でしたら席を外しますが？」

「なぁに、ちょっとした物だから気にするな……それより、サーラは籠城戦の可能性は考えていないのか？」

サーラの言葉をはぐらかすように亮真は話題を変えた。
（今は其処まで考える必要はない……か。こっちが不利にならないなら放って置く方が良いな……）

胸の中でそんな損得勘定が働いている事を隠し、亮真はサーラへ問いかける。

「籠城戦ですか？……可能性はほとんどないと思います」

亮真はサーラの回答を聞いて思わず笑みが浮かんだ。

ちなみに亮真はゲルハルトがイラクリオンに籠城する可能性をまったく考慮していなかった。

何故ならイラクリオンの都市規模から考えて、市民の他に数万人もの兵力を維持するだけの兵糧が無い事を見抜いていたからだ。

つまり兵力を集めてもそれを維持するだけの力が無いのだ。

持って半月がいいところだろうと亮真は見ていた。

「本来持つ兵力だけではイラクリオンに籠城してもルピス王女の軍を防ぎきることは難しいでしょうし、防衛が可能な兵数をイラクリオンに入れれば、１月余りで兵糧が尽きる事は目に見えています」

結局のところ帯に短し襷に長しなのだ。

最大兵力まで集めなければ籠城は難しい。

だが、集めれば兵糧が足りなくなる。

結局ゲルハルトが選択できるのは最大兵力を短期間にルピス王女へぶつけるしかないのだ。

尤もそれはルピス王女とて同じことなのだが。

亮真はサーラの回答に深く頷いた。

ここ数カ月でマルフィスト姉妹の戦術眼はかなり磨かれたと言える。

それは亮真にとってとても喜ばしい事なのだ。

彼が生き残る可能性が上がるのだから。

「亮真様！　エレナ様以下３０００の騎士が渡河されました」

「判った。エレナさんは俺の天幕へ案内して、他は天幕を割り当てて休息して貰え」

報告に来た騎士へ指示を出すと、亮真はサーラを伴って自らの天幕に戻る。

全てはこれからが本番なのだから。

「大したものね……これほどの橋頭保を確保するなんて……」

エレナが感嘆の言葉を亮真へかけた。

「大したものじゃなりませんよ」

「謙遜も時によっては嫌味よ？　少なくとも私には造れないわね。王女殿下もきっと驚かれるでしょう」

肩をすくめて謙虚に返事をする亮真へ、エレナは容赦なく称賛を浴びせた。

「俺としては叱責されそうで怖いんですがね……」

亮真の言葉を聞いてエレナは不思議そうな顔を浮かべる。

エレナの見た限り亮真の成果に叱責の余地など見当たらない。

だが、亮真はある事を気にしていた。

ミハイル・バナーシュの事を。

亮真は全てを隠さずにエレナへ報告した。

少しでも隠しだてをすれば疑いをもたれると思ったからだ。

「そう……ミハイルが……」

「えぇ戦死したかどうかの確認も出来ていないんですが、少なくとも偵察任務の後に彼の姿を見たものは居ません。彼の死体も含めてですけど……まぁ命令無視なのはハッキリとしているんですが、ミハイルはルピス王女の側近ですから……」

エレナの口から呆れとも悲しみともつかないため息が漏れる。

（参ったわね……確かにこれはちょっと問題になるかも……）

亮真が隠さずミハイルの事に関して報告した事で彼女は亮真の懸念を正確に把握した。

ミハイルは亮真の部下だが、同時にお目付け役だった。

これは亮真の様な新参者に重要な役割を任せる上で、どうしても必要な役目である。

兵を預けるルピス王女としては、途中で裏切られるわけにはいかないのだ。

だからルピス王女の家臣の中でもメルティナに次いで忠誠の篤いミハイルを付けたのである。

それだけミハイルがルピス王女から信頼されていたという事なのだ。

それが命令無視での自業自得とはいえ、亮真の指揮下で死んだ。

生死不明ではあるが聞いた状況ではまず生きてはいない。

となると、ルピス王女から見れば、亮真の所為で自分の忠臣が死んだ事になる。

それも、まだ戦の中で死んだと理解してくれればマシだ。

最悪、亮真が裏で手をまわして殺したとすら思いかねない。

「考えすぎだと思います？」

亮真の問いにエレナは答えに詰まった。

考えすぎだと笑い飛ばすのは簡単だ。

だが、現実的に考えて、亮真の懸念は決して考えすぎとは言えない。

「いいえ……でも報告しないわけにはいかないでしょ？」

「そうなんですよねぇ……まぁだからこそエレナさんへ一番初めに話したんですけどね」

もし、亮真がミハイルを罠に嵌めたとしたら、此処に居る１５００の騎士達は決して亮真の指揮を受け入れないだろう。

エレナにしてみれば、亮真が橋頭保を築き、援軍の到着まで持ちこたえた事自体が、亮真の潔白を証明する証だと思える。

だが、ルピス王女がそれで納得するかどうかは賭けである。

亮真もエレナも、ルピス王女とは付き合いが浅い。

しかも王女と臣下の間柄である。

会議などで同席する他に接点は無いと言ってよい。

ルピス王女がミハイルをお目付け役として寄こしたように、亮真もルピス王女を信用しては居ないのだ。

「まぁ良いわ……私の方から報告するしかないでしょうね……」

エレナは自分が被る事を決意した。

いくら正論を振りかざしても、当事者が言えば嘘くさく聞こえてしまう。

だが、エレナが状況を説明すれば、ルピス王女とて感情的に判断はしないだろう。

「すみません、エレナさん。お願いします」

亮真は素早くエレナの意図をくみ取ると、彼女に全てを任せてしまう。

「良いのよ、貴方に此処で潰れて貰っては困るんだから……そうねぇ。貴方は陣の再編成を優先させてちょうだい。どうせ誰かがしなければいけない仕事ですからね……今夜の夕食時までには上手く話を付けておきます」

エレナは亮真へ仕事を割り振った。

ルピス王女へ亮真が直接報告に行かない理由作りだ。

長年ローゼリア王国の将軍位について居たのは伊達では無い。

「判りました……では」

頭を下げて天幕を出ていく亮真の後ろ姿を見ながらエレナは深いため息をつく。

「さぁて……どう報告したものかしら……いや、ルピス王女に直接するよりメルティナに一度……」

戦とは直接関係は無いが、もし此処で対応を間違えてルピス王女に変な不信感を持たれれば、亮真の指揮にも影響が出かねない。

「やっぱりメルティナに報告してからの方がいいわ……」

そういうとエレナは、第二陣で到着する予定のメルティナを迎えに桟橋へと向かった。

「ううぅん……」

ため息とも嘆きともつかない声がメルティナの口から洩れた。

「だからね、別に亮真君のミスと言うわけではないの」

「いや、それは理解しました……唯……」

「唯なに？」

メルティナの煮え切らない返事にエレナも語気が強くなる。

「いえ、ミハイルは姫の警護騎士として幼少から仕えていた人間でして……正直に言って私よりも姫との繋がりが深いのです……」

メルティナの言葉にエレナの顔色が変わる。

亮真の懸念したとおりの展開だからだ。

「やっぱり亮真君を疑う？」

「いえ、それは無いと思います……状況を説明すれば、ルピス王女は悲しまれたとしても、其の怒りを御子柴殿へぶつける事は無いでしょう……」

エレナの懸念をメルティナは即座に否定した。

メルティナとしても今亮真にルピス王女への不信感を強められる訳にはいかない。

王女側の優勢は全て御子柴亮真の策略に因るのだから。

「なら王女殿下への報告は私がするより貴方に任せた方が良いかしら？」

「はい。この件の報告は私の方から殿下へ致す事にします」

エレナの問いにメルティナは頷いた。

夜も更け、ルピス王女率いる２万３０００の兵は全てテーベ河の渡河を終了した。

陣屋の天幕は亮真の指揮によって増設され、新たな住人達を受け入れている。

そんな新たに増設された天幕の一つにルピス王女は居た。

「……ミハイル……」

王族が眠るには粗末なベットに腰を下ろした彼女の口から、ミハイルの名が漏れる。

「ミハイル……私を何時までも守ってくれるのでは無かったの……」

メルティナからミハイルの生死不明を聞いたルピス王女の脳裏にはミハイルと過ごした幼き日の思い出が浮かび上がる。

ルピス王女は其の両目から真珠のごとき涙が零れ落ちた。

メルティナから報告を受けた後、ルピス王女は必死であふれ出る激情を抑え込んだ。

王女としての責任が、亮真を責める事を拒んだのだ。

王として公平に見れば亮真の指揮に問題など無い。

責められるべきは命令を無視し、５００もの損害を出したミハイルである。
それは理解している。
頭では。
だが、人としての心の部分が其の理性的な判断を否定する。
結果、ルピス王女は夕食を早々に切り上げ自分の天幕に籠ったのだ。
其のままいれば、亮真へ当たり散らしてしまうかもしれないと自覚したから。

「アぁ……ミハイル……私をお嫁さんにしてくれると言ったのに……」

王族であるルピス王女を一介の騎士が娶ることなど出来ないし、彼女自身もそれを本気で望んでいたわけではない。
幼少期の戯れに近い口約束。
だが、普段は頭の片隅に追いやられて思い出す事がない記憶も、こういった状況では次々と浮かび上がってくるものだ。

「私をずっと守ってくれると言ったのに……」

ルピス王女にとって、メルティナと並びミハイルは最も忠誠の篤い信頼できる家臣である。
ホドラム将軍の専横に立ち向かうよう進言したのも彼だ。
同じ女であるメルティナが姉妹なら、ミハイルはルピス王女にとって兄や父親に近い存在ともいえる。
それを失った悲しみは、実の親であるファルスト2世が崩御した時よりも深いかもしれない。
疎遠であるわけではなかったが、父と娘である前に国王と王女と言う関係であったため、中々肉親の情を育む事が出来なかったのだ。

「ほぅ。思ったとおりかなり悲しんでおられるようですな。ルピス殿下」

突然ルピス王女の背後から男の声がした。

「誰！？　刺客？！……誰かいないの！誰か！」

ルピス王女は一瞬の判断で叫び声をあげる。
天幕にどうやって入ってきたかは不明だが、周囲には警護の騎士が居るはずだ。
彼女の叫びを聞けば直ぐに飛び込んでくるはずだった。
しかし、幾ら待っても天幕の入口から警護の騎士が飛び込んでくる様子はない。

「無駄ですよ殿下。私の法術で皆さんには少し眠って頂いていますから」

男の言葉を聞いて、ルピス王女の脳が状況を把握し始める。
彼女はベットに立てかけてあった剣を抜き放った。

「刺客じゃないわね……何が目的？」

言葉と行動がチグハグな気もするが、ルピス王女はまじめだった。
こんなふうに言葉を掛ける暗殺者は居ない。
でも、自分に危害を加えないとも限らない。
男の目的がはっきりとするまで彼女は警戒を緩める気は無かった。

「目的……そうですねぇ。確かに時間もないですし単刀直入に話しますか……ズバリ貴方と取引をしたくてやってきたのですよ」

男の言葉を聞いてルピス王女の緊張が緩む。

「どういうこと？そもそも貴方は誰？どうやって此処まで来たの？」

ルピス王女の問いに男はフードで隠した顔をあらわにする。

「申し遅れました。私は須藤、須藤秋武と申します」

そう言って須藤は頭を下げる。

それは敵意の無い証であった。

第2章第32話

異世界召喚176日目【決戦】その4：

ルピスは目の前に現れた男の顔をまじまじと見た。

黒い髪に黒い眼。
中肉中背で肌は黄色い。
背丈の差以外は非常に御子柴亮真と似通った特徴を持つ男だ。
特徴の一部を持つ人間は今まで見た事があったが、全ての特徴を併せ持った人間を見たのは初めての事であった。
そう、御子柴亮真以外では。

「そんなに見つめないでください、照れるじゃありませんか」

男の口調は王女に対する口調としてはあまりにもぞんざいだったが、彼の表情が其の口調を納得させてしまう。
そんな雰囲気をまとった男だ。
中年と言ってよい顔立ちをしており、若干腹が前へとせり出しているように見える。
年のころは40代か？
しかし、首や腕は明らかに太く固そうであり歴戦の戦士にも見える。
砕けた口調とは裏腹に、ルピスは緩めた警戒を再び強めた。

「まぁこんな夜分にお邪魔したんですからそう警戒されるのは致し方ありませんがね……せめて座っても構いませんかね？いやぁ年を取ると立っているのも億劫（おっくう）で……」

そういうと須藤はルピスの返答を待たずに椅子へ腰掛ける。

「もう一度聞くわ、貴方は何者？」

ルピスは椅子に座る須藤の喉元に剣を突き付ける。

「私は須藤秋武といいます」

「目的は？」

「ルピス王女殿下との交渉です」

「どうやって入ってきたの？」

「テーベ河の上流から泳いで陣内に潜り込みました。いやぁ、こちらの指揮官、御子柴さんでしたか。優秀ですねぇ、水堀側は完璧に警戒されていて年甲斐もなく水泳をさせられてしまいましたよ……いやぁ参った参った」

そういうと須藤は屈託のない笑い声を上げる。

（こいつ……テーベ河を泳いだというの……）

確かに心得のある人間なら泳げなくはない。

それにある程度の警備はされていたが、正面側より警備が手薄なのも事実だ。

問題はなぜそこまでして陣に須藤が忍び込んできたのかだ。

「どういうつもり？交渉って……」

「其の前にこの物騒な物を退けて頂けませんかねぇ？何しろ気が小さいもので……姫将軍と呼ばれるような方に剣を突き付けられたままでは落ち着いて話もできません」

本当にそう思っているのかいないのかルピスの目には目の前に居る須藤と言う人間が判らなかった。
とはいえ、交渉に来たと主張する人間に剣を突き付けたままというのもあまりである。
いくら相手が深夜に王女の天幕へ忍び込んできた怪しい男でも。
躊躇いながらもルピスは剣を鞘へ納める。
尤も何時襲われても良い様に剣は傍に置いたままだったが。

「結構……これで安心して交渉が出来ます」

「余計な事を言わなくていいわ。本題に入りなさい」

ルピス王女の視線が須藤へ突き刺さる。
だが須藤の表情はいまだに飄々としたままだ。

「ご想像いただけているとは思いますが、私はゲルハルト公爵閣下にお仕えしているものです。……まぁ正確にはちょっと違うんですがそうご理解ください」

人を食ったような言葉をルピスは無視することにした。
須藤の軽口（かるぐち）に付き合っていては何時まで経っても本題に入らないと思ったからだ。
ルピスの視線で彼女の意思を感じたのか、須藤は表情を引き締めた。

「それでですね。……ズバリ言うと、ゲルハルト公爵はルピス王女殿下へ恭順の意を示されたいとお考えになっています」

「恭順？降伏の間違いでしょ？」

ルピスは須藤の言葉を言いなおした。
彼女とて経験こそないが、王族の一人としてある程度の教養も知識もある。
この状況で須藤がゲルハルト公爵から何かを命じられたのならばそれは降伏の願い出か、彼女の暗殺、そのどちらかしなかないと考えていた。

「いいえ、ゲルハルト公爵閣下はルピス王女へ恭順の意を示されたのです」

須藤の言葉にルピスは顔をしかめた。

「貴方？状況が判っているの？なぜ今さらゲルハルトの恭順を受け入れ無ければならないの？」

降伏と恭順では結果が大きく変わってしまう。
降伏の場合、ゲルハルトは戦争責任を取らされて斬首刑が普通だ。
領地も没収されるし財産も根こそぎ奪える。
これに対して恭順の場合、降伏とは違ってゲルハルトを殺す事が出来ない。
また領地も縮小は出来ても完全に潰してしまう事は出来ないし、財産もある程度は保障する必要が出てくる。
戦で白黒を付けた結果に起こる降伏に対して戦を実際に行わず、抗戦戦力を残しての恭順となればあまり強気な要求は出来ないのだ。
だが戦力が拮抗している状況ならまだしも、現状ルピス王女がゲルハルトへ配慮をしなければならない状況ではない。
それを理解しているルピスは全く話にならないと須藤の言葉を撥ねつけた。

それで無くともゲルハルトはラディーネと言うどこの馬の骨かわか

らないような庶子を遺言状を盾にして女王に擁立した反乱者。
ルピスから見ればゲルハルトこそ全ての元凶であり首謀者である。
それを助命することなど彼女にはあり得なかった。
須藤の言葉を聞くまでは。

「ミハイル・バナーシュと言う騎士はご存知ですかな？」

ルピスの顔色が変わった。
今まで死んだと思って嘆いていた人間の名がこの場で出たのだ。
動揺するなと言う方が無理だ。

「え？……どういう事？……まさか！」

死んだ人間の名を、交渉に来た敵の使者が口にした。
それはルピスの心に一つの可能性を浮かび上がらせる。

「まさか……ミハイルが……」

其の時、彼女の言葉をさえぎるように何かが天幕の中へと投げ込まれた。

シュッ　カッ！

シュッシュッ

再び何かが空を斬って須藤が腰かけていた椅子に突き刺さった。

「え？」

ルピスは言葉を失った。

中年で鈍重そうな体つきをしていたはずの須藤の姿が椅子の上から消えて立ちあがっている。
彼女の目には何時須藤が椅子から立ち上がったのかを捕らえる事が出来無かった。

「危ないですねぇ？警告も無しに攻撃してくるとは、幾ら私が不審者であっても酷くは無いですか？」

須藤が椅子に突き刺さった戦輪（チャクラム）を抜いて手に持った。

「ほうこれはまた珍しい……戦輪（せんりん）とはね……これを使うような人間は……御子柴亮真君ですか？」

須藤の言葉に答えるように天幕の入口から再び戦輪（チャクラム）が須藤めがけて投げ込まれる。

「おやおや、無視ですかぁ……」

飛来した戦輪を須藤は椅子を盾にする事で防ぐ。
須藤と言う男の口調は相変わらず軽いままだ。
亮真が次々と戦輪（チャクラム）を投げ込んでいるというのに。

「いい加減姿を現してもらえませんかね？一人で話していたら私がまるで馬鹿みたいじゃないですか？」

声に伴い手に持った戦輪（チャクラム）が須藤の手から天幕の入口に向かって放たれる。
尤も須藤はそれが亮真に当たるとは微塵も考えていない。
彼はただ挑発したのだ。
須藤は相変わらずの口調だ。

だが其の目は油断なく天幕の入口へと注がれている。
それが亮真の策とは知らずに。
「殿下！こちらへ！」
天幕を斬り裂きメルティナがルピス王女の後ろから中へ飛び出してきた。
布で作られた天幕なのだから、剣で容易に切り裂ける。
「メルティナ！」
「殿下！さぁ急いで！」
裂け目から天幕の外に出ると周囲は騎士達でびっしりと囲まれている。
「申し訳ございません殿下！この失態は後で必ず！」
そうルピス王女に頭を下げるとメルティナは叫んだ。
「御子柴殿！殿下は無事だ！」
其の言葉に呼応するように周囲の騎士が松明を手に前へ出た。
「やれ！」
亮真の声に合わせて松明が天幕に向かって投げつけられる。
「待って！彼は殺しちゃダメ！……お願いメルティナ！早く水を！

消し止めて！」

ルピスは声を振り絞った。
（まだ駄目！須藤の口ぶり……ひょっとしたらミハイルが……）
そんな思いが彼女の心を占領する。

だがルピスの叫びはあまりにも遅い。
一斉に投げ込まれた松明が天幕を容赦なく焼きつくす。
しかも須藤が飛び出してくる事を想定して、抜刀した騎士が容赦なく待ち構えている。

「殿下！何をおっしゃるのです？彼とは暗殺者の事ですか？」

メルティナにしても状況が理解できない。
王女が危ないという知らせを聞いて直ぐに駆けつけ其の後は亮真の指示に従っただけなのだから、状況が判るはずもない。
まして、須藤がミハイルに関して生存をほのめかすような言動をしたことなど想像すら出来るわけが無い。

「良いから！彼を助けるの！」

「しかし……これでは……」

布で作られた天幕は火に包まれてしまっている。
この状況で中に居るのなら酸欠になるか火に焼かれるか。
どちらにしろ須藤の生存はあり得ないと言える。
だが此処でメルティナ耳に歓声が響いた。

「うぉ！こいつ」

「槍隊！前へ！」

「良いか！逃がすな！」

メルティナ達と天幕を挟んで反対側から騎士達の声がする。

「メルティナ！」

「は！」

状況は判らないがルピス王女は暗殺者を殺したく無い様だ。
そう判断したメルティナは主君の望みを叶える為に走り出した。

「まったく……酷い事をしますねぇ？容赦無さ過ぎじゃありませんか？」

亮真の前に須藤が姿を現した。
服は所々焼け焦げているが、目立った外傷もない上に、声もしっかりとしている。

「てめぇ……人間か……？」

火に包まれた天幕の入口から堂々とした足取りで出てくれば亮真としても驚かざるを得ない。

「お！ようやく口を開いてくれましたか！いやぁ嬉しいですなぁ」

だが亮真は須藤を無視し無言で刀を抜いた。

「おや……まただんまりですか？まったく無愛想にも程があるの……」

ビュ

須藤の言葉を無視して亮真は一瞬のうちに間合いを詰めると一気に刀を薙いだ。

ジャリン

鈍い金属のこすれる音と共に赤い火花が両者の間に飛び散る。
須藤の手にいつの間にか短剣が握られていた。

「獲物の差を考慮して決着は後日と言う事にしませんか？」

一気に力で押し切ろうとする亮真に須藤は短剣で抗しながらそんな言葉を吐いた。
本気なのか本気で無いのか。
余裕があるのか無いのか。
回りを囲んでいる騎士達にも須藤の本心が見えない。

ドガッ！

亮真の右足が強く大地を踏みつける。
足の甲を踏みつけようとして須藤が足を引いて避けた結果だ。
須藤は亮真の一瞬の隙をついて大きく間合いを空ける。

「やれやれ……こっちの話は全く無視ですか……私は今貴方と戦うわけにはいかないのですがねぇ……」

亮真は無言のまま刀を頭の上まで振り上げると全身の筋肉に力を貯める。
其の目には明確な殺意が暗い光となって須藤を威圧する。

「上段、火の構えですか……参ったなこりゃ……」

須藤の口から諦めにも似た言葉が漏れた。
振り上げられた刀は鍛え上げられた渾身の力と常人の2倍近い体重を持って須藤を襲ってくる。
短剣しか持たない須藤に其の必殺の一撃を防ぐ術は無い。
下手に防いでも力で押し切られる事が眼に見えている。
（不味い……此処で死ぬ訳には……）
須藤の脳裏に死の文字が浮かび上がる。
だが彼の命運はまだ尽きてはいなかった。

「待て！御子柴殿！」

メルティナが騎士をかき分けようやく二人の前に姿を現した。
叫びながら走ってきたようで、胸が激しく上下している。

「どういうつもりだ？……何故止める？」

亮真は構えを解かずにメルティナに問いかけた。
視線は須藤に向けられたまま、一切の油断が無い。

「判らん！だが殿下のご命令なのだ！」

「ルピス殿下の？……本当なのか？」

「あぁ。間違いない。私が直接命じられた」

亮真は大きく息を吐くと振りかぶっていた刀を下ろす。

「判った。だが状況が判らないとどうしようもない。悪いが殿下を此処へ連れてきてくれ。」

「私は此処に居ます」

騎士をかき分けルピスが姿を現す。

「……ご説明いただけますか？」

亮真は刀を納めないままルピスへ問いかけた。
幾ら王女が助命を求めようと陣に忍び込んだ不審者を生かしておく理由など亮真には無い。
それに何時、須藤が牙を向かないとも限らないのだ。

「……良いでしょう……須藤、貴方にも聞きたい事があります！場所を変えて話したいのですが構いませんか？」

「えぇえぇ構いませんとも。是非落ち着いて先程の話の続きがしたいものですなぁ」

ルピス王女の言葉に須藤は躊躇なく頷く。

「では亮真、天幕を新しく用意して頂戴。メルティナはエレナを呼んできて！」

「判りました……ですが十分にご用心を……」

それだけ言うと亮真は釈然とはしないながらもルピスの命令に従いその場を後にする。

須藤はルピスの言葉を聞き怪訝な顔をした。

「殿下？何故人を集めるのですか？私としては殿下と直接お話がしたかったのですが？」

ルピスの対応を見れば交渉の余地は十分にありそうに見える。
それに自分を殺させなかったという事はミハイルの安否にも興味があるという事だ。
それなのに人を集める。
何故？
ルピス王女としては私情に捕らわれる話である。
あまり人には知られたくないはずだと須藤は読んでいた。

「国の大事を決める以上、王であっても独断は出来ませんから。それとも私と二人っきりで無いと話せないのですか？」

須藤はルピス王女を侮っていた事を理解した。
（ふぅん……思ったほど愚かじゃなかったか。まぁこの程度なら少しの修正で済む……所詮経験の無いお姫様よ……だが……問題はあの男か……ガイエス様を殺したと言うからどれ程の者かと思ったが……確かに厄介だ）

須藤は心に湧き上がってくる黒い殺意を必死で抑えた。
今はまだ御子柴亮真に関わる時ではない。
須藤には命じられた使命があるのだから。
（何れ殺すとしても一筋縄ではいかんかもな……無理に手を出すの

は危険か……まぁいい。今は任務を優先させるとするか）

須藤は素早く計算すると、承諾の意思表示としてルピスへ頭を下げた。

第2章第33話

異世界召喚176日目【決戦】その5：

「そういうわけで、ゲルハルト公爵閣下はルピス王女への恭順を決意されたという事です……その証として現在イラクリオンで保護しているミハイル・バナーシュ殿をこちらにお返し致したく、私が交渉役として参った次第です」

須藤の言葉を聞いて、天幕の中は重苦しい空気に支配されていた。
誰もが須藤の提案に言葉を失っていた。
いや、彼の提案があまりにも突飛な為に思考回路がが上手く働かなくなったという方が正しいだろう。
内乱を起こした首謀者が決戦前に恭順してくるというのはそれだけ予想外な出来事なのだ。

「姉様……これって……不味いよね？」

サーラが周囲に漏れない程度の小声でローラへ耳打ちをした。

「不味いわね……亮真様の計画にも影響が出かねないし……」

ローラの視線が表情を消して須藤の言葉を聞く亮真へと注がれる。

この場に居る人間は16人。
ルピス王女・メルティナ・エレナ・亮真の4人は当然として、ローラやサーラ、リオネにボルツ、ベルグストン伯爵以下有力な貴族達と文字通り王女派の主要なメンバーが一堂に集まっている。
天幕の中央にデン！と置かれた円卓を囲むように各員は腰掛けて須

藤の言葉を聞いていた。

「やっぱり影響って出るのかな？」

「えぇ……結構大きく出ると思う……」

姉妹の小声は周りのざわめきにかき消されて周囲には漏れない。
リオネはボルツと、ルピスはメルティナとそれぞれ小声で何かを話し合っていたし、貴族は貴族で隣同士で耳打ちし合っている。
無言のままなのは亮真とエレナの二人のみだ。

「亮真様……どうするつもりかな？」

サーラに問われローラは答えに窮した。
結局彼女は無言のまま視線を亮真へ向けた。
どのような結論が出ようとも姉妹にとっては関係が無い。
ただ御子柴亮真と言う男の為に動けばいいのだから。

亮真は眼を閉じ、ゆったりと椅子に座りなおした。
そうすることで自分の湧き上がる感情を表に出さないように抑えつけたのだ。
そして頭で状況を整理し、的確な対応を考える。
それだけが現状を打開する唯一つの手段だった。

（頭痛がするぜ……）

これが亮真の本音だった。
人間的に信用は出来ても、能力的には全く信用が置けないとは理解していたが、ルピス王女がこれほどまでに愚かだとは亮真も全く想像していなかった。

（須藤の言い分……前王の遺言に従っただけでローゼリア王家に対して謀反をする気は無いだって？無茶苦茶言いやがる……いくらなんだって酷すぎる……それにホドラムが寝返り彼が王家に謀反を企んでいる為、王国の臣下として許せないから恭順したい？馬鹿にしてるのか？……）

須藤の言い分を聞いて亮真が思った率直な気持ちだ。

ゲルハルトはルピス王女と戦った事を前王の遺言に従っただけという言い方ですり抜ける気だ。

しかもホドラムを寝返らせておきながら、ホドラムが王家に謀反を企んでいるので許せないから恭順して王国への忠誠を示したいと言ってきた。

謀反人の汚名を全てホドラムに被せる気なのだ。

しかもその話を人を集めて須藤に言わせる。

最悪と言っていい。

別に人を集めた事自体は問題ない。

支配者として考えればどうかとは思うが、亮真は最初からルピス王女の政治的な能力を信用はしていない。

だから王女が独断で判断するよりずっとましだ。

彼女が己の至らなさを自覚していたという事だから逆に褒めたっていいくらいだ。

ただし其の判断を褒めてやれるのは、議題がミハイルの返還に絡んだゲルハルト公の恭順で無ければだ。

この議題に関して言えば、人を集めたのは最悪だ。

なぜか？

結論が出てしまっているからだ。

（結局ルピス王女はミハイルを殺したくないという事か……）

亮真の心が冷たくなる。

確かにミハイルは忠誠篤く武力に優れた人間である。

王女に取って信頼できる忠臣の一人と言ってよい。
だから王女が殺したくないと思う事自体は人間として普通である。
それ自体は亮真も咎めるつもりは無い。
だが。
支配者は其の心を殺さなくてはならない。
抑えつけなければならない。
ミハイルが信頼できる忠臣であるとかそういう問題ではない。
幾ら大切な忠臣であっても、ゲルハルトの命とは比べられようもない。
ゲルハルトはルピス王女に対して反旗を翻した謀反人。
其の命を幾ら忠臣とはいえ一家臣の命と引き換えに助命するとは……
確かにまだルピス王女は自分の気持ちを公言していない。
だからルピス王女がミハイルを助けたいと思っているというのは亮真の推測にすぎない。
だが亮真は自分の推測が事実である事を確信していた。
もしそれを希望していないのであれば須藤を生かしておくはずが無い。
王女の天幕に無断で忍び込んだのだ。
どんな刑罰を受けても文句の言いようが無い。
それを助命し態々須藤の言葉を聞く為にみんなを集めた。
これだけでルピス王女の心の内が透けて見える。

（ミハイルを殺したくない、だからゲルハルトの要求をのみたい。
だけど正当性が無い事を自分で自覚している。だから全員を集めた自分が泥を被らない為に）
王女が独断でこの話を受ければ当然反発が出る。
謀反人であるゲルハルトを助命するのだから当然だろう。
だからルピスは会議をした。
それは責任の所在をあいまいにするためだ。

「では、皆の意見を聞きたいわ」

ルピスの言葉に亮真は舌打ちをしたくて堪らなくなった。
だがどれ程腹立たしくとも今この場でその怒りをぶちまけるわけにはいかない。

「誰か意見がある人はいないの？」

ルピス王女の言葉に誰もが無言のまま黙り込んだ。
彼女の視線が円卓を囲む人間達を順繰りに見据えた。
だが誰だってババは引きたくない。
この場に居る全員がルピス王女の心の内を見透かしていた。

亮真自身は、ミハイルの命がゲルハルトの助命とつり合いが取れるとはどうしても思えなかった。
一介の騎士の命と反乱の首謀者の命を秤にかける事自体間違っていると言える。
だがルピスがミハイルを助けたいと望んでいる以上何を言っても無駄である。
もし此処でミハイルの命を見捨てるように進言すれば間違いなくこの会議の後で
「ミハイルを見殺しにするのか！」
「忠臣を助けずして何とする！」
「新参者のくせに何を言っているんだ！」
とミハイルの同僚である騎士達が騒ぎ出す事は目に見えていた。
それに亮真が此処でミハイルを見捨てるように進言してもルピスはそれを受け入れないだろう。
そうなれば、亮真だけが悪者になる。
それにミハイルの暴走による結果とはいえ亮真の指揮下で捕虜にな

っている。
此処で見殺しにするように進言したら亮真がミハイルを殺したがっていると邪推されかねなかった。

正論は時に人情を犠牲にする。
そして支配者が人情に溺れれば、必ずどこかで歪みが生じる。
亮真が幾ら正論を唱えても聞く支配者に聞く耳が無いのなら言わない方がいい。

エレナの縋るような視線を亮真は感じた。

「無駄です……」

亮真はエレナに小声で呟くと首を横に振った。
彼女の視線から言いたい事は伝わってきた。
だが、それを言えば間違いなくエレナと言えど悪者になってしまう。

「なら私が……」

「止めて下さい。今ここで貴方に対する不信感を王女が持ったら、今後の立て直しが更に難しくなります……」

エレナの提案を即座に否定する。
彼女とてミハイルやメルティナ程にはルピス王女の信頼を得ていない。
【ローゼリアの白き軍神】の名を持つから亮真が言うよりはマシだろうが、王女がミハイルの命を諦めるとは思えなかった。

「ならどうするの？このままじゃ……」

エレナは亮真と同じように現状の危険性を理解していた。
ミハイルの命を引き換えにゲルハルト公爵と言うローゼリア王国は獅子身中の虫を生き残らせることになる。
更にラディーネ王女を王族として認める事になれば、彼女には第2位の継承権が与えられることになる。
ルピス王女は更に危険な立場へと其の身を晒そうとしていた。
これはゲルハルトの恭順を受け入れる以上致し方が無い。
謀反の首謀者は斬首。
これが大地世界（アース）の共通認識である。
ゲルハルトの命を助けるとなれば、彼の起こした今回の内乱は謀反では無いという立場を取るしかなくなる。
となれば、前王の遺児を担ぎ出したゲルハルトの言い分を完全否定は出来なくなってしまうのだ。
つまり前王の遺言に従っただけで、ローゼリア王国に謀反しようとしたわけじゃありません！と言うゲルハルトの言い分を認めるしかなくなる。
詭弁と判っていてもどうしようもない。
（打開出来るとすればメルティナか……）

亮真の視線がルピス王女の隣に座るメルティナに向けられる。
（だめだ……単純にミハイルが生きてる事を喜んでやがる……まぁ同僚が生きてて嬉しいのは判るが……状況が悪くなっている事を理解してない……か……こいつは無理だな……となると……）

単純に笑顔を浮かべているメルティナに見切りをつけ亮真は必死で打開策を考えだす。
（ゲルハルトを殺すことは無理……今回の戦でホドラムを始末出来るだけで善しとするか……問題は其の後だ……ルピス王女じゃゲルハルトを制することなど出来ない……一時的に力を削いでも何時か

盛り返される……待てよ？何時か……か。）

亮真の中で冷たい考えが浮かんできた。
そう、何も亮真は無理にゲルハルトを殺す必要は無いのだ。
（死にたい奴は死なせてやるか……）

亮真はルピスを見捨てた。
正確には彼女の将来を切り捨てたのだ。
（安心しな殿下、俺はアンタを裏切りはしない。だがこのままならアンタは確実に死ぬ。何年後かは知らないが俺には其の日が眼に浮かぶよ……だからエレナ達に忠告だけはしてやる。だが俺はもうアンタを助けるつもりは無い。後はローゼリア王国の人間で対処してくれ。せいぜいゲルハルトの動向に気を配るんだな）
心の中でそう呟くと亮真は発言の許可を得る為に手を挙げた。

「では！僭越ですが構いませんでしょうか？」

ルピスの目が一瞬脅えるような色を浮かばせた。
彼女も自分の判断が正しいとは思っていないのだ。
だが人情が、彼女の優しさがミハイルの命を見捨てると言う選択を拒む。

「どうぞ亮真」

「では！」

亮真はルピスの言葉を受けて椅子から立ち上がる。

「私は須藤殿の言い分を受け入れゲルハルト公の恭順を受け入れるべきだと考えます！」

亮真の言葉に天幕が震えた。

「な！本気ですか！御子柴殿！」

「えぇベルグストン伯爵、本気ですよ」

彼もまた貴族でありながら軍事にも知識がある。
外交や宮廷闘争も経験がある為、須藤の提案がどれほどルピス王女にとって危険かをおぼろげながらに理解していた。

「何か……狙いがあるのですか……？」

敵の使者である須藤が居る場でそう尋ねずにはいられないほど、亮真の言葉は伯爵にとって意外でしかなかった。

「いいえ？ですが忠誠篤きミハイル殿を見捨てるわけにもいきません。それにゲルハルト公の言い分にも一理あると言えます。戦は無い方がよい。イラクリオン周辺は穀倉地帯ですからあそこで大軍をぶつけ合えば今後の収益にも影響が出る。ゲルハルト公が王女殿下へ恭順されるなら其の方が良いでしょう？」

亮真の言葉にウソは無い。
確かに公爵軍とぶつかれば今後の税収に大きな痛手を受ける。
だが伯爵は亮真の言葉を聞いても釈然としない様子であった。
元々イラクリオンに進軍する際に、今後の税収に影響が出る事は織り込み済みだったのだから。

「ですが殿下！公爵の恭順を受け入れるのに際して、私達の方からも条件を幾つか付けるべきだと考えます」

「どういう事？」

「幾らなんでもミハイル殿の返還だけではつり合いが取れなさすぎです。公爵には爵位の返上と賠償金の支払いを命じられては如何でしょう？」

亮真の言葉にルピスは考え込んでしまった。

彼女自身、須藤の持ってきた話が自分達に不利であるという自覚がある。

ミハイルの返還という条件が無ければ考慮に値すらしない。

だから亮真の言い分は彼女にとって理解しやすい。

だが下手に交渉して決裂すればミハイルの命は無い。

一度は死んだものと諦めたのだが、それが生きているとなればどうしても助けたくなる。

正論と人情のはざまでルピスの心は揺れ動く。

「良いでしょう。私はゲルハルト閣下からそのような条件が出た際には一存でお受けして構わないと委任されております……公爵位と返上の上5億バーツの賠償金をお支払いしましょう」

「「「5……5億だと？」」」

須藤の言葉に天幕の中は再びどよめきで溢れた。

須藤の提示した金額は、今回の戦費を十分に埋める事が出来る。

貴族達の中で安堵の気持ちが生まれた。

少なくとも部下に恩賞を出し、自分の家に臨時収入がもたらされるぐらいの物を確保できるのだから

「いや。それと一緒に今後5年間宮廷内の役職には一切付かないと

約束して頂きたい」

亮真の言葉に須藤の顔が歪む。

（ふん……やはり賠償金と公爵位返上は予想してたか……だが役職に就けなくなる事までは想定外だったみたいだな）

だがそれは亮真としては絶対に引けない条件だ。

もしこれが無ければ、政治能力の劣るルピス王女はゲルハルトの餌食になってしまう。

だから5年。

5年あれば王女を支持する貴族達も国の運営になれゲルハルトの魔の手を払いのける事が出来るようになるはずだ。

「良いでしょう……ゲルハルト公爵閣下に変わり私が其の条件を承諾致します。それでよろしいでしょうか？殿下」

須藤は茫然と立ちつくすルピス王女に話を振った。

「えぇ……それでいいわ……」

彼女としては頷くほかない。

「結構です。ではこれよりイラクリオンに戻りましてゲルハルト公へ報告の上で、ミハイル殿をお連れ致します」

そう言い残すと須藤は王女に頭を下げ天幕を出て行った。

須藤が立ち去り会議は終了となった。

此処には亮真とボルツ・リオネ・マルフィスト姉妹の5人だけが残っている。

「良いのかい？本当にあれで？」
リオネの問いに亮真は頷くしかなかった。
「最善ではないけどね……あの状況で打てるだけの手は打ったからね……あれ以上は無理だ」
実際、亮真は最善を尽くしたと自負している。
人情に縛られたルピス王女の下で良くあれだけの損害で済ませられたと自分を褒めてやりたいくらいだ。
「5年で何とかなるんですか？」
「さぁな？……正直其処までは面倒見切れないよ」
サーラの問いに亮真は肩を竦める。
亮真が今回したのは、延命処置に過ぎない。
今回の話を病に例えるなら、ゲルハルトとホドラムはローゼリア王国に巣くう病気である。
亮真は其の病気を戦と言う手術で完治させようとした。
だが手術を望んだ患者であるルピスがゲルハルトを取り除くことを拒んでしまった。
ならば亮真としては次善の手を打つしかない。
ゲルハルトと言う病原菌を5年間封じ込め其の間に患者の体力を回復させ、対抗出来るようにする。
それ以外に選択の余地などなかったのだ。
後は亮真が与えた5年と言う猶予をルピス王女が上手く使う事を祈るだけである。
そしてそれは、ローゼリア王国に住む人間が行う事だ。

偶々この戦に巻き込まれた亮真が考える事ではないのだ。

「まぁこれで残るのはホドラムと其の配下の騎士２０００のみだ…」

亮真の言葉にリオネ達は頷いた。
後はホドラムを始末すれば全てが終る。

「明日か明後日かな……」

「イラクリオンに攻め入るんですね」

「あぁ。そこで最後の戦だ！」

ローラの言葉に亮真は頷いた。
残るはホドラムとの決戦のみ。
ローゼリア王国の内乱は遂に最終局面を迎える事になる。

第２章第３４話

異世界召喚１７８日目【決戦】その６：：

「みなさん！遂に私達はこの戦場に到達しました！……これから最後の決戦が行われようとしています。これはローゼリア王国の未来を決める戦です！敵の兵は総数２５００。私は皆さん一人一人が最善を尽くせば勝利は揺るがないと確信しています。私は皆さんの忠義と力を信じています！……我らに勝利を！ローゼリア王国に栄光を！」

「「「「ウォォォォォ！我らに勝利を！勝利を！勝利を！ローゼリア王国に栄光あれ！」」」」

壇上に立ち、騎士達を鼓舞するルピス王女に呼応して騎士達の歓声が平原に轟く。

騎士達は腕を天高く突きあげ槍の石突（穂先とは反対の棒の先端部分）を地面にドンドンと突き立てて気勢を上げた。

それは長年ホドラム将軍に抑圧されてきた騎士達の恨みの念が火山のように噴火した結果である。

彼らは遂に其の恨みを晴らす機会を得たのだ。

それも圧倒的に有利な状況によって。

ルピス王女へ恭順の意思を固めたゲルハルトの行動は素早かった。

亮真から提示された条件を全て呑むと、直ぐにアーデルハイド伯爵以下貴族派の主だった人間に裏工作を掛けたのだ。

それは亮真に指示された策がルピス王女に対する自らの印象を少しでも良くしたいと言うゲルハルト公爵の打算と混ざり合った結果、信じられないほど迅速に行われた。

そして其の策の効果は劇的な程に発揮された。

――

「おぉ、ゲルハルト公爵様……先日は失礼いたしました……」

ゲルハルト公の突然の訪問に戸惑いを隠せないアーデルハイド伯爵は、それでも無礼にならない程度の礼儀をもって彼を迎えた。

彼はイラクリオンの郊外に天幕を張って野営していた。

「いやいや、突然押しかけてしまいこちらこそ失礼した」

この辺は社交辞令として当然の挨拶である。

ゲルハルト個人としては、長年貴族派を支えてきたアーデルハイド伯爵が自分を裏切りホドラム将軍に与した事を根に持っている。

人間としては当然の感情だろう。

だが今の彼の表情から、其の怒りを窺い知ることは出来ない。

彼は傲慢な男だが、必要なら幾らでも謙（へりくだ）った態度をとれる男だった。

演技が上手いともいえる。

勿論長年ゲルハルト公爵の下で貴族派のナンバー2を務めてきたアーデルハイド伯爵には通用しないのだが、それでも円滑に話し合いを進められるという効果はある。

誰だって高圧的に話されるより、穏やかに話をした方が聞きやすいのだ。

「して？どのようなご用件ですかな？……ホドラム将軍に言われた様に出陣の準備を整えなくてはならないので忙しいのですが……いよいよ決戦ですからなぁ……」

アーデルハイド伯爵の言葉は礼儀正しいが、含みがであった。
つまり落ち目のゲルハルト公爵と話す時間など無いと言外に匂わせているのだ。

「おぉ、それは申し訳ない……ですがアーデルハイド伯爵はご存知ですかな？今王女は大胆な手を打とうとしている事を」

如何にも意味深な言葉である。
アーデルハイド伯爵も公爵の手だと判っていても聞き返さずにはいられなかった。

「大胆な手？……ルピス王女は一体何を企んだというのです」

ルピス王女が何らかの策略を企てているのなら伯爵は無視することは出来ない。
それが例えゲルハルトの言葉でも。

「殿下は騎士を少数に分けホドラム将軍に与する貴族達の領地を焼き討ちに向かったようなのです」

「ま！……まさか！……そんなことは在る筈が無い！……あの殿下がそのような事を！」

伯爵が声を荒らげるのも無理は無い。
今は争っているとはいえ同国人同士の戦なのだ。
つまりルピス王女が貴族の領地に焼き打ちを仕掛けると言う事は、ローゼリア王国の経済に打撃を与えると言う事であり、それは自分自身にも被害が及ぶ捨て身の策と言う事になる。
焼き討ち自体は珍しい事ではない。
村を焼き食糧を奪う。

戦術としては格別目新しいものではない。
それは裏を返せば、非常に効果的な戦術と言える。
だが自国民にそれをするというのを伯爵は聞いた事が無かった。

「信じられません……あの殿下がそのような策を取るなど……何かの間違いでは？」

アーデルハイド伯爵がそう問い返したのも無理は無い。
ゲルハルトは伯爵が自分の話術に取り込まれた事を確信した。

「確かに！殿下はお優しい方ですからな……」

「そうでしょう？何かの間違いですよ！そんな事をなさる筈が無い！ローゼリアの民をルピス王女が傷つけるなど！」

反乱に加担したくせアーデルハイド伯爵は、自分がルピス王女と敵対している事をいまいち理解していないような口ぶりだ。
まぁルピス王女を直接知っているだけに、伯爵が信じられないのも無理はないのだが。
こみ上げてくる笑いを押し隠しながらゲルハルトは神妙な顔をして話を続けた。

「ですが……殿下の下に居るあの男はそのような事を気にはしますまい……」

ゲルハルトの言葉に伯爵の表情が固まった。

「あの男……それはあの悪魔の事ですか……」

「左様……【イラクリオンの悪魔】と言われているあの男ですよ…

…」

「御子柴亮真……」

アーデルハイド伯爵の言葉にゲルハルト公爵は無言で頷いた。
５０００もの兵を水攻めで溺死させた上、生き残った人間は全て殺すと言った対応をした亮真をイラクリオンとその周辺に住む人々は恐怖を込めて【イラクリオンの悪魔】と呼んだ。
それは亮真がまき散らした噂が誇張されていった結果の虚像だったが、教育をまともに受けていない農民たちはその噂を信じ込んでいた。
それは伯爵の耳にも届いている。
何しろその噂を聞きつけ、領地から率いてきた農民達が帰りたいと嘆願してくるくらいだったからだ。

「しかし……それは噂でしょう？本当に悪魔だと言うのですか？」

「悪魔かどうかと言えばそれは噂でしかありません。ですがあの男が悪魔に匹敵するほど残忍で容赦無い人間なのは間違いないと思いますよ？」

無論、御子柴亮真は悪魔では無い。
敵には容赦が無くとも、むやみに殺しを楽しむような性癖も無い。
だが今は其の悪魔と呼ばれるイメージが大事だった。

「……確かに【イラクリオンの悪魔】なら……しかしそれは本当の事なのですか？」

伯爵はまだ信じ切れていないようだった。
尤もゲルハルトもそんなことは判っていた。

彼は唯、伯爵を揺さぶりに来ただけなのだから。

「なぁに、ワシはそういう噂を聞いたという話をしただけの事。信じるかどうかは伯爵が考えるべき事でしょう……さて。お忙しい伯爵をいつまでもお邪魔するわけにもいかん。ワシはこの辺で失礼いたしますよ」

「え？もうお帰りですか？そのように急がずとも！」

伯爵は最初の言葉を忘れたかのようにゲルハルト公爵を引きとめた。人を不安にさせたままで帰られてたまるかという伯爵の心が滲み出る。

伯爵はもっとはっきりとした言葉が聞きたいのだ。

「いやいや、余りお邪魔するのも良くないからな……そうだ、もし今の話が気になるのなら町の商人達に聞いてみると言い。ワシは其処から聞き込んだのだ。きっとワシよりも詳しく話をしてくれるだろうよ」

其処まで言われれば伯爵としても無理に引きとめる訳にもいかない。

「判りました。面白いお話をありがとうございます」

「いやいや、お忙しいところをお邪魔して申し訳なかった。それでは失礼する」

ゲルハルトはそう言い残すと伯爵の天幕を後にする。

伯爵は直ちに副官達を呼び集めた。

ゲルハルト公爵が言い残した噂の真偽を確かめる為に。

「では本当の事だと言うのか！？」

アーデルハイド伯爵は自分の副官達がもたらした報告に愕然とした。

「本当かどうかは不明ですが……確かにイラクリオンにやってきた商人達がこの話を噂しているのは確かな事です……」

副官の言葉が伯爵の心を打ちのめす。

元々彼ら貴族は本能的に勝ち馬に乗るように刷り込まれている。

家名を権力を領地を、それらを保つ事が最優先なのだ。

彼らは自分の領土に固執する。

農民を大切にする意識は無くとも、自分の領地を荒らされるのを黙っている領主は居ない。

其の自らの本拠地が焼き討ちに遭うという。

当然屋敷には家族を残してきている。

しかも今回の出兵で領内の男を殆どかき集めてきてしまった。

残されているのは女子供のみ。

防衛戦など考えもつかないだろう。

（不味い……非常に不味い……だが……どうすればいい？）

伯爵は湧きあがってくる不安に身を焼かれた。

噂が本当ならば領地と自らの家族を守る為に戻るしかない。

だが何も得られずに領地へ戻れば、残るのは借金だけだ。

部下も働いていないとはいえ、まったくの無給と言うわけにはいかない。

農民だって農業を放り出して従軍しているのだ。

このまま帰れば其の不満は確実に噴き出す事となる。

（しかし……もし本当なら……家族が……妻が孫が……）

奴隷商人に売られるならまだ良い。

いずれ買い戻す機会だってある。
だが【イラクリオンの悪魔】とまで呼ばれるような男の事だ。
女子供だろうと容赦なく殺すだろう。

アーデルハイド伯爵の心は恐怖で縛りあげられる。
傍らに控える伯爵の息子達も父の苦悩の原因を理解しているだけに掛ける言葉が無い。
いや、彼らの本心はこの場から直ぐに領地へと戻りたかったのだ。
自分の子供と妻の為に。

「伯爵様！失礼いたします」

天幕の入口に兵士の姿が現れた。
何か報告があるらしい。
思案の邪魔をされたアーデルハイド伯爵はジロリと冷たい視線を向けると、追い払う様に手を振った。

「なんだ！邪魔をするなと言ったはずだ」

だが、兵士は伯爵の言葉に躊躇うような表情を浮かべて言いだした。

「はぁそれは判っていたのですが……ロマーヌ子爵他貴族の皆様が連れだって閣下に面会を求めておいでです……一応閣下の命令をお伝えして後日にして頂きたいと申し上げたのですが、火急の要件との事で……其の……如何致しましょう？」

其の顔を見た伯爵は、ため息を一つ付いて兵士へ言った。
なぜ子爵達が此処に来たのか、その理由に想像がついたからだ。

「……判ったお通ししろ」

「は！」

兵士の後姿を見ながら伯爵は隣に控える長男へと語りかける。

「どう思う？……やはり」

「父上のお考えどおりかと……」

「お前もそう思うか……だがどうする？」

伯爵は自分の長男がそれなりに知恵のある人間に育った事に嬉しさを感じた。

「此処は領地へ戻るのが最善ではないかと……」

「ご長男のお言葉は的を射ておる！」

天幕の入口に幾人かの人影が立った。

「おぉ。子爵殿に皆様……よくおいで下された……しかし、今のお言葉はどういうおつもりか？ルピス王女の軍が迫っている今、領地に戻ることなど出来るはずもない」

伯爵は先頭に立って天幕の中に入ってきた小柄な中年へそう問いかけた。

小柄な中年は無作法にも椅子も勧められるうちにドッカリと腰を座らせる。

だが誰もこの男の態度を咎めようとはしなかった。

言っても無駄だったからだ。

「伯爵殿。建前は良い。今はそんな無駄な事を言っている暇は無い……ワシらは領地へ戻る事にした」

「な！」

ロマーヌ子爵の言葉にアーデルハイド伯爵は顔色を変えた。
子爵は伯爵の派閥に属してはいるが生来傲慢な性格の為扱いにくい。
ただ其の強気な性格が良い方に出たのか、下級貴族の親分格としての地位を築いている。
少数貴族が持つ兵力は数十～百ほど。
しかし小さな戦力も数がまとまればそれなりに大きな戦力となる。
だから伯爵としてもロマーヌ子爵の無礼を黙認してきたのだ。
だが勝手に撤退を決めたと宣言したロマーヌ子爵を、其のままにしておくことは出来なかった。
伯爵は精一杯の威厳を込めて怒鳴りつける。

「馬鹿な！何を勝手な事を！ゲルハルト公を裏切るおつもりか！」

既にアーデルハイド伯爵達貴族派はゲルハルト公爵からホドラム将軍に乗り換えている。
だが、建前上はいまだにゲルハルト公爵の軍勢なのだ。
例え実権が無くとも、公爵が旗頭な事に変わりは無い。
だが子爵は軽く唇を歪めて冷笑した。

「何を今更。ゲルハルト公を見限ったのはつい先日の事。幾ら高齢とはいえ忘れるにはチト日数が短すぎるのではないですかな？」

侮蔑ともとれる子爵の発言に伯爵の周りに控えた副官達が剣に手を掛けた。

「止めよ！」

今にも斬りかからんとした副官達にアーデル ハイド伯爵の怒声が飛ぶ。

そして子爵の方を向くと、諦めた顔をして言った。

「確かに……取り繕っても致し方ないな……本題に入ろう……何故だ？」

これは何故子爵達が領地に戻る事を決断したのかという問いだ。

その理由を伯爵は予想してはいるが、子爵の口からハッキリと確認したかったのだ。

そしてその結果によっては自らの身の振り方を考えなければならない。

「判り切っているだろう？……例の噂だ……」

子爵の顔が苛立ちで真っ赤になる。

「やはりそうか……噂は真実と言う事か？」

伯爵の問いに子爵は首を振った。

「では噂の真偽を確かめずに撤退を決めたと言うのか？……そなたら全員が」

「真偽など関係無いのです。伯爵殿」

子爵の後ろに居た青年貴族が声を上げた。

アーデルハイド伯爵の記憶には彼の名前が思い浮かばない。
ロマーヌ子爵の下に属する下級貴族の一人だろう。

「どういう事かな？」

「既に農民達にこの噂が広がってしまいました。その結果、彼らはどうしても自分達の家に帰ると言ってきました」

焼き討ちをされて一番困るのは農民である。
家も財産も全てが奪われ灰になる。
貴族はまだ、親族の援助を受けると言う可能性が残されるが、生活の苦しい農民達は自分の生活を守る事で精一杯。
とても他人の生活までは面倒を見切れない。
だから彼らは言えに帰りたいのだ。
ささやかな財産と自分の家族の命を守る為に。

「下らん！農民など見せしめに何人か傷めつければ済む話ではないか？」

伯爵の言葉はこの世界の貴族が常習的に行う政治手腕である。
そしてそれはとても効果的な方法だ。
通常ならばだ。

「それが……農民達は反乱も辞さない覚悟らしく……こちらに抗ってきたのです」

「何だと！？農民がか！」

これは伯爵にとってもかなり意外だった。
農民たちが其処まで追い詰められているとは思いもしない。

「はい。どうにかその場は取り沈めたのですが……調べてみるとこれは陣の全てで起こっています……それに……」

「それに何だ？まだ何かあるのか？」

伯爵はもうこれ以上彼の話を聞きたくなかった。
これ以上状況が悪くなるなど彼には耐えられない。

「シュバルツェン侯爵と其の一派の軍が既に撤退を開始しています」

「馬鹿な……そんな勝手な事を！」

貴族派にも派閥がある。
シュバルツェン侯爵は貴族派のナンバー3。
ゲルハルト公爵からの信頼と言う点でアーデルハイド伯爵が勝っていた為に派閥内の序列では下だが、領地の広さと爵位の高さでは貴族派でもゲルハルト公爵に次ぐ高位の人間である。
今回の軍の編成でも、侯爵の兵数は貴族派の中でも2番目に多い。
それが無断で戦線を離脱したとなれば無視することは出来ない。

「ホドラム将軍には報告したのか？！」

伯爵としては最も気になるところである。
だが青年貴族は顔にいやしい笑みを浮かべて首を振った。

「今更あの方に報告したところで何も変わらないでしょう？……シュバルツェン侯爵の軍勢は邪魔をすれば戦も辞さないと通達してきました。ならばもう我らに打つ手はありません……となれば、下手にホドラム将軍に報告して時間を無駄にするよりも、我ら貴族が生

き延びる算段をするべきではありませんか？」

「ホドラム将軍を生贄にしてか？……諸兄らも同じ意見か？」

伯爵の言葉に彼らは無言だった。
つまり、無言の肯定と言う事だ。
吐き気がするような汚さである。
だが伯爵は嫌悪感を持ちながらも彼らの態度に理を感じた。
それは家名を残すために幼少から叩きこまれた貴族の生存本能なのかもしれない。

「ふぅぅぅ……良かろう……貴殿らが其処まで覚悟されているなら私ももはや言うべき言葉は無い……貴殿らの意見に従うとしよう」

「では、直ちに撤退をするとしよう。噂の真偽がどうであれ領地の防衛にあたらなければならんからな！」

アーデルハイド伯爵の言葉を受けてロマーヌ子爵は踵を返して天幕から出ていく。

其の後ろ姿を見ながら、アーデルハイド伯爵は呟いた。

「ゲルハルト公を裏切り、直ぐまたホドラム将軍を切り捨てるか……家名を保つとは綺麗事では無いのだな……」

伯爵の横に控えている副官達は皆一様に無言のままだった。
彼らもまた貴族の過酷さを噛み締めていた。

第2章第35話

異世界召喚１８０日目【決戦】その７‥

「では殿下！進軍のご指示を！」

メルティナが全軍を前にして立ち尽くすルピス王女へ進軍を促した。

亮真の策により、イラクリオン周辺に駐留していた貴族派の軍勢は皆それぞれの領地へと帰ってしまっている。

そしてゲルハルトがルピス王女に恭順した今、残るのはホドラム直属の騎士２５００のみである。

それに対してルピス王女の軍は総勢２万５０００。

圧倒的に劣勢だったはずの王女達の戦力はいつの間にか逆転していた。

王女の目の前に立ち並ぶ騎士達は、王女の命令を今や遅しと待ちわびている。

実に１０倍もの戦力差なのだから彼らの士気が高ぶるのは当然と言えた。

だがルピス王女の心は目の前で高ぶる騎士達の気持ちとは反対に、暗く沈んでいた。

圧倒的に劣勢だった自分が、勝利を掴み掛けている。

狂喜乱舞しても不思議ではないこの状況を彼女は喜べなかった。

ある男への恐怖が、彼女の心に影を差す。、

（これがあの男の力……あれほどの劣勢を覆した男……御子柴亮真……私はあの男が怖い。あの知略が怖い、容赦の無さが怖い、王家の血に対してまったく敬意を持たないあの心が怖い……ホドラムを

倒せばあの男はこの国から出て行く。其れは良い……其れは最初の約束だから。でも……もしアイツが敵に回ったら？……私なんかじゃ太刀打ちできない……この国にあいつにかなう人間が居る？もしあいつが私達の敵になったら？……ホドラムやゲルハルトなんか問題にならないほどの脅威になってしまう……）

それは最初から判っていたことだ、いや、判っていると思い込んでいた。

理解していたはずの不安がホドラムを倒す段階になって、心の奥底から湧き出してくる。

だが彼女は其の不安を振り払った。

（いいえ……それは後で考えれば良いわ。今はホドラムを排除することが先決よ！）

メルティナに軽くうなずき返すと、ルピス王女の目が前方を見据えた。

「えぇ！全軍進軍！」

メルティナの言葉に頷くとルピス王女の剣が抜き放たれ、イラクリオンを指し示す。

今はホドラムに勝つことが全てなのだ。

（全ては……この戦の為に戦ってきたのだから！）

「「「うぉぉぉぉぉお！」」」

再び歓声が響き騎士達が一斉に進軍を開始した。

目指すのはホドラム・アーレベルクの首。

唯一つだった。

「亮真様……宜しいのですか？」

ルピス王女率いる騎士団が砂塵を上げてイラクリオンへと向かう。
其の進軍を少し離れた高台から眺めている一団が居た。

「あぁ、俺達がイラクリオン攻めに参加したところで意味は無いからな」

ローラの問いに亮真は軽く答える。
その場に居るのはリオネ・ボルツ率いる傭兵達とマルフィスト姉妹の総勢８０名程である。
全員が戦支度をしており、何時でも戦場に向かえる準備をしているというのに指揮官である亮真はその場から動こうとはしない。

「ですが若……イラクリオンを攻めなければこの戦は終わらないのでは？」

ボルツが疑問を言葉にした。
それはその場に居た全員が気にしている疑問だった。

「？イラクリオンを攻めなきゃ戦が終らない？……成る程……みんなもそう思ってるのか？」

亮真の問いにその場に居た誰もが頷く。
ホドラムがイラクリオンの町から軍を動かさない以上、攻めるより他に手段は無いのだ。
既にゲルハルトが王女に恭順しているとしても。

ボルツの言葉の意味を理解した亮真は顔には笑みを浮かべた。

「じゃあ質問だ。今イラクリオンに居るのはホドラム率いる２５００の騎士だけだ。ゲルハルトが王女に恭順した今の段階では敵と呼べるのはそいつらだけだ。それは判るな？」

亮真の言葉に全員が頷ずく。

亮真の流した焼き討ちの噂によって、貴族達は自分の領土の防衛に戻ってしまっている。
その所為でイラクリオンの周辺からは兵の姿が消えていた。
だからこそルピス王女は決戦に踏み切ったのだ。

ゲルハルトが恭順している以上、ルピス王女の敵はホドラムと其の配下だけになっている。
その事は全員が十分に理解していた。

「ルピス王女の兵力は？」

「２万５０００程です」

「サーラの言うとおりだ、じゃあホドラムの方は？」

「２５００ですぜ！」

ボルツがすかさず叫んだ。

「その通り、実に１０倍近い差があるわけだが、みんなはホドラムがイラクリオンに立て籠もる思うか？」

亮真の視線が全員を順繰りに見回す。

誰もが其の言葉で亮真が何を考えているのか察した。

「なら坊やは立て籠もらないと思っているって訳かい？」

リオネが自分の考えを言葉にする。

「あぁ。まぁ確率的には5分5分だけどね……俺が知る限りホドラム将軍ってのは傲慢でいけすかない親父だが、同時に強かで諦めが悪いとみてる」

「じゃあ、どうするって言うんだい？諦めの悪いホドラム将軍は？」

「普通に考えてたてこもったところで援軍の見込みはまず無い。一度見限った貴族派の面々が再びホドラムの為に兵を出すことは無いからな。となればホドラムに残されるのは玉砕か逃亡かの2択って訳だ……だが俺はホドラムが玉砕を選択するとは思えない」

「なら逃亡しか残らないじゃないか……でもあの戦力差でそんな事が出来るのかい？１０倍だよ？１０倍」

亮真の言葉を聞いたリオネの返事は懐疑的だった。

多くの戦場を経験しているリオネは撤退戦の難しさを十分に理解している。

軍は進むのは簡単だが引くとなると途端に難しくなる。

しかも騎士は個人技に長けている半面、集団連携になると途端に其の力が落ちる。

だが退却戦で重要なのは個人の力では無く、騎士が苦手な集団連携の力なのだ。

お互いがお互いをフォローしあえれば生還の確率は高くなる。

逆に個人が連携を無視して退却すれば残された人間は死ぬしかなくなる。
これは歴史が証明している事実である。

唯でさえ騎士が苦手な退却戦でしかも戦力差が１０倍とくれば、ホドラム将軍達が生き残る可能性はほぼ０と言えた。

「確かに、それは俺もそう思う。まぁそうなるように色々と小細工をしたわけだけどな……だがそれはホドラムが軍を率いて退却すればってことだ……俺は最悪ホドラムが配下の騎士を見捨て逃げ出す可能性を考えている。……少数の側近と自分の家族だけを引き連れてな」

リオネの疑問に亮真は頷いた。
だが同時に、軍単位で退却を試みないなら可能性はあるとも考えている。

「まさか……そんな……幾らなんだって」

「若！それは幾らなんででも……」

亮真の言葉に全員が絶句した。

配下を見捨てて単身逃げだせば確かに逃げる事が出来るかもしれない。
だがそれが一国の将軍位にまで上り詰めた騎士が選択する行いだろうか。
傭兵として幾多の戦場を知っているリオネやボルツでも其処まで恥知らずな人間に覚えは無かった。
勿論、傭兵や農民を捨て駒にする騎士は多くいたが、はたして軍の

最高指揮官が……

「まぁ今のはあくまでも可能性の話さ……イラクリオンを攻めなければならない事に変わりは無いからな。ただ俺達程度の人数がイラクリオン攻めに参加しなくても大勢に影響はしないだろう？だからルピス殿下に頼んで別行動を許可して貰ったのさ」

亮真は決して断言はしていない。
だがその場に居た全員には亮真が言う確率が5分5分どころかほぼ確実に起こる未来であると予感していた。
確かに圧倒的に有利な状況である以上、亮真達がイラクリオン攻めに参加しなくても勝敗自体には影響が無いだろう。
だが戦後の恩賞まだ考慮に入れるなら、ここで参加しないという決断は不利にはなっても決して有利には働かない。
それを踏まえても尚、亮真が此処に居ると言う事はホドラム将軍が逃亡する可能性が極めて高いという事になる。

「まだ納得いかないか？」

亮真の言葉に全員が首を振った。
此処まで説明されれば納得せざるを得ない。

「さてと……後は厳翁（げんおう）達が戻るのを待つか……」

「厳翁ですか？」

亮真の言葉にローラは周囲を見回した。
確かに厳翁と咲夜の二人が見当たらない。

「なぁに……あいつらにイラクリオンに紛れ込んでるヤツラと繋ぎ

を取ってくるように頼んだのさ……お！噂をすれば二人が来たな……どうだった？厳翁、咲夜」

先日より商人に変装した傭兵達が、イラクリオン周辺に散らばって諜報活動を行っている。
殆どの任務は、農民達に対して御子柴亮真という人間の噂を流すことだったが、同時にイラクリオンへ潜入し、敵側の動向を探ると言う任務が与えられている。
そしてゲルハルトが恭順した今、彼らはホドラム将軍の動向を全力で監視している。
其の連絡役として厳翁と咲夜の二人がイラクリオンへと潜入していたのだ。

亮真の眼がイラクリオンから駆けてきた二人の姿を捕らえた。

「お待たせ致しました。御子柴殿」

「遅くなりました」

二人は軽く亮真へ頭を下げ時間がかかった事を詫びると、其のまま本題の報告へと話を繋げた。

「御子柴殿の予感は当たりましたぞ……ホドラムの屋敷を見張っていた者たちによれば、昨日今日と屋敷に町の商人達が呼び出されなにやら商談が行われた模様です」

「商談ねぇ……内容は掴めているのか？」

厳翁の言葉に亮真は軽く頷くと尋ねた。
彼の報告は亮真にとって予想されていたものだが、それだけで決め

つけるのは危険だ。

「はい、屋敷から出てきた商人の一人を問いただしたところ、なんでも衣類や権利書の類を売り払ったようです、現金化したかったようですな」

厳翁の言葉に亮真は頷いた。

資産を現金化したということの意味は一つだけ、ホドラムは国外逃亡を考えているということだ。

「まぁ逃亡資金を調達したと見るべきだろうな……」

「それに保存食を買い求めたという話も入っています」

「保存食ねぇ……部下を切り捨てる気だな……」

もし部下を引き連れていくのなら、ホドラム自身が食料を買う必要は無い。

軍には兵糧を管理する部隊が居る。

総大将であるホドラムがわざわざ商人から買う必要など無いのだ。

それが態々商人を呼び出して買った。

つまり自分の行動を部下に知られたくないということだ。

「おそらく」

亮真の言葉に厳翁が頷く。

「逃走経路に関してはどうだ？予測はつくか？」

「いえ、さすがにそこまでは。ただ……」

「なんだ？気になることでもあるのか？」

「家族を連れてとなれば、徒歩はありえますまい。馬車に荷物を積んでいたところを見ても街道を使うはず」

「亮真様！これを」

すばやくサーラが携帯していた地図を亮真の前に広げた。

「ここがイラクリオン……可能性としては４択か」

亮真の目が素早くイラクリオンより伸びる7本の街道を捉えた。
このうちの3本はルピス王女の勢力圏を通らなければならない。
裏をかく為にワザと王女の勢力圏を通るという選択肢も有るが、家族連れではあまりにも危険だ。
亮真はホドラムがローゼリア王国内に顔を広く知られていることを考へ選択肢を絞り込んだ。

「南東、南、南西、西の４街道ですね……家族連れとなると、西のザルーダ王国に抜ける道は除外しても良いかと」

ローラの指摘に亮真は軽く頷く。
（確かに、鉄の国の名を持つザルーダ王国は峻険な山が多い。家族を引き連れて逃げるにはあまりにも厳しい地形だ）

「なら同じ理由で南西も除外だな……残りは南東と南か……」

南と南東は共に南部地方へと続いている。
そこは小国が乱立する西方大陸の中でも最大の激戦地帯だ。

だが身を隠すにはある意味、絶好の場所ともいえる。

「2択か……さてどうしたもんかな……」

亮真の目が空を見上げた。

手持ちの兵力はおよそ１００名。

全員が戦士として一流の力量を誇るが、相手も必死で抵抗してくるはずだ。

実力は伯仲と考えたほうがよい。

そうなるとものを言うのは頭数ということになる。

ホドラムもさほど大人数ではないと考えられるが、警護として５０名程の騎士は引き連れているはずだ。

（2手に分けるの愚策だな……だが逃がすわけにもいかないし……どうしたもんか）

ローゼリア王国の未来を考えるなら、ここはどうしてもホドラムを殺しておきたい

それにエレナとの約束もある。

亮真の脳裏にさまざまな案が浮かんでは消えていく。

いくら彼が策に優れていようとも、物事には限界がある。

物理的な不足を策で補えるはずも無かった。

「亮真様」

「？なんだ？どうかしたか？」

思案に耽っていた亮真にサーラが耳打ちをした。

「今、こちらに向かってくる部隊が居ると報告がありました」

「敵か？」

亮真の問いにサーラが首を振った。

「いえ、エレナ様です」

「エレナさんが？……あの人はルピス王女とイラクリオン攻めに参加しているはず……確かか？」

「はい、まもなくこちらに到着されるかと」

「判った。ここにお連れしてくれ」

亮真の言葉にサーラは頷くと、その場から離れた。

第2章第36話

異世界召喚１８０日目【決戦】その８：

「ふぅ、よかった。間に合ったわ！」

そう言うとエレナは亮真の前で馬から飛び降りると、薄い笑みを浮かべながら言い放った。
亮真は彼女の笑顔にどこか暗い情念を感じた。

「エレナさん……何故ここに？イラクリオン攻めに参加しているはずでは？貴方が居ないと不味いのではありませんか？」

「あら？あなただってイラクリオン攻めに参加していないでしょう？私だって……ねぇ？」

亮真はエレナの言葉に苦笑いを浮かべた。
（さすがに救国の英雄といわれるだけのことは有る……体は老いていても頭のキレは流石だな……最後の始末は自分の手でか……）
亮真はエレナの表情から、彼女が此処へやってきた理由を察した。
彼女は亮真と同じように、ホドラムが国外に逃走すると読んだのだ。
そして自らの手で決着をつけることを覚悟している。

「兵数は？」

「私の側近を３００」

（完全に殺す気か……まぁそれも当然か……）
エレナの心に宿るのは復讐の暗い炎。

今回の戦で彼女が直接の指揮権を持つ兵数はおよそ３０００。
その中から自分の側近３００のみを率いてこの場にやってきた事が、エレナの覚悟を表している。
自分の側近だけを連れてきたということは、どんな手段を使ってもホドラムを確実に殺すという意思表示に他ならない。
例えホドラムが降伏を選択しようと無視する心算なのだろう。

「それで？状況は？ホドラムは既にイラクリオンを脱出したのかしら？」

エレナの問いに亮真は首を振って答えた。

「そぉ……まさかイラクリオンに篭って玉砕を選択するなんてことは無いでしょうね？」

エレナの顔に不安の色がよぎる。
予想はあくまで予想でしかない。
彼女は自分の予想が常に正しいと考えるほど愚かではないのだ。
だが今回の予想を外すわけにはいかない。
もし外せば彼女の復讐は此処で終わってしまうのだから。

「其れは無いでしょう。俺の部下が調べたところでは逃走資金の調達をしていますからね……」

「……やはりね……あの男の考えそうなことだわ」

エレナは吐き捨てるように言い放つ。

「どこに向かうつもりか判っているの？」

亮真はサーラから地図を受け取ると、エレナの前に広げる。

「2択まで絞り込みました……馬車を準備している事と、荒事に慣れていないホドラムの家族が一所にいる事を考え合わせると、まず南方方面に逃げるつもりではないかと考えています」

亮真の指が地図をなぞる。

「成る程……東を避けるというのは正しいでしょうね。この状況でそちらに向かえば王女に媚を売りたい貴族達から狙われるからね……」

亮真は頷いた。

今やルピス王女の勝利は目前だ。

今まで傍観していた者や敵対していた者は、何とか家名を守るためにルピス王女へ取り入ろうとしている。

そんな状況でホドラムが東へ向かうのは自殺行為といえる。

誰もがホドラムの首を手土産に王女へ取り入ろうとすることが目に見えていた。

「西も無いわね……ザルーダ王国との国境地帯は山が多いし……後は南方か……」

エレナの分析も亮真と同じ結論に達したようだ。

尤も彼女の顔は悩んでいるようには見えない。

何か確信があるのだろう。

「亮真君、貴方は南か南西か2択で悩んでいるのよね？」

亮真は無言で頷く。

「なら私が其の問題を解決してあげるわ。ホドラムの逃走経路は南よ。他には考えられないわ」

エレナは自信を持って言い切った。

「根拠は？」

「彼の妻がタルージャ王国の貴族出身だからよ」

タルージャ王国。

イラクリオンから南に１００ｋｍほど行った所にある国の名だ。

確かに妻の出身国なら逃走先としては無難な選択といえる。

縁が多少でも有るならば、庇護も求めやすいだろう。

「成る程……縁があるならタルージャ王国を目指すのは有り得ますね……ただそれを見越して裏をかかれる可能性は無いんですか？」

亮真は別にケチを付けたい訳ではない。

エレナの言葉にある説得力は彼も認めている。

だが彼自身が、オルトメア帝国から脱出した際に選択したように、最善の手段が常に良い結果をもたらすとは限らないのだ。

最善の手とは、他人から見て予測されやすい。

だからこそ次善の手を選択することで、相手の目を惑わすことが出来る。

其の可能性を亮真は気にしていた。

「ワザと最善を採らないってことね。でも其の心配は無いわ……何故ならイラクリオンから南東へ進めばブリタニア王国に着くわ」

エレナの指がタルージャ王国の隣を指差す。

「距離的にはタルージャ王国とほぼ同じくらいですよね？このブリタニア王国に逃走する可能性は無いのですか？」

亮真の問いにエレナは首を振った。

「其れは無いわ……タルージャとブリタニアは長年の宿敵同士。ホドラムのみが逃げるならともかく、タルージャ出身の奥方を連れて行くことは出来ないわ。そしてホドラムは奥方を捨てることも出来ないの。それをしてしまえばホドラムを助力してくれる勢力が０になってしまう」

「エレナさんはホドラムがタルージャ王国で勢力を盛り返す気だと？……まだ権力を追い求めると？」

「えぇ、間違いなくアイツはこのまま引き下がるような男じゃない……そんな甘い男じゃないわ」

エレナの言葉が正しいのなら、ホドラムがタルージャ王国を目指すのは確実と言えた。

まったく縁の無い国より、奥方の出身国の方が逃亡先としては都合が良い。

だが亮真はエレナの言葉を聞いて新たな懸念を持った。

それは今まで気にしなかったホドラムの妻に関してだ。

エレナの復讐はホドラム本人の命だけではない。

その家族にもその刃は向けられる。

当然ホドラムの妻にも……

問題はホドラムの妻を殺した結果、ローゼリア王国に新たな敵を作

ることにならないかという懸念だ。
（エレナさんの方がホドラムという人間をよく知っている……此処は彼女の判断に従うべきだろうな……ただ気になるのは奥方が他国の貴族だって事だ。そんなのを殺しちまって大丈夫なのか？）
だが亮真は湧きあがった懸念を振り払った。

「判りました。貴方の指揮に従います」

その言葉はエレナの復讐を最優先にするという意思表示だった。
亮真の言葉にエレナは深く頷いた。

「それでどうします？連中がイラクリオンを出てすぐに襲いますか？それとも少し離れた所でやります？」

「私は此処が良いと思うの……どうかしら？」

亮真の問いにエレナは軽く頷くと地図の一点を指差す。
地図によるとその場所は、森となっている。
兵を伏せて置くには都合のよい場所だ。

「成程……ならば部隊を2手に分けた方が良いでしょうね……そうですねぇ、俺が２００ほど率いて猟犬役をやりますか？その方がエレナさんも都合が良いでしょう？」

亮真はエレナの意図を察した。
それはエレナにも伝わる。

「ありがとう……亮真君」

その言葉が、彼女の心を表していた。

そしてホドラムとその家族の運命も。

――

「ケイルよ。追手はおらぬだろうな？」

ホドラムの言葉に、ケイルは馬の後方へと目を向ける。

「はい、閣下……今の所は……まだ我らの脱出に気がついた者は居ないのではないでしょうか」

「そうか……貴様の進言に従って、ルピスの軍勢が押し寄せるタイミングで脱出を図ったのは正解だったようだな、ケイルよ」

「は！有りがたきお言葉！」

ホドラムの言葉にケイルは深く頭を下げた。

ホドラムは資産を現金化すると、自らに付き従う少数の側近たちを屋敷に集め、時期を待った。

彼らがイラクリオンの場外に出る機会（チャンス）を。

そしてそれは、今日訪れた。

ルピス王女の軍勢による、イラクリオン攻めの開始に因って。

イラクリオンの街は大混乱に陥った。

ゲルハルトとルピス王女の間では、既に恭順の話は纏まっていたが、一般市民にまでその話は広まっていない。

その結果、住民にはルピス王女がゲルハルト公爵の粛清に軍を進軍

させたようにしか見えなかったのだ。
支配階級が何をしようと、市民には本来関係はない。
だが、軍が街を目指して攻め寄せてくるとなれば、市民には当然犠牲が出る。
だから住民たちは、自らの命とわずかな財産を守るために街を逃げ出すことになった。

ホドラム達は、その混乱の隙をついたのだ。

「フン！このままで済むとは思うなよ！ワシを陥れた報い……ルピスめ！ゲルハルトめ！必ずや思い知らせてくれる！」

追手が見えない事に安心したのか、ホドラムの口から呪詛の言葉が漏れた。
彼は完全に開き直っていた。
王族の名を呼び捨てにするなど、不敬の極みともいえる。
だが、彼は既にローゼリア王国における自らの地位を諦めていた。
貴族、騎士、そして王族。
ホドラムはローゼリア王国の支配階級から切り捨てられてしまった。
だが彼の恨みに正当性は無い。
別にルピス王女がホドラムを陥れたなどという事実はないのだ。
彼はただ単に自分でルピス王女を裏切り、ゲルハルトを陥れた。
あくまでも裏切ったのはホドラム自身である。
だが彼の頭はそんな風には働かない。
彼の陥った苦境はあくまで他人の所為としか考えられないのだ。
またそういう人間だからこそ、彼は国外に逃亡するまで落ちぶれてしまったのだ。

「妻と娘の様子はどうだ？問題はなさそうか？」

ホドラムは後方に追走する馬車へ目を向けた。
其れには彼の家族が乗り込んでいる。

「は！馬車の中は快適に過ごすことが出来るよう、最善を尽くしております」

「うむ。あれはワシの最後の切り札だからな！良いか！間違いは許さぬぞ！」

「ご安心ください閣下。必ずやタルージャまで無事にお連れ申し上げます！……そうだな？！」

ケイルは並走する騎士達に同意を促した。

「「「我らにお任せ下さい閣下！」」」

ホドラムの切り札は、ケイル達この場にいる全員の切り札である。
この場にいる誰もがホドラムと同じようにローゼリア王国では生きていけない者ばかりだ。
其れはホドラムの威光を盾に好き勝手なことをしてきたツケである。
だからこそ、彼らはホドラムを裏切らない。
ホドラムが浮けば自分達も浮き、ホドラムが沈めば自分達も沈む。
其れはホドラムへの忠誠ではなく、単純な損得の話だった。

「うむ！タルージャ王国の王子へ、ワシの娘を嫁がせてしまえばワシは外戚として権力を握ることが出来る！そうなればお前たちにも相応の待遇を約束してやるぞ！」

「「「は！」」」

側近達は声を揃えて頭を下げた。

ホドラムに残された最後の切り札、其れはタルージャ王国内の貴族である妻と其の娘であった。

彼は、自分の娘をタルージャの王子に嫁がせることにより、自らの身を立てようと目論んでいた。

尤もそれはまだ、ホドラムの願望でしかない。

彼はまだ、タルージャ王国の貴族や王家に対して何の工作もしていないのだから。

だが彼に残された選択肢は少ない。

その中でも権力の中枢に返り咲く可能性が最も高いのが、是である。

彼の心は未だに折れてはいない。

（ワシは……このままでは終わらぬ！必ずや再び権力を我が手中に！）

其れは、権力という果実を口にした人間の業なのかもしれない。

人を支配する快感。

其れは麻薬にも似ていて、人の心を蝕む。

「このまま終わってたまるか！」

ホドラムの目には暗い妄執の炎が浮かんでいた。

第2章第37話

異世界召喚１８２日目【決戦】その９：

日は中天に差し掛かり、日差しが大地へと降り注ぐ。
街道には今回の内乱の影響か全く人影が無い。
ホドラム達はただひたすらに馬へ鞭を振るい駆り立てると、街道を疾走する。
鎧兜を身に付け馬を駆る騎士と、それに守られた数台の馬車。
総数はおよそ２００名程だろうか。

やがて彼らの目の前に、広大な森林地帯が其の姿を現した。

「ようやくここまで来たか……追手の方はどうか？」

ホドラムが疲れ切った口調で言葉を吐いた。

「はい……まだ追手は姿を見せておりません……ここまでくればその心配もございますまい……この森を通過してしまえばタルージャ国境まで後１日程の行程ですし」

ケイルの言葉を聞き、ホドラムの顔に笑みが浮かんだ。

「もう少しか……」

ホドラムの視線が、心配そうに後部の馬車に向けられた。
ケイルの視線もその後を追う。

「お二人ともよくご辛抱くださりました」

ケイルの言葉にホドラムは大きくため息をついて答える。

「うむ……あれらはよく辛抱しておる……だがもう無理のようだ。食事が喉を通らないし、水も飲むのを嫌がる。吐き気がすると言ってな……娘も同じ状態だ……流石に体力の限界なのだろう」

イラクリオンを脱出して3日。

馬車に揺られながらの移動は、ホドラムの妻と娘に大きな影響を与えていた。

観光の旅ではない。

命がかかった逃避行という特殊な状況が、深窓の貴婦人である二人には耐えがたい重圧となって圧し掛かっているのだ。

それでも、文句の一つも言わずに二人が馬車に揺られてきたのは、ホドラムが置かれた状況をキチンと理解していたからに他ならない。

「ケイルよ。今日は野営に都合の良い場所を見つけたら、早めに休息を取らせたいと思うがどうだ？」

ホドラムの顔には、自分の妻と娘の体を心から心配する夫としての責務と愛情の念が浮かんでいた。

まだ陽は高い。

だが、彼は無理せず早めに夜営の準備をしたいようだ。

彼は妻と娘の体力の限界を感じとっていたのだ。

それに此処で二人に死んで貰っては困るのだ。

妻にはホドラムとタルージャの貴族との仲介が、娘には王族との婚姻という大事な仕事がある。

人情と打算。

両方の理由から、ホドラムは二人の体調を心から心配していた。
「良いご判断かと……奥様達の体力は限界に達しております……森の中に入った後、騎士達に夜営地を探させます」
ケイルもホドラムの妻と娘が体力の限界に達している事を十分に理解していた。

タルージャとの国境までは後1日程。
しかも、イラクリオンから脱出した後、一度として追手の姿を目にしたことは無い。
(大丈夫だ……俺たちは追手の手を逃れた……恐らく全く別の方面に追手を差し向けたのだろう。ならば今重要なのは奥方とお嬢様のお体よ……お二人は我らの命綱なのだから)

油断と打算。
その2つが、彼らの運命を決定づける。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――

今夜の月は天空から、その優しい光で大地を照らしていた。
かがり火は最小限に抑えられているが、それでも月明かりのおかげでさほど困りはしない。

「運が悪いなぁ俺達は」
「あぁ全くだ……今日に限って見張りの当番が回ってくるとわな……」

二人の騎士はそうボヤキながら闇に閉ざされた森へと視線を向けた。
二人とも鎧を着込み槍を手にしている。
年頃は二人とも同じくらいだが、背は右側の男が高い。

今夜は、ホドラムの命で3日ぶりに鎧を脱いで休む事を許可された貴重な夜だったのだ。
だが彼らと極一部の運の無い騎士達は、見張りの当番が回ってきてしまい、鎧を脱いで休む事が出来ない。
3日に及ぶ逃避行は確実に彼らの体を疲労させていた。
勿論、職業軍人である彼らはまだ体力的に余裕はある。
だが人間である以上キツイ事に変わりはない。
だから彼が自らの不運を嘆くのも当然といえた。

「だが明日は国境越えだ。越えてしまえば後はもう……」

背の高い騎士が、呟いた。

「あぁ……もうここまでくれば……」

その言葉を聞き、もう一人の騎士が言葉を続ける。

「しかし……ローゼリアを捨てる事になるとは……な……フゥゥゥゥ」

背の高い騎士は大きくため息を付いた。
彼の家は騎士の名門である。
代々ローゼリア王国に忠誠を誓ってきた家柄だ。
尤もそれは先代までの話。
彼自身に王家への忠誠など欠片もない。

だから、自分の欲望を満たしてくれるホドラムに従ってきたのだ。
金を、女を、騎士団内の地位を。
王家に忠誠を尽くしたところで、与えられることの無い全てをホドラムは自分に与えてくれた。

だが全ての歯車は狂ってしまった。
ホドラムの傀儡でしかなかったルピス王女は、自らホドラムの呪縛を断ち切り、国内の貴族達はホドラム達を見捨てた。

今や彼らにローゼリア王国で生きる場所など何処にもなかった。
彼らに残された道は2つ。
新たな主君を見つける日まで放浪するか、ホドラムにこのまま仕え、彼の再起に賭けるかだ。

つい数ヶ月前まで彼らは人生の絶頂に居た。
それが今や故国から追われる身。
彼の心は嘆きで埋め尽くされていた。

「言うな！」

背の低い騎士が相棒を叱りつける。

「だがよぉ……」

背の高い騎士が食い下がった。

「五月蠅い！判ってるんだよ！そんな事は」

背の低い騎士も気持ちは同じだ。
だが、他人に言葉にされると腹立たしく感じるものだ。

「悪かったよ……すまん」

背の高い騎士は相棒の剣幕に押され謝罪の言葉を口にした。

「とにかく！今は見張りに専念すればいいんだ！明日にはタルージャとの国境を越えられるん……」

何かが森の中から空を切ったように感じた。
そして背の低い騎士の言葉が途中で止まる。

「？どうした……？」

背の高い騎士は不振に思い、隣に立つ相棒に目を向ける。
彼の目に相棒の姿が映る。
ただ森に視線を向けたまま、直立不動の体勢だ。
だが彼の目には何処か相棒の姿がいつもと違って見える。
（？なんだ？……どこか？）

ヒュ……ガッ！

だが彼の思考は其処で途絶えた。
再び森より放たれた矢に因って……

咲夜の目に、物言わぬ骸と化した騎士の姿が映る。
彼女は万一標的に息があった場合、止めにを刺すために引絞っていた弦を静かに戻す。
その弓に番(つが)えていたのは真黒に染め抜かれた矢だ。
鏃(やじり)まで真黒なこの矢を、闇夜で射られれば避けるのはまず無理だろ

う。
それは彼女の一族に伝わる暗殺用の弓矢だ。
忍びの一族である彼女達の技は、闇に紛れるのに好都合な技が多い。

「亮真様……仕留めました」

「あぁ……行くぞ」

咲夜の言葉に亮真は小さく頷くと後ろに控えていたサーラに手で合図を送る。

「では……予定どおりに……」

サーラは小さく亮真に囁くと、後ろに控える傭兵達に手で合図を送る。

「あぁ。良いか。俺達の役目は猟犬だ……せいぜい派手にな」

亮真の言葉にサーラは無言で頷くと、身を屈めて夜営地へと向かう。
その後ろには、１０名程の傭兵が付き従う。
ローラと厳翁（げんおう）に率いられた別働隊も準備が終わった頃だろう。

「若！準備終わりましたぜ！」

傭兵の一人が報告に来た。

「始めろ！」

その言葉を聞き、亮真は周囲にいた傭兵達に命じる。

何人かの傭兵が素早く森の中へと消えた。

しばらくして夜営地が赤い光を放ち始める。
始めは闇の中にポツンと有る赤い小さな光だったが、それは見る見るうちに夜営地全体を赤々と照らしだす。

「火だ！火事だ～～～～！！！火事だ～～～！」

「いや！敵だ！敵襲だぞ！」

街道から少し奥まったところに設置された夜営地に叫びが響く。
その声に交じって、鋼の打ち合う音が聞こえてくる。

「何！敵だと！？」

ホドラムは横たえていた体を素早く起こすと叫んだ。

「誰か！いったいどうなっておるのだ！」

毛布を撥ね退け、ホドラムは立て掛けてあった愛用の剣に手を伸ばした。

「アナタ？一体何が？」

隣で眠りに就いていた彼の妻が目覚めた。

「お父様……」

少し離れたところより娘の心配そうな声がした。

見張りの叫びに目が覚めたのだろう。

「大丈夫だ。ワシが付いておる。何も心配することはない！」

ホドラムは怯える二人に優しく声を掛けた。

「閣下！」

騎士の一人が天幕の外より声を掛けてきた。

「うむ！どうなっておる？火事という声と一緒に敵襲の声が聞こえてきたが」

天幕越しに騎士へと状況を尋ねる。

「は！申し訳ございません。現在ケイル殿が手勢を率いて防衛をしております。閣下は直ぐに出立できるようご準備を……」

騎士の言葉にホドラムの顔色が変わる。

「判った！……おい、聞こえたな？直ぐに此処を離れる！」

ホドラムは躊躇しなかった。

この程度の事で判断を躊躇う様では、ローゼリア王国の将軍など勤められはしない。

ホドラムの顔はすでに、幾多の戦場を潜り抜けてきた戦士の顔に変っていた。

「アナタ、私達はすでに準備は出来ております」

ホドラムが振り返ると、妻子は既に服を着ている。
どうやら状況を素早く判断して、サッサと準備したようだ。

「うむ！行くぞ！」

ホドラムは妻子を連れて騎士に守られながら馬車へと向かう。

「閣下！ご無事ですか！」

「ケイルか！どうなっておる！」

ホドラムが馬車の中へ妻子を押し込んだところでケイルが走り寄ってきた。

ホドラムの前に姿を現したケイルは、鎧を着込み手には剣を握っている。
ケイルの姿をみてホドラムの顔が少し緩む。
敵襲を予測し、緊張をとかなかったケイルが頼もしく見えたのだ。

「ケイル！状況はどうなっている？ルピスの追手に間違いないのか？！」

ホドラムはケイルに向かって矢継ぎ早に問いかける。

「旗印が無いのでルピス王女の軍勢かどうかは不明です……現在見張り者達２０名程を指揮して敵と交戦中です。火は奴らが放ったものかと！」

ケイルは的確な状況報告をする。

見張りはルピス王女の放った追手と判断したようだが、夜間である上に旗印がなければどこの軍勢かを特定するのは困難である。
追手であろうと、野盗であろうと襲われれば選択しは2つだけだ。
逃げるか戦うか。

「そうか……どうだ敵の攻撃は防げるのか？」

ホドラムの問いにケイルは首を横に振った。

「いえ……ですが時間を稼ぐことは可能です……閣下は直ちに奥様達を連れ逃げてください」

ケイルは馬車の扉を開くとホドラムへ乗り込むように促した。

「さぁ閣下。御早く！ここは私が引き受けますので！」

ケイルの言葉にホドラムは素早く頷く。

「……うむ！後は頼むぞ！……ケイル！タルージャの首都で会おう」

そう言い放つと、ホドラムは素早く馬車へと乗り込む。
彼は全てをケイルに託した。
ここで彼が残ったところで何の意味も無い。
ホドラムは生き延びなければならないのだ。
彼が生き延びてこそ部下達の働きに報いることが出来るのだから。
彼は傲慢だが、全てを自分の力で解決できると考えるほど愚かな人間ではなかったのだ。

「さぁ！急いで！……貴様！早く馬を走らせないか！」

ホドラムが馬車に乗り込むのを見届け、ケイルは手綱を握る騎士を怒鳴りつけた。

「ハッ！」

ビシッ

騎士の鞭が空を斬り、馬の尻を一撃した。

馬車は、緩やかに加速しながら闇に閉ざされた街道へ突入していく。

その周囲には、ケイルが命じた警護の騎士達が槍を小脇に抱えながら周囲に目を配る。

その数およそ３０名程。

油断なく鎧を着込んだまま休んでいた騎士達を優先してホドラムの警護に回した結果だ。

多くの騎士がホドラムの命に従い鎧を脱いで休んでいた中で、彼らとケイルだけがホドラムの好意を無視し、鎧を着たまま休んでいたのだ。

「閣下……ご無事で！」

ケイルはそう呟くと周囲を見回す。

辺りには、着の身着のままで飛び出してきた騎士達が取り囲んでいた。

槍と剣を持ってはいるが、鎧を脱いでしまっている彼らは戦力として数えるには余りに無力だった。

相手が素人ならば良い。

だが夜襲を行うような敵がただの素人のはずがない。

その場に居る誰もがケイルの指揮を待っていた。

彼らは理解しているのだ。

この状況で自分達が生き残るにはケイルの指揮に従うしかない事を。

「良いか！此処に横陣を敷く！良いか！鎧を脱いでしまったお前達が生き延びるためには槍で間合いを保ちながらゆっくりと引くしかない！！接近戦には持ち込まれるな！間合いを取るんだ！」

ケイルの言葉に騎士達は無言で頷くと、槍を手に陣を敷き始める。

「来たぞ！構えろ！」

ケイルの号令に従って、騎士達は槍を構えた。

彼らが生き延びるために。

第2章第38話

異世界召喚１８２日目【決戦】その１０：

ケイルが素早く残存兵力を纏めて敷いた横陣を見て、亮真は軽く唇を釣り上げて笑みを浮かべる。

「ふぅん……やるねぇ？……大したもんだ。奇襲を受けながらこれ程素早く防衛体勢を整えるとはね……」

「どうするの？坊や……突っ込むかい？ある程度の犠牲を覚悟するなら破れなくは無いよ？」

ケイルの敷いた陣形は、最も単純で簡単なものだ。

個人技を重視する騎士達は、武芸や法術の訓練はしても、連携や陣形の訓練はしない。

だからケイルは、ただ並ぶだけで済む横陣を敷くしかなかったのだ。

だが、ただ並ぶだけの横陣でもチョットした工夫で強固な陣形へと姿を変える。

そして、ケイルにはそれを思いつくだけの発想があったのだろう。

彼らは最前列に大型の盾を並べその隙間から槍を突き出すという形を取った。

盾で敵の攻撃を防ぎ、盾と盾との隙間から槍を繰り出すことで敵を削る。

徹底的な防御陣形といえた。

とはいえ、あくまでも破りにくい強固な陣形だというだけのこと。

リオネの言葉通り、ある程度の損害を覚悟するなら、真正面からの

力攻めでも亮真達の勝利は動かない。

「いや……一撃でケリを付ける！……連中の後方で待機しているローラ達へ連絡を！連中の後ろから急襲させて前後から挟み撃ちにする。まずはこちらから派手に手を出して、連中の意識をこちらへ引きつけるぞ」

亮真は残党狩りの為にケイル達の後方へと配置しているローラ達別働隊との挟撃を提案する。

彼は徹底的にケイル達を狩るつもりだった。

一切容赦をするつもりはない。

ホドラムとそれにつき従うケイルと騎士達は、ローゼリア王国にも御子柴亮真にも、活かしておく価値のない存在だった。

いや、生かしておけばそれだけ自分達の安全を脅かす危険な要因でしかないのだ。

「了解！……連中の眼をこちらに引き付けるねぇ……矢を射かけるより法術をぶつけた方がいいかね？」

リオネの言葉にボルツが頷く

「まずは電撃系がいいだろう！良いかいアンタ達！派手にブチかまして連中の眼をこっちに引き付けるんだよ！！」

リオネの指揮に従い、傭兵達が敵陣へと掌を向ける。

「「「雷（いかずち）を司りし精霊よ。我が血を代償とし、その力を顕現せよ！盟約に従い我が敵を撃ち砕け！」」」

彼らが一斉に詠唱を開始すると、その手の中に小さな雷球が出現す

る。
それは彼らの声に従い徐々にその体積を大きくして行く。

「放ちな！」

「「「雷弾爆裂（ボルトブリッド）」」」

彼らの手から一斉に雷球が放たれ騎士達へと襲いかかる。
それは、それぞれが干渉し吸収しあいながら、一つの巨大な雷球へとその姿を変貌させた。

「総員抗術防御！盾を翳（かざ）して防げ！」

ケイルの叫びに呼応して、盾を翳す騎士達は腰を低く保つと、全身の筋肉に力を込める。

バチバチバチ！

甲高い放電の音が森に響き渡る
雷球が盾に炸裂し、周囲へ荒れ狂ったような雷撃を浴びせた。

「良いか！盾には抗術付与がされている！決して放すな！放電が収まるまで盾を放すんじゃないぞ！後列！前列に全力で防御法術を！」

ケイルは、放電で真っ白に染まった視界に目を細めながら叫んだ。
此処で一カ所でも突破されれば、雷球は其処から騎士達へと襲いかかってくる。
誰もが必死で雷球の脅威が過ぎ去るのを待ちわびた。
彼らの脳裏から後方への警戒が消え、前方から打ち込まれる法術へ

の対処が刷り込まれていく。
それが亮真の策だとも知らずに。

「二列目！詠唱開始！」

再びリオネの指揮の下、後列に待機していた傭兵達が前へ出ると、ケイル達へ向け詠唱を開始する。

「「「風を司りし精霊よ。荒々しき者よ！契約に従い汝の義務を果たせ！我が命に従い嵐となりて我が敵を吹き払え！！！」」」

「放て！」

「「「疾風圧撃（チャージングウィンド）」」」

突風。
傭兵達の手から、成人男性をも軽々と吹き飛ばされるほどの風がケイル達へと襲いかかる。

「チッ！無駄な事を！防御態勢をこのまま維持！！敵の法術はこちらには届かないんだ！……このまま法術を放ち続ければ直ぐに疲弊してしまう！良いか！それまで堪えるんだ！」

ケイルは舌打ちしつつも、自らの優勢を確信していた。
（ふん！どうやら野盗だったようだな……こちらが騎士であることを理解していれば、こんな攻撃はしてこないはず！追手かと思ったが違ったようだ……ならばこのまま法術を放たせればいい。こちらは抗術付与した盾もあることだし十分に防げる。後は連中が息切れを起こすのを待つだけだ！）

元々法術は、防御側が圧倒的に有利なのだ。
法術師は無意識的にに、敵から放たれた攻撃的な法術から身を守るために生気（プラーナ）を身に纏っている。
また、今回の様に敵が法術を使って攻撃してくることが分かれば、一時的に体を守る生気（プラーナ）を厚くすることでより強力な防御が可能なのだ。
更に騎士が身につける鎧兜には大抵、敵から放たれた法術の威力を削ぐ付与法術と言う物が組み込まれている。
これらの技術により、大抵の法術は防がれてしまうのだ。
無論生気（プラーナ）を消費し続ける為、永遠に防ぎ続けることは出来ないが、それは攻撃する側と手同じこと。
いや、消耗頻度でいえば、攻撃側の方が圧倒的に消耗しやすい。
だからこの世界の戦闘は、相手に法術を使える人間がいる場合、自分の身体能力を法術で向上させ、肉弾戦に持ち込むのだ。

「「「うぉぉぉぉお！」」」

突如、後方の森の中より鬨の声が上がる。
それと同時に複数の影が森の中より陣の中に飛び込んでくる。

「殺せ！殺せぇぇ！」

「良いか！一人も逃すんじゃないぞ！」

男達は明確な殺意をむき出しにしながら、手に持った剣を容赦なく騎士の無防備な背中へと振りおろして行く。

「な！敵襲！後方から敵が！」

「馬鹿な！一体なぜ？敵は前だけじゃないのか？」

「馬鹿！そんなことはどうでもいい！早く後方の敵に対しても防備を固めるんだ！」

「無茶だ！今陣形を崩せば！」

「黙れ！死にたいのか！」

リオネ達が打ち込んだ法術の防御に集中していた時に受けた奇襲である。

誰もが思い思いの行動を叫んだ。

法術を防ぐことに専念しようとする者。

後方からの奇襲に対処しようとする者。

ケイルの支持を待つ者。

その判断はどれも間違ってはいない。

だが、正しくもなかった。

そう、亮真達の接近を許してしまうという最大のミスを犯してしまったのだから。

「いまだ！突っ込みな！」

リオネの号令に従い傭兵達は剣を抜き放ちケイル達へと突き進む。

「くっ！前列！構えを崩すな！」

ケイルは必死で声を張り上げる。

まだこの状況では勝敗は決まっていない。

彼の指揮に騎士達が従えばまだ勝利の可能性は残っていた。
だが彼の言葉はもはや誰の耳にも届か無い。

それも当然だろう。
自分の後方から、攻撃を受けているこの状態で、陣形を崩さずに居るには相当の訓練と指揮官への信頼が不可欠である。
そして、ケイルと騎士達にはその両方が欠けていた。

強固な陣形はローラ率いる後方からの奇襲と、リオネの前方からの突貫という挟み撃ちに合い、少しずつその形を崩していく。
まるで、波に削られる砂で作られた城の様に。

「ケイル殿！もう無理です。此処は引いてください！」

騎士の一人がケイルに叫んだ。

「無駄だ……この状況で逃げ場など……」

ケイルは何処か諦めたかの様に首を振った。
彼の周囲に残っているのはわずか２０名程。
前後からの挟撃を受けたケイル達は、完全に部隊を分断され、孤立してしまっていた。

森の中に逃げ込もうとした者。
その場に留まって防戦した者。
亮真へ一矢報いようと突撃した者。
そのどれを選択した人間にも等しく同じ結果が出ることになる。
死だ。

（クソ！なぜだ！なぜこんなことになる……前後から挟撃だと！？野盗ではないのか？……まさかルピスの追手が……クソクソ！）

ケイルは湧き上がる罵声を必死でこらえた。

嘆いても喚いても現実は変わらない。

此処でケイルが取り乱せば、本当に何もかもが終わってしまう。

（残ったのは２０名程だけ……森に逃げ込むか？さもなければ敵を蹴散らして突破するしか……どっちだ？……此処で死ねば何のために殿（しんがり）を引き受けたか判らなくなってしまう……十分手持ちの戦力で防げると思ったからこそ志願したというのに！）

ケイルがホドラムを先に逃がしたのは善意からではない。

いや、彼には彼なりの打算があってホドラムと家族を逃がしたのだ。

（此処で敵を防げばホドラム将軍の覚えも更に良くなる。落ち目のホドラムだからこそ真に信頼出来る部下を欲しがるはずだ！）

これがケイルの計算高いところだ。

彼は落ち目のホドラムに忠誠厚いところをアピールすることで、タルージャ王国内での自分の待遇を上げようと考えていた。

そういう理由でも無ければケイルの様な男が、ホドラムやその家族を優先させて逃がすなど行うはずもない。

さらに言うならば、彼が危険な殿（しんがり）を引き受けたのは、相手がただの野盗だと判断したからだ。

唯の野盗なら騎士のみで構成されるケイル達に敵うはずもない。

例え奇襲を受け一時的に劣勢になったとしても、地力と装備で上回る自分達が最終的に勝ちを得るという予測をしていたのだ。

それがルピス王女の追手ということになれば、全ての条件がひっくり返ってしまう。

（どうする？どうすれば生き残れる？）

ケイルは必死に周囲を見回す。

辺りから剣戟の音が徐々に小さくなっていく。

分断された騎士達が、傭兵達に始末されているせいだ。
（不味い！このままでは完全に退路を断たれる……森は無理だ……なら！）
ケイルの眼が前方に向けられた。
このまま単純に逃げても、追撃されるだけ。
追手を振り切るにはどうしても相手を混乱させなければならない。
（あれだ！あそこが敵の本陣！あそこを一撃して通り抜けるしか方法はあるまい！）
ケイルの前方には全く動かない一団が佇んでいる。
彼はそれを敵の主将がいる本陣だと判断した。

「良いか！前方の敵を粉砕し敵の主将へ一撃を加える！」

「敵中を突破すると！？」

ケイルの言葉に騎士達はざわめいた。
だがそれは直ぐに静まって行く。
彼らもまた、それ以外に生き残る手段を見いだせなかったから。

「良いか！目の前の敵を殺すことだけ考えろ！邪魔する奴は全て斬り殺すんだ！」

ケイルは騎士達へたった一つの事しか求めなかった。
目の前の敵を唯殺すことだけ。
単純にして明解な命令は、死への恐怖で固まった騎士達を現実の世界へと引きもどす。
（そうだ！殺せ殺せ殺せ！）
（生き延びたかったら殺すんだ！）
（敵を殺せ！殺すんだ！）
騎士達の心に生への渇望と、亮真達への憎悪が広がる。

「「「うぉおおおおお！」」」

騎士達の心に再び闘志が燃え上がった。

「突っ込めぇぇぇぇぇえ！」

ケイルの号令に従い、騎士達は傭兵達へ襲いかかる。

窮鼠猫を噛む。

亮真の策に因って窮地に追いやられたケイル達はまさに猫に追い詰められたネズミに等しい。

そして今、ケイル達はその命を掛けて亮真という猫に噛みつこうとしていた。

「クッ！なんだこいつら！急に勢い付きやがって！」

「落ち着け！最後の悪あがきだ！」

勢いを盛り返した騎士達に押され、傭兵達の動きが止まる。

「バカ！！何をやっているんだい！」

「不味いですぜ姐さん！このままじゃ前線を破られちまう！」

ボルツの言葉にリオネは舌打ちをすると、愛剣を抜き放った。

「もういい！アタイが前線に出る！」

元々彼女は一人の戦士だ。
軍の指揮も執れるが、真価はあくまで戦士としての力量にある。
だがボルツは此処で彼女を送りだすわけには行かなかった。

「だめです！姐さん！若の言葉を忘れたんですかい！」

「馬鹿！そんなこと言ってる場合じゃないだろう！このままじゃ！」

戦の女神が今度はケイル達へ微笑んだ。
リオネとボルツが言い争う間に、ケイル達が前線を突破してきたのだ。

「姐さんあぶねぇ！！」

リオネの体にボルツが覆いかぶさってきた。
その上を剣が高速で通り過ぎる。

「クッ！邪魔をしやがって！」

状況がつかめないリオネの言葉に被さるように、男の声が響く。

「アンタは！」

「お前がこいつらの頭か？！なぜ俺達を襲った！？……まぁ良い！
野盗だろうとルピスの追手だろうと此処で死ぬことに変わりはないからな……」

ケイルの剣がリオネの頭上に振り上げられる。
其処には濁ったような明確な殺意が二人を見据えている。

「死ぬがいい！」

「クソ！姐さん！」

「どけ！退くんだよボルツ！」

ボルツとリオネは死を覚悟した。

ヒュ

どこからか風を切り裂く音が響く。

ガッ

「誰だ！？邪魔をしやがるのは？」

ケイルは、痺れる手に力を入れ直すと叫んだ。

ヒュ　ヒュヒュ

ガッガガッ

どこからともなく飛来する刃をケイルは必死で叩き落とす。

「クソ！姿を現しやがれ！」

ケイルの周囲を、同じく前線を突破した騎士達が囲む。

その数５人。

「坊や……」

リオネの眼に亮真の大柄な肉体が映る。

「無事ですか？リオネさん」

「あ……あぁ！あんたこそいつの間に！」

「良いから此処は任せて……リオネさんはボルツと残党狩りの指揮をお願いします」

「でも！」

「良いから……こいつは俺が始末します」

亮真の眼が冷たく光る。
その眼光はケイルとその周囲を固める騎士達を射すくめた。

「貴様か！邪魔をしたのは！」

ケイルの叫びを無視して、亮真は手にした刀を抜き放つ。

「アンタには消えてもらうよ？ケイル・イルーニアさん」

亮真はそう言うと、刃を体に隠すように陰構えに構えた。

「貴様！ケイル殿に手は出させんぞ！」

ケイルの周囲を固める騎士達が身構える。
だが、次の瞬間、彼らの首から赤い鮮血が飛び散った。

「主殿の邪魔をするでない。若造共」

大地に倒れ伏す彼らの後ろから、血が滴る刀を手にした厳翁の姿が浮かび上がる。

どれほどの早技なのか？

戦場の混乱した状況とはいえ、手練の騎士を5人。

一瞬で首を描き切って殺したその手腕は、まさに死神にも等しかった。

「な！なんだ！貴様！」

ケイルの眼に驚きと恐怖が浮かぶ。

「ワシのことなどどうでもよい。ワシは邪魔な物を消しただけ。貴様の相手は主殿よ……」

厳翁の冷徹な言葉がケイルの心を打ちのめす。

亮真とケイル。

両者の因縁に今、終止符が打たれようとしていた。

第2章第39話

異世界召喚１８２日目【決戦】その１１：

この戦場に居る、誰もがただ二人を遠巻きにして固唾を呑んだ。
周囲の喚声は徐々に消えて行き、静寂がこの場を支配する。
騎士達を狩った傭兵達が、徐々に集まりだし、亮真とケイルの二人を中心とした輪は、段々と大きくなっていく。

「姐さん……どうしやす？」

何時までもその場から動こうとしないリオネへ、ボルツは半ば諦めたかのように声を掛けた。
長年の付き合いである。
今、彼女が何を考えているかなど、ボルツには手に取るように判っていた。
ボルツの言葉にリオネは顔を向けずに答える。
其の先には、ケイルと亮真が静かに対峙していた。
彼女の眼は、二人の挙動を見逃すまいと睨み付けている。

「喚声が消えたって事は敵の殆どを始末したって事じゃないのかい？ならアタイが残党狩りの指揮を執る必要は無いさ……それに是ほどの勝負……早々拝めやしないよ。アンタだって戦士の血が騒ぐだろう？」

リオネの言葉にボルツは苦笑いを浮かべて頷く他なかった。
彼もまた、長年戦士として戦場を渡ってきた男だ。
左腕を失ってから、白兵戦を避けるようになったとはいえ、彼の戦

士としての腕は錆付いていない。
リオネの言葉通り、歴戦の戦士であるボルツから見ても二人は卓越した使い手だ。
その両者が命を掛けて戦う場面など、そう立ち会えるものではない。
そして、戦士は戦士の矜持を理解し、重んじる。
その場に居た誰もが、同じ気持ちなのだろう。
ケイルの背後から襲いかかろうとする傭兵は誰一人として居なかった。
いや、ケイルより放たれる殺気に縛られ、誰もそんな考えが浮かばなかったというほうが正しいのかもしれない。

「ですが……ケイルが手練と言う話は聞いておりやしたが……まさかこれ程とは……」

「あぁ。片腕のアンタじゃ相手にするのは自殺行為だねぇ、こいつは……アタイでも一対一の勝負じゃぁまず勝ち目はないだろうね」

リオネは悔しげに吐き捨てた。
それは、ケイルの剣の腕が自分より、遥かに勝る腕前だという事を見抜いたためだ。

戦場で最も重要なのは、相手の力量を見定める眼力だ。
敵の力量が自分より上なのか下なのか。
敵の装備は自分より質が良いのか悪いのか。
敵が一対一に強いのか、乱戦に強いのか。
戦場で生き残るためには、この眼力が全てといってよい。
どれほど自分が強くても、敵がそれ以上に強ければ何の意味も無いのだ。

長年戦場を生き抜いてきた生え抜きの傭兵である彼らは当然、それ

を持ち合わせている。
其の彼らが見入ってしまうほどの技量を亮真とケイルは持っていた。

「まぁそれは仕方ないでしょう……姐さんにしろアッシらにしろ、正式な剣術ってのを学んだ訳じゃありやせんから……アッシらの剣は戦場の剣ですからね。乱戦の中でならアッシらにも十分勝機は有るとおもいやすよ？」

傭兵の剣は、周囲を敵に囲まれた乱戦の中で磨かれてきた剣だ。
それは別に強い弱いと言う事ではない。
単純な用途の違いだ。
傭兵はより戦場の乱戦で生き残るための剣なのに対し、ケイルの剣は、一対一の戦闘に特化した剣と言うだけのこと。
ボルツの言葉にリオネは軽く頷く。
彼の言葉が真実であると理解したから。

「しかし若の方も負けちゃいねぇ……ケイルの野郎に一歩も引けをとってねぇ……なんて気迫だ……クソ！こっちにまで気押されちまう……」

実際に刃を交えていなくとも、両者の力量は明白だった。
はっきりと空気が違う。
冷たく、鋭く研ぎ澄まされた空気が二人の間から周囲に放たれる。

「このまま動かないつもりかね……坊やは」

「お互いに隙を探ってるんでさぁ……それにケイルのあの鎧と盾（バックラー）……あれだけガチガチに防備を固められたらそう簡単に手は出せませんよ……」

ケイルは鎧兜を着込んだ上で、右手には剣を左手には小型の盾（バックラー）を構えていた。
騎士として完全装備をしている。
それに対して亮真は、武器こそ厳翁より献上された刀を両手に握り、防具は革の鎧という姿だ。
身軽で機動性に富む格好だが、防御力と言う点ではケイルに対して圧倒的に劣る。

「ケイルは重装備だ……定石どおりならこのまま対峙して相手の体力を削るところだけどねぇ……」

「えぇ、ですが法術で身体強化をしているでしょうからそれはあまり期待できないんじゃねぇかと……」

「あぁ……あの重い鎧を着込んでもケイルの敏捷性は少しも損なわれはしないだろうよ。坊やが法術を使えない以上、不利なのは間違いないのに……なんであの子はこれ程の気迫を保てるんだい？」

リオネの言葉にボルツは返す言葉を持たなかった。
武法術によって身体強化をしているケイルは、重い全身鎧（プレートメイル）を着込んでいながら、少しの敏捷性も損なわれはしない。
ケイルは、亮真と同じくらい身軽に動きながら、全身鎧（プレートメイル）に因る強固な防御力を保持している。
状況は亮真に絶望的なまでに不利だ。

だが、亮真から放たれる気迫には全く揺らぎが無い。
無心。
まるで恐怖も動揺も何も無い。
それは彼の絶対の自信に因る物なのだろうか？
それともただ単に自らの技量を見誤った愚か者なだけなのだろうか？

ギャリン

唐突に両者の間で火花が散った。
二人の間合い一気に詰められ、刀と剣が撃ち合わされる。

ギギギギギ

剣と刀が互いに擦れ、甲高い悲鳴を上げる。
最初は拮抗していた両者の力比べだが、刀が段々とケイルの首筋へと近づいていく。
両手で刀を押し込む亮真に対し、ケイルは剣を片手で握っている。
その両手か片手か。
武器を握り締める腕の差が出てきたのだ。
だが勝負はまだ決まりはしなかった。

ドガッ

肉を叩く低い音が響く。
ケイルは素早く盾を自分と剣の間に滑り込ませると、全身に力を入れ亮真を弾き飛ばした。

両者の体が離れ、再び間合いが広がる。

（クソ！なんだコイツは……私と互角に打ち合うだと？ローゼリア王国の騎士の中でも、有数の使い手である私と互角とは……それにコイツ……なんだコイツの武器は……片刃で反りの有る刃……斬る事に特化した武器か？……）

ケイルは舌打ちをすると、盾（バックラー）を翳して防御を固めた。
（いや……落ち着け。相手は軽装備。あんな革の鎧などわが剣にとっては紙も同然……アイツの打ち込みを盾で防ぎ其のまま胴を薙げばそれで全てが終わる……アイツは盾を持っていない……それだけでもこちらが有利だ……あわてず防御を固めて隙を見せるのを待てば良い……）
彼の持つ剣は代々伝わる家宝の剣。
鎧や盾（バックラー）を同じく、彼の先祖がローゼリア王国に仕えた時から伝えられる物だ。
彼は手に力を入れなおし、しっかりと柄を握り締める。

「ちぇりゃぁぁぁあ！」

亮真の口から奇声が迸り、ケイルの左手に強烈な衝撃が走った。
盾を保持している左手が痺れ、盾が彼の体の直ぐ傍まで押し込まれる。
（クソなんて打撃だ……腕が痺れる……さっきよりも重い斬撃だと！……ダメだ！盾（バックラー）を保持するだけで精一杯だ……隙を突いて剣を振るう余裕がない……クソ！……化け物め……）

高速で振り下ろさせる刃には、１００ｋｇを超える亮真の全体重が掛かる。
全身の筋肉を連動させて繰り出される斬撃はまさに必殺と言えた。
其の証拠に、ケイルの盾に深々と斬撃の跡が印されている。
木と革を主原料とし、表面を薄い鉄で覆われた盾（バックラー）は、表面の鉄を切り裂かれ、間から木の部分が顔を覗かせている。
亮真の目は其の事実を捉えていた。
（表面を切り裂けたか……流石に鋼鉄製の盾じゃ無かったって訳か

……）

如何に亮真と言えど、何センチも厚みの有る鋼鉄製の盾等切れるはずも無い。

だが、傷ついた盾が亮真の懸念を一つ消した。

地球の常識から言ってそんな盾を手に持ったまま、戦闘を行えるはずも無いのだが、何しろ此処は異世界。

法術による身体強化技術がある以上、まったく無いと判断するのは危険だった。

（あんな金属の鎧を着て、あれだけ動けるってのは確かに凄い……）

亮真は冷静に両者の戦力を比較していた。

鎧兜と言うものは非常に重く、行動を制限する。

材料に鉄を使えば尚の事だ。

其れが、革の鎧しか着ていない亮真の速さに対応している。

刀を盾で防いだ事実が何よりの証拠だ。

鋼鉄の防御力を持ちながら、其の鈍重さを無視して身軽に動けるとなれば、確かに戦場で騎士が圧倒的な強さを誇る事は用意に想像がつく。

（武法術か……大した技術だな……詠唱が必要な文法術より遥かに厄介だ……）

言葉に因る詠唱を必要としない武法術は、自分の体にしか効果を発揮出来ない反面、詠唱を必要とせず、生気（プラーナ）の消費も軽い。

まさにこの大地（アース）世界の戦争において主役ともいえる技術である。

法術が使えるかどうかは、支配される人間とする人間と間に越えられない壁として存在していた。

（だが……絶対の技術じゃない……あくまでも人間以上じゃない）

亮真の目は、ケイルの弱点を見切っていた。

（ケイル……テメェは此処で絶対に殺す！……見せてやるぜ！爺直伝の技って奴な！）

亮真の纏う空気が冷たく鋭く尖る。
『亮真よ……刀は己が体の一部。刀を振るうのではなく腕を振るえ……そして刀を抜くときは決して迷うな。迷いは気と意識を惑わせそれは刀にまで伝わる。唯一つ！斬る事だけに集中するのだ！そして信じろ。己の修練と技を！己が振るう刀を！』
亮真の心に、祖父の言葉が浮かび上がる。
（斬ることにだけ集中しろ……狙うのはただ一点！）

「キェェェェェィ！」

再び亮真の口から奇声が迸る。
亮真は八双の構えのまま一気にケイルへと走りよった。

（来い！貴様の一撃を盾で防ぎ其のまま薙ぎ払ってやる！）
ケイルは手に力を込め衝撃に備える。

バッ！

走りよってきた亮真の体が宙に飛んだ。

（何！飛んだだと！バカめ！着地した後、貴様は無防備になる！）
一瞬の判断で、ケイルの左手が頭上へと翳（かざ）される。

亮真の体が大きく宙で仰け反った。
手にした刀は背中にピッタリと着けられ、全身の筋肉に力が込められる。

「喰らえぇぇぇえ！」

弓のように引き絞られた全身の力が、ただ一箇所に集中した。

それは亮真の全体重と共にケイルの頭上へと襲い掛かる。

バキ！ドチャ！

何かが割れる音が響いた。
そして水気を含んだ何かを絶つ鈍い音が彼の耳に届く。

「何だと……？」

ケイルの顔に驚愕が浮かぶ。
彼はゆっくりと自らの左手へと視線を向けた。
まず初めに眼にしたのは、彼が手にした盾（バックラー）が半分になった姿。
続いて目に入ったのは、左腕に食い込む刀。
徐々に左腕が熱くなり、肌が湿って行く事が感触で判る。
ヌルヌルとした生暖かい其の液体が鎧の中を通り、肘にまで達する。

ポタ……ポタポタ

地面に赤黒い点が広がる。
それは徐々に其の面積を広げて行く。

「クソ！」

ケイルは驚愕で停止した思考を切り替え、亮真へ剣を振るった。
尤も、それは破れかぶれの悪あがきに過ぎない。
体勢も悪く、力の篭らない其の剣は、容易く亮真に避けられる。

（左腕……ダメだ……動かない！感覚が麻痺しちまってる……クソ！なんて奴だ！盾（バックラー）を切り裂いて俺の腕を斬ったのか？鎧に覆われたこの腕を！……なんて……なんて化け物！）

「其の出血量……骨と動脈を断った。これで終わりだ」

ケイルの睨み付ける視線を浴びながら亮真は無表情に宣告した。
彼が言葉を発したと言うことは、勝負が決まったと言うことだ。

「ふざけるな！まだ勝負は終わっていない！俺はまだ戦える！」

ケイルは剣を構える。
確かに戦うだけならばケイルの言うとおり可能かもしれない。
まだ彼は息をしており、右手も無傷だ。
だが勝負は既についていた。

「無駄だ……盾を使っても防げなかった俺の斬撃を、右手の剣だけで防げるはずが無いだろう？それに其の出血。直ぐに手当てしなければ出血死をする。だがこの場でアンタを手当てする味方は居ない……アンタの負けだ」

ケイルの顔が歪む。
亮真の言葉どおり、勝敗は既に決まっていた。
ケイルの左腕は、既に骨まで断たれ動かなくなっている。
それに動脈まで刃が達していた。
盾を翳（バックラーかざ）していた事。
そして金属製の篭手を着けていたおかげで腕を切断こそされなかったが、左腕は完全に殺されてしまった。
少なくとも適切な治療を受け、休息をとらない限り彼の左腕が動くことは無い。
そして動脈から流れ出す血が、ケイルの体力を容赦なく削っていく。
直ぐに止血をしなければ、後数分で彼は失血死する事になる。
戦場の真っ只中。

それも味方は誰一人としておらず、敵と対峙した状況で、止血など出来るはずも無い。

「此処までと言うことか……」

「あぁ……」

ケイルの呟きに亮真が頷く。

「……まさかこんなところで死ぬ事になるとは……俺はつくづく運の無い男らしい」

ケイルの顔には死を前にした戦士の、諦めにも似た覚悟が浮かんでいた。

「お前が御子柴亮真か？」

「あぁ……」

「そうか……あれだけの策士でありながら俺以上の戦士か……化け物だな」

ケイルは化け物と言う言葉を使ったが、そこに侮蔑の色は無い。それどころか、彼の顔には賞賛の色すら浮かんでいた。

「俺は俺以上に優れた騎士は居ないと自負してきた……剣でも頭のキレでも俺は優れている！この国のどんな騎士より先が見える！……だがお前にはどちらも敵わなかった……兵の指揮でも剣の腕でもな……俺は何故負けた？……お前が俺よりも才に溢れた男だからか？」

「違う……俺はアンタより優れちゃいない……劣っているとは思わないが優れているとも思わないよ」

ケイルの問いに亮真は本心で答えた。

其れが死を目前にした男への礼儀だと思ったから。

「ならば何故、俺は負けた？」

「アンタは自分の心に負けたのさ。自己の力を誇る驕りにな……」

亮真の言葉を聞いてケイルの眼が見開かれた。

「驕り……驕りか……フフッ。まさかミハイルの言葉通りになるとはな……一つだけ聞かせてくれ。お前は何故ルピス王女に加担する？金か？権力か？……そんな物ただの空手形だぞ？この国において身分の壁は厚い……王女が払おうとしても周りの貴族がそれを許しはしない！」

「金も権力も俺は王女から貰うつもりは無いよ」

亮真はケイルの問いに首を振った。

「……馬鹿な……それでは何故お前は戦う。何故俺達と敵対した！」

ケイルは口調を荒らげ問いただす。

彼は知りたかった。

自分を死に追いやった敵が戦う理由を。

「簡単さ……俺達はアンタの所為でルピス王女に加担する羽目にな

ったのさ」

「俺の所為だと……？」

「あぁ。アンタ、ミハイルを嵌めたろ？」

亮真の言葉にケイルの顔が驚きで歪んだ。
そしてなにやら考え込むと、納得したかのように頷いた。

「ラディーネ王女がローゼリア王国内へ向かったという話か？」

「そうだ……俺達はギルドから依頼（クエスト）を受け、ローゼリア王国へ向かう途中で襲われた。ラディーネ王女の身代わりとしてな」

「あぁ、ミハイルに偽の情報を流して囮を襲わせた。其の間に本物のラディーネ王女を国内へ移動させたって訳さ……あれは本当に上手く言った……あれが上手く言ったおかげで俺はゲルハルト公爵に寝返ることを許されたのだからな！」

ケイルの言葉には、どこか自分の策を誇る気持ちが浮かんでいる。
亮真は薄笑いを浮かべながら言った。

「あぁ、確かに上手い手だったと思うぜ？……俺達を巻き込みさえしなければな！」

それは、ケイルの責任ではないのかもしれない。
彼が意図して亮真達を巻き込んだわけではないからだ。
偶然、ローラの髪が銀髪だった事。
偶然、フルザードの港町に銀髪の傭兵が彼女しか居なかった事。
様々な偶然が重なった結果、亮真はケイルの前に居る。

亮真の言葉を聞き、ケイルの顔が歪む。
誰だって亮真の説明を聞けば、自らの運命を呪わずには居られないだろう。
自分の策が発端になって、自らの首を絞めることになったのだから。

「俺は運が悪かった……」

ケイルの口からそんな言葉が漏れる。
それは、運命の女神に嫌われた男の嘆きの言葉だ。

「あぁアンタは運が悪かった……」

亮真は静かに頷く。

「最後に一つだけ頼みがある」

ケイルの言葉に亮真は無言で頷いた。
彼の顔は出血の所為で既に青ざめ、後は死を待つばかりである。
死を前にした人間の言葉を無碍にするほど亮真は冷酷ではなかった。

「騎士として……戦って死にたい……相手をしてくれるか？」

亮真は無言で頷くと刀を構えた。

「感謝する……ありがとう」

「あぁ」

亮真は無言で頷くと刀を振り上げた。

ケイルは剣を脇に構えると、じっと佇む亮真へ最後の力を振り絞り走り出す。

「キェェェェェィ！」

ケイルの剣が亮真の胴体を薙ごうとした瞬間、亮真の口から奇声が響いた。

ガツ！

次の瞬間、彼の頭上に振り上げられていた刀がケイルの兜へと叩き込まれる。

ケイルの体が、そのまま亮真の横を走り抜けた。

２歩３歩４歩。

徐々にケイルの走る速度は遅くなり、やがて前のめりに大地へ倒れこんだ。

第２章第４０話

異世界召喚１８２日目【エレナの復讐】：：

ケイルが亮真の刃に因って大地に伏した頃、森の奥ではエレナの復讐が大詰めを迎えようとしていた。

「クソ！将軍と奥方達を守れ！」

「俺についてこい！このまま囲みを突破するぞ！」

あちらこちらから、異なる命令が飛び交い戦場は錯綜していた。
ホドラムの周囲を守ろうとする者。
伏兵の囲みを突破しようと自分の周りに騎士を集めようとする者。
彼らは鎧を軋ませながら、周囲から襲いかかる刃を必死で掻い潜る。

しかし、現実は無情である。
彼らの健闘が報われる事は無かった。
盾を翳し、剣を振りまわして敵の包囲を斬り破ろうとするが、一人また一人と大地に沈んで行く。
ホドラム側の人数はおよそ３０名程。
それに対してエレナの指揮する部隊は２００名。
共に完全武装した騎士であるが故に、両者の人数差が絶対と言ってよい戦力差となって現れる。

夜営地にて亮真の奇襲を受けたホドラムは、森の中でエレナの待ち伏せを受けた。
それは最初から仕組まれた罠。

猟犬役の亮真がホドラムを追い立て、猟師役のエレナが仕留める。
それは正に必殺の策だった。

「エレナ様……ご指示通り事は進んでおります。後はホドラムとその家族の首を取るだけです」

「えぇ。この状況ではもはや結果は見えています。亮真君は良い仕事をしてくれたわ」

戦況を報告に戻った騎士の言葉に、エレナは暗い笑みを浮かべて頷いた。

「しかし……まさかこれ程上手く運ぶとは……あの青年……恐ろしいですな……」

副官は前方で繰り広げられる戦闘に目を向けながら呟いた。
彼の眼の前には、一方的な殺戮（さつりく）とも言える戦闘が繰り広げられていた。
無論、敵を蹂躙（じゅうりん）しているのはエレナ達。
一人の騎士に4～5人もの騎士が一団となって掛れば、余程の強者でもない限り勝負の結果は見えていた。
更にその周囲を予備の騎士が十重二十重に囲んで逃亡を妨害する。
ホドラムに従う騎士達には、死という名の未来しか残されてはいない。
この状況を作り出したのは、御子柴亮真という男の策。
彼の眼には、亮真に対しての恐れが浮かんでいた。

「そうね、彼は大したものだわ……貴方は彼が怖い？」

エレナは亮真の策をにこやかに褒めると、副官に向き直って問いかける。
その表情には、先ほどの笑みなど欠片も残ってはいなかった。
彼女の問いに副官は沈黙を守った。
それが彼の気持ちを雄弁に語っている。

少なくとも、今まで亮真がローゼリア王国に対して不利益な行動を取ったという事実は無い。
本来なら頼もしい味方と称賛しても良いはずなのだ。
だが彼の脳裏には有る不安がこびりついて離れない。
（彼は確かに素晴らしい功績を立てた。策の立案と実践……指揮能力も高い……だが、彼はこの国の人間ではない。唯の流れ者だ……もしこれ程の策士が敵国に登用されローゼリア王国を侵略しに来たら……）
彼は亮真の力を認めている。
そして自分の想像が、全く根拠の無い想像だということも理解していた。
しかし、其処まで理解していても尚、彼は亮真に対して恐れを抱いている。

それは、亮真がローゼリア王国に対して何のしがらみも持っていないということに起因している。
彼はルピス王女へ忠誠を誓っているわけでもなければ、王国へ親近感を持っているわけでもない。
積み重なった偶然が、亮真とルピス王女を繋げただけ。
その事実をルピス王女以下、幹部達の間では共通の認識として持っている。
だから、副官は亮真が恐ろしいのだ。

「やはりそう……貴方が不安に思っている理由は理解している……既に数人から同様の相談を受けているのよ……」

エレナは寂しげに呟いた。

彼女の言葉に副官の顔色が変わる。

彼の脳裏に最悪の選択が過った。

暗殺という最も危険な選択が……

「尤も全員には私から余計な事を画策しないように話をしているけれどもね……それこそ藪をつついて蛇を出すことになりかねないから」

エレナは肩を竦めて言った。

「それは……御子柴殿の暗殺も有り得るということでしょうか？」

副官の問いをエレナは否定しなかった。

少なくとも其れを提案した人間が居た事は事実なのだろう。

（出る杭は打たれるということか……）

副官の心に寂しさとも悔しさともつかない何かが過る。

確かに彼は御子柴亮真を恐れている。

だが、その脅威を取り除く為に彼を暗殺しようという考えは無かった。

（だが、彼ほど今回の内乱で功績を立てた人間はいない。ルピス王女がホドラム将軍やゲルハルト公爵を取り除けるのも彼のおかげだ……例えローゼリア国の国民でわない流れ者とはいえ、最大の功績者を暗殺で排除しようとは……）

国を保つと言うことは綺麗ごとではない。

それは彼も十分に理解している。
だが、それでも彼は亮真を暗殺することに納得出来なかった。

それに副官の心情とは別にもう一つ問題がある。
暗殺を選択するのは良い。
だがそれには条件が付く。
確実に殺すことだ。
絶対に失敗は許されない。
もし生き延びられたら、ローゼリア王国はホドラムやゲルハルトと比較にならないほど危険な敵を作り出すことになる。
彼はそのリスクを冒してまで亮真を暗殺する必要を感じていなかった。
（一番良いのはこのまま王国に仕えて頂くことだ……そうすればこの国も御子柴殿も共に栄えられる……）
尤もそれは口にするほど容易いことではない。
身分の壁は厚く、ローゼリアの国民ですらない亮真を貴族にするには多くの問題点が考えられた。

「エレナ様はどうお考えなのです？」

「私？……私は反対よ。勿論ね……ホドラムを殺せるのは彼のおかげなのだから……それに彼を殺すのを失敗すれば、王国はさらなる脅威を抱え込むことになる……」

副官の問いにエレナは口を濁した。
少し考えればこの程度の結論は容易に導き出せる。
問題なのは、自分の知らないところで決断され決行されることだ。
その時、亮真は決して王国を許すことは無いだろう。
彼にとってみればローゼリア王国が、自分を裏切ったとしか見ないだろうから。

それでもエレナはローゼリア王国の騎士だ。
国の害になるのなら誰であろうと戦わざるを得ない。

「でも……もし彼がローゼリア王国に牙を剥くなら……その時は……」

だが副官の耳にエレナの最後の言葉は届かなかった。

「「「うぉぉぉぉ！」」」

「「捕えた！捕えたぞ！」」

戦場から湧き上がった歓声にかき消されて……

「お前達！怪我はないか？これから囲みを破る！……良いかワシの手を決して放すな。周囲に目を向けずワシの背だけを見続けろ！」

ホドラムは妻と娘を背に庇いながら必死で囲みを突破しようと走り回る。
馬車は真っ先に馬を殺され、無用の長物と化している。
彼は素早く妻と娘を馬車から降ろすと、森へ逃げ込もうとした。
だが、エレナの包囲網は正に鉄壁と言えるほど強固であり、逃げ道は全て塞がれた状態である。
結局彼は、騎士達を駆り立て包囲網を強行突破するより他に選択肢がなかった。
だが、そんな捨て身の突撃でどうにかなるほど、この世界は甘くなかった。
無茶とも言える突撃を繰り返したため、周囲にいた警護の騎士は一人二人と討ちとられ、今や彼の周囲は敵だらけという状況である。

「お父様」

娘の顔は周囲の殺気に当てられ、真っ青と言ってよいほど血の気の失せた顔をしていた。
つい数週間前まで、彼女は国でも有数の令嬢であった。
戦場の殺伐とした空気に免疫など有る訳もない。
しかも、タルージャ王国へと急ぐ旅が、彼女の体力を削っている。

「大丈夫だ！ワシが付いておる！お前はワシの背だけを見て走ればよい！」

ホドラムは、妻子を安心させるために声を張り上げる。
少しでも弱気なところを見せれば、彼女達の心が折れてしまうことを悟っていたからだ。

「大丈夫です。お父様を信じるのです」

妻の言葉に娘も頷く。
いや、それ以外にどのような選択肢があるというのか。

「行くぞ！」

ホドラムの声に警護の騎士が頷く。
その数４名。
３０名ばかりいた警護の騎士達は既に４名にまでその数を減らしていた。

「「「「うぉぉぉぉぉお！」」」」

彼らは一丸となって包囲網へと突進した。
剣を振り上げ、盾を翳し、彼らは遮二無二(しゃにむに)体を割り込ませる。
奇声を張り上げ剣を振りまわす様はまるで狂った犬のようだ。
彼らは防御を捨てた。
どの道、ホドラムが終われば自分達も終わりなのだ。
その事実が、彼らを命知らずへと変貌させる。

「閣下！今です！此処を！」

彼ら４人の捨て身の攻撃に怯んだのか、包囲網が一瞬崩れる。

「行くぞ！前を見て一気に森へ駆け込むのだ！」

ホドラムの言葉に妻と娘が頷く。
彼はそれを確認すると一気に走りだした。

「閣下！お早く！」

警護の騎士の叫びに背中を押され、３人は脇目も振らずに駆けだす。
森まで後３ｍ……１ｍ……

（もう少しだ！森に逃げ込めば何とでもなる！このまま、このまま逃げ込めれば！）
無論、森に入ったからと言って確実に助かる保証など無い。
だが、包囲網を突破出来れば生き残る可能性は残される。

「きゃぁぁぁあ！」

突如ホドラムの背後から娘の悲鳴が響く。

「無礼な！その手を離しなさい！私を……」

ドガッ！

肉を撃つ鈍い音が響いた。

「お母様！……止めて！乱暴しないで！」

振り向いたホドラムの眼に、腹を抱えて蹲る妻と騎士に羽交い絞めにされてもがく娘の姿が映る。
騎士に殴られたのだろう。
妻の口から胃液と涎が漏れている。
騎士道という観点から見れば、女性に手を上げるなど許されるはずもない。
だが、戦場ではそんな綺麗事など消え去ってしまう。

彼は躊躇した。
（クソ！もう少しの処で……どうする？助けるか？……いや……もう無理だ。この状況で戻る？……だが娘を見捨てるなど）
彼と娘の視線が交差した。
彼女の眼が母と自分を助けてくれと訴える。
だが彼は動けなかった。
もう少し、もう少しで彼は生き延びられるかも知れないのだ。
此処で妻と娘を助ける事は現実的に不可能と言える。
彼の冷徹な部分が、損得をはじき出す。
無理だと。
妻子を見捨てて逃げろと。
だが、同時にそれは彼の運命を決めてしまう。
（妻と娘を見捨て、自分だけ逃げてどうなる？タルージャへの亡命すら危うくなる……）

タルージャ王国がホドラムを受け入れてくれるのは、妻の実家がタルージャの貴族だからだ。
もし妻を見捨てて逃げれば、妻の実家はホドラムを決して許しはしない。
保身がホドラムの体を縛る。
どっちを選択した所で彼に残された道は破滅だけ。

「ホドラム将軍！武器を捨て投降されよ！それともこのまま死を選ばれるか！」

騎士の一人が、進み出て大声で叫ぶ。
ホドラムが躊躇った隙に周囲はエレナの騎士達で取り囲まれ、既にどうしようもない状況になっていた。
（くっ！しまった！）
既に森への退路は騎士達に阻まれとても突破など出来はしない。
妻子を見捨てるにしろ、奪え返すために戦って散るにしろ、もう機会（チャンス）は過ぎ去ってしまった。

「どうされる！この場で奥方と娘の首が飛ぶのをご覧になるか？」

再び冷徹な言葉がホドラムに突き刺さった。
妻子は共に羽交い絞めにされ、共に首に剣を突き付けられている。

「貴方……」

「お父様……」

二人の眼が父で有り夫で有るホドラムへと突き刺さる。
勝負は既に決した。
ホドラムは手にした剣を大地に放り出す。

「投降……する」

「結構！」

ホドラムの言葉に騎士は軽く頷くと、手を軽く上げた。
素早く幾人かの騎士が飛び出し、ホドラムの手に手枷をはめる。

「「「うぉぉぉぉ！」」」

「「捕えた！捕えたぞ！」」

歓声が森に響き渡る。
誰もが剣を天へと振り上げ、勝利に沸く。

「終わりだ！これでローゼリア王国は新しい時代を迎える！」

「ルピス殿下に栄光を！ローゼリア王国に繁栄を！」

騎士達の口から次々に歓喜の言葉が叫ばれた。

「私達はどうなる？……裁判は何処で開かれるのだ？王都か？イラクリオンでか？……結審するまで妻子の安全は保障してくれるのだろうな？」

ホドラムは傍らに立つ騎士に問いかけた。

「裁判？そんな事を求められる立場だと思っているのか？」

問いかけられた騎士は、ゾッとするほど冷たい目をしてホドラムを見る。

「何！どういうことだ！私は投降したのだぞ？正式な裁判を受ける権利がある！」

ホドラムは拘束されていることも忘れ、その騎士に掴みかかろうとする。

彼は投降を選択したことにより、王女直々の裁判に掛けられるものだと思っていたのだ。

少なくとも、問答無用で斬り殺されることは無いし、裁判が決着するまで身の安全は保障される。

またルピス王女の甘さを計算に入れているホドラムは、最悪でも家族を処刑されることは無いと計算していたのだ。

（弁明の……弁明の機会さえあればまだ何とかなる！少なくともルピスが妻や娘を処刑する事だけは無い！）

それが根底から覆されたのだ。

「どういうことだ！王女がルピス王女がそう命じたのか！？」

「いいえ！それは違う！」

ホドラムを包囲していた騎士達がサッと道を空けた。

そしてその道を悠然と白い甲冑に城のマント、全身を純白で染め上げた騎士が進む。

「何か勘違いなさっているようね……ホドラム将軍」

「その声……それにその姿！エレナ……エレナ・シュタイナー……貴様、なぜ此処に……イラクリオン攻めに参加していたのでは？」

ホドラムの顔色が変わった。
兜を脱ぎ現れたのは、まぎれもなくエレナ・シュタイナーその人だったからだ。

「エレナ・シュタイナー様？【ローゼリアの白き軍神】と呼ばれたあの？」

「本当にあのエレナ様……なのですか？」

ホドラムの妻子は突然現れたエレナに驚きの言葉を漏らした。
まさか、こんな場面で救国の英雄に会うなど思っても居なかったのだろう。
エレナは二人に軽く頷くと口を噤(つぐ)む様に言い、ホドラムへ視線を戻す。

「私が貴方の考えを予測出来ないとでも？」

「ワシの行動を全て読んだというのか！馬鹿な！……そんな事が貴様に出来るはずがない！」

ホドラムは声を荒らげた。

「あら？……相変わらず貴方は現実が見えない人の様ね……自分の能力を過信し、他者の能力を貶める……私達が初めて会ったあの日から、貴方は何も変わっていない……現実に貴方はこうして捕まった。それが全てじゃないの？」

「黙れ！平民風情が！ワシは！ワシは名門アーレベルグの人間！貴様等に負けるはずがない！」

ホドラムの言葉にエレナは苦笑を浮かべるしかなかった。
（愚かな男……野心も知恵も力も血筋も……才に溢れていながらなぜこの男がこれほどまでに愚かなのだろう……）

「貴様！貴様のような平民がワシより！ワシより優れているはずがない！」

「哀れな人ね……だからフリード様は貴方ではなく、私を将軍に指名した……貴方のその特権意識と驕り高ぶった人間性が国を蝕むと気が付いていたから……そして実際にその通りとなった！周囲を見てごらんなさい！この場に居る騎士達の貴方達を見る眼を！」

「ふざけるな！フリード殿は人を見る眼が無かっただけだ！ワシを！名門アーレベルグの人間であるワシを差し置いて平民出身で有る貴様などに将軍位を与えるなど！……貴様ら！貴様らは何とも思わないのか！栄光有るローゼリアの騎士でありながら平民の女等に使われて！」

ホドラムは声を張り上げ周りを見回した。
だが、誰ひとりホドラムの言葉に同調する者はいない。
いや、騎士達の眼は冷たくホドラムを蔑む。

「な……なんだ貴様ら！その眼は！」

ホドラムに向けられる眼。
それは彼が平民に向けてきた蔑みの眼に似ている。
一つ違うとすれば、それは虐げられてきた憎悪が混じっていることだろうか。

「馬鹿な人ね……彼らは下級騎士や平民出身の者たちばかり。貴方達名門騎士達が虐げ搾取してきた人間よ……結局貴方は何も見ていないのよ！自分の地位と血筋に胡坐をかき、それを支える人間の存在を見なかった！」

同じ騎士という役職でも、先祖代々騎士である人間もいれば、平民でありながら努力を重ねて騎士になる人間もいる。
但し平民が騎士になるには、倍率１００倍を超える狭き門を潜らなければならない。
それは血を吐く程の努力が居る。
だがそれほどまでの努力をして騎士になっても、平民出身と名家の出身とでは明確な壁があった。
せっかく平民出身の騎士が手柄を挙げても、名家出身の騎士が横から手柄を奪い取るなど日常茶飯事だ。
閲兵式で華やかな行進をするのはいつも名家の騎士。
平民出身者は裏方や日常業務に携わるだけだ。
この場に居る騎士達の中には、恋人を無理やり奪われた人間だっていた。
汚職を告発しようとして逆に罪を着せられてしまい、裁判に掛けられそうになった人間だっている。
何時だって得をするのは名家出身の騎士。
汚れ仕事を引き受け損をするのは平民出身の騎士。
それはホドラムという、騎士の頂点に立つ将軍自身が名家の出身であり、特権意識に凝り固まった人間だったからだ。
トップがそういう考え方をすれば、部下が腐るのは当然と言える。

「ふざけるな！我らは対等ではない！貴様ら平民などが騎士になる事そのものが間違っているのだ！貴様らは情けを掛けられて騎士に成れたのだ！おとなしく我らに従っていればよいのだ！」

ホドラムの感情は高ぶり、顔は紅潮していた。
彼の言動は今一つ不明瞭ではあったが、言いたいことだけはこの場に居た誰もが理解した。
平民出身の騎士は名家出身である自分に従えと。

「本当に腹立たしい人ね。貴方は……まぁ良いわ……貴方のその不愉快な考え方とも今日でお別れだから……」

「貴様！国法を破るつもりか！……我には裁判を受ける権利があるのだぞ！」

エレナの言葉にホドラムは驚きを隠せなかった。
彼自身はこれまでにいくつもの法を破ってきている。
不当な人事を行い、気に入らない人間を辺境警備に飛ばしたりもした。
軍費の横領もしているし、出入りの商人から賄賂も受け取っている。
出世の妨げになる同僚を罠にはめて罪を着せることだってしてきた。

だが、人生の最後に彼が頼ったのはやはり法だった。
それがどれだけ筋の通らない理不尽な行為だとしても。
彼にはもう、それしか縋（すが）る物が無かったのだから。

「勘違いしないで？公式の記録ではホドラム・アーレベルグは投降を装いエレナ・シュナイダーの殺害を企て返り討ちにあう。彼の家族は逃亡を企て騎士に因って斬り殺される。それが全てよ……貴方のお得意の手段でしょ？ねぇ？」

エレナは皮肉たっぷりな笑みを浮かべた。

「馬鹿な！それが！それが正義か！そんなもの！」

「正義？正義なんかじゃないわよ？……これは復讐……10年前貴方に殺された夫と娘のね」

エレナの言葉にホドラムの顔が凍りついた。
傍らに寄り添うホドラムの妻と娘にも驚きの表情が浮かぶ。

「何を言っているのだ！知らん！ワシは貴様の家族など知らんぞ！」

「無駄よ……5年前、貴方が命じたと奴隷商人だったハインツから聞き出している。彼が証人よ」

エレナの言葉に従い、隣に佇む副官が頷いた。

「知らぬ！そんな男など知らぬ！第一アヤツは既に処刑されている！どうやって証明するのだ！そんな証言など証拠になどならん！」

「貴方……一体どういうことです？本当に……エレナ様のご家族を？」

「お父様……？」

「何だ！その眼は！ワシは知らぬと言っておろう！父の言葉を信じられぬのか！」

ホドラムは家族からも疑惑の眼を向けられ激昂した。
だが、彼が自己弁護すればするほどに周りの眼は冷たくなる。
誰の眼にもホドラムが罪を犯した事は明白な事実として伝わった。

「そうね。証拠にはならないでしょう……でもねそんなものは必要

ないの。私は貴方を殺したいだけなのだから……」

「貴様……」

ホドラムはエレナの眼に宿る狂気にようやく気が付いた。
そして自分が決して彼女の刃から逃げられないという事実にも。

「安心しなさい……貴方の妻も娘も一緒に始末してあげる……娘は犯されて死んだけどそれは良いわ……許してあげる」

そう言うとエレナは腰の剣を抜き放ち、ホドラムの妻子へと歩み寄る。

「待て！妻と娘は関係ない！」

ホドラムはエレナの前に立ちはだかろうとして、騎士達に抑え込まれる。

「関係ならあるわよ？貴方の家族ですもの」

「待て！誰か！誰かあいつを止めろ！こんな事！こんな事許されるはずがない！」

エレナの言葉にホドラムは必死で周囲に助けを求める。
だが、その場に居る２００人もの人間は誰一人としてホドラムの言葉に従おうとは思わなかった。
誰もが、彼と彼の家族の死を望んでいたのだから。

「いやぁぁあ……お願いです……助けて……」

娘の眼に涙が浮かぶ。
彼女は自分の父が犯した罪を理解した。
そして父がどれほど人に憎まれているのかも。
２００人もの騎士が周りを取り囲んでいるのに、誰一人として憐憫の情を浮かべる人間が居ない事が何よりの証拠だ。

「さようなら……貴方自身に罪は無いけどね……運が悪かったわね。せめて苦しまないようにしてあげる……」

「やめろぉぉぉぉぉお」

ホドラムの叫びも虚しく響いた。
エレナの剣が大きく振りかぶられ、そのまま娘の首に振り下ろされる。

ザシュ

娘の体から力が抜け、そのまま倒れこむと大地を血で赤く染め上げる。

ザシュ

返す刃で今度は妻が心臓を切り裂かれた。

「貴様！妻を娘を！殺してやる！殺してやるぞ！」

ホドラムの眼は裂け、口から涎が飛び散る。
だが、数人がかりで押さえつけられ、身じろぎすら出来ない。

「そうよ！その言葉を聞きたかったの！その為に私は生きてきたの

だから！」

エレナは無邪気な笑みを浮かべホドラムの傍らに立つ。

（これで……これで終わる……貴方……サリア……これで安らかに眠れるでしょ？……貴方達の無念はこれで晴れるわ……）

１０年のもの間、積もり積もった恨みの念が全て解き放たれるのだ。

彼女の心に、夫と娘の姿が浮かぶ。

「これで終わりよ……ホドラム・アーレベルグ！」

エレナの剣が頭上に振り上げられる。

「クソ！貴様等に！平民などに！」

これがローゼリア王国の将軍にして、反乱の首謀者であるホドラム・アーレベルグの最後だった。

此処に数カ月に及ぶローゼリア王国の内乱は終止符が打たれたのである。

第2章第41話

異世界召喚212日目【王女の憂鬱】：

「……どうしたものかしらね……」

ルピス王女は、王都ピレウスの自室の窓から外に眼をやる。
純白のドレスは胸元が大きく開いていて、彼女の美しさを十分に際立たせていた。
つい先日まで鎧を着込み、姫将軍と呼ばれた女性と同一人物とは思えないほどの淑女振りである。
だが憂いに満ちた其の眼が、彼女の美しさから、明るさと言う要素を打ち消してしまっていた。

「ふぅ……」

彼女の口から大きなため息が漏れた。
窓の外からは、国民の喧騒が城にまで届くほど活気で漲っていると言うのに。
国民の誰もが、内乱が終わりルピス王女の統治が始まることに希望を膨らませている。

ホドラム・アーレベルグと其の家族がエレナの剣によって討ち取られたことにより、ローゼリア王国の内乱は終結した。
途中から反乱に加わったホドラムが殺され、真の首謀者であるゲルハルト公爵が生き残っていることに、釈然としない部分はあるが、ホドラムの首を取ったことにより、ローゼリア王国としてのメンツは保てたと言うことだ。

内乱が終わり今日で一ヶ月が過ぎようとしている。
だが、本来なら希望に満ちているはずのルピス王女であるが、彼女の心はある悩みに支配されていた。

「父上……ルピスはこの国の王に相応しいのでしょうか？……あの男の処遇一つでこれ程迷う私は果たして……」

幾度となく、死んだ父へ問いかける。
とはいっても、既に死んだ人間が彼女の問いに答えるはずも無い。
答えてくれるはずの無い父への問いかけ。
其の行動は、彼女の心を克明に表している。

「ふぅ……」

再び深いため息が彼女の口から漏れた。

「殿下……」

その姿をメルティナは悲しげに見つめた。
彼女はルピスの戴冠に伴い、近衛騎士団長への就任が確定している。
本来ならそちらの業務を遂行しなければならないのだが、彼女は相変わらずルピスの補佐として傍に付き添っていた。
（……やはり……ミハイル殿を謹慎させられたのは痛手か……しかし私だけでは殿下を支え切ることが出来ない……）
頭の出来から言えばメルティナもミハイルも大差は無い。
しかし１０歳という年齢差は意外に馬鹿に出来ない。
騎士達への影響力でも、ミハイルの方が上なのだ。
内乱が終わり、ローゼリアの王になることが確定しているとはいえ、まだ権力基盤は不安定なのだ。
少しでも信頼出来る人間で政権を固めたいと願うのは当然といえた。

だが、肝心のミハイルは今、王都に有る自らの屋敷で謹慎中である。
内乱が終わり、ゲルハルト公はミハイルの身柄をルピスへ引き渡した。
当然ルピスやメルティナは現職復帰と考えていたのだが、流石にそれは無理だった。
別段、亮真が何かをしたわけではない。
元々ミハイルは処罰を延期されていた身だ。
それを、今後の功績で相殺するという名目で見逃されてきたのだ。
2度目の失敗に、ルピスやメルティナもベルグストン伯爵や元傍観派だった貴族からの追求よりミハイルの身を守り切れなかった形だ。

「ねぇ……ミハイルを……復職させることは無理かしら？……降格でも良いの……謹慎を解いてあげられない？」

ルピスから、これで何十回めかの問いがメルティナにぶつけられる。
ミハイルが謹慎処分となって半月余り。
それからずっと繰り返している問いだ。
メルティナはため息が漏れるのを押し殺しながら無言で首を振った。

「いくら殿下の御言葉でもそれは無理でございます……無論私としては謹慎処分を解いて差し上げたいのは山々ですが……」

メルティナとしてもルピスの願いをかなえたいとは思っている。
ミハイルが居たから問題解決に役立つとは思えないが、ルピスの精神的な支えとしては信頼出来る為、出来れば復職させたいのはメルティナも同じなのだ。
だが、今の状況で安易に賛同するわけにはいかなかった。
道理から言えば、ルピス王女の行動に問題がある。
いくら信頼している騎士とはいえ、2度も失敗を起こしている人間を何の処分もしないと言う訳にはいかなかった。

ケイルの策にはまった形の1度目の失敗はまだ取り繕うことが出来るが、2度目の失敗は致命的といえた。
一時的とはいえ、上官の命令を無視して独断専行した挙句に捕虜になったのだ。
しかも、当初の計画を変更し、ゲルハルト公爵を処刑する機会を失わせる切っ掛けにもなっている。
幹部の間では処刑するべきと言う声すら上がっていたくらいなのだ。
其のミハイルの謹慎を解くことは、例えルピス王女としても不可能と言えた。
いまだ権力基盤を確固たるものとしていない彼女にとって、政権を揺るがしかねない行為なのだから。

「そう……よね……メルティナ、ごめんなさい。無理を言って……」

ルピスもその点は十分に理解している。
問題は、彼女が頭で理解していても情の部分で納得していないところにある。
メルティナは心の中でため息をつくしかなかった。

「まぁミハイルの事はいいわ……それよりも例の件はどうなっているの？」

ルピスは気持ちを切り替え、メルティナに問う。
彼女の抱える問題はミハイルに関してだけではないのだから。

「御子柴殿の件ですね……やはり思ったようには……貴族・騎士共に反発が予想されます……部隊長クラスの騎士程度としてなら押し込めなくもないのですが、彼の功績に見合った職となると……」

「そう……」

メルティナの答えにルピスは顔を歪めた。

問題は御子柴亮真の今後の処遇に関してだ。

最初の約束では、彼らはルピス王女に助力した後、ローゼリア王国が彼らの後ろ盾となることで彼らの潔白を証明すると言うことになっている。

そして証明された後、彼らはこの国から去るということになっているのだ。

内乱が終結して直ぐに、ルピスはローゼリアの王女として各地のギルドへ状況を説明する書簡を送りつけている。

これにより、御子柴亮真とその仲間達に落ち度がない事が既に認められているのだ。

唯一の不満は、港町フルザードのギルドマスター・ウォルス・ハイネケルの悪意を証明できず、事務手続き上のミスということで、何の処罰も与えられなかった事だが、この辺はいたしかたないだろう。

ゲルハルトの証言を信じるなら、全ての手配をしたのはケイルらしい。

そのケイルも亮真に因って殺されている今、証言も証拠も見つけるのは困難を極めた。

周辺のギルドマスターとしても、同僚のウォルスを証拠も無しに追求は出来ない。

事実上、手の出しようが無かった。

だが、亮真達の潔白が証明された以上、ルピスとの約束は既に果たされているのだ。

何時彼らが出て行っても、誰にも止めることは出来ない。

だが彼らは未だ王都ピレウスの城に留まっている。

それは、ルピスが戴冠式が終わるまでと願ったからだ。

「騎士の反応はやはり良くありません……名門・平民出身を問わず、どちらからも否定的な意見が多く出ています……」

「そぅ……」

「やはりローゼリア国民で無い人間を国防の重要ポストに就ける訳にはと言うのが大勢を占めています……まぁ本当にそう考えているかまでは判りませんが、理屈としては頷けなくも有りません……ただ、あれほどの男が騎士団に入るとなれば重要なポストが確実に1つ減ります。上の地位を狙う人間にとっては邪魔なだけですので、そういう感情も含まれているとは思いますが……」

メルティナの言葉にルピスの顔が曇る。

彼女は御子柴亮真を恐れている。

それは、圧倒的に不利な状況であったはずの自分が、ローゼリア王国の新女王として戴冠式を目前にした今、彼女の心から溢れだすほどに増大していた。

「私としてもあの男を殿下の身辺近くに侍る騎士に取り立てたいとは思いません……あの男は殿下に対してもローゼリア王国に対しても敬意も忠誠も持ち合わせてはいません……あの男は己の為にしか動かない……私はこの数カ月あの男の行動を見てきてそう感じました。少なくとも騎士として王家を守る盾として用いるのは危険すぎます」

御子柴亮真の能力に対しての評価は高い。

それは、彼の騎士登用に否定的な人間達からも同様の評価を得ている事で確認ができる。

だから力だけならば騎士だろうと何だろうと就かせる事が出来た。

だが、信用度となれば途端に下がってしまう。

騎士は王国の盾であり剣だ。
国王が国内を統制するうえで必要な武力なのだ。
その武力が信用できない人間に支配されたら？
ホドラム将軍の時代に逆戻りとなる。
王は傀儡となり、国が乱れる。

ルピスはこれから国を立て直さなければならないのだ。
それなのに王家に対しての忠誠が疑問視される人間を騎士になど取り立てられるはずもない。
これは彼女自身も、王国の首脳陣達も共通の意見と言える。

「でも……彼をこのまま国から出すのだけはダメ！絶対にダメよ！……もし彼が他国に登用されたら……」

ルピスは声を荒らげて否定する。
彼女の恐怖は此処に行きつく。
身辺において重用するには信用できない。
だからと言って約束どおり国から出すには危険すぎた。

「判っています……それは私としても同感ですから……殿下……此処はやはり……そのう……」

メルティナが躊躇（ためら）いがちに口を開く。
ルピスは彼女の眼から何を言いたいのかを敏感に感じ取った。

「ダメよそれは……いくらなんでもそれだけはダメ！」

ルピスの否定にメルティナはそのまま押し黙る。
両者の間に、沈黙が流れた。

メルティナが言葉にしなかった手段。
既にそれは首脳陣、特に貴族達から提案されている手段だ。
其の手段とは暗殺。
確かに殺してしまえば、他国に登用される心配は無いし、自分達も枕を高くして眠れる。
（それは判る……でも……まだ彼が敵に付いた訳でもない……彼は私との約束を守ってくれた。なのに私は感謝ではなく彼の死をもって報いるというの？それに……）
彼女は良くも悪くも善良でそれなりの知恵を持っていた。
もし彼女が愚かであれば、亮真との約束を履行してさっさと国外に出しただろう。
もし彼女が悪であったら、流れ者との約束など無視して処刑を命じたに違いない。
悪に染まれないから暗殺はしたくない。
愚かでないから、このまま国外には出したくない。
しかし、流れ者の傭兵を騎士に登用することも難しい。

そしてもう一つ、ルピスが暗殺という手段を選択したくない理由がある。
彼女の心の奥底に秘められた、決して表には出さない理由。
それは……
（もし暗殺を選択するとして、この国の騎士で彼を討てるの？……もし……もし失敗して、私が命じた事を悟られたら……）
無論、一国の戦力を結集すれば、御子柴亮真個人など問題無く討てるはずだ。
個人が国に勝てるはずもない。
だが、逃れることは出来るかもしれない。
冷静に考えてその確率は万分の一以下だろう。
だが絶対ではない。
そして、御子柴亮真は其の可能性を引き当てるかもしれない何かを

感じさせる。
彼女をこの国の王にしたように……
（あの男は……私を決して許さない……）
其の恐怖がルピス王女の心を縛りつける。

コンコン

「失礼いたします、殿下……須藤様がお見えになられました。お通ししても宜しいでしょうか？」

ルピスとメルティナ。
両者の間に降りた沈黙を、メイドの扉を叩く音が破る。
メルティナはルピスが頷くのを確認した。

「お通ししろ」

彼女の声と同時に部屋の扉が開かれ、貴族風の服に身を包んだ須藤が入ってくる。

「失礼いたします殿下……おぉ？何やらお悩みのご様子。いけませんなぁ……お美しいお顔をそのように曇らせては。僭越ではありますが私でよければご相談に乗りますよ？ルピス王女様……いえ新女王陛下」

彼は入ってくるなりいきなりそう言い放った。
元々、礼儀をわきまえているとは言い難い男だ。

「貴様！殿下に向かって何と無礼な！」

メルティナは腰に下げた剣を抜き放った。
この場合、彼女を短気と攻める人間は少ないだろう。
須藤の態度は、とても王族に対しての礼儀を弁えているとは言い難いものなのだから。

「剣をしまいなさいメルティナ……須藤……貴方も礼儀を少し弁えた方が良いわ。今回は大目に見ますが次は有りませんよ？」

ルピスの威厳ある言葉に須藤は恭しく頭を垂れた。
尤もそれが形だけであることはお互いに理解している。

「まぁ良いでしょう……それで本日はどういう用件なのかしら？私は暇ではないの。端的に言ってちょうだい」

ルピスは須藤に着席の許可を与えると、間髪いれずに切り出す。

「なぁに、さほどお時間は頂きません。殿下が戦後処理にお困りの様ですので、其の憂いを取り除いて差し上げようかと思い、お時間を頂いた次第」

メルティナの眉が顰められた。
ルピスが彼女の顔をどういうことか？と見上げた。
だが、彼女としても全く予想外な事に、どういうべきか言葉が見つからない。

「そう……それは心強いわね……でも私が何に悩んでいるか判っているの？須藤」

ルピスは疑わしげに須藤へ問いかけた。

「無論。と言うよりも、多少でも物が見える人間なら誰でも気がつくでしょう……御子柴亮真の処遇に関してですな？」

須藤の言葉にルピスは必至で動揺を押し殺す。
一国の王となる彼女が、そう簡単に動揺を表すわけにはいかないのだ。
（ダメ！ダメよ！ルピス！コイツに心を見透かされてはダメ！落ち着いて……落ち着くのよ！）

「何の事？須藤」

ルピスは何でそんな事を言い出したの？と首をかしげながら須藤に問い返す。
尤も、そんな彼女の必死の演技は須藤の眼から見れば、田舎芝居に等しいものだった。

「ほぉ……これはヨミが外れましたか……では、お忙しい殿下のお時間をこれ以上取るわけには行きませんなぁ」

須藤はそう言うと腰を上げた。
メルティナとルピスの顔色が変わる。

「またれよ！須藤殿……殿下は貴殿の話を聞くためにお忙しい中、態々時間を御取りになったのだ。それを勝手に帰ろうとするとはどういうつもりだ！」

メルティナは、咄嗟（とっさ）に機転を利かせて須藤を押し留める。

「はぁ？ですが殿下のお悩みが御子柴亮真の処遇に関してでないとなると……これは全く意味の無い事。お忙しい殿下のお時間をこれ

以上無駄にするのは気がひけますし。ここはやはりこのまま御暇(おいとま)を」

殊勝な言葉だが、彼の表情を見ればそれが偽りであることなど明白な事実だった。

彼はルピス達をからかっているのだ。

ルピスとしても須藤の提案は聞いてみたい。

手詰まりである現状の打開策に繋がるかもしれないのだから。

だが、御子柴亮真の処遇を迷っていることを認めるわけにもいかない。

「そうね……須藤。せっかく時間を取ったのだし、聞くだけ聞いてあげる。話してみなさい」

ルピスは精一杯の虚勢を張って須藤へ命じた。

「はぁ。では、せっかくですので」

須藤はこの辺が潮時と判断したのか、再び腰をソファーへと沈ませた。

「以上の事から、御子柴亮真の処遇は大変難しい訳です。彼が王国に忠誠厚き人間なら騎士にも登用できるでしょうが、傭兵である彼にそれはあり得ない。だからと言って国外に出せば他国が彼を登用してしまう可能性がある……何時かローゼリア王国へ攻め込んでくる可能性もあり得るわけです」

須藤の言葉に二人は顔色を変えた。

彼女達が悩んでいるのは正に須藤の指摘どおりなのだから。

「騎士には出来ない、国外にも出せない。だからと言って殺してしまうわけにもいかない……あれ程の功績をあげた人間を殺してしまえば、今は良くとも将来に必ず禍根を残します」

須藤は言葉を切り、上目つかいにルピスの顔色を窺う。

（ふむ……思った通り持て余していたか。まぁシャルディナ殿下と渡り合った程の男を、この女程度が御しきれるはずもない……）

彼の眼は冷徹にルピスの能力を見極める。

「ふぅ……それで？貴方はそれをどう解決するというのです？」

ルピスは興味の無い振りを止めた。

もう隠しても意味が無い事を理解したのだ。

須藤は笑みを浮かべて言った。

「騎士には出来ない、他国にも出したくない。なら貴族にすれば良い」

彼の言葉にルピスは絶句した。

それは傍らで聞いていたメルティナも同じだった。

「馬鹿な……貴様は何を言っている……平民を……それも何処の馬の骨とも判らない傭兵を貴族……にだと？」

絞り出すようなメルティナの言葉に須藤は頷いた。

「ふざけるな！」

部屋に彼女の怒声が響く。

「そんなこと出来るはずがない！……いや、仮に出来たとしても貴族がそんなことを認めるはずもない！誰が平民出の貴族など認める！騎士に登用する方がまだ現実的だ！」

彼女の言葉にルピスは頷くしかなかった。

「それに所領はどうする！直轄地を削るのか！？」

貴族にするには所領が必要だ。
無論、王家直轄地や今度の内乱で取りつぶす貴族の所領を与える事もできる。
だがそれでは王家の力を強める事が出来ない。
今度の内乱を機にルピスは国家の主権を完全に己の物にしたいと考えている。
その為には、何よりも土地だ。
貴族達が連合しようと、王と騎士だけでも戦いぬけるだけの戦力が必要となる。
平民に対する貴族達の心情と考え合わせれば、新たに御子柴亮真を貴族にするという選択はあり得ないはずだった。

だが、須藤には彼女達の反論など想定済みだった。
彼はポケットより一枚の地図をテーブルの上に広げる。

「これは？西方大陸東部の地図？」

ルピスの言葉に須藤は頷くと、地図上の一点を指し示す。

「此処を彼の所領にします。どうです？此処ならば直轄地を削る必要も無いし、貴族達の反感を買うことも無い……しかも此処ならば変に力をつけて反乱を起こされる心配も無い……爵位はそうですね

ぇ？最下級の男爵位で良いでしょう……まぁ所領の大きさだけなら公爵が必要ですが場所が場所ですからねぇ」

須藤の言葉にルピスもメルティナも言葉を失った。
須藤の指し示した土地は広大だ。
ローゼリア王国全土の１０分の１にも匹敵する。
これ程の所領を平民出に与えるとは正気とは思えないほどの暴挙だ。
だが、彼の言うとおり貴族達から反発を買う恐れはゼロと言えた。
誰もかの地を所領にしたいとは思わないだろうから……

「ウォルテニア半島……」

ルピスの口から呟きが漏れる。
再び御子柴亮真の運命の輪は回り出した。

第２章第４２話

異世界召喚２２７日目【召喚されし者の決意】：：

（結局、これが結末か……俺が甘いと言われれば甘いんだろうな……）

王都ピレウスの城内に与えられた自室のベットに横たわりながら、亮真は空を見据えた。

彼の脳裏に浮かぶのは、ルピス王女の固く強張った顔だ。

午前中、謁見の間へ呼び出された亮真は、ルピス女王から男爵位の叙勲とウォルテニア半島の下賜についての話をルピス女王より受けた。

それは彼にとって全く予想していなかった事態だった。

彼は、そろそろこの国から出て行こうと言う話をマルフィスト姉妹達としていた矢先だったのだから。

だが、彼はこの恩賞の話を断らなかった。

無論、それは喜んだからではない。

彼は気が付いたのだ。

ルピスの表情の裏に隠された自分に対する恐怖を……

そして、彼女の傍らに侍るメルティナの自分への殺意に。

もし此処で亮真がこの話を断れば、メルティナは即座にこの部屋の警護に就いている騎士達を彼に襲いかからせたに違いない。

彼女達はそれほどまでに、御子柴亮真と言う人間を恐れたのだ。

それを敏感に察した彼は、この場での即答を避けた。

この話に、どんな裏が有るか……それを確かめる事が先決なのだ。

（例え断れない話にしろ、対応する手段は有る……まずはこいつらが何を狙っているかだ……）

亮真は湧き上がる疑惑と怒りを押し隠し、ルピス王女へ感謝の意を表した。
謁見の間より、生きて出ていくために……

（ウォルテニア半島か……中々面白い事をしてくれるぜ。あのクソ女め……）
亮真は午前中の出来ごとを思いだして、罵った。
尤も其れを口に出すことはしないが。

この部屋には、彼の外は誰も居ない。
常に彼の傍らに居るはずのマルフィスト姉妹すら部屋から追い出して、彼は一人思案にふける。
窓から差し込む赤い夕陽が彼の顔を真っ赤に染め上げた。
その表情は氷のように冷たく、その眼の奥底には憤怒の暗い炎が立ち上っている。
それは純粋なまでの殺意。
信じた人間の手ひどい裏切りに因って生じた憤怒の心。
自らの心を自制しながらも湧き上がってくる彼女への憎悪。
そして、愚かにも彼女の様な人間を信じた自分の愚かさへの自虐。
だが、彼はそれを面に表すわけにはいかない。
少なくても今は……
何故なら、彼を裏切ったのはこの城の主であり、この国の新女王なのだ。
（壁に耳あり障子に眼ありというしな……用心にこした事はねぇ……それこそのぞき穴だって無いとはいえねぇからな……今ここで俺が不満を持っていることを悟られるのは絶対に不味い……それこそガイエスの爺を殺した時より状況は最悪だからな）
亮真の脳が冷徹なまでに事実を一つずつ明確にしていく。
オルトメア帝国から逃げ出すのは難しくは有ったが、彼には十分に

勝算があった。
だが今は、あの時とは違う。
今は、あの時とは条件が違いすぎるのだ。
この場から逃げると言う手段は現実的に不可能なのだ。
（まず俺の顔と名前を知っている奴が多すぎる……それに此処で上手く逃げだせたとしても、ルピスがギルドの方へ手を回せばそれでこっちはアウトだ……少なくてもギルド経由の仕事は出来なくなるだろう……）
亮真達はルピスの手紙に因ってギルドへの釈明をし、自らの無実を証明した。
それは逆を言えば、ルピスが『そんな手紙は知らない』、もしくは『嘘を書いた』とギルドへ証言すれば全てがひっくり返る可能性があるということだ。
ルピス女王の証言と後ろ盾で得られた無実は、ルピス王女の証言と圧力で失われる事を意味する。
（クソ……王族に権力が有るっていうのも困りもんだな……）
自らの無実を証明されたと喜んでいた過去の自分の愚かさに反吐が出そうだ。
王族の権力を甘く見たツケかもしれない。
良くも悪くも国の力は強大だ。
白を黒と言う事も、黒を白と言う事も、国の力を持ってすれば可能なのだから。

（さっさとこの国を出ちまえば良かった……いや、それは無理か。
警護と称して騎士が四六時中ぴったりと張り付いていたからな……
下手に逃げ出すそぶりを見せたら殺されていたかもしれない……ケッ！俺は本当におめでたい男だぜ……ルピスの言葉を鵜呑みにして喜んでいたんだからな。何が私の戴冠式が終わるのを見届けて頂戴だ！舐めやがって……）
元々、内乱が終わればこの国で出ていくつもりだったのだ。

だからこそ、亮真は勝つために手段を選ばなかった。
必要以上に貴族達へ関係をむすぶ事は避けたし、ルピス女王の意向に対しても躊躇(ちゅうちょ)せずに諫言した。
周りから自分がどう見られるかを意識するつもりが無かったのだ。
其のツケが今、彼に圧し掛かってきている。
内乱が終結して一カ月余り。
亮真達はギルドへの釈明が済んだ後も城に留まった。
ルピス女王の強い要望があったからだ。
亮真は其れを不安の表れだと捕えた。
国を背負っていかなければならないという責任への不安。
ミハイルと言う腹心が謹慎処分となった今、自分達が留まることでその不安が和らぐならと彼は軽く承諾したのだが、其れが完全に裏目に出たということだ。

亮真はこの1月余りを与えられた自室で過ごした。
豪勢な食事を食べ、リオネやマルフィスト姉妹を相手に武術の稽古をして軽く汗を流す。
時間が有ればボルツや厳翁と他愛のない会話をして時間を潰す。
それは彼がこの世界に召喚されて初めて過ごす、心穏やかな日々だった。
だがそれはこの国を出ていくという前提の下での話。
この国に残る事を最初から考慮していたなら、彼はそんな日々を過ごしはしなかっただろう。

今の彼に必要なのは、己の心に向き合う静寂さだった。
静かに、そして確実に亮真は現状を分析していく。

（まさか、あの女が約束を破るとは思いもしなかった……いや、俺は意図的にその可能性を考えない事にしたんだ……あの女を舐めていたと言ってもいい……あの女の善良さを過信しすぎたともいえる）

自分が恐れられていることは理解していた。
だからこそ彼はこの国から出るつもりだったのだ。
だが、ルピスの抱いた恐怖はそんな事では払拭されなかったようだ。
（ウォルテニア半島か……素直に考えれば、大出世だ。だがルピスが今そんな事をするとは思えない……なぜなら平民を貴族にすれば反発が起きて当然。ルピスの王権はまだ不安定。その状態で俺を貴族にするとなれば……何か裏が有るはずだ）
亮真の前に示されたのは貴族位と領地。
普通に考えれば大出世と言える。
だが、亮真は其れを額面どおりに受け取るほど愚かではなかった。
ルピス女王は事前に何の連絡も無く、約束を反故にして男爵位と領地を押しつけてきたのだ。
もし、本心から御子柴亮真の力を借りたいのであれば、そんな事をするはずが無い。
事前に今後も助力してほしいと願うのがスジと言える。

自分の状況。
ローゼリア王国の現状。
そしてルピス女王の態度と表情。
其れらを脳裏で組み上げていくことで、ルピス女王の狙いが見えてくる。

（成程……俺を封じ込める気か……）
まず、亮真の力に恐怖を感じている人間が、彼を貴族にして領地を与えること自体が不自然だ。
ならば、貴族にすることで逆に何らかの制限を掛けてくる可能性がある。
（まず考えられるのは与えると言うウォルテニア半島だな……此処に問題がある可能性が大きい。隣国との国境が近く紛争が絶えないかとか……そんなところだろう……だが向こうが押し付ける気で来

る以上、ただ断るのは無理だな……断るには其れなりの理由が必要になる……正当な理由が……ならどうする？？）

女王が与えると言う領地と爵位を受け取らないと言うには、彼女のメンツを潰さないだけの正当な理由が必要になる。

ただ断れば、ルピスの権威に泥を塗ってしまう。

いまさらルピスの事がどうなろうと亮真は気にもしないが、その結果どうなるか？

ルピスやメルティナは意地でも亮真を殺そうとするだろう。

受け取っても受け取らなくても彼は地獄を見ることになる。

「結局俺が弱いということか……」

亮真の口から自嘲の言葉が漏れた。

彼は国と言う権力に押しつぶされそうなのだ。

個人の力では勝っていても、彼はルピスの命令に逆らえない。

無理に逆らったところで、意味は無い。

それはつまり、亮真がルピスよりも弱いということだ。

ならばどうするか。

（国に勝てるのは……国だけ……）

亮真の心に有る思いが浮かんだ。

「お悩みの様ですな主殿」

考えにふける亮真に声を掛けた人間がいた。

彼は素早く身をベットより起こすと、無言で声の主を睨みつける。

「どうやって入った厳翁？」

「ドアより……」

亮真の問いに厳翁は落ち着き払って答える。

「どういうつもりだ？俺はお前を呼んだ覚えは無いぞ？」

「まぁそう言われずに」

亮真の言葉を軽く受け流すと、厳翁は椅子へと腰を落ち着けた。

「状況は既に確認しております。ウォルテニア半島……また厄介な地を押しつけられることになりそうですな……」

「なぜ其れを知っている！？」

亮真は厳翁の言葉に眼を細めた。
姉妹にすらまだ告げていない事を、この老人は口にしたのだ。

「私共の生業は忍び込み探り出すこと。この程度は造作も無き事」

「そうか……そうだったな」

厳翁の答えに亮真は頷いた。
彼らは忍びの一族。
情報を探り出すことなど、容易いのだろう。

「なぁに……双子のお嬢達に頼まれましてなぁ。主殿の様子がおかしいと。それでワシと咲夜の二人で探ってみたというわけですわい」

「あいつらが？」

厳翁が深く頷く。
恐らく姉妹は、亮真の表情の変化を敏感に察知して厳翁に頼んだのだろう。
彼女達の心配りは正に見事と言える。

「なら状況は判っているだろう？」

「えぇ……確かに厄介ではあります。ですが有る意味これは幸運ともいえましょう」

「幸運？これが幸運だと言うのか！」

亮真は思わず声を荒らげた。
透けて見えるルピスの思惑。
そして押し付けられようとしている土地への不安。
不利な要素ばかりが目につく。
だが厳翁は首を横に振った。

「主殿……ルピス女王の思惑に乗りなされ。そして力を蓄えるのです」

亮真は厳翁の言葉に頷くことは出来なかった。
其れは彼自身も考えてはいるのだ。

「我らが信じられませんか？」

亮真の顔色を呼んだのか、厳翁の言葉が核心に切り込んでくる。

「既に我らの意思は決まっております。リオネ殿もボルツ殿も、無論お嬢達もワシらもです……」

厳翁の眼が亮真を見据える。
彼の言葉は何よりも強い意志が込められていた。

「そういうこと……なんで着いて来いって言わないのよ坊や」

「若！何処までもお供いたしやす」

扉が開き、リオネ・ボルツ・咲夜にマルフィスト姉妹が連れだって部屋へ入ってきた。
どうやら厳翁の言葉通り彼らの意思は既に決まっているようだ。

フッ

亮真の表情が緩む。

「保証は出来ないぞ？……何しろ俺は領地経営などした事の無い平民だからな」

亮真の言葉に厳翁は無言で頷いた。
そんな事は誰もが理解しているのだ。
それでも彼らは、御子柴亮真という人間を信じたのだ。

「しかし！坊やにあれだけ世話になって置きながらこんな仕打ちをするとはねぇ……だから貴族はいけすかないんだよ！」

リオネの乱暴な口調はその場にいる人間の心を代弁していた。

今後の方針を決める為に、彼らはテーブルを囲んでいる。

まず大事なのは、明日のルピスへの返答だ。
回答期限は明日の正午。
其れまでに、爵位と領地を受け取るかどうかを決めなければならない。
彼らはこれから徹夜をしてでも対策を練り上げる必要があった。

「まぁ彼女には彼女の立場がありますからね」

亮真の言葉は何処か冷めている。
もっと怒りを面に表しても良いというのに。

「腹立たしくは無いのかい？」

リオネは探るような視線を亮真へ向けた。

「そうですねぇ……まぁ向こうがその気ならば俺も容赦はしませんよ」

リオネの問いに亮真は唇を釣り上げて笑う。
其の顔を見たとき、彼らの背筋に冷たいものが走る。

其れは、鬼の嗤(わら)い。
悪意と憎悪。
そして野心に満ちた暗く深い闇。

（ルピス……アンタの立場は判らなくは無い……だがアンタは俺を裏切った。まぁ其れは良い。騙された俺が悪いからな……だが今度はアンタに代償を払ってもらうぞ！）

この夜、彼の部屋からランプの灯が消されることは無かった。

第2章最終話

異世界召喚２６０日目【暗躍する者達】：：

「と言うわけですが……此処まではご理解いただけたでしょうか？殿下」

須藤は目の前の椅子に腰かけ、じっと彼の報告に耳を傾けているシャルディナ皇女へ問いかけた。

此処は帝都に有るシャルディナの私室。

シャルディナは机に肘をつきながら、ローゼリア王国へ潜入していた須藤の中間報告を受けている。

「そうねぇ、とりあえずは順調の様ね……色々と予定外の事もあったようだけど、ローゼリア王国の弱体化は問題ないと言えるわ……斉藤、今までの話の中で気になるところは有るかしら？」

シャルディナは傍らに立つ斉藤へと話を振る。

「そうですねぇ、須藤さんの御蔭で策の修正は最小限で済んだのは良かったと言えます。あのままゲルハルトを殺されてしまえば、彼に担がれたラディーネ王女も反逆者として始末されてしまう。其れをあの状況から二人を生き残らせる事に成功するとは……流石は須藤さんですねぇ。ゲルハルトはともかく、ラディーネの方はかなり金を掛けて仕立てた人形ですから」

斉藤の賛辞に須藤の顔が綻ぶ。

「いやいや、私の力ではありませんよ。あの王女……今は女王ですか。何にしてもあの女が馬鹿で良かったですよ！いくら信頼している側近とはいえ、たかが騎士一人の命と天秤にかけたほどの馬鹿ですからねぇ」

須藤はそう言って謙遜して見せたが、彼の眼には自分の知略への強い自負が浮かぶ。

日本人特有の奥ゆかしさと言うところか。

尤も、其れは形だけの事。

彼は自負心が強く傲慢な性格である事を、シャルディナ達は十分に理解している。

彼の人を食った態度はまさにその象徴と言えた。

「其れなりに頭は良いのですが、どうにも決断力に欠けますなぁ……一言でいえば馬鹿な善人と言ったところですか」

須藤のルピスに対する批評には、一切の容赦がなかった。

彼は心の底から、ルピスを軽蔑しているのだ。

「あぁ、さっきの報告にも有ったわね……全く何を考えているのだか……まぁ敵が愚かなのは良い事ね。尤も余りに愚かだと、相手をするのも飽きてきてしまうけれどもね」

シャルディナはそういうと肩を竦め、唇を歪めて笑った。

彼女の言葉に頷く須藤に対して、斉藤はやや顔をしかめながら言い返す。

「しかし殿下。余り歯ごたえのある敵と言うのも困り物ですよ？」

「あいつの事……ね……全く！邪魔ばかりする男ね。本当に嫌にな

る！」

斉藤の言葉にシャルディナは吐き捨てるように言い放った。
彼の言葉を聞いて彼女の機嫌は瞬時に悪くなる。
彼女の脳裏にあの老け顔の体格の良い青年の顔が浮かび、苛立たしげに首を振った。
其れも当然だろう。
彼女にとって、最も聞きたくない男の話題なのだから。

「まぁ須藤さんの話を聞く限りでは、あの男はあくまで巻き込まれただけの事……帝国の意図を読んだ上での参加ではないようですが……」

「だから尚更腹立たしいのでしょ！　全く！何処に逃げたのかと思ったらローゼリアの内乱に参加しているなんて！　しかも偶然に？！あいつの所為で危うく策が崩壊しかけたのよ！？　どれだけ疫病神なのよ！あいつは！」

斉藤の指摘にシャルディナは語気を強めた。

「まぁ因縁？　と言うやつですかねぇ……何しろガイエス様を殺した男が、ガイエス様の立案した策を邪魔したわけですから……クックックッ」

「因縁ねぇ……」

須藤の含み笑いを見ながら、シャルディナはため息をついた。

今回のローゼリア王国内乱は、亡きガイエスが東部地方侵攻に際し

てたてたオルトメア帝国の策略である。
西方大陸中央部に覇を唱えるオルトメア帝国は今、北部のエルネスグーラ王国、西部のキルタンティア皇国、両国からの圧力に耐えながら東部侵攻を企てていた。
両国とオルトメア帝国の国力軍備力はほぼ互角。
三つ巴の戦が此処２０年余りわたり続けられて来たのだ。
２つの国が争えば残りの１国が漁夫の利を得る。
其れを誰もが理解している為、三国の戦は終わらない。
国境地帯でにらみ合いを続け、互いの隙を窺いあう。
だが大戦にはならない。
残った３つ目の国が介入してくることが眼に見えているから。

宮廷法術師でありオルトメア帝国の軍師であったガイエスは、この状況を打破する為に一つの策を皇帝に提示した。
北のエルネスグーラにしろ、西のキルタンティアにしろ、今の帝国の力で討ち滅ぼすことは難しい。
だからと言って１方と同盟を結び残った国を攻めるのも現実的には不可能と言える。
３国間は積年の恨みと利害関係が複雑に絡み合い、とても同盟を結ぶ余地など無かったのだ。
其処で彼は、西方大陸東部と南部へ眼を向けた。
東部南部のどちらかを侵略し、二カ国との国力に差をつけようとしたのだ。
そして彼は東部に眼を向けた。
南部は１５の小国に分割された激戦区である。
必然的に小競り合いが多く、兵の実践経験も多い。
言うなれば強兵の国なのだ。
其れに対し東部は、ザルーダ・ローゼリア・ミストの３王国による統治が長く戦の経験もさほど多くない上に、身分制度が厳格であり、貴族の統治が長いこの地方は平民が搾取される傾向が強く、多少税

率を下げるなどのアメを民に与えることで占領後の支配統治が容易だと判断された。

このガイエスの立案した策は、皇帝の命によって即座に実行された。そこでまず行われたのが、ザルーダ王国の隣国、ローゼリア王国に対しての謀略である。

ザルーダ王国へ直接謀略を仕掛けなかったのは、ガイエスがキレ者と言われる処だろう。

東部3国のそれぞれの国力はオルトメア帝国と比べるまでもなく低い。

だが、東部3国が連合すれば、オルトメア帝国といえども簡単に勝利は掴めないのだ。

其処で東部を分断する為の謀略として引き起こされたのが、ローゼリア王国の内乱である。

「ガイエスの命を受け、須藤がラディーネを見出したのが2年前。その後、前ローゼリア王ファルスト2世を毒に因って徐々に弱らせ病に見せかけて殺し、準備が整ったというところであの男が現れた……其の所為でガイエスは殺され、今回も危うく全てをぶち壊されるところだった……確かに因縁ねぇ……」

全ての計画はガイエスがあの男、御子柴亮真を呼びだしたことに因って狂ったと言える。

「確かに……」

シャルディナの言葉に斉藤も深く頷く。

「それで？あいつは方どうなったの？」

「御子柴亮真ですな……いやいや……中々に曲者ですなぁ……結論から言うと狙い通りの展開には成ったのですが……」

須藤は此処で言葉を切った。

彼の表情から、判断に迷っている事が見て取れた。

「どういうこと？ウォルテニア半島を押しつけることにしたんでしょ？」

「えぇ……其れはそのようになったのですが、あの男……土壇場になって条件を付けてきたんですよ」

「えぇ？どういうこと？男爵位とウォルテニア半島……このほかに条件を付けたってこと？」

驚きの表情を浮かべるシャルディナに須藤は真顔で頷いた。

「これがまたあの男らしい……実に相手の急所を抉る弁舌でしてねぇ……結局ルピス女王は其れを飲まされたというわけでして……」

須藤はそう前置きをすると、あの日謁見の間で起こった事を語り始めた。

其の日、亮真はルピスが謁見の間に入ると聞くとすぐに面会を申し込んだ。

「やけに早いわね……御子柴。答えは出たということかしら？」

ルピスは、表情を強張らせたまま亮真へ問いかける。

「はい陛下……今回のお話。私としても大変嬉しく思っております……出来る事ならば私としても有りがたく頂戴したいところなのですが……」

此処で亮真はいったん言葉を切ってルピスへと視線を向けた。
彼の眼には、前日の激情など微塵も残ってはいない。
純粋にルピスへの敬意の念が浮かんでいる。

「其れは断りたいという事なの？　御子柴……？」

ルピスの声が低く冷たくなる。
王が平民を貴族にしてやると言っているのだ。
這いつくばって感謝するべきなのに目の前の男は断ると言うのか？
言葉にはしなくとも、彼女の雰囲気が彼女の心を亮真に告げてくる。
（ふん……馬鹿が）
亮真は心に湧き上がるルピスへの罵倒を内に秘め、さも申し訳な下げに言いだす。

「そのような恐れ多い事……私としても陛下の温情は感激の極みでございます……ですが……」

「なんなの？」

「この話をお受けいたす前に、殿下へ一つ確認したいことがございます……其れをお聞きするまでは私といたしましても何とも……」

のらりくらりとした亮真の言葉に、ルピスの中で苛立ちが募ってくる。

「陛下……此処はこの男が何を言いたいのか聞いてみたらいかがでしょう……このままのらりくらりと逃げられるよりは宜しいかと……」

玉座の傍らに立つメルティナがルピスへ耳打ちをした。

「良いでしょう……御子柴。何を聞きたいというの？」

ルピスの許可を受けて、亮真は恭しく頭を下げて感謝の意を示すとおもむろに切り出す。

「陛下……まずは確認でございますが……ウォルテニア半島の現状を何処までご存知でしょうか？」

「どういう意味？」

ルピスの表情に疑問の色が浮かんだ。

其れは傍らに居るメルティナも同様である。

「勿論、私も詳しく知る訳ではありませんが、このウォルテニア半島……相当に問題があるようですね」

「あら？　……そうなの？」

ルピスは亮真の言葉をさも初めて聞いたという風に問い返す。

流石に、此処で亮真の問いを正直に答える様な愚かな事はしなかった。

勿論、彼女がそうやって惚（とぼ）けることなど亮真にとっては想定内だが。

「えぇ……私も陛下からお話を頂き急いで調べたので判ったのです

が……」

此処で亮真は探るような視線をルピスに向ける。

「このウォルテニア半島ですが、ローゼリアの最北端に位置した半島で、大きさはおよそローゼリア王国全土の１０分の１……領地の大きさとしては過分と言えます……ですが此処には幾つか問題がありまして……」

そう言って亮真が語った半島の問題点は以下の通りになる。

１：ローゼリア王国の罪人を追放する流刑地をして使用されてきたため、税を納める民がウォルテニア半島においては０である点。
２：強力な怪物（モンスター）達が多数生息しており、普通の平民では生活することが困難である点。
３：人間に対して敵対的な亜人種の集落が存在する事。
４：沿岸部を根城にしている海賊達の問題。
５：隣国ザルーダ王国との国境が近く、紛争が絶えない地域である事。

特に１と２は非常に大きな問題である。
貴族の税収に直結する話なのだ。
つまりルピスは税収の無い土地を与えようとしていた事になる。
貴族の収入は領地の民が治める税に因る事を考えれば、今回の話がどれだけ悪意に満ちた物か理解出来るだろう。
そもそも、この地はローゼリア王国の領土内では無い。
国の書類上はローゼリア王国の領土となってはいるが、この国が半島を支配しているという事実は無い。
何しろ国民が０なのだから。
一晩徹夜してこの事実を書庫の書類から知った時の亮真の顔。

それはまさに鬼の顔であった。
其れはルピスの悪意を示す明確な証拠と言えた。
だが、亮真はそれをルピスの前では見せない。
怒りも憎しみも相手より強くなったときに初めて見せるべきものなのだ。

「成程！　流石は御子柴殿……短い間に良くそこまで半島の情勢を掴まれた！それで……御子柴殿は其れを理由にこの話をお断りされたいというのかな？陛下の期待を裏切って！」

亮真の指摘を受けて黙り込んだルピスを援護しようとメルティナが声を張り上げる。

「御子柴殿！　貴殿はホドラム、ゲルハルト両名の討伐に際し輝かしい功績を示された！　だからこそ殿下は慣習を破ってまで貴殿を貴族としようとなされているのだ！　……確かにウォルテニア半島は豊かとはいえぬ！だが半島とてローゼリアの領土！其れも公国に匹敵するほどに広大な土地だ。其れをこのまま放っておくには余りにも惜しい！　そうは思われぬか？」

「成程……陛下はウォルテニア半島を民の住める土地に開発したいと？」

「その通り！確かに困難な土地ではあるが、貴殿程の人間ならば殿下のご期待にも沿うことができよう！　……いかがか？」

「メルティナ殿のお言葉を陛下のご意思と理解して宜しいでしょうか？」

メルティナにしては上手い言い回しをしてきたと言えよう。

困難な領地を与えるのは、貴方が優秀だからだ。
そう言って持ち上げたのだ。
だが、亮真はそんな言葉に惑わされるはずもない。

亮真はメルティナから視線を外すと、玉座に座って顔をこわばらせるルピスへと問いかける。
彼の問いにルピスは無言で頷くしかなかった。
本人を目の前に、貴様を封じ込める為に未開の土地を与えるとは口が裂けても言えるはずがない。

尤も、メルティナの切り返しも亮真にとっては想定内の話だったが。

「いや、そうでしたか！……それならば私としても陛下にお願いがしやすい！」

「どういう事です？　……貴方の願いと言うのは、私の意思を確認したいと言う事ではないのですか？」

亮真の言葉を聞いて、ルピスの顔色が変わる。
彼女は、自分の考えを聞くこと自体が亮真の願いと解釈したのだ。
無論そんなつまらない事を亮真が望むはずもない。
全ては布石。
ルピスとメルティナの二人を追い詰める為の……

「いいえ陛下！　願いと言うのは簡単な事です……ただ陛下のご意思を確認しなければ私としても口に出すのを躊躇（ためら）われる事ですので……ですが陛下が半島を開発したいという、確固たるご意思をお持ちならば……」

亮真の言葉に二人は嫌な予感を感じた。

「なん……です？」

「いえ……半島を開発する為に資金をお借りしたいのです……ただ額が額ですので陛下のご意思を聞いてからでないと中々……いやぁ。陛下が私に其処まで期待をしてくださっていたとは光栄の極み。私も陛下のご期待に応えるよう粉骨砕身させていただきます！」

そういうと亮真は深々とルピスへ頭を下げる。

「待て！資金提供だと？何を言っている！ウォルテニア半島は貴殿の領地！その為の資金など王室が出すはずが無いだろう！」

メルティナが怒声を張り上げた。
尤も亮真の表情は変わらない。

「はぁ？　これは異なことを！　陛下はウォルテニア半島の情勢をご存じであり、私に半島の開発と繁栄をお求めになられた訳です」

「その通りだ！だからこそ貴殿は己の才覚で半島の開発を行わなければならない！」

「ですがご存じのとおり私はただの平民。財産とてございません。其れはメルティナ殿も陛下もご存じのはずでは？」

「其れはそうだが……」

「私自身に金が無い以上、私は陛下のご期待に答える為に誰かから資金を借りなければなりません……ですが、まずどの商人も半島の開発などに資金は貸さないでしょう」

商人はリスクを嫌う。
怪物（モンスター）や亜人種がすむ半島の開発など、リスクばかりで肝心のメリットが見えない。
そんな危ない話に商人達が、投資などするはずもなかった。

「其れは貴殿の才覚で……」

メルティナは必死で食い下がる。
此処で言い負かされては、全てが水の泡となる。
御子柴亮真を封じ込める事も出来ず、ルピスのメンツだけが潰される事になる。
それだけ絶対に避けなければならなかった。

「無論！私は其れなりに才がございます。ですが私としても神ではございません！なんの元手も無くかの地を開発など出来るはずもございますまい！……無論その点に関しては、聡明なる陛下におかれましてもご理解いただけるかと思いますが？」

亮真の矛先がルピスへと向けられた。
彼女の表情が青ざめる。
元々彼女自身も無茶を承知の上で押し付けようとした話。
其れを此処まで見透かされてしまえば、彼女としても打つ手は無い。
結局彼女は、亮真の望むとおりの言葉を口にした。

「いくら必要なの？」

「陛下！」

メルティナの叫びをルピスは黙殺した。

この場には、彼女達だけではない。
傍観派の貴族も居れば、警護の騎士達も居る。
彼らの前で、これ以上無様な様子を見せるわけにはいかなかった。
あくまでも平民を重用する、英明な君主であると思わせなければならないのだ。

「流石陛下！ご聡明でいらっしゃいます……そうですねぇ概算ではございますが、およそ１０００億バーツ程は必要かと！」

ブッ

須藤の説明に、斉藤は覆わず吹き出してしまった。
冷静で礼儀正しい彼にしては、珍しい行為だ。
尤もシャルディナも彼の不作法を咎める気持ちは無かった。
彼女自身も大きな驚きを受けたのだから。

大体、町の安宿なら一泊で１００バーツ。
昼と夜の食事を町の食堂でとれば大体１００バーツ。
人一人が一日暮らすには２００バーツ程度が必要と言うことになる。
となれば、彼の提示した金額の大きさも理解できるかもしれない。

「なんて無茶な額を……それではローゼリア王国に入る収入のほとんどを貸し付けなければならないことになる！」

斉藤の言葉にシャルディナも呆れ顔をした。

「帝国でもそれだけの額を一度に出すのは無理ね……」

出せないわけではない。

だが、これだけの額をいきなり言われて出せる国は西方大陸の何処を探しても無いだろう。
国の収入は事前に使い道が固定されている。
役人の給料や、軍への設備投資など、重要でおろそかには出来ない物がほとんどである。
もし帝国でこの額を出すとなれば、何年も時間を掛けて予算をやりくりする必要がある。
帝国ですら捻出には時間が掛る額なのだ。
帝国よりも国土の小さいローゼリア王国に出せるはずがない。

シャルディナの言葉に須藤は無言で頷いた。

「おっしゃる通り……ですが、あの半島を開発するとなればそれくらいの資金を投下しなければどうにもならない事も事実でしょう」

森を切り開き、道を通す。
海賊や、亜人の襲撃に備える為に常備兵力を雇う。
住民を移住させるのにも金が掛る。
本当に半島を開発するのならば、それくらいの金が掛って当然と言えるのだ。

「其れはそうかもしれないけど……そんな額……あ！そう……そういう事！」

「流石は殿下……気づかれましたか」

シャルディナの言葉に須藤は眼を細めて微笑む。

「あいつは最初からその額を貰おうなんて思ってなかったのね？
……まずは資金提供を断らせた上で何か別の条件を提示した！そう

でしょう？」

須藤は内ポケットより、一枚の紙を取り出してシャルディナへと差しだした。

「これは？」

「御子柴亮真がルピス女王へ提示した条件の一覧です……私も確認しましたがかなり厄介な内容ですね……完全にローゼリア王国から独立するつもりの様です」

この紙に書かれている条項は細かく書かれており、項目はかなりの数に上る。

シャルディナはザッと上から下まで各条件へ眼を通した。

彼女の表情が曇る。

亮真は、大まかに言って2つの事を求めていた。

法、軍事、外交、経済の全てを御子柴亮真へ一任する事。

そして、貴族が王国へ払うべき税金の免除。

つまり男爵と言う地位で有りながら、亮真は公国としての権利を主張したことになる。

「これを……本当に認めたの？ルピス女王は……」

呆れ顔のシャルディナの問いに須藤は無言で頷く。

「馬鹿だとは聞いていたけれど……やってくれるわね。毒蛇に自由を与えたようなものだわ……」

「最初に提示された資金の額に眼を眩まされて、まともに考えない

で許可を与えたようですなぁ」

「だからと言って……こんな事……」

危険な男に態々自由を与えてやったようなものだ。
しかも土地付きで。

「まぁ救いなのはいくら権利が有ろうと、あの半島は税収が全くない未開の地だということです。流石にあの男でも無から有は作り出せますまい……」

「斉藤……貴方本当にそう思うの？」

シャルディナの問いに斉藤は口を濁した。
税収の無い土地。
徘徊する怪物（モンスター）。
ローゼリア王国の援助も無い。
そんな状況で何ができると言うのか？

だが、斉藤は其れを口にすることは出来なかった。
自分自身も、御子柴亮真と言う男の持つ何かを恐れているのだから。
シャルディナは斉藤から視線をそらした。
この場に居る誰もが、同じ不安を感じていたのだ。

「須藤……貴方の策……裏目に出るなんてことはないでしょうね？」

須藤は無言で答えた。
ルピスの不安につけ込み、亮真を貴族にするよう提案したのは須藤自身。
其れは、御子柴亮真の居所を確実に掴んでおくための布石。

シャルディナもまた、他国に亮真が登用される事を嫌ったのだ。
特に北部と西部に存在する大国に。
だが、其れが裏目に出るかもしれない……
そんな不安が3人を縛る。

「いいわ……須藤……でもアイツから眼を離しちゃダメよ？」

言葉少なく命じるシャルディナの言葉に須藤は頷く。

「では殿下……次回の報告はザルーダ侵攻が始まってからということで宜しいでしょうか？」

「えぇ……予定通り来月には侵攻を始めるわ……須藤！手筈は判っているわね？」

「ご安心ください。今回の内乱で貴族も騎士も動揺が広がっております。いくらでも付け入るすきはございますので……ローゼリアがザルーダへ援軍を出す事は無いでしょう」

「そう！ならば良いわ！ローゼリアの抑えは任せたわよ！」

シャルディナの言葉に須藤と斉藤、両名が無言で頷く。

此処に今、オルトメア帝国が其の鋭い牙を剥いたのだ。

第3章登場人物紹介（前書き）

感想に人物紹介が欲しいと投稿がありましたので、急いで造ってみました。
今後、話が進むに連れて追記いたします。

第3章登場人物紹介

第1章主要登場人物

名前：御子柴亮真（男爵）
性別：男性
年齢：１６
出身地：東京都杉並区
本作品の主人公。
１９０ｃｍに近い長身で体重は１００Ｋｇオーバーの巨漢。
コンプレックスは２０代半ば～３０歳などと呼ばれる老け顔。
オルトメア帝国の宮廷法術師であったガイエスの手によって大地世界へと召喚された高校生。
紆余曲折の後にローゼリア王国の内乱に巻き込まれることによって運命が一変する。
ルピス王女の裏切りによってローゼリア王国の北に位置する未開の地。ウォルテニア半島を領有することになった。

名前：ローラ＆サーラ・マルフィスト（騎士）
性別：女性
年齢：十代半ば
帝国の追手から逃げていた亮真に、盗賊団に襲撃されていたところを助けられ忠誠を誓う事になった双子の姉妹。
自分達を奴隷の身分より開放した亮真に対して深い敬愛と忠誠を誓う。

名前：伊賀崎厳翁

性別：男性
年齢：６０代後半
５００年前に大地世界（アース）へと召喚されし忍びの一族の末裔。
亮真を暗殺しに来たのだが、其の器を知り孫娘の咲夜と共に仕えることになった。
一族の長老衆の一人であり、大きな権力を持つ。
初代から受け継がれる一族の悲願が達成できる日を、待ち望んでいる。

名前：伊賀崎咲夜
性別：女性
年齢：１０代後半～２０代前半
忍びの一族の末裔。
亮真暗殺の命を受け陣に忍び込んだが失敗。
祖父であり一族の長老である厳翁の命で亮真に仕えることになった。

名前：リオネ（騎士）
性別：女性
年齢：３０代半ば
出身地：不明
紅髪金目の美女の姉御肌な女性。
亮真と同じくローゼリアの内乱に巻き込まれた元・傭兵団【紅獅子】の頭。
亮真が男爵位を受けた後、彼の騎士として登用される。
長年、荒くれ者の傭兵を指揮してきただけあって、統率力はかなりの物。

名前：ボルツ（騎士）
性別：男性
年齢：５０代半
出身地：不明
傭兵団【紅獅子】の補佐役。
戦で左腕を失った歴戦の勇士。
亮真の事を尊敬し「若」と呼ぶ。
長年の傭兵生活によって培った経験はかなりの物。
亮真の知恵袋的存在。

名前：ルピス・ローゼリアヌス（国王）
性別：女性
年齢：２０代前半
出身地：ローゼリア王国
銀髪金目の美女。
ローゼリア王国の新国王。
民に対しても寛大と評判だが、身内に甘く決断力に乏しい。
御子柴亮真の助力によって内乱を治め国王の座に着いたのだが亮真の立てた戦功に恐れをなし、彼との約束を破って未開の辺境ウォルテニア半島を押し付け封じ込めることを画策する。

名前：トーマス・ザルツベルグ（伯爵）
性別：男性
年齢：４０前
出身地：ローゼリア王国（城塞都市イピロス）
隣国ザルーダへの備えとして存在する、城塞都市イピロスの領主。
歴戦の勇士らしいが、内政にも其の手腕を発揮する逸材。

王国の内乱時には隣国からの侵攻を阻止すると言う名目で、貴族、傍観、王女の三派とも距離を置いていたかなりの曲者。

名前：ユリア・ザルツベルグ
性別：女性
年齢：３０前半
出身地：ローゼリア王国
ザルツベルグ伯爵の妻。
表向きは浪費家で派手好きと言われ悪妻と噂されるが、実は夫を影から操る女傑。
イピロスの経済にも大きな影響を与えているミストール商会の娘。

名前：シモーヌ・クリストフ
性別：女性
年齢：２０前半
出身地：ローゼリア王国（城塞都市イピロス）
イピロスを拠点にするクリストフ商会の跡取り娘。
商売敵の商人たちより妨害をうけ、今ではすっかり弱小商会になってしまったクリストフ商会を必死で守り続けている。

名前：須藤秋武（すどうあきたけ）
性別：男性
年齢：４０代前半
出身地：日本
御子柴亮真と同様に、帝国によって地球より召喚された日本人。
飄々とした態度で通すが、かなりの策略家。
ローゼリア王国の上層部に食い込み、帝国を有利にするべく暗躍

している。

第3章第1話

異世界召喚２７５日目【半島へ】其の１：

「今頃どの辺りかしら？」

蒼く澄み渡る空。穏やかな風が、王都ピレウスを駆け抜ける。
ついこの間まで、この王国が内乱状態だったなどと誰が思うだろう。
エレナの眼の前に広がる景色は、平穏で活気に満ち溢れている。
そんな風景を執務室の窓から眺めながら、エレナはふと呟いた。

「御子柴殿……ですか？　王都を発たれて既に半月余り。何事もなければ今頃は半島の入り口、城砦都市イピロスに差し掛かった頃でしょうか」

傍らに着き従う副官が書類をめくる手を止めて、エレナの呟きに答えた。

「そう……ね。そんな処かしら」

彼女の視線が、北へと向けられる。

「悔やんでおいでですか？」

「……」

副官の問いにエレナは答えなかった。
いや、発する言葉が無かった。

「致し方ございません……ルピス陛下ご自身が命じられた事。国王の裁決に異議を唱える事は……」

エレナの心情をくみ取りつつも、副官自身はルピス女王の決定を支持していた。

彼が格別、特殊な心情なのではない。ローゼリアの多くの騎士や貴族達も同じ考えである。

（エレナ様……確かに私どもはあの男に借りがございます。ですが……）

出る杭は打たれる。副官には其れが当然の事の様に思えた。

「此処だけの話、ミハイル殿を将軍位に推したいというのが陛下のお考え。此処でエレナ様が不満を漏らされては！　此処はご自重くださ い」

副官の諫言にエレナは頷くほかは無かった。

ミハイルの失態はローゼリア国中が知っている。だがルピスにとって、彼は最も信頼出来る人間なのだろう。

騎士、貴族を問わず多くの人間達から諫言されたため、ローゼリア王国の新将軍はエレナとなったのだが、ルピスの本心は誰もが知っている。もし、エレナの忠誠心に僅かでも疑いの余地が有れば、ルピスは喜んで彼女を解任しミハイルを将軍へと推すことになる。

エレナはミハイルを決して過小評価しているわけではない。将来、メルティナとミハイルがローゼリア王国の軍を率いていく人材な事は間違いないのだ。

しかしエレナは、今の彼に一国の軍事を任せるのは時期尚早だと考えていた。冷静さ、読みの深さ、軍略や策略の知識。そのどれもが今の彼には欠けている。

功名に焦って偵察の任務を放り出す人間に軍を率いる資格など無

い。

（そんなことは判っている。今のミハイルに将軍を任せる訳には行かない……でも、私は彼を裏切ってしまった……そして王国を選んだ……この国の未来と彼を天秤（はかり）に掛けた……）

甘い事は自覚している。

彼が善意で自分を助けたのではない事も理解している。だが、自分がホドラムを殺す機会を得る事が出来たのは彼のおかげなのだ。

彼女の心に葛藤（かっとう）と後悔が渦巻く。だが、それでも彼女は産まれ育った王国を捨て切れなかった。

何故なら、今のローゼリア王国は危機に瀕しているのだから。

エレナの眼から見て、ローゼリア王国の新国王であるルピス女王は未熟であった。

政治に、外交に、経済に。唯一、マシなのは軍事だが、其れも及第点スレスレでしかない。

一国の王としては、非常に頼りない。

其の原因はハッキリとしている。経験の無さと彼女の人の良さだ。

知識は王族として育てられているだけあって、十分な物を持っている。

民を愛する心も持っているので、本来なら統治者としては悪くないはずである。それなのに、王としては問題なのだ。

特に王自身が権力を握るという、ルピスが目指す権力構造は彼女にとってはマイナスでしかない。

決断できない王。利口とはいえない側近達。暗躍をし始めた貴族派の生き残り。そして、最悪なのが身内に甘いと言われるルピスの心。

謹慎していたミハイルを2月余りで復職させたのだ。

国の立て直しにはルピスの信頼できる人間が必要な事は判る。

だが、あれほどの失態を犯した人間を短期間で復職させ、平民とはいえ内乱終結にあれ程の功績を立てた人間を、ウォルテニア半島

などと言う辺境に押し込めた彼女を周りがどのような眼で見ているか。

彼女は其れを理解していない。

内乱が終わり、国力の低下は最小限に留められた。なのに、内憂は少しも減っていない。

いや、逆に悪くなったとも言える。

王国は表面上、平穏で安定を取り戻したかに見える。だが、彼女の眼には其れが砂の上に建てられた楼閣にしか思えなかった。

何時崩れ去っても不思議ではない、微妙な小康状態。其れが、ローゼリア王国の情勢と言えた。

女王を補佐する者がもっと思慮深ければ状況は違ったかもしれない。あるいは、女王自身が決断力に富んだ人物であるならば状況も変わっただろう。

だが現実は違う。

平民と支配階級との間に横たわる身分の壁は厚く、貴族も騎士達も内乱であれだけの功績を残した青年を疎んじた。もし彼が、ルピスの側近となってこの国の舵取りに関わっていたとするならば、今の危機的な状況もまた変わっていたと言えよう。

エレナは、御子柴亮真がこの国を出ていくこと自体は反対していた。

彼女は、彼がローゼリア王国に残る事を願った。

だが、ルピスは彼を恐れ疎んじた。そして、彼は北方の辺境であるウォルテニア半島を押し付けられる。

「はぁ……」

エレナは大きくため息をつくと、再び書類へと眼を向け始める。

いくら悩んでも、現実は変わらない。彼女は選んだのだ。

ローゼリア王国の将軍として、この国の立て直しに尽力する事を。だからこそ、彼女はルピスの決定に何も言わなかった。

今此処で、新女王の決定に将軍であるエレナが異議を唱える事は出来ない。権力基盤の固まっていない現状でそんな事を言えば、国が割れてしまう。

「今は国内の立て直しが先決です。多少不義理であるとしても、この国の未来には変えられません。其れにどのような土地である平民が貴族に叙せられた。最初の約束とは違っているようですが、其れは問題にはなりますまい」

「多少……ね」

エレナは副官の言葉に軽い恐怖を感じた。殆どの人間が彼と同じ考えをしているに違いない。彼女の危惧を理解しているのは、ベルグストン伯爵以下極少数の人間達だけ。

（彼に半島を押し付けたのは、毒蛇を野に放つのと同じ事でしょうに……）

エレナの眼には、彼の押し隠された怒りと憎悪の火がくっきりと映し出されていた。其れは地面の下を流れるマグマのように、静かにそして確実に蠢いている。

彼女自身も夫と娘の復讐を誓い日々を過ごしてきただけあって、亮真がいくら押し隠していたとしても其れを隠し通せるはずもなかった。

（権力……特に王や特権階級へ憎悪……私も身に覚えがある）

選択肢として本来ならば、ルピスの選んだ手段は褒められたものではないにしろ、其処まで非難されるものではない。

しかし、彼女は手順を間違えた。

事情を話し、亮真の了解を取ればよかったのだ。だが、王族と平民という身分差がモロに出た。

平民は黙って王や貴族の命令に従うべき。ルピス女王の態度が其れを雄弁に物語っている。

身分をかさに平民の意思を踏みにじる事はこの世界では良くあることだった。

彼女自身、平民出身という事もあり、若い頃は随分と悔しい思いをしたものだ。そして彼女は、其の悔しさをバネに騎士として将軍位にまで上り詰めた。

しかし其れは、彼女がこの国の国民であったが故の話。

この国に何の愛着も持たない人間は、ただ屈辱と怒りに震えるのみ。

（何時か……彼と戦うことになる……のかしら）

彼女の中に不安が過る。尤も彼女はその危険を声高に叫ぶつもりはない。

もし彼が復讐に来るならば、彼女はただ無言で剣を交えるのみだ。

彼の怒りは正当であり、当然の権利なのだから。

（5年……か）

エレナの脳裏に亮真が王都ピレウスを発つ前日、別れの晩餐を共にした時に言われた言葉が浮かぶ。

この国に残された猶予は少ない。

ゲルハルト公爵は爵位を3つ下げ子爵となり、ローゼリア王国の南部、国境付近へと領地を変えられている。

イラクリオン周辺を納めていたときから比べれば収入には格段の差が有る。だが、今まで溜め込んだ私財に関しては一切手が出せなかった所為で、経済的には何の問題もない。

内乱終結後から1ヶ月余り。

彼の周辺には既に処罰を免れた貴族派の人間がすり寄ってきているとも聞く。

ルピス女王が中立派だったベルグストン伯爵らを重用した結果、弾き出されることになった人間達だ。

彼らは、再びゲルハルトを筆頭に貴族派の再建を行っているらしい。

当然、彼らが擁するのはラディーネ王女。

ゲルハルトを助命したおかげで、彼女は正式に王族の一員として認められてしまった。

何の事は無い。ゲルハルトの処刑を躊躇ったせいで、全ては振り出しに戻った。

いや、内乱の勝者でありながら、ルピスは追い詰められている。

タルージャ王国と密接な関係を持っていたホドラムが死に、両国間は今微妙な緊張状態にある。

ザルーダ、ミスト両王国とも、戦にはならずとも外交的には疎遠。

両国共に何か切っ掛けさえあれば戦端が何時開かれても不思議ではない。

決して、ローゼリア王国は安全とは言えないのだ。

外の敵へ備えつつ、ローゼリア国内の主権をルピス女王へ集める為に残された猶予は5年。

但し、其れはあくまで最大に見積もっての話。それより短くなる事も十分に考えられた。

「5年以内に全ての準備が出来なければルピスは死ぬことになる……まぁ判っているとは思うけど念の為に……エレナさんには無理を言って巻き込んだからね」

そう言って笑った亮真の笑顔。

其れを見た時に、エレナは亮真の心が完全にルピスから離れている事を理解した。

彼の言葉は純粋にエレナに対しての心配なのだ。見込みが無い王

へ従って自滅する事は無いという忠告。

「5年……か」

「は？　何かおっしゃいましたか？」

思わず漏れたエレナの言葉に副官が怪訝そうな顔で問い返す。

「いいえ、何でもないわ……次の書類を……」

彼女の言葉に従い副官が新たな書類を彼女の前に差し出した。
素早く眼を通し、判を押す。
彼の予言の日まで、残された時間は少ない。
（亮真君……生きて……そしてもう一度……）
孫程に歳の離れた老け顔の青年の安否をエレナは心から祈る。
何時か再び再会する日を願って。

天空には燦然（さんぜん）と輝く太陽が、街道を行き交う人々を照りつける。
ローゼリア国内は内乱の爪あとの所為で、一時的に流通が阻害されてきたのだが、内乱が終結して2ヶ月あまり。ようやく、内乱前の穏やかな生活が、国民の手に戻りつつあった。

そんな中、特徴的な紋章を掲げた一団が街道を進む。
黒く染め抜かれた生地。剣に絡みついた金の双頭蛇をあしらった旗。蛇の赤い眼が周囲を睨み付ける。
御子柴亮真が男爵位を拝領したのに際して、王都ピレウスで作らせた御子柴家の紋章である。
剣は武力を、蛇は狡猾さと知恵を象徴したこの紋章は、まさに御子柴亮真と言う人間を明確に表したものと言えた。

「坊や！　そろそろ城砦都市イピロスに着く！」

燃えるような深紅の髪を靡(なび)かせ、リオネは後方に怒鳴った。

「えぇ。やっとですか……流石に尻が痛くなってきましたよ」

「まぁ亮真様……さぞ痛いでしょう？　もう少し我慢してください。宿に着かれたら薬を塗って差し上げますわ」

「もし宜しければ馬車に乗り変えられては？　馬車の中でならば、薬を塗って差し上げられますし」

ローラの言葉に、すかさずサーラが割り込む。どうやら姉妹間では主人である亮真の寵(ちょう)を争って戦の真っ最中のようだ。

「あ……あぁ、良いよ。馬にも慣れないとな……」

亮真は尻の痛みに耐えながら答える。

今まで彼に馬に乗った経験など有るはずもない。

自動車のシートは言うに及ばず、自転車のサドルであっても馬の鞍よりかは遥かに柔らかく座り心地が良い。

そんな現代人である彼が、長時間馬に乗れば擦れるのも当然と言える。

ホドラム追跡に際して、乗馬の技術は姉妹に教わりはしたが、所詮付け焼刃。

半月に及ぶ行軍で其のメッキも剥がれて来たのだろう。

「まぁ、もう少しの辛抱だよ！　この坂を上ってしまえばイピロスの城壁が見えてくるはずさ！」

リオネを先頭にしたこの一団は総数３０名。
リオネ・ボルツを筆頭に傭兵団【紅獅子】の傭兵達２３名に加えて厳翁に咲夜・マルフィスト姉妹と亮真である。
傭兵稼業をする分には大人数と言えるが、領土を納めるには余りにも手が足りないと言えた。
（事務処理ができる人間が必要か……）
亮真の視線に入ってくるのは、見事に軍事方面に偏ったメンツばかりである。
チョットした書類整理程度ならともかく、国と言う単位を運営するには余りにも貧弱と言えた。
（まぁ其れは少しずつやっていくしかないか……いきなり俺の求める国が出来る訳は無いからな）
亮真はため息交じりに呟くと、視線を前に向ける。
（俺は生き残るぞ！　そして……ルピス！　必ずこの落とし前は付けてやる……利息も付けてな）
新たな決意を胸に秘めて。

この日、城砦都市イピロスを訪れた一団が大陸の情勢に関わっていくなど誰が予想出来るだろうか？
西方大陸暦２８１２年８月５日。
大地世界（アース）の歴史に新たなページが刻まれる。

第3章第2話

西方大陸暦２８１２年8月5日【半島へ】其の２：

城砦都市イピロス。
ローゼリア王国の北西に位置する、国境の要所である。
周囲は１０数Mにも及ぶ高い石の城壁と深い水堀が外敵の侵入を阻む。
入り口は3箇所。東西と北側に存在し、南には領主でザルツベルグ伯爵の居城が聳える。
この都市が鉄壁ともいえる防御施設であることは、ローゼリアやザルーダ王国の国民ならば誰もが知っている事実である。実際幾度と無く西の隣国ザルーダ王国からの侵攻を阻止してきたと言う実績が彼らの認識を裏づけている。しかし、この都市に住む住民は誰もが理解していた。自分達が住むこの地が、地獄の釜の抑え蓋なのだと……

ここは、イピロスの大通りに面した宿屋の一室。
先ほど、正規の手続きを得て彼らは遂にウォルテニア半島の玄関口と言える、城砦都市イピロスへとたどり着いたのだ。
部屋で休息していた亮真の下にボルツ以下、主だったメンバーが集合したのはつい先ほどの事。
今は、今後の方針に関しての会議中である。

「国境の町ですから防衛に力を尽くすのは当然なんでやすが、どうやらザールダに対する備えってだけじゃないようなんで」

ボルツは肩を竦めて言った。
流石に長年傭兵稼業に就いてきただけの事は有る。

他のメンバーが宿で一息入れている間に、この町のギルドで色々と情報を仕入れて来たらしい。

「怪物（モンスター）達がローゼリア側へ侵入してこないようにする為の防波堤か？」

亮真の答えにボルツは頷いた。

「思った以上に厳しい土地のようですぜ……」

誰もがボルツの言葉を聞き頷く。すでに王都に居た段階から、困難な土地である事は判っていたのだから。だが、

「この町で準備を整えるのが最優先……だな？」

今の彼らに必要なのは、城砦都市イピロスとウォルテニア半島に関しての詳細な情報である。今のまま、半島に入ってもただ死にに行く事になるだけ。地理的な情報に、必要な装備、全ての面において亮真達は不足しているのだ。

それに、半島内には海賊の拠点と亜人の済む村しか無いらしい。となれば、食料や水をどうするかが問題となる。

まさか、海賊や亜人達から水や食料は買えないだろう。そうなると、島内に町を作り自給自足が可能になるまでの間は、この町から食料を仕入れなければならない事になる。町にある複数の商会から取引相手を慎重に選ばなければならないのだ。

この辺の状況判断は既に出尽くしている。

誰もが自らが生き残るために最善を尽くそうとしていた。

「商会の方は私達姉妹で回ります……」

「あぁ頼む」

ローラが素早く、自らの役割を申し出て来た。
今の状況で何が必要なのかを明確に理解している証拠である。
サーラの方も、其の事は十分に理解しているのだろう、姉の言葉に黙って頷く。

「じゃあボルツはギルドの方を頼む。出来るだけ詳細な半島の情報が欲しい。特に川や湖の位置。それと生息している怪物（モンスター）に関しても判るだけ全部だ！」

「判りやした若！　あっしにおまかせくだせい」

ボルツが右腕で自分の胸を叩く。
亮真は頷き、今度は厳翁の方へと視線を向けた
情報を集めると言う仕事に彼と咲夜以外で適任な人間はいない。
亮真の視線に気づき、厳翁の眼が鋭く光る。

「厳翁はこの町の有力者に関して調べてくれ。家族構成や性格……弱みも強みも全部だ！今後しばらくはこの町を拠点にする事になる……」

「成程……確かにこの町の有力者を味方にするのが一番確実ですな」

厳翁の答えに亮真は満足げな表情を浮かべて頷いた。

「ただし、目立つ事はするなよ？　今は下手な事をして敵対されるのが一番困るからな」

「お任せ下され……なぁに明日までには主殿のご期待に答えられるでしょう」

厳翁が恭しく頭を下げた。

「坊や……ならアタイは傭兵の方を受け持とうかねぇ？」

咲夜は厳翁と共に町の有力者達の身辺を探るとして、まだ仕事が割り振られていないのは亮真とリオネの二人だけ。

尤も、リオネも自分の役割は十分に理解している。

「えぇ。ただリオネさんがこれはと思った、腕利きの人間を選抜してください……本当なら数を増やしたいところですが、収入がほとんど見込めない現状で数をそろえるのは無理ですしね……」

「騎士って事で良いのかい？」

「いえ……将来的には直属の騎士になってもらいますが、現状では傭兵としての雇用ですね」

騎士として雇いたい気持ちは有るが、見通しのきかない状況で雇用するのは余りに危険である。何しろ、彼らの払う給料を確保できるかどうかすら怪しいのだから。

「そうだねぇ……領地開発が軌道に乗るまで騎士の雇用は見合わせて置いた方がいいかもねぇ」

リオネも傭兵団を率いて来た経験上、軍が金食い虫である事を十分に理解している。

「まぁそっちは任せて置きな！　ただ何人くらいを考えてるんだい？　腕利きとなれば金がかなり掛る事になるよ？」

腕の良い傭兵の給料は当然高い。どれくらいの予算を出せるのかがわからなければリオネとしても話の進めようがないのだ。

彼女の問いを受けてに亮真はローラへと視線を向けた。既に彼は自分の金の出し入れをマルフィスト姉妹達に任せてしまっている。

「資金としてはおよそ３５００万バーツほどあります。これが純粋に亮真様の個人資産と言うことになります」

ローラの言葉を受けてリオネが目を丸くした。

「へぇ！　アンタ随分と金持ちなんだね！」

其れも当然だろう。

中級貴族並みの資産なのだから。

姉妹を助ける際に奴隷商人から奪った金貨や宝石の代金が其のまま残っているのだ。

「ただし、俺達は村を起こすところから始める事になる。それも全く人の手が入っていない未開の地でだ」

「余裕が必要になるって訳だね？」

リオネの問いに亮真が頷く。

この金が彼らの生命線になる。いくら節約したとしてもしすぎることはないのだ。

「ならば５００万バーツ程かねぇ？　それで１年は維持できるだけの人数……大体２００名前後ってところか。それくらいなら食料や水を買い込む事を考えても余裕が有るだろう？」

リオネの言葉にローラが頷く。

「えぇ、それくらい余裕が有ればなんとかなるでしょう」

「あいよ！　任せて置きな」

亮真の言葉を受けてリオネは力を込めて頷いた。長年傭兵団を率いて来た彼女にとって、傭兵の実力を見抜くのは朝飯前の事だ。彼女にぴったりの役割と言える。

これで仕事が決まっていない人間は亮真一人になった。

「それで、亮真様はどうされるのか？」

「俺か……俺はザルツベルグ伯爵に面会してみようと思う」

サーラの問いに亮真は、ずっと考え続けていた事を告げた。

「イピロスの領主じゃないか？　何だってまたそんな奴に？　……下手に会って厄介事に巻き込まれたりはしないのかい？　それこそ平民上がりと侮って嫌がらせをしてきかねないよ？」

リオネの言葉に、誰もが頷く。

彼女の危惧は尤もと言えた。

なにしろこの国の王であるルピスの裏切りによって彼らはこんな目に会っているのだ。王家や貴族に対して不信感を持って当然と言

えた。
だが逆に厳翁は亮真の意見に賛成のようだ。
「成程……悪くないお考えですな」
「どういうことだい？　厳翁」
リオネは厳翁が賛成した理由が掴めなかったらしい。
彼女は視線を厳翁へと向ける。
彼女の優れている処はこう言うところだろう。相手の意見に耳を傾け、理解しようとする姿勢。これは、ローゼリアの貴族達に大きく欠けている資質と言える。
「確かにこの国の貴族はろくな人間がおりません……リオネ殿が危惧された様に余計な事を画策しないとも限りませんしな……ですがイピロスがウォルテニア半島と隣り合っているという現実を考えれば、ここでかの伯爵と面会をしておく事は悪くありますまい……それこそ主殿が挨拶に行かない事を根に持って、嫌がらせでもされたら困りますからな」
厳翁の言葉を聞いたリオネの脳裏には、嫌がらせをされる自分達の姿が鮮明に浮かび上がった。
何しろ自分達が半島で生活するためには、どうしてもこの都市から物資を補給しなければならないのだ。伯爵の機嫌を損ねて、商会に変な圧力を掛けられたりすればそれだけで亮真達は干上がってしまうことになる。
「……確かに……それはありえやすね」
「だねぇ……貴族ってのはプライドだけは高いからね」

誰もが厳翁の言葉に納得させられる。
「まぁ、一度会ってどういう人間か見てみるのが一番だろう？　敵になるにしろ味方にするにしろ……な」
亮真の言葉に全員が頷く。
貴族や王族が信用に値しない事は身を持って体験した。だが全ての貴族を信用しない訳にもいかない。
結局は自分の眼で見て確かめるしかないということだ。信に値するかどうかを……

ーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

「主殿……何かワシにお話でも？」
話し合いが終わって部屋を出て行ったはずの厳翁が一人、再び部屋へと戻ってきた。
亮真の視線を感じてのことである。
「あぁ……ちょっと聞いておきたいことがあってな」
亮真は音も無く部屋の扉を開けた厳翁に対して驚きの顔一つ浮かべない。
（ふむ、ワシの気配を感じたのか？……ワシの腕も鈍ったかのぅ……イヤ、この男の実力か）
若い時分には幾多の修羅場を潜り抜けてきた厳翁である。長老衆の一員となり現場仕事からは離れたが、その腕前はいまだ一族屈指。
（やはり……この男こそ初代様達が求めた……）

厳翁の視線が亮真を貫く。

「どうかしたか？　厳翁」

亮真は厳翁の視線に篭る熱い思いを敏感に感じ取ったのだろう。部屋の入り口から黙ったまま立ち尽くす厳翁へ訝しげな表情を向けた。

「いえ、失礼いたしました……して？何か御用でしょうか？」

厳翁は恭しく頭を下げると、亮真の対面に腰を下ろした。

「なぁに……厳翁にちょっと頼みごとがね……ただそれを頼む前に聞いておきたいことがあって、こうして席を改めたんだわ」

「判りました……なんでもおっしゃってください」

こうして、一度解散した後に呼び出したのだ。ボルツやリオネには聞かせたくない話と言う事なのだろう。

（恐らく……ワシと咲夜に関してのか……信用はしても信頼は仕切れない……そんなところか）

厳翁は、亮真の心を素早く察した。何しろ最初の出会いは彼を暗殺しに行った時だ。

自分を暗殺に来た暗殺者を殺すことなく使っている。それは御子柴亮真と言う人間の度量の大きさを示していた。だが、同時に彼は厳翁や咲夜に対して何処か一歩引いたところから見ている。

彼は厳翁や咲夜を信頼しきれていないのだ。

（いや……それも当然の事……何しろワシもこの方に全てを打ち明けてはおらんからな……）

厳翁は心の中で呟いた。
お互いがお互いを信頼しきれない関係。だからと言って疑っているという訳でもない。現状は様子見しているというのが正確な表現だろう。
それが今、亮真からのアプローチに因って大きく変わるかもしれない。
（ここで全てを話すか？……いや……まだ早い……今いきなり一族の未来をこの方に託す事は出来ん）
一族の未来が掛る選択。
厳翁が慎重になるのも当然と言えた。

「なに、聞きたいのは一つだけさ厳翁……なぜ俺に付いてきた？」

厳翁の心の内を読んだのだろうか。亮真が鋭く切り込んできた。
その問いは厳翁が心に秘めて来た物。
彼は、亮真の問いに沈黙で返した。

「今はまだ言えない……か？」

亮真の視線を正面から受け止める厳翁。
（嘘は付きたくない……）
この思いが、厳翁の口を重くする。
嘘ならいくらでも言える。だが、それでは真の信頼など得られるはずもない。
彼が選択出来るのは、否定も肯定もしない沈黙のみ。
長い沈黙の後、亮真は諦めたかのように肩を竦めた。

「良いだろう……何か言えない理由が有るってことだろうからな。

無理には聞かないよ」

亮真の言葉を聞き、厳翁の顔に驚きが広がる。

「宜しいので？」

「良くはないさ……だがアンタに悪意が有るとは思ってない。まぁ色々と隠し事が有るみたいだけど、それは何れ時期をみる事にするよ」

厳翁が何かの目的を持って亮真に仕えている事は、亮真自身が一番強く感じていた事だ。

無論それは悪意が有っての事ではない。

もし僅かでもそんな気配を感じれていれば、亮真は容赦なく厳翁と咲夜を始末していた。例えそれが日本人の血を受け継いだ人間でも。

（まぁ良いさ……何れ時期が来れば向こうから話すだろよ……まずは例の件を処理してしまわないとな）　亮真はそう頭を切り替えた。

なにしろ彼は今、少しでも使える手駒が必要なのだ。

「ところで厳翁……あんたの一族に仕事を頼みたいんだけど雇えるか？」

「それは……無論」

亮真の言葉を聞き厳翁の心が冷静さを取り戻す。それと同時に、冷徹な彼の頭脳が亮真の依頼内容を推察し始める。

（ワシの一族を雇いたい……ワシと咲夜を動かしたくないということか？……ならどのような仕事であれイピロス周辺の仕事ではあるまい……まさか！ルピスの暗殺？）

亮真の性格を考え合わせれば一番可能性が高いと言える。彼は恩を忘れない半面、決して仇も忘れない。

その事は短い付き合いである厳翁にも十分に理解出来ている。

ウォルテニア半島などと言う辺境を無理に与えたルピスの悪意を考えれば、亮真が暗殺という報復手段を取っても不思議とはいえない。

だが、厳翁はその答えを自ら否定する。

（いや……それは有るまい……今そんな事をしても利は薄い……）

王都に居る間で有ればまだ選択肢の中に入っていた。だが彼らは既に半島を目前にしているのだ。此処まで来てしまっているのに、態々ルピスを殺す意味は無い。

（今ルピスを殺せば王国内は再び混乱の渦に巻き込まれる……自らの拠点すらないこの状況で選択するのは余りに無謀……だとすれば？）

半島を領地として開発するには何年もの時間が掛る。いま国内を混乱させてしまえば、領地開発を行う時間を失うことになる。

そんな選択を利に聡い亮真がするとも思えなかった。

「始末してほしい人間の名はウォルス……ウォルス・ハイネケル。港町フルザードのギルドマスターだ」

亮真の口から洩れた名前に厳翁は首を傾げる。

無論その人間の名は厳翁も聞いていた。何しろ自分の主を陥れた人間の名前だ。仲間達との会話の中でも幾度となく出て来た名前。

だが、全てはケリが付いたはずだ。

「不思議そうな顔をしているな？　理由が判らないか？」

亮真の問いに厳翁は素直に頷く。

「はい……ルピスの尽力で主殿の潔白は証明されたはず……いまさらそやつを始末することにどういう意味が？」

単純な復讐心からなのだろうか？もしそうなら厳翁は亮真の事を見損なっただろう。

今は少しでも金が必要な時期なのだ。個人の復讐心を満足させるために金を出すような人間には未来など無い。

そんな人間に一族の未来など託せるはずもない。

だが、厳翁の不安はただの杞憂に過ぎない。

「確かにルピスの力で俺やリオネ達は潔白を証明できた。だがそれは同時にルピスの力で再び罪を着せられかねないということだろ？……ウォルスは一度俺達を嵌めた。嵌められた俺達があいつを恨むのは当然だが、其れをあいつも理解している……となれば、あいつにとっても俺達は邪魔者なのさ。何時ルピスと手を組んでこちらに仕掛けてくるとも限らんからな」

亮真の言葉を聞き、厳翁もその可能性に気がつかされた。

ローゼリア王国の国王とギルドマスター。確かに、手を組まれれば厄介な事になる。

「芽吹く前に摘むという事ですな」

亮真は無言で頷いた。

「判りました……一族の者から手練を派遣いたします」

「助かる……厳翁や咲夜に頼もうかとも思ったんだが、場所が遠いしな」

イピロスからフルザードまで往復で1月半ほど、暗殺の準備期間を入れれば2ヶ月は欲しい。
目の前の問題が最優先である以上、そんな時間は無かった。

「それで報酬だが……どれくらい掛かる？」

「いえ、お金は結構です」

「……本気か？　……いや……何か条件が有るのか？」

ギルドマスターと言えばかなりの大物。１０万や２０万では済まないはずなのだ。それを代金はいらないという。何かお金では無い別の条件が付くのは当然と言える。

「はい……一つお願いが……」

「いいぜ？　言ってみな」

この日、亮真と厳翁の間にどんな密約がされたのか。
それは、天に輝く月だけが知っている事だった。

第3章第3話

西方大陸暦２８１２年８月７日【半島へ】其の３：

一台の馬車が、伯爵邸の玄関口に横付けされた。
陽はすっかりと落ち、辺りは蝋燭の火に因って照らされるのみ。
黒塗りの２頭立ての馬車は、外見は武骨で飾りも最小限にとどめられている。とても貴族が使うような代物ではなかった。
尤もそんなことを馬車の主は気にも留めない。
信頼する姉妹が、貴族としてメンツに関わるとあまりにも五月蠅い為に、急きょ街で調達した物なのだから。

馬車から地面へと降り立った亮真を、玄関口で整列する使用人達が一斉に頭を下げて出迎えた。

「「「ようこそおいで下さいました。御子柴男爵様」」」

流石に伯爵家に仕える使用人達。一部の隙もない挙動で客である亮真を迎える。そして彼らの言葉を待っていたかのように、二人の人物が屋敷の扉から姿を現した。

「良くおいで下された！　歓迎いたしますぞ。御子柴男爵殿」

そう言って大仰に腕を振り上げ歓迎の意を示す男は、この城砦都市イピロスの支配者であるザルツベルグ伯爵。
身長は１８０程。年齢は３０代後半だろうか？
中年にさしかかり、やや腹が前へと迫り出してはいるが、国境付近に領地が有るせいか、立ち居振舞いから武人としても一廉（ひとかど）の人間

であることが見て取れる。
（ローゼリア王国建国当時から続く名門と聞いていたが……単なる貴族（バカ）じゃないか……でも何でコイツこんなに丁寧なんだ？　……逆に気持ちが悪いくらいだ……）
亮真は、あまりに丁重な出迎えを受け逆に不安になる。
爵位の上から言えば、彼の持つ伯爵位は男爵位の二つ上となる。
亮真は、其の生粋の貴族が先日までただの流れ者であった初対面の自分に対して、もろ手を挙げて歓迎する様に不自然さを感じたのだ。
彼は、軽く気を引き締めた。何しろ、ルピスの心情を読み間違ったばかりである。警戒心が生まれるのも当然と言えた。
とはいっても、其れを面（おもて）に出す訳には行かない。

亮真は満面の笑みを浮かべると、ローラ達から教わった貴族の礼儀作法に従って恭しく頭を下げた。

「本日は突然の訪問を快くお許し下さり恐悦の極み。若輩者ではございますが、今後ともよろしくお引き立て賜りたいと存じますザルツベルグ伯爵様」

今日、彼が着ている服装は決して華美ではない。
奴隷商人のアゾスを殺して奪った金はまだ十分に残ってはいるが、貰った領地が領地だ。金はいくらあっても足りはしない。だが、貴族にはメンツが有る。流石にいつもの様な黒の麻シャツとズボンというわけにもいかない。
そんな訳で、今日の彼は黒い絹のシャツにズボンを履き、ベルトは金のバックルという少し上等な格好だった。
屋外に出るときはこの上マントを羽織る。しかしそれは貴族として最低限の服装。
貴族として保つべき最低限のメンツを守ったに過ぎない。

そんな彼の目の前にいるザルツベルグ伯爵は彼とは対照的だった。生まれながらの貴族と言うのに相応しいだけの、様々な宝石達を身につけて自らの権威を表す。

それらの輝きは下品ではなく、彼の風采を品よく彩る。シャツのボタンに使われているのは形の良い真珠。胸を飾るブローチも非常に精巧な花を象った一品だった。

尤も華やかさで言えば、彼の隣で佇む奥方は更に凄まじい。

歳は３０に手が掛るかどうかと言ったところか。

全身を包むのは胸を大きく開いた斬新なデザインの絹のドレス。純白に染められた其のドレスが金色に輝く髪と良く調和している。頭には小さな白銀の冠を付け、手には大粒のルビーやサファイアの指輪をはめていた。

まさに歩く宝石といえる。

現代人の感覚からすると、彼女の姿は装飾品のつけすぎの様に感じられる。

だが目の前で微笑む彼女には貴族としての気品が漂い、宝石達と絶妙なバランスで美を保っていた。

（派手だが下品では無いな……これが貴族の品格ってやつかねぇ？）

亮真は目の前で微笑む二人をそう評価した。

「良くおいで下さりました。王都よりの長旅はさぞ大変だった事でしょう。今夜は我が家でゆっくりとおくつろぎください。ねぇ？貴方」

夫人の言葉にザルツベルグ伯爵も大きく頷いて賛同する。

「妻の言葉どおり、本日は長旅の疲れを癒してください。何しろウォルテニア半島の中に入ってしまえばもう町も村も在りはしませんからな……今後領地が発展するまではイピロスから物資を運びこまねばなりますまい。これも領地が隣り合ったご縁！　末永くお付き

合いください」

「はぁ……それではお言葉に甘えまして……今後も宜しくご指導ください」

亮真は素直に伯爵へと頭を下げる。

（ふん……こっちの目的は読まれたか……口では物資の購入に協力的のようだが……まずはこいつらの腹の内を知ることが先か……）

亮真の眼が鋭く光った。

亮真は伯爵に伴われ食卓へと導かれる。

「さぁ今宵は御子柴男爵を歓迎するために、料理長には格別に腕を振るうよう命じました。此処は王都と違い僻地ゆえ大した産物もござらぬが量だけはございますので、存分にご賞味ください」

ザルツベルグ伯爵の声と共に、広間の扉が開け放たれるとメイド達が台車に料理を載せて入ってきた。

「これはまた……」

目の前の食卓に並べられた料理を見て亮真が絶句したのも当然だろう。

豚一頭を丸ごと焼いた物を中心に、鳥、牛、魚をメインに揃え、サラダも海藻に野菜とバリエーションに溢れたものだ。砕かれた氷が盛りつけられた金の器では季節の果物が冷やされている。

２０人以上は余裕で腰かけられる食卓の上には、とても３人では食べ切れるはずもない程の料理が所狭しと置かれているのだ。

「いや……お恥ずかしい。王都から来られた方には馴染みが無いのかもしれませんが、我が領地では賓客を迎える際には食べきれないほどの料理で歓待するのが習わしです……まぁ田舎の風習と思いになってお付き合いください」

そういうとザルツベルグ伯爵は髪を撫で上げて嗤った。

「いえ……私の様な成り上がり者にこのような宴を……ザルツベルグ伯爵様……感謝いたします」

「ハッハッハ！　成り上がりとはまたご謙遜が過ぎますな。御子柴殿は先の内乱で大変な功績を立てられた。女王のご信頼も篤いと聞く……其れがしなど先の内乱では、ザルーダの侵攻を警戒してこの地より一歩も動けませんでしたからなぁ」

伯爵の自虐の言葉に亮真は愛想笑いで答えた。

「アナタ？　お話はもうそれくらいにしてくださいな。お客様に冷えた料理を食べて頂く気？」

伯爵の妻であるユリアが、夫をたしなめる。

「おぉ！　これは失礼いたした……オイ！　御子柴男爵殿のグラスにお注ぎしろ」

伯爵の言葉で、亮真の前に揃えられたグラスへ深紅のワインが注がれた。

「では……御子柴殿と当家の繁栄を祝って！　乾杯！」

伯爵の掛け声と共に、亮真はグラスをあおる。
彼の口に豊潤なブドウの香りが広がる。そして少し香辛料の様な刺激的な風味がアクセントをつける。二度三度と口の中でワインを噛むと、深いコクと味わいが全身へ広がっていく。
そして最後に喉を滑り落ちる感覚。まるで上質の絹のような滑らかさだ。
（上質……それも最高級のワインだな……）
高校生である亮真は本来なら酒の味など判るはずがない。しかし奔放な祖父の影で日本に居た時から酒を嗜んできたし、大地世界（アース）に召喚されてからは日常的に飲んできている。
その彼から見て、今回伯爵が提供したワインは最上級の物と言える。
ピレウスの城に滞在している間は高級な酒を提供されてきたのだが、それと比べても確実に一段上の品質だ。
（料理と言い酒と言い……どういうつもりだ、コイツ……いやそれ以前になぜこれだけの事が出来る？　税だけでこれ程の物が出来るのか？）
料理にしてもそうだ。
吟味された素材。惜しげもなく使われている香辛料の数々。
いくら歓迎しているとはいえ、成り上がり者の男爵をもてなすにしては度が過ぎている。

（ひょっとして……これがこいつらの普通なのか……だとしたら……？）
伯爵夫妻の服装を見ても、豪華で金の掛った物である事は一目瞭然だ。
亮真を歓迎する為に無理をしたのではなく、単純に彼らの生活水準が高いとしたら？
（無理……だな。税だけじゃこれだけ豪華な生活は維持できない……となれば……）

断定は出来ない。まだ情報が少なすぎるのだから。だが亮真の想像通りだとしたならば……

（みんなの報告を聞いてからだな）

「おぉ。あまり食が進まないようだが、男爵殿のお口に合いませんかな？」

ワインを飲み干した後、黙って座り続けたままの亮真へ伯爵が声を掛けて来た。

「きっと長旅でお疲れなのよアナタ。肉料理は脂がきついのではないかしら？……アンヌ。男爵様へ冷えた果実をお出しして頂戴。きっとこれならば男爵様も気に入ってくださいますわ」

夫人の言葉に従って、メイドの一人が亮真の前へ金の器に盛られた果実を運んでくる。

「すみません。お気づかい頂いて」

そういうと亮真は、器から良く冷えたオレンジを一つ掴むと口へ運んだ。

実際は考え事をしていただけなのだが、伯爵の誤解を態々訂正する必要はない。

「やはりお疲れのようですな？……御子柴殿は一流の武人とお聞きしたが……まぁ王都からイピロスまでは馬でも半月は掛る……致し方ないことですかな？」

「アナタ！それは男爵様に失礼よ……きっと、突然貴族に叙せられ

て気疲れなされたんだわ……ねぇ男爵様」

ユリアの言葉は亮真への気遣いで満ち溢れている。

「えぇ……何しろ突然の事でしたから……私は平民出ですし、領地など頂いても正直にいってどうしたものかと困っていると言ったところですか……」

そう言って亮真は、自分の皿に盛られた牛肉を一切れ口へ運ぶ。

「そうですか……まぁ御子柴殿は才知に優れたお方と聞いております。私も出来る限りの助力は惜しまぬつもりです。領地が隣同士なのも何かの縁。今後はお互い助け合っていきましょう……おや？何か料理に不備がございましたかな？」

肉をじっくりと噛み締める亮真の顔を不審そうに見ながら、伯爵が声を掛ける。

「いぇ……思った以上に塩が効いていまして……ふんだんに使われた香辛料と言い、塩と言い、王都で出された薄味の食事とは対照的だったので」

香辛料と同じく、塩もこの世界では貴重なものだった。

何しろ塩は生活の基本でありながら、塩田を作るか岩塩を掘り出すかの2通りしか得る為の手段が無い。

海に面した領地を持っていれば塩には困らないだろうが、ザルツベルグ伯爵の領地内で海に面した土地は無いはずである。

となれば岩塩を掘り出したか、他の土地から輸送してきたかのどちらかになる。

「ハッハッハッ。いや、王都の薄味に慣れた方は確かに驚かれるかもしれませぬな」

亮真はここで大きく伯爵へ切り込んでいく。

目的はもちろん、揺さぶりだ。

「伯爵の領地に海に接した場所はなかったはず……岩塩の鉱脈でもお持ちなのですか？」

「いや、実「えぇその通りですわ……近年、大きな岩塩の鉱脈が見つかって」」

亮真の問いに伯爵は笑顔で答えようとしたが、夫人がそれを遮った。

「ほう。それはうらやましい。」

亮真は夫人の言葉をそのまま笑顔で受け入れる。

別にこの場で伯爵を追及する必要はないのだ。

（塩か……これも調べてみる価値が有りそうだな……）

亮真は、塩と胡椒の聞いた牛肉を飲み込んだ。

この後、会食は何事もなく終わり、伯爵と亮真は大いに話を弾ませ親交を深めた。

伯爵は秘蔵のワインを空け、夫人も会話の中に混じる。

彼らは、貴族の驕りを全く表には出さず、終始亮真を歓待した。

そして、伯爵が是非にと引きとめ、亮真は伯爵邸に泊まることになった。

メイドに案内された部屋に入り亮真はため息を漏らす。
家具はどれも職人が丹精込めた一品。カーテンもシーツも当然のように絹（シルク）。芸術に疎い亮真から見ても何やら風格漂う絵画や花瓶。
一流ホテルのスイートルームにも匹敵するような豪華な装いの部屋である。

（これ一個くらいパクッていくか？）
亮真はベッドにその巨体を放り出すと、枕元に置かれた花瓶を手にとって呟いた。
まさにこの部屋は宝の山。領地開発で金が必要な亮真にそんな思いが過った。
（相当の経済力を持っているという証拠か……事前に王都で調べた限りで大した産物も無いはずなんだが……？）
伯爵や夫人の態度もいまいち腑に落ちない。
上辺だけ見れば、親切で気さくな夫婦の様にしか見えないのだが、何やら裏の顔が有るように思えて仕方が無いのだ。

コンコン……

思考の海へ身を委ねていた亮真は、扉を叩く音で意識を現実へと引き戻された。

「男爵様……入っても宜しいでしょうか？」

掠れる様にか細い女の声がする。

「あぁ……何か用かい？　鍵は掛けてない」

「失礼……致します」

亮真の声に従い、扉が開かれメイドが部屋へと入ってきた。

「伯爵に言われたのかい？」

「あ……その……奥様に……男爵様の……」

入ってきたメイドの姿を見て、亮真は大体の察しが付いた。

メイドの肌を隠すのは白のベビードール。その下には扇情的なピンクのパンティとブラが透けて見える。

肩を震わせ、何かに必死で耐えるような彼女の表情を見れば男なら誰でもすぐに理解できた。

「必要ないって言ったら君は困るかい？」

亮真の言葉を聞いて彼女の表情に絶望の色が浮かんだ。

「あ！　あの……私……その……初めてですけど……その……男爵様に精一杯……その……私じゃダメ……ですか？」

余程きつく言い含められているのだろうか、彼女は懸命で食い下がる。

顔を真っ赤に染める彼女を見て誰がこのまま返せるだろう。

「良いよ……こっちに来な」

亮真は彼女を怖がらせないように、出来るだけ優しく声を掛けた。

無論、亮真とて女性経験が豊富にあるわけではない。

だがここで弱気なところを見せては、男の沽券に関わる。

差し出した手をメイドはおずおずと掴む。

「はい……」

か細い声でメイドが答えるのを聞き、亮真は彼女の体を自分の方へと引き寄せる。

枕元の蝋燭の灯が消え、辺りを闇が支配した。

第3章第4話

西方大陸暦２８１２年８月８日【半島へ】其の４：

「まったく……あれほど歓迎しなくてはいけなかったのかね？」

ザルツベルグ伯爵は紅茶を一口飲むと、対面に座る妻へ不満の言葉を漏らす。

朝食を共にして亮真を屋敷の玄関まで見送る時まで浮かべていた人の良さそうな笑顔は、既に伯爵の顔から消えていた。

今の彼の顔には、貴族の血に対する傲慢さと平民に対しての侮蔑しかない。

「そうねぇ……メイドも抱いたようだし、とりあえずはこちらの思惑通りといっていいんじゃないかしら？」

そう言って微笑む妻をザルツベルグ伯爵は苦々しげに睨み付ける。

「そもそも其れが気に入らん！　あの娘は私が眼をつけていたんだぞ？　それをあんな成り上がりに宛がうとは！」

狙っていたメイドの少女を、他人に宛がったのだから伯爵の不満も当然と言える。

「別にいいじゃないの？　メイドなんていくらでも居るんだし……どうせ１月もたたないうちに飽きて捨てることになるのよ？」

「それとこれとは話が別だ！　例え私が飽きて捨てたとしても他人

にくれてやるのは我慢ならん！　ましてや私も手を出してない少女だぞ？　……まったく！　あれはなかなかおらぬほどの女だったのだ！」

伯爵の怒りは収まりそうにも無い。

ユリアは内心呆れながらも、伯爵のなだめに回る。

（まったく……どうしてこの人はこう女癖が悪いのかしら……奴隷や玄人の女ならいくらでも用意してあげると言っているのに、素人の生娘にばかり手を出して……どうせ一二回抱けば飽きて奴隷商人に売り払うくせに……）

処女の素人娘にばかり執着する夫を見る眼が冷たくなる。

だが、それを面に出すわけにはいかない。

彼女の生活を守るためには、ザルツベルグ伯爵がどうしても必要なのだ。

さんざん愚痴と不満をぶちまけ、ザルツベルグ伯爵の鬱憤（うっぷん）も晴れたのだろう。

彼は大きく深呼吸をすると、ソファーに深く体を沈めた。

「まぁ良い……今さらあんな平民の食い残しなどに興味はない……だが、なぜ鉱山の事をアイツに告げる必要が有った？　興味を引いてしまうだけではないか？」

伯爵の色欲に濁った眼が鋭く光る。

彼は人間的に最低の人間ではあったが、支配者として、また指揮官として優秀な能力を持っている。

無論、そうでなければザルーダ王国の侵攻が危ぶまれる、この国境地帯の領地を維持する事は出来ない。

「そうねぇ……確かに必要と言う意味ではないわね……でもそれは

どちらでも同じ事よ……あの男は私達の話を鵜呑みにはしない……否定もしない代わりに、決して信じもしない。どちらにしろ塩に関して興味を持ったのなら自分で調べようとするはずよ。ならばあそこで隠しても意味ないじゃない？　正直に言えばそのまま調べるのを止めるかも？」

「フン……其処までのキレ者とは思えんがな……大体、なぜそんなことが分かる？　傭兵として雇われ、先の内乱で少しばかりの功績を挙げた成り上がりだぞ？　塩が何処から入ってきているかなどどう調べると言うのだ？　家臣と言ったって内乱時に行動を共にした薄汚い傭兵共をむりやり騎士に任命したと聞いている。そんな者達など戦にしか使い道はあるまい？」

ザルツベルグ伯爵の眼から見て、亮真は体格の良い若造にしか見えなかった。

妻の進言で、最上級のもてなしをしたが、内心では亮真の事を侮っている。

（あの体格……確かに武人としてはそれなりの物を持ってはいそうだが……あの顔。とても知恵者には見えん……）

人柄の良さや、穏やかさは見えたが、キレ者の雰囲気は全く見られなかった。

人当たりの良さは心の弱さを表すし、穏やかと言う事は覇気が無い事に等しい。

少なくともザルツベルグ伯爵の評価は、体格以外は全く話にならないという結論なのだ。

「確かに彼はあまり知恵が回るようには見えなかったわね。でもそんな訳ないのよ……絶対にね」

「チッ……確かに噂は入ってきているがねぇ……何処まで本当の事

なんだか。私が思うにエレナ・シュタイナーに取り入っただけではないのかね？」

妻の言葉が余程不満だったのか、伯爵は大きく舌打ちをすると、自分の空想を彼女へ披露する。

「あのエレナ様がそんなことするとは思えないわ……」

「フン……まぁそれはここで言っても仕方が無いか……それで？あの娘を宛がっただけの情報は得られたのだろうな？」

伯爵の言葉に首を振った妻の言葉に、伯爵は忌々しげに吐き捨てた。

「そんなにいきなり聞けるはずもないわ……昨夜は本当に抱かれただけ……後日、私の方から彼にあの娘を引き取ってくれるように頼むのよ。まぁ、あの娘の報告を聞いた限りでは御人好しみたいだし、断らないと思うわ」

ユリアは既に亮真に抱かせたメイドより、昨夜のやり取りに関して報告を受けている。

（まぁ女には甘いようだし……閨を共にすれば大抵の男は情報を漏らすものだしね……）

彼女は皮肉の含んだ視線を自らの夫に向ける。

「全く……あんな平民のご機嫌取りをする羽目になるとは……面倒くさいことだ……それもこれもあの馬鹿姫が原因か……」

「馬鹿姫じゃなくて馬鹿女王でしょ？　先日ローゼリアの新女王として戴冠されたんだから」

ルピスの評価に馬鹿が付く事は確定らしい。

新国王に対してあまりにも不敵な言葉であるが、それが夫妻の共通認識だった。

「今さら他人にウォルテニア半島を与えるとはな……我らの苦労も知らずに余計な事ばかりしてくれる！」

「もぉ愚痴はもういいわ……今は、あの男に余計な事をされないよう監視するしかないしね……」

憤りのおさまらない伯爵を夫人は軽く嗜めた。

どうやらこの夫婦は、夫人の方が実権を握っているようである。

「そうだな……そして最悪の時は……」

「決まっているでしょ？　半島の怪物（モンスター）が喜ぶだけよ」

夫人の言葉に伯爵は冷たい笑みを浮かべて頷いた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「若！　昨夜はお楽しみだったようで」

御者台に座る中年が亮真へ声を張り上げた。

【紅獅子】の傭兵達はボルツを見習ってか、亮真の事を若と呼ぶ。

ローゼリアの内乱を共に切り抜けて来た者同士、既に打ち解けた仲だ。

「あん？　マイクが何で知ってるんだい？」

イピロスの大通りを伯爵邸から宿屋に向かって走らせるだけだ。街中な事も有って、馬をゆったりとしか走らせられない所為か、余程暇と見える。

手綱を握るマイクが亮真へ話しかけたのは、伯爵邸を出てすぐだった。

「なぁに……使用人達が噂していたのをちょいと小耳にね！」

「ボルツに言われたのかい？」

「えぇ……伯爵邸に泊まる場合は使用人達と話をして、情報を引き出せと命じられてまして」

亮真の問いにマイクは髭を撫でつけながら答えた。

「流石ボルツだな……抜け目ない」

「全くで。姐さんは戦には長けた方ですが、搦め手は余り強くねぇ……其処をボルツの旦那が上手くフォローしてきたって訳で！」

マイクはリオネの率いる傭兵団【紅獅子】の中でも中堅クラスの傭兵だ。

大抵の仕事をそつなくこなす器用さを持っている。

今回、伯爵邸を訪ねる事になった亮真の、護衛兼御者を任されながら、諜報の仕事も与えられていたらしい。

「まさか本当に旦那の御言葉通り、伯爵邸に泊まることになるとは

思いませんでしたがねぇ……」

「まぁな……俺も気持ちが悪くなるほどの好待遇だったよ……」

「アッシの方もで……流石に女は付きませんでしたがね。酒も料理も使用人に出されるような物じゃない……寝室も綺麗なもんでさぁ」

「そっちもか……」

「へぇ……正直言って気味が悪いくらいで」

マイクの言葉に亮真は軽く頷き返すと、目を閉じて考え込んだ。誰もが同じ事を感じていた。

「何であそこまでしたんだと思う？」

黙り込んでいた亮真が、マイクへ疑問を投げかけた。

「まぁ、あっしは若やボルツの旦那ほどの頭は持ってませんから……」

そう一言挟むと、マイクは自分の感じた通りの事を口にする。

「単純に若に何か頼みたい事が有るか、さもなきゃ気分よくこの地から追い出したいかのじゃないかと」

「出ていってほしいが、敵対はしたくないってことか……あり得るな」

その場合、裏で糸を引いているのはルピスの可能性が強くなる。
ルピスにとって、半島に亮真達が入りまでは不安で仕方がないだろう。
ウォルテニア半島へ亮真達が入るのをザルツベルグ伯爵へ見届けるように命令したという事は十分に考えられた。
（どちらにしろ、俺が取れる選択肢は少ない……か。ダメだ……まずは情報だな。ボルツや厳翁の成果を聞いてからじゃないと判断がつかないか……）

「御者に対してまであれだけのもてなしをするというのは……」

「裏が有るってことか……」

「へい……恐らく」

亮真の言葉にマイクは慎重に頷く。

「ところでマイク！　ローラ達には昨夜の事を黙っていてくれよ？」

亮真は話題を切り替えた。伯爵達の真意がわからない以上、今この場で出来る事をするべきなのだ。そして今一番大切な事がマイクへの口止め……

亮真の言葉を聞いて、強張った表情を崩さなかったマイクが笑みを浮かべた。

「まぁそうでしょうねぇ……若が昨夜お楽しみだったと聞けば……おぉ怖！　お嬢達が怒り狂いやすぜ？」

文明が未発達なこの大地（アース）世界において、性行為は数少ない娯楽の一つである。
無論、亮真も傭兵達に連れられて幾度か歓楽街へと繰り出していた。

「オイ！　本当にやめてくれよ？　あいつらなんでだか知らないけど本当に怒るんだからさ！」

マイクの言葉に亮真は思わず声を荒らげた。

「まぁ仕方が無いんじゃないですかね？　大体、若だってお嬢達の気持はお気づきでしょ？」

自分の息子と言っても不思議ではない亮真へ、マイクが年長者として言葉を掛ける。

「まぁ……な……」

亮真は歯切れの悪い返事を返した。
マイクに言われるまでもない。姉妹の気持ちを亮真は十分に理解している。

「ならお分かりでしょう？　お嬢達は若に抱かれたいんですぜ？それをあの二人は心底望んでいやす」

奴隷商人から二人と助け出したのは、亮真がこの世界に召喚されて直ぐの事。それから既に8カ月以上が経つ。
その間ずっと彼ら3人は共に行動してきたのだ。男女の感情が生まれても不思議ではない。
亮真自身も、彼女達を女として意識している。

「そんなことは判っているんだけどな……」

「裏大地（リアース）世界への思いが断ち切れやせんか？」

亮真の境遇に関しては、既に紅獅子の傭兵達へも説明している。
厳翁を仲間にした際に話題になった、日の本の民という言葉に関して問い詰められたからだ。

「まぁな……頭では判っているけどな……踏ん切りがつかないというか……」

マイクの言葉に珍しく亮真は言葉を濁した。
彼の合理的な頭脳は既にこの世界に残らざるを得ない事を理解していた。だが、心はそう簡単には割り切れない。彼の友人も家族も、日本に残してきているのだ。
自分に悪意を持つ敵へは微塵も容赦しない苛烈な性格の亮真だが、彼も人間。悩むのも当然と言える。
（あいつらを抱くには……覚悟がいる……この世界に残り、そしてあいつらを……）
商売女なら、さほど気にする必要はない。全ては金が解決してくれた。
だが、マルフィスト姉妹は亮真に対して、打算の無い愛情を示している。
そんな女を抱いて、自分ひとり日本に帰れるだろうか？
いいや、亮真はそれほどに薄情な男ではなかった。

「まぁ……若はアッシらを騎士にして、半島の領地化を選んだんですから、既に決断は出来てるんでしょ」

「あぁ……みんなを巻き込んでおいて、俺だけ帰るなんて出来ないさ……」

運命の歯車は回りだしている。此処で、亮真が地球にもし帰れば残されたリオネ達がどうなるか？

（例え帰る手段があっても……俺は……）

既に結論は出ていた。そして、亮真自身の覚悟も……

「まぁ、昨夜の事に関しては、お嬢達に黙っておきやすよ……その代わり！　今度、奢って下さいよ？」

マイクはそういうと、髭ヅラの顔を歪めて笑った。

「あぁ……好きなだけ飲ませてやるよ！」

マイクが話題を変えたのは、亮真を思いやっての事。

其の気遣いが、亮真の心を暖かくする。

（全ては俺次第……か……）

第3章第5話

西方大陸暦２８１２年８月８日【半島へ】其の５：

「お帰りなさいませ……ボルツの予想通り、昨夜は伯爵邸に泊まられましたか」

「あぁ……なかなか手厚い歓迎だっだぜ？」

宿屋の玄関口まで迎え出た厳翁が、亮真の外套（マント）を受け取ると、恭しく畳んで手に持った。

「ほう……それはそれは。さぞかし後ろ暗い事があるようですなぁ」

厳翁は亮真の言葉を軽く受け流す。

いつもと変わらない声の調子。其れが何を意味しているのか……

亮真は直ぐに察しがついた。

「あぁ……裏で何をやっているかわかったモノじゃないな……厳翁……お前ぜんぜん驚いてないな？……そっちも収穫有りってところか？」

「えぇ……ですがそれは後で。皆も主殿の部屋で待機しております」

厳翁の言葉に亮真は肩を竦めた。

「全く……つくづく優秀な連中だな……もう調べがついたって言うのか……ならさっさと行きますかね」

伯爵邸から帰ってきて自分の部屋で息をつく暇もない。
（全く慌しいこった……だが、まぁしょうがないか……なんだか嫌な予感がするしな……）
伯爵の裏を調べなければ、自分の命に関わるかもしれない。そんな思いが、亮真の心を過ぎった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「それじゃぁ坊やも戻ってきたし、サッサと始めるとするかねぇ……先ずはアタイの報告から」

亮真が椅子に座ると、リオネは待っていましたとばかりに、束ねた羊皮紙を全員へ配る。

「姐さん……？　コイツは」

「アタイがここ数日で面接した傭兵共の一覧だよ！」

疑問の声を上げたボルツに、リオネは胸を張って答えた。

「これ全部ですかい……」

ボルツが驚きの声を上げたのは無理もない。Ａ４用紙程の大きさに、傭兵の名前やランク、リオネが面接した際の印象と実にこと細かく記載されている。
羊皮紙には、表に二人分の記載がされており、どうやら裏面にもあるらしい。其れが、十枚以上。
実に５０人近い傭兵の履歴が書かれていることになる。

彼女は傭兵団【紅獅子】の団員と言う名目で、傭兵達へ募集を掛けたようだ。

「こいつはまた……名前やランクだけじゃない……出身や依頼（クエスト）の達成率……得意な武器や法術に関してまで……しかも、リオネさんの印象も細かく書かれているのか……良くこれだけの事を数日で……」

亮真は、羊皮紙にびっしりと書き込まれたリオネのコメントに眼を奪われる。

単純な第一印象から始まって、喋り方や眼の配り方。其の人間の挙動から、事細かな追記がなされていた。

「少しでも腕の立つ奴が欲しい所だけどねぇ……信頼できない奴を入れて寝首を掛かれたんじゃぁ……ね。それに協調性がない奴もダメだしねぇ……５０人ほど面接して、雇えそうなのは１０人チョイと言う所かねぇ……名前を赤丸で囲っているのが、雇用を考えている奴等だよ」

成る程、リオネの言葉通り名前を赤丸で囲われた傭兵がいる。

「？　……名前を赤丸で囲ったのは判ったけど……この赤で横線を引かれている奴は？」

亮真が羊皮紙にザッと眼を通したところ、そのまま何も書かれていない者、名前を赤く囲まれている者の他に、３人ほど名前に横線を入れてあるものが有る。

赤丸が雇う積りの傭兵で、何も書かれていないが採用しない傭兵なら、横線を入れられた傭兵は一体何を意味するのだろう？

「あぁ……問題はそいつらさ……」

リオネが言葉を濁す。

「なんだい？　何か問題でもあるのか？」

「黒狼のヨハン……赤土のセレス……それに……遠矢のリウイですか……どいつも一流どころでヤスね」

亮真の問いを遮ると、ボルツが羊皮紙に書かれた名前を一つ一つ確認しながら読み上げる。

「有名なのですか？」

「えぇ……傭兵でこいつらの二つ名を知らないのは、昨日今日登録した駆け出しだけでさぁ」

「腕の立つ方々なのですね……？」

「えぇ。ですがこいつらは一匹狼の傭兵でさぁ……戦場に出るときも周囲を無視して、単独で前線へ突っ込む奴らでして……」

ローラの問いにボルツは顔を顰めながら答えた。

「なるほど……ね。リオネさんが気にしてるわけが判ったよ」

「確かに……あまりにも不可解ですな」

亮真と厳翁がお互いに頷きあう。

「あぁ……腕は3人とも一流だ。一騎打ちならアタイでもかなり危

ないくらいね……ただ、どいつも自分の腕前が一番だと信じ込んでいる奴等でね……とても傭兵団に入ろうなんて考えるような奴等じゃない……しかも3人とも金にはトコトン固執するタイプだ……汚い仕事だろうと報酬さえもらえれば躊躇しない。アタイは正直に言って何か裏があるようにしか思えないのさ」

「探りを入れに来た……って所かな？」

亮真の言葉にリオネが無言で頷く。

「う～ん……裏で糸を引いているとすれば、ルピスかザルツベルグ伯爵ってところか……」

「いや。素直に考えればその二つが最有力ですが、他国に雇われた可能性も考えられますぞ？」

厳翁が別の可能性を示す。

確かに、ウォルテニア半島が国境近くに存在することを考えれば、ローゼリア王国侵攻を企む他国が間者（スパイ）を放ってくる事も十分に考えられた。

「他国ねぇ……となると今の情報だけで絞り込むのは無理か……」

今の段階で判っている事は、面接した三人が怪しいと言うだけの事。

極端な話、気まぐれで傭兵団に入ろうとしている可能性だってあり得るのだ。

「とりあえず、回答は後日って事にしているけど……やっぱり断っちまった方がいいかねぇ？」

リオネの言葉は最も危険の少ない意見だ。彼女自身も、判断に迷っているのだろう。

だが、厳翁は彼女の言葉に首を振った。

「イヤそれは得策とは言えますまい……もし何者かの思惑が有った場合、ここで断ってしまえば、また別の人間が送り込まれてくるだけの事。次回もリオネ殿が気付けばよろしいが、それが出来ない可能性もございます。ここは知らん顔をして3名を採用し、行動を監視した方がよろしいかと」

「そうだなぁ……それが一番良いか……だが監視っていっても誰がやる？　紅獅子のみんなには話せないぞ？厳翁と咲夜には別に頼みたい仕事が有るしな」

亮真はそう言って腕を組んで唸る。

（紅獅子のみんなに理由を話して監視するか？　いや、それじゃぁあまりにも露骨だ……この3人が監視されていると感じ取ってしまうだろうしなぁ）

問題点はハッキリとしている。手が足りていないのだ。人数が少ない上に、やるべき仕事は山積みな状態。

亮真としても頭の痛いところだ。

「ならば……ワシの一族から幾人か呼び寄せませんか？」

「厳翁のか？」

「はい。今、主殿に必要なのは手駒……それも信用できる者達。我が一族ならば必ずやご期待に沿えるかと」

「報酬は……前回と同じでいいのか？」

「結構でございます」

亮真の問いに、厳翁は恭しく頭を下げた。

「判った……リオネさん。厳翁の一族を何人か傭兵団に入れてくれ。彼らに内部の監視をしてもらう。それでいいかな？」

「あいよ！　経歴はアタイの方で上手く誤魔化しておくよ」

リオネが大きく頷く。

「なら、傭兵の雇用に関してはいったん終わる。今後、また問題が有ったら報告してくれ……次はボルツ。半島の情報はどの程度集まった？」

亮真は、ボルツに問いかけた。

「そうでヤスねぇ……若のご命令通り、ギルドに保管されていた情報に目を通しました。ただ、半島の地形や現状に関して言えば、事前に調べた内容とさほど違いは有りやせん。怪物（モンスター）と亜人の巣窟ってところでヤスね」

「巣窟ねぇ……」

亮真は深いため息をつく。

「へい。河や湖に関しての情報はまだでヤスが、生息している怪物（モンスター）に関しては詳細な情報が有りやしたので、それをご覧いただければ

判りヤスがかなり高位の怪物（モンスター）ばかりでして、一般人じゃぁ、とても暮して行けやしません……怪物（モンスター）の餌になるのが落ちでさぁ」

そう言うと、ボルツも用意してきた羊皮紙を広げる。

「何だいこりゃ……最低でもEランク……殆どD以上に分類されるヤツばかりじゃないか！」

リオネは羊皮紙に記された怪物（モンスター）の名を見た途端、悲鳴を上げた。

それも当然だろう。そう滅多に出会うことの無い、高位の怪物（モンスター）の名前がビッシリと書き込まれているのだから。

怪物（モンスター）達はギルドに因って、最上級でSランクを筆頭にA⇒B⇒C⇒D⇒E⇒F⇒G⇒H⇒Iと10段階にランク分けされていた。そして、これは傭兵達の力量を示すギルドランクと連動している。

個人の力量が、必ずしもギルドランクと一致しているわけではないが、大まかな指標にはなるのだ。それで判断すると、ウォルテニア半島に生息する怪物（モンスター）達はE以上。これは、人間に害を与えていない怪物（モンスター）のランクとしては最上級となる。

Cから上のランクに分類されるのは、村や町を襲ったり、交通の要衝に巣を構えて旅人を餌にしたりと言った、人的被害が出ているモノだけなのだ。そういう被害がでて初めて、Cランクと言った分類をされるのだ。つまり、種族として分類されるランクの最高位はDまでと言うことになる。

「最低でもEって事は……法術が使えなければどうしようもないってことだねぇ……」

「そうなりヤスね……確かに歴代の王がこの地の放置してきたのも頷けヤス。これじゃぁ民を連れてきても町の守備に維持費がかかり

すぎヤスから……騎士か法術が使える傭兵でなければ守ることすら出来やせんからね……その上、直ぐに利益が見込めないとなれば……」

歴戦の傭兵であるリオネやボルツは、怪物（モンスター）との実戦経験も豊富だ。だからこそ、この場に居る誰よりも正確に、半島の困難さを理解できた。

人間と怪物（モンスター）との間には、分厚い身体能力と言う名の壁が有る。筋力、反射神経、持久力。どれをとっても人間は怪物（モンスター）と呼ばれる生命体に対して著しく劣っていた。

生命体として人間は圧倒的に劣った存在なのだ。

傭兵や冒険者は修練によって技を習得し、その差を埋めていくわけだが、身体的なスペックの差は埋めようもない。何処かで必ず乗り越えられない壁にぶつかる事になる。

だが、人間は一つの技術を生み出すことで、その壁を乗り越えた。その技術こそが法術と呼ばれる戦闘技術。弱者である人間が、強靭な生命力を誇る怪物（モンスター）に対抗する為に生み出した技術。

だが、今の大地（アース）世界では、人と人が争う為の手段に成り下がっている。術が使えるか使えないかが明確な身分の壁となってしまっているのだ。支配者である王が、領地開発の為とはいえ、民に法術の習得を勧めるはずもない。

結果的に、ウォルテニア半島は見捨てられて来たという事なのだろう。

「法術……ねぇ」

亮真も、既に知識としては持っている。地球に帰る為にマルフィスト姉妹から基礎的な教育を受けているのだ。だが、習得そのものの

はしていない。
法術を習得するには、最短でも４月程掛る。
ローゼリア王国の内乱時は習得に割く事の出来る暇が無かったし、それ以前はこの世界の常識を習得したり、地球に帰る方法を探したりと時間も無かったのだ。

（法術が使える人間だけを選別する？　いや、それはいくらなんでも無理だな。第一金が掛りすぎる。傭兵や騎士と言った、法術が使える人間は重宝がられていて、給料も良いはずだ……なら一般人に法術を習得させるしか無い……か……いや、逆だな、これを利点にすればいい。民の全てが法術を使える国……圧倒的な戦力になる……法術自体は誰でも習得が出来るが……問題なのは教える人間が居ない事か……これは傭兵団のみんなで教育していけばなんとかなるか？後は……誰に教えるかだが……町の住民を勧誘……は不味いか……どの領主だって自分の民を持っていかれたら怒るよな……）

亮真は素早く頭の中で計算するが、上手い案が浮かばない。
簡単な思いつきで何とかなるような問題ではないのだ。

「まぁそれについては後日にしよう。みんなも考えておいてくれ……ボルツは引き続き地形の情報を」

「了解でさぁ！」

亮真がそう言って締めくくると、ボルツが大きく頷く。

（全く……次から次へと問題が浮かび上がってきやがる……）
亮真が嘆くのも無理は無い。
何しろ、まだ報告が終わったのは二人だけ。
マルフィスト姉妹と厳翁の報告がまだ残っている。
（特に厳翁の報告は……さっきのあの口ぶり……絶対何か掴んでき

たんだろうな……）

亮真は深いため息を漏らすと、沈む気持ちを切り替える。ここで彼らの報告を聞かないという選択肢は無い。どれほど過酷でも、現実は変わらないのだから。

第3章第6話

西方大陸暦２８１２年８月８日【半島へ】其の６：

「じゃぁ……今度は厳翁の報告を聞くか？」

気持ちを切り替えた亮真が、厳翁へ顔を向ける。
残っているのは姉妹と厳翁。亮真的には、嫌な予感がする厳翁の報告を先に聞いてしまいたかった。
姉妹の報告は食料物資の購入先を決めるだけの事。さほど問題は無いはずなのだ。
だが亮真の言葉に、厳翁は頭を横に振った。

「いえ……ワシの話は最後の方が宜しいかと……先にローラ様達の話を」

何やら思惑が有るらしい。
亮真は訝しさを感じながらも頷き、マルフィスト姉妹へと話を振る。

「ふぅん……何か理由が有るってことか……判った。じゃあローラ、サーラ。商会の方の報告を頼む」

「かしこまりました……では」

ローラ達は頷くと、調べた事を話し始めた。
そして、楽観視してた亮真を奈落の底へとつき落とすことになる。

「結論として殆どの商会が、領主であるザルツベルグ伯爵家と強固

な関係を結んでいるようです」

「強固な関係？」

ローラの言葉に亮真は首を傾げる。彼女の言葉からは、通常の領主と商会との関係以上の物を感じたからだ。

「はい、それもかなり密接なものです」

そう言うとサーラが地図をテーブルの上に広げる。

「コイツは……イピロスの地図か？」

「はい。そしてこの赤い点がこの町に存在する商会です」

サーラの指が、地図上に記された赤い点を指し示す。その数、１０個。それが、この城砦都市イピロスに存在する商会の数である。

「ミストール商会……ラフィール商会……」

サーラが次々と点の横に書き加えられた商会名を読みあげていく。

「これら１０の商会が、連合を組んでこのイピロスの経済を完全に掌握しているのですが……問題は伯爵夫人が、連合の代表であるミストール商会の一人娘だと言う事です」

「本当なのか……？それ」

亮真の顔色が変わる。それも当然だろう。

ウォルテニア半島では食料の自給をする事が出来ない。つまり、食料自給の目途が立つまでの一定期間、このイピロスから食料を運びこんでくる他に、選択肢が無いのだ。

まさか、怪物（モンスター）を狩ってそれを主食にするわけにもいかない。食べられる怪物（モンスター）も居る事は居るが、食べられない物の方が圧倒的に多いのだ。

水と食料に関しては、我慢すると言う事が出来ない。生きていく上で、絶対に必要な物。

それに対して、伯爵夫人の実家が大きな影響を及ぼす。

あまり想像したくない未来である。

「はい……一定以上の食料物資を安定して購入するには、どうしてもこの１０商会の何れかと取引するしかありません……しかし、伯爵夫人が連合代表の娘となると……」

ローラは言葉を其処で切った。後は言わなくてもその場に居る全員に理解出来る。

常に亮真達は、ザルツベルグ伯爵の意向を無視できなくなる。

伯爵が商会へ圧力を掛ければそれで終わりだ。亮真達は半島で飢え死にしかねない。

「どうやらこの、ミストール商会の代表と言うのが相当な野心家と言われていて……元々連合の代表はクリストフ商会だったのですが、娘がザルツベルグ伯爵に嫁いだ事を笠に着て奪い取ったという話で……」

「なるほどね……娘を貴族に嫁がせてその威を借りて勢力を広げたって訳だ……まぁ、よく聞く話だな……」

亮真の言葉に全員が頷く。

確かに、そう珍しい話ではない。日本でだって無い話ではないのだ。

「しかし……貴族が良く商人の娘を妻にしたな？」

身分制度上、商人は平民でしかない。どれほど金が有ってもただの平民でしかないのだ。

貴族の妻。それも妾（めかけ）ではなく正妻となると、亮真が首を捻るのも当然と言える。

「それも調べたのですが……どうやらザルツベルグ伯爵家の財政はかなり圧迫されていたようでして……」

「ふぅん……融資を餌にしたってところか？　……そもそも何でそんなに財政が悪化してたんだ？　やっぱり軍事費か？」

商人の娘を正妻に迎えるほど財政が圧迫される……貴族のメンツを捨てても実利を取ったという事は、相当にザルツベルグ伯爵が追い込まれていた証拠。

問題は、なぜそこまで伯爵が金に苦しんだかだ。

「はい。伯爵家は国境守備と半島から時たま侵入してくる怪物（モンスター）対策の為に、軍関係に割かれる予算がかなり大きいのです」

ローラの言葉に全員が頷く。

軍と言うのは最大の金食い虫なのだ。

何も生産せず、ただ、物資を消費するだけの飢えた怪物。それが軍と言う物の本質である。

だが、その怪物には最高で大量の餌が必要になる。

兵に払う給料から始まり、鎧兜と言った武具購入に馬の飼育。兵に支給する食料と、実に多くの物を軍は消費する。

しかもこれはあくまでも平常時の話。一度、開戦となれば、消費量はさらに跳ね上がる。いくら資金を注いでも終わると言う事が無い、まさに其処の抜けたバケツに等しい存在だ。

だが、それでも軍に金を掛けるしかないのだ。国を民を領地を、守るべき物を守るためには。

それが隣国の警戒を任される貴族となればその重責は更に重くなる。

ザルツベルグ伯爵の財政が火の車なのは有る意味当然なのだ。

「まぁ当然だろうねぇ……ザルーダと国境を接しているだけじゃなく、半島から侵入してくる怪物（モンスター）に対しても備えなければならないだろうからねぇ？」

「アッシの調べた資料によると……大体１０年に１度は半島から大規模な怪物（モンスター）の侵入があるようです」

ボルツの答えを聞いたリオネは、当然といった風に大きく頷く。

「捕捉させて頂きますと、この周辺は余り農地にも適しておりません。特筆するような産物も無く、あまり豊かな土地ではないようですな」

「塩に関してはどうだい？　昨日チョット小耳にはさんだんだけど、どうやら岩塩の鉱脈が有るらしいんだが？」

厳翁の言葉に、亮真は疑問を投げかける。

少なくても、昨日の伯爵の服装考えれば、金に困っているように

は見えない。
貴族のメンツを守るために無理して見栄を張った可能性もあるが、それにも限度が有る。
衣服にしろ、提供された食事にしろ、伯爵が金に困っているようには到底見えない。初めから明らかに食べきれないほどの料理を卓上に並べたのだ。
しかも貴重な香辛料をふんだんに使用して。もし、金に困っているなら、そんなことは出来ない。
となれば、怪しいのは岩塩の鉱脈だ。生活必需品である塩は高値こそつかないが、需要が一定している。これを伯爵家が本当に所有しているのなら、財政の建て直しは十分に可能と思える。

「いえ……伯爵家の領地内で岩塩の鉱脈は存在しません」

そう言って首を振った厳翁は、意味ありげな笑みを浮かべた。

（どういうことだ？　伯爵領に鉱脈がないなら一体どうやって財政を立て直した？　何か他の産業を持っているのか？）
亮真の頭脳が様々な可能性を導き出す。
（もし他の財源を持っているなら夫人は何故、岩塩の鉱脈を持っているなどと嘘をついた？　なぜ態々塩にしたんだ？）
上手い嘘のつき方、それは嘘に真実を混ぜる事。
全てを嘘で固めると言うのは意外に難しい。現実との整合性が取れずに破綻しやすいのだ。

「あ！　ひょっとして……」

突然サーラが声を上げる。

「何、サーラ？　何か思いついたの？」

ローラの言葉にサーラは頷くと、厳翁へ眼を向ける、

「もしかして……伯爵は領地外に岩塩の鉱脈を持っているのでは？　例えばウォルテニア半島内に」

「「「「あっ！」」」」

誰もが驚きの声を上げた。

そんな中、厳翁のみが悠然と笑みを浮かべる。

「良く気づかれましたな。其のとおり、伯爵は半島内に鉱脈を持っているのですよ。王国にも秘密でね」

予想外の事実ではあるが、厳翁の言葉を聞けば納得は出来る。

「伯爵が勝手に半島内の鉱脈を横領しているってことかい？　王国に無断で？　見捨てられた土地とはいえ、大した度胸だねぇ……ばれたら一族郎党処刑されかねないよ？」

亮真に与えられるまで、ウォルテニア半島の正式な帰属は王家である。

幾ら放置されていた土地であるとはいえ、無断でその土地の資源を使って良い訳がない。

そんなことが、王家にばれれば、伯爵家は断絶。親類縁者まで巻き込んで、大規模な処刑が行われることになる。

リオネが大した度胸だと伯爵を褒めるのも当然だ。彼らは文字通り危ない橋を渡っているのだ。

「そういうことか……クソ！　やけに愛想が良い筈だぜ。あいつら

俺をサッサと半島に行かせたかったんだな」

亮真の中で独立していた断片が繋がり、伯爵の思惑が浮かび上がってくる。

「最初から俺を殺しに掛からなかったのは、出来れば大事にしたくない為か……俺が死ねば王国が調査に来る可能性もあるからな」

「主殿を歓待したのは、このまま何も知らずに半島へ行かせる為ですな……そして万が一、半島の秘密を知れば其の時は……」

「怪物達（モンスター）の餌って訳か……」

亮真の目が鋭く細まる。

「どうなされますかな？　ワシと咲夜なら伯爵の首を取る事も可能ですが」

「それはどうでしょう？　現状では逆に損をしてしまうのではないでしょうか？」

「ほう？　サーラ殿は反対ですか……理由をお聞きしてもよろしいか？」

伯爵暗殺を仄（ほの）めかした厳翁にサーラが待ったをかける。

「確かに暗殺と言う手段は、伯爵の思惑を崩すには有効です。ですが、私達の目的が半島の領地化である以上、イピロスの安定は絶対条件になります。もし暗殺が成功した場合、伯爵の魔の手は逃れることが出来ますが、其の後に誰がこの地を治めるか？　下手にルピ

ス女王の息が掛かった人間が来れば……」

狼を殺して、虎を招き入れる事になりかねない。

ルピスが亮真に対して警戒心を持っている以上、どんな嫌がらせをしてくるか予想できないのだ。

サーラの主張は、理にかなっていた。

「ふむ……確かにサーラ殿の懸念は当然ですな。これはワシが安易な提案をしたようだ」

厳翁もサーラの言葉に納得したのか、しきりに頷く。

「そうだな……それに、今の俺達じゃ岩塩の鉱脈を伯爵から奪っても販売経路がない。伯爵と事を構えてまで固執するほどのものじゃないか……」

「そうだねぇ……収入源としては惜しいけどねぇ。仮に伯爵から鉱脈を奪い返したとしても、イピロスの商人は取引を断ってくるだろうしねぇ」

「まぁ、そうでヤスね。伯爵と商会連合の長とが親密な関係である以上、圧力を掛けて取引を妨害してくることが眼に見えていヤス」

せっかく伯爵から鉱脈を奪い返しても、塩を現金に換えられないのなら意味はない。

他の町へ塩を持ち込めるならば話が変わるのだが、イピロスを経由しない為には、海路しか選択しがない。将来的には海上貿易も視野には入れているが、現状、直ぐに出来るものではない。

「ならばいっその事、伯爵にこのまま任せてしまえばいかがでしょ

う？」

「このまま好きにさせておくと言う事か？」

ローラの言葉に、亮真は顔を顰めた。

自分の領地で、好き勝手な事をされて喜ぶ領主は居ない。

亮真の反応も当然と言える。

「ですが、この話を王家へ持っていくことも出来ません。そうすれば伯爵家は間違いなく断絶。私達が伯爵を暗殺するのと結果が変わらなくなります」

「まぁ……な」

これが一番の問題だ。

伯爵を殺してしまうのは良い。暗殺にしろ王家へ密告するにしろ、伯爵を殺すだけなら幾らでも選択肢があるのだ。

だが、それではルピスが介入してくる余地を与えてしまう。

「いっそ、伯爵に鉱脈を譲ってしまい、我々に対して援助を約束させる……そして、伯爵の援助を受けている間に、こちらの体勢を整える……将来、伯爵を潰す為に。如何ですか？」

ローラの案は最善ではないが、現実的な提案である。

問題は、伯爵がこの提案を呑むかどうか。

「ワシはローラ殿の案に賛成いたす」

「そうだねぇ……其れが現実的かもしれないねぇ……しばらくは伯爵に良い様にされて、アタイとしてはムカツクけどねぇ」

「そうでヤスね……ですが、悪くないと思いヤス」

リオネ達が次々に賛同する。

（悪くない……これで時間を稼ぎ、こっちの体勢を整えるか……問題は伯爵が俺と手を組むかだ……イヤ、組まないと言う選択肢はないか。向こうとしても王家の注目を引きたくないはずだ。正式に領主である俺が許可を与えるとなれば、伯爵としても怯えずに済む……この利点は大きい。伯爵が乗ってくる可能性は大いにあるか……まぁ、大切な財源だが、俺達じゃそれを金に出来ない以上、拘っても仕方がないか……）

亮真のなかで覚悟が決まる。

先ずは自分達が伯爵よりも力を持たなければならない。

それは単純な武力と言う意味ではない。経済、政治、そういった部分での力だ。

「良いだろう……時間稼ぎとしては悪くない……後は其の時間を使ってこっちの体勢を整えるだけか」

亮真の言葉を受けて、全員が頷いた。

「じゃあ、伯爵との取引は良いとしてだ。まず、何が必要だ？」

亮真の問いに、ローラがすばやく意見を述べた。

「まずは、信用できる商人を探す事でしょう……食料物資の購入や、将来的には塩の販売を任せる事も視野に入りますし……狙うとすれば、クリストフ商会かと……ミストール商会に連合長の地位を奪われ落ち目ですから」

「私も姉様と同じです。他の8商会はミストール商会の傘下に入っているので、此処との取引は全て伯爵へ筒抜けになりかねないと思います。唯一クリストフ商会のみが連合の中で独立を保っていますから、交渉の余地は十分にあるかと」

流石である。各商会の現状まで、既に調べ上げてきたらしい。

亮真は、自分を支えてくれる優秀な仲間に感謝するしかない。誰もが、亮真を助けようと全力を尽くしてくれる。ただの若造でしかない亮真へ忠誠を誓ってくれる。

（伯爵……先ずはアンタに譲ってやる……だが、最後に笑うのは俺だ！）

其の思いが、亮真の心を満たす。そして、彼の決意をさらに強固なものへと変えた。

亮真は負けることが出来ない。彼の敗北は、自分に従う仲間達の死と同じなのだから。

第3章第7話

西方大陸暦２８１２年８月９日【半島へ】其の７：

城砦都市イピロスの大通りを東に１Ｋｍほど向かうと、１０Ｍ近くもある、高い城壁が見えてくる。王都の城壁にも匹敵するこの高さが、この地の重要度を物語っていた。

交易も盛んなのだろう。大通りの道幅は２０Ｍほど。ゆったりと余裕を持たせた作りだ。

石畳で舗装された道の上を、大勢の人や荷馬車が行き交う。

通りに面した店はどれも大きく立派で、人の出入りも多い。

今は日中、それも１５時頃である。商売をするにはまさに絶好の時間帯と言えた。その証拠に、周りの店には人が群がり活気に満ちている。

そんな中。亮真達が見上げるその建物は、周囲の喧騒から切り離されたかのように、ひっそりとたたずんでいた。

建物の大きさは周囲の店と比べても格段に大きい。石を組み上げて作られた頑強な建物。

店の看板も、上質なオーク材を使用した一品である。まさに、伝統と格式を兼ね備えた店と言って良いだろう。しかし、それも客が居なければ虚しいだけ。

立派な外見に、細部にまで行き届いた手入れをしていながら、その建物には、何処か薄汚れた影の様なものが付きまとっていた。

「ここか……なるほどねぇ……こりゃかなり目の敵にされている感じだな？」

亮真の眼が、周りの店と目の前の店とを見比べる。

周囲の喧騒を余所にクリストフ商会の前だけが、人影すら無いのだ。まるで両者の間には見えな壁が有るかのように。

大通りに面し、東の城門からもほど近い。本来なら、交易品を満載した荷馬車が密集していても不思議ではないはずなのだ。

なのに、現実は全く違う。

立地条件からすれば、これはかなり不自然な現象だ。まるで誰かの悪意が、この店を覆い隠しているかのように、人々はこの店の存在を無視し続けている。

「はい。ミストール商会の執拗（しつよう）な嫌がらせを受けて、店の経営はガタ落ち。客もミストール商会の圧力に耐えかねて、クリストフの店から手を引いています」

「私と姉様が調べた結果ですと、残っている大口の顧客は殆ど有りません……それでも、この商会がなんとか保っていられるのは、会長の一人娘、シモーヌ・クリストフの卓越した経営手腕に因るところが大です」

既に、マルフィスト姉妹の調査に因って、クリストフ商会の現状は把握できていた。

「ふ～ん……女性なのにやり手なんだな」

亮真の言葉にローラは頷くと、説明を続ける。

「はい。寝たきりになった父親の代わりに商会を切り盛りしています」

「寝たきりねぇ……病気かい？」

「サーラが周辺の人間に聞き込んだ話ですと、連合長の地位を奪われた後、急速にボケたと」

最前線でバリバリ仕事をしている人間にはよくある話だ。

恐らく、連合長として仕事をしてきた重圧がいきなり無くなり、気が抜けたのだろう。

しかし、それはあくまで噂での事。事実はこれから本人へ聞いてみるしかない。

ただ、原因が何であれ、父親が倒れ、娘のシモーヌが商会を切り盛りしている事は事実だった。

「成程ね……ミストールには疎(うと)まれ、親父さんは頼りにならない……うん、交渉の余地は十分にあるな」

亮真は一人呟くと、冷たい笑みを浮かべた。

彼が欲しいのは使える手駒だ。圧倒的に不利な状況である今、形振り構ってなどいられないのだ。

例えそれが、シモーヌの弱みにつけ込む様な事であっても。

「では亮真様。そろそろ約束のお時間ですので」

サーラはそう言うと、店の扉を開く。

亮真は姉妹を後ろに引き連れ、クリストフ商会の中へと足を進めた。

――

亮真達の前に広がるのは、エントランスホール。

足下の真っ赤な絨毯が、やわらかく亮真達を出迎える。店といっ

ても、この建物は商談にだけ使われるようだ。
調度品の質と言い、伯爵邸となんら遜色はなかった。
唯一違うところがあるとしたなら、それは、品物の統一感かもしれない。
単純に高い安いではなく、品良く、そして年月を感じさせる配置。
伯爵邸も決して成金趣味ではなかったのだが、こちらと比べれば残念ながら役者が違った。

「ようこそおいで下さいました。御子柴男爵閣下。ただいま、商会長代行のシモ―ヌが取り込んでおりますので、恐れ入りますが客室にてお待ちいただけますでしょうか？」

そういって、中年の男が亮真達を出迎えると、頭を下げた。
歳の頃は４０代半ばといったところか。陽に焼けた黒い肌が白いワイシャツのそで口から覗く。
柔和な感じの男だが、眼の光り方が普通とは違う。そして、彼の体からは何処となく潮の匂いを発していた。

「解った。では待たせて貰うよ……案内してもらえるかい？」

案内に従おうと足を踏み出した亮真に、男が待ったをかける。

「恐れ入りますが閣下。御腰の物を御預かりしても宜しいでしょうか？　そちらのお付きの方も同様に願います」

「剣を預けろというの！？」

ローラは叫ぶと、サーラと共に剣の柄を握り締める。

男の言葉はかなり無礼な要求である。

商人が客である貴族に対して、武装解除を求めるなど、そうは無い。

「我が商会の規則でございますので……恐れ入りますが会長代行にお会いになられるのならば、どうか」

言葉づかいは丁寧だが、彼の体からは一歩も引かない！と言う信念が感じられる。

単に商会の規則と言うだけでは無いのだろう。

（何か目的が有っての事か……そうか暗殺を警戒しているのか……こっちを信用していないんだな……まぁ、仕方が無いか。彼女達からすれば伯爵の仲間が訪ねて来たようなものだから……）

亮真とザルツベルグ伯爵の関係は、外から見れば同じ貴族の仲間という事になる。

事実がそうであるかは問題ではない。問題なのは、シモーヌ達から見て亮真が伯爵の仲間に見えると言う事だけだ。

「良いだろう……ローラ！　サーラ！」

亮真の声に従い、姉妹が腰から剣を外して男へ手渡す。

姉妹としては、信用できない人間と会うのに、丸腰と言うのは不安であったが、主の言葉だ。

「そうか……ならば、コイツも不味いよな？　アンタに預けておくよ」

亮真は腰の刀を男に手渡すと、腰にぶら下げた革の袋を外す。

「ほぅ……これはまた……」

差し出された袋を覗き込み、男の目が細まる。
袋の中に入っていたのは、戦輪（チャクラム）。投擲武器としてはかなりの威力を誇る。
ただし、貴族が持ち歩くような武器ではない。
男の目が亮真達を射抜いた。
時間にしたらホンの数秒だろう。男は亮真から視線を逸らすと、丁寧に頭を下げ、階段へと足を掛けた。

「では……どうぞこちらへ。2階の客室へご案内いたします」

どうやら、戦輪（チャクラム）を自分から差し出したことが好印象になったようだ。
亮真は、軽く頷くと男の後に付き従い、階段を上っていく。

「では……こちらでお待ちください。まもなく、シモーヌが参ります」

階段を上がって一番手前の部屋へ亮真達を案内すると、男は再び頭を下げて退室していく。

「どう思う？サーラ」

亮真は姉妹にギリギリ聞こえる程度まで、声を小さくして尋ねた。
部屋にどんな仕掛けがあるか判らないのだ。盗聴の可能性だって考えられた。

「かなりの使い手ではないかと……それと気になるのは、あの陽に焼けた肌……」

サーラの言葉にローラは軽く頷く。
誰もが、あの男に注目していたのだ。彼の目つきも動作も商人とはとても思えない。
明らかに、戦う術を持つ人間の挙動だ。

「何処となく潮の匂いを感じさせる人ですね……ザルツベルグ伯爵領には海が無いはずですが……」

「ローラの言うとおりだな。俺もそれは感じた……単に他の町から流れてきただけか……それとも？」

考えられる可能性はいくつもある。だが……

「まぁ、今は考えても仕方がない……まずは、シモーヌと話をする事が先決だからな」

コンコン

亮真の言葉を待っていたかのように、部屋の扉が控えめに叩かれた。

「よろしいでしょうか？」

若い女の声だ。穏やかな、そして、その奥にシンの強さを感じさせる様な声。

「どうぞ」

亮真の言葉に従って、扉が開かれ一人の女が部屋の入り口で、丁寧に膝を折った。

彼女は栗色の髪を丁寧に結い上げ、銀の髪飾りで留めている。
絹のドレスは、薄い水色に染められ、品のよさと涼しげなイメージを演出している。

「失礼いたします……お待たせいたし申し訳ございませんでした。御子柴男爵閣下であらせられますね？　お目通りが適い恐悦に存じます。私(わたくし)が当クリストフ商会の代表代理を務めております、シモーヌ・クリストフでございます」

流石に、落ち目とはいえ元、商会連合の長を務めた男の娘だ。
完璧なまでの礼儀作法と、謝罪の言葉だろう。
流れるような動作には、気品が漂っている。
（ふぅん……伯爵夫人と良い勝負って所か……）
亮真は、先日あったばかりの伯爵夫人と目の前のシモーヌとを比べてみた。

どちらも、共に美しい。だが、両者は全く真逆の美しさを誇っていた。
婦人の方は、いうなれば華美。
計算された豪華な宝石とそれに負けないだけの美貌。
暴力的なまでに強い自己主張。
それに対して、目の前のシモーヌはまさに清純。
透き通った白い肌に、丁寧に手入れをされた艶やかな髪。
最小限に抑えられた装飾品。
どこか控えめで、おとなしい感じを受ける。
例えるなら、バラとユリと言った感じだろうか。
だが、亮真はその穏やかな顔の下に隠された、獰猛な獣の気配を敏感に感じ取っていた。
何より彼女一人でこの部屋に来たところから気に喰わない。さっ

きの男が護衛として付き添うものだとばかり思っていたのだ。
（こりゃぁ……一筋縄じゃいかないかもしれないな……）

「あのぉ……お加減でも？」

無言のまま立ち尽くす亮真へ、シモーヌは遠慮がちに尋ねた。

「あっと……失礼しました。私は御子柴亮真。本日は急にお尋ねして申し訳ない」

「いえ。御気になさらないでくださいませ……男爵閣下は、大切なお客様なのですから」

予約を入れたのは今日の午前中。
礼儀を守っているとはいえない訪問であったのだが、シモーヌは不快な表情など微塵も出しはしなかった。
穏やかに微笑むのみだ。

「それはありがたいお言葉……本日、こちらにお伺いした甲斐があると言うものだ」

シモーヌが亮真の向かいに腰を下ろしたのを待って、亮真が話し始めた。

「まぁ！　嬉しいお言葉ですわ……ですが、今、私共の商会は立て込んでおりまして……正直に言って何処まで男爵閣下のご期待に答えられるか……ご存じないかもしれませんが、今、私の父であり、商会長を勤めるルイズ・クリストフが病に冒され、意識がありません。その為、私が若輩の身ではありますが代理を務めている次第です」

「ほぉ……意識不明ですか……町の噂では連合長の座をミストール商会に奪われ、ボケてしまったと聞きましたが？」

亮真は、ワザと相手を怒らせるように、皮肉な言い方をして挑発した。

相手の出方を見るためだ。

「そうですか……ご存知だったのですね……男爵閣下がそれをご存知とは……数日前にイピロスへ入らしたばかりなのに。さぞ優秀な部下をお持ちなのですね？　それも当然ですわね。男爵閣下のご活躍を考えたら……イラクリオンでの閣下の策略を見ても、閣下が情報の重要性を理解されていることは明白ですわ。あれは素人である私から見ても、独創的で斬新な策略……あのような策を考え付かれた閣下の智謀は、恐るべきものですわ」

悠然と微笑むと、シモーヌは穏やかな視線を亮真へ向ける。

其処には、無理をして怒りを押し殺しているような気配が微塵もない。

逆に、亮真方へ切り返してくる余裕が有る。

「ほぅ……イラクリオンでのことをご存知とは……ひょっとして私がこちらを訪ねることを予想されてましたか？」

亮真は探るように、悠然と微笑むシモーヌを見つめる。

大地（アース）世界の情報伝達手段は限られている。

ＴＶもラジオもインターネットもない世界だ。精々、伝書鳩か手紙を出すくらいで、後は人づてに伝わる噂話がいいところだ。

それを考えると、情報の大切さが判る。

そして、シモーヌは亮真がイラクリオンで行った情報操作を知っていた。

それは、単純に亮真がルピス女王を勝利に導いたと言う話を知っているのとは訳が違う。

現地へ行って、詳細に調べなければ知る筈のない内容なのだ。

それを知ると言うことは、シモーヌがただの金持ちの娘であるはずがない。

「そうですわね……正直に言って5分5分と言うところかしら。閣下程の智謀をお持ちならば、ザルツベルグ伯爵の思惑を読むとは思っていましたわ……ですが、イピロスにいらして数日で私のところにお出でになるとまでは予想していませんでした。最悪、こちらから働きかけなければと思っていましたから」

「なるほど……なら私のおかれた状況はご理解いただけていると？」

シモーヌは亮真の問いを聞いても、全く表情を変えない。

「無論ですわ。閣下のおかれた状況もルピス陛下の思惑も、それにザルツベルグ伯爵のことも……ね。……あらイケナイ！　私としたことが、お客様にお茶もお出ししていませんでしたわ　誰か誰か！」

そういうと、彼女は手を叩いてメイドを呼びお茶を頼んだ。

まるで、これから友人同士でお茶会でも開くかの様に。

第3章第8話

西方大陸暦２８１２年８月９日【半島へ】其の８：

メイドが用意した紅茶を見たとき、亮真の目が細まる。

「さぁどうぞ。キルタンティア特産の葉を使用したものですわ」

丁寧に処理された最高級の茶葉。それを、高い位置からポットへと注ぎ込み、ジャンピングと呼ばれる、茶葉の対流を引き起こしたときにのみ開かれる芳醇な香。

茶請けとして添えられたクッキーの甘味の抑え方と言い、まさに職人芸と言える。

「これは……美味い！　茶葉の質も最高だが、淹れ方が完璧だ！それにクッキーの甘さも丁度良い……これを用意した方は熟練の域に達していますね」

別にどこかの食通のように産地まで当てることは出来ないが、亮真の舌は肥えている。

彼の祖父が非常に道楽者な所為だ。

まぁ、そういったことを抜きにしても、美味い物は誰が食べても美味い。

実際、横でカップに口をつけた姉妹は驚きで眼を見開いていた。

「まぁ！　お分かりになりますの？　男爵様はとても教養がおありなのね」

シモーヌが感心したように笑顔を浮かべる。

「教養ですか？　まぁ、美味いか不味いかの判断がつく程度ですかね」

「そう……裏大地（リアース）は、さぞかし豊かなのでしょうね」

亮真は心の動揺を必死でこらえた。ここで、彼女の言葉を肯定するわけには行かない。

（この女……何処まで知ってやがる？）

「何の事でしょうか？」

亮真は顔色を変えずにそう尋ねた。

「別に隠す必要はありませんわ……男爵閣下の其の智謀……それは、ただの平民では決して持ち得ないものです。となれば、貴族と言うことになりますが、男爵閣下の過去はどれだけ探っても出てきませんでした。８月ほど前にギルド登録をされるまで、一切の情報が。本来、そんなことはありえません……例え確証こそつかめなくても、それなりに調査できるだけのものを私の情報網は持っております。仮に、対象が王族の隠し子であったとしてもです。それなのにアナタの過去は何も出てこない……それこそ……いきなりこの世界に現れない限り……ね。そして、男爵様がギルドに登録されたのはオルトメアの帝都。おそらくオルトメアに召喚されたのでしょう？」

「なるほど……そこまで知られていたら、惚（とぼ）けるのは無理みたいですね」

亮真は諦めの表情を浮かべる。

（クソッ……こりゃぁ最悪、殺すしかないかな……あんまり女は殺

したくないんだけどな……）

別にフェミニストを気取るつもりはない。だが、喜んで女性を殺すような歪んだ性癖を亮真は持ち合わせては居なかった。

（しかし……大したもんだ……彼女の情報網ってのは……）

亮真の過去を調べられなかった。だから、彼女は亮真を、異世界から召喚された人間だろうと予想したのだろう。

それはつまり、彼女が自らの持つ情報網に、絶対的な信頼を置いていると言う事に他ならない。

「えぇ……ですが正直に言って本当に異世界人だとは思いませんでした。可能性は高いと思ってはいましたが……普通は、逃亡されないように召喚されて直ぐに拘束（ギアス）の術を掛けられるものですから……」

「なるほど……ね。それでどうします？　俺と敵対しますか？」

亮真の体から殺気が迸った。

無論、これは脅し。本気で殺すつもりなら、無言のまま彼女の喉に貫手を叩き込んでいる。

それは、シモーヌも理解しているのだろう。亮真から発せられた殺気をまともに浴びている筈なのに、彼女は身動き一つしない。

「いいえ……其のつもりはありません。このお話を正直にしたのは私達の情報網の価値を知って頂きたかったのと、私達が、男爵様に敵対するつもりがないという証としたかったからです」

確かに、自分達が得た情報を相手に正直に話すと言うのは、敵意のない証と言える。

もしシモーヌに敵意があれば、それを正直に亮真へ伝えることはしないだろう。

「なるほど……お互い腹を割って話すべきのようですね」

亮真は、殺気を収める。

「流石ですね……あまりに強くて、身動きすら出来ませんでした……」

「其の割には余裕があるように見えますけど？」

「男爵様が本気でない事を知っていましたから……」

シモーヌの顔が悪戯っ子のような怪しい笑みを浮かべた。

「なるほど……だが、壁の中で息を殺している人間はそう思っていないみたいだな……気配を感じるぜ？」

「仕方ありません。ミストールの手の者が暗躍していますから……私の身を案じてのことです。どうか私に免じてお見逃しください」

そういうと、シモーヌは深々と頭を下げた。

それに伴って、壁を通して感じた強い気配が消える。

「さっき俺達を案内した男か？」

「はい。彼は私の側近兼護衛です……そうそう、剣を預かった事もお詫びしなくては」

「別にかまわないさ。身辺警護にそれくらい気を使う人間の方が、組む側としても安心できるからな」

亮真の言葉を聞き、シモーヌは苦笑するとソファーに座りなおす。

「では、商談の方を始めましょう。男爵様のご要望はこちらでもある程度は把握しています。ウォルテニア半島で自給自足が出来るまでの期間、イピロスから食料物資の購入を考えておられる。いかがですか？」

シモーヌの表情はにこやかなままだ。しかし、商談に入ってからの彼女の気配は一変した。

鋭く、研ぎ澄まされた刀のような鮮烈な気配。

「あぁ……それと、将来的には半島に港を作り、交易を考えている。クリストフ商会には、今後、我々の専属として物資の調達や、交易品の販売を任せたい」

亮真の言葉に、シモーヌの表情が動く。

彼女も其処までの計画とは考えていなかったのだろう。

「それは……壮大な計画ですわ……それが実現できれば、半島は非常に豊かな財源を得られます……それも、半恒久的な枯れることのない財源を……その手助けを私共に任せると？」

シモーヌの声は震えていた。それも無理はない。

亮真の話が実現すれば、それを手助けしたクリストフ商会には、巨万の富と他の商会とは比べ物にならないほどの特権を与えられることになる。

力のない商人なら、はなから実現不可能だと笑い飛ばして相手にしないような計画。だが、シモーヌの脳裏には、ウォルテニア半島に作られた港の姿がはっきりと浮かんだ。

「ただ、それをするためには相当な時間と金が掛かる……それに、途中で降りることも出来ない。つまり、資金を出すなら俺達は一蓮托生ってことになる」

亮真の話は、あくまでも将来の話。

其処に行き着くためには、半島に町を作り、交易路を確保する必要が有る。

何年後に！と言うような話ではないのだ。

もし、亮真の話に乗るのならば、クリストフ商会の運命を亮真へ賭ける必要が有る。

だが、シモーヌの中では、既に結論は出ていた。

いや、亮真がもし何も言わなければ、彼女の方から資金提供を申し出る予定だったのだ。

「結構ですわ……私は初めから其のつもりでしたし……まぁ、此処まで大きな話になるとは思いませんでしたが……」

「なるほど……やっぱりギリギリだったんですね？」

亮真は探るような目つきでシモーヌを見つめた。

店はキチンと手入れをされているし、長年受け継がれて来たであろう高価な調度品もそのままだ。

見た目だけならば、クリストフ商会はとても経営危機に瀕して居るようには見えない。

しかし、そんなはずがないのだ。

取引先をことごとく奪われ、新規の顧客すら開拓できない商会に未来はない。

「えぇ……商会の資産がありますので、直ぐに潰されると言う事はないのですが、このままの状態なら、保って3年が良い所でしょう。

私達はそれまでに決断しなければなりませんでした。イピロスを捨て、新天地を求めるか、伯爵とミストール商会に対抗できるだけの力をつけるか……」

「なるほど……なら、もう少し話し合う必要がありますね」

亮真の言葉にシモーヌが頷く。

「えぇ……もう少しお互いを詳しく知る必要がありますわ」

亮真の目的と将来の展望は語った。

後は、それを実現できるだけの力があると、シモーヌに認めさせる事。

そのためには、亮真の力を示さなければならないのだ。

「ところで、何故キルタンティアの茶葉が手に入るんです？　キルタンティアといえば大陸西部の大国。海路にしろ陸路にしろかなり日数がかかる筈ですが？」

クリストフ商会の現状を説明された後、亮真は先ほどから気になっていた疑問をシモーヌへぶつける。

遠くから運ばれたものは高い。運送代が値段に反映されるからだ。

経営難であるクリストフ商会が態々高価な茶葉を使った。

それもキルサンティア産を。其処に亮真は隠された意図を感じたのだ。

「お気づきになられましたか……今回お出しした茶葉は先日、フルザードから取り寄せたものです」

そういうと、シモーヌは卓上に地図を広げた。

「ミスト王国にある交易都市フルザードはご存知ですか？」

「えぇ。一度行った事があります」

亮真の言葉にシモーヌは頷くと、地図の左端を指差す。

「お出しした茶葉はキルタンティアの国でも最高級の物。他国でも非常に高値で取引される一品です……この茶葉は此処、キルタンティア北西部の都市で生産されています」

彼女が指差したのは、海岸線から少し離れた山岳部の都市だ。

「此処で生産された茶葉は、近くに有る交易都市ロルカーナへと運ばれ、船で東部まで輸送されることになるのです」

そういうとシモーヌの指が、ロルカーナから大陸の南をグルリと回ってフルザードまで移動する。

ロルカーナの位置は、キルタンティア北西の隅だ。明らかに、遠回りをしているようにしか見えない。

実に、西方大陸を3分の2周近く航海していることになる。

亮真は訝しげにシモーヌを見つめた。

「お気づきになられましたか……」

「何でこんな遠回りを……いや、待てよ！　そうかウォルテニア半島か！」

「其のとおり。遠回りの理由はウォルテニア半島です……この地が

北周り航路が使えない、最大の理由です」

海賊達が出没する前から、北周り航路は船乗り達に忌避されてきた。

理由は簡単だ。半島には補給港が一切ない。

人が居ないのだから当然だが、其の所為で、緊急時に一切の手助けが期待できないのだ。

海は何が起こるかわからない。

沿岸部とはいえ、海に生息する怪物（モンスター）も存在するし、嵐に遭遇する事だってありえる。

何かの弾みで舵が壊れる事だって考えられるのだ。

そういった場合に、半島へ上陸して修理や救援を待つと言う選択肢が取れないのだ。

通常の船で半島を越えるには7日～10日ほど掛かる。

その間の危険度を考えれば、船乗り達が北周り航路を選択しないのも当然だった。

「しかも、今は海賊が根城にしています。当然北周り航路は廃れました……ですが」

「逆に言えば、ウォルテニア半島に補給港を作り、海賊を抑えられれば……大きな利益になるって事だな……シモーヌ、あんたはこの話をしたくて態々キルタンティア産のお茶を出したって訳か……初めから半島に港を造るつもりだったんだな？」

「はい……半島に港が出来れば、キルタンティアだけではありません。エルネスグーラや他の大陸とも貿易が可能です……半島はまさに宝の山に変わります」

シモーヌの目が妖しく光る。

まさに、彼女は賭けていたのだ。亮真の智謀と発想に。

「なるほど……俺がアンタを試したんじゃない……アンタが俺を試したんだな？」

今回の会談は、彼女の計画を理解し、力を貸してくれるかどうかを見定める場だったのだ。

そして、もし亮真が愚か者だったら、彼女はイピロスを離れる覚悟だったのだろう。

「正直に言って、男爵様が其処まで優れた方だとは思いませんでした。まさか、私と同じようなことを考えていたなんて……ですが。それならば私もクリストフ商会を賭ける決心がつきます」

「合格ってことか？」

亮真の言葉にシモーヌは穏やかに微笑むと右手を差し出した。

「勿論ですわ。是非とも我がクリストフ商会にお力をお貸しください」

彼女の笑みは、厳しく、そして美しい。

それは戦う覚悟を持ったものだけが持つ、気高い戦士の顔だった。

第3章第8話（後書き）

第3章第9話

西方大陸暦２８１２年８月９日【半島へ】其の９：：

「ほう……主殿を試すですか……若い女の身で商会を率いているだけあって、キレ者だったようですな……しかし、主殿の事を其処まで綿密に調査するとは……侮れない情報網をお持ちのようだ。敵に回すと厄介な事になりますな」

亮真とシモーヌの会談結果を聞いた厳翁の眼が細まる。

主である亮真を試したシモーヌに対する、厳翁の評価は高いらしい。

単純に忠誠だけを誓う人間だと、こうは行かない。そういう人間は、主を試すとは不届きな奴！と言う評価をしがちだが、流石にこの場に居る人間でそんな態度をとる奴はいなかった。

「まぁ、今のところ彼女が俺達の敵に回る可能性は、まずないと思って良い。クリストフ商会がイピロスに残る事を選択する限り、彼女には俺がどうしても必要だ。ウォルテニア半島の領有権を持つ俺がね……まぁ、そう言ってもだ、何時状況が変わるか判からないからな。厳翁、注意だけはしておいてくれ」

「かしこまりました……しかし彼女の情報網は大したものですな……恐らく商人達を使ったものだと思いますが？」

「そうみたいだな。歴史ある商会なだけに国内外に協力関係を持つ商会がいくつかあるらしい。そう言ったところから定期的に伝書鳩が往復して情報交換をするって訳だ」

「歴史ある商会の強みと言う訳ですな……そうやって得た情報を整理して、詳細な情報は現地へ人をやって調べると言う事ですが」

「あぁ、交易の為の商隊を派遣して調べるらしい。……今後は厳翁とも連携してもらうからそのつもりでいてくれ……聞いた限りじゃ、自衛は出来ても戦い専門って訳じゃ無いらしいからな」

「ならば、彼らと共に影から主殿を御支えする事に致しましょう」

大人数を使って広範囲の情報取得ならば、シモーヌ達の方が上。だが、拷問や盗み、後方撹乱と言った仕事に関しては厳翁達の方が専門。

お互いの長所を上手く組み合わせる事が出来れば、強力な諜報組織となる。

厳翁も、自分達の価値が下がるわけではないと聞いて、何処か安堵しているようだ。

普段、冷徹な表情を崩さない彼の顔に、穏やかな笑みが浮かんでいた。

「まぁ何にしても、話し合いが済んでよかったんじゃないかい？予定外で優秀な諜報組織の協力も取り付けられた。これで食料物資の購入はクリストフ商会に任せちまうんだろう？　坊や」

「いや……少なくても直ぐにクリストフ商会と取引を始めるつもりはない」

「え？　どういうことだい！？　取引を始める為にさっき話し合いに言ったんだろう？　クリストフ商会と取引しないって言うなら、一体何処から物資を買う気だい？」

リオネが驚きの声を上げるのも当然だった。
伯爵の息のかからない商会を求めていたのだ。そして、念願のクリストフ商会と協力の約束を取り交わしてきた。それなのに亮真はクリストフ商会と取引をしないという。
イピロスに商会は残り9つ。
しかし、ミストール商会を筆頭にザルツベルグ伯爵の側に組する商会ばかりなのだ。

「勿論、ミストール商会からさ……まぁ、それもこれもさっきシモーヌと話して決めたんだけどな……今の段階でクリストフ商会と俺達が表だって連携するのは不味い。伯爵を刺激するだけだろ？」

亮真の言葉に、誰もが納得の表情を浮かべた。

ザルツベルグ伯爵にしてみれば、自分が嫌っているクリストフ商会に亮真達が取引をすれば間違い無く危機感を募らせる。
なぜ、態々自分に敵対している商会と取引をする？自分に反攻する気なのか？と疑われてしまう。
亮真達にとって、あまり得となる選択ではないのだ。
だから、亮真とシモーヌは、協力を確約した後の話し合いで、伯爵側から圧力が掛けられるまでは何食わぬ顔で、ミストール商会とその傘下の店と取引することにした。
その代り亮真は伯爵側から洩れる情報をシモーヌへ流し、シモーヌは近い将来、伯爵が亮真へ圧力を掛けてくる時の為に備える。
それに、亮真を成り上がりと侮るザルツベルグ伯爵なら、亮真が這いつくばって頼み込めば様々な便宜を図ってくれるだろう。
伯爵には、岩塩の鉱脈を横領していると言う弱みがあるのだから。

「成程……確かにその方が安全ですな……」

「そうでヤスね」

亮真の知恵袋二人は共にこの話に賛意を示す。

「まぁ、坊やらしい策なんじゃないかい？　特に伯爵を利用できるだけ利用しようってところがねぇ」

リオネは何処か、からかうようにそう言って笑った。

相手を油断させ、一撃で始末する。効率を重視し、無駄な見栄を張らない。大地世界では卑怯と呼ばれる手段も、平気な顔で選択できる人間。

敵に回すと一番恐ろしいタイプの人間だ。

「ですが亮真様……ミストール商会と会う前にクリストフ商会に出向いた事……伯爵側にばれてしまっていませんか？」

サーラが不安げに亮真へ視線をむける。

「まぁ、シモーヌの話だとクリストフ商会の建物にはびったり見張りが張り付いてるらしいしな……俺がシモーヌと面会した事は誤魔化せないだろうね」

「では、どうされるおつもりですか？」

「正直に言うさ。必要な物資の購入を頼みに行って断られたって……そこでザルツベルグ伯爵に泣きつくってわけさ。ミストール商会を紹介してくれってね」

初めから伯爵へ頼みに行かなかったのは、伯爵にご迷惑を掛けるわけにはいかないと遠慮した為。

初めにクリストフ商会を訪ねたのは、単純に店が暇そうだったから。

そこで、購入を断られ、イピロスの力関係を知った亮真が、慌てて伯爵に泣きつく。

別にクリストフ商会と取引をしようとしたわけじゃありません。

自分達は、伯爵の意向に逆らうつもりは無いのです……と。

シモーヌや厳翁から聞いた伯爵の人物像は、彼の感じた違和感とも一致している。

先日、亮真を歓待した伯爵の人の良さは演技なのだ。

傲慢で、特権意識が強く、他者を見下す。

そう言った伯爵の性格を考えれば、亮真が正直に泣きつけば優越感を満たされ、彼の思考は其処で止まる。

自分が、亮真に騙されるなど思いもつかないだろう。

「なるほど……伯爵の性格まで計算しているわけですか」

「相変わらず若は恐ろしいでヤス……」

何処か呆れた様な口調で知恵袋二人がため息をついた。

「上手なウソってのは真実に嘘を混ぜるっていう事さ……これで、伯爵の油断を誘い、彼の援助を引き出す。後は、必要が無くなるまでしゃぶりつくすだけさ」

そう言うと、亮真は冷たい笑みを浮かべた。

ザルツベルグ伯爵の油断を誘う計画なのだ。伯爵と戦う為に……

「物資の方はそれで良いとして……後は住民をどうするかですなぁ」

厳翁が困ったような声をあげた。
傭兵雇用の問題と、物資の購入に関してはとりあえず目途が付いた。
残っているのは、住民の問題だ。
「それかぁ……みんなは案が有るか？」
ハッキリ言って、これは非常に頭の痛い問題だった。
そもそも、住民を移住させるというのは難しい。
近隣の村や都市に立て札を立てて、移住希望者を募ったとする。
だが、ウォルテニア半島などと言った未開の大地に、誰が好き好んで移住するだろう。
強力な怪物（モンスター）達が徘徊し、亜人の集落があり、海賊達が根城にしている大地。
ある程度開発されているならともかく、全く手の付いていない土地だ。多少、税金を優遇する程度では誰も希望しないだろう。
それに、もう大きな問題がある。元の土地を治める貴族達だ。
税を納めるのは自分の領地に住む平民達。その住民を移住させればどうなるか？税を納める人間の数が減れば、貴族に入る収入が減る。
彼らはルピスに不満を訴えるか、実力行使をするかのどちらかを選択するだろう。
そして、どちらを選択されても、亮真は終りだ。
将来的にはともかく、現状はその辺の弱小貴族にすら劣る存在なのだから。
亮真の言葉に誰もが黙り込み、解決手段を模索する。
彼らも、亮真と行動を共にする間に、独創的な発想と言うものを会得した。

大地世界（アース）の常識を無視した発想。それこそが、現状を打ち破るカギになる。

「一つ……お金が掛りますが、今後、恒久的に住民を増やせます……それに、貴族達からの反発も考えなくてよい方法です」

サーラへ周りの眼が集まる。

彼女の言葉は、今の亮真達にとってかなり都合のよい話だ。いや、都合が良過ぎるといってよい。金で解決できると言う事は、亮真達の都合だけで決められると言う事だ。

欲しいときに金が許すだけの住民を得られる。そんな都合の良い話があるのだろうか？

「この町の裏通りには奴隷商人がいくつも店を開いています。其処から労働奴隷を買うのはいかがでしょう？それならばこちらは奴隷を購入する代金だけで済みます。法術はどちらにしろ一般人では習得していませんから、私達で教育しなければなりません。ならば、他の貴族領から住民を引き抜いて恨みを買うより、奴隷を買う方がずっと安全なのではないでしょうか？」

サーラの言葉に誰もが、すばやくメリットとデメリットを比較する。

最も初めに沈黙を破ったのは厳翁だった。

「悪くありませんな……気になるのは、買われた奴隷が主殿へ反旗を翻す可能性ぐらいですか……」

「厳翁殿の懸念ももっともですが、そもそも、資金的にも厳しくはアリヤセンか？」

「おそらく、労働奴隷ならば其処までの高値にはなりますまい……それに、一度に購入すれば値引きの交渉も可能でしょう……金の方は何とでもなりましょう」

一度にまとめて購入すれば、奴隷一人辺りの金額を交渉して値引きすることが出来る。

今後、定期的に購入すると言うことにすれば、奴隷商人達も無下にはしない。

決して、悪い話ではない。

「でも、反乱のほうはどうする気だい？　金の方は何とかなるとして、果たして奴隷が亮真の民になるのかい？」

「それは奴隷身分の解放と引き換えにすれば問題ないのではないでしょうか？」

サーラの言葉にリオネが訝しげな視線を向けた。

「はぁ？　金を出して奴隷を購入して、解放するって言うのかい？」

「はい。私もお姉様も元は戦奴隷……それを亮真様に解放して頂きました。私達姉妹は亮真様へ絶対の忠誠と献身を奉げておりますが、もし、奴隷身分のままだったら……」

今の様な忠誠心はもてなかっただろう。

サーラが言わなかった言葉の続きを誰もが理解した。

誰だって、奴隷のまま主に忠誠心を持つ事はありえない。

鞭を恐れ仕えはしても、心の中に渦巻くのは憎悪と殺意だけ。

何時か主の隙を突いて殺してやろうと言う敵意だけだ。

「なるほどねぇ……あんた達……そうだったのかい」

リオネがどこか納得したような口調で呟いた。

彼女もボルツも、何故マルフィスト姉妹が御子柴亮真に対して強い忠誠と信頼を持っているのか疑問と言えば疑問だったのだ。

（なるほどねぇ……奴隷は命ある物。物から人にしてもらったらそりゃぁ恩義も感じる……か）

リオネは、奴隷の生活も苦しさも屈辱も理解している。

彼女は平民出身。そして平民と奴隷は紙一重。

税が払えなくても、国が戦争に負けても、平民は簡単に奴隷として売り飛ばされることになる。

其の後に続くのは、人としての尊厳を死ぬまで踏みつけられる茨の道。

「なるほど、奴隷身分から解放する事で主殿へ忠誠心を持たせ、貴族に対しての敵対心を煽る……悪くないですな」

大切なのは領主である亮真に対しての忠誠心。あるいは、愛国心と言う言葉でもよい。

成り上がり者でしかない亮真では、決して持ち得ない物が得られることになる。

よほどの愚策を強行しない限り、奴隷から解放された民が亮真に背く事は無くなる。

「良いだろう……奴隷から人を救えて俺も得をする……悪くない選択だ。明日から早速、奴隷を扱う店をまわる。サーラ、ローラ一緒に来い。厳翁は引き続きザルツベルグ伯爵の近辺を探れ！　リオネさんは傭兵の雇用を、ボルツは半島の情報を引き続き頼む！」

亮真の言葉に全員が頷いた。

亮真は人を物として扱う奴隷と言う制度を心の底から憎んでいた。
彼は、自らの意思ほど大切なものはないと思っているのだ。
ルピスを憎むのも同じ理由。
身分をかさに着て、亮真の意思を無視した結果だ。
虐げられた亮真が、虐げられた奴隷の力を借りて復讐する。
これ程に胸躍る話があるだろうか。
（身分制度？　クソったれが！　今にテメエらの驕りってやつを砕いてやるぜ！）

この日、虐げられた人々は一筋の光明を得る事になった。
この部屋から溢れ出た意思が、やがて西方大陸全土を飲み込むことになる。

第3章第10話

西方大陸暦2812年8月10日【半島へ】其の10：

「此処が裏通りか……」

陽が天頂を過ぎ去り、西の空に傾きだした頃、亮真はイピロスの北地区に居た。

亮真の目の前には、薄暗く腐臭の漂う路地が延々と続いている。

大通りから一本内側へ入っただけなのに、表通りにはない陰気な暗さが道を覆い尽くしていた。

「この奥に奴隷を扱う店が立ち並ぶ一角があります」

ローラの声に亮真は軽く頷くと、城塞都市イピロスの暗部へと足を踏み入れた。

イピロスの町に潜む、深い闇の底に向かって。

「良くおいでくださりました。貴族様！　当店は初のご来店で？光栄の極みでございます。私共アブタール商会はイピロスの奴隷商人では最大手でございます。労働奴隷、性奴隷を初め、戦奴隷まで種類、数共に多数在庫を抱えております。必ずや貴族様のお眼鏡に適う奴隷が見つかることでしょう」

そう言うと店主と名乗ったひげ面の大男が店先で大仰に頭を下げた。

周囲には、鎖に繋がれた奴隷達がうつろな眼で宙を見つめている。

店の主らしい男の肌は脂ぎっていて、眼は金と色とで濁って居た。
彼の顔には「私は強欲です」とはっきりと書いてある。
体型は縦にも横にもデカイ。身長は亮真より少し低い程度だが、横幅は確実に3倍はある。
身なりは裾の長いローブを纏い、体中を宝石で飾りつけていた。
そんな身なりの中で、彼の腰に下げられた革の鞭がやけに生々しい。
きっと反抗的な奴隷を鞭打つのだろう。柄に巻かれた滑り止めの革が、使い込まれている証拠に滑らかな光沢を放っていた。

「奴隷が……欲しい」

亮真は出来るだけ感情を押し殺して店主へ言葉を掛ける。
彼は心の中から湧き上がって来る強い感情を押し殺すのに精一杯だった。
もし、サーラとローラが亮真が羽織ったマントの裾を握り締めていなかったら、彼は目の前でニヤ着いている奴隷商人の顔へ拳の雨を叩き込んでいたに違いない。
だが、店主はそんな亮真の心の中を理解してはいなかった。

「おぉ！　これは毎度ありがとうございます。それで貴族様。お求めになるのは労働奴隷ですか？　それとも閨で遊ぶための精奴隷でしょうか？　戦奴隷ですと数は限られてしまいますが、在庫はございます。どうぞ何なりとおっしゃってくださいませ」

満面の笑みを浮かべながら、しきりにもみ手をする店主。
この男は、鈍重そうな体型をしているくせに、見かけによらず口が回るようだ。
それに、客を見定める眼力も大したものと言えた。
少なくとも亮真の格好を見て、直ぐに貴族だと判断できる人間は少ないだろう。

ザルツベルグ伯爵に面会するために買った、絹のシャツにマントを羽織った格好だが、貴族の身分を示すような装飾品は一切身につけていないのだから。

「奴隷だが、数が要る。それに幾つか条件が有る。年齢は１０～１５までの男女で数は大体同じ割合……買うのは健康で五体満足な者だけ。とりあえず３００名ほどは欲しい……お前の店だけで数が揃わないならば、この町の同業者に声を掛けて集めさせろ」

亮真の言葉に、店主が怪訝そうな顔をした。

あまりにも予想外の言葉だったからだ。

「失礼ですが貴族様それはあまりにも若すぎませんか？　労働奴隷でしたらもっと年齢の高い……そうですなぁ、２０歳前後の男のみの方が？　それに、玩具にするにしても労働奴隷では大した体はしておりませんぞ？　幼女にしろ少年にしろ容姿の良い者はみな性奴隷として売られておりますので、労働奴隷として売られる者に容姿の良い者など居りませんが？　しかも３００名とは……当店はイピロス最大の奴隷商ではございますが、とてもとてもその数は……失礼ですが、貴族様は一体何に使われるおつもりなのでしょうか？」

そう言うと店主が探るような視線を亮真へ向ける。

労働奴隷は主に農業用に使われる。農耕牛や農耕馬と同じ扱い。

となると、労働奴隷の価値は其の体に培われた筋力の量と言う事になる。

女より男の方が筋力は上だし、子供より２０前後の働き盛りを欲するのが当然と言える。

数が足りない場合に、女の奴隷を買うと言うのならともかく、初めから男女同数で注文する人間は居ない。

少なくとも、店主は長い奴隷商の経験の中で初めてだった。
しかも、成長の途中である１０代前半を指定する人間は、少女性愛者（ロリータコンプレックス）でもない限り、先ず居ない。
先ず第一に、筋力が大人に比べて未発達であること。そして、成長期であるため食費が余分に掛かること。
つまり燃費が悪い車みたいなものなのだ。態々そんな車を選んで買う人間は少ないだろう。
店主が疑問に思って尋ねたのも当然と言える。だが、亮真は店主の疑問に冷たい冷え切った声色で答えた。

「お前に関係あるのか？」

其の声が発せられた時、亮真の後ろに立っていた姉妹の体が、一瞬震えた。そして、それは店主も同じだった。
別段、声を荒らげたわけではない。声の声調（トーン）から言えば穏やかだとさえ言える。
だが、其の声に含まれた殺意は冷たい刃となって周囲を切り裂く。
それは、武術の素養がない店主にもはっきりと伝わった。

（殺される……）

店主の脳裏には、自分の首が斬り飛ばされる光景が鮮明に浮かんだ。

彼は、今まで数多くの奴隷を殺してきた。
年をとりすぎた奴隷。反抗的な奴隷。体の一部を失った奴隷。病に冒された奴隷。そして、最も多く手に掛けてきたのが子供の奴隷だ。
労働力として期待できない子供など、邪魔なだけ。
最初、安く買い集めてきた子供達を首輪に鎖を繋いで店先へと並

べる。
先ずは、見目の良い子供や、年齢以上に体格のがっしりとした子供が優先的に買われていく。使い道があるからだ。
だが、何時までも買い手の着かない子供も当然居る。そういった、一定期間経っても売れない普通の子供は、奴隷商人達の手によって殺されることになる。
食事を与える経費が勿体無いから……
そして、彼らの手元には莫大な売り上げが残る。
そうやって、彼らは肥え太ってきたのだ。無数の屍の上に。
それでも彼はなんとも思いはしなかった。彼が殺したのは所詮奴隷。人の形をした物に過ぎない。
人は人を物としてみたとき、一切の感情が消える。憐憫も何も感じはしない。何故ならそれはただの物だから。
そして今、店主を見つめる亮真の目は、店主が普段奴隷達へ向けるのと同じ光を放っている。

「い……いえ！　失礼いたしました！　お許しください。申し訳ございません！　どうか……どうかお許しください！　お願いいたします。どうかどうか……」

店主は咄嗟に地べたへ這い蹲った。
周りに奴隷が居ることなど全く眼中にはなかった。つまらない見栄を張っている場合じゃない。
哀れみを乞う以外に、自分が生き残れる道がない事を悟ったのだ。
目の前に立つ男が貴族かどうかは問題ではない。彼が平民だとしても、いや、例え奴隷だったとしても店主は同じことをしただろう。
明確な力の差が両者の間を隔てていた。

「亮真様……」

床にひれ伏したまま動かない店主を見下ろしながら、ローラが亮真のマントを強く引く。

正直なところ、ローラもサーラもこの奴隷商人を殺したくて仕方がなかった。

それほど、この店に来るまで彼らが見た光景は陰惨（いんさん）でこの世の物とは思えないほどおぞましい光景だった。

薄汚れた肌。無数に走る鞭の痕。何ヶ月も風呂になど入っていないのだろう。子供達の髪は捩れ衣服など本当に最低限の下着だけ。いや、下着をつけている子供はまだ運が良い。大多数の奴隷は裸のままだ。

彼らの眼からは意思の光が消え、虚空を見つめている。

それは、人の形をした絶望だ。

サーラもローラも元々は奴隷だ。

しかし、彼女達は上級騎士の家に産まれ、教育も受けられていた。

そして、何より彼女達は美しかった。だから、彼女達は奴隷といっても、この路地に繋がれた子供達のような扱いを受けたことがない。

そういう意味では、姉妹を買った奴隷商人のアゾスはまだましな人間だったとさえ言えるのだ。

目の前に這い蹲る男に比べれば。

「亮真様……今は……」

再びローラが亮真のマントを強く引く。

「判ってる……大丈夫だ……俺は我を忘れたりなんかしないよ……」

亮真はそういうと、吹き上がる憤怒の感情を必死で抑えようとする。

（落ち着け……ダメだ……今はどうしてもダメだ……今此処でコイ

ツを殺してどうなる？　誰も救えやしない。そう……誰もだ……）

路地を進む中で、亮真は次第に怒りを感じた。

しかし、それを今この場所で爆発させることは出来ない。

此処はザルツベルグ伯爵の領地。そして、奴隷商人達は伯爵の許可を受けた真っ当な商人なのだ。

もし、此処で騒ぎを起こせば悪いのは商売の妨害をした亮真と言うことになってしまう。

今、亮真が出来る事は何もない。それを理解しているからこそ、鞭打たれ、泣き叫ぶ子供を素通りしてきたのだ。

だが、この目の前に居る店主の訳知り顔な言葉が亮真の怒りに油を注いだのだ。

押さえつけていたタガがはじけ飛びそうになるのを、亮真は必死で堪えた。

「もういい……顔を上げろ……」

「は！　はい！　申し訳ございません」

亮真の言葉に、店主は直ぐに反応した。

顔色を窺うなどと言う無駄な事を彼は選択しなかった。

もし、再び亮真の機嫌を損ねれば、自分の命が蝋燭（ろうそく）の灯火ように消される事を本能的に察知したのだ。

「もう一度聞く……健康で五体満足な１０～１５歳までの男女の奴隷３００人。用意できるのか？　出来ないのか？」

亮真は再び、同じ質問を繰り返した。

「も……勿論、貴族様のご要望どおり揃えさせて頂きます！　お任せください。私の命に賭けて必ずやご満足いただけるようにいたし

ます」

今度は、店主も無駄口など叩かなかった。
迅速に亮真の問いに答える。

「良いだろう……まず金額だが、３００人分合計で幾らだ？」

「は！　……年齢も年齢ですし……男女で金額が変わり……」

「幾らだ？」

口ごもる店主の言葉を手で遮ると、亮真は苛立たしげに問い直す。

「全部で１５０万バーツではいかがでしょうか！？」

一人頭、５０００バーツと言ったところか。日本の円換算で実に１０万程でしかない。
亮真の殺気に気圧され割り引いたのか、はたまた、この世界の子供の価値がこの程度なのかは判らないが、亮真としても、十分に許容できる値段だ。

「良いだろう……何時までに揃う？」

「は！　はい！　当店だけでは数が揃いませんので、１週間ほどお時間を頂戴できれば！」

「判った……受け渡し場所は？」

「申し訳ございませんが、３００名ともなると、街中ではちょっと……郊外ではいかがでしょうか？」

確かに店主の言うとおり、こんな路地裏で３００人もの奴隷を受け渡せる筈もない。
それなりに広い空間が必要になる。
（どちらにしろ、法術の訓練をするには郊外に出るしかないか……北はウォルテニア半島、西はザルーダとの国境地帯……野営するなら東の郊外だな）
亮真はすばやく計算すると、店主へ向かって言った。
「東の郊外で受け取る事にする……金は今、半額払う。残りは受け取った後だ。良いな？」
サーラの手から金貨の入った袋を受け取ると、亮真は空の袋へ一枚ずつ枚数を数えながら移し変えていった。
「７５万バーツだ。確認の後、受け取りをくれ」
「ただいま！　少々おまちくださいませ」
そう叫ぶと、店主は亮真から渡された金貨入りの袋を掴み店の中に駆け込む。そして手に受け取りを握り締め、直ぐに店の外へと飛び出してきた。
袋の中の確認など全くしていない。
商人にはあるまじき行動だが、この場合、店主を責める人間は居ないだろう。
「では……一週間後、東門の外で……良いな？」
「はい！　ご利用頂き誠にありがとうございました。一週間後には、必ず商品を東門の外までお届けにあがりますのでご安心ください！」

体を９０度近くまで折り曲げて深々と頭を下げた店主を無視して、亮真はその場を足早に離れる。
これ以上、この場に留まって居たくなかったのだ。
亮真はこみ上げてくる吐き気を必死でこらえた。
人の放つ欲望が、反吐が出そうなほどの悪臭を放つ悪意が、亮真の心を打ち据えていたのだ。

足早に路地裏を駆け抜けた亮真達は、ようやく大通りの明るい町中へと戻ってきた。
穏やかな西日の中で３人は大きく息を吸い込む。

「亮真様……大丈夫ですか？」

亮真の背に向かって、ローラが心配そうに声を掛けた。

「あぁ……平気だ……二人の方こそ大丈夫か？」

亮真の言葉に、姉妹は無言で頷く。
彼女達の表情こそ固く強張ってはいたが、落ち着きを取り戻し始めているようだった。

「これがこの町の闇か……クソッタレが！」

事前に判っていた事だ。奴隷と言う制度に関しても……
だが、現実は亮真の想像以上に過酷で汚らわしかった。
（変えてやる……絶対に変えてやるぞ！）
亮真は心の中で誓う。

其れがただの自己満足に過ぎないことは理解していた。

これが、この大地（アース）世界の現実だと言う事を。そして、亮真が救うことが出来るのは、全体の極ほんの僅かなのだと言う事を。

第3章第11話

西方大陸暦2812年8月17日【強き者】其の1：

アブタール商会と交わした約束の1週間が過ぎた。
亮真達は、イピロスで拠点に使っていた宿屋を引き払い、東門の外3Kmほどの平地に陣を設営している。
半島に入る前に、最低限の訓練を行わなければならないのだ。しかし、イピロスの街中で、訓練を施せるだけの空間は、ザルツベルグ伯爵の私設軍関係のみ。
流石に、伯爵へ場所を貸してくれるように頼むわけにもいかないので、亮真達は町の外に野営することを選択したのだ。

「とりあえず、準備は完了か……後は何人残るかだな……」

天空から降り注ぐ日差しの中。亮真の目がイピロスの城壁を睨み付ける。

「300人全員がモノになることは先ずありますまい……半分も残れば御の字ではありませんかな？」

背後に立つ厳翁が、亮真の背に向かって言った。

「まぁ……な」

厳翁の言葉に亮真は肩を竦めて答えた。
自分に選択肢がない事を理解していても、表情は晴れない。

これから行うのは選抜。より強い者。より賢い者。そして強靭な

意志を持つ者。
選ばれた子供だけが、将来の自由を約束される。
本来なら、誰もが自由である筈なのに……
大地世界（アース）で自由を得ることができる人間は強者だけ。
それでも、今回買われた子供達は運が良いのだ。
自由を得られるかどうかは別にして、少なくても其の機会（チャンス）は与えられるのだから。

「お気になさいますな……主殿が買わなければ、殆どの子供は殺される運命……」

厳翁の言葉に亮真は顔を顰めた。
そんなことは言われるまでもなく、十分に判っているのだ。だが、理性では判っていても心は割り切れない。
（子供を買って利用する俺と、子供を売り買いする奴隷商人……所詮、同じ穴の狢（むじな）か……）
そんな思いが、亮真の心にわき上がってくる。
しかし、今此処で歩みを止めるわけには行かない。歯車は回りだしてしまったのだから……

「若！　今、商人達が陣の中に入りヤシた！」

背後から、ボルツが大声で声をかける。

「判った！　すぐに行く……行くぞ、厳翁」

亮真はそう言って広場の方へ歩き出す。其の顔にはさっきまでの迷いは微塵も無い。
現実が、過酷で無情な事を彼は誰よりも理解していたから。そして、悩んだところで、現実は何も変わらない事を……

「この度は、我がアブタール商会をご利用くださり、誠にありがとうございます。お約束の品を用意いたしました。どうぞ、ご検分ください」

そういって店主は、先日と同じように亮真へ丁寧に頭を下げた。

「手間を掛けさせたようだな？」

亮真の人柄の良さはこういうところで出る。彼はどんな相手に対しても、労いの言葉を忘れないのだ。

「とんでもございません。これも商売ですから……それに、此のくらいの年齢ですと、何処の店も買い手がつきにくいので、逆に感謝されたくらいでして……何しろ、無駄飯を食わせずに済みますので」

顔の前で手を振って亮真の言葉を否定した店主へ、亮真は冷ややかな視線を向けた。

少し視線を走らせた限りだが、店主の後ろに立ち並ぶ奴隷達は、女の数が多いように思える。

亮真は、店主へ強い口調で問いただした、

「まぁ良い。それで？　人数や比率はこちらの要望どおりなんだろうな？」

「はい……実は今回、全部で３２０名、連れてきております。男女比で言うと7対3で女の方が……」

「多いのか？」

「はい……どうしても、労働奴隷としては男の方が売れ易いので……お約束の３００名より多いのは、その……」

口ごもる店主に、亮真は不機嫌さを隠さなかった。

「男が少ない詫びのつもりか？」

店主は無言のまま愛想笑いを浮かべた。

「まぁいい……五体満足ではない者は入れていないな？」

「はい。それは十分に吟味しております。病持ちもおりません」

鞭で打たれた傷跡は殆どの奴隷が持っているようだが、回復の見込める範囲の傷だけのようだ。

流石に、奴隷商人達も信用が掛かっているので、その辺は十分に確認してきているらしい。

「判った。お前を信用しよう……では、全員を引き取る。残りの残金は７５万バーツだな？」

「はい、左様でございます」

亮真は軽く頷くと、用意してあった袋を店主へ差し出した。

「毎度ありがとうございます」

店主は差し出された袋の中身を確かめようともせずに鞄（かばん）の中にしまうと、丁寧に頭を下げた。

そして、2枚の書類を亮真へと差し出す。

「それでは最後に、こちらの引渡し書へ署名(サイン)をお願いいたします…はい、これで正式にこの場に居る奴隷の所有者は御子柴様となりました。一枚は貴方様が、もう一枚は私共の控えとなります」

書類に亮真の名前が書き込まれたのを確認し、店主は満足そうに頷くと手元に残った書類を鞄(かばん)へ入れる。

「それでは私共はこれで。今後とも、我がアブタール商会をどうぞご贔屓(ひいき)くださいませ」

買い手の着かない奴隷を処分して、ホクホク顔の店主は、再び頭を下げると、店の店員達を引き連れて陣を後にした。

「さてと……リオネ！　全員に用意してある服を配れ。其の後は……ローラ！　メシの準備は出来ているな？」

大地(アース)世界の気候は温暖なようだが、流石に、裸のままでは病気になる。

先日、裏路地に軒を連ねた店の店頭で、奴隷がどんな扱いを受けているか見てきた亮真は、奴隷用に衣類と下着、そして暖かい食事を準備していた。

引き渡すときに、奴隷の服くらいは店側で準備しているかと思ったが、この世界にそんなサービスは存在しないらしい。

先ずは、裸のままの奴隷達に、衣服を着せてやらなければならない。

紅獅子の団員達が、首輪をされたまま意思を持たない人形のように、その場に立ち尽くす奴隷達へ服を配っていく。

「坊や！　とりあえず配り終わったけど……」

服を配り終えたリオネが困ったような表情で亮真を見た。

原因ははっきりとしている。服を手に持ったまま立ち尽くす子供達の所為だ。

一般的に、自分が裸同然の状態で服を渡されれば、先ずは渡された服を着る。

少なくても、着ていいかどうかを尋ねるくらいはする。

ところが、この場に居る子供達は戸惑いの表情を浮かべたまま、無言で立ち尽くす。

渡された服を素直に受け取ったのに、手に持ったまま何もしないのだ。

「こいつは……何で服を着ないんだ？　まさか着方を知らないっていうんじゃないよな？」

三つや四つの幼児ではない。幾ら奴隷だとは言え、服の着方が判らないなどと言う事があるだろうか。

「亮真様……私に任せてはください」

ローラはそういうと、子供達の前へ歩み寄り、やさしく語りかけた。

穏やかでやさしい声。

すると、子供達の顔に変化が生まれた。

初めは驚き、そして疑いのまなざし。だが、ローラが話しを進めるうちに怯えながらも、彼らは手にした服を身につけ始めた。

ローラに話しかけられた子供達が先ず服を着だすと、それは周囲へ瞬く間に伝染する。

「何を言ったんだ？　いったい……」

亮真が驚きの声を上げたのも当然だった。

奴隷の子供達の表情はまだ暗い。だが、ローラの言葉を聞いた後、少しだけこちらに対して興味を持ったように感じられた。

それは、本当に僅かな気配ではあったが、今までの無表情で人形の様な状態からほんの少し人間へ近づいたように亮真は思えたのだ。

「簡単な事です。渡した服は貴方達の物だと言ったんですよ」

「どういうことだ？　そんなの当たり前だろ？」

亮真の疑問は当然だ。彼にとって、配った服は既に子供達へ与えたものなのだ。

だが、ローラは首を振った。

「奴隷はそう考えません。主人から明確な言葉を受けて初めて与えられたと考えるのです……私達姉妹もずっとそうやって生きてきましたから……」

少し考えれば判る事だ。

物として、扱われてきた彼らは常に人の顔色を伺い、己の意思を殺してきた。

買われるまでは奴隷商人達の、買われてからは主人の意向が、彼ら奴隷の生死を決める。

彼らは意思を持たないのではない。意思を持たないように自制しているだけ。

不興をかって殺されないように。

「あぁ……そういうことか」
ローラの言葉に、亮真はようやく状況を理解した。
子供達は明確に亮真から許可を貰わなければ何も出来ないのだ。
いや、してはいけないと思い込んでいるのだ。
亮真はまず、子供達に告げなければならなかった。彼らは人間なのだと。意思を持つ、人なのだと。
高らかに言ってやらなければならなかったのだ。彼らは自身が人であることを思い出すために……

――――――――――――――――――
――――――――――――――――――
――――――――――――――

メリッサの運命は其の日、人生2度目の劇的な変化を迎えた。
彼女の運命が始めて大きく変わったのは、今から3年前の事。
ザルーダ王国の小さな漁村に生まれた彼女は、貧しいながらも、両親と兄妹に囲まれそれなりに平穏で幸せな日々を過ごしていた。
だが、そんな生活は突然終わりを告げる。
ウォルテニア半島を根城にしている海賊達の略奪にあって……

数年前より半島を根城にした海賊達が、交易船を襲っている事は、彼女も子供ながらに聞いていた。
だが、交易船に満載された品は高価だが、こんな漁村を襲ったところで得られるものは高が知れている。
事実、それまでは一度だって彼女の村が襲われた事はない。
誰が、魚の干物を奪うために村を襲いに来るものか。
だが、そんな思いは現実の前では無力だ。
襲われるはずがないと言う思いは、目の前で繰り広げられる殺戮(さつりく)に何の意味も持たない。

両親は海賊達が振るう槍に貫かれ死んだ。兄妹や幼馴染は散りじりになってしまいどうなったのかすら不明だ。

当時１１歳だった彼女に出来る事はただ一つ。その場から逃げる事だけ。

海賊達の手によって放火され、黒煙が充満する村の中を彼女は必死で駆けた。

ただただ、生き延びるために。

この後の事を彼女は何も覚えていない。

村の外へ向けて走った事だけは鮮明に覚えていたが、彼女の記憶はそこで途切れていた。

次に覚えているのは、どこかの町の片隅で、一人の男に拾われた事。

そして、いつの間にか首に首輪を付けられ、店の表に裸同然で並べられている自分の姿だ。

何故自分がそんな眼に合うのか、彼女は全く理解できなかった。

だが、次第に覆しようのない現実が彼女に襲い掛かる。

何を言っても鞭を振るわれる現実。

泣いても鞭を振るわれ、叫んでも鞭を振るわれ、懇願しても鞭を振るわれた。

そうやって、体に鞭によって出来た傷跡が増えるたびに、彼女は身の処し方を学んでいく。

彼女が生きる為には、自らの感情を殺し、何も感じない人形を演じる他にない。

そして、其の思いは、何時までも買い手の付かない奴隷を処分する商人達の姿を見続ける事で、より一層彼女の心を縛り付けた。

女である彼女は、決して体力には恵まれていない。顔も可愛いとはいえ、絶世の美女と言うわけでもない。

これでもう少し年齢が上だったらば、性奴隷として売られたのかもしれないが、彼女は今年１４。

数年に及ぶ奴隷の生活によって、彼女の体はやせ衰えており、決して男の獣欲を掻きたてるような体つきではなかったのだ。
おそらく、彼女は御子柴亮真が購入しなければ、売れ残りの不良品をして殺されていたに違いない。
だが、運命は気まぐれにも彼女に生きる余地を与えた。

（この服は……何？　どうしろと言うの？）
奴隷商人達に仲間と共に連れてこられたメリッサは、ひげ面の男から服と下着を一式貰った。
周りも同じように服を手にしているが、誰もが困惑した表情を浮かべている。
（これは何？　着ても良いの？）
今のメリッサが身につけているのは、何ヶ月も着たままの下着と、鞭で引き裂かれボロ布のようになったシャツが一枚。それだけだった。
服を着替えたい。そんな思いは当然彼女も持っている。
だが、其れが叶えられる事は無い。何故なら彼女は物でしかないから。
普通に考えれば、手に握っている服は自分達へ与えられた物だ。
だが、同時に、そんな筈はないと言う否定の気持ちがメリッサの心を埋め尽くす。
（ダメよ……私は物なの……物に服を与える人間はいない……）
今までも似たような事は有った。
食べ掛けの肉をワザと彼女達の前に放り捨てるのだ。如何にも「さぁ食べろ」と……だが、それは奴隷商人の意地の悪い罠。もし、其の肉を拾って口に運べば、待っているのは鞭の嵐。
メリッサも過去幾度となく目にしてきた光景だ。
日々の食事で奴隷に与えられるのは、硬いパン１個と冷めた塩のスープのみ。

肉が出される事など天地が逆さまになってもあり得ない。
そんな食生活の中である。例え地べたに落ちた肉であってもそれを食べたいと思うことは無理からぬ事だった。
それを見越して、奴隷商人達はワザと肉を奴隷の前にぶら下げる。
奴隷と言う身分を彼女達の体の芯まで植えつけるために。

この広場に居る全ての子供達は、そんな光景を幾度となく見てきた。
だから、誰も動かない。
ただただ、その場に立ち尽くすだけ。

だが、事態は思わぬ方向へと転がりだす。
金髪の女が自分達の前に立つと、思いもしなかった言葉を口にしたのだ。

「寒いでしょう？　それは皆さんの服です。皆さんに私の主人である御子柴亮真様が与えたのです。安心して其の服を着なさい……主もそれを望んでいます」

其の言葉を聞いたとき、メリッサは自分の耳を疑った。
（奴隷に服を与える？　本当に？　こんなに良い服を？）
別に絹製な訳ではない。街中の洋服屋で幾らでも買うことのできる品だ。
だが、麻で織られたこの服はとても奴隷が着るような品ではない。町の平民が普段着にするような品なのだ。
それも新品である。古着ではない。
奴隷へ与えるには過分な品と言えた。

メリッサは周囲の顔色を窺う。
誰もが、女の言葉を聞いて半信半疑なようだ。

だが、女の口調は穏やかで、澱みがない。とても嘘を付いているようには思えなかった。

「大丈夫です……さぁ早く服を着なさい！　この後は皆さんに食事も用意していますから！」

其の言葉に促され、一人の少年が服を身につけ、女の方を見た。そして彼女が少年に頷くのを見ると、周囲の奴隷達も服を身に付け始める。

そして、全ての奴隷が服を着替えると、一人の男が彼女達の前に立つ。

まるで、彼らの王のように堂々とした態度で……

この日、奴隷として日々を過ごしてきた彼らの運命が変わる。

それは、より過酷で自由な人生の始まりであった。

第3章第12話

西方大陸暦２８１２年８月１７日【強き者】其の２：

服を着替えたメリッサ達奴隷は、いくらか小ざっぱりとした格好になった。

とはいっても、何年も風呂になど入ってはいなかったし、髪の手入れ等も行っていないので、伸び放題に伸びた髪が所々よじれて団子の様な状態になっている。

言うなれば、路地に座り込む浮浪者と程変わらない状態なのだ。

今、配られた新品の服が逆に、彼らの汚れを際立たせてしまったとも言える。

「まぁ……取りあえずは飯が先か……風呂は……この人数じゃ厳しいか……いや……でもこの格好はちょっとなぁ」

亮真の嘆きも当然と言えた。

彼の前に虚ろな目をして立ち尽くす奴隷の集団。何しろ３２０名もの大人数なのだ。

服や食事はまだ、何とでもなるが、風呂は流石に厳しい。

街中には一般住民向けの共用浴場が存在しているが、一人は二人ならともかく、３２０人もの人数は流石に受け入れきれない。

第一、これ程までに薄汚れていたら金を幾ら払っても、恐らく使用は拒否される可能性が高い。

一所に入っている一般人が慌てて飛び出て行く光景が眼に浮かぶ。

だからと言って、風呂屋を一軒貸切ることもまず無理だろう。

勿論、貴族と言う身分を笠に着れば無理を押し通す事は可能だが、イピロスはザルツベルグ伯爵の領地。

他人の領地で横車を押すのは、賢明な判断とは言えなかった。

「まずは食事を取らせましょう。せっかく暖かい物を準備しているのですから……お風呂はそうですね、お湯を沸かして拭うのが精一杯ですね……流石に街中にこの人数は不味いでしょうし」

ローラの言葉に従い、亮真はリオネ達へ向かって頷いた。

「判った……リオネ！　始めてくれ！」

やるべきことは、幾らでもあるのだ。

「ほら！　アンタ達！　ここに並ぶんだよ！」

リオネの言葉に従い、子供達は5カ所に分かれて列を作る。
あまり機敏な動作ではないが、こちらの言うことには従うらしい。
戸惑い、周りの顔色を窺いながら動く子供達。
彼らは、未だに鞭の痛みに怯えているのだろう。仮に従わないとしても、亮真は鞭を使って脅しつけるような事は考えていないのだが、そんな思いは奴隷である彼らに伝わるはずもない。
ローラの言葉に従い、服を着替えても、彼らの眼は未だ人間の意思ある目にはほど遠かった。

「良いかい！　熱いからね。注意して食べるんだよ！」

リオネの言葉をメリッサは信じられなかった。目の前の椀に湯気を立てたスープが注がれ、自分に手渡されてもだ。
丼の様に大きくて底の深い椀には、たっぷりとスープと具が注がれている。
人参、玉ねぎ、ジャガイモ、それに肉だ。恐らく牛の肉を１ｃｍ

角に切って煮込んだのだろう。
平民でも、日常的には食べられないほど豪華な具だ。
大抵の平民は、玉ねぎやトウモロコシのスープがほとんどである。
数種類の野菜に、肉を入れるのは特別な祝い事が有る時くらいな物だ。
少なくとも、貧しい漁村で暮らしていたメリッサには、目の前のスープがとてつもなく贅沢な料理に見えた。
（これって……どういう事？　なんでこんな贅沢な……）
メリッサは椀から感じる熱気が信じられなかった。
奴隷になって、買い手を待ち続けたこの数年の彼女の食生活は悲惨としか言いようがない。
昼と夜の2回。平皿に注がれるスープは出汁（ダシ）などろくに取っていない上に、塩をケチっている為、僅かに味が付いたような物でしかない。
しかも、大量に作り置きした物で、湯気が出ていることなどまず無い。冷たい水の様なスープなのだ。
それに付くのは、焼いてから何日も経ってカチカチに固くなったパン。そのままではとても噛み切れないそれを、スープに浸して柔らかくして食べるのだ。
最下級の平民でも、もう少しマシな物を食べていた。年に何回かは肉だって口にする事が出来る。それほど、奴隷の食事は貧しく酷いのだ。
だからこそ、目の前の現実が信じられない。
メリッサの脳裏に、奴隷になる前の記憶が浮かび上がってくる。
（暖かい……そう……お母さんが作ってくれたスープみたいに……）
貧しくとも、メリッサの母親は何時も食卓に暖かいスープを出した。
具は大した物が入っていたわけではない。野菜が少し入っているだけ。肉や魚なんかは年に何回か口に入れば良い方だ。
それでも、メリッサにとって母のスープは最高のご馳走だったの

だ。
いつも熱々で、心に沁みる味……

「熱っ！」

椀の中を見つめていたメリッサの横で、少年の口から驚きの言葉が響いた。
それに伴い、彼の椀が地面へ落ち、中のスープが地面に浸み込む。
手で口元を抑えているところを見ると、我慢する事ができなくて、主人の意思も確認せずにスープを口に入れたのだろう。
周囲に居た子供達の顔に怯えの色が浮かぶ。
彼らにとって、主人の許しを得ずに食事をするなど命を捨てるのと同じ事なのだ。ましてや、これ程に贅沢なスープを零したとなれば……
周りに座り込んでいた子供達が、すばやく蹲る子供の傍を離れた。
これも奴隷の処世術なのだろう。鞭打たれる仲間の傍に居たら、どんなとばっちりが自分に降りかかるか予想もつかないのだ。それを保身と蔑むのは簡単だが、人間はそんなもんである。
だから、周囲の子供達は銀髪の少女が彼に駆け寄ってきた時、ただでは済むまいと心の中で神に祈った。
その予想が裏切られる事も知らずに……

「大丈夫？　火傷はしていない？」

優しく穏やかな声。
怒声を覚悟していた少年が恐る恐る声の主を見上げた。

「本当に大丈夫？　足とかにスープが掛ってたりしてない？」

サーラはそう言いながら、地面にひっくり返った椀を掴んだ。
ものの見事にひっくり返された椀の中身は、全て地面にぶちまけられ、食欲を掻き立てる匂いを周囲にまき散らしている。

「うん……とりあえず火傷は口元だけみたいね……慌てて食べるからよ？　注意しないと……ね？」

サーラの言葉に少年は驚きの表情を浮かべた。
彼女の言葉が、純粋に自分の体を心配しているのだと言う事を理解したのだ。
それは、周囲で成り行きを見つめている他の子供達も同じだった。

「うん……今度は注意して食べるのよ？　……て……え？！　待って！　待って待って！」

彼のスープは既に地面に吸い込まれていて、流石に食べる事は不可能だ。
だからサーラは新しくスープを貰って来いと言ったのだが、少年はそうは取らなかったらしい。彼は躊躇（ちゅうちょ）なくその場に跪（ひざまず）くと、土の付いた野菜や肉をかき集める。
サーラが止めなければ、彼は迷うことなく土が付いた具を口に入れたに違いなかった。

「そうじゃないの……ええっと……あそこ！　あそこに居る赤い髪の女の人からもう一回スープを貰ってきて食べなさいってこと」

あまりに予想外の行動を目にした為、サーラはかなり動揺してはいたが、必死にリオネの方を指し示した。
彼女の言葉に少年は不安と疑いの混じった視線を向ける。その眼

が彼らの過去を全て物語っていた。

「大丈夫だから。ね！　良い？　落としたものは食べなくていいの！　ちゃんとみんなの分は有るんだから！　良い？　今度は注意してゆっくり食べるのよ？」

サーラの言葉に促され、彼らは恐る恐る我慢していた椀へ口を付ける。

少なくても、食べてよい事だけは理解したようだ。

「ふぅ……本当に大丈夫なのかしら……」

彼女は亮真の心を理解している。

暖かい食事も、新しい服を与えた事も決して善意だけではないのだ。

人としての意思を持たせる事。それは欲を思い出させることに他ならない。

食べ物に、着る物に、住み場所に。

他人と比べ、自分の境遇を理解し、その差を憎む。だからこそ人は向上心を持ち、努力する。

欲は人を行動させる原動力としては最も強い物だ。

欲が有るから、人は求め、渇望する。だが、奴隷にはそれが無い。それも当然だ。彼らの根幹にあるのは諦め。変えられないと思い込んだ現実。

決して手に入らないという諦めを持たれては、どれだけ条件を提示しようと意味は無い。

何しろ初めから手に入らないと、諦めているのだから。

だが、それはたった一つの事を思い出させるだけで変わる。

自分達が人間である事。前に進む意思を持つ生き物である事を思い出させるのだ。

勿論、今すぐ思い出させる事は無理だ。彼らの絶望は、今この場でどうにかなるほど甘いものではない。

マルフィスト姉妹とは根本的なところで違っている。彼女達姉妹は、戦奴隷ではあったが、家系の誇りを持った人間であった。心の拠り所が有ったのだ。

だから、亮真は6ヶ月と言う期間で彼らを教育する事を計画している。

その間に、彼らが人としての意思を取り戻せば良し。だが取り戻せなければ……

（どうされるおつもりなのかしら……）

尤もその答えを知る人間は誰も居ない。

亮真自身ですら明確な答えを持っていないのだから。

そこまで考えたサーラは思考を止め、周囲を見回す。

誰もがスープとパンを貪（むさぼ）る様に口へ詰め込んでいた。

彼らが無言である事を除けば、まさに活気ある光景とも言える。

既に、大鍋の前にはお替りを貰う為に長蛇の列が出来ていた。

少なくとも彼らは美味い食事をして、食べる喜びを思い出したのだろう。

（どうやら……まずは成功みたいね……）

少し離れたところで子供達に話しかけていたローラも同じような事を思っていたのだろう。妹のサーラの視線を感じたのか、無言で頷いてきた。

まずは飴を与えた。明日からは鞭の番だ。

それは過酷な訓練。

初めは基礎体力を向上させ徐々に戦闘技術を教え込む。

槍と剣をメインに、馬の乗り方、素手での戦い方。

1ヶ月の間、彼らは徹底的に扱（しご）かれることになる。その後は体を鍛えながら法術の習得。

そして最後の1ヶ月で彼らは実戦を経験する。
人を殺し、怪物（モンスター）を殺し、そうやって命のやり取りをして残った子供だけが、自由を手に入れる事が出来る。
もし、それが出来なければ待っているのは逃亡奴隷の道か死しかない。

御子柴亮真が欲しているもの、それは強者だけ。
過酷なこの大地（アース）世界で、みんな平等だとか、弱者救済などと言う思想は害悪にしかならない。
生きる意思の無い者を助ける余裕などないのだ。
強くなる為の手助けは出来る。だが、強くなるかどうかは個人の意思次第。
子供たちが弱者のまま死ぬか、強者として生まれ変われるか……
それを知る者はだれも居ない。

第３章第１２話（後書き）

第3章第13話

西方大陸暦2812年8月19日【交渉】其の1：

「おぉ、御子柴殿。良く来てくれた……ずいぶんと奴隷共を買い集めたようだが、半島開発の準備の方は順調に進んでいるかね？　まぁ、奴隷に眼をつけたのは悪くはないが、半島の開発には不向きなのじゃないかと心配でね。何しろ所詮は牛や馬と変わらん労働力でしかない。半島を徘徊している怪物（モンスター）共の餌にしかならない気がして仕方がないんだがね」

ザルツベルグ伯爵は応接間へ入ってきた亮真を見るや否や、いきなり探りの言葉を浴びせてきた。

流石に、イピロスの支配者だけある。亮真の行動は既に筒抜けのようである。

夫妻の格好は、先日ほど華美ではない。

仕立てのよい服ではあるが、装飾品も最低限であり、自室で寛ぐための服のようだ。

亮真の為に用意したのか、テーブルの上には湯気の立つカップが3つ置かれていた。

「まぁ貴方ったら……男爵様が座っても居ないのにいきなりそんな事を聞いて……申し訳ありません。男爵様……ウチの人ったらせっかちで。さぁどうぞ、お座りになってくださいな」

伯爵夫人は夫を嗜めると、亮真に椅子を勧める。

「これは申し訳ない！　何しろ女王陛下より幾度も使者が来ていて

な……つい、焦ってしまったのだ。いや、失礼した」

そういうと、伯爵は髪を撫で付けながら頭を下げた。

流石、夫婦。息はぴったりである。

「いえ、御気になさらないでください。……実は本日急にお時間を頂いたのは其の事なのです……閣下」

亮真はいかにも困ったと言った表情で伯爵を見る。

「ほう？　何かお困りかな？　まぁ、昨日、突然使者を貰った時から何かあったとは思っていたがね。やはり奴隷の件かね？　ずいぶん若い奴隷ばかり大量に買った様だが、使い道に困ったかな？　よければ私の方から口利きしてあげてもかまわないよ？　なぁに、全額は無理だが奴隷商人共から上手く金を取り返してあげよう」

伯爵はそういってにこやかに笑う。

よほど、亮真に対して恩を売りたいらしい。

用件も何も聞いていないのに、伯爵は奴隷の使い道に困って亮真が泣き付いてきたと思いたいようだ。

（よほど子供ってのは売れない様だな……それに、やはり俺達を監視してたか……問題はルピスの差し金かこいつらの独断かだな……）

別に亮真が伯爵邸を訪ねたのは、奴隷を引き取ってもらいたいからではない。

もっと別の物を売りに来たのだ。

だが、伯爵の態度は余りにも恩着せがましい。余程、亮真に対して関わりを持ちたいようだ。

伯爵の早とちりに嘲笑が湧き上がってくるのを押し隠すと、亮真は戸惑うっているように見せかけながら用件を切り出す。

「はい……実は困った事になりまして……」

「やはり奴隷の件かね？」

伯爵の問いに亮真は無言で首を振った。

一昨日、奴隷商人から購入し、今日から基礎訓練を行う手はずになっている。

その子供達を売り渡しにくるはずがない。

亮真が否定した事で、婦人は探るような視線を向けた。

「まぁ？　では、何ですの？　我が家は女王陛下より男爵様のお力になるようにと勅命を受けております。何なりとおっしゃってくださいませ。きっとお力になれると思いますわ。ねぇ？　貴方」

伯爵夫人の言葉を聞いて、亮真の背に冷たいものが走り抜ける。

何気ない一言だが、婦人の言葉にはある事実が含まれていた。

（お力になるように命じられた……ねぇ？　やっぱり監視役を命じられていたか……あのクソ女め……流石に、このまま俺を無視するとは思わなかったがな……伯爵に命じていやがったか……まぁいい。其れならそれでやりようは有るしな……）

亮真を警戒しているルピスが、そのまま放置しているはずがない。

案の定、ザルツベルグ伯爵の方に見張りを命じていたようだ。

お力になるように命じられた、と言う婦人の言葉を鵜呑みにするほど、亮真はボケていなかった。

「そうでしたか……」

先日の歓待も女王の命令の影響なのだろう。ただし、この夫婦はルピスの飼い犬ではない。

外面は忠義者のように装って入るが、王家の資源を横領するよう

な人間だ。
（やはり、自分の利益になるなら何でもやるタイプの人間か……ならば、交渉の余地は有るか……鉱脈を売り渡す条件に、ルピスへの報告は適当に情報を誤魔化してもらうって条件を上乗せして話すのが一番だろうな……まぁ、全ては俺の演技力次第……下手に勘繰られればそれで終わりだ）
伯爵夫妻を侮るのは危険だ。
タイミングを見計らわなければならない。
用件を切り出す最適なタイミングを……

「うむ……だから御子柴殿も遠慮なく相談してくれ。出来るだけ力になるからね……それで？　奴隷の件ではないとすると、一体どうしたのかね？」

伯爵が探るような視線を向けた。
よほど亮真の行動が気になるらしい。

「実は……半島に有る塩の鉱脈の事で……」

亮真の言葉によって、室内が凍りついた。

「……どういうことかね？　何故、君が其の事を知っている？　自分で調べたのかね？」

伯爵の顔から笑いが消え、亮真へ鋭い素線を向けた。
疑惑と猜疑心に凝り固まった眼。
とぼけると言う選択をしなかったのは、もはや言い逃れをする意味が無いということだろう。
（クソ！　何故、こいつが鉱脈の事を知っている？　あそこは、ミストール商会の手で厳重に管理されているはず……やはり、先日の

晩餐で何か気がついていたのか？　どうする？　殺すか？　いや、最終的には殺すとして、其の前に確認する必要があるか……）

最悪、亮真を殺せばそれでカタはつく。

男爵と伯爵、同じ貴族ではあるが位の差は大きい。

まして、此処はザルツベルグ伯爵の屋敷であり、王都は遠く離れている。

はっきり言って、どうにでも出来るのだ。ただし、其の選択をする前に、伯爵は確かめておかなければならないことがあった。

「実は……先日、こんな物を受け取りまして……」

「何！　貸せ！」

亮真が差し出したのは一枚の手紙。

街中の店で普通に買える紙とインク。筆跡を隠すためにワザと乱されたミミズの這ったような文字。

如何にも曰く有り気な手紙だ。

伯爵は手紙の内容を素早く斜め読みをすると、黙り込んだ。

（チィ！　何処の誰がこんな余計な事を……？）

伯爵は激昂した心を落ち着けて、亮真の言葉を分析する。

（クソ。誰がこんな余計な事をコイツに告げた？　クリストフの小娘か……恐らく間違い有るまい。あの小娘は曲者だ……こちらの動静を把握していても不思議ではない）

今、イピロスの町で伯爵に対して敵対的な行動を取る人間は限られている。

その中でも、連合商会長の座から蹴落とされたクリストフ商会は、最も危険な敵だった。

伯爵がミストール商会へ肩入れして居る為、イピロスの経済はミストール商会を中心に動いている。

だが、長年イピロスの連合商会長を務めて来たクリストフ商会に

は、歴史の重みが有る。
（ミストールが商会長の座に就いて既に3年。後2～3年で、クリストフの小娘の息の根を止める事が出来ると思っていたのだがな……いや、だからこそ……か。）
今まで、伯爵の圧力に耐えるだけだったクリストフ商会が反撃に出る。最も可能性の高そうな話であった。
（情報をコイツにもたらしたのがクリストフの小娘として、コイツは何故、私のところに来た？）
シモーヌ・クリストフがウォルテニア半島に存在する塩の鉱脈を付きとめたのは良い。
若い女で有りながら、商会を維持しているのは伊達ではないのだから。だが、問題はそのあとの行動だ。
（あの小娘が鉱脈の事を知ったとして、なぜ自分で動かない？　態々目の前の男に知らせたのは何故だ？）
半島に存在する岩塩の鉱脈を横領している。この事実を効果的に使うには、王家に対しての密告が一番効果的に思える。
何しろ、王家の資源を横領しているのだ。一族郎党処刑されることになる。
それを態々、目の前に座る成り上がり者に告げる。ハッキリ言えば、余り意味が無いと言えた。
（まぁ良い……焦る必要はない……この成り上がり者の話を聞いてからでも遅くは無い……何しろここは私の領地なのだから……）
ザルツベルグ伯爵の眼が鋭く、冷たく光る。彼は隠していた牙を剥き出しにした。かつて、自らの父親に剥いた牙を……

ザルーダ王国との国境近くに領土を持っているザルツベルグ伯爵家は、度重なる軍事予算の増加に因って破産寸前だった。
兵の増員。武具の調達。砦の建設。数え上げればキリがないほど、軍は金を食らう。

それでも、王家は何もしない。ザルツベルグ伯爵領はザルツベルグ伯爵家の裁量で運営されている。

それはつまり、口も出さないが、金も出さないという事。

だが、領土を、国を守るためにはどうしても軍の増強は外す事が出来ない。

節約に次ぐ節約。

貴族としての最低限の体裁をなんとか維持できる程度でしかない程、伯爵家は貧しかった。

それでもローゼリア王国の貴族として、王家への忠誠の為、歴代のザルツベルグ伯爵家は歯を食いしばって耐えて来た。

だが、現当主であるトーマス・ザルツベルグ伯爵は違った。彼は、己の欲を満たすために手段を選ばなかったのだ。

元ローゼリア王家直轄地であり、今は御子柴亮真男爵の領地となったウォルテニア半島。

そこに塩の鉱脈が有る事を知ったのは今から5年前の事。

イピロスから徒歩で1日程半島へ入った山に其の鉱脈は存在した。

それは、本当に偶然の出来事。

ウォルテニア半島には住民が居ない。それは、凶暴な怪物（モンスター）や亜人が徘徊する土地である事が理由なのだが、住民は居なくても、人間は居なくはないのだ。

犯罪者、流刑人、そう言った人間の他に、ある特定の職業に就く人間が時たま半島へ向かう事が有る。

冒険者、傭兵。

戦う事を職業にする人間。彼らにとって半島は実戦経験を積む良い戦場であり、金の稼ぎ場所であった。

何しろ、生息するのは高位の怪物（モンスター）ばかり。皮も牙もかなり良い値段で取引される。

命がけではあるが、それに見合った物を得る事が出来るのだ。

塩の鉱脈を見つけたのは、そう言った目的で半島へ入った冒険者の一団。とはいっても、彼らは別にそれを、自分たちでどうにかしようとしたわけではない。

塩は必需品であるし、それなりの値段で取引がされるが、大量に採掘して捌かない限り採算が採れない。

彼らも、ギルドに採取した品を納める際に、ポロっと漏らしただけの話。

それが、周り回って伯爵家にもたらされたのは、幸運だったのか不幸だったのか……

少なくとも、軍事予算の増加にあえぐザルツベルグ伯爵家に取ってそれは、神の祝福にもにた出来事だった。

当時、まだ伯爵家の嫡子でしかなかった３０歳のトーマスは、当主である彼の父親に必死で懇願した。

伯爵家の財政を立て直す最後の機会だと訴えた。

何しろ、目の前に宝の山が埋まっている事を知らされたのだ。それで平常心を保てと言う方が無理である。

これが、もっと半島の奥地であったなら、トーマスは躊躇しただろうが、徒歩で1日ならさほどでもない。

怪物の徘徊する魔境とはいえ、イピロスから1日程度なら、まだ入り口付近と言える。遭遇率もさほど高い物ではないのだ。

だが、トーマスの父は彼の言葉を無視した。いや、単に無視しただけではなく、侮蔑の眼を向けたのだ。

父親にしてみれば、それは当然の事だった。

長年、ザルーダ王国との国境を守ってきた自負と誇り。それは、ローゼリア王家への揺ぎ無い忠誠心を基盤としている。

いくら目の前にあるとはいっても、ウォルテニア半島は王家の領土。そこにある岩塩の鉱脈を使って財政を立て直そうと言うトーマスの主張は、王家の所有する資源を横領しよう言っているのと同じ

事だ。

決して豊かではないにしろ、伯爵家の誇りがトーマスの主張を撥ね退けた。

だが、幼いころから倹約を押し付けられて来たトーマスにとって、ローゼリア王家に対する忠誠等欠片も持ってはいなかった。

王都からは遠く離れた国境地帯では、王家の目が行き届く訳も無い。それに、伯爵家に対して、王家が何か資金援助をしているという事実も無い。放置に近い程の無干渉。

無論、ザルーダからの侵攻が本格的になれば援軍は来るが、小競り合い程度の戦は、全てザルツベルグ伯爵とその周辺貴族達の受け持ちになっている。

父にとってそれは、王家がザルツベルグ伯爵家を信頼している証なのだが、トーマスにとっては違った。彼にとってそれは、割に合わない、一方的に損をさせられている状態にしか思えなかったのだ。

トーマスは、目に見えない信頼等と言うあやふやな物よりも、目に見える実利を重んじた。具体的に言えば金や資源、あるいは特権といった物だ。

トーマスと彼の父との話し合いは並行線を辿った。それはそうだろう。お互いに妥協の余地は無い。

実利と誇り。相反しない場合も存在するが、今回の場合はどちらか一方しか選べない。

結果、トーマスは父親をその手にかけた。

そうする以外に、彼の求める物を得る手段が無かったのだ。

（誰にも私の邪魔はさせんぞ……）

伯爵は心の中で呟く。

彼に今の生活を手放すことなど出来ない。

実の父親を殺してまで、手に入れた物なのだから……

第3章第14話

西方大陸暦2812年8月19日【交渉】其の2：

「貴様は……何を求めている？」

無言で睨みつけていた伯爵が、ゆっくりと口を開く。

既に、貴族に対しての礼儀など守るつもりはないのだろう。伯爵の言葉は明確に、格下の人間に対する口調へと変わっている。

猜疑心と警戒心が、好人物を装う作り物の仮面を、伯爵から捨てさせたのだ。

伯爵は鉱脈の情報を御子柴亮真へ齎（もたら）した人間を思い浮かべることが事が出来た。だが、どんな理由で彼女が自分で動かないのかが判らない。

伯爵を失脚させるのは十分な情報を持っているのに、それを自分では使わず、他人に教える。

そして、其の情報を与えられた人間は、王家ではなく伯爵の下へとやってきた。

伯爵の脳裏にある可能性が浮かぶ。

（強請（ゆする）るつもりか？）

下賤（げせん）な平民が、金になる情報を偶然得た時に良く行う行動だ。

目の前に座るこの男は、貴族ではあるが所詮は平民出身。金欲しさに、強請りに来たとしても不思議ではない。

（馬鹿が……素直に私が金を払うと思うのか？　いや、仮に払ったとして、それでどうするつもりだ？）

もし本当に伯爵を脅迫するつもりなら、直接会うべきではない。

脅迫者が自分の身元を明かして、有利になることなど何もないのだから。

だが、伯爵の予想は亮真の言葉によって裏切られた。

「そうですね……実は伯爵閣下に買って頂きたい物がありまして」

伯爵の鋭い視線を受けても、亮真の声に動揺はない。

彼は真正面から視線を受け止めた。

「買う？　何を買えと言うのだ？　私はてっきり強請りに来たのかと思ったがな」

伯爵も伯爵夫人も訝しげな視線を向ける。

買うと言う言葉も、言い方や雰囲気では強請りの要素を含むが、伯爵の耳には、亮真の言葉がそのままの意味にしか聞こえなかった。

それは、隣に座る伯爵夫人も同じだったのだろう。

二人が放つ疑問の視線は、亮真の言葉を正確に理解したと言う証だ。

「強請り……ですか、考えはしましたが、其のつもりはありません……それをすれば、閣下は躊躇うことなく、私達を始末するでしょうから」

亮真の飾らない言葉に、伯爵は唇を歪めて嗤った。

まさしく其のとおりだからだ。

脅迫された者は、脅迫した者を決して放っては置かない。脅迫が一度では終わらないからだ。

2度、3度と際限なく金を毟り取られることになる。

伯爵が、完全に破滅するまで何度でもだ。だから、伯爵は決して脅迫者を生かさない。

例え金を払ったとしても、それは脅迫者を殺すための時間稼ぎに

過ぎないのだ。

「なるほどな……結果を理解しているとは、平民出身にしては中々良いヨミだ」

塩の鉱脈を横領し始めて5年。

厳重に秘匿されているとはいえ、何かの弾みでこの秘密をかぎ当てた人間は極僅かだが存在した。だが、この話が今でも王家に洩れていないのは、伯爵がそういった邪魔者を的確に容赦なく排除してきたからだ。

伯爵自身も自分が危険な橋を渡っていることを十分に理解している。だからこそ、彼は慎重で、容赦をしない。

「貴方……私は男爵様の売りたい品に興味があるわ」

「そうだな……御子柴男爵。売りたい品とは何だ？」

夫人の言葉に伯爵は頷くと、亮真の答えを待つ。

今度の口調は、相変わらず上から目線だったが、平民上がりと馬鹿にしたような高圧的な態度が消えた。

今、彼は好奇心に支配されていた。自分の性格をこれほどまで把握している亮真が、どんな物を売りに来たのか、伯爵は確かめたくなったのだ。

「では、これをご覧ください」

亮真は、用意してきた書類を伯爵夫妻の方へと押しやった。

「これは……」

「契約書？　ですわね」

「塩の鉱脈の譲渡に関しての契約書です」

亮真の言葉に従い、夫妻はすばやく内容を確認する。

「確かに……だが……」

「どういうこと？　これには金額が書いてないわ」

夫妻の疑問は当然だった。

売りに来たはずなのに、売値が書いてないのだから。

「売りには来ましたが、お金を払って頂くつもりはありません」

亮真の言葉に、伯爵も夫人も不思議そうな顔をした。

「では、何と引き換えに売る気だ？」

「伯爵様には、私の後ろ盾となって頂きたいと考えております」

「どういう意味だ？　私は先日、貴様に助力は惜しまないと言った筈だが？」

伯爵の言葉に、亮真は無言で首を振った。ただ、それだけのことだが、伯爵夫妻には亮真が求めていることが伝わる。

確かに、先日の晩餐の時にも、今日会った時にも、伯爵は亮真に対して友好的な態度をとり、助力する事を約束している。

だが、其れが伯爵の本心からの言葉かと言えばそうではない。
ルピス女王の命令による監視と、岩塩の鉱脈を横領していると言う負い目が、彼に言わせただけの事。
本当に手を貸す気などないのだ。少なくても今までは……

（なるほどな……見せ掛けではなく、本当に私の助力が欲しいのか……）

伯爵は亮真の要求を正確に理解した。
（まぁ、別にこの男に助力をするのは構わんか……王都でふんぞり返って命令を出すだけのルピスより、コイツは礼儀を知っている…それに、平民にしては知恵が有る……少なくとも、馬鹿ではない。特に金を要求しないところが……な）

伯爵の表情が弛むのを見た亮真も、穏やかに笑みを浮かべた。
（やっぱり金ではなく、助力にして正解だったか……まぁ、王家の資源を横領してまで金にこだわるほどの人間だからな……俺に金なんか払う筈もないか。何しろ現実に鉱脈を握っているのは伯爵。例え、本来の持ち主に対してだろうと、金を出したくないだろうと考えたのは正解だったな）
伯爵は金が必要で、塩の鉱脈を横領したのだ。
其れが正当な要求であったとしても、ザルツベルグ伯爵に金を出す気持ちなどあるはずがない。
亮真は、伯爵が金に固執する人間である事を見抜いていた。
その判断の正しさが今、伯爵の表情に現れている。

「御子柴男爵様？　私（わたくし）にはこの書類の価値が判りませんの。申し訳ないけれど、説明して頂けるかしら？」

商家出身の伯爵夫人は、非常に優れた政治家でもある。
ザルツベルグ伯爵家の建て直しの為に、嫁いできたのだが、彼女は立派に其の役目を果たした。
其の彼女の目から見て、この書類には値千金の価値が有る。だが、彼女はあえて価値が判らないという表情を浮かべて亮真へ問いかけた。
理由は2つ。
足元を見られて値を吊り上げられないためと、この筋書きを考え付いたのがこの男なのかを確かめるため。
裏に黒幕が居ないかと疑ったのだ。

「そんな事は、私が改めて説明する必要もないでしょう？　夫人がそういった法の専門家である事は有名ですからね」

亮真は夫人へ笑顔で答え、揺ぎ無い視線を夫人へ向けた。
両者の間で、無言のやり取りが行われた。
（揺らぎのない視線……その場しのぎで言っているんじゃない。コイツは本心からそう思っているのね）

「良いでしょう……アナタの提案に価値があることは認めます。ですが、少し時間をいただきたいわ。夫とも相談したいから」

「判りました。今日のところはこれで……ご連絡をいただければ改めてお伺いいたします」

夫人の言葉に頷き、亮真は席を立った。
彼は初めから、この場で商談が成立するとは考えていなかったのだろう。表情に落胆の色はない。
（まぁ当然だな……伯爵側からも条件を付けたいだろうし。今日、この場で署名される方が怖い……後で、手のひらを返されかねない

からな）

チラつかせた餌にザルツベルグ伯爵は興味を持った。後は、彼が喰いつくのを待つだけ。

静かに、ゆっくりと時間を掛けて待てば良い。

（たっぷり時間を掛けて悩んでくれ……そう、たっぷりとな……）

「えぇ……お手数を掛けて申し訳ないけれども。では、日を改めて」

夫人の言葉に一礼すると、亮真は扉の外で待機していたメイドに先導されて屋敷を出て行く。

――――――――――――――――――――――――――――――

「帰った……しかし、良かったのか？」

窓から亮真が乗り込んだ馬車を見つめていたザルツベルグ伯爵が、ソファーに座る夫人へ声を掛けた。

「えぇ、あの男もそれを初めから理解していた筈よ……まぁ演技だった可能性もあるけれど、もしそうだったならば、彼は天才的な嘘つきね」

夫人はそういって肩をすくめた。

彼女は、自分の人を見る眼に絶対的な自信を持っている。

実家の商会を切り盛りしていた頃は勿論、伯爵家に嫁いできてからも、彼女の周りには海千山千の曲者ばかりが集まってくる。

そんな連中と渡り合っているうちに、自然と身についた特技だ。

「そうか……私は、御子柴の話に乗っても良いと考えているが……ユリア、お前はどう思う？」

伯爵は夫人の前に腰を下ろすと、自分の心境を口にした。だが、実権を握っているはずの伯爵の口調には、どこか夫人に対して遠慮しているように感じられる。

それも当然なのかもしれない。伯爵はどちらかと言えば武人タイプの人間だ。

積極的な行動力と、冷酷な性格。だが彼は、自らが完全ではない事を知っていた。

特に、外交や政略と言った部分では、自分の力が平凡なものでしかない事を理解しているのだ。

だからこそ、伯爵は夫人の意見を重要視する。

金の亡者達と長年渡り合ってきた夫人は、伯爵にとっても、最も頼りになる相棒（パートナー）と言えた。

「幾つか気になるところはあるけれども、私も話しに乗っていいと思うわ」

「気になること？……クリストフの小娘の事か？」

伯爵にとって、一番気になるのは其の事だ。

イピロスの経済を掌握する商会連合の長を奪われた筈のクリストフ商会。本来ならとっくに潰れている筈なのだ。しかし、未だにクリストフ商会は規模を縮小しながらも存在し続けている。

だが、夫人は伯爵の言葉に首を振った。

「ちょっと違うわね……私が気になるのはあの男の本心の方よ」

「御子柴の事か？　確かにアヤツは平民ながら分を弁えている。礼儀も悪くない……頭の方もなかなかだしな。私は正直に言って、あの男を見くびっていたと思っているのだが、お前は違うのか？」

「いいえ、アナタと同じよ。今回の話も裏があるわけじゃないと思うわ……ただ……」

言葉を濁した夫人に伯爵は不思議そうな顔をした。

「ただ、なんだ？　何を気にしている？」

「何(いず)れ、あの男に私達が潰されるかもしれないと言う事よ……」

「ク！　ハッハッハッハッ。ユリア、お前の知恵には今までずいぶんと助けられてきた。だから、私はお前の言葉を信用している。だが、幾らなんでもそれはありえまい？　私と御子柴の間にどれだけの差があると思っている？　１００年後の話ならともかく、１０年や２０年で埋まるような差ではないんだぞ？」

夫人の言葉を伯爵は豪快に笑い飛ばした。そんな事は、決してありえないと。

御子柴亮真とザルツベルグ伯爵の間には、明確な力の差が存在している。

経済力、政治力、外交力、軍事力。

領地を運営するに当たって必要な力の全てにおいて、伯爵は亮真に勝っているのだ。

そして最も大きいのが、領地の差。

国境に面している紛争地帯ではあるが、交易もそれなりに行われ、塩の鉱脈を握っている伯爵家と、領民は０の上、亜人や怪物(モンスター)が多く

徘徊するウォルテニア半島の御子柴亮真。
本来ならば、比べる価値すらないほどの差。

「そうね……そうよね」

「そうだぞ、ユリア。幾らなんでも心配しすぎだ。まったくお前と言う女は……クックック……まぁ良いだろう。それほど心配なら例のメイドを送り込んで情報を流させれば良いだろう。そのために準備したのだしな。どうだ？　それでもまだ心配か？」

伯爵の言葉に、夫人は頷いた。
彼女自身、何か確信あってのことではないのだ。
ただ、漠然と感じた不安である。だから、彼女はこの時これ以上気にしなかった。
其れが将来、どれだけの代償を払う事になるかまでは、神ならぬ人の身では予測できる筈もない。

「良いわ。そうしましょう……では、幾つか条件を追加して、この話を受けることにします。正式に塩の鉱脈を確保できれば、私達も安心できるものね」

「うむ。その辺に関してはお前に任せる」

この言葉が、伯爵家の運命を決めた。
金を払うことなく鉱山を手に入れた伯爵と、ただの口約束で鉱山を支払った御子柴亮真。どちらが真に得をしたのかは誰にも判らない。両者が矛を交える其の日まで……

第3章第15話

西方大陸暦2812年9月17日【法術習得への道】其の1：

「おらぁ！　オマエら気合入れろ！　剣の振りが弱い！　もっと力を込めるんだ！　例え敵が鉄の鎧を着込んでいようと、力で押しつぶすつもりで振れ！」

太陽の日差しが降り注ぐ中、20名の子供達が全身を汗みどろにしながら剣を振る。

昼食を食べた後、訓練を始めて既に2時間が過ぎようとしていた。

少し離れた場所では、同じように剣を振る子供達の姿が見える。

グループ毎に別れた子供達を、紅獅子の傭兵が教師役として、子供達を見守るシステムなのだろう。

「若がお優しいからってブったるんでるんじゃないぞ！　戦場に出て死ぬのは若じゃない！　オマエらだ！　良いか！　目の前に憎い相手を思い浮かべろ！　そしてそいつを斬り殺す気で振れ！」

平原に響き渡る怒号と気合い声。それは正に兵の訓練である。

実戦では鯨波（げいは）を上げる事が、非常に重要である。声は己を奮い立たせ、相手を威圧するのだ。

そして訓練においても、気持ちを高ぶらせると言う効果は無視できない。疲労の度合いも声の出し方一つで大きく変わる。

指導している傭兵は其の事を十分に理解しているのだろう。子供達の声が弱くなると、直ぐに怒声が飛ぶ。

「マイク！　どんな感じだ？」

「お！　これは若。見回りですかい？　良し全員止め！　少し休憩にしてやる。汗で体を冷やすんじゃないぞ！」

亮真の声に、マイクは眉間に皺を寄せていた強面の顔を緩めた。

この気の良い男が、強面でずっと怒鳴り続けたのは、この仕事が子供達の命に関わる事を理解していたため。

生徒に舐められるようでは教師役は務まらない。

真に相手を育てる気持ちがあるのなら、相手に嫌われ疎まれようと、必要なら殴ってでも教え込むべきなのだ。

「あぁ……各班共に順調なようだな……明日からはいよいよ法術の授業も始まるけど大丈夫か？」

一月前。

亮真は受け取った奴隷の子供達を、５人ずつ１班とし、それを４つ集めて１隊と言う単位に編成した。

隊を率いるのは古参の傭兵である紅獅子の面々。

つまり２０人に一人の割合で紅獅子の傭兵が付く計算になる。

そして、リオネとボルツを総監督として、隊を率いない紅獅子の傭兵は、各隊を回って訓練の補助を行っていた。

紅獅子の傭兵を頭にして班を作ったのは、全て実戦の為。個人技を捨て、連携を強化する方が、生存確率が高いと判断したのだ。

それは、エレナの実績を見ても明らかである。

騎士の誇り等と言うつまらないメンツを捨て去ることで、彼女は【ローゼリアの白き軍神】とまで謳われるようになった。

つまり、強い者が単独で戦うより、効率的で安全な戦闘を行えるわけだ。

それならば、初めから個人技を捨ててしまった方が習得は早い。

無論、将来的には個人技も学んでいかなくてはならないだろうが、

即戦力を育成するならどちらか一方に絞った方が学びやすいのは当然の事だ。

5人1班として分け、食事も寝る場所も同じと言う生活を1月させたことで、彼らの中には連帯感と言うものが芽生え始めている。

仲間意識があれば、互いに庇いあう事で団結を強め、兵の質が向上する事に繋がる。

まさに、亮真の狙い通りの成果と言えた。後は、一月と言う短い期間で、彼らがどれだけ基礎的な部分を習得してきたか、其処が問題である。

「そうですねぇ……ボルツの旦那や姐さんにも聞かれましたが、俺としては順調に来てると思ってますよ？　だいぶ声も出るようになりましたし、仲間同士でなら話もしているようですしね……後は、俺らの顔色を窺(うかが)わなくなれば、まずまずってところじゃないですかね？」

まだ、子供達の中から不信感や不安が消えたわけではないが、無気力では無くなったようだ。

美味い飯を食べ、洗濯された服を着る。寝床は天幕の中に準備された物で、ベットの様に柔らかくは無いが、それでも奴隷として売られていた時に比べれば、格段に良い待遇だった。

それに何より、彼らの表情を明るくした要因は、自分達が鞭で打たれると言う恐怖から解放された事だろう。

少なくても、理不尽な理由で鞭が振るわれることがない事を、理解したのだ。

其の証拠に、子供達の眼はマイクに対して恐怖の色を浮かべていない。

強面の顔で怒鳴り声を上げられても、マイクが子供達を対等の人間として扱っている事を理解しているからだ。

これは、この訓練を始める前に亮真が全員に対してしつこく注意

した点だ。
幸いな事に、平民出身者で構成された紅獅子の傭兵達は亮真の言葉に理解を示した。
もしこれが、騎士階級や貴族出身者だったとしたら、奴隷に何を甘い事をと鼻で笑い、亮真の命令には従わなかっただろう。

「そうか……みんな良くやってくれてるな……とりあえずは剣も振れている様だし……」

「えぇ。その辺は十分にやらせていますからねぇ。１ヶ月でも形にはなりまさぁ……」

今彼らが握っているのは、ミストール商会から仕入れた大人用の剣だ。
先日の会談の後、ザルツベルグ伯爵の口利きでミストール商会との繋がりができたのだ。
一ヶ月の間。十分な食事を与え、適度な睡眠と適度な訓練を施した結果、成長期である子供達の体は、筋肉が付き徐々に発達してきている。
無論、僅か一月の訓練で劇的に変わるはずもないが、少しずつ、そして確実に彼らは成長していた。重く武骨な剣を振るっても体が泳がないくらいまでには。
奴隷商人が引き渡しに来た時は全員が、貧しい食事でやせ細ってはいたのだが、健康な奴隷を選んで連れてきたと言う商人の言葉に嘘は無かったようだ。

「ですがやっぱり、褒美に飴玉を配るっていうのは効果的ですね……みんな目の色変えて訓練をおこなってまさぁ……褒美をぶら下げて訓練をさせるとは、さすが若！　何せ、取り組む意気込みが違いますからね」

「そうか……まぁ、甘い物は平民でもあまり口にする機会が無いだろうからな……こっちの狙い通りってわけだ」

「まぁ奴隷だったこいつらに、いきなり金をやっても使い道もありませんからね……悪くない手だとおもいますよ」

訓練の最後に、教師役から一日のご褒美として小さな飴玉が配られる。

教師役から見て頑張っていれば2つ、普通なら1つ。

さぼらない限りは必ず貰えるこのシステムは、子供達にとって最高のシステムだった。

あくまでも、自分が頑張ったかどうかであり、他人と比較する必要が無いこのシステムは、彼らのやる気に火を付ける。

砂糖そのものが高価なこの世界では、飴玉1つで有ろうと平民ではそう簡単には口にできない高級品である。

それを、亮真はイピロスの町で買い付け子供達へと配ったのだ。

その効果はまさに劇的だった。

飽食な日本では、飴玉で子供のやる気を釣る事は出来ないが、この貧しい世界では十分に餌として使うことが出来る。

「そうか……まぁそれなりの値段だったからな。効果が出てくれなきゃ大損だ……まぁ良い。マイク、明日からの法術訓練も頼むぞ」

「へい！　お任せください」

人数が居る上に、飴玉自体の価格が非常に高い。

だが、金を掛けた分だけの効果は現れているようだ。

マイクの威勢のよい返事を背に受けながら、亮真はその場を後にした。

（各班とも、まずまずの成果か……後は明日からの法術の習得次第……俺も明日からローラ達に教えてもらわないとな……）

亮真も今だ知らない未知の領域。彼自身も法術を会得しなければ前へは進めない。

ウォルテニア半島で生き残るためは、法術という新たな力が必要なのだから。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――

翌日、朝食を食べ終わった亮真のもとへマルフィスト姉妹がやってきた。

余程、亮真に対して法術の指南を行うことが嬉しいらしい。既に姉妹の顔には笑みとやる気が満ち溢れている。

「亮真様、今日から法術の習得を始めますが、よろしいでしょうか？」

「あぁ。悪いけどよろしく頼む」

亮真は姉妹へ頭を下げた。

少なくとも、法術に関して亮真は弟子と言う事になる。師に当たる姉妹へ相応の礼を尽くすのは当然だった。

サーラは何か言いたげな表情を浮かべたが、ローラが首を左右に振るのを見て、言いかけた言葉を押し殺す。

彼女はきっと、奴隷で有る姉妹に対して主人である亮真が礼を尽くす事に驚きを感じたのだろう。

だが、彼女達は既に亮真の心を理解している。

彼は、決して驕り高ぶらないし、人に対しての礼節を守る。其れが極自然な行動として、彼の体に染み付いているのだ。

「それでは始めましょう。亮真様には以前ご説明しているのですが覚えておいでですか？」

姉妹は、天幕の中央に亮真を座らせた。

本来なら訓練初日である今日は、法術とは何かの説明をする日なのだが、既に亮真は法術と言うものを知識としては教わっていたが、姉妹は先ず、法術に関しての知識をおさらいするつもりのようだ。

「詠唱が必要な文法術、詠唱を必要としない武法術、それに物に宿らせる付与法術の３つの事だな？」

放浪していた時に、法術に関しては一通りの知識を姉妹から教わっている。

其の時に法術を習得しなかったのは、旅の途中では落ち着いて学ぶことが出来なかった為だ。

「其のとおりです。全ての法術は生気（プラーナ）を消費して効果を発揮します」

ローラの言葉に、亮真は無言で頷く。これも既に聞いている話だ。

「生気（プラーナ）は生命体に必ず宿るエネルギーです。ですから本来ならどんな人間でも使うことが出来ます」

「あぁ……だから、子供達にも習得させることが出来る……だろ？」

万人が使うことの出来る技術。性別にも、年齢にも左右されない技術なのだ。

「其のとおりです。教えを受ければ早ければ4ヶ月ほど、遅い人間でも5ヶ月程で基本は習得することが出来ます。まぁ、本当に基本的な部分だけですけど……それでも、習得していない人間とでは比べ物にならない強さを得られます」

「あぁ。以前言ったとおり、たった4ヶ月で完璧に習得できるなんてことは俺も思っちゃ居ない。俺が望んでいるのは法術の基本を仕込む事。それだけでも、子供が大人2～3人分の労働力になる……」

別に亮真は法術を戦に限定して使うつもりはない。法術を使うことが出来れば、子供でも大人数人分の力仕事を行うことが出来る。木を伐採する。石を運ぶ。家を建てる。幾らでも日常生活で活用する場面はあるのだ。

それを、使わないと言う選択肢は亮真にはない。例えその考え方が、この大地（アース）世界では異端と呼ばれる考え方であったとしてもだ。

この世界では、法術を神の与えた力と特別視している。

光神メネオース。

この世界を造ったと呼ばれる6神のうちの一柱であり、主神と呼ばれる存在である。

そして、この神から人間が授かった力とされるのが法術と呼ばれる技術である。

これが事実かどうかは問題ではない。

西方大陸で広く信仰されている光神教団と呼ばれる一団が、この神話を真実ととして広め、多くの人間がそれを信じている事に問題があるのだ。

数ヶ月前の戦で、亮真は法術を使用して陣を構築させたことがあった。亮真にとって見れば、土木機械の変わりに使った便利な技術程度の認識しかないのだが、あれですらこの世界の人間は驚きを感

じていたらしい。
戦に使う陣の構築と言う理由がなければ、傭兵はともかく、騎士達は断固反対したに違いない。
傭兵や平民にとっては其処まで固執する話ではないらしいが、特権階級である貴族や王族にとっては大問題らしい。
自分達が民を支配する権利を有していると言う眼に見える証拠として、法術を神から与えられた力だと刷り込まれているから。
そして、自らを守るためだけに許された力だと考えているため、戦闘行為に限定となっているのだ。
神がくれた神聖な力を戦いに限定して使うと言う思想に、亮真としては強い矛盾を感じるのだが、宗教とはそういった非合理なものなのだろう。
とはいっても、亮真は宗教観を議論するつもりはない。問題なのは自分にとって利用価値が有るかどうか。使えないなら単純に無視するだけの話だ。
そして、日本人である亮真にとって、大地(アース)世界の神に敬意を払わなければならない理由など何処にもない。単純に神は道具でしかないのだ。利用出来るのか出来ないのか。日本人特有の宗教観といえる。
マルフィスト姉妹は亮真の言葉に頷くと、亮真の後ろ側へと回り込む。
「では、前置きは此のくらいにして、始めますか」
「あぁ、頼む」
亮真は事前に教えられたように、地面へ胡坐をかくと頷いた。
姉妹の手が、亮真の背に当てられた。

「「いきます！」」

彼女達の言葉の後、亮真の背に熱い何かが注がれた。それは、姉妹の手から少しずつゆっくりと、背骨に沿って上へ上へと上ってくる。

何かが這い上がってくるような、ゾクゾクした感覚が亮真を襲う。

「大きく鼻から息を吸ってください。そして、ゆっくりと口から出して……心を落ち着けて、気持ちを楽に……背中から広がる熱い何かを感じますか？」

亮真はローラの言葉に軽く頷くと眼を閉じた。そして、ゆったりと背に広がる熱い感触へと意識を飛ばす。

自らの体に広がる熱い何かを、自らの意思でコントロールする為に。

第3章第16話

西方大陸暦2812年9月17日【法術習得への道】其の2：

「っ！　体が燃える……」

亮真（りょうま）の顔が苦痛で歪み、彼の口からうめき声が漏れた。

それは本当に小さな呟き。だが、普段冷静な顔の亮真が苦痛で表情を変えたという事実が、その痛みの大きさを明確に示している。

初めは姉妹の手を中心に周囲がほんのりと暖かいだけであったはずが、いつの間にか背中全体が火にあぶられているような感覚へと切り替わっていた。

亮真は痛みと熱さで叫びだしたくなるのを必死で堪える。

苦痛を噛み締めた時に力を入れすぎたのだろう。彼の口に錆びた鉄を舐めた様な味が広がった。

「今、私達の手から亮真様の中へ生気（プラーナ）を送り込んでいます。このまましばらくご辛抱ください……さぁ、熱さを亮真様の意思で操ってください」

サーラの言葉に従い、亮真は再び意識を背中へと向ける。

姉妹の手のひらから注がれる生気（プラーナ）が亮真の体を少しずつ侵食していく。

5分もこの状態が続いただろうか。亮真の体は、頭の上からつま先まで、火のように熱く燃え上がっていた。

体中から汗が噴出している所為で、彼のシャツをびしょびしょに濡らし、地面に敷いた毛布には幾つもの沁みが汗に因って作られて

いた。

「如何ですか？　もし、熱さに耐え切れないようでしたらおっしゃってください」

姉妹の顔にも苦痛の色が浮かんでいる。

それも当然だろう。亮真が生気（プラーナ）をコントロールできない限り、姉妹はひたすら亮真に生気（プラーナ）を注ぎ込まなければならない。

それは、穴の開いたバケツに水を注ぎ込む事と同じ事だ。

姉妹の生気（プラーナ）が尽きるのが先か、亮真の第1段階突破が先か……

「あぁ……かなり熱いな……だが、大丈夫だ。まだやれる。続けてくれ」

口を開いた途端に、滴り落ちる汗が口の中へ飛び込んできた。口いっぱいに広がる塩辛い汗の味。

大量の発汗によって亮真の体は水を欲しがっている。

幾ら鍛え上げられた肉体を持つ亮真といえども、決して余裕などは持っていない。だが、此処で止めるわけにはいかなかった。

止めてしまえば、明日も姉妹の生気（プラーナ）を体に注ぎ込む処から始めなければならないのだ。

（ガイエス……ケイル……俺の体の中には、あいつらから奪った生気（プラーナ）が宿っている……俺には出来るはずだ……輪（チャクラ）を回転させる事が！）

亮真は荒れ狂う灼熱の塊を己の下腹部へ移動させるイメージを必死で行う。

未だ、微動だにしない己の輪（チャクラ）を回転させる為に。

法術の基本とは、自分の肉体を生気によって強化する、武法術の事を指す。

生気（プラーナ）の存在を感じ取り、それを己の体に作用させる武法術を使う

ことが出来てこそ、他の存在の力を借りる文法術や、物に生気（プラーナ）を纏わせ強化する付与法術への道が開かれる。
何故なら、文法術にしろ、付与法術にしろ、己の体に宿る生気（プラーナ）を使うことに違いはない。
そして、自分の体内に宿る生気（プラーナ）が操れないのに、体の外に放った生気（プラーナ）を操れるはずがない。
そして、武法術を習得するには3つの課題をクリアする必要がある、
1つ目は、生気（プラーナ）を認識し、己の意思で操る事。
2つ目は、体内の生気（プラーナ）を使い、最下級の輪（チャクラ）である会陰（えいん）に存在するムーラーダーラと呼ばれる輪（チャクラ）を回す事。
3つ目は、回転させたムーラーダーラを自らの意思で止める事。

武法術とは、体内に存在する輪（チャクラ）を回転させた状態の事を指す。
これを回転させる事により、人の肉体は筋力以上の力を発揮する。
そしてそれは、回転させた輪（チャクラ）の数によって飛躍的に増幅していく。
人体に存在する輪（チャクラ）は全部で7つ。亮真は其の一番最初の輪（チャクラ）、ムーラダーラをマルフィスト姉妹の生気（プラーナ）を借る事で回転させようとしていた。

（感じる……血液じゃない……何か熱い血とは別の物が俺の体を駆け巡っている……これが……生気（プラーナ）？）
それは、姉妹の注ぐ生気（プラーナ）に触発されて体の奥底に眠っていた何かが目覚める。
体の中で何かが暴れ狂うような激しい躍動を、亮真は必死で抑え込む。それは鎖に繋がれた獣が牙を剥きだし荒れ狂う様に似ていた。

亮真の体から、姉妹の注いだ生気（プラーナ）に抵抗するような感触が姉妹の手に伝わってくる。姉妹はその感触を感じたとたん、手を亮真の背中から離した。

「如何ですか？」

「あぁ……感じる……体の中で獣が暴れまわっているような……そんな感覚だ……クッ！」

心配そうな声をあげたサーラに、亮真は慎重に答える。
今、亮真の下腹部、会陰の輪・ムーラーダーラは姉妹の生気によって激しく回転を始めた。

気を緩めれば、亮真は血に飢えた野獣のごとく姉妹の体へ飛びかかっていたかもしれない。
他者を傷つけたいと言う欲、他者を犯したいと言う欲、他者を殺したいと言う欲、欲……欲……欲。
亮真の心の底からとめどなく溢れだす欲望。
普段、理性と言う鎖で繋がれた欲望という名の獣が、其の鎖を引き千切ろうともがき続ける。
(落ち着け、ゆっくりと息を吐くんだ……そう、ゆっくりと……)
だが、亮真の体は彼の意思を無視して活性化する。
筋肉は躍動を初め、心臓は其の脈動を強く早くしていく。皮膚の感覚は鋭敏になり、全身の細胞が目覚めた様な、そんな感覚が亮真の体を包み込む。
マルフィスト姉妹は互いに無言で頷きあうと、そのまま天幕の外へと出ていった。この場で彼女達に出来る事はもはや何もなかったから。

――

「どうだい、坊やの様子は？　こっちは全員分終わらせたんで報告に来たんだけどね？」

「リオネさん……まだ、亮真様は中で……」

天幕の入り口に立ったまま警護していたマルフィスト姉妹へ、子供達への訓練を終えたリオネが声を掛けた。

３２０人いる子供達へ、法術とは何かを説明し、一人一人に軽く生気（プラーナ）を注ぐところで本日の訓練は終りである。

だが、報告相手の亮真の方がまだ訓練を終えていないらしい。

姉妹が無言のまま首を横に振るのを見たリオネは、布の隙間から天幕の内部へ視線を走らせ、納得したかのように頷いた。

「……結構長いねぇ……昼前だろ？　坊やが始めたの」

既に時刻は１５時を過ぎていた。

「えぇ……既に5時間ほど……」

サーラの言葉にリオネは目を剥いて驚いた。

「アンタ達が外に出てるってことは、輪（チャクラ）の方は……」

「回転したままです……」

ローラの顔には不安げな表情が浮かんでいた。

それを見たリオネも顔を顰める。

懸念する事は同じだ。

「5時間……かなりの数を殺して生気（プラーナ）を吸収しているからね……相当な量の生気（プラーナ）を持っているんだから仕方ないだろうけど……5時間か……結構やばいかもね……だからアタシは最初に止めたんだけどねぇ……」

輪（チャクラ）を回転させることに因って法術を習得する事は同じだが、子供達と亮真では、前提条件が大きく違っている。

それは、今までの彼らが吸収してきた生気（プラーナ）の総量だ。

今まで自分の手で他の命を奪った経験が無い子供達の持つ生気（プラーナ）は単純に己の体に元から存在する量だけだ。

それに対して、亮真はガイエスやケイルと言った法術を使うことの出来る人間や、数多くの怪物（モンスター）を殺してきており、その生気（プラーナ）を吸収してきた結果、常人の倍近くとなってきている。

本来ならば総量が多い方が良いのだが、武法術の習得と言う観点だと逆に不利となってしまう。

逆に自分の意思でコントロールする事が困難になるから。

其の事は誰もが判っていた事だ。事前に忠告もした。だが、亮真は其の忠告を無視した。

4ヶ月の間で亮真の輪（チャクラ）が自然に回転するかどうかがわからなかった為だ。

「まぁ、それは此処で今更言っても仕方がないか。……アンタ達も少し休んだ方が良いんじゃないかい。坊やの輪（チャクラ）を動かすのに相当使ったんだろう？　坊やはアタシが見てるからアンタ達は食事をして少し休んできな」

リオネは体を気遣う様に、優しげな視線を姉妹へ向けた。

「お気遣いありがとうございます……ですが、リオネさんもお疲れのはずですし……」

「姉様の言うとおりです。リオネさんも子供達の何人かには生気（プラーナ）を注がれたんでしょ？」

姉妹の言葉にリオネは声を出して笑った。

「馬鹿だねぇ。アンタ達は……子供の5人や6人に生気（プラーナ）を注いだからってどうなるもんじゃないよ。坊やと違って、あの子達の体を生気（プラーナ）で満たすなんて大して手間にはならないよ」

実際、リオネはさほど疲労の色は見えない。
それはつまり、亮真の生気（プラーナ）が子供達に比べて膨大である証拠であった。

「良いから！　あんた達は少し休……」

ドサッ

天幕の中から何かが倒れる音がした。
3人は直ぐに天幕の中へと飛び込む。

「「亮真様！」」「坊や！」

うつ伏せのまま大地に横たわる亮真を抱え上げると、リオネはすぐさま口へ手を翳（かざ）す。

「大丈夫。気を失っているだけだ……ローラは直ぐに寝床の準備をしな。サーラは水を持っておいで！」

脈拍にも乱れはない。軽度の脱水症状と疲労による一時的な気絶

だと判断したリオネは、矢継ぎ早に姉妹へ命じた。

「「判りました！　直ぐに」」

自らも疲れていたはずなのに、姉妹は機敏に駆け出す。

「まったく……だから止めとけって言ったのに……」

リオネは亮真に命の危険が無いと判断すると、苦笑いを浮かべて呟いた。

自分達に時間がない事はリオネ自身も理解している。

だが、亮真一人くらいなら法術を使えないとしても周りが何とでもフォローできる。

其処まで固執する必要は本来ない筈なのだ。

だが皮肉な口調とは裏腹に、リオネは内心嬉しかった。

頭である亮真が法術の習得に固執する。

それはつまり、彼が自分達と同じ目線で生きていると言う証。自らの手を血で汚そうと言う覚悟。

亮真の性格は短い付き合いだが十分に理解している。

だが、こうして目の前で気絶する亮真の姿によって、彼の覚悟の強さを改めて見せ付けられたのだ。

（亮真……アンタに賭けて良かったよ……アンタなら……アンタなら変えてくれる。アタイ達の運命を……）

傭兵の運命など先が見えていた。

依頼人に裏切られるか、戦場で敵に殺されるか。どちらにしても決して明るい未来にはならない。

足をあらい、老後を暮らせる傭兵などほんの一握りにも満たないのだ。

だから、彼女達は死を恐れない。だが、無駄死にはゴメンだ。

避けられない死なら、せめて納得して死にたい。
（アンタなら……アンタの為になら……）
リオネは腕の中で気絶したままの亮真の髪をやさしく撫で付けた。
まるで、わが子を慈しむ様に。

第3章第17話

西方大陸暦２８１２年１０月未明【東部侵攻】其の１：

御子柴亮真（みこしばりょうま）が法術の習得に向けて日々鍛錬をしていた丁度その頃、隣国ザルーダ王国には戦雲が立ち込めていた。

大陸中央部の覇者オルトメア帝国が遂に其の牙を剥き出し、東部侵攻を開始したのだ。

片方は国の発展と覇権の為に。片方は国の存続と安定の為に。

国境に広がるノティス平原を舞台に、決して敗北が許されない戦が始まろうとしていた。

「どうなっているのかしら？　各部隊の状況は」

後方の本陣で指揮を取るシャルディナは、テーブルに広げられた巨大な地図を睨みつけながら、傍らに立つ斉藤へ声を掛けた。

地図の上には、赤と黒に色分けされた駒が陣形を組んで配置されている。

「はい。伝令の報告によりますと、主力軍は予定通りのルートを進んでいます。先鋒の３部隊が現在、ノティス平原の東に陣取るザルーダ王国の騎士団と交戦中との報告がありました」

そう言うと斉藤は、端の方にひと塊りで置かれていた赤い駒を３方向へと配置し直す。

この駒の一つ一つが敵と味方の部隊を表すらしい。

赤がオルトメア帝国、黒がザルーダ王国の部隊を表しているのだ

ろう。
　中央に置かれた赤い駒の数は１５。かなり離れた北と南にそれぞれ５個ずつ。
　一つの駒がおよそ１０００の部隊として総数２万５０００。
「敵の兵数は？」
　斉藤は、ノティス平原と山岳部の境目辺りに黒い駒を並べていく。
　その数は２０。
「全て騎士で構成された軍団で、数はおよそ2万とのことです」
　斉藤の答えにシャルディナは唇を吊り上げ、嘲笑（ちょうしょう）を浮かべた。
　それは、馬鹿な獲物が罠にかかった事を確信した猟師の笑みだ。
「そう……やはり国王の命令で直ぐに動かせる全兵力を叩きつけてきたわけね……良いわ。予定通りよ」
「まぁ、他の選択肢を選べないように、我々でコントロールしていますからね……」
　シャルディナの言葉に、斉藤は肩を竦（すく）めて答えた。
「宣戦布告から今日までの日数はわずか5日。農民を徴兵するにしても時間が足りないものね」
　徹底的な情報封鎖を実施した結果、ザルーダ王国側にはオルトメア帝国軍の動向がつかめていなかった。
　ザルーダ王国は、峻険な山々に守られた天然の要害。
　だが、今回の様に敵国の動向を掴んでいない状態で侵略を受ける

と、其の天然の要害が逆にザルーダ王国の動きを封じる。
峻険な山々に分割された領土は、豊富な鉱石を産出する宝の山だが、兵を運用するには不向きな土地だ。
要害もそれを活かすための備えが無ければ逆に足かせにしかならない。

「ワザとこちらの主力部隊の兵数だけを漏らし、王家直属の騎士団を総動員すれば五分に持ち込めると錯覚させた事に因って、野戦に引きずり出す……流石はシャルディナ殿下」

斉藤は心の底からシャルディナの智謀を称賛した。
オルトメア王家の姫君でありながら、シャルディナが軍を率い戦に出るのはこの才あっての事。
其の事を彼は嫌と言うほど理解している。

ザルーダ王国の総兵力はおよそ7万。但し、この数には農民兵や貴族の私兵も含んでの数である。
ザルーダ王国が直ぐに動員できる戦力は、王家直属の騎士、およそ2万5000。
事前に帝国の動向を掴んでいなかったザルーダ王国は、貴族に触れを回し兵を整える時間が無かった。
それはつまり、王都に存在する王家直属の騎士団のみで防衛しなければならないということだ。
その事を知るザルーダの軍部は焦っただろう。そして必死で敵軍に関しての情報をかき集める。
敵を知ることに因って、苦境を打開する突破口を求めたのだ。
帝国軍を率いる将の名前。兵数。予想される進軍経路。
無数に集められる情報。それらを分析し、対策を練る。その結果、彼らは気が付いた。
シャルディナの率いている兵数がそれほど多くない事に。そして、

王の直轄軍を全て動員したならば、十分に勝機が見込める事を。

自国内へ兵が侵攻して来れば、最終的に勝ったとしても、ザルーダ王国には大きな傷が付く。

初め、ザルーダの軍部は多少の犠牲を覚悟した上で、国内へオルトメア軍を引き込む事を考えていた。

しかし、シャルディナが率いる兵数が多くないのなら話は変わってくる。

野戦、それも国境付近での戦ならば、ザルーダ王国の国力に傷は付かない。

誰でも損は嫌だ。

まして、損しないかもしれない選択肢があるのに、確実に損をする選択肢を選ぶ人間は居ない。

ザルーダの軍部は僅か５０００の騎士を残し、ノティス平原へと兵を進めた。

だが、彼らをそう考えるように誘導したのはシャルディナ。彼らが思い描いた未来は、ワザと目の前にぶら下げられた決して実現する可能性の無い希望なのだ。

「北と南の別働隊はどう？　予定通りに進んでいるのでしょうね？」

シャルディナの鋭い視線が斉藤を射ぬいた。

今のところ罠は完ぺきに作動している。

だが、少しの油断が状況を逆転させてしまう事を、シャルディナは過去の経験から身を持って理解している。

だから彼女は決して油断しない。

元から豊富に備わった才覚と戦場での経験。そして、亮真を逃がした事に因って味わった挫折と教訓。それらがシャルディナの中で混じりあい、彼女を細心にして大胆な、まさに理想的な指揮官へと

成長させた。
「はい。両部隊とも予定の場所に待機しているとの連絡が来ております」
シャルディナは斉藤の答えに満足したのだろう。笑みを浮かべて頷く。
「良いでしょう……手筈は判っていますね？　斉藤」
「はい。私にお任せください殿下」
斉藤の口調はいつもと変わらない。
穏やかで丁寧な口調。そして、シャルディナへ一礼すると彼は天幕の外へと出て行った。
とても、これから戦の渦中へ飛び込もうとしている人間とは思えないほどの落ち着きぶり。
だが、シャルディナには斉藤の秘められた闘志が手に取る様に伝わる。
彼の背中から発せられる激しい炎の幻影を、シャルディナはその瞳にハッキリと捕えていた。
――

「皆、準備は良いか？」
馬上の人となった斉藤が、周りの副官達へ声を掛けた。
「「「「は！」」」」

短く力強い言葉が斉藤の鼓膜を震わす。
彼の後ろに就き従うのは重装備の騎士達。その数１万。
シャルディナの本陣を守るのは、僅か２０００あまりの小勢。
主将の警護を最低限まで減らした、まさに乾坤一擲（けんこんいってき）と言える戦力だ。
この戦、そして今後の侵略戦争の全てが斉藤の双肩に掛っていた。

斉藤の目の前には、先鋒部隊が必死でザルーダの騎士達と矛を交えている姿が映し出されている。

「副団長。ご命令を」

副官の一人が、斉藤へ出陣の命を求めた。
斉藤は無言のまま腰の剣を抜き放つと、高々と天を指す。
誰もが無言で、次の命令を今や遅しと待ちわびる。
彼らは誰もが酔っていた。斉藤の無言の気迫にだ。
そして、兵達の全身に闘志がみなぎった事を感じた斉藤は、無言のまま剣を降ろすと前方の敵を指し示した。

「「「「「「「うぉぉぉぉぉぉぉぉ！」」」」」」」

斉藤の傍らを鯨波（げいは）を上げながら駆け抜けていく兵士達。
限界まで引絞られた矢が、遂に放たれたのだ。

騎馬に乗る騎士達が敵影目がけて突進してゆく。
全身を鋼鉄の鎧で覆った重装備の騎士達だ。
馬にまで鎧を着せた彼らは、まさにこの世界における戦車である。
武法術に因って身体能力を強化された彼らは、徒歩の騎士を踏みつけ、跳ね飛ばし、槍で貫いてゆく。

「殺せぇぇ！　皆殺しにしろぉぉ！」

「逃げるな！　オルトメアの犬に後ろを見せる事は許さん！」

「クソ！　腕が……俺の腕が……」

「うっせぇぇ！　喚いてる暇が有るなら剣を振れぇぇ！」

戦場のそこかしこから放たれる野蛮な怒号と悲鳴。
徒歩の騎士達による白兵戦が主体だった戦場へ飛び込んだ帝国騎馬騎士達の戦果だ。
彼らは、ザルーダの騎士達を存分に蹂躙（じゅうりん）してゆく。
だが、そのまま蹂躙されたままでいるほど、ザルーダの騎士は甘くなかった。

「徒歩騎士は陣形を組め！　敵の騎馬を食い止めろ！」

「良いか！　所属小隊にこだわるな！　直ちに陣形を組むのだ」

機転のきく部隊長達が、素早く状況を察知して声を張り上げた。
騎馬に騎馬をぶつけるより、徒歩騎士達で陣形を整え騎馬に因る攻撃を防ぐつもりらしい。
指揮系統が混乱したザルーダの騎士達は、指揮官の命に従って素早く陣形を組み直す。

「こちらも徒歩騎士を前へ！」

騎馬部隊の一撃に因って生じた混乱を、敵の指揮官が立てなおした事を察し、斉藤は突撃した騎馬部隊を後方へ下げ、代わりに徒歩

騎士達を全面へと押し出す。
重装騎馬は非常に強力な兵だが、幾つか難点が有った。
日本の馬に比べて体格が大きく馬力の有る大地世界（アース）の馬だが、その体力には当然のことながら限界が存在する。
騎馬の利点は重量と速度。
逆に言えば、走れない馬は格好の標的にしかならない。
兵はいわばジャンケンと同じ事。
最強の兵種など存在しないのだ。

「良いか！　オルトメアの侵略者をこの地で葬り去るのだ！　引く事は許さん！　進めぇぇぇえ！」

ザルーダ側の前線指揮官が、騎士達の準備が整ったのを確認すると、声を張り上げた。
隊列を整えたザルーダの徒歩（かち）騎士達が、足並みを揃えて前進していく。

「ザルーダの騎士等にひるむ事は許さん！　我らは誇り高きオルトメア帝国の騎士！　敵を蹴散らすのだぁぁぁ！」

部隊長の指揮の下、次々と前線へ飛び込んでいく騎士達。
初めは整然と整えられていた隊列は、両者がぶつかるごとに歪み、崩れていく。

両軍共に騎士のみで編成された部隊である。
分厚い鉄の板で作られた鎧。鋭い剣や槍。武法術に因る身体強化。

騎士一人の戦力に大きな差は存在しない。
両軍互角であるために、敵を一人殺す毎に、味方が一人死んでいく。

それはまさに不毛な消耗戦の筈だった。だが、戦の勝敗は既に決まっていた。

指揮官の持つ能力の差が、両軍の運命を分ける。

第3章第18話

西方大陸暦2812年10月未明【東部侵攻】其の2‥

シャルディナの目的は、ザルーダ王国の主力部隊の撃滅。
王家直属の騎士を潰す事が出来れば、残るのは各地方の貴族が持つ私兵しか残らなくなる。
オルトメア帝国のザルーダ王国平定は飛躍的に進む事となるのだ。
その為に、シャルディナは幾つかの謀略を実行してきたのだ。
北の巨獣が眼を覚ます其の前に……少しでも早くザルーダ王国全土を占領をする為に……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

(そう……私はあの時油断した……あそこまで御子柴の行動を予測しておきながら、最後の詰めを誤ってしまった……でも、ある意味あれは良い教訓になったわね。どれほど有利な状況を作ったとしても、小さな油断が命取りになる場もあり得るし……)
本陣の大天幕の机の上に広げられた地図を凝視するシャルディナ。
彼女の脳裏に一人の男の顔が浮かんだ。
彫りの深い老け顔の青年。
一見すると、穏やかで人のよさそうな男だが、其の隠された素顔は獰猛な野獣だ。
シャルディナと斉藤が対峙した時の彼の眼は冷たく冷酷で、鋼の強さを纏った男。
彼女の張り巡らした包囲網を力で食い破り、帝国の追っ手から逃げ延びた男。

（もしアイツが敵の指揮官だったら……？）
　意味の無い仮定が、シャルディナの心を埋め尽くして行く。
　何度も何度も精査し実行された必勝の策。だが、彼女の心を居る筈のない男の影が縛り付ける。

「殿下……そろそろ頃合かと……合図を送ってもよろしゅうございますか？」
　思考の海を漂っていたシャルディナは、副官の言葉を聞き我に返る。
「えっ！　えぇ……そうね……合図を送りなさい」
　内心の同様を悟られないように、彼女は平静を装って命じた。
（ダメよ……同じ過ちを繰り返すつもり？　今は戦況に集中しなくちゃ）
　戦の勝敗は既に決している。
　其の為に、様々な手を打って準備してきているのだ。しかし、少しの油断が戦況をひっくり返してしまう可能性は常にある。
　戦が終わらない限り、勝った事にはならないのだから。
　過去の教訓がシャルディナの心を慎重にする。
（私は……負けない！　絶対に……負けられない……）
　優勢であるはずのシャルディナ。策をめぐらし、此処までは順調に進んでいる。
　後は最後の仕上げをするだけのはずなのに、彼女の心は激しく揺れ動いていた。
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――

「副団長！　合図です！　本陣より合図の銅鑼が鳴らされました！」

傍につき従う側近の一人が、本陣から鳴り響く銅鑼の音に気がつくと声を上げた。

斉藤は黙って耳を澄ます。敵と味方入り乱れての喚声と、剣戟の音によってかなり聞き分けにくいが、側近の言葉通り、後方の本陣から銅鑼の音が彼の耳にも届いた。

「えぇ、間違いありません……事前に命じられたシャルディナ殿下の合図の銅鑼です。みなさん、手筈（てはず）は判っていますね？」

「「「は！　直ちに」」」

斉藤の鋭い眼光を受け、側近達が方々へと散らばっていく。

「良いか！　このまま後方へ引くぞ！　引き上げの鐘を鳴らせぇぇぇえ！」

斉藤の叫びの後、退却を知らせる鐘の音が戦場に響き渡る。

「引け！　退却だ！」

「良いか！　慌てるな！　お互いに庇い合いながら引くのだ！」

連携を意識しないとはいえ、戦場において完全に単独で行動する事はありえない。

組織立っては居ないものの、彼らは互いに庇いあいながら後方の本陣へ向かって退却を始める。

周囲に気を配り、敵に殺されそうな味方が居れば、最も近くに居

る騎士が助けに行く。
別に敵を殺す必要など無い。
退却の号令が出た段階で、攻撃側と守備側が明確に分かれてしまっているのだ。
退却するオルトメア帝国の騎士達にとって最も重要なのはただ一つ。少しでも多くの仲間が無事に後方まで退却できる事。
それに対し、ザルーダの騎士にとって大切なのは、少しでも多くの騎士をこの場で殺しておく事。
相反する目的のために、両国の騎士達は互いに剣を振るう。

「ベルハレス将軍！　オルトメアの侵略者共が撤退を始めました！」

前線から駆け戻ってきた伝令の声が天幕の中に響いた時、初め、天幕の中を支配していた喧騒はピタリと止まった。
そして伝令の言葉の意味を中に居た人間たちの脳が理解すると、再び天幕の中は活気と喧騒を取り戻す。

「何！　それは本当か！」

国の興亡をかけた一戦だと、天幕の中に居る誰もが理解している。
オルトメア帝国とザルーダ王国の国力差から考えて、それは圧倒的に不利な戦の筈だった。
それなのに敵が退却を始めるという、降って湧いた予想外の好機。
これに賭ける以外に勝機は無いと副官達が思うのも当然だった。

「オルトメアが兵を引いただと！　其れが本当なら好機だ！　直ぐに追撃を掛けるべきだ！」

「閣下！　追撃のご命令を！　これこそ神がわがザルーダ王国を見

放さなかった証！」

次々と浴びせかけられる威勢のよい言葉。副官達の言葉に頷きながらも、ザルーダ王国軍の最高指揮官であるベルハレス将軍は、顎に蓄えられた白く長い髭をしごきながら考え込んだ。

周囲に待機した副官達が盛んに進軍を進言する中、彼だけが、一人瞑想したまま微動だにしない。

「親父殿……どうするつもりだ？」

一人の男が、ベルハレス将軍へ問いかけた。

その言葉は他の副官達とは違い、意見を言うと言うより、将軍の意見を聞きたいと言うスタンスから発せられた言葉のようだ。

ベルハレス将軍に話しかけたのは、将軍を若返らせたかのような容姿をした、２０代前半の男。

副官達は黙り込むと、その若い男へと刺々しい視線を向けた。

侮蔑、嘲笑、其の視線には、人間の負の感情が溢れんばかりに込められていた。

普通の神経を持った人間がこんな視線を受ければ、萎縮（いしゅく）してしまうのが普通なのだが、この男は悪い意味で図太いらしい。

副官達の視線を受けても全く動じる様子が見えなかった。

「お前はどう思っているんじゃ？　ジョシュア」

将軍は末席に座ってふんぞり返る三男へと視線を向け問いかける。

「フン！　言うまでもない。追撃するつもりなら……全滅覚悟でシャルディナの首を落とすしかないぜ？」

そう言い捨てると、彼は口に咥えた煙草へ指先を近づけた。

「「「え？」」」

ジョシュアの言葉に、副官達は思わず間抜けな言葉を発してしまった。

それほど、彼の言葉は副官達にとって予想外だったのだ。だが、驚きの表情浮かべる副官達を横目に、ベルハレス将軍は満足げな笑みを浮かべて頷く。

指先に灯した火で煙草に火をつけたジョシュアは、禁煙である筈の軍議の場で悠然と煙草の煙を吸い込む。

其のあまりにも平然とした態度が逆に、ジョシュアの言葉を不気味に感じさせた。

「ふむ……それでお前はどうする？　此処で引くか？」

父親であるベルハレス将軍の試す様な問いかけに、ジョシュアは肩を竦めて答えた。

「生き残りたいなら引くべきだな……」

此処でジョシュアは言葉を区切ると、周囲に鋭い視線を向けた。

先ほどまで彼の体からにじみ出ていたやる気の無さは完全に消え去り、その代わりに彼の体から発せられるのはむせ返るような殺気と闘志。

「ザルーダ王国を守りたいなら……此処は勝負するしかないだろうぜ」

ゴクッ

誰かの唾を飲み込む音が天幕内に響く。
幾多の戦場を生き抜いてきた副官達が、目の前に座る若造に気圧された証だ。

「ジョシュア殿……失礼ですがそれはどういうことでしょう?」

ジョシュアの言葉に副官の長老格が恐る恐る問いかける。
今まで、副官達にとってジョシュアは単なる邪魔者でしかなかった。
年長者を敬わず、酒と金に汚いジョシュアの悪名は王都で生活していれば嫌でも耳に入ってくる。
毎晩のように貧民街の酒場に繰り出し、博打に喧嘩と武勇伝には事欠かない。
いわば犯罪者予備軍とも言うべき人間なのだ。

今回の出陣に際して、父親であるベルハレス将軍がジョシュアへ従軍を命じた事はこの場に居る副官全員が知っている事だ。だが、それは将来の無い鼻つまみ者の三男に，何とか箔をつけたいと言う親心の表れだと、副官達は考えていた。
だから彼らは、軍議にジョシュアが参加していても意見を聞いたことなどない。ただの生きた粗大ゴミとしか思っていなかったから。

「判らないか? 罠だよ……ワザとこちらの軍を引き込んで挟撃する。使い古された手だがそれは其の手段が有効だって証拠さ……逆にアンタたちに聞きたいんだが、本当にこのまま追撃するつもりか?」

ジョシュアの眼には副官達への侮蔑の色が浮かんでいた。

「馬鹿な……何を根拠にそのような……」

「考えすぎだ！」

「将軍！　所詮戦を知らない素人の戯言です。千載一遇の好機をみすみす見逃されるおつもりですか？」

副官達は矛先をベルハレス将軍へと変えた。

内心、ジョシュアの指摘を受けてオルトメア側の策の可能性を考慮した副官も居た。

歴戦の戦士である副官達も愚かではない。あまりに予想外の幸運に我を忘れて追撃を進言したものの、ジョシュアの言葉によって其の熱も下げられた。だが、それを素直に認める事はできない。

今まで影で馬鹿にしてきた人間の言葉に何の不満も持たずに従える人間など居る筈もなかった。

彼らはオルトメアとの戦に勝つ為ではなく、自らのプライドを守る為、追撃に固執する。

「皆少し黙れ……ジョシュア。お前は先ほど2つの選択肢を言ったが、あれはどういう意味だ？　何故罠だと知っていながら追撃を容認するような発言をした？」

ベルハレス将軍の言葉に、騒いでいた副官達も押し黙る。

罠だと予測したのなら、選択肢は軍の撤退以外にはありえない。一度、陣へ戻り、仕切りなおすのが戦場の常識と言える。

それなのにジョシュアは追撃を容認するような発言をしている。しかも、ザルーダ王国を守りたいならばなどと言う、意味深な言葉を添えてだ。

興味を惹かれない筈がなかった。

「親父……それは俺が言う必要はないだろう？　アンタだって十分

に判っている筈だぜ？」

「もう一度言う。皆に説明せよ」

どこかあきれたような口調で首を振るジョシュアの言葉を切り捨て、ベルハレス将軍は鋭い視線をジョシュアへ向けた。

「ふぅ……良いぜ……なぁに話は簡単。戦略的観点から見れば、このオルトメアとの戦は既に負けてしまっているって事さ」

ジョシュアの言葉に天幕の中は静まり返える誰もが彼の言葉に耳を疑ったのだ。

「き……貴様！　何を言っているのか判っているのか！」

静寂を破り、副官の一人が怒りの叫びを上げる。

彼は今まで取り繕っていた、将軍の息子に対する礼儀を完全に無視して掴みかかろうとジョシュアへ向かって走る。

前線では今も血みどろの戦が繰り広げられている。誰もが祖国の平和の為に、命を賭けて侵略者の手から国土を守ろうと必死で戦っているのだ。それを既に負けていると言い放つのは、死んでいった騎士への侮辱に他ならない。彼の手が腰の剣に添えられたのもある意味当然といえた。

「待て！　何をするつもりだ！　此処は軍議の場だぞ！」

副官の手が剣の柄を握ったことに気がついた同僚は、咄嗟に彼を羽交い絞めにして圧しとどめる。

副官の怒りはその場に居る誰もが理解できた。だが、だからと言って軍議の場で味方を切り殺すのを黙ってみているわけにもいかな

い。
誰もが無言だった。口を開けば罵声しか出てこない事を誰もが理解していたから。
ジョシュアの言葉を聞いて表情を動かさなかったのはただ一人、ベルハレス将軍のみだ。
「ふむ……まぁ礼儀を弁えていない言葉だが……間違っては居ないか……」
それは小さな呟きだった。だが、静まり返った天幕の中に将軍の言葉はやけに大きく響く。
まるで死の宣告の様に……

第3章第19話

西方大陸暦2812年10月未明【東部侵攻】其の3：

ベルハレス将軍の言葉に副官達の顔は青ざめた。
まさか、最高指揮官がこの場で負けを認める様な発言をするなど、誰が予想出来ただろう。

「か……閣下……」

ベルハレス将軍の名を口にした副官の声は、あまりの衝撃に震えていた。
この世界の戦争は肉体を使った白兵戦が主流であり、その勝敗を決めるのは兵の士気に他ならない。
そして、其の士気を保つためには指揮官への信頼が何よりも大事だ。
指揮官が勝利すると思うからこそ、兵は命を賭けることが出来る。
逆に言えば、勝てない指揮官のために命を賭けることができる人間は圧倒的に少ない。

それにベルハレス将軍はこの戦においてザルーダ王国軍の最高責任者でもある。
それはつまり、勝敗は彼の考え方一つに掛かっているという事だ。
どれほど兵を失おうと、指揮官が負けを認めない限り勝敗は決しない。戦意さえ失わなければ其の戦場では負けたとしても、戦そのものは終わらないのだ。
しかしそれは同時に、戦意を失ってしまえば兵が幾ら残っていても負けるということを意味する。

つまり、軍の指揮官に求められる最高の資質は不屈の精神力と言う事になる。

軍略の才は部下を選べば補うことが出来る。しかし、人の心や精神力を他人の力で補う事はできない。

そういった意味で、ベルハレス将軍はまさに最高の指揮官だったはずだ。

オルトメア帝国、エルネスグーラ王国。この2国の東部地方侵攻を長年阻んできたのは彼だからだ。

ローゼリア、ミストといった東部の王国と連合し、幾度となく大国の野望を阻止してきた名将。

其の名将の口から、負けの言葉を聞いた副官達の心はまさに絶望としか言えない。彼らの脳裏から、ジョシュアの傲岸不遜で言葉を選ばない態度を気にする気持ちは消え去っていた。

「閣下……それは、それはあまりのお言葉ではありませんか！　前線ではいまだ多くの騎士達が勝利を信じて命を削っております……それなのに、今此処で閣下が負けをお認めになるなど！」

副官の一人が、顔を真っ赤に紅潮させてベルハレス将軍へ詰め寄る。

本来であれば決して許されない暴挙だったが、彼を止めようとするものは誰も居ない。

皆同じ思いだったからだ。だが、ベルハレス将軍はゆっくりと右手を挙げて彼を制止すると、周囲に鋭い視線を向ける。

「誰が戦の負けを認めた？」

低く落ち着いた声だ。

幾多の戦を勝ち抜いてきた戦士の自負と威厳が、ベルハレス将軍の声ににじみ出ている。

其の言葉には怯えも揺らぎもない。ただ確固たる意思だけが存在していた。

「え？　しかし先ほど閣下は……」

「ワシは戦に負けたなどとは一言もいっておらん。それに……ジョシュアもな」

副官達は皆、将軍の言葉の意味が理解できなかった。

確かに彼らは其の耳で、将軍の口から負けたという言葉を聞いた。

それは決して聞き間違い等と言う事ではない筈だ。

「ワシ等は戦略で負けたといったに過ぎん……まぁ戦略面で大きく負けが確定してしまっていれば、勝敗の行方はほぼ決まってしまうがな」

此処で大きくため息をつくと、どこか自虐的な暗い笑みを浮かべたベルハレス将軍は静かに語り始めた。

「オルトメアは今回の戦に戦略レベルで様々な手を使い、こちらの行動を制限してきた……どういう意味だか判る者は居るか？」

誰も口を開く者は居ない。皆、押し黙ったまま言葉の続きを待つ。

彼らが判らない事はある意味仕方の無いことだった。

戦場で命を散らす事が仕事の騎士に、国家の戦略レベルの視野を持てと求める事の方が無茶なのだ。

ベルハレス将軍は副官達に理解できるよう、少しずつ語り始めた。

「そもそも、我々が野戦による決戦を選択した理由はなんだ？」

「それは……オルトメアの動員兵力が思ったほど多くなく、陛下直属の騎士団を総動員すれば勝てる可能性があったからです」

「うむ、其の通りだが、過去に我が国単独でオルトメアと戦をしたことがあったか？」

過去、ザルーダは単独でオルトメアと戦った事はない。常に隣国からの援軍と連合した上で迎え撃ってきたのだ。

副官達の脳裏に其の事実が浮かび上がった。そして、其れは将軍の言葉と結びつき一つの結論へと辿り着く。

「「「あっ！」」」

「まさか……ローゼリアの内乱は……」

副官の一人がベルハレス将軍へ探るような視線を向ける。

「其のとおりだ……無論、確証が有る訳ではない。だが、今度の侵攻はあまりにもオルトメア側に有利すぎる……おそらく、何年も前から準備した上での策だろう……わが国へ援軍を派兵させないためのな」

国土、人口、経済力。全ての点で、ザルーダ王国はオルトメア帝国に劣っている。

それでもザルーダ王国が独立を維持できてきたのは、東部地方の同盟国の存在だ。ローゼリア、ミスト、両王国が有事の際には常に援軍を差し向けてくれた。だからこそ、今までザルーダ王国は存続できたのだ。

無論それは善意からではない。

ザルーダ王国が滅びると言う事は、東部地方に大国の領土が広が

る事を意味する。
　そしてそれは、ローゼリアとミストの両国へも侵略の魔の手が伸びてくると言う事に他ならない。

「ローゼリアは今回、内乱の後遺症でとても他国へ援軍を派遣する余裕はない……出したくとも、物理的に不可能なのだ。そしてローゼリア王国が混乱している以上、ミスト王国はローゼリア国内を通って兵を派遣することが出来ない……かといって、海路を使うのも難しい。南回りの航路ではあまりに時間を喰い過ぎるし、北周りにはウォルテニア半島と言う難所が有る……誰が考えた策かは知らぬが、ローゼリア一国を内乱に陥れる事で残りの二国の行動をし封じ込めた……まさに大したヤツよ」

　両国よりの援軍がこれない事を副官達は皆十分に理解していた。だが、其れが全てオルトメア帝国の策謀による結果だったとなれば……
　将軍の説明に副官達は息を飲んだ。此処まで説明されれば、彼らにも自分達が如何に危険な立場なのか理解できたのだ。

「では……ジョシュア殿が言われた罠と言うのは……」

　親の七光りと蔑んできた男の言葉に真実の可能性があることを悟りったのだろう。其の声はか細いものだった。

「それほどまでに綿密な準備をしてきた敵が、そう簡単に退却などすると思うか？　まず間違いなく、兵を伏せているだろうよ……こちらの息の根を止めるためにな」

　ベルハレス将軍の言葉に副官達は異の唱えようがなかった。
　オルトメア側の退却を聞き、予想していなかった勝機に己を見失

いはしたが、冷静さを取り戻せば、今回の一連の動きが罠である事を理解できないほど、彼らは愚かではなかった。

「では……もはや戦の勝敗は決したと言われるのですか……この戦は無駄だと……そういうことですか？」

悲壮と絶望に彩られた言葉だ。

勝つと思うからこそ戦える。大事な者を守れると思うからこそ命を賭けられる。ベルハレス将軍の勝利を信じて戦ってきた人間にとって、将軍とジョシュアが突きつけた現実は過酷だった。

この言葉を呟いた副官はきっと断腸の思いで口にしたのだろう。

だが、ベルハレス将軍は其の言葉を静かに首を振って否定した。

「そうではない。今までの話はあくまでも有利不利と言うだけの話。まぁ絶望的なまでに不利なわけだが、まだ勝機はある……」

「本当ですか！「それはどのような！」」

絶望した人間ほど、希望と言う甘美な誘惑に弱い。

勝機の見込めない現実を認識させられた上で突然出された希望。

副官達がそれに飛びついたとしても誰が責められるだろう。

だが、彼らの前に示された道はあまりにも過酷な死への道だった。

「敵軍の最高指揮官であるシャルディナ・アイゼンハイトの首を狙う……」

ベルハレス将軍の言葉に天幕の空気は凍りついた。

それはあまりにも可能性の低い、殆ど自殺行為に近い策だ。

確かに敵の最高指揮官を討ち取る事ができれば勝利はザルーダの物だ。

戦略的な敗北も、シャルディナの首を取るという戦術的な勝利によって覆す事が可能で有る。
確かに理論的に将軍の言葉は間違ってはいない。

「……しかし閣下……それはあまりに無謀では……」

年配の副官が意を決して将軍に問いかけた。
敵の罠を逆手にとって、敵司令官の首を狙う。
言葉にすればとても容易いが、実行するとなればそれは針の穴を通すほどに僅かな可能性。
だが、副官達はベルハレス将軍の体から漂う決意を感じ、黙り込んだ。

「判っておる……敵の罠を力で噛み破ろうと言うのだ……こちらも全滅を覚悟せねばなるまい……だが、ほんの僅かだがこの国を救う可能性が残る……今のままでは、仮に我ら全軍がこのまま退却してもオルトメアは困らぬ。温存した兵力を使って、侵略拠点をザルーダ国内に作るだけの事……元々の国力差を考えれば、ザルーダ国内に前線基地を作られた段階で、我らはそれを取り戻す事ができなくなる」

峻険な山々に守られた天然の要害であるザルーダ王国。
敵国からの侵略を阻む地形の険しさ。
国内に敵国の拠点を作らせてしまうと、其の険しさがザルーダの領地奪還を困難なものにしてしまう。
まして、オルトメア帝国の国力はザルーダ王国よりも大きい。
もし拠点に大量の兵を守備兵として動員されたら、ザルーダ側は打つ手がない。
砦を攻めるのに必要な兵力が守備側の3倍以上と言われるのは兵法の常識と言える。

だが、オルトメア帝国に対して国力そのもので劣るザルーダ王国に、それだけの兵力は存在しないのだ。

「それに策士は策に溺れ易いもの。此処まで相手の戦略どおりに展開しているのだ。どれほど用心深くとも勝利を確信している筈。其の油断を突く」

既に他の選択肢は存在していない。
唯一、残された希望に彼らは縋るしかなかった。

「閣下は……既に決断されているのですね？」

「うむ、済まぬが皆には死んでもらう事になる……」

ベルハレス将軍の言葉は非情だった。
生きて戻る可能性が殆どない戦術を選択し命じたのだから。だが、将軍の命を聞いて怯えを見せた人間は誰も居ない。
初め、副官達の心は絶望で満たされていた。誰だって負けが決まった戦に命など賭けられるはずもない。
そこを上手くベルハレス将軍は操った。
死を覚悟した人間ほど強く恐ろしいものは無い。

「良かろう……これより本陣に残る全部隊にて追撃を行う。退却は無い！　良いな！」

「「「はっ！」」」

彼らの体からは、悲壮なまでの闘志が火の様に激しく噴出していた。自らの窮地を自覚した事によって、ただ無駄死にをするより、祖国の為に命を捨てると覚悟した人間の意思の表れだ。

ザルーダとオルトメア。両国の戦は今、最終局面を迎えた。

第3章第20話

西方大陸暦２８１２年１０月未明【東部侵攻】其の４：

「「「突撃ぃぃぃぃぃぃ！」」」

雄叫びを上げながら、騎馬にまたがった騎士達が槍を構え、次々とオルトメアの戦列へと突進してくる。

其の後から徒歩の騎士が続き、騎馬の突撃に因って生じた隙間を広げようと槍を振り回す。

「何をしている！　槍を構えろ！　このまま取り囲んで殺すのだ！決して逃がすな！」

前線を任されたオルトメアの指揮官が怒鳴り声を上げた。

馬の突撃に怯えた混乱した部下達へ的確な指示を与える。其の彼の叫びが、浮き足立った騎士達の頭を冷やしていく。

前線指揮官の命は次々と伝令に因って各部隊長にまで伝えられた。

「取り囲め！　離脱させるな！」

状況を把握した部隊長達が口々に部下を叱咤する。

兵達の槍がザルーダの騎馬騎士達へと向けられた。

「戦の常道を知らぬ馬鹿め！　騎馬の真価は機動力と突進力よ！足の止まった馬など目立つ的に過ぎぬ！」

ザルーダの騎馬を逃がさぬように退路を塞いだ部隊長の一人が、

獰猛な笑みを浮かべた。

騎馬は攻撃力や機動力が優れている反面、持久力や防御力には難が有る。

全身を金属の鎧で固め、武器を構えた人間を乗せて走るのだ。如何に馬の体力が優れていようと所詮生き物。当然限界が存在する。まして、敵陣に飛び込んだまま離脱せずにその場で戦うのは決して賢い選択とはいえないはずだった。

事実、その場で槍を振り回すザルーダの騎士達は一人、また一人と馬の足を刈られ落馬して行く。

馬を走らせようにも、接近戦に持ち込まれ距離が取れない彼らは、その場で槍を振るうしかないのだ。

そして、無謀ともいえる突撃の代償は大きい。騎馬の後ろに付き従っていた徒歩の騎士達も数に圧されその数を半数にまで減らしていた。

「よし！　このまま押し潰してしまえ！　勲功は思いのままだぞ！」

オルトメアの部隊長は欲望に歪んだ笑みを浮かべて叫ぶ。

騎士の中でも馬に乗れる者は身分が高いと決まっていた。そういった人間を討ち取る事は、戦後の論功行賞に大きく影響する。

彼の表情が弛むのも無理もない。だが、彼の期待は残酷な形で裏切られる事になる。

「部隊長！　新手です！」

「な！　何！？」

部下の報告を聞いた部隊長の脳が一瞬フリーズを起こす。

それはあまりに予想外な報告だったからだ。

「どうしますか！？　このままでは前後を挟まれる事に！」

　部下に言われなくても、彼は自分の置かれた危険な立場を十分に理解していた。

　新手の部隊を相手するには、部隊の方向を後方へと向けなければならない。

　だが、それをしてしまえば、せっかく取り囲んだザルーダの騎士に隙を見せてしまう事になる。

（仕方が無い……部隊を前後で分けるしかないか……）

　前後に敵を持ってしまった場合に取れる手段は少ない。そして彼の判断は決して間違っては居なかった。だが、彼には現実を打破するだけの策も時間も残されては居ない。

　部下の言葉に気をとられ対応策を思考した其の時、彼は取り返しのつかないミスを犯した。

　彼の腹を冷たい何かが抉る。

　周囲の騒音が彼の耳から消えた。そして、わき腹の辺りから生暖かい何かが肌を滑り落ちていく感覚。

　痛みはない。ただ、驚きと体中の力が抜けていくような倦怠感が彼の体を支配した。

「貴様……」

　次の瞬間、彼の腹に槍が強く押し込まれる。

　途切れゆく意識の中で彼の眼が最後に捕らえたのは、全身を己の血を返り血で真っ赤に染めたザルーダの騎士の憎悪に燃え上がる瞳と、その騎士の体に襲い掛かる部下達の姿だった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

――――――――――――――――――――

１０００名ほどの部隊が新たにオルトメアの前線部隊へ襲い掛かった。

彼らは先に突入した部隊と合流すると、オルトメア側の思惑に反して陣の奥へと再び突進してくる。

斉藤の思惑に反して、彼らは取り残された部隊の救出に来たわけではないらしい。

「くっ！　何故、兵を引かない？　どういうつもりだ！　ヤツら命を捨てるつもりか！」

ザルーダの騎士達はただ一心不乱に前へ前へと突き進んでくる。

彼らはまるで、猛り狂った猛牛のように猪突猛進を繰り返す。どれだけ殺しても彼らはひるむ様子を見せない。

本来、一度突撃した部隊はすぐさま前線を離脱し、体制を立て直すのが普通だ。

敵に取り囲まれて引けない場合も当然存在するが、自らの意思で離脱を選択しない事は先ずありえない。騎馬を運用する場合は特にだ。

無論、戦は勝つことが全てだ。勝つために手段を選ぶ必要はない。

だが、斉藤の目にはどうしてもザルーダの攻撃が常軌を逸した凶行にしか見えなかった。彼の目にはザルーダ王国の指揮官は勝つことを放棄して、ただオルトメアの兵を殺す事を選択したように映るのだ。

「一体どういうことだ？　何故連中の進軍速度が下がらない。このままでは殿下の策が狂いかねんぞ！」

斉藤は忌々しげに前方を睨み付けた。

彼の役目は、兵を伏せ居ているポイントまでザルーダの部隊を引き付けることにある。
適度にザルーダ軍をあしらいながら兵を誘導するこの任務は、如何に自軍の兵を温存できるかが重要になる。
敵側に不自然と思われない程度に戦いながらも、決して乱戦に持ち込まれることなく兵を引く事を要求されるのだ。
それなのに、斉藤とザルーダ軍は泥沼とも言える乱戦を繰り広げていた。
兵を引きたいオルトメア軍。喰らい付いて離れないザルーダ軍。
特に問題なのは、ザルーダ全軍が突進してきているわけではない事だ。
横一文字の布陣したザルーダ軍だが、突撃を繰り返しているのは中央に布陣したおよそ４０００程。
左右に展開する部隊は前に進むと言うより、オルトメアの部隊をその場に釘付けしようとしているように感じられる。

「斉藤副団長！　左翼右翼ともにダメだ！　中央へ援軍を出すどころか、逆に増援を求めて来てる！　ザルーダの奴ら、部隊を前に進軍させてこないがこっちの部隊が引こうとするとしつこく食い下がって来る。完全にこっちの足を止めさせるつもりだ！」

夜魔騎士団の一人が、死に物狂いで前線を駆け抜けてきた伝令達の報告を聞き、叫び声を上げた。

「チッ、一体何を狙っている？」

斉藤の目から見て、この状況はあまりに不自然だ。
命を捨てる覚悟で突進してくるザルーダの中央部隊。
後退させまいとオルトメアに食い下がる左翼と右翼の部隊。
意図せずにオルトメアは鶴翼の陣形に、ザルーダは魚鱗の陣形へ

と姿を変えていた。
（まさか……こいつら……）
斉藤の脳裏に有る仮定が浮かんだ。
（まさか、殿下を狙っている？）
其の事に思い至った斉藤は思わず身震いした。
ザルーダ側の壮絶にして強固な戦意を感じたからだ。
（正気か？　殿下を狙う……確かにシャルディナ殿下を討ち取ればこの戦にザルーダは勝利する。だが、それを実現できる可能性は５％もあれば良い方だろう。それに、成功してもしなくてもザルーダの兵は殆ど壊滅する事になるはずだ……それでも賭けに出た……何故だ？　いや、理由はどうでもいい。先ずは戦線を立て直さなくては……）
斉藤は沸きあがる疑問を振り払うと、対応策へと思考を進める。
どちらにしても、ザルーダの中央部隊の狂気ともいえる特攻のせいで、横一文字に並んでいた陣形は真ん中からくの字の形へ折れ曲がってしまっていた。
早急に体勢を立て直さなければ、オルトメアの中央を貫かれ、後方に布陣しているシャルディナに危険が及ぶ。
其処まで考えが及んだ斉藤は素早い決断を下す。

「伝令！　策を一部変更し、このままこの地でザルーダ軍を迎え撃つ。直ぐにシャルディナ殿下へ状況を伝えろ！　良いな！　ザルーダの狙いが殿下の首かもしれない事も伝えるんだ」

北と南から平原を大回りで迂回してきている味方部隊との合流地点は西に３ｋｍほど離れた場所だ。
西北南の三方向を小高い丘で囲まれた其の土地は、奇襲にはうってつけと言える。
其処にザルーダ軍をおびき寄せるのが斉藤の仕事であり、もし実現すれば、文字道理ザルーダ軍を皆殺しに出来る筈だ。

だが、この状態でザルーダ軍を其の地点まで引き連れていく事を斉藤は諦めた。

勢いづく敵に押され、偽装退却である筈が本当に敗走しかねない状況まで追い込まれてしまっている。

万が一にも戦線を突破されるような事にでもなれば、後方に布陣しているシャルディナに危険が及びかねない。無論、直属部隊に警護されてはいるが、それを破られないと言う保障はないのだ。

となれば、残る選択は一つしかない。退却を止め、ザルーダの攻勢を防ぎきるのだ。

（殿下へ状況を報告すれば、殿下は必ず別働隊をこちらに廻しザルーダの後方を襲う筈……襲う場所が変わるだけの事だ……だが……損耗は予想以上に激しくなる……クソっ！　悪あがきを）

この戦はただ勝つだけではダメなのだ。

出来るだけオルトメア軍の損耗を減らさなければならない。

其れが出来なければ、オルトメア帝国は真の敵に対して備えることが出来なくなる。

其の事を十分に理解している斉藤は、心の中でザルーダの指揮官を罵倒した。

「中央で待機している全ての予備部隊に伝えろ！　この場でザルーダの連中を迎え撃つ！　直ぐに殿下が援軍を差し向けてくださる！　それまで絶対にザルーダの連中に突破されるな！」

斉藤は普段の落ち着いた雰囲気をかなぐり捨て大声で命じる。それだけ切羽詰っていると言う事なのだろう。また其の言葉を聞いた部下達も事の重大さを理解し緊張で強張っていた。

「絶対に此処で喰い止めるんだ！」

「「「はっ！」」」

斉藤の言葉に部下達は一斉に頷くと、一斉に持ち場へと散って行った。

ザルーダとオルトメア。両軍の戦は総力戦へともつれ込んでいく。

第3章第21話

西方大陸暦２８１２年１０月未明【東部侵攻】其の５：

「やってくれたわね……流石はベルハレス将軍と言ったところかしら……直ぐにこちらから伝令を出して別働隊を向かわせる。一時間……良い？　一時間だけ持たせるように斉藤へ伝えなさい！」

斉藤からもたらされた伝令を聞きシャルディナは小さく舌打ちをすると、目の前に広げられた地図を凝視しながら叫んだ。

伝来からもたらされた情報を聞いたシャルディナは、瞬時にベルハレス将軍の意図を察したからだ。

（斉藤の言うように私の首を狙ってきてる……いいえ、多分其れだけじゃない……ベルハレス将軍の狙いは……）

「はっ！　直ちに」

彼女の剣幕に圧され、伝令は脱兎の如く天幕の外へと駆け出す。

「誰か！　別働隊へ伝令を走らせなさい！　直ぐに斉藤の下へ援軍に向かうよう伝えるのです！」

「ご安心ください、殿下。既に私が命じて走らせております」

シャルディナの叫びに続き、落ち着いた男の声が天幕に響いた。

何時の間にやってきたのだろうか。声のした天幕の入り口へと視線を向けたシャルディナの眼に、にやけ面をした須藤の顔が映る。

ローゼリアに対しての謀略が一段落した須藤は、今回の戦に参加するにあたって、一時的にシャルディナの護衛部隊を率いていた。

裏工作が得意な須藤は戦でも、軍師的な役割を担っていた。
須藤に斉藤。
シャルディナがこの有能な日本人である彼ら二人を投入したと言う事は、それだけこのザルーダ侵攻に賭けている証だった。

「須藤……そう、アナタが……ありがとう」

「いえいえ、殿下の為ならこの須藤、いかなる事でも」

そういうと須藤はいつものようにおどけた表情で肩をすくめた。
状況を理解していないわけではないだろうに、この男の表情は何時もと変わらぬままだ。

「フゥ……ずいぶんと余裕ね？　須藤」

言いがかりである事は十二分に理解していたが、シャルディナはついつい皮肉を口にしてしまった。
自分の置かれている状況を理解していれば居るほど、心の奥底から沸きあがってくるのは不安と焦燥だ。

「焦ったところで状況は変わりませんからねぇ……まぁ殿下が焦るお気持ちはこの須藤、痛いほど理解しておりますがね」

シャルディナの皮肉を聞いても須藤の表情は変わらない。
それどころか、彼の口調はより一層落ち着いて聞こえる。

「まぁ、ザルーダ軍もまんざら馬鹿ではなかったようですな……軍の指揮官はベルハレス将軍だとか。流石に歴戦の勇士だけあるといったところですか。王や大臣達の意向に振り回された感じを受けていましたが、最後でこんな手段をとってくるとは……いや、大した

ものです」

「それは私の首を狙ってきた事を言っているの？」

須藤の言葉にシャルディナは探るような視線を向けて尋ねた。

彼女の言葉を聞き、須藤の唇が釣りあがる。

「ご冗談を……私が褒めているのは其の先の話ですよ。ベルハレス将軍とて本当に殿下を討ち取れると思って突撃を命じたわけではないでしょうからね」

須藤の答えに、シャルディナは自分の感じた予感が正しかった事を確信した。

「やはり……其れが狙いだとアナタも思う？」

「えぇ……連中の戦い方はどちらかと言えば相打ち狙い。完全に消耗戦を望んでいるようにしか思えません。我が国とザルーダの国力差を考えれば本来ありえない選択の筈。それを選択したということは……」

「第三国……エルネスグーラ王国の参戦を望んでいると言う事ね」

「恐らくは……」

シャルディナの言葉に須藤は深く頷く。

其の表情には、今までのような笑みはかけらも残っては居ない。

冷たく鋭い刃のような視線。それは幾多の戦場を生き抜いてきた人間だけが持つ、圧倒的な威圧感。

「戦略的な劣勢を覆す事が出来ない事を悟り、捨て身の策を選択したわけね……全く、無茶な事をするものね……」

「恐らくはベルハレス将軍の独断でしょう。ザルーダの国王や大臣達がこれ程危険な賭けを許可するとは思えませんからね」

須藤の言葉に、シャルディナも頷く。

「何処の国王だってこんな策を許可なんて出さはずがないもの……自国内にエルネスグーラを引き込んで私達と噛み合わせようだなんてね」

シャルディナは忌々しげに吐き捨てた。

「後はどれだけこちらの損耗を抑えられるかに掛かっています……もし、半数近くまで減らされたとなれば……」

「判っているわ……半数まで兵力が落ちればザルーダの国内制圧に時間が掛かる。そうなれば……」

「北のエルネスグーラが黙っては居ますまい……ザルーダに侵攻して漁夫の利を狙ってくるか、さもなくば逆にザルーダを援助するか……連中にしてみればザルーダがどうなろうと我々に対して抵抗してくれれば良い訳ですからねぇ」

ザルーダ王国そのものを占領する事は、オルトメア帝国の国力を考えれば比較的容易と言えた。

ローザリア、ミストの両王国が援軍に来たとしても十分に勝利を見込む事はできるのだ。

それなのに、長い時間を掛けて策を巡らし、戦略的に有利な状況

を演出したのは全て北と西に隣接する2大強国の影を意識したからに他ならない。
西のキルタンティアはともかく、北のエルネスグーラはザルーダ王国と国境を接している。
オルトメア帝国がザルーダの占領に時間が掛かった場合、エルネスグーラは必ずオルトメアの領土拡大を嫌い妨害してくることが眼に見えていた。

「エルネスグーラの雌狐はどっちを選択すると思う？」

「そうですねぇ……あの方は己を汚さずに結果だけを横取りする方ですからね……」

シャルディナの問いかけを聞き、須藤の脳裏にエルネスグーラの若き女王の姿が浮かぶ。
容姿はまぁ普通だ。ローゼリアのルピス王女やシャルディナ殿下と比べればまさに月とすっぽん。比べるだけ無駄と言うものだ。だが、其の平凡な容姿とは裏腹に彼女はあまりにも恐ろしい存在だった。
冷酷で冷徹で、目的のためには平気で身内すらも切り捨てることが出来る生まれながらの帝王。
過去に2度ほど面会したことがあるだけだが、其の強烈な個性は須藤の頭に焼き付いている。
北の雌狐と謳われる知略に優れた女王。其の彼女が、絶好の機会を見逃す筈がない。

「まず間違いなくザルーダへ兵を進めてくるでしょう……我らにだけ領土を増やされまいとして……」

「其の過程で、我々とエルネスグーラは必ずぶつかる事になる。そ

うなればザルーダにも交渉の余地が生まれるか……全く、なんてしぶといのかしら」

「弱い国には弱い国なりに、国を存続させるため必死なのですよ」

苛立つシャルディナの言葉に、須藤は静かに首を振った。

「まぁそれはいいわ。とにかくこの戦に勝つ。其れが大前提なのだから」

今問題なのは、ザルーダの軍に勝つことだ。勝利した後で初めて、今までの仮定が意味を持つ。

「えぇ、可能性は低いですが、戦意で圧倒されてザルーダに敗北すると言う可能性も無いわけでは在りませんからね」

最大の懸念は其処だ。勢い盛んなザルーダ軍に前線を突破されるか否か。

「私も……前に出ます」

シャルディナは緊張と恐怖で強張った顔のまま、須藤を見つめた。選択としては愚策と言ってよい。態々、敵の目の前に目標を差し出すことに他ならないからだ。

だが、須藤は彼女の言葉を聞いても、頭から否定はしなかった。

シャルディナの瞳に宿る強固な意志を感じたためだ。それに、彼女の提案に大きな利点があることも須藤は理解していた。

「なるほど……賭けに出られますか……」

「私が前線に進めば、私の護衛についている２０００の兵力も戦にまわすことが出来るわ……それに、私が前線に出れば兵の士気は上がるでしょう？」

オルトメアが兵数で互角の筈のザルーダに圧されている理由はただ一つ。

ザルーダの騎士達が死を恐れない士気の高さに有る。

高揚感と言ってもいい。

彼らは、ほかに選択肢がないという危機感と祖国ザルーダのためと言う使命感に酔っているのだ。

「殿下が前線出でれば確かに士気は上がるでしょう……護衛部隊も戦に投入できますから十分に別働隊がやってくるまで持ちこたえられるとは思いますが……」

此処で須藤は言葉を濁した。

確率的に言えば、勝算は十分に有る。

最高指揮官が前線に出ることで、オルトメアの将兵は決死の覚悟で戦う事だろう。

だが、参謀と言う立場で考えたとき、シャルディナの提案はあまりに危険が大きすぎた。

安全か冒険か。

どちらを選択しても絶対はない。

絶対に勝つとも、絶対に負けるとも言えない状況。

「危険は承知のうえよ……」

須藤はこのシャルディナの言葉を聞き決断した。

このまま、決断を先延ばしにして何も選択しないうちに負けてし

まうなど馬鹿げている。
後は、最高指揮官であるシャルディナの決断を信じ付き従うだけの事。
「かしこまりました。直ちに護衛部隊を前線へ援軍に差し向けます」
須藤はそう答えると、静かにシャルディナへ頭を下げる。
それは、指揮官の勇気有る決断に対しての最大の敬意だった。

――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――
――――――――――――――

其の日、ノティス平原を舞台にしたザルーダ王国とオルトメア帝国の戦は、オルトメアの別働隊による挟撃によってオルトメアの勝利に終わった。
だが、決してオルトメアによる完全勝利だったわけではない。
ザルーダの指揮官である、ベルハレス将軍を討ち取ったことによって、オルトメアが勝利を掴んだ事は事実だが、シャルディナの思惑が大きく外れる結果となったからだ。
ザルーダの戦死者数１６０００に対し、オルトメアの戦死者数１７０００。
ほぼ同数の損害を出した事により、オルトメアは一時的にザルーダ侵攻を停止するより他に選択肢はない。
国境付近の貴族領を制圧したシャルディナは、其処を拠点に戦力の回復を図った。
だが、彼女がザルーダへの侵攻を再開する事は出来なかった。
当初からの懸念どおり、北の巨獣・エルネスグーラ王国がザルーダ北部の国境線を超え、其の牙をむき出しにしたからだ。
此処に、ザルーダ、オルトメア、エルネスグーラ、三国による三

つ巴の戦いが開始されたのだ。
そして、ザルーダ王国が動乱の坩堝（るつぼ）と化した事により、御子柴亮真は貴重な時間を手に入れることになる。
自らが生き残るために必要な時間を……

第3章第22話

西方大陸暦2813年1月15日【ウォルテニア半島】其の1：

グシュ

水気を含んだ果物を踏み潰したような鈍い音が、薄暗い森の中に響く。

森の木々が放つ青臭い匂いの中に、鉄の錆びた様な異臭が混ざりサーラの形の良い鼻を刺激した。

「亮真様……調子の方はいかがですか？　体に違和感を感じられたりはしていませんか？」

そう言いながら、サーラは手にしたタオルを眼の前に立つ黒い影へと差し出す。

「あぁ……全く問題は感じないな。たいしたもんだぜ、武法術ってのは。まるで自分の体が猛獣にでもなったような気分だ」

「既に亮真様は武法術の基本を習得されています。後は実戦を重ねて経験を積んでいくだけです」

「経験を積む……か。素手でこんな猛獣を殺せるんだ。鍛え上げればどれだけのことが出来るかな」

そう言うと、亮真は唇を吊り上げ笑みを浮かべた。其の姿はまさに悪鬼の如き様相を呈している。

彼の顔に飛び散った赤黒い飛沫は明らかに血の跡だ。

両腕は肘の部分まで真っ赤に染まり、今でも地面にポタリポタリと雫を落としている。
そんな彼の足元に横たわるのは、獰猛な狼の死骸。
其れが全部で5匹。
体長は1．5Mを超え。体重も50Kgを軽く超えるような巨体だ。
この森の中で強者の部類に入る筈の狼達が、今、亮真の足元で静かに大地へ横たわっている。
それは生存競争に負けた敗者の姿であった。
地面に伏した其の体からは、赤い液体が止め処なく溢れ地面を浸し、凶暴な顔は無残にも踏み砕かれていた。

「正直に言ってこれ程容易く素手で殺せるようになるとは思わなかった。単純に腕力が強くなっただけじゃない。感覚が鋭くなっているし、体の切れも段違いだ」

どこかあきれたような口調で、亮真は足元に横たわる狼達の死骸へ目を向けた。
体の奥底から湧き上がる高揚感とは別に、目の前の事実がどこか自分の空想によって生み出された幻のように感じられて仕方が無いのだ。
人間の持つ筋力は動物に著しく劣る。
本来、銃や刃物で武装していたとしても、絶対に勝てるとはいえない。
人間と動物との間にはそれだけの差が存在しているのだ。
それを己の肉体のみで殺せた。しかも、複数を同時に相手取っての結果だ。
さらに、手にしたタオルで拭いた亮真の体には目立った外傷が見当たらない。
それは、武法術を使用した亮真の肉体が、野生の動物以上である

事を示している。
狼の腹に突き入れた手刀が感じた内臓の生暖かい温度。
噛み付こうと大きく口を開けた狼の顎に手をかけ、上下に引き裂いたときの感触。
ましてや、亮真が殺したのはただの野獣ではない。怪物（モンスター）に分類される凶暴な生物だ。
今まで出来なかった事が出来るようになったことによる達成感。
そういった感情が、亮真の体を支配していた。

「勿論、誰もが出来る事ではありません。亮真様の肉体そのものが鍛え抜かれている事。そして、実戦経験を持っていらっしゃる結果です」

サーラの言葉通り、亮真の肉体は祖父に因って鍛え抜かれていた。また、地球では経験しようのない命のやり取りも潜り抜けてきている。
そういった様々な要素が武法術と言う新たな力を得た事で絡み合い、相乗効果を発揮した結果なのだろう。

「実際、同じ様に武法術を習得した子供達ですが……そのぅ……かなり苦戦していると聞いていますし……」

そう言うと、サーラは薄暗い森の奥へと視線を向ける。
表現を濁してはいるが、彼女の言葉には珍しく、どこか亮真に対しての非難の色が窺えた。

「苦戦ねぇ……サーラは不満か？」

サーラの言葉に亮真は眉をひそめてサーラへ視線を向けた。
彼女の言葉に含まれた自分の選択に対しての不満を、敏感に感じ

取ったからだ。
自分の選択が絶対に正しい等と思い上がる程、亮真は愚かではない。
だが、今回の選択は仮に正しくないとしても絶対に必要な事だ。
例えサーラに非難されたとしても、他に選択の余地はない。
今の亮真に、弱者を救う余地などないのだから。

亮真の揺ぎ無い瞳に真正面から見据えられ、思わずサーラは視線を逸らす。
彼女自身も理解してはいるのだ。
問題は、頭で理解していても、感情的には割り切れないと言う点だろう。

「勿論、亮真様があの子達を此処へ連れてきた理由は理解していますけど……」

姉のローラはさほど感じては居ないようだが、サーラは自らが経験した奴隷生活に対して強いトラウマを持っている。
奴隷商人達の欲と色に染まった卑しい顔つき。何時売られていくのかと言う不安。そして、自らが家畜も同然に扱われる事への絶望。
そういった感情が、戦うために鍛えられている子供達を視界に入れるたびに彼女の心の奥から湧きあがってくる。
それでも、彼女が子供達へ戦う術を教え込むように命じた亮真を批判しないのは、彼に対して恩を感じていると言う事以上に、ほかに選択肢がない事を理解しているからだ。
大地（アース）世界の根幹は弱肉強食。
生きる権利すら自らの力によってでしか得られないこの世界で、弱いと言う事は罪でしかならない。
いや、他人の力に虐げられて構わないのなら弱者のままでも良い。
奪われ、犯され、殺される。それらが自らと自分の守りたい人間

の身に降りかかってくる可能性があると覚悟するのであれば、別に強くなる必要はない。
　野盗の襲撃を受け財産を根こそぎ奪われる事も、貴族の横暴で妻を犯される事も、怪物(モンスター)に襲われ食い殺される事も、覚悟の上ならば、戦う手段を学ぶことなく弱者のままで居ればいい。
　だが、自分が人としての権利と誇りを持って生きて行きたいのなら。大切な何かを守りたいのなら、選択肢は一つだ。
　強くなる事。
　金でも良い。暴力でも良い。知恵でも良い。権力でも良い。
　ただ、力だけが正義だった。
　それを理解している人間から見て、亮真の行動は優しいとすらいえる。
　弱者である奴隷の子供達へ読み書きを教え、武術を仕込み、法術という力を与えた。
　それは、弱者に一筋の希望を与えたのだ。
　例え其の選択が亮真自身のためだったとしても、其の行為自体は非難されるようなものではない。
　子供達は幸運なのだ。弱者から強者に変わる機会(チャンス)を与えられただけ。
　そして今、彼らは生死の境を彷徨いながら、弱者から強者へと生まれ変わろうとしていた。
　この怪物(モンスター)が徘徊する森の中を生き抜く事によって……
　サーラは視線を暗い森の奥へと向けた。
　そして、静かに子供達の無事を祈る。
　一人でも多くの子供が無事にこの試練を生き延びる事を……それだけが彼女に出来る唯一の事だった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――

「メリッサ！　何をやっているんだ、ぼさっとすると死ぬぞ！　剣を構えろ！　また、突っ込んでくるぞ」

仲間の少年の叫びに、メリッサは反応することが出来なかった。
彼女の目には、牙を向いて走りよってくる黒い獣の姿が映し出されている。
それは、黒い毛皮の虎。
口元からは刀のように湾曲した鋭い牙が二本突き出ており、メリッサの体を引き裂こうとしていた。
３Ｍを超える巨体が、風のように駆け抜けてメリッサを襲う。

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁ！」

メリッサの口から恐怖の叫びが零れた。
思わず、剣の柄を握る彼女の手に力が入る。
だが、彼女は恐怖でそれ以上の行動を取る事が出来なかった。
虎の放つ眼光。鋭い二本の牙。そして、自分の体を遥かに超える巨体。
其の事実が、実戦経験のないメリッサの心と体を縛り付け動きを封じる。

「バカ野朗！　クラン！　メリッサを後ろに下げろ！　コイル！　俺と虎を防ぐぞ！」

棒立ち状態のメリッサを押しのけると、少年は手にした剣を構え虎を威圧した。
少年の体から虎に対しての殺意が放たれる。
それは、虎にとってさほど脅威になるようなものではない。
だが、ただの餌として見えていた少年達への評価を変えるには十

分だった。
虎は足を止め、ゆっくりと隙を窺うように少年達の周りを回り始めた。

「メリッサ！　早く下がれ！」

クランと呼ばれた少年が、メリッサの体を掴み強引に後ろへ引きずる。

「え！　痛い！　まって、ちょっと待って」

力一杯引かれたメリッサが思わず抗議の声を上げる。
そして、虎とにらみ合いを続けていた少年は思わず其の声に反応してしまった。
虎は其の瞬間、引き絞られた弓から放たれる矢のように少年へと襲い掛かる。

「クソッ！」

次の瞬間、飛び掛ってきた虎の口へ少年の握り締めた剣が突き入れられた。
そして、少年を其の巨体で押し倒した虎の腹をコイルと呼ばれた少年の剣が抉る。

虎に襲いかかられた瞬間、少年は思わず剣を前に突き出した。
それは、自分の身を守ろうとする本能的な行動だったのだが、運命の女神は少年の命を惜しんだのだろう。
大きく開いた虎の口に突き出した剣が突き刺さったのだ。
だが、数百キロの虎の巨体に圧し掛かられ、彼の姿は完全に虎の下敷きになった。

「無事か！　ケビン！」

コイルは、虎に押し倒された少年の名を叫ぶ。
自らの剣によって虎は既に絶命しているが、それを誇ろうなどという余裕はない。
ただひたすらにコイルの心はケビンの無事だけを心配していた。

「クラン、手伝え！　虎をどかす！　メリッサは周りを警戒しろ！　良いな、別の怪物（モンスター）が襲ってこないとは限らないんだ。絶対に見逃すなよ！」

目の前の敵を倒したからと言ってそれで終わりとは限らない。
この森の中には、幾らでも怪物（モンスター）が徘徊しているのだ。
倒した虎の血に惹かれ、別の怪物（モンスター）が襲い掛かってこないとは限らない。

「う……うん」

力なく頷くメリッサの言葉を聞いているのか居ないのか。
コイルとクランはメリッサへ背を向けると虎の死体に手を掛けた。

「クソ！　なんて重さだ……クラン！　力を入れろ！」

「判った！」

少年達は、互いに声を出しながら３００Ｋｇを超えるであろう虎の巨体を持ち上げる。

「ケビン！　ケビン！　今だ。這い出せ！」

虎の死体とケビンの体の間に隙間が生まれた瞬間、クランがケビンへ呼びかける。
幾ら武法術で身体強化を行っているとはいえ、１３～１５才といった年齢の彼らは肉体的に成熟しては居ない。
奴隷生活によって厳しい生活を送ってきた所為もあって、彼らの筋力は決して優れているわけではないのだ。
其の彼らが虎の体を僅かでも動かすことが出来たのは、４ヶ月に及ぶ訓練の成果と言えた。

「クソっ！　ダメだクラン！　ケビンのやつ気絶してるのかも知れない！」

何時までも動かないケビンの姿に、コイルは叫んだ。

「メリッサ！　ケビンを引き出せ！　急げ」

「えっ！？　まって」

「早くしろメリッサ！　クランも俺も、こんな重たい死体を何時までも支えられないんだ！」

少年の怒声がメリッサを打ち据える。

「何してる！　ケビンを殺すつもりかよ！　早く引き出せ！」

動けないメリッサに少年達は苛立ちを隠せなかった。
４ヶ月以上も彼らは苦楽を共にしてきたのだ。
其の結束は固い。
別にメリッサに対しても含むところはない。あくまでもケビンの

安否を優先させているからこその言葉だ。

「だ……大丈夫だ。今抜けでるから……もうチョイ持ち上げててくれ」

「ケビン！」

虎の体の下から響く言葉に、コイルは思わず叫び声を上げる。

やがて、ケビンは少しずつ体を揺らしながら虎のしたから這い出してきた。

「無事か、ケビン！」

「あぁ、肩を怪我した以外は大丈夫だ」

コイルの言葉にケビンは左肩を抑えながら答える。

彼の左腕はダランと垂れ下がっていた。

虎に圧し掛かられたときに関節を外したか、最悪肩の骨を砕いたのだろう。

まぁ、虎に襲われて致命傷を負わなかっただけでも運が良かったと言うべきなのかもしれないが、この森の中で、戦える人間が減ると言うのはそれだけ生存の確率が減る事を意味する。

「メリッサ、見張りは俺達がやる。お前はケビンの肩を見てやってくれ」

クランはそう言うと剣を握りなおし、周囲へ視線を向ける。

それは、この数ヶ月叩き込まれてきた、兵士としての行動。

仲間が心配でも、周囲への警戒を怠るわけには行かない。

コイルも無言で頷くとクランとは反対方向へと足を進めた。

ただ立ちすくんでいたメリッサも、慌てて背負い袋から医薬品を取り出すと、ケビンの肩を確認する。
彼女が確認したところ、幸運にもケビンの肩は脱臼しただけで済んだ。
応急手当の手段として傭兵達から教えられたように肩へ当て木をし、魔法薬（マジックポーション）を飲んだので、数日で彼の肩は普段どおりに動かす事が出来るようになる。
戦力低下は最小限に抑えられたと言えた。
だが、メリッサの心は晴れなかった。
自分の失敗でケビンに怪我をさせたと思い込んだからだ。

「ごめんなさい。ケビン……」

ケビンの肩に包帯を巻きながらメリッサは謝罪の言葉を口にした。
虎に襲われた瞬間、恐怖で身がすくみ動けなくなった事。
ケビンを虎のしたから引き出すことが出来なかった事。
そういった事を全てをひっくるめて、メリッサはケビンに謝りたかった。
だが、彼女の言葉を聞いたケビンは逆に顔を顰（しか）めて答える。

「馬鹿、何で謝るんだよ？　俺たちは仲間だろ？」

ぶっきらぼうな言葉だ。
だが、彼の言葉には親愛の情がが含まれていた。

「で……でも……」

「言ったろ？　俺達はチームだ。生きるも死ぬも一緒だ……だろ？」

ケビンは笑顔でそういうとメリッサの頭を撫でる。
それは、絶対の信頼と親愛によって裏打ちされた優しさだった。

第3章第23話

西方大陸暦2813年2月25日昼【ウォルテニア半島】其の2：

「出発！」

部隊の先頭で馬にまたがっていた赤い髪の女が大声で叫ぶ。そして彼女は手にした槍を高々と掲げた。

其の声に従い、300名程の一団が城塞都市イピロスの北門を抜け、一路ウォルテニア半島へ歩み始める。

それは厳粛で荘厳な光景だった。

道の両端を行き交う商人や農民達も、其の部隊の姿を眼に入れると足を止め黙り込んでしまう。

誰も口を開こうとする人間は居ない。

歓声をあげたりする余地が無いほど、彼らは気圧されてしまったのだ。

其の部隊の装備はかなり特殊で人の目釘付けにした。

黒黒黒……

彼らが身につけた革の鎧以下、シャツも靴も、いや、剣の鞘や槍の柄の部分でさえも、其の全てが黒い。

馬具の金属ですら黒く塗られているのだ。

馬だけは黒毛の馬のみで揃えては居なかったが、それにしても其の装いは異様と言えた。

そして、そんな中で彼らの掲げるが旗が更に人の目を釘付けにする。

黒地に一本の剣。其れに巻きついた金に染められた双頭の蛇。

其の蛇の目の部分だけが赤く縫い取られ、周囲を鋭く威圧してい

る。
別段、それぞれ単独で見ればそれほど奇抜とはいえないデザインだ。
剣も蛇も、紋章に幾らでも使われている。
それなのに、この一団が掲げる旗は其の姿を眼にした人間の心を縛り付けた。
まるで大地の奥底から湧き出して来た闇の様な、そんな印象を人々へ強烈に与えるのだ。

「あれがあの男の側近の一人ですか……名はたしかリオネとか。歴戦の傭兵と聞いていましたが……なるほど。所詮は女と言いたい所でしたが……大したものですな」

イピロスの城壁の上に設置された物見台の上から、白髪の老人が呟く。
温和な表情の老人である。
そして、明らかに富裕層の人間でもある。
絹製の衣服に宝石のついた指輪。そして、大きく前へせり出した恰幅の良い腹が何よりの証拠だ。

「義父殿はユリアと同じく心配性ですなぁ……無能ではないでしょうが、其処までわれらが気にする必要等ありますまい？」

老人の傍らで同じく眼下を見下ろすザルツベルグ伯爵は、どこかあきれたような口調で言い返す。
実際、彼は老人の言葉にうんざりしていた。

妻であるユリアからも散々に御子柴亮真への警戒を促されている。
傭兵の中に伯爵の息の掛かった人間を紛れ込ませたのもユリアの

提案だ。
伯爵としてはそんなまどろっこしい事をするより、軍を動かし討ち取ってしまえば済むと提案したのだが、ユリアはそれを決して認めようとはしない。
まるで御子柴亮真と敵対する事を恐れるかのように、彼女は慎重だった。
だが、伯爵からみれば亮真の勢力などゴミのようなものだ。何しろ、自らの拠点すらない状態なのだ。
自分の妻の能力を決して軽んじているわけではないのだが、伯爵としては何故其処まで慎重な対応が必要なのかがわからない。
其の疑問は不満を産み、不満は少しずつ伯爵の心を慢心で埋め尽くしていく。

「果たしてそうでしょうか？　あの部隊は元は素人の奴隷。其れがあれほど整然と隊列を組んでおるのですぞ？　御子柴男爵が奴隷共を購入し、教育を始めたのは僅か数ヶ月前の事。それであれほどの錬度とは……ザルツベルグ伯爵閣下。私は正直に言って恐怖すら感じるのですが」

老人は自分の鑑定眼に絶対の自信を持っていた。
イピロスの町で決して有力とはいえなかったミストール商会を運営し、商会連合の長にまで上り詰めたのはこの老人の持つ才覚の結果。
其の事実が、己の力量に対しての絶対的な自負をもたらしている。
其の彼の目から見て、眼下を北へと進む一団は脅威に見えた。

「くだらんですな。確かに義父殿から買い付けた武具は良い物でしょうが、使う兵が傭兵上がりと奴隷どもの混成部隊ではタカが知れているでしょう。あの黒で統一された装いはこけおどしとしては大したものですがね。まぁ、実戦経験のない義父殿から見れば、あの

ような子供騙しでも効果があるようですがな」

ザルツベルグ伯爵はそういうと、老人へ蔑むような視線を向ける。

自分の妻の父親である。

だが、伯爵はこの目の前に居る老人を見下していた。

その理由の何割かは、自分に対して決して崩さない敬語にあるのかもしれない。

無論、目の前の老人が義父として権利を主張した所で、伯爵がそれを考慮する事はないのだが、だからと言って娘婿である自分に対してあまりにも他人行儀な態度なのだ。

それに、ザルツベルグ伯爵にとって亮真が作り上げた部隊など評価に値しないのだ。

数は僅か３００名前後。

其の上、傭兵と子供の奴隷で編成された部隊とくれば、他の貴族が見ても同じ評価を下すだろう。

唯一、伯爵が評価に値すると思うのは、兵士達の鎧の色を黒く染めた事ぐらいしかない。

そしてそれは、こけおどしにはなっても、決して軍の強さには結びつかないのだ。

そんな伯爵にとって当たり前の事を理解できないこの老人に対して、伯爵の態度が冷淡になるのも当然と言えた。

「そうは言われるが……あの統率の取れた隊列は中々の物では？」

確かに一切乱れのない行軍である。

無論、３００名前後の小部隊であるから、指揮官の意向が届きやすいことは事実だ。

だが、それだけで数ヶ月前まで素人だった人間に、あれほど整然とした行軍は出来ないと言うのが老人の評価だ。

とはいっても、老人は自分の意見に固執しない。

ザルツベルグ伯爵の、意固地な性格を理解しているのだろう。
真正面から伯爵の言葉を否定するのではなく、疑問と言う形で相手の意思を誘導する。
非常に高度な交渉術だった。

「まぁ、行軍だけを数ヶ月仕込めばアレくらいはできるでしょう」

自らもまた一軍の将であるがゆえに、数ヶ月で兵がモノになるはずがないという先入観が彼の思考を曇らせていた。
隊列を組み街道を歩く。ただそれだけの事を素人に教え込むだけでも、それなりの労力を必要とする。
ましてや、教え込んだのは奴隷の子供。
意思なき生ける屍とすらいえる彼らに教え込むのは、相当に手間のかかる作業だった筈なのだ。
だが、老人はこれ以上ザルツベルグ伯爵の機嫌を損ねるような事を言うのを止めた。
これ以上抗弁しても、伯爵は自分の意見を変えないと理解したからだ。

「まぁ素人の他愛無い感想ですので、御気になさらないでください」

そういう老人の言葉に伯爵は軽く頷くと、きびすを返した。

「ではこれで失礼しますよ。私も暇ではないので……あぁ、暇を見て屋敷の方へ訪ねてください。たまにはユリアと共に夕食を取るのも良いでしょう？」

「えぇ。では後日……」

老人の言葉に伯爵は満足そうな顔で頷くと、階段を降りていった。

「困った男だ……能力はあるがどうにも詰めが甘い。それに平民や奴隷を侮りすぎる。まぁそれでも他の貴族達に比べればまだましだが……まったく、アヤツにつぶれてもらってはわしらが困ると言うのに……」

ただ一人物見台の上に取り残された老人は、周囲に誰も居ない事を確認した後、小さく呟やいた。

今、老人の顔つきは変わっていた。

ザルツベルグ伯爵と話していた時の彼の顔は、温和で何処となく頼りなさげな雰囲気を纏っていた筈だ。

自分の娘婿に対してですら、一歩も二歩も引いた男の筈だ。

それが、今は一変している。

ザルツベルグ伯爵が今の老人の顔を見たら、伯爵は老人に対しての評価を改めただろう。

それほどまでに、厳しく油断のならない光を老人の目は放っていた。

「あの軍は油断ならん……短期間であれほどの練兵を行うとは……だが、今の段階では確かにユリアの言うとおり監視に留めて置く方が利口だ。下手に干渉してこちらと敵対する事にでもなればかなり厄介な事になる」

そう呟きながら、老人の脳は高速で動く。

北へと進む黒い部隊を睨みつけながら。

――

「お父様。よろしいでしょうか？」

机の上に覆いかぶさるように眠っていた老人は、自分へ掛けられた声に驚き飛び起きた。

いつの間にか眠ってしまっていたのだろう。

老人の記憶ではまだ日中の筈だったが、執務室の窓から月の光が室内へと差込、蝋燭（ろうそく）の変わりに室内を照らし出している。

余程深い眠りに陥っていたのだろう。

「ユリアか……」

女の手にした蝋燭の光が、彼女の顔を照らし出す。

黒いローブにフードを被った彼女の姿は、とても伯爵夫人とは見えない。

普段の彼女の服装から考えれば信じられないほど地味な格好だ。

「はい。およびと聞きましたので……お邪魔でしたか？」

余程、気がかりな事があるのだろう。

老人はどこか疲れたような声でユリアへ尋ねた。

「いや、お前の方こそ急に呼び出して済まなかった。早めに話し合いたいことがあってな……人払いはしているか？」

老人の問いかけにユリアは無言で頷くと、後ろでに執務室の扉を閉めた。

今日、この執務室に呼び出された事の意味を理解しているユリアにとって、改めて言われるまでもないことだ。

「一体どうされたのですか？　夫に疑惑の目を向けられないためにも、連絡は定期的にする以外は行わないはずだったのでは？」

「済まんな……どうしても早めに話すべきだと思ったのだ」

「御子柴亮真……ですか？」

机の前に立ち尽くしたままどこか不安げに問いかけるユリアの言葉に、老人はゆっくりと首を縦に振る。

それだけで、ユリアは目の前に座る父の心理をすばやく察した。

彼女自身も感じてた不安。

それと同じものを、イピロスの経済を支配する父親が感じたのだ。

「お父様もアレを危険だとお考えですか？」

「危険だろうな……まぁ誰にとって危険かは判らんがな。少なくともザルツベルグ伯爵にとっては危険だろう……数日前、食料を納品する際に御子柴男爵と言葉を交わした時にも感じたが、今日、部隊を見たときにより一層強く感じた」

もし他人に其れが何なのかと尋ねられても、二人は納得させられるだけの回答を持っては居ない。

ただ単純に、商人としてのカンが警報を発しているのだ。

このままでは危険だと言う事を。

「夫は愚痴っていましたわ……義父殿は私に似て臆病だと」

屋敷に帰ったザルツベルグ伯爵から見張り台の上で老人と交わしたやり取りを聞かされたのだろう。

「どうもザルツベルグ伯爵は金や武力と言う目に見える力しか認めない傾向があるな……」

「現実的ともいえますが……」

「判っている。伯爵は決して無能ではない。無能ならお前を嫁に差出はしなかった……差し出す必要などなかった」

吐き捨てるかのように老人は、顔を伏せると両手を握り締める。

（そう、トーマス・ザルツベルグ伯爵が無能だったら、誰が可愛い娘を嫁に差し出すだろう）

老人はイピロスの経済を支配している。

だからこそ、ザルツベルグ伯爵の素行の悪さはイヤと言うほど耳にしていた。

女癖の悪さ、金の汚さ。どちらも娘の婿に相応しいとはとてもいえない。

それでも娘を伯爵の嫁に出したのはただ一つ。

どうしても出さないわけにはいかなかったのだ。

決して自らが望んだ結婚ではない。だからこそ二人は決して伯爵と共に沈むわけには行かない。

「まぁ、今はいい。半島の開発には時間が掛かる。直ぐに動く事はないだろう。それに何人か密偵を紛れ込ませている。お前の方も同じだろう？」

「はい。屋敷のメイドを何人か男爵の身の回りの世話をする為にと押し付けました。今後、彼女達から定期的に手紙が来る予定です」

先日、亮真がザルツベルグ伯爵の屋敷を訪ねたときから準備されていた娘達だ。

彼女達の親族が伯爵領内の村々で生活している以上、彼女達が裏切る事はない。
格好の密偵である。

「うむ、表立って敵対するのは下策だ……だが、放置は危険すぎる。監視と情報収集をするしかないだろうな。其の娘達の手紙を向こうがどう扱うか。それで向こうの考えがいくらか判る」

別にものすごい秘密を知らせてくる必要は無い。
彼女達に求められるのは日常的な情報なのだ。
食べ物はあるか、水はどうか、天候は？　誰とあったかなど等、それ単体では意味の無い情報。
だが、キチンと整理し其の価値を知る者が聞けば、千金にも値する貴重な情報源となる。
そして、彼女達の手紙を差し止めるなどの対応を行えば、それは御子柴亮真が自分達を敵視しているという判断基準になる。
どちらに転んでも損はない。

ユリアは自分の父親の持つ冷静な判断力に安堵しながらも、恐る恐る心に秘めて来たある事柄を口にした。
それは、伯爵の妻になってからずっと彼女の心の奥底に秘められた思い。

「お父様……場合……」

探るような視線を向けるユリアに老人は無言で頷く。

「判っている。だが、今の段階では判らんとしかいえない……今はまだ動けない。済まない。ユリア」

そういうと老人は腰掛けていた椅子を立った。
そして無言でユリアの体を抱きしめる。
それは、泣きじゃくる幼子をあやすかのような、優しさと力強さに満ち溢れていた。

第3章第24話

西方大陸暦2813年2月28日夜【ウォルテニア半島】其の3：

「此処までは予定通り来れたか。明日はいよいよ……だな？」

念を押すかのような亮真の言葉に、机を囲んで座る誰もが強く頷く。

彼らの浮かんでいるのは不敵で獰猛な笑みだ。

自分たちの領土。自分たちの国。

そういった物へのあこがれや渇望とは別に、彼らの心には危険地帯を無事に切り抜けたという絶対の自負が存在していた。

半島に入り、彼らが怪物（モンスター）の襲撃を受けた回数は実に14回を数えた。

意図的に獲物を追う狩人であったとしても、一日で獲物に出会うのは2~3回が良いところと言える。

それと比較すれば、半島内での遭遇率は驚異的な数字と言えた。

しかも、どの怪物（モンスター）をとっても中級、もしくは上級に分類される危険なモノばかり。

それを、数人の負傷者を出したとはいえ、死者を出すことなく殲滅したと言う事実が、成果として目の前に出たのだ。

高揚するなというほうが無理である。

ウォルテニア半島へ入って既に3日が過ぎようとしていた。

イピロスから続いていた街道はすでに途絶え、部隊が人跡未踏の奥地へと足を踏み入れているのだ。

草深く、木々の枝葉は密集して人の進入を拒絶する。

行軍するにも、一々枝を払い足元を注意して進まなければならない。

だが、それほどまでに過酷な環境でありながら、彼らは水の補給にも野営地の選定にも困る事はなかった。

本来なら最も苦労する筈であった事だ。

しかし、亮真は数ヶ月と言う時間を掛けて、事前に半島内部の地形を調査している。

その結果、効率の良い行軍路を選択する事で、適度に休息を取りながら半島奥地へと進んでこれた。

そして今、彼らは厳翁によって作られたウォルテニア半島の地図を広げながら、机を囲み今後の方針を話し合っていた。

「行軍が予定通りに進んだのは、兵の質が高い事もありますが、やはり事前に地形の把握を命じていたのが大きいのではないでしょうか？　イピロスのギルドで調べた情報だけでは不足でしたから」

サーラの言葉に誰もが頷く。

人跡未踏の奥地ではあるが、全く人が入らないと言うわけではない。

冒険者が金目当てにウォルテニア半島へ赴く事もないわけではないのだ。

そういった人間からもたらされた情報は、イピロスの冒険者ギルドへ保管されていたわけだが、亮真は厳翁の進言によって、彼の一族の中の手練者に半島の調査を命じていた。

其の成果は大きい。

彼らの前に広げられた地図には、森や谷、河の大まかな流れと言った情報が記載されている。

この地図がなければ、どれほど行軍に苦労を強いられた事だろう。

少なくとも、一人の脱落者も出さずにここまで来る事は出来なかった筈だ。

「そうだねぇ。厳翁の方で水場や野営地の場所を確かめてくれていたのは助かったねぇ。厳翁、助かったよ」

実際の所、多くても1グループが10人前後ほどでしかない冒険者と、少ないとはいえ300名ほどの軍隊とでは、求める水場の大きさが異なってくる。

岩の間から零れ落ちる湧き水だけでは300名もの人間を潤す事は出来ない。

野営地にしても同じだ。

人数によって、必要とされる場所の条件は当然異なってくる。

そういった情報を事前に調査した厳翁に、リオネが感謝の言葉を投げかけたのも当然の事といえた。

尤も、水の確保に関して言うと、法術を使うことによって安定した量を得ることが出来るし、野営地にしても同じ事が言えるのだが、手間が少ない方が良いのは当然といえた。

「一族の者でも手練者を使いましたからな……ですが、やはりこの地は一筋縄ではいかないようですな……奥地へ向かわせた2組は未だに怪我が回復しきってはおりません。海賊の件もそうですが、例のアレには注意が必要かと」

「例のアレ……亜人の事ですね？」

厳翁の言葉にサーラが問いかけると、その場の穏やかだった空気が一瞬で引き締まる。

既に報告されている情報ではあるのだが、ウォルテニア半島に入ってから改めて聞かされるのは、やはり衝撃的だった。

「亜人ですかい……生き残っていると言う噂は聞いてイヤしたが本

当に居るとは思いやせんでした」

「それはアタイだって同じだよ、ボルツ。まさか本当に生き残っているなんてねぇ……それも集落単位って話じゃないか？」

奴隷達の調練に掛かりきりであったボルツやリオネにとって、今後の方針に関しては大まかな所までしか聞いていない。

物資の補給、野営地の選定、行軍路の選択。

訓練の指揮を取る以外にも、彼らにはやるべきことは幾らでも存在している。

だから、御子柴亮真が亜人に対してどう考えているかを、二人は知らなかったのだ。

そもそも亜人とはなんだろうか。

其れは、人の様に2足歩行をし、一定の文化水準を持つ人間以外の種族。

其れがこの大地世界（アース）における亜人だ。

獣の頭を持った獣人も、ドワーフやエルフと呼ばれる存在も言葉を話し一定の文化を持っている人間以外の種族であれば、全てひっくるめて亜人である。

だが、ファンタジーの世界で有名な種族であるはずの彼らを、この大地世界（アース）で町に住む一般の人間が見かける事はない。

いや、大陸各地に残る秘境へ足を踏み入れる冒険者達ですら、その姿を見ることはほぼ皆無といえる。

何故なら彼らは、遠い昔に人間の手によって絶滅させられた伝説の住人であるのだから。

絶滅の要因は複数あるのだが、其の最大の理由は光神教団（メネオース）の存在だろう。

大地世界（アース）を創造したとされる六柱の一柱。其の神々の中で光を司るとされる光神メネオース。

かの神を信仰する教団こそが光神教団（メネオース）と呼ばれる宗教組織である。

彼らの教義は単純だった。人を作り出したとされる光神メネオースを最高神とし、其の最高神によって作られた人間と言う存在を至上の物としたのだ。

とはいえ、其れらはどんな宗教であっても多かれ少なかれ入ってくる要素だ。

宗教とは、人と言う種が自分たちに都合が良いように作り出す物であるのだから、人間を特別な存在として位置づけるのはある意味当然な事ともいえる。

そして、本来であればさほど気にする必要は無い要素だ。

選民意識を多少持った宗教が存在する所で、大きな問題にはならない筈だったのだ。

事実、この光神教団（メネオース）が設立されてから資料上は１０００年以上の歴史を数えている。

そして、亜人が穢れた存在として駆り立てられ滅亡へと追いやられたのは、亮真達が生きる時代から見ておよそ４００年ほど前のこと。

つまり、教団設立当初から４００年前までの間は亜人廃絶へと動いていなかったということになる。

そう、今から４００年前、二人の男が歴史に現れなければ、この大地世界（アース）は現代日本人が夢見るエルフや獣人といった種族が繁栄する世界のままだったのかもしれない。

しかし、現実は違う。

亜人と言う種族は遥か昔に絶滅したものとされ、大陸の秘境と呼ばれる場所の更に奥地に、僅かな数が生存していると言う噂が囁かれる程度でしかないのだ。

「亜人の方は今の所なにかこちらから働きかけるつもりはないよ。すでに厳翁には話したけれど、彼らの集落がある北部の森に手を出す気はない」

亮真の答えにリオネとボルツは軽く眼を見開く。

どんな形であれ、半島調査に向かった自分の配下が怪我を負って戻ったのだ。

それを何の手も打たずに見過ごすと言うのは、リオネ達から見て不自然な決定に感じられた。

亮真の性格や考え方から考えると、実力行使に出ないまでも、使者を送り抗議するくらいに事はして当然と言えるのだ。

「正直に言って、今連中を刺激するのは得策じゃないからな……ザルツベルグ伯爵とルピスの動向の方に注意しなくちゃいけない今、あまり敵を増やしたくないのさ。それに、連中の集落へ勝手に近づいた俺達の方にも責任は有る。まぁそういうわけで暫くは連中を放置する事にした」

そういうと亮真は、机の上に開かれた地図上に赤い大きな丸を書き込む。

ウォルテニア半島の北４分の１近くを占める大きな丸だ。

つまりこの丸が亜人と自分たちとの境界線を示しているのだろう。

「まぁそれもそうか……ザルーダの情勢も混沌としている今、あまり敵対勢力ばかり造ってもしかたがないかねぇ？　こちらが不用意に連中のテリトリーへ近づいたって考えれば、それほど腹も立たないか……」

亮真の言葉にリオネは深く頷く。

彼女自身、亜人に対して特に嫌悪感を持っているわけではない。
必要なら戦いもするが、自ら進んで敵対しようとは思っていないのだ。
それに亮真の考え方は、非常に論理的で公平な物だった。
自分の部下が攻撃されたことだけを問題にしないという態度は、リオネから見ても好感の持てる判断といえる。

「だが海賊の方はどうするつもりだい？　シモーヌの準備が終わっても受け入れる港がなければ困るだろう？」

亜人に対しての対応を確認したところで、リオネはもう一つの懸念を口にした。
亮真とシモーヌの間に交わされた密約には、どうしても海賊達の存在が邪魔になる。
懐柔するにせよ殲滅するにせよ、彼らの扱いは大きな問題だった。
今までは仕事の忙しさにかまけていた部分ではあるが、半島へ入った今、リオネが亮真へ明確な方針を尋ねるのは当然の事だった。

「そっちに関しては結論は一つさ。はっきり言って俺の国に彼らは必要ないよ」

リオネの言葉に亮真は肩をすくめながらあっさりと答える。

天幕の中は、火が焚かれ適度な温度に保たれている筈だ。
だが、亮真の言葉を聞いた全員の背筋に冷たいものが走る。
亮真の言葉は普段と何も変わらない、落ち着いた穏やかな口調だ。
しかし、其の言葉の意味を取り違える人間はこの天幕の中には居ない。

「殲滅と言う事……ね」

リオネの呟きがやけに大きく天幕の中に響いた。

――

「メリッサ、どうかしたか？」

手に持ったシチューをスプーンでかき混ぜるばかりで、一向に口へ運び込もうとしないメリッサへコイルが心配そうに声を掛けた。

彼らは焚き火を囲みながら、暖かい夕食を口へと運ぶ。

行軍中の緊張感はすでに弛み、周囲からも年相応の笑い声が聞こえてくる。

珍しく、酒も少量なら飲む事を許されているので、羽目を外して騒ぐ者も多い。

そんな喧騒のなかで、メリッサの周りだけが静かだった。

いや、静か過ぎると言ってもよい。

「ううん……別になんでもないよ」

「何でもないか……当ててやろうか？　ハンナのことを考えているんだろう？」

メリッサの言葉にコイルは探るような目つきで問い返した。

「……！」

自分の心の内側を見透かされ驚きの眼で見返すメリッサに、コイルは大きくため息をつく。

彼女の心の動きなど、数ヶ月もの間同じ班として共同生活を送ってきたコイルから見れば一目瞭然だった。

「今更逃げ出した奴の事をどうこう考えたって仕方が無いだろう？運が良けりゃどこかの町で生き延びられるだろうさ」

コイルはあきれた口調ではき捨てる。

彼にとって、逃亡したハンナは恩知らずで裏切り者だった。

追いかけてまで殺したいとは思わないが、町の路上で行き倒れたとしても気にならない程度には恨んでいるのだ。

その感情が、彼の言葉ににじみ出ていた。

「そんな言い方って……」

コイルの言葉にメリッサは思わず語気を荒げる。

ハンナはメリッサと同じ班に居た奴隷の少女だ。

だが、今彼女の姿は此処にはない。

訓練が辛く、彼女は同じよう訓練に耐え切れなかった仲間と共に逃げ出したのだ。

悪いのは誰であろう、逃げ出したハンナだ。

それはメリッサも判ってはいる。だが、自分の目の前に出された暖かいシチューなど、今のハンナは口に出来る筈がない。

いや、逃亡奴隷の末路などすでに確定していると言っていいのだ。

「仕方ないだろう。アイツは訓練が辛くて逃げたんだぜ？　それともメリッサは俺達を解放してくださった御子柴様の恩を忘れて、逃げ出した奴らの肩を持つ気かよ」

コイルは感情を高ぶらせていた。

今夜はウォルテニア半島と言う魔境を踏み分け、遂に明日は目的

地へ到着するという、自分たちの主である御子柴亮真にとって節目となる夜だ。
夕食に配られたシチューの具材を見ても、飲酒が許された事を見ても、今夜は特別な配慮がされている事が明らかだ。
其の祝いの日に、メリッサは主の配慮を無視して主を裏切り逃げ出した少女の事を思い沈みこんでいる。
とても許せなかった。

「アイツらは裏切り者だ！」

コイルは吐き捨てるように叫んだ。
余程その叫びは大きかったのだろう。一瞬周囲の喧騒がやむと、周囲から探るような視線が突き刺さってくる。
だが、コイルはその視線を無視した。
普段は押し隠していた感情が、メリッサの態度を見て沸々と心の置くから湧きあがってくる。

辛い訓練だった。実戦の恐怖を乗り越えられなかった奴もいる。
誰もがクリア出来る物でなかった。それはコイルだって理解している。
だが、それでも自分達を奴隷と言う身分から人にしてくれたのは、御子柴亮真なのだ。
其れが全くの善意でないことはコイルも理解している、
それでも、這い上がる機会（チャンス）をくれた事に変わりはない。
この世界で、弱者が這い上がる機会（チャンス）を得る事など殆どないのだ。
だからこそ、コイルは逃げ出した仲間達が許せなかった。
稀少な機会（チャンス）を得ながら、それを活かせず逃げ出した仲間達を……

「それは……」

コイルの冷徹な反論にメリッサは返す言葉がなかった。

「おい、コイル。その辺にして置けよ」

「ケビン……」

コイルの言葉が感情的になってきたのを察したのだろう。
それまで黙って二人の会話を聞いていたケビンが、静かに割ってはいる。
この班のリーダーはケビンだ。
其の彼に止められればコイルとしても矛を収めるしかない。
コイル自身、メリッサを責めるつもりだった訳ではないのだ。

「悪い……言い過ぎた……」

コイルはそういうと立ち上がった。

「何処に行く?」

ケビンは、訝しそうな目でコイルを見る

「他の班のヤツラのところに行って来るよ」

コイルはそういうと、ケビンを見返す。
揺ぎ無い眼だ。其の視線に含まれた意味をケビンは悟った。

「判った……クラン、お前もコイルと一緒に外せ」

コイルの言葉の意味を察したケビンは、ただ一人黙ったままシチューを口に運んでいたクランへ矛先を向けた。

この場はどうしてもメリッサと二人きりで話をしなければならい。
ケビンの強い視線から、クランは無言のまま立ち上がると、コイルの後に続く。

二人の背中が、見えなくなったのを確認したケビンは、ためらいがちにメリッサへ疑問を投げかけた。

第3章第25話

西方大陸暦2813年2月28日夜【ウォルテニア半島】其の4：

「お前……恨んでいるのか？」

ケビンの表情は硬くとても冗談を言っているようには見えなかった。

「え？」

ケビンの言葉を聞き逃すはずはない。

低く周囲をはばかるような口調だったが、ケビンの言葉はメリッサの耳にしっかりと届いている。

それでも彼の言葉の意味が理解できず、メリッサは問い返してしまった。

「……お前が……ハンナの……逃げ出した連中の事で御子柴様を恨んでいるのかって聞いたんだよ」

躊躇(ためら)いがちに再び告げられたその言葉を聞き、メリッサは思わずケビンへ驚きの視線を向けた。

ケビンの問いかけは、メリッサにとってあまりにも予想外だったのだ。

そして、だんだんとケビンの言葉の意味が彼女の脳の中に染み込んで来る。

「そんな！　何で？」

メリッサは思わず叫び声をあげた。

ジッとケビンは無言のままメリッサの顔を見つめる。
まるでメリッサの心の奥底まで見通そうとするかのように、その視線は鋭く揺ぎ無い。
どのくらい二人は見つめあっただろうか。

パチッ

メリッサの耳に、焚き木の爆ぜる音がやけに大きく響く。

「……本当に恨んでいるわけじゃないようだな」

そう言うと、ようやくケビンは強張った表情を緩めた。
メリッサの顔から、彼女の本心を察したのだろう。
しかし、メリッサはそんなケビンの心情を無視して叫んだ。
それも致し方ないのかもしれない。
彼女にとってそれはあまりにも予想外な嫌疑だったのだから。

「なんで？　何でそういうことになるの？」

普段のメリッサからは考えられないほどの勢いで、彼女はケビンへと食って掛かる。

「メリッサ……やっぱりお前、判っていなかったのか」

メリッサの反応を見たケビンは、呆れた様な、それでいてどこか納得したような表情を浮かべた。

「どういう意味？」

「言葉通りの意味さ……お前は自分の置かれた立場を判っていないって事」

メリッサは、ケビンの言葉に眉をひそめた。

「私だって御子柴様のご恩は十分に理解しているわよ？」

最後の試練を耐え抜き、兵士の一員として認められたあの日の事を、メリッサは決して忘れはしない。

始めは３２０名いた仲間たちは、その日、１９６名にまで減っていた。

そして、最後まで残った彼らに、御子柴亮真は約束どおり奴隷身分からの解放を行ったのだ。

広場に集められた彼らの目の前で、彼らを縛る奴隷の契約書は灰となった。

それは彼女にとって、いや、この場に今いる彼ら全員にとって、どんな事にも勝る絶対的な恩義である。

文字通り彼らは人生を取り戻せたのだから。

それを一瞬たりとも忘れた事など無い。

だが、ケビンはそんなメリッサの言葉に首を振った。

「そうじゃない……俺が言いたいのはその先さ……」

「その先？……」

メリッサにはケビンの言葉の意味が判らない。

御子柴亮真から恩を受け、それを自覚している自分達。

その先にいったい何があるというのだろう。

「良いか？　御子柴様は慈悲深い方だ。俺達を奴隷から解放し、ただの労働奴隷でしかなかった俺達に戦う術と教育を与えてくださった。衣食住を提供してくださってもいる……だが、それはまったくの善意からじゃない。無論、善意が無いわけじゃない。だが、きちんとした目的があってあの方は俺達に力をくれたんだ」

それは、メリッサとて薄々感じていた点だ。

わざわざ安くない金額を奴隷商人に払い、手間と時間をかけて奴隷だった子供に戦う術を教え込んだ。

そして、それが御子柴亮真の哀れみや同情といった感情から行われた行動で無いことは、彼女自身も理解していた。

「あの方は今、俺達を試している……」

「試している？　何を試しているというの？」

ケビンは周囲に目を配ると、小さかった声をさらに低めてメリッサの言葉に答えた。

「俺達が本当に御子柴様に従うかどうかをさ」

奴隷に戦う術を教えるという事は、主に歯向かう手段を与える事に等しい。

だからこそ、通常の奴隷に教育など施さないし、戦奴隷には厳重な封印が施され、主の許しが無ければその力を振るう事が出来ないように制限されている。

だが、御子柴亮真は、イピロスで買った子供達へ何かの制限を加えた事は無い。

実際、訓練が始まった当初は、逃亡を防止するような手段を講じ

ていなかったために、訓練の過酷さから逃亡してしまった奴隷も多い。

「俺達は初め、子供だけで5人1で班だっただろ？」

ケビンの言葉にメリッサは無言で頷く。

亮真は当初、子供達を5人1組にして基礎訓練を施していた。

5人で常に行動させ、寝起きも5人1組である。

「だが今は俺達4人に傭兵1人を加えて5人1班だ。この意味がわかるか？」

法術の習得を始めたあたりから、班の編成が変わったのは事実だ。

子供だけ5人で作られた班は解体され、新たに子供4人に対してイピロスで新たに雇った傭兵1人という編成に変わっている。

単純に実戦経験を持った小隊指揮官を配置するという話だったのだが、事はそう単純な物では無いらしい。

メリッサの心にある予感が過ぎる。

「ひょっとして……監視？」

メリッサの呟く様な言葉に、ケビンは無言で頷く。

それを見たメリッサは、ようやくケビンやコイルがこれほどまでに、何を気にしているのかを理解した。

「いいか、俺達は振るいに掛けられたんだ。そして、今も振るいに掛けられている」

ケビンの言葉が、メリッサの心へ楔のように打ち込まれた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――

翌日。

晴れ渡る青空の下、御子柴亮真率いる３００の部隊は目的地である入り江へとたどり着いた。

鬱蒼と茂る森の木々を掻き分け、４００ｍ近い川幅を誇る大河のほとりを西に進むと、急に目の前の景色が切り替わる。

まず目に入るのは延々と南北に広がる白い砂浜だ。

其の先に広がるのは、海の底まで見通せるほどの透明度を誇る蒼い海。

浜辺に打ち寄せる波は穏やかで、潮風が亮真達の鼻を優しく擽（くすぐ）った。

遥か湾の奥には、幾つかの島影が微かに見える。

人の手が全く入っていないこの土地は、自然の荒々しさと美しさの両方を見事なまでに具現化していた。

三方を切り立った小高い山に囲まれたこの地は、まさに天然の要害であると同時に、森を切り開けば、海へと流れ込む大河を引き入れる事で、十分に食料の自給も可能である。

そして何より、全長１０Ｋｍを超える海岸線は、少し手を入れれば十分に港として活用することができた。

「なるほど……報告は受けておりましたが、これは実に良い土地ですな」

浜辺突き出た丘の上で、二人の男が眼下の浜辺を見下ろしていた。

彼らは、周辺の地形を確かめる為に此処へやってきたのだ。

厳翁（げんおう）は馬上の上で、強烈に降り注ぐ太陽の光に目を細めながら、

傍らの亮真へと話しかける。
其の顔には、一族の者が持ち帰った情報の確かさに対し、誇らしげな表情が浮かんでいた。

「あぁ。これ以上無いってくらい最高の立地だ……彼らには上等の酒を振舞ってやってくれよ」

亮真はそういうと、周囲の地形に目を走らせる。
大河と森、そして浜辺の境目あたりに存在する少し開けた場所。
其処で、多くの人間が蠢いているのが見えた。
野営の準備だろうか。
次々と丸太が大地に突き立てられ、天幕が張られていくことが見える。
其の光景を見ながら、亮真は満足そうに頷いた。
湾に流れ込む大河は飲み水や農業用水と、幅広い利用が出来る上に、城を作る際には水堀としても活用が出来る。
木材は周囲の森から切り出す事で、いくらでも手に入るし、木々を切り出せば切り出すほど農地に利用する事が出来た。
イピロスから4日ほどの距離というのも手ごろ。
今後の発展性や防衛の容易さ。どれをとっても完璧といってよい立地条件である。
亮真の言葉を聞き、厳翁は嬉しそうに顔をほころばせる。
主に仕事の成果を認められる事ほど誇らしい事はない。
そして、御子柴亮真は、部下の功績に報いる事を最も大切だと知っていた。
別に金を払うことだけが報いる事ではない。
大切なのは達成までの苦労を理解しねぎらう事。
ご苦労様。良くやってくれた。ありがとう。
其のちょっとして気遣いの言葉が、人と人との付き合いには大事なのだ。

「ありがたきお言葉。アヤツ等も主殿のお言葉を聞けば喜ぶでしょう」

「何しろ、拠点の場所を自由に選べるのは数少ない利点の一つだからな。最高の土地を求めるのは当然さ。だが、正直これ程の場所とは思ってなかった。これなら直ぐに村を作れるな」

人の手が入っていない未開の土地という事は、逆に言えば亮真の好きな場所に拠点を作る事が出来るという事だ。

もし小さな村がこの未開の半島に1つでも存在していたら、亮真には選択の余地が無かった。

領民の安全を保障するという観点から考えても、たとえ其の村がどんなに不利な立地条件であったとしても、その村を拠点として開発を進めるしかない。

新たに自分の拠点を構築しながら、村の安全を保証するだけの兵力を、今の亮真は持っていないからだ。

「若！　天幕の準備が出来やした。どうぞ、こちらへ」

どうやら、野営の準備が出来たらしい。

ボルツの声が丘の上に響いた。

明日からはいよいよ、森を切り開き、村造りが始める。

「全ては此処から……か」

亮真は挑むような視線を南へと向けた。

まだ姿なき敵を睨み付けるかのように。

第3章第26話

西方大陸暦２８１３年４月１５日夜【視線】：

「おい……俺の目はどうかしちまったのか？」

そう呟くと、男は手にした望遠鏡から目を離す。そして、自分自身が目にした光景を信じることが出来ず、何度も手で瞼をこすった。

潮風に晒され続けた彼の髪は薄茶色に変色し、其の肌は強い日光の所為で赤黒く日に焼けている。何処からどう見ても彼は熟練した船乗り。そして、其れはこの小さな船の舵を取る船尾の男も同じだ。彼らのそばに寄れば、其の体からは強い潮の香りが鼻につく。彼らが長い時間を海で過ごしてきた結果だ。そして、潮の匂いと共に、彼らの体から発散されるのは鉄臭い血の匂い。この二人普通の船乗りではない証だった。

「いや、俺の目にも同じ物が写っているぜ……自分の目が信じられねぇけどな」

船尾で舵を握る男が、海岸線を睨み付けながら答える。

海岸線から２ｋｍ以上離れた海原からの偵察とはいえ、数十年も海で生きてきた男達だ。二人の視力は仲間内からも高い評価を得ている。其の二人が共に自分の目を疑ったのだ。

牛の角のように海へ突き出た岬。其の角の間から見えるのは、どう見ても町だった。いや、少し小さな港湾都市と言っても過言ではないのかもしれない。

夜の闇に抵抗するかのように、その港はかがり火が盛大に焚かれ、二人が港の全体を確かめるのに不足は無かった。

「だがよぉ……本当にこんな事が有り得るのか？」

「有り得るもクソもないだろう。目の前にある以上な……」

そう船尾の男は吐き捨てた。

「それはそうだけどよぉ。お頭に何て言えば良いんだ？　絶対信じちゃくれねぇぜ。こんな話」

今、実物を目の前にしても信じられない話だ。ありのままを報告したところで、信じて貰えるとはとても思えない。其れこそ、酒でも飲んで夢でも見たんだろうといわれるのがオチだ。

「だからと言ってお前……頭に嘘の報告でもする気か？　ばれたら生皮を剥がれて鮫の餌にされるぞ？」

其れは身の毛もよだつほど残酷な私刑。掟破りや裏切り者に課せられる見せしめの刑。実際に幾人もの人間が、この残酷な私刑の餌食となっている。

過去の情景が脳裏に浮かび、彼は思わず身震いした。

「ならどうすりゃいいんだ!?　お前だって他人事じゃねぇんだぞ？」

頭の冷酷さは身に染みて理解している。特に部下の嘘を彼は決して許さない。

だからといって、ありのままを報告しても自分自身が信じられないのだ。他人に話して信じてもらえるとはとても思えない。

（糞っ！　なんて貧乏くじを引いちまったんだ）

自分が傍観者であるなら何も問題は無い。運の悪い奴だと鼻で笑えば其れで済む。だが、当事者となれば話は別だ。自分の命に関わってくる。

「方法は一つしかねぇ。明日の朝一番にあの岬に上って、もっと間近から確かめるしかねぇな」

「正気かお前。頭に命じられたのは様子見だけだぞ？」

頭の命令に背けば鮫の餌にされる。其れが彼らの掟だ。だが、船尾の男は首を横に振った。

「どっちにしろ今のままじゃ鮫の餌にされちまう。なら、頭の命に背いても確実な情報を調べるべきじゃねぇか？それともいっその事、逃げ出すか？」

「馬鹿言え……こんな小船で逃げ出せるわけねぇだろうが」

彼らの乗る船は、上陸用に帆船に備え付けられた小船の一つ。沿岸部を移動する分には困らないが、遠距離を航海するのは不可能。第一、水も食料も残りは1日分しかない。北の湾に停泊している母船へ戻る片道分のみ。

これが普通の場所であれば、それほど悩む必要は無いが、ここは魔境とも言われるウォルテニア半島。下手な場所に上陸すれば怪物（モンスター）共の餌になるだけだ。国の権力から隔絶された場所であるが故に、彼らは警吏による捕縛の心配をしなくて良い。だが、其れは同時に、彼ら自身もまた限られた手段でしか外界と交われない事を意味している。

「なら、道は一つしかねぇ。頭だって、キチンと理由を言えば、そ

う無下にはしねぇさ」

船尾の男はそういうと、肩をすくめて見せた。

「本当にそう思ってるのか？」

「他に選択肢があるのか？」

質問に質問で返され、男は言葉に詰まる。彼もまた、他に選択肢が無いことは十分に理解している。

問題なのは、どちらを選択してもあまり明るい未来は望めないという事。彼は視線を足元へ落とすと、黙り込んだ。

（クソ！　どっちにしても俺達は……しかたねぇ、頭の命令を無視してでも、確認するしかないか）

フゥ

大きなため息をつき、男は顔を上げた。

「判った。船を岬に寄せろ。夜が明ける前に岸に着けるんだ」

男の声に無言のまま頷くと、船尾の男が錨を引き上げる。船は静かに岸へ向かって動き出した。

「こいつは……俺達の見間違いでもなんでもねぇ。信じられねぇ、一体どうやってこんな短時間でこんな……」

北の岬に船を着けた二人は、夜の闇にまぎれて斜面を登った。そして、かがり火に照らし出された町並みに思わず息をのむ。

「町？　いや、こりゃ小さな地方都市くらいの整備はされてやがる……」

西側の海岸線は全て石畳で補修され、港としての機能を完全に有している。東側は深い堀が掘られ、北側に流れる川の水を引き込み、都市と森とを完全に隔てていた。南側には、城壁らしき影が見える。万全では無いにしても、港湾都市としての機能は十二分に果たせそうである。だが、それだけならば、二人は此処まで驚きはしない。

問題なのは、此処がウォルテニア半島と言う魔境であり、この眼下に広がる都市は少なくとも此処２ヶ月程の間で創られたからだ。

「あれは石か？　少なくとも木じゃねぇな……一体どうやって建てたんだ？　イピロスから運び込んだのか？　まさか、そんな事は……だが、他にどうやって」

望遠鏡を覗く男の口から呟きがもれた。

海の上から見た時より、格段に得られる情報は多くなったが、疑問は逆に深まってしまった。

全てが木造というのならばまだ理解は出来る。労働力をどうやってこの魔境で確保したのかという疑問にさえ目を瞑れば、周囲は鬱蒼とした森だ。決して不可能ではない。だが、石材を使っているとなるとこれは問題になる。

この湾を囲むように小高い山はあるが、どう見ても石切り場を造れるような地形には思えない。

海岸の岩場から切り出すというのも考えられないが、それにしても限度という物がある。

それに、もし其の推測が正しいのであれば、海岸付近に石切り場が無くてはならないのだが、そんな様子はどこにも無い。

となれば、何処かの都市から運んできたと考えるのが普通なのだが、あいにくのところ此処は普通の場所ではない。イピロスにつながる街道は未だ整備されておらず、とても資材の輸送など不可能だった。いや、大部隊を護衛に着けてなら可能かもしれないが、そんな様子があれば、イピロスに潜り込んでいる仲間から連絡が来ないはずが無い。

「海路をつかって……いや、それなら俺らが気づかないはずはねぇか」

男の呟きに答えるかのように、舵を取っていた男が自問自答する。彼の考えたとおり、海路を使うと言う事も可能性としては考えられるのだが、それでも目の前に広がる都市を造り上げるには1度や2度の輸送では無理だろう。そして、もし、そんな大船団が組まれていたとしたら、彼らがが気づかない訳が無かった。

何しろ、隣接する海域にまで網の目のような警戒網を引いており、航行する船舶は勿論、沿岸部に存在する町にまで監視の眼を光らせているのだから。

「クソ！　どうなっていやがる。あの野郎が半島に入ってまだ2ヶ月足らずだぞ？　どうやったらそんな短期間でこんな都市が造りだせるって言うんだ」

望遠鏡を掴む手に力が入った。

イピロスに潜り込んだ仲間から、ウォルテニア半島が貴族に与えられたという報告が齎されたのは、今から半年以上前の事だ。

其の報告を聞いた彼らは、其の貴族をあざ笑った。

半島の環境を嫌というほど理解している彼らにとって、この半島を領地にするなど夢物語にしか思えなかったのだ。

事実、半島を貰った貴族はイピロスに到着した後、何時までも半島内へ入ろうとはしなかった。
其れを聞いた彼らは、当然だと思った。貰ったは良いが、領地としての価値など微塵もない事に気がつき、イピロスに留まっているのだろうと、そう考えたのだ。
だが、彼らの考えは間違っていた。其れは目の前に広がる都市が何よりも雄弁に語っている。

「帰るぞ……お頭に信じてもらえるかどうかは判らねぇが、見た事を有りのままに言うしかねぇ……」

背筋を冷たい汗が滴り落ちる。彼の望遠鏡を握る手が震えていた。
其れが何に対しての恐怖なのか、其れは彼自身も理解しては居なかった。
彼らは逃げるように岬を駆け下りると、岩場に泊めていた小船に転がるように乗り込むと、母船目指して一路北へ進路を取る。
だから、彼らは気がつかなかった。彼らの動向をジッと闇の中から伺う者の存在に……

夜が明け、朝日が町を照らし出す。
怪物（モンスター）の襲撃を避けるために煌々と炊かれたかがり火は其の役目を終えた。

「おはようございます。亮真様」

「あぁ、おはようローラ。何かあったか？」

夜が明けたとはいえ、時間にすれば午前5時を少し過ぎた辺り。

まだベットから抜け出すには早い時間だ。だが、亮真は既にローラの来訪を承知していたかのようにはっきりとした声で答えた。

「咲夜が参っています」

「獲物が喰いついたかな？」

其の言葉だけで、亮真は何が起こったのかを正確に予想した。と言うよりも、そのために彼は一月以上も準備してきたのだから、餌に喰いついてくれなくては困ってしまう。

「恐らく」

淡々と答えるローラの言葉を聞き、亮真は人の悪い笑みを浮かべる。

「なら、さっそく半島の大掃除と行きますかね」

亮真の呟きにローラは無言で頷いた。

第3章第27話

西方大陸暦２８１３年４月１７日夜【無情の業火】其の１：

其の入り江には一隻の帆船が、静かに錨を下ろしている。
其の船は、３本のマストを持つ快速船。尤も、今は全ての帆を畳み、静かに主の号令を待っている。
見かけは、ごく普通の木造船だ。竜骨を持った、西洋風の船。
全長は３０m半ば程だろう。船種としてはガレオン船に近い。１５世紀ごろから始まった大航海時代で頻繁に造船された船に似ている。
唯一、地球の帆船との違いを上げるとすれば、大砲といった火器が見つからない事くらいだろうか。

入り江の北側に生い茂る森の隙間から、幾つのも鋭い視線が其の船に注がれていた。
黒く染められた服と、顔全体を覆う覆面が、彼らの姿を闇を同化させている。
彼らは文字どおり闇の住人。
怪物の蠢く森の中であろうと、彼らは何も恐れはしない。
何故なら、彼らこそが最も恐るべき怪物なのだから……

「みんな、手はずどおりよ」

咲夜の呟きを合図に、微かな風が木の葉を揺らした。
咲夜の周囲から気配が消えていく。それは、同種の人間にだけ感じ取れる、微かな気配。
彼女は今回、一族の中でも特に腕利きばかりを連れて来ていた。

餌は既に撒かれている。後は、獲物が罠にかかるのを待つだけ。

「さぁて、あなた達の巣穴は何処なのかしら？　早く道案内してくださいな」

咲夜の顔に冷たい笑みが浮かび上がる。其れは、冷徹な狩人の顔であった。

「おめぇら……そんな話をお頭が信じるとでも思っているのか？」

潮の匂いが充満する薄暗い部屋の中で、１０名ほどの男達が２人の男を取り囲んでいた。

部屋の中を仄かに照らすランプが左右にゆったりと揺れる度に、室内の影が乱舞する。

どの顔を見ても、潮風と日に赤黒く焼けた船乗りの顔だ。

もっとも、其の体から発散される血の匂いを嗅げば彼らの職業が何なのか予想がつく。

低く冷たい声が、跪く２人の男へ突き刺さった。

「ですが……俺達は本当に見たんです。この眼で……なぁ、そうだよな？」

そう言うと男は、傍らで黙ったままの相方へと話を振った。

「えぇ、こいつは望遠鏡ではっきりと目にしましたし、俺もこの眼でしかと見ました。こいつの言うとおり、あそこには信じられねぇ規模の町が作られていました。いや。あれは町なんてもんじゃねぇ。小さな地方都市くらいはありましたぜ」

其の言葉を聞き、二人を取り囲んでいる男達の一人が吐き捨てるように言い放った。

「ケッ、ふざけた事を抜かしやがる。おめぇ、一体どうやって、2ヶ月足らずで町を造るって言うんだ？　出来るって言うなら説明して見やがれ！」

其の言葉に、周囲から嘲笑と賛同の声が上がった。
誰が聞いても、二人の言葉を信じる人間はいないだろう。

「そんな事はねぇ。俺達は確かに見たんだ」

だが、自分の命が掛かっている事を理解している男は、必死で食い下がる。

「ふざけるな！　どうせ酒でも飲んでいたんだろう！」

別の誰かが、声を荒げて叫んだ。

「そんな事はしねぇ！　俺達は見たんだ！　本当に見たんだ！」

「本当だ。俺達は酒も薬もやっちゃいねぇ。頭の命に従っただけだ」

二人は血相を変えて叫ぶが、二人に注がれる視線は冷たい。

「少し黙れ」

低く硬い声だ。
普通であれば聞き逃してしまうほど其の声は低く小さい。だが、其の男の言葉はその場に居る全員の耳にハッキリと届いた。

全員の視線が、この場でただ一人椅子に腰掛けている男へと向けられる。
がっしりとした体格と、潮風にさらされ赤茶けた髭。落ち窪んだ眼が、酷薄そうな光を放つ。
日に焼けた赤黒い肌が、絹製のシャツの隙間から見え隠れする。
如何にも海の男といった風情だ。
男の名はヘンリー。他の海賊達から【鮫】と呼ばれ恐れられる男である。
もとはエルネスグーラ王国にある小さな漁村の漁師だったが、税に関するトラブルから、村を治めていた貴族を殺し逃亡したという豪の者だ。

「頭……」

「お……俺達は……」

二人は縋る様な視線をヘンリーへと向けた。
自分達の命は、椅子の座る男の気分一つで決まるのだ。其の事に恐怖を感じないはずが無い。

「まぁ、良い。お前達、メシでも食って来い」

「え？」

あまりにも予想外な言葉に、二人を最も声高に責めていた男の口から、間抜けな言葉が漏れた。

「行け」

注がれる周囲からの奇異の視線を無視し、ヘンリーは手を振り払

う。まるで犬でも追い払うかのように。

「へ、へい。失礼しやす」

「失礼しやす。お頭」

哀れみを乞うかのように、床にはいつくばっていた二人は、ヘンリーへ頭を下げると、脱兎の様に部屋を飛び出て行く。

ヘンリーの気まぐれか理由があっても事かは不明だが、せっかく拾った命を失いたくは無かったのだろう。

「頭、どういうおつもりで？　あいつらの話をまさか信じられた訳じゃありますまい？」

部屋に残った男達の一人が、椅子に悠然と座るヘンりーへ問いかけた。

彼らは航海長を初めとする、この船の幹部達だ。

一般の船員と異なり、船長であるヘンリーに対してもある程度の質問が許される。

勿論、絶対権力者であるヘンリーの機嫌を損なわないよう、細心の注意が必要だが……

「あいつ等が、俺に嘘をつく度胸があるとは思えねぇ。それに、もし仮に嘘をつくなら、もう少し真実味のある話をするとはおもわねぇか？　俺のやり方はお前達も知っているだろう？」

顎鬚を手で撫で付けながら、ヘンリーは問いかけてきた男へ鋭い視線を向けた。

事実、ヘンリーは二人の話を嘘だとは思っていない。自分に対して嘘をつけばどうなるか、幾ら頭の悪い部下達であっても、理解し

ていると自信を持って言い切れる。それだけの数を見せしめとして処刑してきているのだ。
確かに、二人の話しはあまりにも荒唐無稽な内容だが、もし、裏切りを画策しているとしたら、もう少しましな話を造るだろう。
ヘンリーの言葉に、皆が頷く。自分達の頭がどれだけ冷酷な人間なのか、誰もが理解していたからだ。

「それは……確かに。ですが、それじゃぁ、あの若造は一体どんな手品を使ったんです？　あいつが半島に入ってまだ2ヶ月と経っちゃいませんぜ？」

二人が嘘を付いていないという事は理解できた。だが、そうなると新たな疑問が浮かび上がってくる。

「さてな。だが、見せかけるだけなら可能だろうよ」

「見せかける？」

ヘンリーの言葉に、男達は首を傾げた。
荒事には慣れているが、頭を使う事は苦手な面子ばかりだ。
彼らの頭の大部分は、酒と女の事で占められているのだから。

「遠目からなら、幾らでも誤魔かしは出来るだろう？　岬から確認したといっていたが、所詮、近くに寄って確かめたわけじゃねぇ。案外、木で作った張りぼてだった可能性だってあらぁな」

「張りぼてですか？」

「まぁ、可能性の話だけどな」

「頭。この後、どうしやすか？　確認に向かうしかないと思いやすが」

実際のところ、このまま議論しても答えの出ない話である。ならば、確認に赴くしかない。

だが、部下の言葉にヘンリーは首を横に振る。

「いや、其の必要は無ぇ」

「ですが……」

「オメェ、俺に楯突く気か？」

抗弁しようとした男の言葉を、ヘンリーは鋭い視線を向けて遮った。

「今から戻れば会合に間に合わなくならぁ。それともテメェがあいつ等に話つけるか？」

ヘンリーの言葉に、その場に居る誰もが息を呑む。

「そ……そりゃぁ」

「なら、戻るしかねぇだろうが。確かに、あいつ等が信じるかどうか微妙な話だがな……」

ヘンリーの脳裏に、自分と比肩する二人の顔が浮かぶ。

どちらも普段なら余り顔を合わせたくない人間。

しかし、今回の話はヘンリーの独断で動くわけにはいかないのだ。

その煩わしさに、ヘンリーは思わず舌打ちをした。

「どちらにしろ、俺らだけじゃ動きようがねぇ。攻めるにしろ交渉に持ち込むにしろ、会合で話をするしかねぇだろう」

今の段階では推測するしかないのだ。

ただし、一つだけはっきりとしている事もある。

見せ掛けの罠か、本当に備えたのかは別にして、御子柴亮真という人間が、自分達ウォルテニア半島を根城にする海賊を意識していると言う事だ。

（厄介な事になってきたな）

馬鹿な貴族が、思いつきで始めた開拓事業かと思っていたが、どうやら其の考えは甘かったらしい。

御子柴亮真という男は、本気でこの不毛の半島を開拓する気の様だ。

「よし、錨をあげろ。港へ戻るぞ！」

ヘンリーの号令の下、錨が巻き上げられ、帆が張られた。

船は初めゆっくりと、そして、だんだんと風を受けて速度を上げていく。

彼らの根城を目指して……

その町は、ウォルテニア半島の北端に位置していた。

人のいないはずのこの地で、その町の住人は強かに生き抜いてきた。

彼らが何処から来たのか、其のルーツは彼ら自身も理解してはいない。

半島に追放された貴族や其の子孫。国から賞金を賭けられ、行き場の無くなった犯罪者。そんな彼らが、ある者は荒れ狂う海を超え

てを、またある者は魔境と言われる森林を通り抜けて、ついに辿り着いた楽園。いや、ある意味其処はこの世の地獄なのかもしれない。

確かに其処は、既存のいかなる権力も力の及ばない場所だ。貴族の横暴にも、国の圧政にも無縁な町。それだけ聞けば人はその町を楽園と呼ぶかもしれない。だが、其の町を支配する物が何かを聞けば誰もが其処を地獄だと言うだろう。

その町を支配するのは力。強い事、其れだけが、町の法律だった。性別も年齢も其処では一切考慮されない。

そんな町である。

切立った崖に囲まれた其の小さな湾に、其の町はあった。まるで、人の目に触れるのを恐れるかの様に……

第3章第28話

西方大陸暦２８１３年４月１８日夜【無情の業火】其の２：

「なるほどねぇ……それで、あんたはノコノコと戻ってきたと言うわけかい」

そう言うと、女は手にしたジョッキのエール酒を呷る。
塩風に晒され、くすんだ金髪。醜いと言うほどではないが、顔の造りは極めて平凡だ。小柄な上に胸も小ぶりで、女としての魅力はお世辞にも高いとは言えない。
しかし、それを理由に彼女を侮る男は居なかった。
男社会の中で生き抜いてきたと言う自信。其れが瞳から鋭い刃となって周囲を威圧する。
彼女の名はルイーダ。
【蛇】の異名を持つ彼女は、ヘンリーと同じこの町を支配する頭の一人である。

「鮫もヤキが回ったようだ。そんな話をこの場に出して来るとはな……」

ヘンリーの向かいに座る禿げ頭の男も、ルイーダの言葉に同調するかのように呟いた。
男の名はアンドレ。
【津波】の異名を持つこの男は、女性の腰周りにも匹敵する、太い二の腕が自慢の巨漢だ。
彼は、綺麗に剃りあげられた頭を叩きながら、ヘンリーへ探るような視線を向けた。

この円卓を囲む三人こそが、この町の支配者であり、各々が率いる海賊団の船長である。
彼らは、ガレオン船を旗艦とし、キャラベルやキャラックと呼ばれる中型、小型の船を数隻ずつ持っており、ウォルテニア半島と其の周辺海域を荒らしまわっていた。
今日は、月に一度開かれる定例会議。この町の行く末を決定する大事な会議である。
そして今、この会議で最大の懸案が、半島を領有する事になった御子柴亮真の動向だった。
国から見捨てられた土地だからこそ、彼らは拠点にしてきたのだ、其の半島に公的権力が介入してくる。とても見過ごす事は出来なかった。

「本気でそう思うのか？」

低く落ち着いた声だ。
（まぁ、こいつらが不審に思うのも当然だ。もし立場が逆なら、俺もこんな話、不審に思うだろうしな）
そんな思いが、ヘンリーの心を落ち着かせる。
ヘンリーの言葉にルイーダは肩をすくめ、アンドレはそのまま沈黙を守った。
二人はヘンリーの実力を十分に理解している。
ヘンリーはこの不毛な町を力で取り仕切るボスの一人なのだ。
彼の実力を疑う必要は無い。貴族のような生まれ持った特権に守られているわけではないのだから。
もし、ヘンリーの力が他人より衰えれば、彼は死体となって海に捨てられている事だろう。
彼が生きてこの場に居る。其の事実が、ヘンリーの実力を明確に示している。

「俺は、現状出来るだけの事はした。確かに、上陸して調べる事も考えたが、罠の可能性も捨て切れなかったからな」

俺の判断に文句があるかと問い掛けるかのように、ヘンリーは椅子に腰掛ける二人を睨み付けた。

三人の視線が卓上で交差する。

「罠か……確かにな」

「備えをしている事自体、御子柴が用心していると言う表れだものね」

「そう言う事だ」

ヘンリーの言葉を最後に、三人はそのまま押し黙った。

長い沈黙がこの部屋を支配する。

問題なのは、この後どうするかだ。それ次第で、彼らの運命が決まりかねない。

「思い切って襲う……か。人数的には、３００そこそこって話だろ。俺達全員で向かうなら５００近い。力押しでも勝算はあるんじゃねぇか？」

この中で一番交戦的で血の気の多いアンドレが、力押しを提案した。

【津波】の異名は彼の襲撃の仕方に由来している。

波が静かに引くかのように獲物へと忍び寄り、圧倒的な物量で押し潰すのだ。

単純な力押しではない。綿密な下調べと準備をしたうえで、一気に奇襲を掛ける。そう簡単に出来る事ではない。

其れを実現できる力を持つからこそ、アンドレはこの町に君臨する事が出来るのだ。
だが、アンドレの提案にヘンリーは首を振った。
「いや、下手に手を出すのは不味い……備えの無い相手を奇襲するならともかく、相手が備えている可能性がある以上、そいつは下策だ。数は少ないが、歴戦の傭兵も居るらしいからな」
普段なら迷わずアンドレの提案に乗るところだが、今回はダメだ。
「不確定要素が多すぎるか……だが、其れならばどうする？」
アンドレ自身も思うところがあったのか、ヘンリーに否定されても、あまり気にした様子は無い。
確かに人数はヘンリーたちの方が多いし、実戦経験も豊富。
しかし、彼らの実戦経験は基本的に海上での物。
国や同業者達と繰り広げる海の上での戦いならば、彼らは幾度と無く潜り抜けてきた歴戦の猛者達だが、陸の上の戦闘経験は村や町を略奪する時のみだ。
彼らは奪う事が目的であって、戦うことが目的ではないのだから。
それに、彼らの最大の武器は奇襲だ。
警戒心が緩んだ一般人を襲う事には慣れていても、真正面から、備えのある町を攻め落とすだけの戦力は無い。
「ならどうするの。このまま黙って不干渉を貫く？」
同じ半島に居るとはいえ、亮真達が拠点にしている入り江と、この町の間には、怪物（モンスター）の蠢く森林地帯が広がっている。
この町自体が、周囲を切り立った崖に囲まれた入り江に、人の眼から隠されるように造られた町であり、そうたやすく見つける事は

出来ない。
ルイーダの提案は消極的ではあるが、決して間違っては居ない。
【蛇】の異名を持つ彼女は、執念深く、何より待つ事が出来る人間だ。

「それで機会を窺う……か」

ヘンリーの言葉に、ルイーダはニヤリと笑いを浮かべて頷く。
動く事を選択できる人間は多いが、ジッと機会を待ちながら動かない事を選択する事が出来る人間は少ない。
彼女が実力者として君臨出来たのも、静かに先代の力が衰えるのを待つ事が出来たからだ。
其れもただ待つだけではない。少しでも早く其の機会が訪れるようにと、自らの力を蓄えるのと同時に、先代の力を削ぎ落とす事に従事してきたのだ。
毒が徐々に体を蝕んで行くかの様に……
彼女が【蛇】と呼ばれる由縁である。
だが、再びヘンリーは首を横に振ると、自らの考えを口にした。

「其れも一つの手だが、俺はこの際、御子柴男爵と交渉を持つ方が良いと考えている」

其の言葉を聞き、アンドレとルイーダは訝しそうにヘンリーを見つめる。
二人にとって、彼の言葉はあまりにも予想外だったからだ。

「交渉……ねぇ。御子柴を油断させて襲おうって腹かい？」

「案としては悪くないが、御子柴は俺達を警戒していると考えた方が良い。それに、そんな誘いに乗って警戒を緩める様な男では無い

だろう……奴に関しての噂が本当ならばな」

大男総身に知恵が回りかねと言う言葉があるが、アンドレは人並み以上の知恵を持っている。

それは、大陸間を行き来する交易商人であった彼の前身を考えれば当然の事だ。

季節外れの大嵐で交易船が沈没し、多額の借金を負うことさえなければ、彼は海賊などに其の身を落とし事は無かっただろう。

今でこそ、荒っぽい手段を使う事を厭わなくなってはいるが、元々は口先一つで巨万の富を築いたほどの男だ。

幾多の商談を纏めた経験から、彼の人を見極める目は三人の中で一番確かだった。

其のアンドレから見て、御子柴亮真と言う人間は、他人を信じない、謀(はかりごと)に長けた人間だ。

そういった人間から信用を勝ち取るのは、そう容易い事ではない。

それこそ、謀ったつもりが、逆に謀られることにすらなりかねないのだ。

だが、ヘンリーは再び首を振る。

「そうじゃない……交渉は取っ掛かりにすぎねぇ。最終的には御子柴の傘下に入るのさ。本当にな」

「正気……か？」

アンドレの問いにヘンリーは無言のまま頷く。

「お前達も判っているはずだぞ……」

何をとは言わない。其れはこの町に住む人間ならば薄々感じている事だし、この場に居る三人にとっては、正に御子柴亮真よりも重

大な問題なのだから。

「確かに……俺達には後が無い……だが……」

「アタイもどうかと思うねぇ。そもそも、御子柴がアタイ達と交渉を持つかどうかすら怪しいんだよ？」

しかし、懐疑的な目を向ける二人の視線を、ヘンリーは真っ向から見据えた。

「だが、このまま海賊家業を続けても先は見えている。だろう？」

其の言葉に、二人は押し黙る。其の態度が、ヘンリーの言葉が正しい事を証明していた。

実際のところ、略奪による見入りと言うのはあまり多くないのだ。村を略奪する、と言うのは確かに短期で見れば大きく稼ぐ事が出来る。

貴族に搾取されているとはいえ、平民は平民なりに貯蓄をするのだから。

収奪は、其れを正に根こそぎ奪うと言う事だ。農業で言えば、来年種まきに使う分を残さない事に等しい。

結果、継続した収入にはなりえない事になる。

では、どうするか。

一つ二つの村や町を根こそぎ奪い、周りの町からは税金と言う形で定期的に金を毟り取るのだ。

血も涙も無い海賊。襲われれば女子供も容赦なく殺し、犯し、奴隷として売り払う。

そんなイメージが、牙を持たない一般人の心を縛りつけ、その恐怖から逃れる為に海賊へ金を払う。

安全の為に……

そして、これは商船を襲う際にも同じことが言える。

航路を通る船が居てこそ、襲う事が出来るのだ。

海賊が出没し、襲われれば荷も命すらも根こそぎ奪われる。そんな航路を誰が航海するというのか。

多くの場合、海賊は商人から通行税を納められる。

積荷の何割分かの荷か代金か。

また、そうしなければ次が無くなってしまうのだ。

無論、イメージを維持する為に定期的な生贄を必要とするが、根こそぎ奪う事が、海賊の本来の姿ではない。

しかし、今ヘンリー達三人が率いる海賊団の後には焦土しか残らない。

文字通り村を襲う際には、奪い尽くし、殺し尽くす。

商船を襲う際にも同じだ。

生き残った船員は奴隷として売り払い、荷は全て奪いつくす。

十年ほど前から其の頻度は加速度的に増え、今では毎回そんな略奪の限りを尽くすようになった。

「其れは分かっている……今では獲物を探しにかなり遠出をしなけりゃならねぇ」

吐き捨てるかの様に呟いたアンドレの言葉にルイーダが頷く。

北方地域からの商船は、西方大陸の北周り航路を途中で止めている。

現在、定期的に運行しているのは、エルネスグーラ東端の港町まで。

其処からは陸路を使って大陸中央部を横断し、貿易都市フルザードまで輸送するのが全てと言ってよい。

船による大量輸送と比べて、手間も人件費も余計に掛かるが、海

賊に根こそぎ奪われるよりマシと言うのが商人たちの判断であり、其れは正しい認識だ。

そうでなければ、南回りの航路を選択する。

全ては、ヘンリー達の荒っぽいやり方が原因なのだ。

「かと言って、今の収益でも暮らしていくのがやっとだ……とても昔みたいに、甘い事をやってるゆとりはねぇ」

昔は、この町にこれほど人が居なかった。増えても年に数家族。十人を超えて増える事など、まず無かったのだ。それが、十年ほど前から急激に人が流れ込んでくる事になった。

理由はハッキリとしている。オルトメア帝国の侵攻が活発になった時期だ。

オルトメア帝国が領土拡大をしていく中で、西方大陸中部に存在した国々が、次々と滅ぼされていく事になった。

其の過程で、多くの人間が難を逃れて故郷を捨てた。

勿論、そのままオルトメア帝国の国民として生きていく事を選んだ人間は大勢居る。

だが、帝国の民になる事を拒み、新天地を求めた人間も決して少なくない。

いや、特権階級の属した人間の殆どが、放逐か処刑のどちらかを選ばされたのだ。

そういった人間の多くは、見知らぬ空の下で土に還る事になるのだが、幸運な一部の人間は新天地へと辿り着く。

そして、其の中の一部が、このウォルテニア半島に存在する名も無き町へと流れ込んで来た。

「あの時の判断は間違っていた。其れは現状を考えれば間違いねぇ」

「今更其れを言っても、どうしようもないじゃないか」

苛立ち紛れに吐き捨てるヘンリーに、ルイーダは慰めの言葉を掛ける。

当時の状況を思い返しても、結論は一つしかなかった。結論が見えた今だからこそ、間違いだったと言えるだけの事。

当時の熱狂を考えれば当然だった。

数は力だ。

一人でも二人でも、町の住民が増えれば、それだけ怪物（モンスター）の襲撃に怯えなくて済む。

少しずつ、大きくなっていく町。

自分の住む町が拡大していく事を喜ばない人間は居ない。

まして、其れまで人の眼を避けるように隠れ住んできたとなれば尚更だ。

初めは森林地帯を突破したごく一部の幸運な人間だけを受け入れていたのだが、其れは次第にエスカレートして行った。

各地の港町に船を向かわせ、これは見込んだ人間を海賊家業に誘い出したのだ。

初めは全て順調に行っていた。海賊の頭数が増え、襲える船や町の規模がどんどんと大きくなっていく。

周辺国から、散発的に派遣された討伐部隊に怯える必要も無くなった。ウォルテニア半島周辺の海域は文字通りヘンリー達の領土となったのだ。

そう、其れが地獄の扉を開く事になるなど、予想がつくはずが無い。

町の住民が増える。其のおかげで、半島に生息する怪物（モンスター）からの襲撃は目に見える形で減っていった。

町の住民が増える。其のおかげで、襲う事が出来る町の規模は大きくなって行く。

彼らが有頂天になったのも当然だった。
だから彼らは忘れてしまったのだ。彼ら自身は何も産み出さないという事を。

通行税にも、村々からの上納金にも限度がある。
彼らだって生活していかなくてはならない。
だが、無計画に町の住人を増やしてしまった事により、それらの収入だけでは町を維持していく事が出来なくなったのだ。
そして、一度崩れたバランスは二度とは戻らない。
より大きな収益を上げるために、人数を増やし、人数を増やした結果、より大きな収入が必要になる。
終わりの無い自転車操業の始まりだ。
そして、彼らは次第に収奪の回数を増やしていく事になる。
自給自足が困難な立地である半島を根城にしている彼らに、他の選択肢は無かったのだ。

「俺達はやりすぎた。今、この海域を通ろうって物好きは居ねぇ。海岸線にある町や村もめぼしいところは皆奪い尽くした後だ」

ヘンリーの言葉にアンドレもルイーダも黙ったままだ。
だが、其の眼はヘンリーの言葉の裏側に隠された意図を正確に読み取り、強い光を放っていた。

「だが、だからこそ、御子柴と交渉の余地がある。俺達の力を売り込む余地がな」

第3章第29話【無情の業火】其の3

西方大陸暦2813年4月18日夜

「交渉の余地……か」

ヘンリーの言葉に、アンドレは顎鬚(あごひげ)を撫(な)でながら呟く。

元商人としての感覚からすれば、ヘンリーの言葉は十分に実現が可能な様に思えた。

海軍として軍事力を担う事も、自衛出来る貿易船として交易に携わる事も不可能な事ではない。

其の一方で、問題は御子柴亮真と言う男がそういった利害に聡(さと)い男かどうかだ。

海賊と言う、世間一般からは嫌悪される職業である自分達を使うだけの度量の大きさ。

善悪に拘るような人間では恐らく交渉は無理だろう。

清濁(せいだく)併せ呑む事の出来る器量を持つかどうか……

そんな思いがアンドレの脳裏に浮かんだ。

「何か手土産が要るねぇ……それに、いきなり行っても話を聞いてくれるかは賭けになるよ？」

それまで黙って話を聞いていたルイーダが口を挟んだ。彼女の問いにヘンリーは当然だと言うように深く頷く。

確かに彼女の懸念は当然の事。本来なら然るべき仲介役を立てるべき話だ。

勿論、海賊である彼らに其れは不可能であるが、せめて心象を良くする為にも手土産は必要だった。

「手土産か……何を出す気だ。金か？」

アンドレの問いに二人は押し黙った。

選択肢としては悪くない。

何のひねりも無い直球であると言う点を除けば、万人が必要とするものだし、現金を貰って喜ばない人間は居ないだろう。

使い道も無限に考えられる以上、持て余す事も無い。

だが、其の一方で現金は送った人間を印象付ける事が無い。

提案したアンドレ自身、幾度と無く賄賂という手段を使ってきたからこそ理解できる。

現金は即効性がある反面、持続力が無い。

定期的に賄賂を贈り続けるというのならともかく、初対面の人間への手土産としては余り相応しくないのだ。

「出来れば俺達の利点を印象付けられるようなものが良い。それもなるべく物珍しい奴が」

それなりに見栄えがし、金銭的な価値が高い物。

滅多に手に入らない稀少価値の高い物が特に良いだろう。

更に言えば、消耗品ではダメだ。なるべく形が残るものが良い。

そんな思いがヘンリーの言葉に滲んでいた。

「珍しくて俺達の利点を印象付けられる物……か」

「どうだ、何か無いか？」

ヘンリーの問いに、アンドレは考え込んだ。

倉庫には交易船を収奪した際に得た珍品も無い訳ではない。

物流が発展していない大地（アース）世界では、他の大陸から輸入されてくる品はどんな物でも高値がつく。

だが、其の一方で、今倉庫に眠っている物の多くは実用的ではない上に、本当の意味での珍品だった。
香辛料、装飾品、衣類、武具。こう言った物は使い道がはっきりしており、なおかつ需要が多い。
逆に、書物や絵画、骨董品と言った類の物は、欲しい人間にとっては垂涎(すいぜん)の品だが、興味の無い人間にとってはゴミにしかならない。つまり、需要が他の品に比べて少ないのだ。
今倉庫に残っているものと言えば、そういった所謂(いわゆる)金に換えにくい品物ばかりだった。

「半島を開拓中である今の状態では、美術品などを送っても持て余すだけだろう……」

ウォルテニア半島での開拓が終わった後でなら良いが、途中である今の状況で美術品などを送っても邪魔にしかならない事が目に見えている。
折角(せっかく)贈り物をするのに、相手に喜んでもらえないのでは意味が無い。
沈黙が部屋を支配した。
御子柴亮真との交渉に自分達の運命が掛かっている事を、ヘンリーもアンドレも十分に理解していたから。

「しかし、あんた達の頭は肝心な時に働かないねぇ……」

馬鹿にしたような声が、沈黙を破った。
ヘンリーの鋭い視線が、卓に頬杖をつきながらニヤつくルイーダへと突き刺さる。

「どういう意味だ？」

低く押し殺した声。其処に含まれているのは明確な敵意。
彼ら三人に共通するのは、強靭な意志と、強固な肉体。そして、他者を圧倒する覇気だ。他人に侮られて黙っている事など無い。

「待てヘンリー……どういう意味だ？　ルイーダ」

敵意の篭った視線でルイーダを睨み付け、今にも飛び掛らんとするヘンリーの顔の前に、アンドレは手を突き出して押し止めた。
其の眼は、ルイーダの真意を推し量ろうとしている。

「丁度良いのが有るじゃないのさ。あたし達の利用価値を示し、尚且つ半島でしか手に入らない貴重品がさぁ」

アンドレとヘンリーは顔を見合わせ、ルイーダの言葉を考える。

「半島でしか手に入らないだと？」

ヘンリーが確かめるかのように呟いた言葉を聞き、アンドレの脳裏に有るモノが浮かんだ。

「そうか……アレか」

「そうさ。男なら誰だってアレを送られて喜ばない人間は居やしないよ」

アンドレの言葉を聞き、何処か卑しさの混じった笑みをルイーダは浮かべる。
其の笑みを見たヘンリーの脳裏に、ようやく彼女の言う貴重品が思い浮かんだ。

「テメェ……アレは俺たちが散々苦労して……」

ヘンリーはルイーダへ食って掛かる。

それもある意味当然の事だ。アレはそう簡単に手に入るような物ではない。

多大な労力と、運。どちらを欠いても手に入れる事が困難な品物。

「そんなことは分かっているわ。だからこそ贈る価値があるんじゃないの？　アレならどんな男だって喜ぶもの」

元々ルイーダは、娼婦としてこの町に連れてこられた奴隷だった。

しかし、彼女の容姿では客を取れないと判断され、娼婦達の管理という仕事を任されたのだが、これが彼女の才能を開花させた。

人を管理し、人を操る。

この才能にルイーダは長けていたのだ。

娼婦達を介して次第に彼女は勢力を拡大していった。

何しろ娯楽等ほとんど無いと言って良い世界の事だ。

女達を支配するということは、女の肌に触れずには居られない多くの海賊達も支配すると言う事。

そうやって彼女は昇り詰めたのだ。首領の地位まで。

「良いだろう。お前を信じよう……どちらにしろ直ぐに買い手を見つけられるような様な品物じゃない。なら、此処で贈り物にするのも悪くないからな」

「チッ……仕方ねぇか」

アンドレの言葉に、ヘンリーも舌打ちしながらも頷く。

金に換えられないほどの貴重なアレ。

それほどの物を贈れば、海賊である自分達の話を聞いてくれるか

もしれない。
そんな思いが三人の中に浮かんでいた。

コーン、コーン
朝日の差し込む窓から、木槌を打ち込む音が響いて来た。
それに、大勢の怒鳴り声や、人の蠢く雑多な音が彩を添える。
人口と言う意味では、辺鄙（へんぴ）な村程度でしかないはずなのに、外から聞こえてくるのはまるで都会の様に活気に満ち溢れた光景だ。
強固な目的意識を持った人々が、何かを作り上げる途中とはこういうものなのだろう。
亮真の眼に写る人々の顔には希望が漲（みなぎ）っていた。
（町はだいぶ形になってきた……石畳の道路に大型船も受け入れられる港湾。城壁の方も実用に耐えられるレベルまで出来ている……問題は例の件か……シモーヌからの積荷は既に届いている。後は咲夜からの連絡待ちだな）
既に街は移民を受け入れる為の住宅の建築が始まっている。
最後の問題さえ片がつけば、ウォルテニア半島は新たな姿へと生まれ変わる事が出来るのだ。
そして準備は既に整っている。後は時期を待つだけ……

「亮真様。よろしいですか？」

「あぁ。ローラか。何かあったのか？」

窓から見える街の風景をぼんやりと眺めながら物思いに耽っていた亮真は、扉を叩くノックの音を聞くと扉へと視線を向けた。

「ご報告が」

そう言うローラの顔には、戸惑いと驚きが入り混じったなんともいえない表情が浮かんでいる。

余程、予想外な事が起こったのだろう。

（何か起こったな……）

亮真は無言のまま眼で先を促した。

そして彼女の報告を聞いた亮真の顔に、驚きの表情が浮かんだ。

其の部屋は粗末だった。

木で作られた柱と壁。

それらは強固に造られてはいたが、むき出しのままであり、とても貴族の執務室とは思えない。

部屋は爵位持ちの人間が使う部屋である為、それなりに広く造られている。

だが、それも部屋に設えられた家具が木目の粗い執務用の机と椅子だけとなれば、逆に粗末さを際立たせてしまう。

それもある意味当然なのかもしれない。

亮真がこの部屋を使うのは日に2回。朝と夜の報告を受ける時だけなのだから。

勿論、シモーヌから購入する品物の一覧や明細の確認など、書類仕事もあることはあるが、其の件数は圧倒的に少ない上に、そういった細かい仕事の大部分はボルツやマルフィスト姉妹に任せてしまっている。

亮真が確認するのは、彼らだけでは決済出来ないごく一部の書類だけだ。

では、亮真は何をしているのかと言えば、毎朝、現場監督として周りに喝を入れつつ、率先して街造りに参加していた。

自らが率先して体を動かす。

あざとい手段だが、階級社会である大地世界（アース）ではこれが事の外、大きな効果を齎した。

何しろ、多くの兵士達にとって貴族とは、支配する者であり、搾取する者なのだ。

貴族とは、自らは何も産み出さず領民から奪うだけの存在。

実際には大きな責任と代償を払っているのだが、支配される人間から見れば、そういった負の部分は眼に入らない物だ。

其の支配階級の一人である亮真が、自分達の中に混じって体を使う。

其の試みは亮真と兵士達との距離を確実に縮めたのだ。

共に汗を流し、言葉を交わす。

同じ食事をし、粗末な木のベットで眠る。

亮真のそう言った態度は、確実に兵士達の信頼を得ていた。

全ては順調に進んでいたのだ。そう、ローラからあの報告が齎されるまでは……

（クソッ。どうする……）

机の上に置かれた羊皮紙を睨み付けながら、亮真は心の中で舌打ちをした。

幾度と無く繰り返した問いかけだ。

既に夜の帳が辺りを支配している。

ローラの報告を聞いた亮真は、一日中部屋の中に篭り続けた。

昼食もとらず、亮真はひたすら自問自答を繰り返している。

いや、実のところ結論は既に出ているのだ。

問題は、結論を実現する為にどうするかと言う事……

（亜人……か）

海賊から届けられた交渉を求める手紙。其の中に書かれた贈り物こそ、亮真を半日の間苦しめる事になった原因だった。

亜人。

其れは、ウォルテニア半島に存在すると噂される、一般的には絶滅したはずの種族。

今朝、湾に入り込んできたいっそうの小船が齎（もたら）したのは、亮真との交渉を求める手紙と、一人の亜人だった。

彼女の肌は紫水晶を思わせる艶のある黒。髪は透き通るような銀髪で、耳は人間より尖っている。

一般的に黒（ダーク）エルフと呼ばれる種族だ。

生きた宝石。

そういう形容詞が相応しいほど、彼女は美しい。

男なら誰でも彼女の放つ魅力の虜となるだろう。

いや、女ですら例外ではない。

ローラやサーラはもとより、ボルツやリオネと言った人生経験豊富な人間も、彼女を目にした瞬間から其の美貌に眼を見張ったのだ。

確かに、彼女はウォルテニア半島という特殊な土地ならではの贈り物と言えた。

亮真も男である以上、美しい黒（ダーク）エルフなどを贈られて喜ばないはずが無かった。

そういう意味で言うなら、海賊達の選択は正しかったと言える。

だが、彼らは思い違いをしていた。

そして其の勘違いが、全ての歯車を狂わせる事になる……

第３章第２９話【無情の業火】其の３（後書き）

今回より、副題の付け方を変更いたします。
投稿済みのものに関しては、順次修正していく予定です。

第３章第３０話【無情の業火】其の４

西方大陸暦２８１３年４月２５日昼

港の桟橋には、何隻かのガレオン船が錨を下ろし静かに帆を畳んでいた。

「「「ようこそおいでくださいました。御子柴男爵閣下」」」

ガレオン船から桟橋に降り立った亮真を、１０人近い人間が出迎える。

先頭はヘンリー、アンドレ、ルイーダと言った三人の首領達。

其の後ろに並ぶのは、彼らの側近達だ。

「私の名はアンドレ。この町の長の一人でございます。このような辺鄙な土地ではタカが知れておりますが、本日は精一杯おもてなしさせていただく所存です」

アンドレは一歩前に進み出ると、深々と腰を折る。

元交易商人だけあって、こういった場面の場数を踏んでいるからだろう。

その風貌とは対照的に、まるで流れるような完璧な作法だ。

彼の動作に続いて後ろに控えてる者達も一斉に頭を下げる。

事前に綿密な打ち合わせを行ったのだろう。

彼らは海賊でありながら完璧な礼儀作法で亮真を迎えた。

「いや、こちらこそ態々迎えの船までよこして貰って……今日はどうぞよろしく」

そう言うと、亮真は軽く頭を下げた。
日本でならまず無難な挨拶だろうが、身分制度の存在する大地（アース）世界では、亮真の態度はかなり違和感を感じさせる。
其の上、身分的に亮真は爵位持ちの貴族であり、アンドレ達は所詮平民であり犯罪者でしかない。
形式的には、亮真がアンドレ達に頭を下げなければならない理由は存在しない。
アンドレ達は一瞬怪訝そうな表情を浮かべたが、それをこの場で口にするほど愚かではなかった。
にこやかな笑みを浮かべると、先頭に立って亮真を町の中へと案内する。

「お供の方々の数が少ないように見受けられますが？」

ルイーダは亮真に続いて船を下りてきた兵士達を見て首を傾げた。
ざっと数えた所２０名前後くらいしか居ない。
兵士は黒一色で染められた革の鎧を着込んだ上で槍を手にしており、これから戦にでも出ようかと言うほど完全武装ではあるが余りにも少なすぎる。
必要最低限の人数しか連れてきていないのだろう。

「えぇ、余り大人数でもね」

「はぁ……？」

そういって脇を通り過ぎた亮真の答えに、ルイーダは内心首を傾げた。
別に護衛の兵が少ない事はルイーダ達にとって悪い事ではない。
ただ、其の一方で釈然としないのだ。

別にルイーダ達は亮真を騙そうとしている訳ではない。
彼らは本心から亮真の傘下に入りたいと思っている。
だが、其れはあくまでもルイーダやヘンリー達の都合であり、亮真がどのように受け取るかとは別問題なのだ。
亮真の今の言葉を素直に受け取るならば、友好的な相手に大人数の警護兵を連れて行く必要は無いという風に受け取れるが、ルイーダは其処に違和感を感じたのだ。

アンドレに先導されながら会談の場へ向かって進んでいく亮真と護衛達の後姿に視線を向け、桟橋に佇むルイーダは傍らに立つヘンリーへ疑問をぶつけた。

「あんた……どう思う？」

「あん？　何がだ？」

「何がって……アイツの事さ……嫌な感じがしないかい？」

「そうかぁ？　俺は別に感じないけどな。いや、俺は逆に良いと思うぜ？　何しろ俺らを対等にあつかってくれてるからなぁ。外の貴族が考えられないだろうよ。やっぱり平民上がりだからかねぇ。普通の貴族ならありえねぇわな」

ヘンリーはそう言うと顎鬚（あごひげ）を撫でながらニヤリと笑った。
それこそ平民が頭を下げても鼻も引っ掛けない貴族が大勢居る中、亮真は海賊であるヘンリー達へ軽くでも頭を下げ挨拶を返している。
其の態度がヘンリーには衝撃的だった。
だが、其れは別に悪い印象と言うわけではない。
いや、貴族に虐げられてきたヘンリーにとって、其れは新鮮で評価に値する態度だ。

「アタイが気になっているのは其処さ……なんでアイツはアタイ達にあんなに愛想がいいんだい？」

「そりゃぁおめぇ、俺達の利用価値を知っているからだろうよ。それに、アレを送った事が印象を良くしたんじゃねぇのか？　大体、相手が友好的なのの何処に問題があるって言うんだ？」

「それは……でも、アタイ達に都合が良すぎやしないかい？」

ルイーダが気になるのは此処だ。あまりに自分達にとって都合よく行き過ぎている。

亮真の態度もそうだ。

平民上がりの貴族だからこそ、こういった場面では高圧的な態度をとって当然なのに、微塵もそんな様子は無い。

「あぁ？　何言ってるんだオメェ。印象を良くする為に亜人の中でも飛び切りの上玉をアイツに送ったんだぜ？　アレを受け取っておいて俺達の印象が悪かったら丸損じゃねぇか。大体、印象を良くする為にアレを送ろうと言い出したのはオメェだろうが？」

今、ヘンリー達が捕獲している亜人は全部で三人。

全員肌の黒い黒エルフ（ダーク）の女だが、其の中でも特に若くて美しい女を送ったのだ。

希少価値が高すぎる為、そう簡単に換金は出来ないが、捨て値でも数千万から一億バーツはするという亜人。

それほどの贈り物をしたのだから、亮真の態度が友好的なのは当然だとヘンリーは思っている。

「それは……」

ルイーダはヘンリーの言葉を聞き押し黙った。

「疑い深いのも時と場合によるぞ？　せっかく上手く進んでるんだ。つまらない事を気にしてアイツの機嫌を損ねるような事はするなよ？」

そう言い残すと、呆れる様に首を振りつつヘンリーは桟橋を後にした。

「確かに……ね」

全ては自分が思い描いたとおりの展開をしている。

狙い通り御子柴亮真とは交渉の場を設ける事が出来たし、自分達への印象も先ほどの態度を見れば悪くないように見える。

護衛の数が少ない事も、亮真がルイーダ達を信用している表れだろう。

桟橋に残されたルイーダは一人呟くと、湧き上がってくる不安と疑念を振り払う。

折角上手く進んでいるのだ。此処でつまらない疑念を口にして台無しにする訳にはいかない。

そんな思いが、彼女の心を縛り付けていった。

「さぁどうぞ御掛けください。今、冷たい物を持ってこさせます」

「えぇ、では失礼して」

アンドレの進めに従って、亮真がゆったりとソファーに腰を下ろ

すと、其のタイミングを見計らったかの様に扉をノックする音が響いた。

「入れ」

アンドレの言葉に従い、一人の女が飲み物とお茶請けの菓子を盆に載せて入ってきた。

３０台半ばくらいか。

容姿は悪くないが、何処と無く蓮っ葉な感じのする女だ。

おそらく酒場で働く女に付け焼刃の礼儀作法を叩き込んだのだろう。

不慣れな手つきで卓の上に飲み物を置き、彼女はギクシャクしながら一礼すると部屋を出て行く。

(俺の機嫌を損ねないように必死か……ご苦労なこった)

亮真はこみ上げてくる冷たい嗤いを必死で押さえ込んだ。

「後ろの方々もよろしければ如何ですか？　良く冷えておりますよ」

「いえ、私達にはお構いなく」

ローラは表情を変えずに、アンドレの誘いを跳ね除けた。

亮真の後ろに直立不動で立つのは、マルフィスト姉妹。

この部屋に居るのは、亮真とアンドレ、そして警護役のマルフィスト姉妹の四人のみだ。

「そうですか……失礼いたしました……あぁ、申し送れましたが、他の護衛の方々は別室にて寛(くつろ)いでいただいております」

姉妹に提案をすげなく切り捨てられたアンドレは、間を持たせようと分かりきった事を口にした。

そもそも、会談の場に全員を入れられないからと、護衛の大半を別室に案内したのはアンドレ自身なのだ。
だが、亮真は笑みを浮かべると軽く頭を下げた。

「えぇ。お手数を掛けます」

「とんでもございません。精一杯おもてなしをさせていただきますので……ところで……閣下……」

どう切り出そうか迷うような口ぶりのアンドレに、亮真は笑みを浮けべて切り出した。

「先日ご提案いただいた件ですね？　皆さんが私の傘下に入ってくださると言う」

先週送られて来た手紙には、アンドレたちの考えが全て書かれている。
彼らが何を考えて、何を望んでいるかを既に亮真は理解している。
今日行われるのは、亮真の決定をアンドレ達へ通知する為だけのもの。
余計な言葉を言う必要は無い。

「は……はい。其の通りです。先日お送りした亜人は私共の誠意の印でございます」

「誠意ですか……なるほどなるほど」

「正直に申し上げて、あれほどの一品はそうそう手には入りますまい。何せ連中は村の周りに強固な結界を張り巡らしており、捕らえるには連中が結界の外に出てくるのを待つしかないのですから……」

一口に結界の外に出てくるのを待つと言っても、ここは怪物（モンスター）が徘徊するウォルテニア半島。
そんな場所で獲物が出てくるのをじっと待つ為には、大変な労力が必要になる。

「なるほど、大変な手間隙を掛けて捕らえた物を贈って下さった訳ですね。いやいや、そうでしたか……」

亮真はしきりに頷く。
最後のダメ押しとばかりに、アンドレは自分達がどれほどの労力を掛けたのかを力説した。
危険をアピールすればするほど、自分達の印象がよくなると判断したのだ。
其れは元商人であるアンドレにとって幾度と無く経験してきた物だ。
相手に高値で物を売りつけるのなら、其の品物がどれほど貴重なのか、其れを得る為にどれだけの労力を費やしたのかを説明すればいい。

「それほど貴重な物を……なるほど、皆さんのお気持ちは良く分かりました」

ひとしきり黙ってアンドレのアピールを聞いた亮真は、静かに頷いた。

「おぉ、では！」

亮真の言葉に、アンドレは歓喜の笑みを浮かべた。
其れは、自分達の望んだとおりの結果を得たと言う会心の笑みだ。

（ルイーダの言うとおり、所詮男か……やはりアレを贈ったのは正解だった）

いや、既にアンドレの中では結論が出ていた。

もし否なら、御子柴亮真が態々此処に来る必要など無い。

今日この場に来た。この事実が全てを物語っているとアンドレは考えたのだ。

だが、彼の思いは無残に打ち砕かれた。

冷たい笑みを浮かべた亮真の言葉によって……

「えぇ、貴方達には消えてもらいます」

其の言葉が亮真の口から放たれた瞬間、後ろに控えていたローラとサーラの剣がアンドレへと襲い掛かった。

あまりに予想外な言葉にアンドレはなす術も無く体を貫かれる。

「では、始めるか。手はずは分かっているな？」

驚愕のあまり眼を見開いたまま事切れたアンドレの死体を冷たい眼で見下ろしながら、亮真は姉妹へ問いかける。

「はい」

「やれ！」

静かに頷くマルフィスト姉妹に亮真は鋭く命じた。

「「太陽の欠片、火の申し子、地に落とされし汝ら火の神の子らよ、今こそ其の罪を浄化し天へと帰らん」」

詠唱に伴いチャクラが回転をはじめ、彼女達の生気（プラーナ）が唸りをあげ

る。

「「火神天昇覇（バーニングピラー）」」

最後の句と共に、姉妹の手が地面へと叩きつけられる。

其の瞬間、轟音と共に大地が揺れ、灼熱の火柱が屋敷の天井をぶち抜いた。

第3章第31話【無情の業火】其の5

西方大陸暦２８１３年４月２５日昼

眼下に広がる町の中心部から吹き上がった炎の柱。
湾を囲む切り立った崖の上に居る全員が待ち望んだ合図の炎。
黒い覆面で顔を覆った男が、無言のまま咲夜の背後に進み出る。
其の気配を感じたのか、咲夜が後ろへ振り向いた。

「分かっています。貴方達、準備は出来ているわね？」

咲夜の言葉に黒い影は無言のまま頷くと、襷掛けにした皮のベルトに挟まれた小ぶりの花瓶を手にした。
取り立てて眼を引くような物ではない。
胴体の部分はずんぐりと丸く、首の部分は細くなっている、何処にでもありそうなごく普通の陶製の花瓶である。
ただ、いくつか普通とは違う点もあった。
一つは其の花瓶には花ではなくボロ布が詰め込まれている事。
そしてもう一つが花瓶の数。
忍達のベルトに紐で固定された花瓶の数はおよそ１０個。
彼らの数はおよそ二〇人ほどであるから、この場には用途不明な花瓶が二〇〇個ほどもある計算になる。
態々動きを妨げないように工夫されているところを見れば何かに使うのだろうが、この姿だけを他人が見れば思わず笑い出してしまう事だろう。
だが、この場に居る誰一人として、自らの格好を恥ずかしがる様子など無い。
いや、それどころか、彼らの眼には冷たい刃の様な鋭さが浮かんでいる。

彼らは自分達が何をするのか、何故其れを行うのかをきちんと理解していた。

（初めは何故そんな説明を下忍一人一人に行うのかが分からなかったけれど……）

末端の実行人員にまで目的を説明するのは非常に時間と手間の掛かる作業だ。

実際、咲夜が一族から仕事を命じられた時には、そんな説明はされた事が無い。

長老衆や、其の側近達から仕事を命じられれば其れをただ実行するのみだ。

何故などと理由を問い返す必要は無かったし、其の権利も無かった。

だが、今回は違っている。

亮真は咲夜や厳翁、リオネなどを介して末端の兵にまで其の目的と必要性を明確に説明した。

今までの状態でも別に忍び達は不満に思ってはいないだろう。

（でも、明らかに戦意が違う……）

気配の消し方も冷静さも普段と少しも変わらない。

其れでいながら、明確な目的意識は彼ら一人一人の心理を高揚させ、彼らを戦場へと駆り立てている。

（それも当然か……ようやく形になってきた自分達の街を、他人に干渉されるわけには行かない……例えそれがこの国の支配者であるルピス女王でも……）

咲夜の脳裏に、先日行われた会議の光景が過ぎった。

其の日、外から木槌の音か飛び込んでくる一室で、大きな円卓を囲み7人の男女が腰をかけている。

彼らの多くには、亮真の説明を聞き戸惑いの表情が浮かんでいた。

「そう言う訳で、みんなに集まって貰ったって訳さ……忙しいところ悪かったな。特に咲夜」

「あっ、いえ。そういう事情でしたら……それに見張り役を何人か置いてきていますし」

亮真の言葉に咲夜は首を横に振る。

海賊の殲滅を命じられた咲夜は、つい先日、彼らの偵察隊を逆に追跡する事によって場所を特定していた。

彼女は徹底的な偵察を行い、彼らの船数や人員、町の地形等を詳細に調べ上げ、後は亮真の命令を遂行するだけの手筈だったのだ。

彼女のもとに亮真からの帰還の命令が届いたのは、全ての準備が整おうとしていた丁度其の頃の事だ。

「それで……亮真様はどうなさるおつもりなのですか？　海賊達の恭順をお認めに？」

咲夜の問いかけに答えたのはリオネだった。

「そいつは……難しいんじゃないかい。あの子達は今のところは従順だけど、そんな事をしたら不満をもつどころじゃないはずだよ？」

「そいつは当然でしょう……海賊の略奪によって故郷の村を焼かれたうえに、親兄弟を殺され、自分は奴隷に売り飛ばされた訳ですから。幾ら、奴隷の身分から解放されたと言っても、其の恨みが消えるはずがありえやせん」

ボルツの言葉に、誰もが無言のまま頷いた。

全ての奴隷は亮真によって兵士の身分と引き換えに解放されてい

る。

しかし、奴隷になったと言う過去がそれで消え去るわけではない。いや、現在が満ち足りているからこそ、奴隷時代の悲惨な生活はより鮮明に彼らの脳裏に刻み込まれている筈だ。

「しかし、海賊の戦力を切り捨てるのは惜しい。殲滅を前提にしていたのは、連中がこちらに従うとは考えられなかったからだ。連中から恭順してきた今、あの戦力は使い道があるのでは？」

厳翁の問いに、誰もが押し黙った。

彼の言葉を否定する要素は無いのだ。

別に海上戦力としてだけの価値だけではない。

海域の支配権確保から始まり、交易そのものの実施など、利用価値は無数にある。

将来的な展望はともかくとして、現在のウォルテニア半島には農地も漁場も存在していない以上、財源として考えられるのは怪物（モンスター）から得られる材料を売るか、亜人を奴隷に売り払うかぐらいしかないのだから。

「それはそうだけど……それじゃぁ兵の不満を切り捨てるのかい？」

目先の利益だけを考えるのであれば、海賊達の恭順を受け入れる事は悪い事ではない。

だが、長期的な展望に立って考えた場合、恐らく兵と海賊達の間で軋轢が起こる。

直ぐには噴出さなくても、近い将来必ず……

圧倒的に不利な状況下で、亮真の持つ数少ない強みの一つが兵達一人一人の質と高い忠誠心。

法術の習得と最高級ではないがそれなりに質の高い武具。最近では読み書きや計算と言った教育まで行っている。

奴隷身分からの開放とこれらの待遇は、兵一人一人に強固な忠誠心を植え付けていた。
問題は海賊達の恭順を認める事で、其の忠誠心にひびが入るかもしれないと言う事。
兵の束ね役であるリオネやボルツにとって最重要な懸念点だ。

「俺はあいつ等の恭順を認めるつもりは無いよ」

低く冷たい声が部屋に響き渡る。

「よろしいので？」

厳翁は恐る恐る亮真の顔色を窺う。
別に厳翁は自分の意見に固執しているわけではなかった。
最終的な決定をするのは亮真の仕事であり、自分達は考慮点を挙げ彼の思考を補助する事だと、この場に居る誰もが理解していたから。

「あぁ、連中の思惑がどうであれ、受け入れるのは不可能だ。何しろ連中は凶悪な犯罪者だからな」

心情がどうのこうのと言う話以前の問題だ。
幾ら人の命が軽いこの大地（アース）世界とはいえ、法が無い訳ではない。
適切であるかどうかは別にして、全くの無法では国が成り立たない。
ウォルテニア半島は、形式上はローゼリア王国の領土。
当然、海賊達はローゼリア王国の法で裁かれる。
そして、海賊行為は死刑だ。
それも海賊個人のみならず、其の家族も含めて。
通常の殺人より刑が重いのだが、それは海賊が自分達の利益の為

に、日常的に他者を害すると言う事だからだ。
また、そういった見せしめを行わなくては、治安の維持が難しい上に、何より国民が納得しない。
慈悲や倫理観と言ったものは、時代や教育、生活環境に因って大きく左右される。
現代日本では明らかに野蛮な法と言われるだろうが、この世界では其れが当然であり、下手に慈悲をかければ、慈悲をかけた人間が責められる事になる。
海賊達が更正したかどうかなど、この大地（アース）世界の人間には無意味で無価値なのだ。
そして、其の血塗られた財貨で生活した其の家族も同罪でしかない。
勿論、亮真がルピスより得た自治権を盾に法を無視する事は可能だが、それでは周辺の貴族や其の領民との間に無用な軋轢を生む。
亮真が絶対的な強者であるならともかく、ローゼリア王国の新興貴族でしかない今の状況でそれは余りに大きなリスクである。

「俺がこの半島を領地として賜った以上、治安維持の責任は俺に有る。今の所は何処からも来ていないが、俺が連中の恭順を認めれば、過去に遡って責任を求められかねない」

長年放置された土地であり、統治が困難だと分かっているからこそ誰も何も言わないだけで、このまま放置すれば其の責任の全ては亮真に負わされることになる。
それはある意味当然の事。
誰も責任者が居なかったからこその放置であり、御子柴亮真と言う責任者が出来た以上、其の責任は亮真が負わなければならないのだ。

「まぁ色々と理由を述べたが、はっきり言って俺は連中が嫌いだ」

亮真はそう言って嗤った。
海賊達の境遇は理解している。
望んで海賊になった訳ではないのかもしれない。
彼らは被害者なのかもしれない。
同情の余地が無いとは言わない。
だが、彼らが被害者としての権利を主張できるのは、彼らを傷つけた加害者に対してのみだ。
決して、無関係な一般市民にそのツケを負わせて良いはずが無い。
心理的にも、実利的にも海賊達の恭順は受け入れられない事だった。

「だから、俺は連中に消えてもらう。異論があるか？」

冷たく鋭い視線が、円卓を囲む全ての人間に突き刺さる。
この瞬間、海賊達の運命は決したのだ。

「咲夜様、ご命令を」

咲夜は男に声を懸けられ、我に返った。
（ダメ……集中しなきゃ……）
将棋で言えば既に詰みの状態。
海賊達に逃れる術は無い。
だが、それは油断をして良いと言う事ではない。
咲夜は無言のまま頷くと、手を高々と振り上げる。

「散りなさい。時間は余りありません。半数はお爺様と合流し、目的の者をすばやく確保！　残りは私と共に火を付けます。次の合図があるまでは、決して亮真様達の退路を断たないように！」

引き絞られた弓から矢が放たれるが如く、咲夜の命に忍達は静かに駆け出した。
入念な打ち合わせを事前に行っているので、今更、咲夜に言われるまでも無い。
彼らは無言のまま、太い木にしっかりと結び付けられた綱を手に、崖から宙へと飛び出して行った。

ヘンリー達が作り出したこの名も無き町は、正に天然の要害と言える。
三方を切り立った高さ１０数ｍの崖に囲まれ、北側に広がるのは大海原。
崖には人がすれ違うのがやっとと言う道幅の階段が2本あるのみ。
元々は森の中を徘徊する怪物（モンスター）達への備えだろうが、其れがそのまま戦の際には防壁となる。
森側から正攻法で町を攻めるには、岩肌をくりぬいて作られた細い階段を下りる他に手段は無い。
ただし、其れはあくまで正攻法にこだわればの話だ。
怪物（モンスター）には無理でも、人間ならば幾らでも方法はある。
そう、綱に掴まりながら降りる方法などが……
現代社会で眼にするようなカラビナなどの器具は無いが、大地（アース）世界に生きる彼らにとっては無くて当たり前。
彼らはたった一本の命綱に全てを託し、崖を軽やかに滑り降りていく。

「ボルツさん、後はお願いしますね」

そう呟くと、咲夜は綱を手にして虚空へと其の身を投げ出した。

「若……お待たせいたしました」

アンドレを始末した亮真達の下に、厳翁が静かに姿を現した。
黒染めの服に黒の頭巾。
忍び装束に身を固めた其の男の顔を確かめる術は無かった。
だが、僅かに布の隙間からこぼれる鋭い眼光と低く押し殺した声は厳翁しかいない。

「見つかったか？」

亮真の問いに厳翁は静かに頷く。

「無論です……既に確保を終え、護衛を付けて船着場の方へ向かわせています」

厳翁の役割は捕らえられた亜人の確保。
彼らは昨夜のうちに、西側の岬から泳いで湾内へと回り込んだ。
忍びは総合職というが、確かに彼らは何でもそつなくこなす器用さを併せ持つ。
夜陰に紛れて、海側から泳いで進入する事も彼らには不可能な事ではない。
そして、亜人が捕らえられている牢を見つけた厳翁と其の配下は、亮真の合図を静かに待っていたのだ。

「流石だな。なら、さっさと船着場に向かって次の段階に移りますか。咲夜達も始めたようだしな」

窓の外ではあちらこちらから火の手が上がり、町は混乱の坩堝と化している。

「崖側の階段はボルツ殿が封鎖済み……船着場さえ押さえてしまえば、この町の連中に逃げ場はございません」

「あぁ、予定通りって事だな」

亮真の顔に冷たい笑みが浮かぶ。
亮真は決して人殺しが好きな訳ではなかった。
だが、必要ならそれを躊躇う事もない。
（罪深き町か……燃えちまえ！　良いも悪いも無い。全てを灰にするまで……）
弱者が弱者を踏みつける事で発展した町。
そうする事でしか生き残れなかった人々。
これ程、救いが無く歪んだ構図があるだろうか。
この町はあってはいけない町。
この町の住人は生きていてはいけない。
全ては亮真が前に進むための糧。
（俺は強くなる……絶対に！）
沸き上ってくるのは憎悪。
この不条理で、狂った大地（アース）世界への限りない怒りだった。

亮真は厳翁とマルフィスト姉妹を連れ、黒煙と悲鳴が渦巻く町へと歩き出す。
全てを終わらせる為に。

第３章第３２話【雌伏の時】其の１

西方大陸暦２８１３年６月１２日昼

城塞都市イピロスの下町。
その薄汚れた裏路地にある連れ込み宿に一人の男が入ってきた。
大柄な其の男は、無言のまま宿屋の受付に金貨を放り投げる。
フードを深く被りまるで人目を避けるかの様な男に、椅子に座りながら帳簿整理を行っていた宿の亭主は軽く目を吊り上げると、目で二階へ上がれと男に促す。
男が誰かと尋ねる必要は無い。
既に話は通っているのだ。

「２０４号室だ」

階段に脚をかけた男の背に、宿屋の主人は呟くように部屋の番号を告げる。
必要な事を告げると、宿屋の主人は再び視線を背けた。
こう言った商売に必要なのは見ざる言わざる聞かざると言う態度だ。
人目を避けるようにして訪れる客は多い。
連れ込み宿でありながら、男女の組み合わせではない客も居る。
だが、金さえ払ってくれるなら後は主人にとってどうでも良い事だった。
長生がしたいから、客の詮索などしない。
好奇心という魔物は猫どころか人間の命をたやすく吹き消してしまう。
放り投げられた金貨を懐から出した財布にしまい、主人は再び帳

簿に目を向ける。
彼が誰かに今日の事を尋ねられたらきっとこう答えるだろう。
「うちみたいな宿屋に客なんて来る訳がねぇだろう」と。

「お久しぶりでございます御子柴男爵閣下。この度は海賊の討伐を無事に終えられたとの事。おめでとうございます」

男が主人に指示された部屋へ脚を踏み入れると、椅子に腰掛けていたシモーヌが立ち上がり静かに頭を下げる。
大きく胸元を開けた赤のドレスに、くっきりと赤く紅が引かれた唇。
スカートには大きな切り込みが入れられ、其の隙間からほっそりとした白い足が亮真の目に飛び込んでくる。
今日の彼女は、まるで道端に立つ娼婦のように扇情的で退廃的な装いをしていた。
彼女の顔を見知った人間でも、今の彼女とクリストフ商会の会長代理を結びつけるのは困難だろう。
何処からどう見ても、今のシモーヌは本物の娼婦だった。

「あぁ、ひさしぶりだな、シモーヌ……相変わらず大した早耳だ」

つい先ほどザルツベルグ伯爵と婦人に報告したばかりの情報を既に得ているシモーヌに、亮真は苦笑しながら被っていたフードを外した。

「噂では既に一月ほど前から流れていましたから。何より、海賊の被害が激減したのが証拠ですわ。男爵閣下もイピロスにおいでになられましたし」

そう言うとシモーヌは穏やかな笑みを浮かべた。
ある日を境にして、海賊に襲われたと言う被害者の話を聞かなくなったのだ。
少し目端の利く商人なら何が起こったのかと情報を集めようとして当然だった。
まして、シモーヌは亮真にとって御用商人と密偵、両方の役割を期待されている。
以前からの集めていた情報と久しぶりにイピロスへ姿を現した御子柴亮真を結びつければ、結論は自ずと出た。

「しかし凄いところを指定してきたなシモーヌ」

苦笑する亮真の言葉に、シモーヌはまるで悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべる。
今の段階で、二人が直接顔を合わせる事は、ザルツベルグ伯爵に無用な警戒心を持たせてしまう。
そんな中、人目を忍ぶ場所としてシモーヌが指定してきたのはこの薄汚れた連れ込み宿。
最下級とはいえ男爵の爵位を持つ貴族と、落ち目とはいえ以前はイピロスの商会連合長を務めたクリストフ商会の商会長代理。
そんな二人が会談を行う場所とするには、あまりにみすぼらしく不釣合いな場所だった。

「男女の密会には丁度いいですから」

確かに人目を避けるには悪くない場所だ。
薄汚れた下町の裏路地。
胡散臭いというより、限りなく黒に近い地域だが、金さえ払えば大抵の無理が利く。
シモーヌや亮真に付けられたザルツベルグ伯爵の監視の目を眩ま

せるのにも都合が良い。
万が一、亮真が尾行されていたとしても、娼婦と客なら幾らでも言い訳は立つ。
女を買いに出たと言えば、顔を隠し人目を避けるようにしていた理由にもなる。
ちなみに、シモーヌの方は数日前から病で自宅で臥せっている事になっていた。

「それで？　そっちの準備は何処まで進んだ？」

内心、シモーヌの放つ妖しい魅力に度肝を抜かれながらも、亮真は用件を切り出した。
何時までも彼女の姿にばかり目を向けている訳にもいかない。
どうしても直接会って話をする必要があったからこそ、危険を冒して此処へやってきたのだから。

「私どもの方は既に船を二隻買い上げ、ミスポスに停泊させています」

シモーヌは椅子の下に置いた布袋から地図を取り出すと、テーブルの上に広げる。
ミスポスはエルネスグーラ王国東端の港町だ。
西方大陸最大の貿易都市であるフルザードには劣る物の、大陸屈指の貿易都市といって良い。
亮真がウォルテニア半島内に拠点を造る間、シモーヌはミスポスにて商船の準備を始めていた。

「二隻か……大きさは？」

「販売されている最大級のガレオン船。船員は全て熟練した者達の

みで、海戦の経験も豊富な者達です」

「なるほど、ずいぶん思い切った事をしたな」

「軍船への転用も視野に入れていますから」

亮真の問いにシモーヌはきっぱりと言い切った。

クリストフ商会の資金で購入したにもかかわらず、有事の際には軍船として亮真が使っても構わないと言い切ったのだ。

彼女の言葉に亮真は呆れたような笑いを浮かべる。

「大した勝負師だ」

亮真とシモーヌは既に一蓮托生な関係だが、だからと言って其処まで思い切れる人間は少ない。

決して安くはないはずの交易船を軍船として利用しても良いという発言は、シモーヌの覚悟の表れと言えた。

亮真の言葉にシモーヌは静かに微笑を浮かべると、探るような視線を亮真へ向ける。

「港の方はいかがですか？」

事前の取り決めで両者の役割は完全に分担されている。

シモーヌは船の調達と販路の確保。

亮真は、海賊達の排除と港の建設。

既に海賊の排除は終わっているが、肝心の港に関しての情報はまだ何も聞かされて居ない。

亮真の能力を疑うわけではないが、半島に向かってまだ数ヶ月しかたっていないのだ。

シモーヌが不安に感じるのも当然の事だった。

「問題ない。既に町並みも城壁も出来ている。後は人だけだな」

亮真の答えに、シモーヌはジッと黙ったまま亮真の顔を見つめる。

揺るがない瞳。

（本当に準備は出来ているみたいね……）

亮真の言葉に嘘がないことを見抜いたシモーヌは深いため息をついた。

目の前の男は出会ってからわずか数ヶ月の間に、あの魔境で自らの基盤を作り出したことになる。

（この人は……）

シモーヌの心に浮かんだ気持ちを言葉にするなら、其れは恐怖というより畏怖と言う方が正しいのかもしれない。

恐怖は排除に結びつくが、畏怖は服従に結びつく。

格別整った美男子とは言えない顔つき。

見かけは体格が良いだけのごく普通の青年だ。

だが、シモーヌは知っている。

海賊達は殲滅されたのだ。

断片的な情報しか手に入っていないので確かな事は分からないが、海賊とその家族は文字通りただの一人も生き残れはしなかった。

何処かの商人が真実を確かめる為に半島へ人を遣わし確かめた情報だ。

入り江に隠されるように造られたその町は、灼熱の炎に焼き尽くされ、焼け焦げた建物と死体が放置されているだけだったらしい。

焼け焦げ放置された死体を鳥が啄ばむのを見て、其の男は地獄だと思ったそうだ。

海賊達の末路は惨いとは思うが、同時に当然の報いだとも思っていた。

何でも厳格に法を守ればよいと言う訳ではない反面、無視すれば

良いと言う物でもない。
確かに無茶で非合理的な法もあるが、其の一方で社会を維持する為に不可欠な法も存在する。
もし、亮真が海賊達へ情けを掛けていたら、シモーヌは亮真と手を組む事を止めていたかもしれない。
確かに戦力としては申し分ないだろう。
だが、彼女の部下にも海賊達によって家族を奪われた人間は居る。
そう言った人間は決して海賊達を許しはしないだろう。
もし、海賊達を仲間にするなどという選択をしたのならば、何れ重大な問題を引き起こされる事が目に見えていた。
だが、亮真は殲滅を選んだ。
買い取った奴隷を解放するという甘い所が有るかと思えば、必要なら幾らでも非情な選択が出来る男。
リスクとメリットを氷の心で天秤に掛ける事が出来る男。
(私の判断は……正しかった)
そんな思いがシモーヌの心に湧き上がる。
ミストール商会に利権を奪われ藁(わら)に縋(すが)る思いで掴んだ其の手は、藁では無く頑強なロープだったようだ。
甘いだけでも非情なだけでも人の上にたつ事は出来ない。
両者を兼ね備えた男だけが頂に立てるのだ。
(覇王……)
其の言葉が心に浮かんだ時、彼女の背中に電撃が走る。

「どうかしたか?」

視線を亮真の目から動かさずジッと黙りこんだシモーヌに、亮真はうろたえながら言葉を掛ける。

「いえ、失礼いたしました」

「大丈夫か？」

「はい」

そう言って頭を下げるシモーヌに釈然としない物を感じながら、亮真は話を進めた。

「まぁ街のほうは既に出来ているからな、後は住民だけだ」

既に街並みは出来ており、何時でも住民を受け入れる準備は出来ている。

「分かりました。早急にミスポスより奴隷を運ばせます」

「あぁ、頼んだ条件で集めてくれたか？」

「勿論です。十歳から十五歳までの健康な男女千人。既に現地で確保済みです」

イピロスで購入するより、ザルーダやエルネスグーラで購入する方がザルツベルグ伯爵に悟られずに済む。

シモーヌが船をミスポスで購入したのと同じ理由だ。

「分かった。代金は怪物（モンスター）達の牙や皮で良いか？」

亮真の言葉にシモーヌは無言で頷く。

半島内で取得した怪物（モンスター）達の牙や皮はかなり良い値で取引される。

定期的に狩る事が出来るのならば、怪物（モンスター）達の牙や皮は重要な特産品となるのだ。

「処で……亜人に会ったという噂が流れていますが本当ですか？」

何気ない興味本位な問いかけだったが、シモーヌ其の言葉に亮真は顔色を変えた。

「何処で其の話を聞いた？」

鋭く射抜くような視線にシモーヌは思わず息を呑んだ。

敵を見る目でないというだけで、其の眼は冷たく鋭い光を放っている。

どれくらい時間がたったのだろうか。

フッと亮真の目が穏やかさを取り戻す。

「あぁ、悪い……だが、こいつはちょっとややこしい事になってるんだ」

気圧されたシモーヌに気がつき、亮真は笑みを浮かべながら謝罪した。

別にシモーヌを脅えさせようとした訳ではないのだが、事が事だけに思わず鋭い視線を向けてしまったのだ。

「一体どうされたと言うのです？　本当に亜人と会われたのですか？」

息を整えるかのように大きく深呼吸をしたシモーヌが、亮真へ理由を尋ねてくる。

シモーヌにとって亜人は絶滅した種族だ。

いや、ごく一部の人間を除き、西方大陸に暮らす大多数が彼女と同じ認識だろう。

大陸各地に未だ隠れ住むと言う噂は時折耳にするものの、所詮噂レベルの話に過ぎない。
彼女自身、本気で亮真が亜人と出会ったなどとは思っていなかった。
以前から噂されているウォルテニア半島に亜人が隠れ住むと言う話が、実際に半島を領有する事になった御子柴亮真と結びついただの根も葉も無い噂。
ちょっとした話題提供。
そう軽く考えていた訳だが、今の亮真の態度はとても噂で済むような話ではないようだ。

探るような視線を向けるシモーヌに、亮真はため息交じりに話はじめた。
それは決してうやむやには出来ない話。
亮真の話が進むにつれ静かに聴いていたシモーヌの顔が段々と暗く変化していく。
其れは、亜人が持つ人間への深い憎悪の物語だったから……

第3章最終話【雌伏の時】其の2（前書き）

少し短いですが、これで第三章は終了です。

第三章で書ききれていない幾つかの伏線は第四章以降で回収します。

※出版日が変更されました。

１１月１０日ごろとのことです。

申し訳ありませんが宜しくお願い致します。

第3章最終話【雌伏の時】其の2

西方大陸暦２８１３年６月１２日夜

扉を開けたとたん、ユリアは思わず顔をしかめた。
部屋の中に充満するのは生臭い雌の臭いと、ネットリと肌にまとわりつく甘い媚薬の香り。
中央大陸から輸入された麝香を精力剤として焚き込めたのだ。
この部屋で何が行われたかなど一目瞭然だった。
ザルツベルグ伯爵はかなり派手に楽しんだらしい。
悠然とソファーに寝そべりながらワインを飲む伯爵の髪は、其の行為の激しさを物語るかのように乱れ切っている。
部屋の隅で床に体を横たえたまま顔を伏せていたメイドを立たせ、乱れた服をなおしてやったユリアはそのまま彼女を部屋から出した。
これからする話は使用人に聞かせられないものだったから。

「アナタ……ずいぶんお楽しみだったようね？」

ユリアはため息混じりにそう言いながらソファーに腰を下ろすと、目の前に座る夫の表情を探るような目で見つめる。
自分の妻の冷めた視線を前にしても、伯爵の顔には一切悪びれる様子がなかった。
彼女もいまさら怒りなど感じない。ただ呆れるだけだ。

「フッ。これが楽しまずに居られるものか……ウム、美味い。お前もどうだ？」

ゆったりとソファーに体を沈めたまま、ザルツベルグ伯爵は手に

したワイングラスを一息に呷る。
グラスの底に残っているワインの色は赤。
エルネスグーラ王国で収穫された最高の葡萄を、適切な温度管理の下で長い年月熟成させた最高級のワインだ。
特に秘蔵していたこれをわざわざ開けるほど、伯爵は上機嫌だった。

「全く……正直に言って私はアナタの様に楽観視なんて出来ないわ」

伯爵の勧めを無言で断わると、苦虫を噛み潰したかのように顔をしかめながらつぶやくユリアの言葉に、伯爵は笑い声を上げた。
夫人が何を気にしているのか、伯爵には手に取るように分かっている。

「そうか？　私は正直に言って先行きが面白くなってきたと思っているんだがな」

伯爵の顔に浮かんだのは強者の余裕。
はるか高みから弱者を見下ろす傲慢さが浮かんでいる。
余程、御子柴亮真と行った昼間の会談がお気に召したらしい。

「あれは使える男だ……海賊共の討伐も無事に終えたようだしな。王都でふんぞり返っている馬鹿なルピス女王より、よほど使い道がある」

「其れは分かっているわ……でも、切れすぎる刃物には注意が必要よ？」

ユリアの言葉には、いつかその切れる刃が自分達に向けられるのではという恐れが含まれていた

「確かに其れは否定しない。だが、排除するのはいつもで出来る。なら利用出来るだけ利用するべきだ……だろう？」

欲望に濁った視線だ。

だが、その頭は冷徹な計算を弾き出していた。

海賊を排除することが出来たということは、御子柴亮真が治安を維持出来るだけの能力を持っているという証明に他ならない。

いまだに怪物（モンスター）が徘徊している魔境とはいえ、統治者に治安を維持するだけの能力が有ると証明されれば人は集まってくる。

つまり、ウォルテニア半島の開発が可能だということだ。

そして手つかずの大地は、多くの可能性を秘めている。

他人の領地であるとはいえ、隣接するイピロスにもかなりの恩恵が期待できた。

ザルツベルグ伯爵は、既に御子柴亮真を排除しようとは考えていなかった。

排除するより、利用する方が得だと理解したのだ。

半島の治安維持を行ってくれるだけで、伯爵は半島より流れ込んでくる怪物（モンスター）対策に使う軍備を削減することが出来た。

完全に無くしてしまう事は無理にせよ、かなりの負担軽減になる。

今後見込まれる半島の発展性と並んで、大きな利点だ。

これを考えれば、今の段階で御子柴亮真を排除し、わざわざこの流れを断ち切る理由はない。

ザルツベルグ伯爵の言葉にユリアは無言のまま頷いた。

伯爵の言う利点を覆すだけの理由を彼女は持っていないのだから……

ウォルテニア半島を拠点に、暴威を奮っていた海賊達が御子柴亮真に討伐され二ヶ月が過ぎようとしていた。
季節は夏に入り灼熱の太陽が照りかえる中、一〇〇人程の一団が森の木々を切り開きながら一路南を目指している。
彼らは三つの部隊に分かれて作業を行っていた。
一つは森の木々を切り倒し道を切り開き、地面を固める部隊。
一つは切り開かれた道を石で舗装する部隊。
最後は周囲の警戒を行う部隊だ。
彼らの行動は機敏(きびん)で迅速(じんそく)だった。
個々の役割を完全に理解したうえで作業を分担しているのだ。

「詠唱を始めな！」

「「「母なる大地よ　汝が堅き腕(かいな)で汝が子を禍より守りたまえ　石壁隆起(ストーンウォール)」」」

リオネの号令に従い十数人の兵士が詠唱を終え大地に掌を叩きつける。
大地系に属する下級の防御法術の一つだ。
通常なら敵の矢や法術を防ぐのに使われる術なのだが、彼らは自分の身を守る為にこの術を使ったわけではない。

「掘り起こせ！」

号令に従い、武法術によって身体強化をされた兵士達が、地面からせり上がってきた幅二メートル、高さ三メートルほどの石壁に手早く縄を掛け、ゆっくりと地面に引き倒していく。
地面に埋まっている土台の部分を掘り起こすとおよそ五メートルほどにもなる巨大な石の壁だ。

厚さ１０センチ近いそれらの石壁を、彼らは注意深く地面に横たえる。
三列に並べられた石の壁が綺麗に横たえられると、そこには巨大な道路が姿を表した。

「良し！　此処で一時間程休憩するよ。警戒部隊は交互に休憩しな！」

リオネの号令に部隊の空気が緩んだ。

「フゥ……これでやっと半分ってところかねぇ？」

この作業を始めて十日ほどが過ぎただろうか。
自分達が来た方向には、石畳で舗装された道路がまっすぐに続いている。
距離にして既に二～三〇キロは進んできただろうか、
石の形を整える手間も必要ない上に、幅と高さの規格も同じ。ただ並べるだけで良いのだ、
その上、下級の文法術であるため、習得難易度も低く生気（プラーナ）の消費も少ない。
資材の調達や輸送に掛かる手間や経費を考えれば、異常と言ってよいほどの効率だった。

「砦の方は順調ですかねぇ？」

背後から突然言葉をかけられリオネが振り向くと、マイクが髭をなでながら笑っていた。

「ボルツの奴が指揮を取っているんだ。問題ないだろうよ」

「そうでしょうね。幸い天気にも恵まれてますし……まぁ、少し良すぎる気がしますがねぇ」

そう言うとマイクは、腹立たしげに天空に浮かぶ太陽を睨み付けた。

晴れてくれなくては工期が延びてしまうのだが、この強い日差しの下で肉体労働をするのはツライ。

「後十日ちょいと言ったところですかねぇ？」

「そうだね。今ようやく半分てところだから、それくらいかねぇ」

マイクの問いに石壁で敷き詰められた道路へ視線を向けながらリオネが頷く。

距離にして五十キロ近い森を切り開き、石壁で舗装しようというこの工事が二十数日で終わる計算だ。

「それでも、一ヶ月掛からない計算ですからね……全く、若の頭はどうなっているのやら」

もし、通常どおりの手順でこの工事を行うとしたなら、人数だけで数千人。

石材の確保からに始まり、形を成形し運ぶ手間。

費用も時間もけた外れに掛かる。

実際、この世界で今リオネ達が行っている規模の道路工事を行うならば、年単位の時間と巨額の予算がなければ不可能なのだ。

それをわずか一か月足らずで終えるなど、亮真の発想は大地世界（アース）の常識を根底から覆したと言える。

「まぁ街の方もあらかた形は出来ているし、後はエルフ達だけね」

「上手くいくんですかね？」

マイクは疑わしげな視線をリオネに向けた。

「さぁね？　連中は半端じゃない程の人間嫌いだからねぇ……まぁ、坊やが何とかするんじゃないのかい？」

そう言うとリオネは視線を北の空に向け呟いた。

「何しろ、あの子は……」

リオネの唇から洩れた小さな呟きがマイクの耳に届くことはなかった。

これからしばらくの間、御子柴亮真はウォルテニア半島の開発に専念する事になる。

新たな戦雲が西よりもたらされるその日まで……

第４章主要登場人物紹介

名前：御子柴亮真（男爵）（みこしばりょうま）
性別：男性
年齢：１７
出身地：東京都杉並区
本作品の主人公。
１９０ｃｍに近い長身で体重は１００Ｋｇオーバーの巨漢。
コンプレックスは２０代半ば～３０歳などと呼ばれる老け顔。
オルトメア帝国の宮廷法術師であったガイエスの手によって大地（アース）世界へと召喚された高校生。
ウォルテニア半島を領有する貴族。
半島を根城にしていた海賊達を排除し、領地開発に着手している。
目的の為には手段を選ばない非情さと、弱者の痛みがわかる矛盾した人間性を併せ持つ。

名前：ローラ＆サーラ・マルフィスト（騎士）
性別：女性
年齢：十代半ば
帝国の追手から逃げていた亮真に、盗賊団に襲撃されていたところを助けられ忠誠を誓う事になった双子の姉妹。
自分達を奴隷の身分より開放した亮真に対して深い敬愛と忠誠を誓う。

名前：伊賀崎厳翁
性別：男性
年齢：６０代後半
５００年前に大地（アース）世界へと召喚されえれ忍びの一族の末裔。

亮真を暗殺しに来たのだが、其の器を知り孫娘の咲夜と共に仕えることになった。
一族の長老衆の一人であり、大きな権力を持つ。
初代から受け継がれる一族の悲願が達成できる日を、待ち望んでいる。
暗殺等の表に出せない裏の仕事を一手に引き受ける。
何時も仕込杖をを持ち歩く居合の達人。

名前：伊賀崎咲夜
性別：女性
年齢：１０代後半～２０代前半
忍びの一族の末裔。
亮真暗殺の命を受け陣に忍び込んだが失敗。
祖父であり一族の長老である厳翁の命で亮真に仕えることになった。

名前：リオネ（騎士）
性別：女性
年齢：３０代半ば
出身地：不明
紅髪金目の美女で姉御肌な女性。
亮真と同じくローゼリアの内乱に巻き込まれた元・傭兵団【紅獅子】の頭。
亮真が男爵位を受けた後、彼の騎士として登用される。
長年、荒くれ者の傭兵を指揮してきただけあって、統率力はかなりの物。

名前：ボルツ（騎士）
性別：男性
年齢：５０代半
出身地：不明
傭兵団【紅獅子】の補佐役。
戦で左腕を失った歴戦の勇士。
亮真の事を尊敬し「若」と呼ぶ。
長年の傭兵生活によって培った経験はかなりの物。
亮真の知恵袋的存在。

名前：ルピス・ローゼリアヌス（国王）
性別：女性
年齢：２０代前半
出身地：ローゼリア王国
銀髪金目の美女。
ローゼリア王国の新国王。
民に対しても寛大と評判だが、身内に甘く決断力に乏しい。
御子柴亮真の助力によって内乱を治め国王の座に着いたのだが亮真の立てた戦功に恐れをなし、彼との約束を破って未開の辺境ウォルテニア半島を押し付け封じ込めることを画策した。

名前：トーマス・ザルツベルグ（伯爵）
性別：男性
年齢：４０前
出身地：ローゼリア王国（城塞都市イピロス）
隣国ザルーダへの備えとして存在する、城塞都市イピロスの領主。
歴戦の勇士らしいが、内政にも其の手腕を発揮する逸材。
王国の内乱時には隣国からの侵攻を阻止すると言う名目で、貴族、

傍観、王女の三派とも距離を置いていたかなりの曲者。

名前：ユリア・ザルツベルグ
性別：女性
年齢：３０前半
出身地：ローゼリア王国
　ザルツベルグ伯爵の妻。
　表向きは浪費家で派手好きと言われ悪妻と噂されるが、実は夫を影から操る女傑。
　イピロスの経済にも大きな影響を与えているミストール商会の娘。

名前：シモーヌ・クリストフ
性別：女性
年齢：２０前半
出身地：ローゼリア王国（城塞都市イピロス）
　イピロスを拠点にするクリストフ商会の跡取り娘。
　商売敵の商人たちより妨害をうけ、今ではすっかり弱小商会になってしまったクリストフ商会を必死で守り続けている。
　御子柴亮真と出会い、現状を打破するために協力を約束する。
　今は、エルネスグーラ王国の交易都市ミスポスを拠点に商売をしながら大陸の情勢を収集している。

名前：ジョシュア・ベルハレス
性別：男性
年齢：２０代前半
出身地：ザルーダ王国
　ノティス平原の戦いで父親であったベルハレス将軍を失い、彼の意思を継ぐ。

酒と女にだらしがなく放蕩息子と評判だったが、軍事的な才能は父親も認めていた。

名前：須藤秋武（すどうあきたけ）
性別：男性
年齢：４０代前半
出身地：日本

御子柴亮真と同様に、帝国によって地球より召喚された日本人。
飄々とした態度で通すが、かなりの策略家。
ローゼリア王国の上層部に食い込み、帝国を有利にするべく暗躍している。

第４章第１話【忍びよる戦雲の影】其の１（前書き）

本日より第４章が開始されます。

今後も本作品を宜しくお願い致します。

第４章第１話【忍びよる戦雲の影】其の１

西方大陸暦２８１３年１０月６日昼

凪いだ大海原を、アタランタ号と名付けられた一隻のガレオン船が北東へ向かって疾走していた。
まるで順風を帆いっぱいに受けているかのような船足である。
いや、事実その船の帆は風を受け大きく膨らんでいた。

「報告！　北東にセイリオスの港が見えまさぁ」

水平線上にうっすらと陸地が見え始めた。

「分かったぁ。今ブラス船長を呼ぶ」

見張り番の船員が大声で叫ぶと、下にいた船員が艦内へ飛び込んだ。

「フム、確かにセイリオスの街だ。……オイ！　もうすぐ着くから停泊する準備を始めろ」

手にした望遠鏡で港街を確認すると、日に焼けた黒い肌の船長が船員達に命じる。
（風待ちをしなくて済む上に、常に追い風を受けるのに等しい訳か……速い訳だ）
ブラスは伸ばした望遠鏡を畳みながら一人心の中で呟いた。

ミスポスの港を出港したのが九月の末だから、およそ十日程でセイリオスの街まで着いた計算になる。
前回の航路とは異なり、沿岸部を航行するのではなく大海原をまっすぐ突っ切る航路を選択したのだが、それにしても早い。
（初めはどうなるかと思ったが、あの青年の提案を飲んで正解だったという訳だ……ど素人のくせに舐めた口をきくと思ったが、どうやらこっちの負けらしい）
ブラスの顔に苦笑いが浮かんだ。
長年海の男として生きてきたブラスに、あの若造は一定の敬意を示しながらも、航路を指定し航海日数の短縮を命じた。
通常なら半月以上は掛かって当然のところを、十日と言われた時には正気を疑ったが、確かに是なら納得する事が出来る。
ブラスは船尾にいる一団へ視線を向けた。
セイリオスからミスポスへ戻る航海では、初めての船旅と言うことで全員が船酔いとなり全く何の役に立たなかったのだが、今回は違った。
彼らは皆一様に若い。十五歳に手が届くかどうかといったところだろうか。
その上、彼らは船乗りではない。
黒く染められた革の鎧に身を包んだ彼らは、御子柴男爵家の兵士。
船に乗った経験すらないど素人達だが、今は熟練の船乗り以上に大切な存在だ。

「ブラス船長、風はどうですか。もう少し強めますか？」

ブラスの視線の気がついたのだろう。
一団から一人の少女がブラスに声を掛けた。

「いや、これ以上強めると帆が破れる可能性が有るかもしれない。それに、もうすぐセイリオスの港だ。今のままで十分。ありがとう

メリッサ殿」

ブラスは自分の娘と言ってよいほど年の離れたメリッサに丁寧な言葉を返す。

「分かりました。じゃぁこのままの風速を維持しますね」

明るい笑顔を浮かべて頭を下げたメリッサに、ブラスは穏やかな笑みを浮かべた。

まるで自分の娘を見るかの様に……

大地（アース）世界で使われる船は帆船かガレー船のどちらかである。

どちらにも異なる利点があるのだが、積載量の多さから貿易船や輸送船にはガレオン船が多く使われる。

そのガレオン船の最大の欠点が風頼みと言う事だ。

幾つもの帆で風を受け前に進む。

幸いな事に横帆（おうはん）や縦帆（じゅうはん）などとは別に様々な補助帆も開発されていたが、風が止んだ凪の状態になってしまえば、オールを持たない普通の帆船は波に揺られながら風が吹き出すのを待つしかない。

天候を制御する事など人間には不可能なのだから、船乗りに出来ることは神に祈る事だけだ。

そう、これまでは……

メリッサ達は何も難しい事をしている訳ではない。

突風を起こす術は文法術の中でも初級に属する。

通常は圧縮した風を一気に解き放つ、風属性の術の中では基本中の基本と言える攻撃方法。

これを一度に圧縮して放つのではなく、範囲を拡散させ少しずつ放つだけだ。

攻撃力は皆無だが、船に必要なのは適度な風。

帆を破いてしまうような強風では逆に使えない。

術者として未熟で有る彼女達だが、だからこそ意味があるのだ。
そして、未熟な自分達の術が目に見える形で意味を持つ事にメリッサ達の心は躍った。
術者の錬度を上げるにはもってこいの方法と言える。
自分達が必要とされているという自信が彼女達の表情に表れていた。

「良いか！　シモーヌお嬢様からも言われているが、此処で見た事を他で絶対にしゃべるな。分かったな？」

普段の穏やかな態度とは裏腹に、ブラスは厳しい口調で船員達へ命じた。
船長の言葉に船員たちは無言で頷き、錨をおろす準備を始める。
既にミスポスからセイリオスへの船旅は二回目。
くどい位に念押しされ船員達はいささか食傷気味ではあるものの、同時に何故口止めされているのかを嫌というほど理解している。
そして、この口止めを無視すればどうなるかも彼らは理解していた。
それだけ、セイリオスの街へ初めてやって来た前回の航海は彼らに驚きを与えていた。
きちんと区画整理された町並み。
道路はかなり余裕をもった道幅を保ち、全て石材で舗装されている。
城壁はかなり高く、街全体をぐるりと取り囲んでいた。
勿論それだけならば驚くには値しない。
同じ規模の街なら大陸の少し大きな貴族領に行けば見ることが出来るから。
しかし、それがウォルテニア半島に造られたとなれば誰もが驚くことになる。

それも、わずか数カ月で造られたと知らされれば尚更(なおさら)だ。

「船長……俺(おれ)の目がどうかしたんですかねぇ？」

次第に大きくなっていくセイリオスの街並みに、一人の船員が目をこすりながらブラスへ話しかける。

何がとは、ブラスは問い返さない。

彼自身もまた、自らの前に広がる光景が信じられなかった。

「安心しろ。お前の目が狂ったわけじゃない」

「じゃぁ。やっぱり」

絞り出すような声を出した船員に、ブラスは頷いた。

「あぁ。街がでかくなってやがる」

ブラス達が初めて一ヶ月前にセイリオスへやって来た時とは、明らかに街の規模が大きくなっている。

海岸線に造られた港の規模だけでも一・五倍は大きいように見えた。

（こんな話誰にも言えないな。鼻先で笑われるのがオチだ）

そんな思いがブラスの脳裏に過ぎる。

場所が場所だ。

何万何十万といった人間を湯水のように使い潰せば可能かもしれないが、ウォルテニア半島という場所が其の選択を不可能にする。

二ヶ月程前、シモーヌが所有するメラニオン号と名付けられたもう一隻のガレオン船と共に、ブラスは千人の奴隷をセイリオスの街へと運んだのだが、それを計算に入れても目の前の光景はありえない。

ましてや、運んだ奴隷は皆、体の出来あがっていない若い少年少女達。
奴隷商人達によって過酷な扱いを受けた彼らは、皆衰弱していて、とても労働に使えるような状態ではなかったはずだ。
船内ではそれなりにまともな食事を与えてはいたが、急に体力が回復する筈もない。
（お嬢様が他言無用を念押しするはずだ。とても人には言えない）
ブラスの視線が船尾にいるメリッサ達へ向けられる。
彼はおぼろげながら、目の前に広がるこのありえない光景のカラクリに気がついたのだ。

「何をボヤっとしている。さっさと錨をおろす準備でもしないか！」

湧き上がる好奇心に蓋をして、ブラスは呆然と行く手を見つめる船員たちを叱り飛ばした。
好奇心は猫をも殺すと知っていたから……
その街の名はセイリオス。
ギリシャ語で「焼き焦がすもの」「光り輝くもの」という意味と持つ街だ。

「亮真様。先程、ミスポスよりアタランタ号が到着しました」

「あぁ、分かった。積み荷に被害は？」

亮真の問いに、羊皮紙へ視線を落としながらサーラが報告を始める。

「ブラス船長の報告ですと、ミスポスへ行きの航海ではメリッサ以下全員が船酔いの為役に立たなかったとのことですが、戻りは十分

に役目を果たしたそうです」

「船酔い？　それで予定より遅くなった訳か。そこまでは計算してなかったな」

確かに、いきなり船に乗せて仕事をさせるのは無理だろう。

体質的に船酔いを起こしにくい人間は存在するが、今回ブラスの船に乗せた兵士達に其の体質の持ち主は居なかったようだ。

いや、戻りの航海で全員が船酔いを克服したという事の方が驚きと言える。

（まぁ、生まれて初めて船に乗ったんだ。動揺もするか……乗り物酔いは精神的な部分が大きいって言うからな）

亮真は軽く苦笑いをして報告をうながした。

「積み荷の方は問題ありません。幸い天候にも恵まれ、水を被ったり荷の破棄などは無いそうです」

嵐に遭遇すれば、荷崩れが起きたり、船倉に水が入り積み荷をだめにしてしまうことがあるのだが、今回は運にも恵まれたようだ。

「分かった。引き続き武器と保存の利く食料を中心に運ばせてくれ。代金の支払いはいつもの様に怪物（モンスター）から狩り取った牙や皮で大丈夫だな？」

「代金としては足りるようです。でも、シモーヌさんの手紙に因ると、取引先からの注文が多く在庫が足りないので、もう少し量を増やしてくれないかとの事でした」

「増量かぁ」

サーラの言葉に思わず亮真は考え込んだ。
ウォルテニア半島に生息する怪物（モンスター）は高位のものが多く、市場に流せばかなり良い値段がつく。
本来なら取得した全ての牙や革をシモーヌに任せたいところだが、今現在イピロスの商人に売っている分を減らすわけにもいかない。
減らせば、販売経路がイピロスの商人以外にも存在すると気が付かれる恐れがある。

「訓練の方はどうなっているんだ？」

「まだ訓練を初めて二ヶ月に満たないですから」

使える兵士が増えれば狩る量も増やせると考えたわけだが、有る程度まで訓練が終わっていなければ怪物（モンスター）に餌（えさ）を与える事にしかならない。

「なら、もうしばらくシモーヌには待って貰うしかないか……仕方ないな」

拡大する需要に供給が追い付かないのだから仕方がない。
（まぁ、調子に乗って売りまくっても値崩れしちまったら意味がないし、丁度いいか）
亮真は一人頷いた。

「それと……ちょっと気になる事が」

サーラの言葉に亮真は顔をしかめた。
こういう言い方をサーラがした時にはたいてい碌な事にはならない。
別に彼女が悪い訳ではないのだが、思わず身構えてしまうのも仕

方の無いことだった。

「亜人に関係する話か？」

「いえ、シモーヌさんの手紙に書かれていた事でちょっと……」

今、亮真の持つ最大の懸念は亜人達である。

先日、海賊達の手から救い出した三人の少女を部族長の一人に引き渡したのだが、そこに行きつくまでに、亮真は散々苦労させられた。

小説などでは助け出された事に感謝し急速に仲が良くなると言う展開が多いが、現実はそれほど甘くはなかった。

いや、彼らは感謝していないわけではない。

だが、その一方で、御子柴亮真という人間を信じきれないでいるのも事実なのだ。

人間達による長い迫害の歴史。

その歴史の重さが彼らの心を縛り付けていた。

彼らの本心は、人間とは関わり合いになりたくない。

その一言に集約されてしまう。

それを亮真はかなりの時間をかけて説得した。

亮真にとって亜人は決して放置することが出来ない。

最低でも不可侵、出来れば彼らの勢力を吸収したいのだ。

そうしなければ、僻地（へきち）であるウォルテニア半島を拠点にする意味がない。

制海権を維持してしまえば、ウォルテニア半島への侵入経路はイピロス側だけ。

南へ戦力を集中させることが出来る。

それが大陸の隅に位置する半島の最大の利点だ。

それなのに、半島内で自分に対して友好的ではない勢力が存在しては意味がない。

一定の戦力を保険として確保しておく必要があるからだ。
だから、亮真は部族長であるネルシオスへ一つの提案をした。
彼が提案したのは、ネルシオスや他の部族長達が半月毎にセイリオスの街を訪れ亮真と共に食事をするという事。
定期的に会い、共に食事をすることで人間に対する不信感を少しでも払しょくしようと言うのだ。
迂遠な策だが、それ以上の要求をすれば交渉自体が決裂してしまうほど、彼ら亜人の人間に対する不信と恐怖は強かった。
だからこそ、亮真は亜人に対して神経を使っているのだが、逆にいえばそれ以外で問題になるような事柄はないはずだった。
シモーヌの手紙に書かれた内容を聞くまでは……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1898i/

ウォルテニア戦記【改訂版】

2011年10月21日11時25分発行